



大南北全集

第九巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第九卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第九巻目次

挿繪目次

挿繪解說

■卷頭に挿入したコロタイプ版は「月出村廿六夜諷」初演の舞臺面で、序幕の道行場である。一番目の玉藻前が切れて直に引返すと、この場になるので、那須野ヶ原の見立てになつてゐるから、後ろに殺生石も見えるのである。初代豐國晩年の筆である。

■「松梅鶯曾我」は錦繪が見當らないので、初演の折の繪番附を凸版で入れて置いた。一番目の全部である。

■「杜若艶色紫」の中へ挿入した錦繪は、大詰、土手下の場で、願哲とお六が本雨を使つた立廻りのところである。五渡亭國貞の筆である。この狂言の繪番附は見當らなかつたので、代りに初演の櫓下番附をコロタイプで撮つて一頁にした。一番目の「時今攝握虎」は、馬盥の光秀の狂言である。

■「玉藻前御園公服」の繪番附は有つたが、あまりに穢れて見苦しいので、版にする事をやめ、代りに初演度の同じく櫓下番附をコロタイプで御覽に入れる事とした。

■同狂言の中へ入れた三種の錦繪のうち、第一に見られる初世豐國筆の二枚續きは、この狂言の繪ではない。文化四年六月、市村座所演「三國妖婦傳」の一部で、尾上松助の玉藻の前、澤村源之助の三浦之助である。筋は大體同じであり、畫面も似た點があるから、御參考までに挿入して置いたのである。第二の三枚續きは、五渡亭國貞筆で、本狂言の再演、天保四年五月、河原崎座の折の錦繪である。舞臺は和歌の浦の場で、初演とは筋も違ふが、これは、この時下つた市川鯉三郎の初お目見得を兼ね、だんまり場へ海老藏と共に出したのである。海老藏の役は脚本には無い。たゞこの場だけへ現はれるやう、附け足したのである。第三の二枚續きは、矢張り同じ時の、同じ場の幕切れで、この方は一勇齋國芳の筆になつてゐる。

■「月出村廿六夜諷」の中へ挿入した三枚續きの錦繪は、元治元年八月、市村座で、この狂言を再演した時に發兌されたもので、汐入堤非人小屋の場である。筆者は歌川國周。





解說及年表

松梅鶯曾我（みどりのはなはるつげそが）

文政五年二月六日初日で、木挽町の河原崎座に書きおろされた、初春の曾我狂言である。曾我の世界へ白井權八とお半長右衛門とを綴り込んである。本冊に收錄したのは、その一番目だけである。二番目の臺本は遺憾ながら、百方手を盡しても發見されなかつた。

一番目は殆んど權八が中心である。例に依つて「鈴ケ森」の穴をゆく一幕が設けられてゐる。「龍の口の場」がそれである。絹屋から六浦川の場は、ちよつと怪談めいて出來てゐる。あの後はどうなるのか、二番目が無いから不明であるが、評判記や番附で見ても、田糸やお半の役は、あの場ぎりで立消えになつてしまふらしい。お半を勤めてゐる市川門之助は、あの幕が濟むと市村座へ馳持ちをする順序であつたから、お半は出たくも出られない。田糸も、川へ落されたぎりで終つてしまつたやうである。

一體にこの狂言は、上演に際して非常に手を入れられたらしい。それは一に役者の都合からなのである。「曾我屋敷の場」の如きは、小生所藏の脚本は南北の直筆らしいが、原本の殆んど各頁に貼り紙がし

てあつて、その紙をめくつて見ると、下は南北が最初の腹案通りに書いたものらしく、貼り紙の上のと臺詞は勿論、筋も役名も役者も皆違つてゐる。貼り紙の上の方が、實演のものなので、その方を收めて置いたが、これでは月小夜が菊五郎であるのに、下の原作の方では門之助になつて居り、月小夜の父の赤澤十内といふ惡黨まで出て來て、一層複雜になつてゐる。門之助の體の都合で、いろ〳〵と改竄されたのであらう。

「曾我屋敷の場」は、曾我狂言には附き物の「鬼王の貧家」で、すべてあゝいつた幕が必ず一つはあつたものだ。曾我の臣、鬼王新左衞門が、主家の爲に散々な苦勞をして、結局は逆澤瀉の鎧を手に入れるまでの筋であるが、いろ〳〵と形式を變へ、目新らしさに直し〳〵ては、出してゐたものだ。曾我狂言の性根場である。その外、淨瑠璃と對面の二幕も、新らしい趣向にして型の如く加へてある。

平井權八といふ役を二人出して、一人を百姓の惡黨にしたのは面白い。しかも、この權八が中々よく書けてゐる。「絹屋の場」の盜賊の趣向も、當時としては破格の奇拔さだつたであらう。

だんまりに景淸を出したのは、この時久し振りで上方から歸つた松本幸四郎がお目見得の爲であつた。享和頃までは曾我狂言といふと、必ず景淸が出たものであつたが、どうしても脚色が大時代になるので、寫實が尊ばれ始めた文化頃からは自然に消えてしまつた。この時珍らしく景淸を出して、昔通りの扮裝

をさせたのである。猶、幸四郎が久々の歸京といふ事は、長兵衞の中にも、祐經の中にも、うるさい程に諷つてある。幸四郎の名聲が推し得られる。

この狂言の二番目は、一番目には、ちよつと顔を出したぎりの、因幡小僧才次郎を中心にして、權八と共に働らかしたので、長兵衞の外に、絹屋の彌市といふ重要な役も現はれ、一番目の腰元岩瀬も、遊女小紫となつて活躍するのだが、脚本が無いので、御紹介の出來ぬのは殘念である。

初演の役割は左の通りであつた。再演はされなかつた。

幡隨長兵衞。百姓、平井村の權八。工藤左衞門祐經。惡七兵衞景淸（四ヤク松本幸四郎）絹屋娘、お牛實ハ助太夫娘八重梅。大磯の虎（二ヤク市川門之助）本庄助太夫（中島三甫右衞門）大江因幡之助光基。八幡三郎行氏（二ヤク坂東簑助）伯父、幸左衞門（荻野伊三郎）伊豆次郎祐兼。小林の朝比奈（二ヤク尾上蟹十郎）箱根の閉坊實ハ保童丸。曾我の團三郎（二ヤク尾上多見藏）門番、畑右衞門（大谷門藏）井場重藏重勝（中山富三郎）舞鶴屋傳三。鬼王新左衞門（二ヤク關三十郎）妹、十六夜、中村芝友）下男、與五助（松本錦吾）助太夫妻、田糸。舞鶴實ハ姉二の宮（二ヤク中村大吉）秩父庄司重忠　平井權八、鬼王女房、月小夜。因幡小僧才次郎。曾我十郎祐成。曾我五郎時致（六ヤク尾上菊五郎）

杜若艶色紫

文化十二年五月十一日初日の、河原崎座へ上演された世話狂言で、佐野八ッ橋の書替へである。この以前、佐野の世界には、並木五瓶の「青樓詞合鏡」や、福森久助の「花菖蒲佐野八橋」なぞが行はれてゐたが、南北がこの狂言を書いて以來、佐野の世話物はこれに一定してしまつた。文化十年に書いた「於染久松色讀販」の中の、土手のお六といふ惡婆を再出して、八ッ橋と早替りをさせたのは、この狂言が半四郎の出し物だからである。當時は非常に早替りの狂言が流行したので、南北がこの時代の作には、前記の「色讀販」を初め、早替り芝居が澤山あるが、この狂言なぞは、早替りがあつても、そのケレンが中心でなく、どこまでもお六を主人公として、願哲をワキの敵役として、傳兵衛までが、割合に巧く描寫されてゐる。南北の世話物としては、短かい中に多くの役を動かしてゐるだけでも、特色のある作である。このお六は非常な當りを取つたので、後々までも行はれ、「土手のお六は蛇つかひ」と大津繪にまで唄はれた。文政十一年には、岩井粂三郎（六世半四郎）の署名で、實は一筆庵が代作の「杜若紫再咲」といふ草双紙が發行されてゐるが、これは「杜若艶色紫」の脚本をそのまゝ取つて、只ト書を、地の文章に直したものに過ぎないが、當時としては割合に珍らしい。この草双紙が非常に行はれたのを

見ても、「杜若艶色紫」が江戸人に歡迎された事がわかる。

初演の折は左の通りの役割であつた。

船橋次郎左衞門 實ハ 修行者、願哲（松本幸四郎）女輕業、玉本小さん（松本よね三）蔦屋佐次郎（松本金平）梁田伴藏（松本小次郎）男藝者、歌十（松本虎藏 見世物師、三右衞門（市川團七）同、牛七（市川桃太郎）同、太郎二（松本純五郎）同、萬八（澤村鐵之助）若黨、丹次（市川新藏）中間、權平（坂東善次）非人、づぶ六の三（坂東鶴十郎）金屋金五郎（市川三十）釣鐘彌左衞門（大谷門藏）萬壽屋太平次、お六母、お倉（ニヤク片岡松助）萬壽屋八つ橋。杜若姐え、土手のお六（ニヤク岩井半四郎）駕籠屋、お守り傳兵衞。佐野次郎左衞門（ニヤク市川團十郎）

二度目は、文政九年九月の市村座で、名題は元の通りであつた。

願哲（松本幸四郎）傳兵衞（嵐冠十郎）お倉（小佐川常世）伴藏（淺尾友藏）太平次（市川門三郎）八つ橋（山下龜三郎）彌左衞門（坂田半五郎）小さん（坂東玉三郎）次郎左衞門（坂東彦三郎）お六（岩井半四郎）金五郎（市村羽左衞門）

三度目は天保二年七月の河原崎座で、名題は「色操廓文月（こひのみさほさとのふみづき）」といつた。

次郎左衞門。傳兵衞（ニヤク澤村源之助）小さん（嵐龜之丞）金五郎（市川高麗藏）萬壽屋淸兵衞（松本幸四

郎）釣鐘屋源三郎（市川壽美藏）八つ橋。お六（ニヤク瀬川菊之丞）願哲（市川團十郎）

四度目は天保十一年六月の中村座で、名題は「達浴衣一對色揚」であつた。

萬壽屋藤吉。傳兵衛（ニヤク嵐吉三郎）願哲（市川海老藏）伴藏（市川染五郎）小さん（尾上菊代）彌左衞門（岡右衞門）お倉（嵐みんし）金五郎（澤村淸十郎）八つ橋（尾上菊次郎）次郎左衞門。お六（ニヤク澤村訥升）

五度目は、嘉永三年五月の河原崎座で、名題は「紫花色吉原」であつた。

次郎左衞門（市川海老藏）八つ橋（岩井粂三郎）小さん（市川團之助）金五郎（坂東竹三郎）伴藏（市川大次郎）傳兵衛（市川九藏）お倉（坂東佐十郎）彌左衞門（淺尾爲十郎）萬壽屋藤吉（尾上松綠）お六（尾上菊次郎）願哲（坂東彦三郎）

六度目の上演は、文久三年五月の守田座で、名題は「いろは攝女節用」といつたが、この時は散々な不入りであつた爲、ろくに演出しないうち中止してしまつた。それから後この狂言は上演されない。

願哲（坂東龜藏）傳兵衛（嵐雛助）藤吉（中村福助）彌左衞門（中山現十郎）金五郎（中村兒雀）お倉（岩井しげ松）小さん。八つ橋（ニヤク坂東三津五郎）お六（岩井粂三郎）次郎左衞門（中村芝翫）

玉藻前御園公服

月出村廿六夜諷

「玉藻前御園公服」は、文政四年七月、河原崎座へ書きおろした、夏狂言のケレン物で、南北が六十七歳の折の作である。この年、同座は三世尾上菊五郎の獨り舞臺で、春以來、南北は種々考案を立てゝ存分に菊五郎を働かして來たが、夏狂言は離れ業で當てようといふので、中乘り、本水の使用、早替り、等の便宜から、三國妖狐傳の傳説へ、「祇園女御九重錦」三十三間堂の院本の世界を混じ合せて作つたのがこの狂言である。怪談劇やケレン仕事では、家元ともいはれる菊五郎の、特殊な技能を活用した舞臺效果は著しく、非常な大入りを得て、玉藻前の役は尾上家の藝と折紙を附けられるまでになつた。この以前にも南北自身、玉藻前の狂言を書いてはゐるが、あまり芳ばしい評もなく終つてゐた。本脚本が出來て以來、玉藻前の狂言はこれと極つてしまつた。

「月出村廿六夜諷」はこの時の二番目狂言である。その發端を、一番目の中で見せておいて、大詰の中乘りが切れると、早ごしらへで二番目の道行になり、舞臺の秋葉神社を那須野ヶ原に見立て、殺生禁斷の高札が殺生石の當込みで、そこへ新兵衞と小女郎が、三浦之助上總之助と見せた三浦屋、上總屋の番傘

をさして後向きに立つてゐるといふ趣向は、南北が奇抜な思ひ附きとして、當時非常に賞讃されたものであつた。一番目二番目に、何等筋の連絡がある譯ではないが、斯うした見立て式の趣向をして、狂言に一種の因緣と興味を附けるのは南北が得意とするところで、今から見れば何でもないが、化政度の江戶の町人は、腸を抉る新案として、手を打つて嬉しがつたのである。

一番目の役割は左の通りであつた。

八郎妻、藻女（中村大吉）鷲塚金藤次。衞士、又五郎 實ハ 木幡彈正景澄（二ヤク嵐冠十郎）巫女、眞弓（尾上多見藏）輔仁君（市川瀧三郎）鹿島三郎義連（大谷門藏）岩淵の和田四郎。田熊法眼俊次（二ヤク淺尾友藏）安部泰親。進の藏人春俊（二ヤク市川門三郎）金剛太郎重虎（松本錦吾）妹、お露（尾上松助）平太郎妹、お柳（市川門之助）那須八郎宗重。鳥羽大臣（二ヤク關三十郎）横曾根平太郎。華陽夫人の靈。玉藻の前 實ハ 金毛九尾の狐（三ヤク尾上菊五郎）

天保四年五月の河原崎座では、初演と同じ名題で、再び上演した。その時の役割は

平太郎。玉藻前（二ヤク尾上菊五郎）お柳（尾上榮三郎）和田四郎。田熊法眼（二ヤク大谷友右衞門）泰親（成田屋宗兵衞）お露（尾上菊三郎）藏人。那須八郎（二ヤク市川鯉三郎）藻女（山下金作）鳥羽大臣。木幡彈正（二ヤク市川海老藏）

三度目は弘化元年九月の中村座で、名題も同じであつた。

藻屑の三平。玉藻の前（二ヤク尾上菊五郎）那須八郎。泰親（二ヤク市川九藏）田熊法眼（嵐猪三郎）お柳（岩井松之助）和田四郎（中山現十郎）又五郎（松本幸四郎）藻女（岩井杜若）藏人（中村鶴五郎）輔仁君（市川壽美之丞）お露（岩井粂三郎）金藤次（尾上松助）平太郎。鳥羽大臣（二ヤク市川團十郎）

文久三年十月の守田座では、「三國妖婦傳」として、この狂言を上演した。この狂言を出した芝居は、必ず當つてゐるが、この時も、春以來の不況を一時に取返した程の大入を得た。

又五郎（市川市藏）泰親。鳥羽大臣（二ヤク坂東龜藏）那須八郎（中村福助）お柳（尾上榮三郎）金藤次（中村桃三）藏人（關歌助）田熊法眼（中山現十郎）藻女（岩井粂三郎）和田四郎（中村翫太郎）平太郎。玉藻の前（二ヤク中村芝翫）

明治三十四年一月の歌舞伎座では、「增補玉藻前」といふ名題で、院本の「玉藻前曦袂」に添へて、この狂言の大詰、祈りの場を一幕、多少改訂して上演した。玉藻前は五代目尾上菊五郎、泰親は市川八百藏であつた。

二番目、玉屋新兵衞の、初演の役割は左の通りであつた。

遊女、三浦屋の上總野（後ニ）次郎兵衞女房おきさ（中村大吉）竹垣佐五右衞門（後ニ）駕籠屋杢右衞門。小女郎兄、茨の藤兵衞（ニヤク嵐冠十郎）猿廻し、山谷の三作（尾上多見藏）二階廻し、おかん（淺尾友藏）梅田村のお倉（市川門三郎）植木屋、寺島の松（尾上松助）玉屋庄兵衞（澤村春五郎）出村曾平次　若狹屋萬七（ニヤク大谷門藏）倉橋官藏（市川染五郎）藝者、姐妃の小女郎。お倉、娘お露（ニヤク市川門之助）東福寺所化、淨雲（後ニ）出村新兵衞。鵜飼九十郎（後ニ）非人次郎兵衞（ニヤク關三十郎）玉屋新兵衞（尾上菊五郎）

この狂言は暫く絶えてゐたが、元治元年八月の市村座で、初演の菊五郎には孫にあたる家橘（後の五世菊五郎）が增補上演した。この時の名題が「月出村廿六夜諷（つきもでむらろくやのひとふし）」といふので、默阿彌の命名であつた。初演の折は、一番目の名題だけで、二番目の名題は別に無かつたが、全然異つた狂言であるから、然るべき名題が必要と思ひ、この再演の名題をそのまゝ本集に利用したのである。この點はお含みを願ひたい。

この時の役割は左の通りであつた。

新兵衞（市村家橘）淨雲。猿廻し（ニヤク中村福助）官藏。芥太夫（ニヤク市川米十郎）小女郎（坂東三津五郎）お露（尾上榮三郎）藤兵衞。お倉（ニヤク關三十郎）萬七（中村東藏）植木屋（市村竹松）おきさ（尾上菊次郎）次郎兵衞（市川小團次）

渥美清太郎識

松梅鶯曽我（みどりのはなあづけそが）

松梅鶯曾我

三建目

相州箱根權現の場
矢立の杉の場

役名――惡七兵衞景清。秩父庄司重忠。勅使、道房卿。梶原平次景高。榛谷十郎。伊豆次郎祐兼。大江因幡之助光基。所化、大日坊。井場重藏重勝。閉坊丸實ハ保童丸。本庄助太夫。同奴、土手助。光基妹、花琴。腰元、岩瀨。同、小栗。同、六浦。箱根別當行實。平井權八。

本舞臺、三間の間、うしろ山幕、一面の杉林。上の方に紅白の梅の立ち樹、奉納の手水鉢、所々に石燈籠。正面に笹龍膽の紋附き白木綿の幕を張り、爰に梶原平次景高、半素袍の股立。榛谷十郎、同じく半素袍の股立。うしろに軍兵大勢、割り竹を持ち、扣へ、下の方に六、八、山裁附、狩人の形。眞中に因幡之助、大紋の下を高くゝり、小手、脚當にて、弓を持ち、二筋矢の立つたる猪を押へてゐる。その側に若黨一人、菖蒲革の形にて、神妙劍の入りし白木の箱を持ち扣へゐる。助太夫、老け

たる拵へ、ぶつさき羽織、袢纏、股引、狩倉の形にて、同じく弓を持ち、右の猪を押へてゐる。その下に土手助、奴の形、柿の脚袢にて、刀箱を持ちゐる。はるか下の方に大日坊、袈裟、衣にて、白木の刀箱を持ちゐる。山颪、勢子鼓にて幕明く。

因幡　大江の廣元が悴、因幡之助光基が、射留めしこの猪、なんで其方妨げいたす。

助太　イヤ、憚りながら、諸侯方の手にあまりしこの猪は、拙者めが射留めましたを、おてまへ何で支へ召さる。

因幡　ヤア、推參なるその一言。當五月下旬、富士の裾野に於て狩倉ゆゑ、拳かためのこの催ふし。元を糺せば其方は、身が父上の家來たる、陪臣者の身を以て、身が射留めたるこの猪を、汝が手柄と致すぢやまで。

景高　アイヤ、光基どの、以前はともあれ只今では、大江の家を浪人の助太夫。この梶原が推擧を以て範頼公の御直參、いはゞ其許とも相役同然。家來あしらひ、慮外でござらう。

榛谷　殊に若輩の因幡之助どのと、老功の本庄氏、つもりにも知れた射術の爭ひ、片腹痛い。

土手　成る程、何れも樣の仰せの通り、當時鎌倉にて、及ぶ者なきお旦那の武藝。なんぼ大名の若殿でも、どうして〳〵。手柄爭ひ、臍がよれるワ。

助太　云はずと知れたこの獲物。某こともその以前は、大江の家の家來なりしが、仔細あつて此方より、主に暇をくれて浪人。武藝兵法云ひ立てに、梶原樣の推擧にて、範頼公の御直參。また因幡之助どのゝ武術の師範は、家の家老平井兵左衞門。この兵左衞門儀はさいつ頃、闇討ちにあつて相果て、その敵さへ知れぬとある。名も無き者に闇討ちにあふ、うろたへ者の兵左衞門が、御門弟の光基どのと、武術を以てお取立ての、本庄助太夫。いづれも何と思し召す。三つ子が見てさへ、知れた事。そんなものぢやァござらぬか。

六　イカサマ、狩人のわしらでさへ、持てあました手負ひの猪。

八　若い小腕で何として、及ばぬ事でございます。

因幡　武術の廣言、いはれぬ本庄。いつぞや其方、予が屋敷に在りし時、兵左衞門と劍術の立合ひに、遲れを取りしを殘念と、暇を乞ひし助太夫。人は知らじと只今の廣言。論より證據は二筋の、矢を拔き取つて改め見よ。予が射かけしは猪の胸元、向うを射かけしその矢尖、汝は猪の弱りを見込み、しゝむらを射拔きしは、掛け的射るより猶慥か。まだそれにても爭はゞ、この場に於て立つ矢の吟味。

ト二筋の矢を拔かんとする。この時大日坊、前へ出て

大日　アイヤ、憚りながら、暫くお待ち下さりませう。
景高　貴僧は當山の一老
榛谷　大日御坊。
因幡　何ゆゑ暫しと止め召された。
大日　お止め申すも拙僧が役目。五月下旬の狩倉の、拳かためは私しのお稽古。何れが手柄になればとて、上へ通らぬこの場ぎり。殊に爰は神前と申し、不淨の穢れ二つには、今日勅使のお入りなれば、かゝる小事に係りては、お役目の妨げと、憚りながらこの獲物は、拙僧お預かり申しまする
景高　イカサマ、こりや大日坊の云はるゝ通り、生中爰で改め立てを致したなら、跡で指を咬へるやうな事が出來やうも知れぬ。こりやアこのまゝ、預けさつしやるがようござらう。
因幡　弓矢神も照覽あれ、予が射留めしに相違なけれど、申さばこれしきの事、人に手柄を讓りしとて、因幡之助が恥辱にもならぬ。まづそれよりは大切なるお勅使のお入り。賴朝公へ將軍宣下の綸旨下し置かるゝ。さるに依つて賴朝公より、大江の家に預け置かれし村雨の劍、まつた神妙劍の一卷差上げ、當山に於て祈念ある、今日の身が役目。
大日　その上賴朝公、この程御不例につき、義經公鞍馬山にて、僧正坊より賜はりし、多聞天の印子の

尊像、まつた逆澤瀉の鎧、二品とも曾我へお預けありしが、この度の御祈念、その二品を差上げよと、曾我どのへ上意ありしが今以て

景高　差上げられぬは知れた事、相も變らぬ曾我の貧乏。

助太　曾我の祐成放埒により、揚代の抵當に町人を賴み、右の二品、質入れせしと世の風聞。

榛谷　元は一家の曾我工藤、今は疎遠になつたれど、格式は元より、身上までが拔群の違ひ。

景高　この程赤澤山の椎の木を切つて、管絃の太鼓に造り、近々祐經の館に於て、賴家公を饗應との事格別な工藤の大身。それに引替へ曾我殿原、二品詮議の今にお祟り。

大日　そのお祟りが怖いやら、當山の稚兒箱王丸、いつの間にやら下山して、今は曾我の時致と名乘る不敵者。

土手　曾我樣の貧乏と、年禮の挨拶は、いつの春でも相變らずだ。

狩人　成る程、こいつは違ひねえ。ハヽヽヽヽヽ。

助太　イカサマ、取附き身上の助太夫でさへ、曾我から見れば大々盡。猶この上も梶原樣。

景高　近々のうち蒲どのへ、お目見得は身が請合ひ、身の廻りの支度萬端。幸ひ爰に納戸金百兩。身が役所にては、納戸役所で遣ふ金はこの通り、財布を拵へ、梶原が屋敷のしるし。

ト柿色の絹に白上りに矢筈の紋ちらしを染めたる財布へ、百兩入れたるを助太夫に渡す。

助太　何から何まで御厚志の段、忝う存じまする。

ト財布を取り、懐中へ入れる。

大日　愚僧はこれより、この村雨の劒を守護なし、祈念所へ飾り置くでござりませう。

榛谷　我れ〱も勅使の御前へ

因幡　拙者は跡より。いづれもお先へ

助太　然らば拙者は、いづれもと御一緒に

大日　愚僧が案内。

ト助太夫、因幡之助が前を、ツカ〱と通る。

因幡　とはいへ、慮外な

ト立ちかゝるを、大日坊隔て

大日　サヽ、斯うお出でなされませう。

ト大拍子になり、この人數皆々下座へ入る。六と八は下の方へ入る。因幡之助と若黨だけ殘る。矢張り大拍子にて、向うより花琴、振り袖襠裲、姫の形。六浦、小栗、帽子、奥女中にて附添ひ、岩瀬、

同じく帽子、振り袖、奥女中にて、天狗の面の附きし繪馬を各自持ち、跡より別當行實、緋の衣。保童丸、振り袖、刺貫、稚兒の拵へ、中啓を持ち出て、直に本舞臺へ來る。因幡之助、花琴を見て

因幡　其方は妹、また附き〴〵の女ども。いづれへ參る。

花琴　これは兄上様、私しは母様の御名代に、皆の者を連れて、權現様の矢立の杉へ、大願あつて、お詣り申しに參りました。

小栗　その大願も奥様のお情、御家老平井兵左衛門様の御子息、權八様と

六浦　これなる岩瀬どの、奥様のお仲立で云ひ號け、その願掛けのお代參。ほんに岩瀬どのは

二人　あやかり者でござりまする。

行實　アイヤ女中方、その平井氏の御子息權八様は、親兵左衛門様の菩提の爲、出家せんと、この行實へ度々の賴み。

岩瀬　左様でござりまする。その權八の出家をとめ、岩瀬と添はせてやると、奥様の有り難いお詞。權八様の御出家がやみまするやうにと、恐れ多い姫君様まで、矢立の杉へ願がけせいと、奥様の仰せゆゑ、今日の參詣。私しが親はお家の若黨、大鳥段助と申しまする者。また私しの妹は、都にて藝子の勤め致しまするると噂のみ、外に賴りも無い私し。親は筋目も正しければ、格別奥様の御

不便がりにて、有り難い今日の參詣。

因幡　イカサマ、權八は親兵左衞門が、闇討にあひしゆゑ、菩提の爲の出家とは尤もながら、また母人のお詞も重ければ、女どもゝ隨分氣を附け、今日は當山へ勅使のお入り、粗相なきやう參詣しやれ……行實には今日の心配、察し申す。連れられしその者は、見馴れぬ稚兒。いつの頃より當山に

行實　アイヤ、これは京家の武士。召仕の侍ひもござりますれど、この者は鎌倉長谷の觀音へ日毎の參詣、その者の賴みにて、當山の稚兒となり、學問出精にござりまする。

因幡　イカサマ、京家の武士とあれば、物やはらかに、ハテ氣高い

保童　エ。

ト思ひ入れ。

因幡　アイヤ、拙者はこれより勅使の御前へ

行實　行實、御案内申すでござりませう。

花琴　左樣なれば兄上樣、これにてお別れ申しませう。

岩瀨　姫君樣には先づ

皆々　入らせられませう。

ト大拍子になり、行實先に因幡之助、女形皆々下座へ入る、保童丸殘り、思ひ入れあつて

保童　天高しといへど脊をくゞめ、地厚しといへど荒く踏まず。いま源家一統の世となれば、昔に變る平家の有樣。我れは正しき敦盛の胤、保童丸。重藏が計らひにて、斯く姿を變へ、この山にあるも、御一門の菩提の爲。頼みに思ふは七兵衞景清、この世に在りと聞きしかど、これとても行くへ知れず。殊に某は生れついて眩暈の病ひ。一度は頼朝を恨みんとは思へども、斯く非力たる某なれば、所詮一門の仇報ぜんこと思ひも依らず。我が柔弱を直さん爲、井場の重藏は長谷寺へ十日の大願。我れに渡せし觀世音の御影。幸ひ今日は御一門の忌日なれば、心ばかりの御回向を、さうぢや、さうぢや。

ト上の方の手水鉢の門へ扉表具を飾り、後むきになつて回向する。この時誂への鳴り物になり、上の方の梅の立ち樹へ鶯來て啼く。これをキツカケに向うより伊豆次郎祐兼、鉢かづら、上下衣裳にて出る。跡より平井權八、振り袖、羽織袴、大小、梅の枝と水仙を持ち出る。舞臺下の方の幕をあげ、井場の重藏、淺黄頭巾、やつし順禮姿、仕込みの杖を持ち出る。三人一時に見得。鳴り物變る。

祐兼　「數ならぬ身を鶯と思へども、啼くをば人の忍ばざりけり」……まだ笹啼きの武骨者、梅を便

りに袖の香へ、縋つて伊豆の祐兼と、申すも恐れ大阪より、はる〴〵來ぬる今日の參籠。

權八　南枝北枝とつらなりし、梅の小枝と思し召し、とも〴〵御贔屓お取立て、願ふ我れさへ鶯の、經に導く法の庭。

重藏　手向けの千手妙智力、枯れたる木にも花咲く誓ひ。

祐兼　薰りゆかしき白梅の、源氏の御代を窺ふ曲者。

權八　隱し植ゑても顯はるゝ、色をも香をも知る人ぞ

重藏　ヤ。

ト思ひ入れ。

權八　知らぬ佛を賴むなる、父の菩提と

重藏　主人の大願。

祐兼　我が社參のその路次に、穢らはしき修行者。

ト重藏思ひ入れ。

下がりをらう。

重藏　へゝイ。

トこれにて又鳴り物になり、祐兼、權八、舞臺へ來る。保童丸、御影を懷中し、祐兼と行きちがひ、入れ替つて怖々下の方へ來る。祐兼、保童丸に目を附ける思ひ入れあつて

祐兼　コリヤ〳〵、待て。

ト保童丸こなしあつて

保童　御用でござりますか。

祐兼　最前から見るところ、當山には見馴れぬ稚兒、氣高き人相といひ、いま國々に平家の殘黨、鎌倉どのを覗ふよし。見るから知れた京育ち、平家方の公達の、討洩らされであらうがな。

保童　アイヤ、某は侍ひの胤なれど、仔細あつて出家の望み。それゆゑ當山の御弟子に相成り、即ち稚兒の閉坊丸。

祐兼　ハヽヽヽヽ、いま鎌倉の威勢強く、武家一統の天下となり、犬打つ童も侍ひの、眞似をしたがるこの時節、抹香臭い坊主になるとは、見下げ果てた大だわけめ。

權八　イヤ、憚りながら古來より、名ある勇士も佛門に、入りしためしは間々ある事。近くは高雄の文覺御坊、熊谷の蓮生なんど、弓矢を捨てゝ道德堅固に。また權八も父を討たれ、それゆゑ菩提に出家の願ひ。

重藏　ハテ、血氣盛りのお侍ひ、近頃卑怯なそのお心。親を討たれて出家するとは、どうした間違ひ。討たれた親御は未來にて、修羅道の苦しみ。その敵を討ちおほせ、未來の苦患を助ける方が、近道でござりませう。

ト保童丸へかけて思ひ入れ。

保童　でも某は出家して、草葉の蔭の

ト云はうとする。

重藏　アイヤ、あなたは一門の、その御菩提に出家をやめて

祐兼　出家をやめて何になる。イヤサ、出家を遂げいで、侍ひになる料簡か。コリヤヤイ、素性も知れぬ小童め、われが親の名は何といふ……その親の名は云はれまい。見りやア最前からこの丁稚はガタ／＼慄へてゐる樣子。ア丶、聞えた。わりやこの大小が怖いか。さうか。ハテサテ、臆病な生れ附き。丁度平家の一門と、同じ生れな臆病者。

ト保童丸が襟首を取つて引附ける。重藏、思ひ入れあつて

重藏　その臆病も、大願の千日參り。病氣直らば、まツこの通り。

ト權八が持つて來りし梅の枝にて、祐兼へ打つてゆく。權八は重藏を突廻し、梅の枝を取り、保童丸

を引廻して圍ふ。祐兼抜きかける。保童丸慄ふ。權八、梅の枝にてしやんと留め

權八　非常を糺すこの場にて、殊に社參の祐兼樣、お腰の穢れと存ずるゆゑ

祐兼　ヤ。

ト思ひ入れ。

權八　花に淸めて、この場は平に

祐兼　イカサマ、物申すさへ身の穢れ。云はゞこの世に、ある甲斐なきあの素丁稚。

ト保童丸口惜しき思ひ入れにて

保童　あまりといへば

重藏　モシ。

ト押へる。祐兼兩人を見て

祐兼　ムヽ、ハヽヽヽヽヽヽ。

ト笑ふ。唄になり、思ひ入れあつて靜々と下座へ入る。重藏、保童丸を介抱しながら下の方へ入る。

權八殘る。直に大拍子になり、奥より花琴、小栗、六浦、岩瀨出て來り

花琴　權八、爰にゐやるかいなう。

権八　これは姫君様、女中方、いづれへのお越しでござりまする。

小栗　奥様のお指圖で、お前とあれなる岩瀬様、女夫にすると仰しやつて

六浦　それは〳〵奥様のお心遣ひ。早う御返事をなさんせいなァ。

権八　これはしたり、女中方、そりや何を云はつしやる。この権八は、親兵左衞門が菩提の爲、出家いたす兼ねての願ひ。

トこれを聞いて岩瀬、花琴を拜む。花琴うなづき

花琴　なんぼ其やうに云やつても、母様のお指圖で、其方の出家のやむやうに、矢立の杉へ今日の代參これ程までに母様のお心ざし。主の詞を背きやるか。

権八　全く背きは仕らねど

岩瀬　仕らねどなら、なぜ女夫になつて下さんせぬ。

権八　ぢやと申して、それは餘り無理と申すもの。

岩瀬　アイ、無理はお主の高下でござんす。ナア、モシ、姫君様

花琴　オヽ、それ〳〵、ならぬと云やれば、母様へ申し上げ、きつと糺明。

岩瀬　それ御覽じませ、権八様。なんと主には勝たれまいがな。

權八　ぢやと申して

六浦　但し奥様のお詞を背かしやんすか。

權八　全く以て

小栗　そんなら返事をなさんすか。

權八　サア、それは

皆々　サア／＼／＼

岩瀬　どうでござんすぞいなア。

ト權八、頭をかき

權八　これは又、迷惑千萬な。

トこの前より大日坊、白鞘の刀を持ち出て、この樣子を見てゐて、この時右の刀を脇へ隠し、前へて

大日　コレ、權八どの、なんの迷惑な事があるものでござるか。これ程の据ゑ膳を喰はぬといふは、さりとは貴公、女の罰が當るぞや。出家せずと、女房を持たつしやい。愚僧も以前、丁度此やうな事がござつた。その時は澤山さうに、迷惑千萬などと申した事もござつた。たうとう女の云ふ事

をきかずに、出家いたしたが、女の罰で矢張り同宿、大僧正にもならぬ仕合せ。今更後悔、辭儀をせずとも女の云ふ事、聞かつしやい〳〵。

權八　これはしたり、貴僧までが同じやうに、權八甚だ困り切つて居る所ぢや。

大日　ハテ、公はなぜそんなに野暮だ。よく積つても御覽じ。それ釋尊だにも、まんざら木の股から生れた者でもないわサ。今日の首尾こそ佛祖の冥利、愚僧が執持つ結ぶの佛。また結緣は叶ひませぬ。なんであらうと愚僧に任せて

ト嫌がる權八の大小を取り、片脇へ置く。

權八　イヤ、どうあつても拙者、女犯は犯しませぬ。

大日　女犯でも茶盆でも、貴公のお主の執持ちではござらぬか。それ〳〵。

ト岩瀨に囁き、權八に寄添はせる。女形皆々、二人を無理に上の方の幕の内へ入れる。

花琴　岩瀨が願ひも叶うたれば、麓へ下りて供の用意。

皆々　まづお越し遊ばされませ〳〵。

ト大拍子になり、皆々花道に入る。大日坊殘り、思ひ入れあつて、隱せし白鞘を出し

大日　愚僧が預かりの、この村雨の劍。祐兼樣が懇望ゆゑ、あなたへ上げればズッシリ御褒美。また本

庄助太夫も、この刀を盗んでくれろと、愚僧へ頼み。併し助太夫は成り上がり、褒美も高が知れた事。祐兼樣へはほんの物を差上げ、助太夫へは似せ物を攫ませ、兩方から褒美の金。うまいうまい……うまいはよいが、こんな長い物を坊主が持つては居られぬ。古風な奴だが、ハテ、どこぞへ

トあたりを見る。權八の大小そこにあるを見附け、この刀の中身を、白鞘の中身と入れ替へる事あつて、

これでよし〳〵。

トこの時幕の内より岩瀨、權八の大小を尋ねる心にて出て來り

岩瀨　モシ、そりやアノ權八樣の、お腰の物ぢやござりませぬか。

大日　いかにも、權八どのゝこの大小。小柄は丸に井の字の紋ぢらし。

岩瀨　左樣なれば、此方へ遣はされて下さりませ。

ト取りにかゝる。大日坊うろたへ

大日　この大小、其許は、どこへ持つてござる。

岩瀨　權八樣が、取つて來いと仰しやつたゆゑ

大日　エヽ……とんだ事を云ふ。どうしてこれが遣られるものか。

岩瀬　そりや、なぜでござりまする。

大日　なぜといふ事があるものか。この大小は……それ〳〵、女が持つと穢れる。

岩瀬　何を仰しやりまするやら。どうぞ此方へ下さりませ。

大日　ハテ、下される位なら、疾に下さるが、下されんから下されん。

岩瀬　そりや又どういふ譯で

ト大日坊ゆきつまり

大日　オヽ、斯ういふ譯で

ト岩瀬にしなだれる。

岩瀬　エヽ、何をなされまする。

ト突きのける。

大日　何をなさるものか。坊主が女に抱きついて、外に仕様はあるまいが。云はずと知れた、ほの字にいれの字。

ト又しなだれる。

岩瀬　エヽ、アタしつこい。知らぬわいなア。

ト大日坊を突き廻し、また來るところを砂を投げつけ、權八の大小を持ち、幕の内へ入る。大日坊、目へ砂の入りし思ひ入れ。あちこちしてゐる。この時權八の大小の小柄、舞臺へ落ちてゐる事。下座より助太夫、土手助出て來る。大日坊、助太夫にかぢりつく。

助太　これは大日坊、何をさつしやる。

ト　これにて大日坊、目を明き見て

大日　これは助太夫樣、大事でござる〳〵。

助太　何を其やうにウロ〳〵と

大日　ウロ〳〵どころか、お前のお賴みの村雨の劍を

助太　ナニ村雨の劍を

トそこにある白鞘を見て

コレ、その劍は、爰にあるではござらぬか。

大日　なにサ、そりやアそではござらぬ。

助太　ヤ。

ト大日坊心づき

太日　イヤ〳〵、そでござる〳〵。それが正銘の村雨の劍でござる。

助太　それに又、何をうろたへて

大日　これがうろたへずにゐられるものか。正眞のアノ

ト云ひ兼ねる思ひ入れ。

サア、正眞の村雨はこれでござるが、今の女め

トいろ〳〵思ひ入れ。

助太　この白鞘が、いよ〳〵村雨でござるか。

大日　成る程、村雨々々。惡い所へ村雨が降つて參つて、今の大小

助太　ナニ、大小とは

大日　イヤアノ、大小は大變々々。

ト頻りにうろたへる。

土手　大變の大小柱暦。

大日　洒落どころではござらぬ。助太夫樣、村雨の劍は、お前にしつかり渡しましたぞ。

助太　慥かに受取り申した。

大日　ヤレ嬉しや。これから今の女……きつと渡しましたぞ。

ト逸散に岩瀨の跡を追うて入る。助太夫、土手助殘り、思ひ入れあつて

助太　兼ねてこの村雨の劍、範頼公御懇望と、梶原どのゝ內意。身が大江の家を追放されしも、兵左衞門が舌頭ゆゑ。その遺恨によつて、闇討ちにぶッ放したは、某といふ事、誰あつて知る者なく、また最前奧にて、古主因幡之助が持參せし、神妙劍の一卷、あたりを窺ひ、盜み取つてコレ爰に

ト懷中より出し

この品が、勅使下向の間に合はねば、大江家は斷絕。さすれば身共が恨みも晴れ、厄病神で敵とやら。これもよし……コリヤ土手助、其方に申しつける一儀あり。身が妾の田糸めは、今にては鎌倉雪の下の親ども、絹屋長右衞門方へ歸り、卽ち身が實の娘、八重梅もろとも町家の住居。身と緣が切れたゆゑ、娘八重梅はお半と名を改め、母の田糸もお絹と改名。伯父幸左衞門が後見にて、女世帶の絹問屋。最前梶原が、身分支度にと渡したこの金子、財布のまゝ、雪の下の絹屋へ持ち參り、娘お半が嫁入りの、入用に遣はすと、大儀ながら屆けてくりやれ。

ト土手助に渡す。土手助は件の白鞘の刀を、以前持ち來りし刀筒へ入れて助太夫に渡し

土手　委細畏つてござりまする。して、お二人の御兄弟、御子息方は、いづれにお出でなされまする。

助太　助七、助八兩人は、當時江戸にて浪人組。あの二人は本妻腹。八重梅は妾の腹に出生の娘、緣切りの爲に遣はすこの金、其方たしかに渡して參れ。

土手　然らば下郎は、これより直さま雪の下へ

助太　ちつとも早く

土手　心得ました。

ト土手助向うへ入る。山颪になり、下座より六、八、以前の狩人、天狗の面を持ち出て來り

六　助太夫樣、お賴みに任せ稚兒の閉坊、彼奴は正しく平家の殘黨。

八　殊に附添ふ千ヶ寺參りの修行者も、合點のゆかぬ平家の餘類。

助太　正しくそれに極まらば、早速に告げ知らせよ。

六　夜な〳〵矢立の杉の木へ、祈誓をかくる閉坊丸。

八　山神の姿となり、窺ひ寄つて彼奴が身許を

ト天狗の面を出して思ひ入れ。

助太　必ずぬかるな。

二人　心得ました。

ト兩人、面を持ち、下座へ入る。この時行實、奧より窺ひ出て聞いてゐる。助太夫思ひ入れあつて

助太　この上は神妙劍の一卷を餌になし、範頼公へ

ト これを聞き、行實窺ひ寄つて

行實　さてこそ本庄助太夫、神妙劍を奪ひし曲者。

ト云ふを、助太夫、行實を引附ける。この時筒音して、煙硝火立ち、行實苦しみ倒れる。助太夫思ひ入れ。夜神樂になり、下座より祐兼、種ヶ島の小筒を持ち、窺ひ出て

祐兼　大事を聞いたる賣僧一人、兼ねて用意の小筒を以て、たつた一打ち。

助太　出來ました……神妙劍も村雨も、拙者が首尾よく奪ひ取らせ、即ちこれに。

祐兼　その村雨の劍こそ、血をあやせば忽ちに、所々にて鷄鳴を告げるとある、奇代の名作。

助太　ナニサマ、噂に聞きし劍……して、別當のこの死骸は

祐兼　殺した科人、まだ外に

ト落ちてある權八の小柄を取り

丸に井の字のこの小柄。

助太　そりや某が遺恨ある、兵左衞門が伜の權八。
祐念　それなる小柄を證據となし、彼れが越度に
助太　すりや、あの童を
祐念　コレ

ト押へる。兩人思ひ入れ。大拍子にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の通し屋體、うしろ金襖、瓦燈口、東西柴垣、見越しに紅梅の立ち樹、すべて箱根山金剛院、書院の體よろしく、二重の眞中、二疊臺の上に褥を敷き、道房卿、冠り裝束の形にて、正笏してゐる。この上手に梶原景高、右の形にて、保童丸の閉坊を引附けてゐる。同じく下手に因幡之助、右の形にて、氣の毒なる思ひ入れにて扣へゐる。この上に榛谷十郎控へてゐる。管絃にて道具納まる。

景高　ヤイ、閉坊丸、この景高が心を附け、うぬが所置ッ振りを見るところ、正しく平家の討洩らされであらうかな。
榛谷　イカサマ、出頭第一の景時どのが御子息ほどあつて、天晴れの御眼力。斯く見出された上からは、

なまじ陳じるはその身の不爲。

景高　包ます隱さず、キリ〳〵吐かせ。

保童　たとへ如何やうに仰せあればとて、毛頭この身に左樣な覺えは

景高　ヤア、覺えないとは野太い素丁稚。幸ひこれに勅使のお出で。武家の政治の强勇を、爰にて一責め御覽に入れん。

因幡　アイヤ、そりや御無用になされい。詩歌管絃に事かはり、殺伐なる儀はお勅使へ、却つて御不興にござりませう。

景高　イヽヤ、そりやア料簡違ひといふものだ。歌だの、樂だのといふは、平日にしてお慰みには相成らぬ。事の變つた武家の作法を、御覽に入れるも又一興、平次が事にお構ひなさるな。ヤア〳〵家來ども、閉坊丸を呵責の道具、早くこれへ持つて參れ。

ト奥にて

大勢　ハアヽ。

ト この時下座にて

祐兼　アイヤ、景高どの暫く。水火の拷問は靈地へ恐れ。閉坊丸を詮議の一品、祐兼それにて、お目に

かけう。

ト管絃になり、下座より祐兼、以前の形にて出て來り、よき所に住ふ。景高見て

景高　ヤア、祐兼どの、何をお云やる。詮議の一品を見せうとお云やるが、何が一品でござる。平家の殘黨詮議なすに、靈地の恐れなんぞとは、手ぬるい〳〵。矢張り脊を斷割り、鉛の熱湯

祐兼　アイヤ、その拷問は、まだ〳〵手ぬるい。大切な詮議あるあの童、殊にかよはき閑坊丸、左樣な責苦におはせなば、もし落命も計られず。そこを存じて祐兼が、體もそこねず、人手もからず、白狀さする拙者が工夫、新參者の差出口は、御容赦あつて景高どの、それにて暫く御見物下され。

景高　然らば拙者はその詮議、これにて見物いたさうか。

ト扣へる。祐兼、道房卿に向ひ

祐兼　恐れながらお勅使へ、祐兼がお願ひ。

道房　麿に願ひとは

祐兼　何卒御所持の日月の御旗、暫く拜借願ひ上げます。

道房　ムウ、何事かと存ずれば、この御旗を貸せよとか……この御旗の儀は、大内の寶なりしを、一旦平家の手に渡りしゆゑ、この道房が勅使に立ち、當社權現へ奉納なすところ。大内の品であれば

相成らねど、最早當社の寶なれば、望みに任せ、其方へ

ト出してやる。

祐兼　すりや、お貸し下されんとや。早速の御承知、有り難うござりまする。

ト受取り、思ひ入れあつて下座へ向ひ

ヤア〳〵、本庄助太夫はいづれにおるやる。早々參れ。

ト下座にて

助太　ハアヽ。

ト管絃になり、下座より助太夫、以前の形にて出て來り

祐兼公、御用の筋は如何にござります。

祐兼　その用といふは、それなる閉坊丸。彼奴は正しく敦盛の公達、保童丸と疑ひかゝり、景高どのが詮議あれど、面に似合はぬ太い小童。老功の其方ゆゑ、右の詮議を申しつくる。

助太　すりや、これなる閉坊丸を

祐兼　その拷問の責め道具は、即ちこの御旗。ナ、合點か。

助太　ハッ、委細承知仕る。然らばその御旗を

ト受取り

ヤイ、素丁稚め、お歴々の御自身に、御詮議あるのに陳じるとは、形に似合はぬ太々しい奴。まことおのれが保童丸でないなれば、こりや見ろ、この旗は平家盛んのその砌り、二位の尼君、船の中まで持ち歩いた日月の旗。いよ／＼平家の餘類でなくば、いづれも方の見る前で、この旗を足下にかけろ。

保童　サア、その旗は

ト　つかへる。

祐兼　踏まねば、いよ／＼平家の餘類か。

保童　どうして左様な

助太　餘類でなくば、キリ／＼踏め。

保童　サ、それは

助祐　サア

三人　サア／＼／＼

祐兼　踏まねばいつそ、手を下ろして

ト立ちかゝる。此うち最前より下手の柴垣に權八、窺ひゐたりしが、この時前へ、ツカ〳〵と出て

權八　アイヤ、暫く〳〵。祐兼樣、お待ちなされて下さりませう。

祐兼　ヤ、わりやァ平井權八。なんで爰へ留めに出たのだ。

權八　ハツ、各〻方の御詮議を、若輩者の權八が、お留め申すも、恐れ入つてはござれども、いづれも樣の御料簡が、ちと相違のやうに存じまして

祐兼　なんだ。我れ〳〵が料簡ちがひだ。

權八　サア、その御料簡ちがひと申すは、その御旗、たとへこれなる閉坊丸が、まこと平家の餘類に致せ、假にも日月を印したるを、足下にかけよ、ヤレ踏めよとは、勅使へ對して恐れあり。

祐兼　ヤア。

ト驚く。

權八　鎌倉武士は武骨者、田夫野人の武士と、堂上方のお下げすみは、恥かしいではござりませぬか。

祐兼　サ、それは

權八　祐兼樣は格別なれど、助太夫樣、斯程の事に辨へなき、お年でもござらぬに、それを共々お執持ちは、近頃以て御不念千萬。マアその御旗は、お納めなされて、よろしからうかと存じまする。

トきつと云ふ。助太夫悄げかへり、ウヂ／＼してゐるゆゑ
御老體のお耳が遠いやら。お聞入れなくば、不躾ながら
ト助太夫が持つてゐるを取つて、因幡之助の前へ持ちゆき
憚りながらお取次を
ト出す。因幡之助受取り、道房の前へ、うや／＼しく差出す。道房取つて巻き納まる。このうち助
太夫、こなしあつて

助太　ハヽア、流石は平井兵左衛門が悴。只今の申し分、尤もの儀でござる。なんと、いづれも方、左
様は思し召しされぬか。

皆々　左様でござる。

助太　誠や三つ子に淺瀨のたとへ。若手の權八、イヤハヤ感心いたした。この助太夫なぞが、どうして
どうして。天晴れの侍ひでござる。さりながら權八、さほどの器量を持ちながら、なぜ親の敵は
討たぬのだ。

權八　ハツ、その無念さは朝夕に、忘るゝ隙はなけれども、何を申すも闇討ちにて、相手は誰との證據
もなく、とても武道の罪罰を、蒙むつたる權八ゆゑ、せめては無念の死をとげし、父の菩提のそ

のために、出家いたす存念にござりまする。

トほろりと思ひ入れ。

祐兼　ハヽヽヽヽ。頬桁の明いたまゝ、口は立派に云ひちらせど、取り所もなき大だわけ。天地開闢この方より、敵の方から探して來て、討つた話しは無い事だ。知れぬ敵を探し出し、それを討つのが誠の仇討ち。

景高　それに何ぞや、討ち手が知れぬから、坊主にならうなんぞとは、見下げ果てた大腰抜け。斯樣に一列いたし居るも、この身の穢れになりまする。

助太　併し武士だと思ひますゆゑ、共々に腹も立ちまする。あの權八は、人の皮着た畜生でござる。

祐兼　成る程、平井兵左衞門ともいはるゝ、一流に達した劍術のお師匠樣が、闇討ちにあふのみならずその敵が知れぬとは、ほんのこれが犬死と申すもの。イヤ、犬の悴なれば、可哀や、この權八も犬ださうだ。

榛谷　どうか見かけから、ブル〳〵慄へて、耳を垂れて居りまする。

祐兼　川端近所をウロついて、棒にでも合はぬ用心しろ。

助太　親も親なら子も子とは、この權八が事。親子揃つた犬侍ひ。

皆々　ムヽ、ハヽヽヽ。

ト笑ふ。此うち權八、ヂツとなつてゐたりしが

權八　いづれも樣が權八を、犬畜生とのお下げすみ。さら／＼いとひは致さねども、みまかりました親どもまで、犬侍ひとの御一言。あまりと云へば

トきつとなるを

助太　なんだその面は。犬と云はれたが口惜しいか。武士の家に生れ來て、その職を知らねば、知行盜人、犬自然。

景高　犬も犬、毛の無い犬の平井權八。

皆々　犬だ／＼、犬侍ひ。

ト權八、ヂリ／＼と無念のこなし。「ムウ」と立上がらうとするを

因幡　コリヤ、勅使の御前ぢやぞ。

トきつと云ふ。

權八　ハツ。

ト平伏して、氣を變へ

各々方の御深切に、犬侍ひよ畜生よと、足らぬ勝の某を、勵まし下さる御意見は、骨身に通つて有り難く、お禮の詞もござりませぬ。さりながら、斯程にお心添へ下されても、武門の道にうとき權八、心なき身は犬同然。いかにも仰せの通り、私しは犬に劣つた身の上と、悔むばかりでござりまする。

トほろりと思ひ入れ。

祐兼　成る程、そりやアいゝ料簡だ。それ程までに畜生の、心があるなら、コレ、權八、兄祐經の臺所へでも廻つて來い。犬坊丸が飼ひ置いて、鹽鰹の頭ぐらいは、くれてもやるワ。アヽ、不便な事だ。この祐兼が云ひ附けて、犬の性根を撓め直す、仕樣は本庄助太夫、ソレ、計らへ。

助太　ハツ。

ト權八の側へ來て

コリヤ、よく聞け權八。十目の見るところ、十指の指さすところ、犬に劣つたと思ふなら、その身を懺悔の罪亡ぼし、助太夫樣のお臑を受け、人交はりをして見ろ、權八。

ト云ひさま足にて蹴るを、權八、その足をキッと執へて

權八　犬同然の權八を、まだしも人と思し召し、土足にかけての御意見は、骨身に通つて有り難く、こ

のまゝお禮申さぬは、却つて不躾と存ずれば、心ばかりの御返禮には

ト足をかいて投げのける。助太夫起上がり「ムウ」と直に切つてかゝるを、權八、扇にてチョイ〳〵とあしらひ、助太夫の刀を膝の下に押へて

武士の家に生れ來て、その心がけなきは知行盜人と、人をさみするお手の內、天晴れ感心いたしました。

ト膝を放して突飛ばす。助太夫無念のこなしあつて

助太　その頰桁を

ト又切つて行くを、立廻つて權八、助太夫の利腕をしたゝかにくらはす。これにて助太夫、刀を取落し、あわてゝ直に取りにかゝるを、權八その刀を手早く取上げ、助太夫の鼻の先へヒラリと差つけ

權八　御老人のお腰がかゞみ、鞘走りましたか。助太夫樣、お怪我のないうち、お納めなされい。

ト刀を抛り出し、悠々と控へてゐる。助太夫面目なく、あたりを見廻し、ソッと刀を取つて納める。此うち保童丸、いろ〳〵心遣ひの思ひ入れあつて、この時權八の側へ寄つて

保童　まだ御若年の權八どの、閉坊丸が身に取つて、少しも覺えなき詮議を、かばうて下さるお心ざし。それが却つて御自分の、不肖となりしこの場の始末、何とお禮を申さうやら、お氣の毒にござり

まする。

道房　權八とやらんがこの場の災ひ。元の起りはこの旗ゆゑ、當社權現へ奉納に、持參なしたる品なれば、この場に置くは無益の至り、急ぎ別當行實に、相渡してよからう。

ト差出す。因幡之助受取り

因幡　ハツ、お勅使の御賢慮、恐れ入りましてござります。使ひは幸ひ稚兒閉坊。其方へ申しつくるも拙者の寸志。ナ、早く〳〵。

保童　ハツ、畏つてござります。

ト受取り、立上がるを

景高　イヽヤ、閉坊丸はやられぬ。詮議がある。

因幡　そりや何の詮議が

景高　童が身許の

因幡　アイヤ、たとへ平家の餘類に致せ、放しやつても高が小忰、彼れら一人召捕るに、源家の武威にて何の手間隙。

景高　でも、見す〳〵それと

因幡　殊に道房卿の上意でござる。
景高　ムウ、勝手にさつせえ。
道房　閉坊、早く。
保童　ハアヽ。
ト管絃になり、旗を持ち、權八へ思ひ入れあつて下座へ入る。
景高　ハテ、命冥加な閉坊丸めだなア。
ト ばたばたになり、下座より大日坊、以前の形にて、刀の箱と一卷の箱を持ち、走り出て來り
大日　いづれも樣、これにお出でござりまするか。大變でござるござる。
祐兼　ヤア、大日坊、大變とは何事だ。
大日　仰せを受けて神前に、注連結ひ廻しこの二品、おろそかならず飾り置き、祈念の時に箱の蓋、開いて見ればこはいかに、村雨の劍といひ、神妙劍の一卷まで、箱は明きがら。紛失いたしましてござります。
皆々　ヤアヤア。
因幡　ヤヽ、すりや村雨の劍といひ

権八　神妙劔の一巻まで、紛失とや。
兩人　ホヽホイ。
大日　まだその上に何者か、別當行實を殺害なし、立退きました。
榛谷　ナニ、別當まで殺したとな。
大日　即ち死骸のその側に、落ち散りあつたはこの小柄。もしや敵の手がゝりにも相成らんと、持參いたしてござりまする。イザ、御檢分下さりませう。
ト差出す。助太夫取つて
助太　こりやこれ、丸に非の字の紋ぢらし。さすればこの持ち主が盜賊、人殺し。ハテナア。
ト權八キツと尻目にかけて云ふ。權八これを聞き、さてはといふ思ひ入れあつて扣へゐる。
景高　只今大日坊が訴への趣き、逐一に承知いたしたるところ、その盜賊、人殺しは、大概わかり申した。
助太　流石は梶原どのゝ御子息。して、その盜賊は何者でござるな。
景高　外でもござらぬ。これにおゐやる因幡之助光基どの。
皆々　イヤア。

ト呆るゝこなし。因幡之助せきこんで

因幡　ヤア、過言なり景高。何ゆゑあつて因幡之助が、その二品の盜賊ぢや。殊に右の寶は、某が家に傳はるその品を、おのれと盜むいはれがあらうか。物に狂うての舌頭なら格別、本性でお云やつたら、その座は立たせぬ、平次景高。

景高　ヤア、默らつしやい。その自分の寶といふが盜賊の證據。

因幡　ド、ド、どうしたと。

景高　これサ、急かずとよく聞かつしやい。大江家の重寶、村雨の劍、竝びに神妙劍の一卷を、賴朝公の嚴命に依つて、爰に御座ある道房公へ、今日差上げは上げたれど、おのれの寶を禁庭の、寶にするが口惜しく、それで自身の寶、を自身で盜んだに違ひはない。なんと祐兼どの、左樣ではござらぬか。

祐兼　成る程、こりやアいゝ所へお氣が附かれた。併し流石はお年若、因幡之助どの、その手段があざといく〵。これサ、光基どの、よく物を辨まへて見さつしやればよい。右二品の寶を、首尾よく盜み返したところが、お勅使への申し譯、何としようと思はつしやる。これサ、その云ひ譯が立ゝない時は、鎌倉どのゝ越度になるわサ。さすれば大江の家斷絕だ。寶があつても永々の浪

人では、何の役にも立たぬ詮索。爰の所へ氣も附かず、別當行實まで手にかけるとは、御料簡が
お若い〳〵。

因幡　ヤア、身に覺えなき盜賊呼はり。事をたくみに無實の難題。

祐兼　無實の難とお云やるが、又おてまへでないといふ、何ぞ慥かな證據がござるか。

因幡　サ、その證據は

景高　無ければ推量の通り、盜賊、人殺し。

因幡　サ、それは

皆々　サア〳〵〳〵

祐兼　なんと動きはとれまいがな。

ト因幡之助無念のこなしあつて

因幡　チエヽ、斯る無實の災難も、家の滅亡なすべき時節か。申し譯にはこの場に於て

トつか〳〵と平舞臺へ下り

權八、介錯しやれ。

ト腹切らうとする。權八あわてゝとめ

權八　こりや御短慮な。何ゆゑに

因幡　二品紛失の申し譯に

權八　アイヤ、その申し譯はござります。まづく

ト因幡之助をなだめる。

敵役　ナニ、云ひ譯があるとは

權八　いかにも。

祐兼　して、その譯は、ドヾ、どうだ。

ト誂への合ひ方になる。

權八　お歷々の御批判ではござれども、因幡之助は今日た、お勅使樣の饗應にて、終日この場を少しも去らず。一體分身の光基ならば知らぬ事、左樣な隙がござらうや。殊更人殺し盜賊は、只今の事なりや、時刻が違ひまする。これにて萬事、御賢察下さりませう。

祐兼　ヤア、云ふな權八。たとへ刻限に相違あればとて、それが證據になるものか。その身に覺えあればこそ、申し譯なく、切腹しようとしたではないか。それにおのれが留め立てして、申し開きするからは、さちやア二品の盜賊も、別當を殺したも、其方知つて云ひ譯に出たのか。

権八　いかにも、その盗賊、人殺し、存じて居ります。
皆々　して、その盗賊は
権八　外でもござらぬ、平井権八でござります。
皆々　イヤア。
ト悔りする。
因幡　イヤ〳〵権八、そりや偽り。この光基をかばうて云ふのぢや。どうして其方が、盗賊人殺しであらう筈がない。
権八　イヤ、この儀はあなたの御存じない事。この権八が仕業と申すその證據は、行實どのゝ死骸の側に、落ち散りあつた。コレ
ト小柄を取上げ
この通り、定紋附いたる拙者が小柄。かゝる證據のある上は、いかにあなたがお庇ひ下されても申し開きはござりませぬ。暫しが內も御主人へ、惡名附けたは臣が科、御免なされて下さりませサ、祐兼樣、御政法の通り遊ばされませう。
祐兼　ムウ。いゝワ。かゝる證據のある上は、科はおのれにもしてやらうが、その盗んだ品は、どこへ

こかした。サ、これへ出せ。

権八　サア、その二品は権八が、遊女狂ひの金に詰まり、賣り拂ひましてござります。

助太　ヤア、賣り拂うたとばかりでは事は濟まぬ。いづくの何者に賣り渡した。

権八　向うの買ひ手は何者やら、金が欲しさに取急ぎ、名所とても承らず、遣はしましてござります。

大日　ヤア、そんならお師匠樣を殺したは、いよ〳〵あの権八どのか。顏に似合はぬお若衆だなア。

景高　これも大方誰ぞとか、ぐるの仕事でござらうよ。

ト因幡之助へ當てつけて云ふ。

助太　町所も聞かず賣つたとは、何とも以て怪しい云ひ譯。

祐兼　おのれは賣つたで濟むにもせよ、鎌倉どのゝ越度になるワ。お勅使への申し譯は、この祐兼が白狀させて

ト立上がる。

道房　イヤ待て祐兼。その詮議を見物に、道房勅使には相立たぬ。寶の在所知るゝまで、この所に逗留もならぬ。上京なして、この由を奏聞とげん。

権八　この儀奏聞ある時は、大江の家は長らく滅亡。ハアヽ。

道房　その儀は麿が寸志にて、詮議の日延べ致してくるゝ。その代りには、源氏八領のうち、逆澤瀉の鎧と、義經が所持ありし、多聞天の印子の尊像、この二品を、村雨の劍、神妙劍の出づるまで、申し譯に持參せん。

祐兼　その品々は曾我家の預かり。疾にも勅使へ御覽に入れべきに、差上げぬは、これにも何ぞ樣子がござらう。

助太　相も變らぬ曾我殿原、今年は一月多いだけ、その食ひつなぎのやりくりに、致したものでござらうかい。

景高　それなりけりで打捨てゝは、勅使へ對して恐れあり。この場へ呼びよせ、彼奴等を詮議。

道房　アイヤ、さのみ荒氣なくしたまふな。今日只今見せぬというて、その科を曾我へ負はするは、仁なき道理。まだ兩三日は麿が逗留。其うち鎧と尊像を、旅宿へ持參いたしなば、事相濟むではないか。

大日　曾我殿原は相濟まうが、この大日坊は現在の、師匠を殺され、口惜しうござりまする。この儀はどうして濟みますな。

助太　敵といふは權八なれば、お坊が無念も晴らしてやるワ。

景高　また二品の紛失も、つゞまるところは右幕下の御難儀。申し譯には彼れが首を刎ね、道房卿へ差上げて

祐兼　その身の明りを龍の口、由井ヶ濱にて刑罪は、敷皮ならぬ荒筵、切り繩かけて首にする。覺悟を平井權八郎。その太刀取りは助太夫。

助太　心得ました。イザ、繩ぶつて

大日　アヽ申し、助太夫樣、師匠の敵の權八を、討つ事ならぬが坊主の悲しさ。せめて愚僧に繩なりとかけさせて下さらば、少しは無念も晴れまする。

助太　イカサマ、師匠を思ふ不便の願ひ。ソリヤ

ト捕り繩を抛る。

大日　エヽ、忝い。ドリヤ、繩かけて

ト立ちかゝる。この以前より岩瀨、下手の柴垣の蔭より窺ひゐたりしが、この時走り出て來り

岩瀨　アヽモシ、待つて下さんせ。坊さん、エヽ、お前はなア。あらう事かあるまい事か、人に繩をかけるといふ、出家がどこにあるものかいなア。

大日　馬鹿を云つたものだ。出家、侍ひ、義は一つ。現在師匠の敵だから、頭役だけ繩ばかり

岩瀬　師匠の敵と潔白に、云はしやんす御出家が、なんで先刻はわたしを捕へて
大日　アヽコレ、それを云つては、悪いぞ〳〵。
岩瀬　サア、云ふなら云やせぬが、エヽ、見ても穢らはしいこの縄、此方へ寄越さんせ。
ト大日坊の持つてゐる縄を取つて抛り、権八に縋り
コレ、権八さん、どういふ事で此やうに。云ひ譯はない事かいなア。
権八　岩瀬、忝いが、云ひ譯ならぬはこの品で
ト小柄を取つて見せる。
岩瀬　ヤヽ、こりやこれ先刻に、わたしが渡した
ト云ふを
権八　アコレ、落し置いたる小柄を證據に、お主に代つて……イヤサ、お主に難儀をかけべきところ、小柄が落ち散りあつたゆゑ、我れと我が手に名乗つて出たは、まだも天道権八を、見捨て給はず忠義をば、少しは立てさせ給はると、思うて死ぬる、今際に其方へ、コレ
ト右の小柄にて、振りの袖下を切つて岩瀬の前へ差出し
これを形見と思はれて、死したる跡にて一遍の、回向を頼む、岩瀬どの。

岩瀬　イエ〳〵、その回向、わしや否ぢや〳〵。お前に先立ち

ト權八が刀へ手をかけるを、權八とめて

權八　ハテ、聞き譯ない岩瀬どの、その心ざしは嬉しけれど、よう合點して下されや。親は非業の死をとげて、子は又罪科に行はるゝ。これも宿世の因緣事。こなたが死んで何者が、とひ弔ひをしまするぞ。どうぞ跡に長らへて、權八親子が追善供養。

岩瀬　そのお詞で、死ぬにも死なれぬ、因果な身の上ぢやわいなア。

ト泣き落す。

景高　ヤア、勅使の御前とも憚らず、女を捕へ、べら〳〵と……ヤア〳〵、者ども、囚人駕籠を早く持て。

捕手　ハア。

ト上手より網乘り物に、黑の捕り手四人附き、出て來り、扣へる。

助太　大法なれば大小を

ト取上げるを

因幡　イヤ、待つた、助太夫、その大小は

ト取返して

道房卿へ因幡之助がお願ひ。只今死罪の權八が、せめては武道の立ちますやう、我が刀で切腹を致させたうもござりますれば、矢張り大小はこのまゝに、お許しなされて下さりませ。

道房　武士の身には、さほどの望みはあるべき事。其方隨意に計らうてよからう。

因幡　ハッ……あれ承つたか、權八。その身にとつては有り難いお詞。この大小を乘り物へ、添へてやるのも野邊送り。ソリヤ、者ども。

ト出す。捕り手受取り、直に茲にてグル〳〵卷きにする。

權八　重々あつき御惠み、エヽ、有り難う存じます。

大日　慥かにそれは摺り替へた大小

ト捕り手の持つてゐる大小を取らうとする。

捕手　何がどうした。

トこれにて大日坊、ウヂ〳〵して

大日　イヤサ、大事にお持ちなされと申す事サ。

因幡　權八、捕つた。

ト そこにある繩にて縛る。

岩瀬　エヽ、淺ましいそのお姿。

ト寄らうとするを

大日　ドッコイ、さうは納所の役。こなたはおれが預かりの

ト引据ゑる。

祐兼　勅使のお目ざはり。早くぶち込め。

捕手　ハッ。

ト權八を引立て、乘り物へ乘せる。

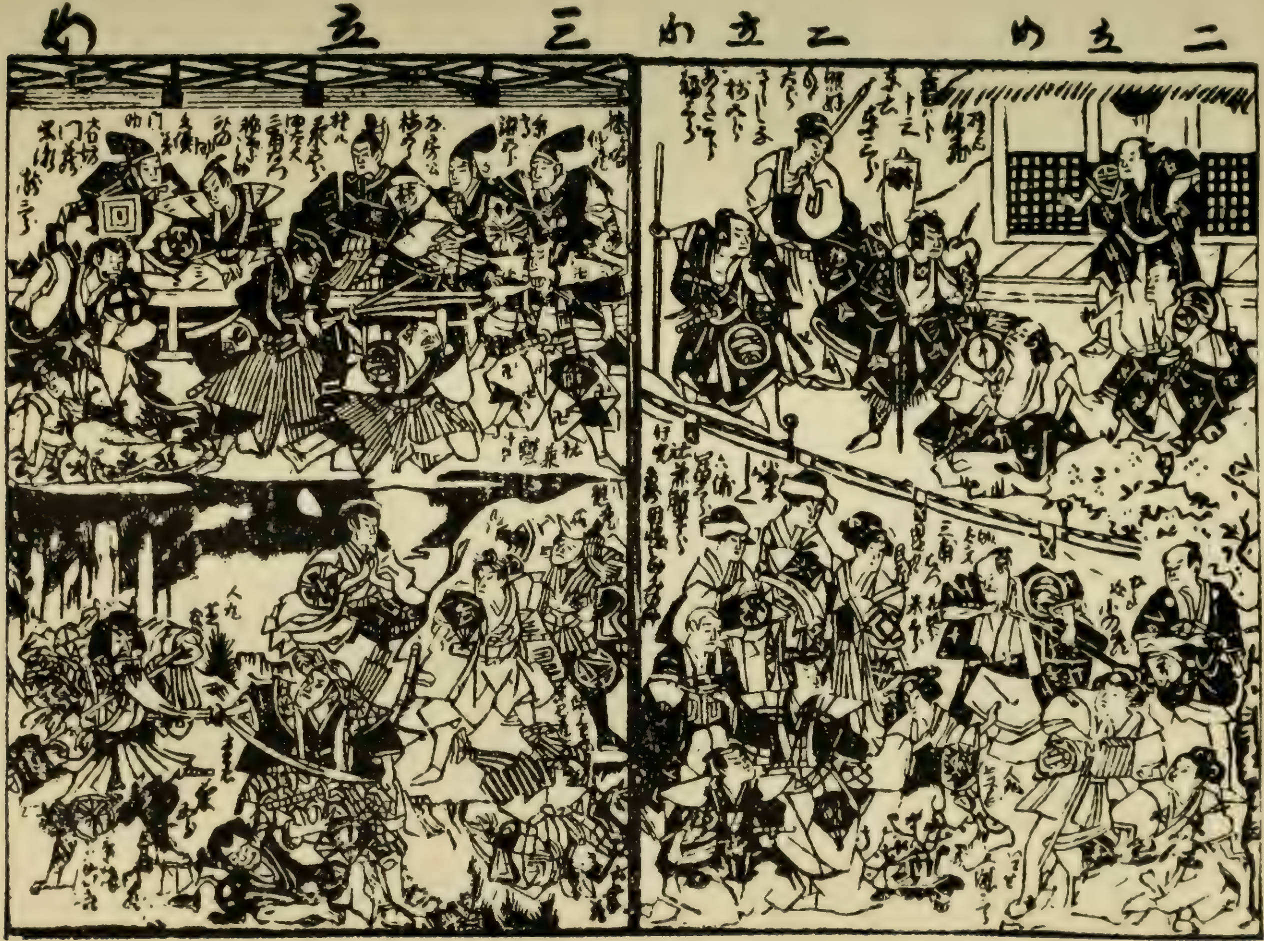
助太　この助太夫は介錯に、幸ひこの程求めたる、コレ

ト箱に入つた白鞘を出し

この新身こそよき試し。

道房　麿はこれより、直さま旅館へ

ト二重より下りて花道へかゝる。仕丁、沓を直す。景高、榛谷、因幡之助、祐兼、附いて同じく花道に並び



景高　路次の送りは景高なれど、御馳走役の光基どの

因幡　かゝる仕儀にて風情もなく、何分ともに御許容を

道房　聞くもうたてき今日の成行き。瀧あらば耳をそゝがんに

祐兼　武家の政事のゆるがせなく、これより直に由井ヶ濱邊へ

助太　囚人駕籠を舁き上げろ。

捕手　ハアヽ。

ト舁き上げる。權八、駕籠の窓より顔を出し、因幡之助に向ひ

權八　隨分ともに、御身を大事に

ト因幡之助と顔見合せ、兩人ホロリとして

其方も堅固で

ト岩瀬へ云ふ。

岩瀬　ても淺ましい

ト寄らうとするを

助太　叶はぬ事だワ。

ト綱をバラ／＼とかける。岩瀨泣き伏す。

景高　勅使のお立ち。

仕丁　ハア丶。

ト下り葉になり、道房先に仕丁四人、參內傘をさしかけ、跡より景高、祐兼、榛谷、附添ひ、因幡之助は舞臺に心を殘し、思ひ入れにて同じく附添ひ、皆々向うへ入る。

助太　その囚人を、土壇場へ早く

捕手　ハツ。

ト行きかける。

岩瀨　アモシ、慈悲ぢや、情ぢや、この袖の、主にも一目

ト袖の切れと小柄を持ち、駕籠へかゝるを、大日坊引寄せる。これにて駕籠も共に引かれ、タヂ／＼と阿彌陀の上へ來る。助太夫中を隔てゝ

助太　慮外な女め。

大日　動きやアがるな。

ト大日坊は岩瀨を引附ける。助太夫は岩瀨を睨めつける。時の太鼓にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う一面の黑幕、正面に注連を張つたる杉の大樹、日覆ひ一ぱいに誂へ杉の吊り枝、この脇に矢立の杉と書いたる高札に、竹の矢來結ひ廻し、舞臺一面に杉林。上手舞臺前に岩組みの模様、うしろ飛びこむ事あり。茲に重藏、以前の形、やつれたる心、片手に白の行衣を持ち、保童丸が慄へゐるを介抱してゐる見得。風の音、谺、鈴の入りたる鳴り物にて、物凄く道具納まる。

重藏　エヽ、腑甲斐なき保童丸樣、さほどに臆病未練にて、一門方の御無念を、お晴らし遊ばされますか。いかに御運の末なればとて、萬金にも替へがたき、御身の上に眩暈の、病ひありとは情ない……まだも平家の運命に、頼みあるのはその御旗。船の内裏の御無念まで、御所持なされしを、道房卿の情にて、お手に入りしと今のお話し。これも偏へにその旗の、日天月天の應護に依つてか。又は御一門尊君の、引合せ給ふのか。かゝる奇瑞のある上は、イザ〳〵これを着し給ひ、湖水に御身を浸されて、水垢離とつての荒行に、難行苦行なし給はゞ、などか惠みの無からざらんや。サア、その病根を、斷ち切り給へ、御公達。

保童　サア、我が身の忠心節義の詞、聞き分けぬにはあらねども、いかなる過去の業因にや、一門方の强勇とは、似ても似つかぬ臆病者。口惜しうて〳〵、おのれヤレ頼朝と、胸にたるみはなけれど

も、心のたるみも眩暈の病ひの業、仕樣もやうも無いわいやい。

重藏　さほど未練のお心では、とても大望思ひもよらず。陪臣ながら重勝が、主人景清に成り替り、君を誅むる仕樣は目前

　　ト仕込みの杖を拔き、保童丸の目の前へさしつける。保童丸悔りして「アレエ」と俯向けになり、慄へてゐるゆゑ、襟首取つて引起し

御身は平家の正統にして、門脇中納言經盛卿の御七男、無官の太夫敦盛卿の御公達。御父君には健氣にも、一の谷にて直實どのと組討ち。さほどの勇士の御子にも、かゝる卑怯はよく〳〵に、平家の運命盡きる期か。御一門方への申し譯には、只今あなたを討ち奉り、拙者も追ひ腹仕る。サ、お覺悟遊ばしませ。

　　ト刀を持ちかへ、保童丸の胸許へさしつける。保童丸あわてゝ逃げ出すを、キッと捕へる。

エヽ、云ひ甲斐なき御有樣。日本國の神々へ、祈誓をかけたも皆仇事。チエヽ、今ぞ覺悟の

　　ト云ひさま、我が腹へグッと突き立てる。保童丸猶慄へるを膝の下に引敷き、キリ〳〵と引廻し、臓腑を引出し

これ重藏が忠義の仕納め。服し給へ、保童丸樣。

ト突きつけろ。保童丸「アレエ〳〵」と慄へあせるを、無理に口へ押し込む。ドロ〳〵になり、保童丸、目くろめいて倒れる。重藏よろぼひながら、これに構はず四方に合掌し

南無や伊豆箱根三島三社の神々。井場の重藏重勝が、今日一七日の滿願なれば、何卒利益をたれたまへ。また日の本の神々は、源氏ばかりをよも守らじ。平家の身の上哀れみ給へ。諸天善神、感應あれや。

ト天を拜し祈る。此うち前場の六、八、天狗の面をかむり、後に窺ひ居たりしが

六　さてこそ平家の殘黨めら。

八　證據のその旗。

トかゝるを、重藏よろめきながら兩人を押へて

重藏　こりやアうぬ等は廻し者だな。

六　廻し者とは事おかしや。箱根權現の遣はしめ、湖水坊。

八　伊豆の御山の椰の葉坊が、神勅うけて保童丸を

重藏　イヽヤ、神勅でも佛勅でも、この重藏が目の黒いうちは、滅多にその手はくはぬぞよ。

二人　死ぞこなひめ。くたばつてしまへ。

ト振りほどいて打つてかゝる。よろしく立廻つて、兩人を押へつけ

重藏　エヽコレ、我が一命を生贄に、供へても奇瑞はなきか。別しては御主人の、日頃信心なし給ふ、觀音菩薩の惠みには、枯れたる木々も花咲くと、大悲の誓ひ僞はりなくば、心を碎きし忠死の存念

二人　なにを

ト振りほどいて又立廻り。重藏、兩人を投げのけ

重藏　哀愍納受なさしめ給へ。奇妙頂禮々々々々。

二人　まづ、この小童から

ト保童丸へかゝる。大ドロ〳〵になり、保童丸ムツクと起上がり、兩人を相手に、力の附きし烈しき立廻りあつて、兩人を投げ倒し、鞍馬御曹子の見得になる。ドロ〳〵打上げる。重藏この體を見て、嬉しき思ひ入れにて

重藏　ヤヽ、保童丸樣のこの體は

トこれより誂への鳴り物になり

保童　いま放心せし某へ、其方が忠死の誠をば、神も感應まし〳〵てや、御告げあつて忽ちに、心も猛く思はずも

重藏　勇氣供はり眩暈の、病ひも治する上からは
保童　この赤旗を押立てゝ、景清にもめぐり逢ひ
重藏　御一門の仇敵、あの頼朝を一太刀なりとも、
保童　恨みを晴らさで置くべきか。これを土産に其方は、再度平家の榮ゆるを、草葉の蔭より見物せよ。
重藏　アラ嬉しや、悅ばしや。さりながら、血汐に穢れしこの御旗は
保童　この谷底は湖水の續き。これより直に持參なし、血汐を淸むる水垢離とつて
　　ト上手の谷間へかゝらうとして、立戻り
アヽ、世が世であらば恩祿は、國取り國主に報ずべきに、赦してくれよ、井場の重藏。
重藏　そのお詞が百萬石。
保童　忠義に死する汝をば、見捨て行くのが
重藏　未練でござる、保童丸樣。この重藏はいつかな死なぬ。一時遲るれば一時の不孝。ちつとも早く
保童　御旗を淸めて
　　トつかくと岩角へかゝる。雨人起上がつて
二人　彼奴をやつては

トかゝるを、重藏引とめる。此うち保童丸は谷底へポンと飛び込む。山颪になる、兩人振りほどいて行かうとするを、立廻つてキツと見得になり

重藏　今ぞ成就。忝い。

ト兩人を見事に投げて、ガツクリと落入る。黑幕を切つて落し、皆々を隱す。すぐに大薩摩淨瑠璃。

〽それ白日天に昇れば雲霧洞にかへるとかや、爰にうつして日向なる、文字をそのまゝ東路へ向うて今日ぞ晴れの場所、錦繡の袖、羅綾の裳は、朝日の櫻、月の梅、景も淸けきその風情。

ト淨瑠璃切れると、チヨンと黑幕切つて落す。

本舞臺、向う打拔き、今までの道具を絕頂に見せたる心、これより段々續きに高足、小組みの二重舞臺、所々に松杉の立ち樹、よき所に景淸の繪姿を描きし高札を立て、舞臺前に湖水の浪板。この道具一々誂へあり。すべて矢立の杉、谷底の體よろしく、この道具に納まる。ト大ドロ〳〵になり、空に七曜星現はれる。これをキツカケに鳴り物になり、景淸、半切れ衣裳、丸括け、手甲、脚當、大口、重れ草鞋、緋の衣、法師頭巾を着て、大鍬、岩角へかけ、以前の形の大日坊を踏まへ、星を睨んで立ち身。側に保童丸、旗を持つたまゝ氣絕してゐる。この模樣にてセリ上がる。景淸、大日坊、ちよつと

立廻つて、キッと見得。誂へ三味線入りの樂になる。

景清「淡路島、通ふ千鳥の啼く聲に、幾夜寢覺めの須磨の關守り」……我れ西海の合戰、五畿中國に巡行なし、時こそ來つて東なる、我が本國へ立歸るも、天運見捨て給はざる、惠みの力を頭に受け、何卒右幕下賴朝を、恨みんものとこの程より、深山幽谷に身を潛め、忍び〳〵に窺ふところ、平家の御旗を箱根なる、當社へ奉納あると聞き、これぞ天より景清に、奪ひ返せとの知らせならんと、修驗の姿にいでたつて、歩みをはこぶこの山中。七星空に光りを放ち、土星殊に盛んなるは、正しく日月の御旗こそ、遠からざるこのあたりに、御動座あると覺えたり。何にもせよ、怪しき星の、振舞ひぢやなア。

大日 さてこそ景清。

ト振りほどき立廻り。大ドロ〳〵により、星一つ落ち、岩角へ當り、碎けて石火パッと立つ。ドロドロやむ。これにて保童丸「ウム」と心附き、起上がる。景清、大日坊を投げ、保童丸を見て

景清 ヤ、あなたは正しく保童丸樣。

保童 さういふ其方は、景清ならずや。

景清 まづ變らせたまはぬ御尊顏の、不思議にも拜し奉り、臣が本懷、斯樣な喜ばしい儀はござりま

せぬ。

保童　我れも汝に逢ひたうて、これまで幾世の憂き苦勞。

景清　御尤もにござります。某とても御身をば、井場の重藏に預け參らせ、九國の果までも駈け歩き、又ぞろこの東路は、景清が生れ故鄕にござりますれば、安房上總の軍勢を、狩り催ふさんと下る途中、日月印せし赤旗を、箱根權現へ奉納と聞き、おのれヤレ取返さんと、實否を窺ふその折柄、計らずお目にかゝりし次第。

保童　その赤旗こそ爰にあり。

ト赤旗を出し

これを汝に渡さんと、行くへを尋ね居つたわやい。

景清　すりや、御旗はお手に入つたるか。エヽ、忝い。

ト取つて戴く。

保童　これと申すも、勅使に立ちし道房卿の情にて、御旗は念なく手に入れど、哀れや井場の重藏は、保童丸が非力の臆病、それを苦に病み難行して、その身を贄に願をあげ、忠死の功力にこの身は平癒。

景清　すりや重藏の忠死にて、御身の眩暈癒えしとや。これと申すも父尊靈、その靈魂の守護ならん。
エヽ、忝い。

保童　して景清が、今の住居は

景清　鎌倉表の虚實を探るに、最屈竟のこの箱根。アレ、あの道を左へ登り、二十五菩薩のある所を、右へ取つて谷一つ、越ゆれば直に拙者が隱れ家。

保童　すりや、その所に世を忍び

景清　計るに手なし、押つけ本望。

保童　汝は何卒重藏が、屍をよきに葬むりて

景清　跡より參るでござりませう。あなたは今の道筋を

保童　ウム、そんなら二十五菩薩を右へ取り

景清　谷を越ゆれば

保童　其方の隱れ家。

景清　お怪我のないやう

保童　待つてゐるぞや。

ト花道へ行きかける。大日坊起上がり

大日　保童丸を

ト かゝるを投げのける。直に景清押へ

景清　ちつとも早く

保童　さうぢや。

ト かけりになり、向うへ走り入る。

大日　保童丸を逃がしたら、その赤旗を

ト景清の持つてゐるのを取つて駈け出す。景清引ッ捕へ、足下に踏まへる。この時「エイ」と弦音し、矢一筋來るを、景清、そこにある繪姿の高札にてうけとめる。山の上へ秩父重忠、弓を持ち、むかはぎ、裁附け、武者草鞋、騎射笠、矢筒を背負ひ、好みの姿にて出て來る。景清は大日坊を右の高札にて押へる。双方とたんの見得。これより誂への立派なる鳴り物になり、重忠探り寄つて、大日坊が持つてゐる旗を取上げる。大日坊「やらぬ」とかゝるを、重忠は弓、景清は鍬にて大日坊を左右より當てる。大日坊見事に中返りする。これより鳴り物變り、兩人立廻りのうち、うしろへ以前の六、八、窺ひ出る。トゞ旗は景清の手へ納まり、花道へツカ〳〵と行きかけるを

重忠　立ち寄れば、大樹の元の影暗し。
景清　やがて心のまゝにすむ月。
重忠　日本國は放し囚人。闇はあやなし、そのまゝ爰を
景清　日に遮らばこの所で、源氏の武士の素頭微塵に
重忠　ハテ、勇ましき

トこのとき六、八出て

二人　やらぬワ。

ト景清へかゝるを、重忠、六を弓にて引かけ、引戻す。八は景清へかゝるを鍬にて打つ。くはへ面にて梨割りになる。

重忠　流石平家の
景清　なんと。

トこの時両人一時にかへる。チョンと木の頭。

重忠　勇士ぢやなア。

トこなしよろしく、ひやうし

滿來

幕の外、出端になり、景淸、鷹揚に振つて向うへ入る。シヤギリ。

（狂言作者 松井幸三 音羽助）

後の三建目

祐成別莊の場

朧とは梅を見せたる月夜かな

淨瑠璃 鴫立澤虎礎 淸元連中

役名――曾我十郎祐成。大磯の虎。同禿、千鳥。大磯屋傳三。小林の朝比奈。

本舞臺、正面屋根飾りしたる亭屋體。向う床の間、更紗の暖簾口、風雅なる仕立て、數寄屋障子をたてきり、この左右庭の心。手洗鉢、石燈籠、植込み、四つ目垣、梅の吊り枝、同じく立ち掛、花の盛り、いつもの所に枝折り戸、松飾りを取附け、上の方淨瑠璃臺、爰に淸元連中居並び、すべて鴫立澤祐成別莊の體。鳥追ひの合ひ方、通り神樂にて幕明く。ト頭取出て、淨瑠璃の役觸れあつて入る。直に前彈きにかゝる。

〽君ケ代の齢ひ壽くしるしとて、色添ふ門の若みどり、春より先に春の來て、扇々や寶船、戀の湊につながれて、いつ解けやらぬ氷面鏡、向ふ笑顔や玉櫛笥。

ト鳥追ひの合ひ方にて通り神樂をかむせ、正面の障子を引拔く。内に朝比奈、鏡臺に向ひ、大磯の虎、朝比奈の髪を結うてゐる。千鳥、禿にて、櫛を拭いてゐる。三人この見得よろしく納まる。

〽ゆかしき主を待つ身より、待たるゝ人としつぼりは、今日大磯の虎が君、我れらは猿隈小林も、離れぬ仲の毛むくじやら、ちよつと御見と寄添へば、廓に馴れたる禿松、なんでありいす馬鹿らしいと、ひぞるもぞるも育ちがら、小癪者ではないかいな、まだうら若き梢にも、殘れる雪を置き炬燵、誰が痴話筥と附けぬらん。

とら　ほんに、朝さんとした事が、いつに變らぬおどけ口。その上わたしを捕へてじやら〱と、氣の輕いお方でござんすな。

千鳥　モシ、お前、今のやうに串談しなんすと、祐さんに云ひつけるぞえ。

朝比　アヽ、コレ〱、祐成にそれを云はれてたまるものか。やう〱の事で御當地へ下り、御贔屓お取立てにあづかるまで、祐成を力に當分の居候ふ。それゆゑまだ、ひめはじめは元より、髪結ひ床の初剃りも、むづかしいゆゑ、虎を頼んで髪月代、なか〱いゝ心持ちになつたわえ。

千鳥　太夫さんはきついもの。よう似合うたわいなア。

朝比　時におぬしも寒からう。幸ひの置き炬燵。サア〳〵、あたれ〳〵。

とら　そりやさうと、この祐さんは、どこへ行かしやんしたえ。

朝比　サア、聞いてくれ。祐成は大晦日の晩に、阿母の所へ歳暮に行つたが、一夜明けてもまだ歸らぬは、掛取りが煩さいゆゑ、逃げたと見える。但し片貝といふ云ひ號けあれば、てつきりそこへのめくり込んで、ひめはじめでもしてゐるか。

とら　エヽ、祐さんは、そんなら片貝さんの内へ行かしやんしたかえ。さうとは露知らす、エヽ、腹が立つわいなア。

朝比　さては此奴、燒き餅だな。併し燒き餅は正月の當り前。

千鳥　今に祐さんも、お歸りでありんせう。

朝比　其やうに氣を揉ますと、幸ひの銚子、杯。重詰で一杯やる氣はないか。

ト朝比奈、銚子、杯、重詰を出し、虎の側へ持つて行く。

とら　イエ〳〵、もう酒どころではないわいなア。

千鳥　モシ、其やうに氣を揉みなんすと、又いつもの

二人 癪が起らうぞえ。

とら それぢやというて、わたしや腹が立つわいなア。

トいろ／＼氣の揉める思ひ入れあつて、門口へ行く。

〽拗ねて見せるが戀の癖、東風へなびくと名のみはよけれ。

聞けば聞くほど腹が立つ。主に限つて其やうな事はあるまいと思うたが、矢ツ張りわたしが油斷。

かね言つもるしげ／＼に、互ひに變るな變らじと、云ひ交せし仲ゆゑに

〽よそに二人が睦言も、笑はれ草がしみ／″＼と、癪にさはるや科もなき、煙管あたりも戀なれや。

トこの文句のうち、虎、門口にて、いろ／＼思ひ入れある。朝比奈は酒を飲む。千鳥、酌をしてゐる。虎件の杯を取り、手酌にて酒を飲み、また此方へ來て莨盆を引寄せ、焦れて、トヾ煙管を舞臺へ打ちつけ、炬燵へ身を外け、思ひ入れ。兩人、この體を見て氣の毒なるこなしあつて、また兩人酒盛りよろしく、双六なぞしてゐる。

〽色の習ひと世の諺も、ゆうべの雨にしつぽりと、濡れて戻りし祐成が

ト向うより祐成、羽織衣裳、安下駄をはき、大磯花菱屋といふ傘をさし、醉うたる體にて出る。

〽戀の重荷と傘を、かりの枕も捨てられぬ、今朝ほの〴〵と迎ひ酒、しかも模樣の千鳥足、つるり〳〵、つる〳〵〳〵、鶴の餌ばみの畔道を、つるりと木履踏みとめる、そろべく〳〵しそれそれ跡へ來る人は、これぞ古今の捻ぢ上戸、招けばオヽイ大磯屋。

ト跡より大磯屋傳三、上下にて、一本差し、禮者の姿、首へ年玉の入つたる包みを引かけ、生醉のこなしにて出る。

〽傳三も今日は年禮と、首に掛けたる年玉は、供と旦那の二人前、わびた世界ぢやないかいなうまの合うたる酒の友、こなたは正に色上戸、醉うたとさ〳〵〽あぶない。

祐成　合點ぢや。

〽あぶない。

傳三　合點ぢや。

〽互ひに語り睦まじく、打連れ立ちて來りけり。

ト兩人花道にてよろしくあつて、トヾ祐成先に舞臺へ來り

祐成　思ひがけない途中の雨。其方もわしも、既に濡れやうとしたが、どうやら空も晴れたさうな。

傳三　左樣でござります。よい所であなたのお目にかゝり、お庇で濡れずに參りました。

祐成　これまで來れば氣遣ひない。互ひに無事でめでたい春、何がなしに祝うて一杯、飲まうぢやないか。アヽ、此方へ入らつしやれ〳〵。

傳三　有り難うござります。私しも祝うてお年玉、末廣がりの扇。

ト扇箱を出す。

祐成　これは忝い。サア傳三、入らつしやい。

ト兩人門口を入り

コレ、今戻つたぞ。サア、酒を持て〳〵。

朝比　兄イ、待ち兼ねた〳〵。

千鳥　祐さん、今お歸りかえ。

朝比　コレ、内にも客があるに、今までどこに居たのだ。

祐成　サア、大晦日の夜、母者人の方へ歳暮に行き、思はず一夜を明したゆゑ、直さまあちこちへ年禮なんと、よい手廻しか。その歸りに傳三に逢うて、それから同道して、今戻つた。

朝比　ヤア、そんなら傳三は禮に來たのか。

傳三　ハイ、左樣でござります。朝比奈樣、明けまして、結構な春でござります。

祐成　コレ、朝比奈、今聞けば、内にも客があると。アヽ、聞えた。千鳥が來てゐるからは

朝比　知れし御事。コレ、おぬしに、逢ひたいと、先刻から來て待つてゐるヮ。

祐成　そんなら虎が來てゐるか。ドレ、どこに……ヤア、太夫か。ようマア、來てたもつたなう。

傳三　イヤア、虎太夫、さては、ひめはじめの押賣りに來をつたな。エヽ、畜生め。

祐成　太夫、炬燵の火がよくば、わしもあたらう。

ト炬燵へかゝらうとする。虎、ツンとして此方へ來る。

これはどうぢや。何を其やうに腹立てるのぢや。サア、機嫌直して一服のみや。

ト煙草吸ひつけて出す。

とら　イエ〳〵、わたしや煙草は嫌ひでござんす。

祐成　こりや、太夫の機嫌をそこねたさうな。皆の者、よいやうに、詫び言してくれ〳〵。

傳三　オットそこらは大磯屋、グッと呑み込み仲直り。モシ、太夫さん、どうで有馬の水天宮、そんなひぞりは、よしの木さいかち、さりとはつれない〳〵は奴の挨拶。一番立てゝおくれいな。

ト虎の側へ行く。

とら　エヽ、阿房らしい、なんぢやいなア。

傳三　南無三しまつた。
千鳥　モシ、太夫さん、機嫌直して、祐さんに御挨拶を
とら　アヽ、この子とした事が、わたしや祐さんとやらいふお方に、近附きはないわいなア。
祐成　これはどうぢや。わしぢやわいの。祐成ぢや。其方は大分醉うたさうな。幸ひ茲に袖の梅がある
コレ千鳥、早うそれを汲んでおぢや。
千鳥　アイ〳〵。
ト火鉢にかけたる藥罐の「袖の梅」を、茶碗に汲んでくる。祐成取つて
祐成　サヽ、一口飲みや。
とら　イエ〳〵、わたしや醉うてはゐぬぞえ。お前こそ片貝さんとやらと、さいつさゝれつ、お樂しみであらうのに
祐成　ハテ、よい機嫌らしい事を。この祐成は曾我へお預け。二品の寶紛失ゆゑ、鬼王もろとも日夜の艱難。その上祐信樣、母人には、囚人同然のお身の上。それも時節なりや、もう仕方がない。ままの皮よ、兎角我れらは、そもじの顏さへ見ればよいなう。
とら　そりや大方門違ひでござんせう。外の女中さんに、其やうな事云はしやんせいな。

祐成　これは又迷惑な。云ひ交した其方を退けて、外の女と、悪性してよいものかいなう。
とら　でも、云ひ號けの片貝さんと
祐成　なんのマア疑ひ深い
とら　アレ、まざ〳〵しい、あの顔わいなア。
〽いつしかに、うつろひやすき心とは、兼ねては知れど何のその、女子心はさうぢやない、過ぎし夜すがの初會から、好いたらしいと思うても、傍輩衆や内外の手前、好かぬお方と口ではいへど、いつか穂に出て人さんに、なぶられたさの樂しみは、これも苦界の憂とやら、あれ見やしやんせ門の松、女夫が仲に去年の雪、解けて寢る夜の注連飾り、羨ましうはないかいな、どうぞお前を實にして、末は妹脊の語らひと、思うて暮らす甲斐もなう、そもこの頃のしなしぶり、つれない男と寄添へば
祐成　太夫、そりや何を云やる。その恨みなら、此方から云はにやならぬ。こゝな狐傾城め。狐なら稻荷の宮居、神すゞしめは、オヽそれよ。
〽まづ衣更着の初午は、家毎に軒の行燈に、繪空言なる口合も、祈年祭りの賑ひと、鄙には米の種びたし、米桊といへる仇人に、鼻毛よまれぬその先と

これまで度々化かされて、末の約束、起證の嘘に、かきのめされた我れらより、書入れさせた、神々は

〽一に權現二に玉津島、三に下がり松四に鹽竈よ、天の橋立切れ戸の文珠、文珠さんはよけれども、切るといふ字が氣にかゝる、サツサ、何としよかどしよかいな〽陸をゆきかふそゝり唄、十露盤絞り頬かむり〽親兄弟にも見放され、赤の他人の傾城に、可愛がられう筈がよい、なぞと聲する鶯や、しかも今年は正月が、二つ並んだ枕橋、三圍あたり夜の殿、ちらりと見えし狐火は、オヽ恐ろしど身を縮め、行かんとするを引とゞめ〽これ待たしやんせ祐成さん、さう云はんすりやわたしこそ、云はねばならぬと思ふ仲、戀いさかひと見て取つて、二人を左右に小林、千鳥。

朝比　オツト待つたり。先刻にから見てゐたが、さうまで惚れ合つた二人が仲も、明の方となつたゆゑこいつは切る氣だな〳〵。

千鳥　それといふのも、祐成さんが惡性ゆゑ、どうやら切れさうぢやわいな。

とら　ぬしの惡性を聞いたからは、わたしや切れにやならぬわいな。

祐成　わが身が切れる氣なら、此方も切れるぞ。

とら　わたしも切れる。

祐成　おれも切れる。

　　ト此せりふを聞いて傳三、ムツとしたる思ひ入れにて、皆々を掻きのけ、ズツと眞中へ出てドツサリ座り。

〽モシ、どなたもお詞の鼠だが、チヽチウと待つてくんなせえ、今聞けば切る〳〵といふが、おれが上下が古いといふのかえ〽ふる物にとりては、女郎衆の勤め、とてもふるなら春の雪、解けて寢よとの嬉しさに、夢も結ばぬ明がらす、可愛々々は久しいものぢやないかいな〽浮氣浮氣で根つからさつぱり氣が知れぬ、これが誠であらうぞいな〽それを今更笑ふとは、あゝ恨めしの人々と、管まきかける酒の癖、まだ醒めやらぬ風情なり。

朝比　傳三は、まだ醉が醒めぬさうだ。

千鳥　お前、なんで其やうに腹立てなんすえ。

傳三　なぜ切る上下だと云つたのだ。

朝比　なにサ、ありやァおぬしが上下の事ではないよ。

傳三　そんなら今切れると云うたは

朝比　サア、切るといつたは凧の事。奴も今度初下り

千鳥　モシ、傳三さん、いはゞめでたい初春ぢやわいなア。

〽その仇言も酒の粋、悋氣もいはゞ可愛さが、過ぎて心の厚氷、つい解けかゝる春の風、門に立てとよ松竹の、影に禿が手鞠唄。

トこの文句のうち、朝比奈、千鳥、傳三をなだめ、千鳥は鞠を突くといふ思ひ入れ。朝比奈も同じ思ひ入れ。トゞ朝比奈の頭を鞠の思ひ入れにてよろしくあつて、羽子板を出し、追ひ羽根を突く。これより羽子板を枷に、大太鼓入り、草摺の見得になり、祐成、千鳥へ指圖して、よろしくあつて、朝比奈、千鳥よろしくあつて納まる。

鞠唄〽宵の口舌は無理なさゞめ言、つい云ふ事も惜しや別れの鳥鐘、又の逢瀬をまつや子の日の、野邊に數々心土筆の、筆に菫も、それがほんに文ぢや一イ二ウ三イ四ウ、夜毎々々に通ひ廓の戀の夜すがも、人目忍びてあかぬ契りを、只神かけて祈る誓ひも縁ぢやえ。

ト朝比奈、千鳥よろしく納まる。ト虎、この中へ出て

オンド〽縁は異なもの野中の梅に、初音きかせよ人來鳥〽花を一本忘れて來たが、跡で咲くやら開くやら、よいやさ〳〵。

トこれより傳三、虎の振りになる。

〽こちの爺さは左が好きで、夜さり〳〵に呑も〳〵と云やる〳〵、機嫌上戸だホホホット、笑はば法華經と囀るは、わやく鶯百千鳥。

ト兩人よろしく納まる。トどんちやんになる。

皆々　あの太鼓は

朝比　兼ねて範頼どの、これなる虎に打ッ惚れてゐるゆゑ、度々口說けど承知せず

祐成　大勢の人夫を差向け、手籠めになさん計らひよな。

とら　そんなら爰へ

傳三　アヽ、コレ〳〵、そりやァ料簡違ひ。範頼樣はお歷々、そんな理不盡はなさるまい。

皆々　でも、あの太鼓は

傳三　サア、今年は漁が當りゆゑ、若い衆が寄つて、濱手の祭りでござります。

皆々　そんならあれが

傳三　サァ、獅子の音頭に、よい聲かけて

〽ヤア、曳けや〳〵よい中の綱

ト傳三、ひよつとこの面をかむり出て

〽あのや姐さんちよと惚れて、文の代りに鍬やつた、ほれたとそれが判じ物、にら畑の庄屋眼爺さん婆さん撞木の手、子よりも可愛いゝ孫の手色の手承知の手、しめたら合點ぢやないかいな。

ト傳三よろしくあつて

傳三　サア、音頭ぢや〳〵。

〽しめろやれ、しめて寢た夜は枕が邪魔よ、枕拍子に浮れうならば。可愛々々の合槌は。あひにあい持つ槌の音、いとしけりやこそしんと打つ、憎て打たれうかその鼓、たんぽゝの、花が見事に咲いたよの〳〵、節も興じて面白や。

トこの文句にて五人手踊りよろしくある。始終ドン〳〵聞える。

朝比　サア〳〵〳〵、太夫が機嫌も直つたさうな。

傳三　このやうな時は寸善尺魔。

千鳥　ちつとも早う

三人　二人一緒に

二人　それぢやといふて

朝比　エヽ、小ぢれつてえ。

〽しや面倒なと小林が　二人をかしこへ押やれば、傳三が機轉仲人役、流石それしやを見習うて、禿が屏風引廻す、いかなる夢や結ぶらん。

ト三人して祐成と虎を屏風の中へ入れる。

朝比　エヽ、畜生め。

三人　ハヽヽヽヽ。

傳三　まづ二人が納まれば、此方も安堵、これで双方浪風なし。仲人は宵の程、わしはモウ、お開きに致しませう。

朝比　イヤア、傳三が眞面目になつた。酒が醒めたら、飲み直しはどうだ。

千鳥　ほんに、それがようありんせう。お酌をしようかえ。

傳三　イエ〳〵、まだ方々でござりますれば、春永にゆるりと參りませう。

朝比　そんならどうでも

傳三　杯はお預け申して

朝比　又その内に大磯屋

千鳥　コレ、危ないぞえ。

傳三　朝比奈樣、永日お目にかゝりませう。

〽然らば永日々々と、醉ひもどうやら春雨の、あそこや爰のぬかるみを、ひよいと飛んでは身を輕う、元來し道へと

トこの文句にて傳三は向うへ、朝比奈は千鳥に囁き、奥へ入る。千鳥殘り、屛風の外にある火鉢の火を煽いでゐる。この時向うにて

四人　ヤイ來いエ、。

トどん〳〵のやうな通り神樂になり、向うより中間四人、若松を染めたる駕籠看板、陸尺の形にて出て來り

陸一　兼ねて範賴公、大磯の虎に、首ッたけ惚れてはござれども

陸二　祐成といふ蟲があるゆゑ、今に色よい返事がないと

陸三　殊の外のお腹立ち。それゆゑ我れ〳〵この如く、姿をやつしこの所へ、虎が來てゐるを幸ひに

陸四　引立て來れと仰せを受け、次手に戀の敵たる、祐成ぐるみ。合點か。

三人　心得た。

陸一　何かの手段は、コレ

　ト四人囁き合ふ。通り神樂になり、皆々舞臺へ來る。

許さつしやりませ。この別莊は、梅の花盛りと聞いたゆゑ

陸二　供待ちの見物に來た。

陸三　どうぞ庭を

陸四　見せて下さい。

千鳥　これは〳〵、どなたもようお出でなさんしたが、今日は主さんがお留守ゆゑ

四人　ならぬと云ふのか。

千鳥　アイ、どうもわたしが自由にも

　ト陸尺一、千鳥を見て

陸一　ヤア、わりやァ虎が禿の千鳥ぢやァないか。

千鳥　して、お前方は

陸二　コレ〳〵千鳥、今日爰へ、大磯の虎が來てゐるのであらうの。

千鳥　イエ〳〵、わたしや其やうな事は
陸三　知らぬとは云はせない。
陸四　なんでも爰と目を附けたが
陸一　あの屛風の中が物臭い。
千鳥　アモシ、滅多な事を
陸二　そんなら虎はどこにゐる。
千鳥　サア、わたしやどこやら
陸三　知らぬと云へば屛風の中が
千鳥　サ、それは
皆々　サア〳〵〳〵
陸四　面倒な。ソレ、踏んごめ。
三人　合點だ。
千鳥　アコレ

ト四人踏み込まうとするを千鳥さゝへる。立廻りのうち屛風を皆々引退ける。内に虎は以前の形。そ

の側に朝比奈、祐成の羽織をかぶりゐるを、皆々は祐成と心得

陸一　さてこそ爰に二人の奴ら。

と兩人をよき所へ引出す。

千鳥　モシ、滅多な事を

陸二　戀の敵の十郎祐成。

陸三　虎もろともに範頼公へ

ト立ちかゝり、引立てようとする。この時朝比奈、ちよつとさゝへ、四人を見事に投げのける。皆々

起きながら

陸一　待て〳〵。祐成は色男の弱蟲と聞いたが

陸二　今日は强勢な力になつたぞよ。こいつは人間業とは思はれぬ。

陸三　それ〳〵、こいつは慥か節分の、福は內外の豆蒔きに

陸四　追ひ出されたるごろつきの

陸一　そんなら、うぬは

四人　鬼か。

〽うんにや

四人　人か。

朝比　ウムエヽ。

〽和田が三男小林の

朝比　朝比奈だもサ。

ト朝比奈、着たる羽織を取つてキツと思ひ入れ。皆々見て

陸一　イヤア、祐成と思ひの外

陸二　つん出た奴をよく見れば、義盛に勘當された、臑ツ咬りの小林だな。

陸三　さては祐成を落しやり

陸四　替へ玉の奴の化け物。

陸一　なぜ邪魔方と

四人　つん出たエヽ。

朝比　やかましいわえ、木偶の坊めら。親仁の義盛に勘當うけ、祐成の内に居候ふ。斯ういふ時に働くが、喰ひつぶしの當り前。うぬら、じたばたすると、鹽辛にして食つてしまふぞ。

四人　イヤア。
とら　ほんに朝さん、よい所へ。こりやマア、どうしたら
千鳥　よからうぞいなア。
朝比　此奴らはおれが受取つた。この間に早く大磯へ
とら　そんなら此の儘
朝比　ちつとも早う
四人　われをやつては
ト行かうとするを、朝比奈、四人をさゝへる。虎と千鳥は花道へ行き、舞臺を見て思ひ入れあり、向うへ入る。
〽危ふき事を虎口とは、おのが名に呼ぶ友千鳥、千里一飛びかいしよけに、廓をさして
陸一　この上は、跡追ひかけて手に入れなば
陸二　範頼公のお喜び。
陸三　喜びありや三番叟。
陸四　朝の出がけに幸先よし。

陸一　外へはやらじあの色香。
陸二　手活けの梅や翁草。
陸三　彼奴を引立て、手柄は仕勝ち。

ト四人追ひ駈けようとするを、朝比奈さゝへ

朝比　さうは千歳これからは、刃向ふうぬらを雪解けの、泥にまぶせて黒き尉。
陸一　ところを此方が腕かぎり
陸二　取つてひしぐは式三番。
陸三　骨をひしぐは
陸四　笛鼓
朝比　鈴振る、袖振る
四人　拍子に乗つて
朝比　外へはやらじと、おんもふ。

ト立廻つて件の羽織を肩に引掛け、三番叟の見得にて、キツと思ひ入れ。

〽式三番のいはれを問へば、天照神に住吉春日、これ天地人の三方なり、翁の謠にちりやたら

りは眞言祕密、また千歳は七つの拍子、初めに六つの拍子を踏むは、これ日の本の六十餘州、踏みかためたる形にて、日の本は三足の、鳥にたとへし烏飛び、戀の種蒔きこなたこそ〳〵、外へはやらじと取附いて、流石いなには袖打拂ひ、納むる手には袂をとゞめ、千秋樂には所帶を作る、萬歳樂には小褄をしやんと、池の汀に舞ひ遊ぶへげに有り難き神風や、花を散らさず色見えて、鴫立澤へ春の來て、動かぬ御代の礎と、今もその名を殘しける。

ト右の文句にて朝比奈、四人を相手に三番叟の立廻り見事にあつて納まり、トヾ四人ならびしき、朝比奈キッと見得よろしく、片シヤギリにて

幕

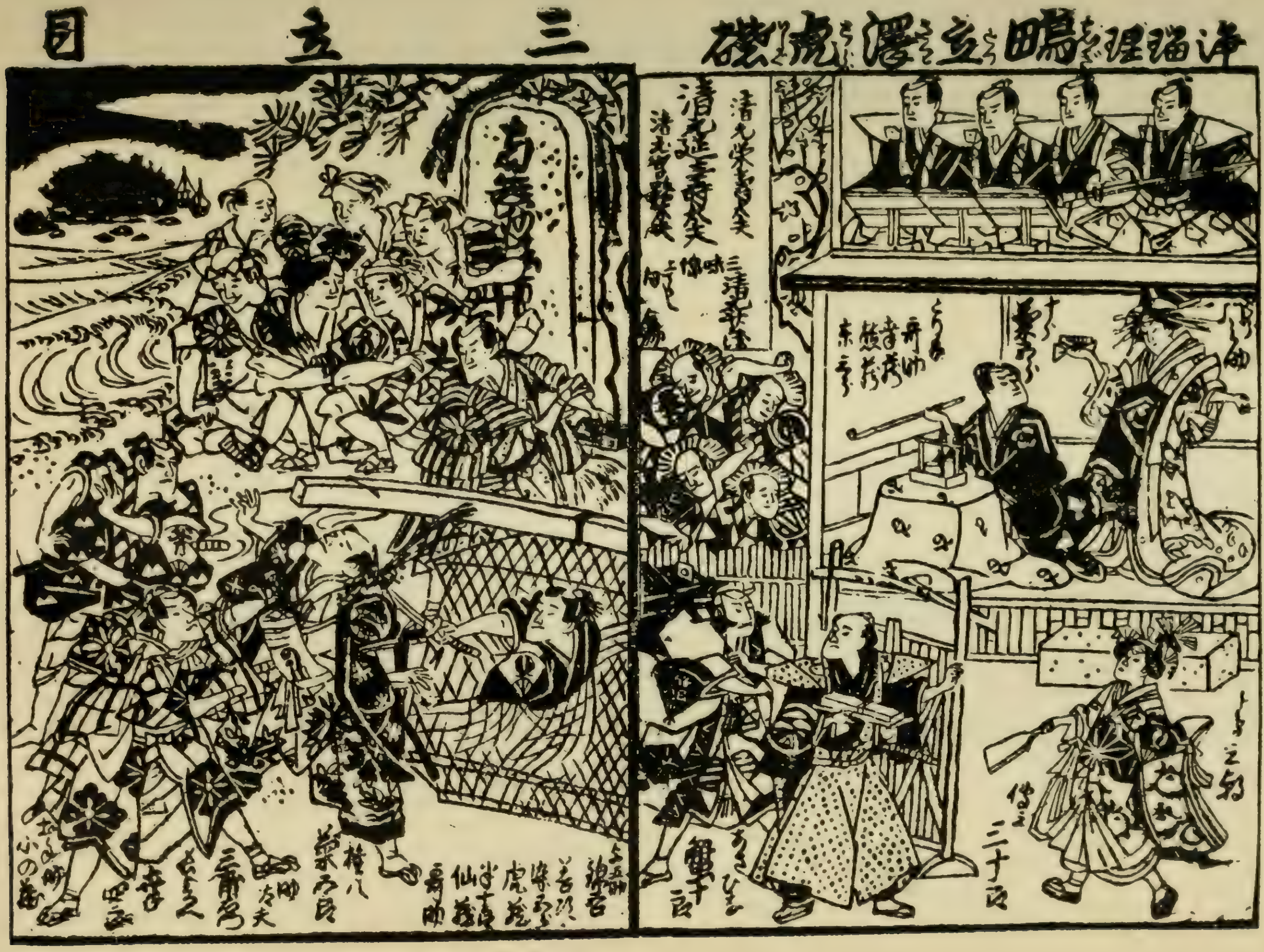
（作者　松井由輔）

後の三建目奥

鎌倉龍の口の場

役名――平井權八。本庄助太夫。同奴、土手助。絹屋與五七。幡隨院長兵衞。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、題目の大石塔、松の大樹、舞臺前浪板。すべて鎌倉龍の口の體。松の樹の下に與五七、やつし半合羽、股引、草鞋、旅人の形、絹屋といふ弓張りを持ち、土手助、前幕



浄瑠理鴫立澤虎磯
三立目

の旅奴にて、兩人耳を押へ、雨やみをしてゐる體。時の鐘、大雷、雨車、題目太鼓、拍子木にて幕明く。

ト兩人空を見て

與五　さて〳〵、強氣な雷であつた。

土手　貴樣はどこへござる飛脚だ。

與五　イエ〳〵、飛脚ではござりませぬ。私しはこの雪の下の者でござりまするが、湯本まで江戸のお方を、尋ねて參る者でござります。

土手　ア丶、さうか。わしは旦那のお使ひで、その雪の下の、絹屋の長右衛門といふ商人の所まで、お使ひに行つた歸り、今の雷に、生膽を拔かれた。

與五　ナニ絹屋へござつたえ。モシ、その絹屋といふは、わしが旦那の內だが、お前、誰れからのお使ひだえ。

土手　わしは本庄助太夫樣から、その絹屋へ金子百兩持參いたした。以前は田糸樣といつた助太夫樣のおてかけ、そのお方へお渡し申して歸り道。ア丶、そんなら貴樣は、絹屋の若い衆か。

與五　左樣でござります。その田糸樣といふは、死なれた旦那、長右衛門樣の妹御で、今のお名はお絹

様、本庄様へお妾奉公。娘のお半様を連れて、不縁なされて、今では絹屋のかゝり人。そのお半様へ、才次郎といふ聟の世話をさしつたは、江戸の花川戸の長兵衞といふお方。そのお人が、急に上方から歸らしやると聞いて、わしはその迎ひに行くのサ。

土手　ハテ、そりやァ縁といふものは味なものだ。奴は今日、貴様の主人のかゝり人、お絹様へ百兩といふ、娘御の支度金を、渡して行つた歸り道。して、貴様は、手紙でも持つて行くのか。

與五　持つて行きます。その狀はこれでござる。

ト狀箱を出し

かゝり人のお絹様より、花川戸の長兵衞様が、湯本に逗留してござるとの噂を聞いて、急にわしは狀を持つて、娘御に添はせる聟どのゝ相談でゆきます。また絹屋の後見、幸左衞門様は、お半様を連れて、日向藥師へ願ほどきにござつてのお留守。この雷ぢやァ、わしも藤澤までは行かれぬわえ。

土手　どうして〳〵、片瀬に泊つて、明日の事にさつしやい。併し貴様、藤澤に馴染があるか。

與五　よく當てさしつた。うさァねえの。ハヽヽヽヽヽ。

土手　氣を附けて行かつしやい。

ト題目太鼓になり、與五七、狀箱を持つて下座へ入る。土手助向うへ行きにかゝる。又雷鳴り出す

ア、、又鳴り出すな。

ト木の下へかゞむ。向う揚幕にて

大勢　片寄れ／＼。

ト聲するゆゑ、土手助向うを見て窺ひゐる。捨て鐘かすめて、雷になり、向うより人足二人、高提灯を持ち出てくる。跡より雲助大勢、網をかけたる囚人乘り物を擔ぎ出る。跡より助太夫、前幕の形にて、白張りの傘をさし、草鞋がけ。侍ひ、中間、紙合羽にて警固し、侍ひ一人、刀筒を持ち、人足一人、絲立てへ卷きし權八の大小を持ち、皆々本舞臺へ來る。土手助、提灯の印を見て

土手　お提灯の印しは慥かに……ヤ、あなたはお旦那、助太夫樣。

助太　そちや土手助ではないか。

土手　左樣でござります。お指圖に任せ、雪の下の絹屋方へ參り

ト云はうとする。

助太　コリヤ／＼、爰は役先。その儀は後にて承らう。身共は今宵囚人の平井權八、龍の口にて首ぶち落す役目なれど、あまりの雷ゆゑ……コリヤ／＼、家來ども、其方達は人足どもも諸共に、祖

師堂にて暫く雨やみ致してよからう。さりながら、持たせ參つた身が用意の刀はこれへ。まつた首刎ねらるゝ權八めが兩腰は、いまはしき死人の魂ひ、浪打ち際へ打捨て置け。

侍ひ　畏りました。

ト刀筒の白鞘を助太夫へ渡し、絲立に卷きし權八の兩腰を、よき所へ捨て置き、わや〳〵云うて入る
兩人殘り

助太　コリヤ、土手助、して、田糸方より、返事でも參つたか。

土手　イエ〳〵、お返事はござりませぬが、あなたの仰しやるには、娘の嫁入りの支度金、慥かにお受取り申しましたとの事。絹屋の手代と道連れになりまして聞きましたが、お娘御は、伯父御とやらが同道にて、あの日向藥師へ

ト話しかける。この時、雷きびしく鳴る。

そりや又鳴つて來た。こりや私しも祖師堂へ參りませう。アヽ、桑原〳〵。

ト耳をふさいでうろたへ入る。

助太　ハテ、臆病な下郎めぢや。

ト乘り物を見て

コリヤ、駕籠の内の權八。われも今鳴る雷が恐ろしいか。耳ふさがうにも、兩手叶はぬ縛り繩
アヽ、さぞ恐ろしう思はうが、コリヤヤイ、あの稻妻の光りより、劍の光りがわれが目先へ、今際の別れ。云ひ置く事があるなれば、武士の情に聞いて得させう。權八、云ひ置く事は、わりや無いか。

ト駕籠の窓へ差よりて白鞘を持つてキッと云ふ。此うち時の鐘を打込み、合ひ方になり、駕籠の簾上がる。權八顏を出し、思ひ入れあつて

權八　助太夫どの、忝きそのお尋ね。お主の爲に命を捨て、成敗うけるこの權八。この期に及んで申し置く事は毛頭ござらぬ。片時も早くこの頭、打落して、早くあの世へ

助太　オヽ、今の間にやつてくれう。コレ、われは云ふ事もあるまいが、この助太夫はナ、おのれがこの世に居る内に、云ひ聞かす事がある。コレ、この白刃をよく見て置け。

ト白鞘を抜き、弓張り提灯を持ち添へ、その灯にて白刃を權八が目先へ差出す。

權八　その刀にて私しの

助太　首打落すこの劍はナ、紛失と云ひ立て、大江家の越度となつた、村雨の劍だワ。

權八　ヤヽヽヽヽ。ナニそれが

ト思ひ入れ。

助太　どうで今にくたばる丁稚め、息のあるうち云ひ聞かして、無念がらすがまだしも腹癒せ。コリヤこの村雨の劍は、身がひん盜んで持つてゐるワ。それとも知らぬウツソリめ。劍の盜賊我れなりと、名乘つて出ておのれが死罪。まだ〳〵こんな事ぢやァない。神妙劍も此方で捲上げ、外々へ渡して置いた。これといふのも大江の家に、遺恨ある助太夫。うろたへ者の兵左衞門、闇討ちにぶッ放したも、斯くいふ本庄助太夫だワ。

權八　ヤヽヽヽヽ。アノ親人も其方が

ト無念の顏色。助太夫あざ笑つて

助太　どうだ、無念か、口惜しいか。大べら坊め。ぢたばたしても籠の鳥。その上今にその首も、ぶち落す身が役目。いはゞこの場で某が、縛つておいての返り討。こんな丈夫な仕事はないワ。ハヽヽヽヽヽ。大だわけめ。

ト笑ふ。權八無念の思ひ入れあつて

權八　さうとは知らず權八は、主人のお家大切と、身に引受けて科なき身を、我れと云ひ立て囚人の、今首の座に直りし時、現在親の仇敵、その助太夫が手にかゝり、首討たるゝとは、いかなる天の

御罰ぞや。思へば〳〵口惜しい。

トきつと思ひ入れ。

助太　もがくな〳〵。身動きしても縛り繩、兩手のきかぬが此方の見込み。盗みもせいで盗んだと、吐かした劍のこの村雨、その刃にてくたばるとは、よく〳〵因果な素丁稚め。今こそうぬが素頭を

ト白刃を提げ、駕籠より引出さんと扉を明けにかゝる。此うち雷はかすかに聞えゐたりしが、この途端きびしく鳴り出す。權八、顔を引く。助太夫、雷に恐れ、思はず猶豫の體。この時烈しく鳴り出し、片脇の松へ雷落ちたる體にて、松は裂けて煙硝火立つ。助太夫放心する。この途端、乘り物、仕掛けにてよき程に裂ける。權八思はず足を踏み出し、顔を上げ、空をキッと見て

權八　すりや、このあたりへ雷の、かゝりし音に彼れが悶絶。響きに倒れし囚人駕籠。さほどの雷に權八が、この身に過ちあらざるも、主人に代る忠死の某。天も哀れみ給ふのしるし。おのれ、敵の助太夫。

ト縛られしまゝキッとなる。助太夫心づき、よく〳〵見て

助太　やゝ、おのれ權八、駕籠を破つて逃げ行くか。

ト切つてかゝる。立廻りにて繩解ける。權八思ひ入れあつて

權八　さてこそ首尾よく緬拔けして

助太　ナニ、緬拔けしたか。うぬ、村雨の劍の鐔に

　　ト切つて行く。權八その手を取つて、白刃をよく〳〵透し見て

權八　ヤヽヽヽ、名作と思へども、刃の金色、正しく似せ物。こりや村雨の劍では

助太　何がどうした。

　　ト寄るを

權八　親の敵。

　　ト件の白鞘にて助太夫を切る。

助太　おのれ身共を……アレ、權八が駕籠を破つた。人足ども〳〵。

　　ト聲立てる。權八切りつける。助太夫逃げる。この時、家來を初め雲助殘らず、土手助、與五七もこの中へ交り出て來り、この體を見て

皆々　ヤア、囚人が逃げるワ〳〵。

　　ト立騷ぐ。權八切りちらして入る。この紛れに與五七うろたへ、狀箱を落して向うへ逃げて入る。土手助、三尺帶をしめ直しながら出て、あわてゝ帶を落し逃げて入る。これより波の音、凄き合ひ方。

權八、大わらはになり、大勢を切りちらしながら出て來り、雲助を段々に切つて捨てる。よき時分、助太夫心づき切りつける。これにて權八、肩先へ疵をうけたる思ひ入れにて、タヂ〳〵として助太夫を白鞘にて一刀に切つて捨てる。この時雲助二人、うしろより窺ひ、息杖にて權八が刀を持ちし腕をしたゝかに打つ。これにて白刃を落す。一人の雲助は手早く件の白鞘を取つて、浪間へ打込む。權八これにて刀を取らんと、浪打ち際へ駈ゆくはずみ、件の絲立の大小に踏みかけ、手早く取つて刀を拔き振り廻す。二人の雲助逃げて入る。權八追ひ駈けんとして、肩先の痛みへ思ひ入れあつて、件の大小を戴き、帶刀して、落ちてある三尺帶を取つて疵口を結ひ、身拵へしてゐる。向うより駕籠舁き二人四つ手駕籠へ四つ花菱の紋附いたる提灯を提げ、舁いて來り、この體を見て「ワツ」と云つて駕籠をよき所へ置き、逃げて入る。雲助一人出て、權八にかゝるを、一刀に切り倒す。この時、時の鐘を打込み、駕籠の垂れを上げ、長兵衞、出かゝつて窺ふ。權八見つけ、刀を取つて切りつける。立廻つて長兵衞、その手を捕へ、よく〳〵見て

長兵　お若いの。往來の旅人を、何とさつしやりますな。

トこれにて權八、よく〳〵見て

權八　心せくゆゑ思はぬ粗忽。旅人とあらば、サヽ、少しも早う

長兵　左樣なら、間違ひでござりまするか。
權八　いかにも左樣。
　　ト これにて刀の手を離す。權八納めんとして、肩の疵に惱む體を、よく〳〵見て
長兵　御前髮と申し、賤しからざるお若いの。見れば多くの雲助を、殺めさしつた樣子といひ、殊にあなたも肩先を
　　ト 窺ひ見る。
權八　少しなれどもかすり手うけ、急所ゆゑに思はぬ惱み。この場の樣子旅人には、拙者を盜賊、夜盜とも、思し召しませうが、いさゝか左樣な者ではござらぬ。主人の家のお爲にと、身に覺えなき囚人と、覺悟きはめてこの仕置場。太刀取り致す侍ひが、先年拙者親どもへ、遺恨ござつて闇討ちに、仕つたは我れなりと、高言吐くも某が、繩目に身動きならぬと心得、やむ事を得ぬ惡口ゆゑ、初めて聞きし父の仇。無念と存ぜし一心が、蟻の思ひも天道の、惠みござつて思はぬ繩拔け直さま敵のその者を、仕留めし樣子を見たる人足、さゝへこさへに是非なくも、切つて捨てしたる雲助ども。申さば敵の侍ひも、いらざる問はず語りゆゑ、雉子も啼かずば討たれまじ。拙者は思はぬ敵討。他生の緣のお旅人、仔細はあらまし

ト刀をしやんと納めて

右の始末でござりまする。

長兵　ハテサテ、それは勇ましいお話し。見ず知らずの私し、町人ながらも只今の、そのお物語りに飛び立つ喜び。それと申すも江戸育ち、五分でも跡へ引かぬ氣前の生れつき。併し僅かな手疵でも、夜寒烈しき磯端の、汐風寒きはその身の毒。隨分御大切になされませ。

權八　忝う存じまする。爰を立退き、手疵の療治。

長兵　御如才もござりますまいが、隨分ともに、物事密かに……して、あなた樣はいづれの御家中、又は御直の御方か。口外せねど御家名を

權八　御尤もなるそのお尋ね。さりながら、人の家名を聞く時は、我が名を語る本文ござれば

ト思ひ入れ。長兵衞こなしあつて

長兵　成る程、これは不調法。かゝる大事を眼前に、見聞きいたした町人の、問はれてその名はそんじよそれ、何の某なぞといふ、身分でもござりませぬ。只今申した江戸生れ、しかも足かけ三年あと、女房子連れて上方へ、金毘羅參りも有やうは、遊山半分あそこ爰、見物いたして暫くも、京大坂に足を留め、阿波座烏の聲きけば、故郷の事を思ひ出し、藪鶯の初音さへ、跡に聞きさし

急ぐ旅。朝寢もいつか相宿の、驛路の駒に起されて、日のお上りを東ぞと、手を合すたび有やうは、いづれも樣の大恩を、思ひ出して長の旅、泊り／＼の寢所も、お江戸の方へはこれ程も、足を向けても臥りませぬ。いづくも同じ鳥の音と、聞けど中々御贔屓の、國に生れた身の冥加。枯れたる木にも花川戸、金龍山と軒ならび、吉原雀、都鳥、隅田の流れを前に受け、吾妻男のはしくれと、噂に乘つたわしは、幡隨院長兵衞と申します、ごろつき上がりの、けちな野郎でござります。

權八　すりや其許が、江戸で名うての幡隨院

長兵　その長兵衞はわしが親仁サ。親に似ぬ子の無口、生眞面目、その眞面目なも氣が紛れ、女房小僧を跡に置き、菊野といつた藝子を連れ、道行半分で今度の下り。モシ、いづれも樣、成る程上方の女には、油斷がなりませぬ。

權八　音に聞へし達引とやら、男氣な長兵衞どのと聞くからは、願ひある身の某が、頼みて暫く便るには、石城よりも慥かな隱れ家。拙者は即ち因州の城主、大江の廣元家中にて、平井兵左衞門が悴同苗權八郎と申す者。命はさら／＼惜しまねど、尋ねる二品詮議し出し、主君の御手に戻すまでは、死ぬにも死なれぬ拙者が一命。この身の願ひ叶ふまで、長兵衞どの、只暫この儀、頼み入り

まする。

長兵　すりや、何と仰しやります。因州の御家中、平井兵左衛門樣の御子息とな……モシ、お氣遣ひなされまするな。私しが親どもは、兵左衛門樣の以前は若黨、八内と申す者。親仁は病死いたしたがあなたはいはゞお主筋、お世話いたさにやならぬ長兵衛。ハテサテ、不思議な所でお目見得を致しました。

權八　左樣なれば、其許の親は、身共が家に奉公せし、八内と申した小者。その忰なる長兵衛どの

長兵　いはゞ御家來、さりながら、隱まひまする上からは、目立たぬやうに私しが兄弟分と世間へ申し、きつとお隱まひ申しまする。必ずお氣遣ひなされまするな。

權八　その詞にて拙者も安堵。それにつけても其許へ、この身を頼む

ト思ひ入れあり。件の摺替へられし刀を取つて

即ちこれぞ權八が魂ひ。これをお預け申したい。

ト差出す、長兵衛思ひ入れあつて

長兵　お侍ひの魂ひを、預かりまするも異なものながら、左樣に仰しやる事なれば、町人ながらも男の魂ひ。これをあなたへ

ト差出す。兩人刀を取替へ、差して

權八　これにて貴公の魂ひと

長兵　權八樣の魂ひと、取替へて差す上からは、身に引請ける男の魂ひ。して、お尋ねのその品は

權八　お家の重寶神妙劍、今一品は村雨と名付けし劍、燒刃に雲の形あり、もし血を注ぐその時は、鷄塒を告ぐるといふ、希代の名作。

長兵　お手に入るまで、あなたはわしが

權八　それにて安堵。

長兵　サ、お連れ申して

ト駕籠の提灯を取り、その灯にて、與五七が落したる狀箱を見附け、拾ひ上げて

「江戸花川戸長兵衞どのへ、雪の下絹屋内、田糸」……こりや、心覺えの……モシ、讀んで見て下さりませ。

ト差出す。權八取つて、中より一通を出し、封を切り

權八　「わざ〱飛札を以て申し越し候ふ、兼ね〲御頼み置き候ふ弟御才次郎どの事、この方へ申し請けたく、末々は私し屋敷勤めのうち、主人の胤を懷胎いたし、產み落し候ふ娘お半へ、才次郎

どのを添はせ、絹屋の身代讓り申したく、左樣ござなく候ふ時は、絹屋の世嗣これなく候ふ。何卒この儀よろしくお聞濟み下されたく候ふ。めでたくかしく……江戸花川戸、長兵衛樣へ、絹屋內、田糸ことお絹」……こりやこれ女中の手跡。この文言では、屋敷勤めに儲けし娘御を

長兵 その文體で胸にギックリ。弟の才次郎と、云ひ號けはしたものゝ、その時とは相違して、今はお上のお尋ね者、因幡小僧と異名ある

權八 エ。

ト思ひ入れあつて、狀を長兵衛へ渡す。

長兵 サ、因幡の鳥取、あなたの本國。

權八 遠國者の某も、東の人へ兄弟の

長兵 因みを結ぶ弟分。

權八 實の弟御、因幡と異名。

長兵 その弟といひくるめ、絹屋の聟に、權八樣を

權八 そりや何方へ私しを

トこの時雲助一人窺ひゐて

雲助　さてこそ權八。

　トかゝるを、權八立廻つてキツと引附ける。

長兵　その相談は、ゆるりと旅宿で

雲助　うぬを

　トほぐれてかゝる。權八拔討ちにポンと切る。

長兵　天晴れ御手練。

權八　長兵衞どの

長兵　ゆるりと今宵

　ト雲助見事にかへる。權八刀を納める。木の頭。

兩人　話しませう。

　トきざみよろしく　ひやうし

幕

（作者　鶴屋　南北）

四建目

雪の下絹屋の場
六浦川の場

役名——平井權八。百姓、平井村の權八。絹屋叔父、幸左衛門。長兵衛子分、出ッ尻清兵衛。同、勘六。下男、土手助、乳母、お勝。家主、瀧右衛門。下男、與五七。絹屋後家、お絹。同娘、お半。

本舞臺、三間の間、正面戸棚、のれん口。呉服簞笥。軒に絹屋と染めたる紺の暖簾。上の方障子屋體いつもの所に門口。爰に瀧右衛門、家主の拵へにて、懸け硯にて仔細を書いてゐる。與五七、前幕の手代。お勝、乳母の拵へ、外に町役人三人、ワヤ〳〵云うてゐる。すべて雪の下絹屋の見世。通り神樂、てんつゝにて幕明く。

與五 これはお家主樣、何かとお世話でござります。

瀧右 イヤモウ、世話な分はいとはぬが、して、盗人に取られたといふ代物は、何々でござる。詳しく書出さねばなりませぬ。

與五 イエ〳〵、別して見世の代物、その外諸道具に至るまで、盗んで參つたと申す樣子も見えませぬ

て。

かつ　左様でござります。わたしや手水に起きて見ましたら、裏口の戸がこぢ放してござりましたから、それから俄に騷ぎ出しましたわいな。

瀧右　して、屋敷から下がつてゐられる、あのお絹どのは、御病氣と聞きましたが、このお方はどう致されたな。

與五　ハイ〳〵、あなたもこの間は、大きによろしうござりまする。ちよつと私しがお家主樣へ、御挨拶にお連れ申しませう。

ト障子の内へ入る。

瀧右　イヤ〳〵、構はつしやるな〳〵。お絹どのも早速快氣いたされて、めでたうござる。併し、コレコレお手代、盜人の入つた跡は、どうやら氣味の惡いものでござる。何によらず、この荒ましを代官所へ訴へねばならぬ。取落しの無いやうに、家内を調べさつしやるがよい。ナウ、組合ひの衆。

組一　左樣々々、隨分と念を入れて吟味さつしやい。

かつ　左樣いたしませう。外に失せ物とてもない景色でござります。

瀧右　それは仕合せな事でござるの。

（トかすめて通り神樂、皆々手傳ひ、戸棚、簞笥を改め、暖簾口より三味線、琴、その外、鏡臺、鏡など取出し

かつ　これはお半樣のお道具。まづザッと失せ物も見えませぬ。

瀧右　ハテ、氣のきいた盗人だの。

（ト合ひ方になり、障子屋體よりお絹、屋敷下がりの體、後ろ帶にて、病後の樣子、珠數を爪ぐり、與五七、鉢植ゑの白梅を持ち、出て來り

與五　モシ〳〵、お家主樣へ、今朝からのお禮を仰しやりませ。

きぬ　これはお家主樣でござりまするか。昨夜から不慮な儀が出來いたして、あなたを始め、御近所のお方へも、大きに御苦勞をかけましたわいな。

瀧右　イヤモウ、苦勞は家主の當り前でござるが、其許も去年から、御病氣のやうに承つたが、おつれもなう、マア〳〵、めでたうござりまする。

きぬ　有り難うござりまする。この程は隨分快うござりまする。去年以來、思ひがけなう病氣づきまして、どなた樣へも申し譯のないしだら。イヤモウ、この節は、誠に丈夫になりまして、この樣

子では、鬼とも組むやうに存じまするわいな。ホヽヽヽ。

瀧右　それはおめでたうござる。イヤ、昨夜の始末も、別して失せ物も無いとの事。イヤ、仕合せな儀でござる。して　伯父御の幸左衛門どのは、お留守でござるかな。

きぬ　左様でござります。伯父幸左衛門ことは、私しの娘のお半を連れまして、日向藥師様へ参りまして留守の間。歸りまして承りましたなら、さぞ驚きまするでござりませう。

瀧右　左様でござらうの……コレ〳〵、何に致せ、夜前からの始末を、荒まし書附に致して置きませう。

きぬ　ハイ〳〵、よろしうお頼み申します。

ト通り神樂、鳥追ひ唄になり、瀧右衛門と町役人立ちかゝり、懸け硯より巻紙を出し、一々書附にする體。この時向うよりお半、振り袖、やつしの上へ、龍田川の白あがりに染めたる空色地の浴衣を上張りにして、紅の手甲、脚絆、中拔き、女菅笠、竹の杖にて出る。幸左衛門、やつし半合羽、股引、手甲、旅形、一本差し。供の男、股引、旅姿にて、雨掛けを擔ぎ、菅笠を集め、荷へ附け出て來り、花道にて

はん　伯父様、さぞマアしんどうござんせうな。

幸左　イヤ〲、其方こそ、アヽ、草臥れた樣子ぢやわいの。
供男　お半樣は、お草臥れと見えまする。
幸左　さぞマア豆が出來たでおらう。わしさへ鬼打豆ほど出來たわいの。ハヽヽヽヽ。
　　　ト矢張り鳴り物にて、三人は門口へ來り
　　　サア、戻つたぞ〲。
與五　これは伯父御樣、お歸りでござりまするか。
かつ　お半樣も、さぞお草臥れでござりませう。して、お目は、ます〲ようござりまするか。
はん　乳母、喜んでたも。日にまし眼病はよいわいの。して、母さんの御病氣もよいかや。
きぬ　伯父御樣、ようマアお早うお歸りなされました。コレ、お半、案じやんな。わしやモウ、ほんまのものになりました。わしが事より、わが身の眼病、また起りはしまいかと、それのみ苦になつたわいの。
はん　イエ〲、わたしや又母さんの病氣が、苦勞になりましたわいな。
幸左　イヤモウ、親子といふものは、忝いもの。藥師樣へお參り申しても、肝心の眼病平癒のお禮は申さず、お絹どの丶病氣のよいやうにと、手を合すのも實の娘だけ、孝行な子ぢやわいの。ハヽ

ハ……これはしたり、お家主様でござりまするか。見ますれば、組合のお方まで、こりや家内に何事が出來ましたかいの。

瀧右　オヽ、幸左衛門どの、日向藥師へ參詣と聞きましたが、只今お歸りかな。コレ、案じさつしやる程の事でもござらぬが、夜前爰のお内へ、盜人が入りましたわいの。

幸左　エヽ。

ト恟りする

きぬ　イエ〳〵、お案じなされまするな。見世の代物、その外の物にも、紛失はござりませぬが、たつた一種、見えぬ物がござりますわいな。

幸左　エヽ。そんなら代物も失せずに。してマア、何が一種、見えぬぞいの〳〵。

きぬ　ハイ、お前のお留守に、以前の御主人、お半の爲には父親の、助太夫樣から、この子の嫁入りの入用にと、遣はされました百兩の金子、それを盜んで參つたと見えますわいな。

皆々　イヤア。アノ、百兩盜みましたか。

幸左　サア〳〵、そりや大事ぢやわいの。

はん　したが、今では縁の切れた父さんから、下さんしたわたしが支度金。どうでわたしや、嫁入りする

氣遣ひはなし。その金の失せたのが、丁度幸ひでございませうわいな。

幸左　これはしたり、この子とした事が、嫁入りは格別、百兩といふ金盗まれて、なんの幸ひな事があらうぞいの。

きぬ　イエ〳〵、左樣ではございませうが、代物に手もかけず、あの金ばかり取つて行くとは、娘が云やる通り、云はゞ仕合せ。その金を盗まれたを、惜しみもしやらぬこの子の樣子、流石は武家方の胤、爭はれぬものぢやわいの。

瀧右　モシ〳〵、お絹どのえ。紛失物は無いと存じたが、いはゞ大枚の百兩といふ金、こりや訴へにやなりませぬが、して、その金は、どこへしまつて置かつしやりました。

きぬ　ハイ、その金は、即ち柿色の絹財布、白拔きに矢筈の紋がございまする。わたしが小簞笥へしまうて置いたのでございます。

瀧右　アヽ、柿色の絹財布、白拔きに矢筈の紋……よし〳〵。その通り書出しました。

トよろしく書きしまふ。

幸左　それはそれでもよいが、もしや内外の者に、怪しい事はないか。

與五　ハイ〳〵、さう仰しやれば、ほんに、あの飯焚きの權八が、今朝から見えぬぞよ。

かつ　ほんに、權八どのが今朝から見えませぬが、モシ、お絹様、あなた、お使ひにでも

きぬ　イエ〳〵、わしや使ひにやつた覺えはないわいの。

與五　イヤア。そんならあの權八めが、取逃げ、駈落ちではないかな。

幸左　マア〳〵、彼奴の道具を改めて見るがよい。

瀧右　さうさつしやい〳〵。

與五　男部屋へ來て下さりませ。

ト町役人皆々與五七に附いて、ワヤ〳〵奥へ入るとて、與五七、そこにある梅の鉢を蹴返して入る。お絹驚き

きぬ　これはしたり、わしが大事のこの梅を、あのマア與五七とした事が

ト取直す。

幸左　イヤモウ、其方は百兩失せたは驚かいで、日頃から大事にしやるその鉢植ゑ。

きぬ　イエ、わたしや何より、これが大切でござりまする。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト珠數を爪ぐる。この時、奥よりワヤ〳〵云うて、件の人數、天德寺を荒繩にて括りたるを、皆々寄つて吊つて來り

與五　モシ〳〵、幸左衛門様、物置の片隅に、此やうな物が見えまするから、引出して見ましたら、ム〳〵と動きまするワ。

はん　エヽ、氣味の悪い。

ト飛びのいてお絹に縋る。

きぬ　そりや人ぢやないかいな。

瀧右　滅多に解いたら飛び出しませうぞや。

幸左　と云うて、見ずには置かれぬ。コリヤ、與五七、皆の衆も、逃がさぬやうに明けるがよい。

與五　左様いたしませう。お前方へお頼み申します。

皆々　合點ぢや〳〵。逃がすな〳〵。

ト捨ぜりふにて取巻き、棒などを持つて件の繩を解き、天徳寺をめぐる。中に權八（前幕のとは別の權八）やつし、飯焚き男の拵へにて、手拭にて口を割られ、荒繩にて縛られたる體にて、マヂ〳〵してゐる。

幸左　ヤア、縛られてゐるは、權八ぢやないか。

瀧右　左様々々、お内の飯焚き

皆々　權八だ〱。

　ト立ちかゝり、繩を解く。

幸左　コレ〱、酒なりと一杯飮ましてやらつしやい。

與五　畏りました。

　ト茶碗を持ちゆき

　コレ〱、權八、氣は慥かか〱。

　ト皆々介抱する。百姓の權八、思ひ入れあつて

百權　アイ〱、隨分氣は慥かでござります……アヽ、恐ろしい目にあひましたぞ。

幸左　コレ、權八、そちや誰に縛られたのぢや。

百權　ハイ、誰だやら、面は見ませぬが、今朝方の事でござりました。お座敷の方が、ミチ〱申しますから、何心なく起きて出ましたら、頰かむりをした奴等が二三人、そこらを探して居りますから、うぬ盜人めと聲をかけましたら、何がなしにわしが口へ、手拭をはませまして、此やうに縛り上げ、物置へぶち込んで逃げました。聲を立てやうにも、呼ばうにも、天德寺へくるまれて、氣ばかり揉んで居りましたが、さぞお見世の代物を、澤山に盜んでうせたでござりませうな。

瀧右　イヤ〳〵、代物には別條ないが、その盗人も、大方この頃お尋ねの、因幡小僧の同類であらうわいの。さればこそ代物には目もかけず、お絹どのゝ簞笥にあつた

きぬ　わが身も見てゐやつたであらうが、助太夫様のお使ひが、持つてござつた百兩のお金、財布の儘に取つて行つたわいの。

百權　エヽ、なんでござりまするか、お屋敷から來やした金ばかり、持つて參りましたか……そいつは怪しいわえ。こいつ大概、勝手を知つた奴と見えますわえ。

はん　さうであらうわいの。とりわけわたしが嫁入りの、支度金と知つて盗んでたもるとは、もう〳〵この上わたしに、男を持つなと神々様の、お指圖でがなござんせう。モシ、母さん、わたしやモウ〳〵、殿御は一生持たぬ程に、さう心得て下さんせいなア。

幸左　これはしたり、男を持たいでよいものか。去年病死した、わしが兄の長右衛門どの、内儀は死ぬる、子というては無し。絹屋の跡が絶えるゆゑ、屋敷へ奉公に行つてゐられた、長右衛門の娘のお絹どの、娘のお半を連れて、離縁して戻りを幸ひ、お半を絹屋の娘にして、聟取つて家繼がさうと、伯父のわしが後見してゐるも、先祖の家を立てようと、思ふからの事ぢやわいの。

きぬ　左様でござります。わたしもその心で、この子にいろ〳〵勸めましても、兎角に男は持たぬとの

我がまゝ、と云うて捨てゝも置かれませぬゆゑ、方々へ聟の事、お頼み申しましたところ、江戸の花川戸、長兵衛様といふお方の弟御、才次郎さんといふが、それは〳〵よい男ぢやといふ事。そのお方を聟に貰ふといふ、約束も致したところ、長兵衛さんは去年急に、上方へお登り。それなりにして置きましたところ、この間聞けばその長兵衛様が、江戸への歸りがけ、湯本の福住に逗留と聞いたゆゑ、與五七に手紙を渡して、箱根まで使ひにやつたその道でな

與五　イヤモウ、お内を出ますると俄の雷り。何でも急ぎのお使ひゆゑ、藤澤までも行かうと存じ、その大雷をもいとはずに、片瀬から龍の口へ通ると、誠に眞の闇。拔いた切つたと大騷ぎ。命からがら逃げるとて、その狀箱を取落し、申し譯なく歸つたる、晩が卽ちお内の盜人。誠に私し、不調法を致しました。

百權　エヽ、左樣ならお半樣へ、江戸から聟樣がござりますかえ。

きぬ　サア、その聟を、否ぢや〳〵と云やるには

ト思ひ入れ。

はん　イエ〳〵、何も譯はござんせぬが、お前も知らしやんす通り、幼ない内から眼の性の惡いわたし。見詰めてしやる事なぞは、必ず沙汰なしと、お醫者さんが仰しやつて、琴三味線の稽古は格別、

手習ひは眼の力のいるものぢや、もそつと直して稽古さす、まだこの分ではさせられぬと、十四五になるまでも、手習ひをさせなさんせぬばかりに、侍ひの娘が、いろは書く事も讀む事も、出來ぬといふ、恥かしいわたしゆゑ、それで男は持ちませぬ。母さん、さう思つて下さんせいな。

瀧右 アヽ、そんなら娘御は、アノ祐筆と思うたら、無筆とは、ハテ、玉に疵でござるの。

はん 恥かしうござりますわいなア。

ト顏を隱す。

百權 なにサ、女は無筆でも隨分濟みやす。その代りお前は……コレ〳〵、爰にある琴、三味線はきついものだ。その藝のある娘を、否だといふ聟なら、よしになさい。わしは又、平井村の權八といつて百姓だが、無筆でも藝さへあれば女房に持ちます。モシ、お半さん、お前、わたしを聟にはどうだえ。

ト無駄を云ふ。お絹これを聞いて

きぬ 平井村の權八と、その名も同じ戀人の、名のみ聞いても懷かしき。いつぞや都を下る節、お半を連れし旅の空、石部の宿のかり枕、家名に平井

はん わたしも泊りで見染めた殿御。

きぬ　ヤ。

ト思ひ入れ。百姓權八寄り添ひ

百權　實體者だ。わしはどうだえ。

はん　エ、、知らぬわいの。

ト唄になり、ツイと奥へ入る。

かつ　モシ〳〵、お半樣、モシ

ト同じく追ひかけて入る。

百權　オヤ、おへないお轉婆だ。

與五　コレ〳〵權八、てまへ、ひもじくはないか。

百權　縛られてゐる内は夢中だつたが、俄に腹が來やした。ドリヤ、飯にあはうか。

ト迫り神樂、鳥追ひ唄になり、百姓權八、手足を撫り〳〵奥へ入る。向うより勘六、やつし下男、旅がけの形、草履にて、畧が鎌を咬へし六枚張り程の凧を持ち、子供と喧嘩をしながら出る。清兵衞、半合羽、一本差し、やつしの形、花川戶子分の拵へ、旅がけ逗留の體にて、藤倉草履、勘六をなだめなだめ出る。跡より長太、その外子供大勢、楮拾ひなぞ出て、花道にて

長太　エヽ、間抜けめ、大きな態をして、子供の凧を取りやァがつて、返しやァがれ〳〵。

ト泣き聲にて喚く。

勘六　なんだ、間抜けだ。餓鬼の癖に。そのやうな悪態を吐く餓鬼だに依つて、この累凧は返さぬ。踏み破つてしまふワ。

長太　エヽ、返しやァがれ〳〵。

清兵　コレサ〳〵、おとなそばへはしないものだ。コレ、勘公、てめえもいゝ加減にぢらしたら、凧は返してやるがいゝ。

勘六　それだといつて、あんまり口の憎い餓鬼だ。

清兵　ハテ、子供の事だワ。

ト件の凧を取つて

コレ〳〵、小僧や、おれが凧を貰つてやるから、その代り、この男が通つても、悪態を吐くなよ。

ト凧を長太に渡す。

長太　こりやァ伯父さんお忝け。エヽ、あちらの間抜けめ、覺えてゐろよ。

勘六　ナニ、どうしたと。

子供　間抜け野郎やァい。

ト逸散に逃げて入る。清兵衛・勘六、矢張り鳴り物、捨ぜりふにて門口へ来り

清兵　アイ、ちつとお頼み申しやせう。

與五　ハイ〳〵、どれからござりました。

清兵　わつちは江戸の花川戸、幡隨院長兵衛が、子分の者でござりやすが、ちつとお話しがあつて參りやした。

與五　エヽ、お前はアノ花川戸の……モシ〳〵、長兵衛様からお人が參りました。

トお絹へ思ひ入れ。

幸左　それは幸ひ。マア〳〵此方へ、お通りなされませ。

二人　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト内へ入る。

きぬ　エヽ、お前様でござりまするか。その長兵衛様も、湯木に御逗留と承り、この間手前方より、使ひをあげましたなれども、それとても間違ひまして

清兵　エヽ、左様でござりまするか。一昨年上られまして、よう〳〵この春歸りがけ

勘六　湯本にもゐられましたが、この間はこの鎌倉の大町に、逗留してゐられまする。

清兵　ハイ、わしはお前、花川戸の、子分と申すも不作法だが、出ッ尻清兵衛と申す者でござりまする。長兵衛申しまするには、先達てあなたの娘御と弟の才次郎こと、縁談の事をお約束申しまして、その後上京仕りました。この節戻りがけ、才次郎も同道いたして參つて居りまするが、いよいよ聟に取つて下さるか、お聞き申して來いと、申しつけて寄越しました。用事と申すは、この始末でござります。

きぬ　エヽ、左樣かいなア。今も今とて、そのお噂を申したところ

幸左　此方は聟にお貰ひ申さうと、待つて居る最中でござりまする。

清兵　左樣なれば、早速お話しの出來ると申すものでござりまする。

勘六　左樣なら斯う致しませう。わしらは直に旅宿へ行つて、才次郎さんを同道して來ようではないかきぬ　左樣なされませ。娘が何と申しませうが、先樣から此やうに、お使ひまで下さる上は、こりやいつそ今日、取極めを致しませうわいな。

幸左　さうとも〳〵、思ひ立つ日が吉日と、直に聟樣をお連れなされませ。

清兵　イヤモウ、さう物事が極まれば、わしらも喜びます。コレ、勘六や、兄貴を棒鼻に待たせて置い

た。ちよつと連れて來よう。

勘六　さうしなさい。わしらも行つて……モシ、聟どのは、今直に連れて來やす。

きぬ　左樣なされませ。此方もその支度にかゝりますぞえ。

二人　おかゝりなさい。直でござりやす……サア〳〵、連れ立つて來よう。

ト通り神樂になり、兩人足早に引返して入る。

幸左　コレ〳〵、お絹どの、あのやうに云つてやつても、肝心の娘が、承知しませうかいの。

きぬ　わたしも左樣存じまする。何に致せ、聟どのを貰うておいたら、ひよつと又心が變らうと存じついて、あのやうに急にと申しましたわいなア。

幸左　成る程、それもさうぢやわいの。コレ、其方はあの子の小袖を、見つくらうて下され。

きぬ　アイ〳〵、心得ましたわいな。わたしもわざと、髮などちよつと撫でつけて

瀧右　家主も、參つたこそ幸ひ、吸ひ物の支度でもして進ぜませう。

町役　わしらも手傳ひませう〳〵。

きぬ　よろしうお賴み申しまする。

與五　大家樣、サア、お出でなされませ。

ト鳥追ひ唄、通り神樂にて、お絹、梅の鉢を持つて上の障子屋體へ入る。殘りの人數皆々、わや〳〵云うて暖簾口へ入る。幸左衞門殘つて見世を方附ける。矢張り件の鳴り物にて、向うより清兵衞、先に立ち、平井權八、留め袖、羽織衣裳、袴、町人の拵へにて、一本差し、件の刀を風呂敷に包み、勘六持つて、その外に若い者二人、鯣、鰹節を白木の臺へ載せ、柳樽二つ擔ぎ、附いて出て來り

清兵　向うでも大急ぎだから、晝の內だというて大事ないわな。

權八　それぢやというて、明るい內の祝言は、どうやら初々しうて

勘六　ハテ、お前、夜よりは聟入りは晝の事サ。

ト捨ぜりふにて門口へ來り

清兵　ハイ、お賴み申しませう。只今の聟入りでございます。お好みゆゑ、早く參りやした。

幸左　ヤア〳〵、もうござりましたか。コレ〳〵、聟どのが見えられたぞや。サア〳〵、皆來てくれ、皆來てくれ。コリヤモウ、盆も正月も一時になつて來た。

トうろたへて騷ぐ。奧より與五七、瀧右衞門、銚子杯臺、喰つみ臺など持ち、うろたへて出て來り

瀧右　モシ〳〵、もう來ましたか。それでは蛤の吸ひ物も間に合はぬ。昆布鱈で間に合はせませう。

與五　冷酒も丁度屠蘇の酒、喰つみを島臺がはり。肴は差づめ、數の子でようござりませうか。

幸左　大事ないく。急な事ぢやく。マアく、何でもよいく……サ、聟様々々、お通りなされませく。

清兵　左様なら御免なされませ。

ト内へ入り

コレく、お前方は、持つて來た物を置いて歸りなさい。

若者　アイく。

ト内へ並べる

勘六　コレサお前、歸つちやァ惡からう。

清兵　それく、もうよいから開きなさい。大きに御苦勞。

ト若い者向うへ入る。三人はよき所へ住ふ。幸左衞門出迎へ

幸左　これはどなたも、お早うございました。天氣もようて、此やうなめでたい事はございませぬ。

清兵　左樣でございます。私しも、お袴でも着けて參るところ、旅がけでございますれば、例の通り合羽のまゝで、お執持ち仕りまする。

勘六　成る程、祝言に合羽とは、かつぱ六十四と申しますから、かつぱと伏して、エヽ、おめでたうご

ざりまする。

ト辭儀をする。

清兵　イヤモウ、致しやうもござりませうが、只今申す通り、私しどもは明日をも知れぬ旅人の事ゆゑ、わざと心ばかりでござります。これは卽ち聟樣の、お土産でござりまする。

ト持參の品を並べる。

幸左　これは〳〵、御叮嚀な、めでたう受納いたすでござりませう。して、聟どのゝ才次郎どのはな。

清兵　ハイ〳〵。卽ちこれに居られますお若衆が、親方長兵衞どのゝ弟、才次郎どのでござりまする。

權八　ハイ〳〵、私しことは平非……アイヤ、才次郎とやら申しまする、長兵衞どのゝ弟さうにござりまする。この上ともに、よろしうお賴み申しまする。

幸左　イヤモウ、此方の娘も、未だ年は參らず、さぞ御面倒勝にござりませう。私しはこの家の伯父、幸左衞門と申す者。この上ながら聟樣には、わしに相談さつしやるがよい。

權八　有り難うござります。至つて不調法な私し、引廻しをお願ひ申しまする。

幸左　承知いたした……コレ〳〵、乳母よ、肝心の娘を連れて來ぬかい。

瀧右　左樣々々。コレ〳〵、嫁御を連れてござらぬか〳〵。

與五　お勝どの〳〵。

ト呼び立てる。奥にて

かつ　アイ〳〵、只今お連れ申しまする。サア〳〵、ちやつとお出でなされませ。

ト合ひ方になり、お半嫌がつてピンシヤンするを、お勝、無理に手を引つ張つて出て來り

ハイ〳〵、伯父御様、お半様をお連れ申しましたわいなア。お絹様はお髪を直してゞございまする。只今お出でなされまするわいなア。

幸左　オヽ、お半、爰へ來や〳〵。コレ〳〵、兼ね〴〵我が身にも話して置いた、江戸花川戸の長兵衛どのゝ弟御、才次郎どのといふ、其方の聟どのぢや程に、そこへ出て、サヽ、挨拶をしや〳〵。

はん　これはしたり、お前までが同じやうに。あれ程わたしが斷わり云うて居りますぢやござんせぬか。わたしやナ、願がけがあるゆゑに、殿御持つ事は否でござりまする。お前さんも、折角聟入りなさんしたがナ、どうぞ直にお歸りなされて下さりませ。モウ〳〵、わたしや祝言する事は、否でござりまするわいなア。

瀧右　イヤア、嫁御がとんだ事を云ひ出さしつたわえ。

幸左　コレ〳〵、お半、今更其やうな事云うてはナ

はん　それぢやというて、一字も書かぬ恥かしい、其やうなヤア女子があらうかいな。それぢやによつて願がけして、男は持たぬわいな。

ト　これにて皆々氣の毒なる思ひ入れ。權八こなしあつて

權八　コレ〳〵、二人の衆〳〵、今開かつしやる通りの、嫁御の、挨拶ぢやほどに、ちつとも早う爰を、歸らうではござらぬかいの。

勘六　ナニお前、歸る事はない、落附いてゐなさい〳〵。

清兵　さうだ〳〵。聟に來て、向うの嫁が故障を云はうが、奉公人の世話ぢやアあるまいし、左樣なら連れて參りませうと、歸るやうな男ぢやアないぞ。肝煎りや桂庵ぢやアないぞ。ガウ、伯父さんとやら、臍を極めて、挨拶さつしやい〳〵。

幸左　サア、尤もでござる〳〵。何を云うても、年のゆかぬで子供同然。

ト　氣の毒なる思ひ入れ。

權八　アヽ、モシ〳〵、伯父御樣とやら、必ず御心配には及びませぬ。嫁御の氣に入らぬ私し、それをウカ〳〵お世話になつても居られますまい。もう私しは、お暇仕りませう。

清兵　これサ〳〵、なんぼお前ばかり歸らうと云つても、連れて歸つては頭の前へ、わしらの云ひ譯が

ないわな。

幸左　御尤も〳〵……コレ〳〵、お半、今のやうに云うては、聟どのへわしが立たぬわいの。マア〳〵何分祝言は、めでたう、やらずばなりませぬ。ハテ、聟樣へ云ひ譯がないわいの。

はん　其やうにお前が、御苦勞に思ひなさんすなら、ようござんす、わたしがその聟さんとやらに逢うて、よいやうに申し譯しやんせうわいなア。

幸左　それぢやというて、折角の祝言が、その儘に濟まうと思やるかいの……それにしても、このお絹どのは、なぜに爰へ來ぬのぢや。

かつ　アイ、今お髮を直して

幸左　ちよつと呼んでおぢやいの。

ト急いて云ふ。

かつ　アイ〳〵。

ト駈けて奧へ入る。

はん　イヽエイナア、母さんには常から願うて置いた事ゆゑ、男持たぬは承知でござんす。ちよつとわたしが先のお方へ逢うて、祝言せぬ申し譯

幸左　ハテ、それぢやというて
はん　ツイお斷わり申すのぢやわいなア。

ト搔きのけて手をつかへ

ハイ／＼、折角お出でなされましたに、祝言を致さぬと申して居りまするは、誠にわたしが申す事でござりまする。必す伯父さんが申しまする事ではござりませぬ。わたしが大願立てゝの事ゆゑに、どうも殿御は持たれませぬ。この譯をお聞分けなされまして、嫁をお取りなされまする事は、どうぞ御免なされて下さりませいな。

トもぢ／＼と云ひ譯する。權八、氣の毒なる體にて

權八　成る程、お娘御が其やうに、譯を仰しやるを、聞分けぬ私しでもござりませぬ。其やうに思うてござりまする程ならば、ナウ、二人の衆

ト挨拶するうち、お半、權八を見て、愕りしたる樣子にて、いろ／＼思ひ入れ。清兵衞・勘六は一圓不承知にて

清兵　イエ／＼、それでも祝言の變替へをくつちやア、わしらはマア歸れない羽目だよ。
勘六　さうサ／＼、親方へ歸つて、そんな話しがなるものか。

二人　おいらは不承知だ〳〵。

與五　これは困つたものだ。

幸左　ハテサテ氣の毒な。どうしたらよからうやら

ト皆々てんでに心遣ひ。此うちお半、權八を、いろ〳〵見る事あつて

はん　コレイナア、伯父さん、アノ、わたしが所へ聟にお出でなさんしたは、お三人の内で、あのお若衆さんかえ。

幸左　おいなう。あのお若衆樣が聟にござつたを、その儘に歸すといふは、アヽ氣の毒な

はん　エヽ、そんならあのお若衆が、ほんまにわたしの殿御かいな。

幸左　わが身の聟どのぢやわいの。

はん　それ〳〵、いつぞや伊勢路で逢うたは、あのお方ぢや〳〵。もしいナ、伯父さん、男を持つぞえ。祝言いたしまする……ほんに、ぬしさんぢや。あのお方ぢや〳〵。

ト無性に喜ぶ思ひ入れ。皆々、合點のゆかぬ思ひ入れにて

瀧右　イヤア、俄に祝言しようと、云はるゝぞよ〳〵。

淸兵　ナニ、不承知の娘が、祝言するといふのか。

幸左 コレ〳〵、お半〳〵、今までの詞には相違して、アノ其方、男を持つても大事ないかや。

はん アイ、あのお方なら、いつぞや下りの道中にて……あなたぢや〳〵。サア〳〵、祝言しやんせう
しやんせう。アイ〳〵、お前、ようお出でなされました。

ト權八に向ひ、手を突く。

權八 ハイ〳〵。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。お半、無性に喜び、權八に辭儀をする。皆々合點のゆかぬ思ひ入れにて

清兵 アヽ、俄に風が變つて來たな。今まで否だと強情な娘が、閻雲に手を突くが、こりやァ狂人ぢや
アないかの。

勘六 狂人の聟にして、置いてもゆかれまい。

清兵 こりやア、どの道、ぬしを連れて歸つてからの話しだ……サア、才次郎さん、マア、一旦歸つて
の相談にしなさい。

權八 どうなりと宜しう賴みまする。

清兵 サア、來なさい〳〵……こりやァおやかましうござりやした。連れて歸りやす。

ト權八を連れて歸らうとする。お半縋つて

はん　アモシ、なぜにお歸りなさんす。わたしや疾から祝言いたす心で居りまするに、それにお前さん、お歸りなさんすとは、胴慾ななされ方。わたしも一緒に連れて行つて下さんせいなア。

權八　これはしたり、お前さへ祝言さへして下されば、聟に參つた私しは、隨分得心でござりまする。

はん　お前さんが得心なら、わたしも得心でござりまする。

幸左　お半が得心なれば、伯父は猶更得心でござりまする。

瀧右　家主も得心でござる。

與五　見世の者も得心でござります。

清兵　送つて來た私しらも、得心でござりまする。

幸左　斯うして見ては、不得心な者は一人もござらぬ。早う杯さしてしまひませうが、母親のお絹どのを、呼んでからの事にしませう。

清兵　マア、何にしろ、娘御の方が極まつたら、一つ〆めるがよいぞえ。

瀧右　それがよい〳〵。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。この音を聞き、障子屋體よりお絹、小袖を着替へ、油手を拭きながら、お勝附いて出て

來り

きぬ　これはしたり、大きに失禮いたしました。ちよつと髮を撫で上げてと存じましたが、この間は病氣ゆゑ、それなりに致して置きましたゆゑ、誠に頭が山の神同然な。ホヽヽヽ、これはあなた方、何かとお世話樣でござります。

清兵　イヤモウ、どうか娘御が、祝言を斷ち物のやうに云はれたが、早速得心で、マア、おめでたうござります。

幸左　この伯父も、大きに案じました。

きぬ　娘も兎や角云やつたが、得心しやつて、マア〱、めでたうござるわいの。

はん　イエ〱、わたしやあのお方さんなら、疾から願うて……アイ、隨分得心でござりまする。

きぬ　それは安堵ぢやわいの。して、聟の才次郎と申すお方は

權八　ハイ、即ち私しでござりまする。あなたがお半どのゝ母御でござりまするか。お初にお目にかゝりました。何事も不調法なる私し、お目かけられて下さりませ。

きぬ　その御挨拶は此方からも、お賴み申す娘が事。何を申すも年端のゆかぬ、子供も同然、この上ともに、お前よろしう

ト思ひ入れあつて、權八を見て

ヤ、お前は

權八　いつぞや石部の宿屋にて

はん　アイ、その時わたしや

ト我が事と心得、恥かしき思ひ入れ。

きぬ　逢うたあなたはアノ平井

權八　アモシ、平井とは母樣の、平井きらひは祝言の、そりや忌み詞でござりませう。私しはお娘御と云ひ號け致し置いたる、長兵衞が弟、才次郎と申す者。嫁御の母御がいつぞやの、石部の宿の……

ト云はうとする。

……サ、そのお方であらうとは

きぬ　わたしもあの時お別れ申し、今の今まで忘られず、病ひの床もありやうは

ト思ひ入れあつて

サ、一人の娘の聟どのが、よもやその夜のお前とは

ト恟りしたる思ひ入れ。

權八 思ひがけない今宵の聟入り。
きぬ 娘が聟に、ゆかしいお前が
權八 アモシ……日柄もようて
きぬ めでたい祝言、長うこの家に
權八 ハイ、お目かけられて下さりませ。
ト兩人思ひ入れあつて納まる。お半嬉しきこなしにて
はん そんならわたしや、ほんまにあなたと、祝言いたすのかいなア。
きぬ オヽ、云ひ號けの男ぢやもの、天下晴れて、わが身の連添ふ
はん 殿御かいなア。
きぬ マア、殿御であらうわいの。
ト權八へ目を付けて思ひ入れ。
はん エヽ、嬉しうござんす。
トこなし
幸左 サア、物事が極まれば、直にお半と才次郎どの、早う杯せざなるまい。

清兵　左樣々々、わしらもその杯を見届けて、歸り……イヤ、開きたうござります。

幸左　そんなら早速杯を、お半が始めて、あの聟どのへ

瀧右　又もや御意の變らぬうち

與五　お半樣から聟樣へ

かつ　お酌はわたしが致しませう。

ト銚子、杯をよき所へ持ち行く。

はん　アノ、わたしが始めて、憚りながら

權八　然らば頂戴仕りませう。

幸左　これは堅いワ……ドリヤ、めでたう謠うて……〽四海浪靜かにて、國も納まる時津風、遠く鳴尾の沖過ぎて、早住の江に着きにけり〳〵。

ト此うちお半、杯を取上げ、お勝酌して、權八飮んで直に納まる。此うちお絹、濟まぬ思ひ入れ。

皆々　エヽ、おめでたうござります。

幸左　サア〳〵、めでたいワノ〳〵。マア〳〵、假にも杯を濟ませて置けば、これから日柄を見て、聟どのを長右衞門と改名させ、その上で表向きの祝言、披露目もせにやならぬわいの。

清兵　アヽ、モシ〳〵、長右衛門と改名もよいが、若衆のまゝで長右衛門とは、どうであらうの。

幸左　こりや御尤も。コレ〳〵、お絹どの。幸ひ日柄もよい事なり、とても事に聟どのに、元服させては、どうでござらう。

権八　エ、すりやアノ、私しが前ぶりを

きぬ　どうで近々男なりする聟どのゝ、殊にはどうやら

権八　エ

ト思ひ入れ。

きぬ　その前ぶりを、めでたうわしが

権八　元服させて下さるとは、此方とても姿を變へるに……憚りながら姑御樣

きぬ　せめて元服さしやんしたら、姿も變りありやうは、わたしが心も變つてならば

ト思ひ入れ。

はん　お前のお心いつまでも、聟、姑と變らぬやうに

きぬ　それをわたしは、どうぞ心の

権八　かはる姑

はん　かはらぬ女夫。

幸左　送つてござつたお二人は

清勘　今の始末を親方へ

瀧右　お開きなされてこの樣子

清勘　話して來やせう。

幸左　ようござりました。

ト通り神樂になり、淸兵衞と勘六は向うへ入る。與五七、瀧右衞門、お勝は、鯣、鰹節、柳樽等を持つて奥へ入る。四人殘つて

權八　イヤモウ、思ひがけもなう、聟入り致しました私し、ありやうは町人の身の及びなき、武士にもなりたき身の願ひ。それゆゑ斯樣に大小までも、所持いたして居ります。

ト持ち來りし大小を見せる。

幸左　それはお若いお方には、よいお心掛けでござりまする。ありやうはこのお半も、實の親御は侍ひの、その娘ではござれども、生れ落ると眼の性わるく、それゆゑ手習ひとてもさせられず、假名遣ひさへ不自由なお半。イヤ、その代りには琴、三味線、遊藝はきつと敎へて置きました。

はん　これはしたり、叔父さんの又其やうな事云うて。これがどうして云ひ立に

幸左　ハテ、其やうに卑下しても、母が教へた十三の、糸の調べは覺えても、十四十五になるまでも、
　眼にさはるゆゑ、いろはさへ

はん　覺えぬわたし、不拙な、もの書かぬ身の云ひ譯に

幸左　覺えた藝の爪琴も、夫と定まる聟どのに、聽かする琴の組歌も

權八　初かうむりも憚りながら

きぬ　男なりすりや娘が喜び、祝うて琴の一曲も

はん　調ぶる手さへ跡や先、狂ふ調子も、思ふ殿御へ

ト權八を見て思ひ入れ。

幸左　床杯の、我れらは支度を

きぬ　エヽ。

ト腹の立つ思ひ入れ。

幸左　ハテ、仰山な

 トお絹へ目を附ける。

きぬ　ドリヤ、祝うて……かゝりませうか。

ト權八を見て思ひ入れ。お半、いそ〳〵と琴にかゝる。これより地へ取り。獨吟にて琴唄。幸左衛門思ひ入れあつて奥へ入る。お絹、ありあふ鏡臺を直し、手を打つ。奥よりお勝出てくる。お絹、湯を汲んで來いと仕方する。お勝心得、奥へ入る。權八は此うち袴を取り、手づから疊む。お絹は剃刀を砥石へかけ、合せる。○奥よりお勝、銅盥へ湯を汲み持ち出て來り、權八の前へ置いて入る。權八思ひ入れあつて、前髪を湯にてしめす。お絹、權八が後へ立ちかゝつて、前髪へ剃刀を當てんとして、前の盥へうつる面影を見て思ひ入れ。この唄のうち、門口の路地より百姓權八、草箒と埃取りを持ち、出て來り、門口を掃いてゐる。爰にて唄一くさり切れる。

きぬ　月は一つ、影は二つの盥のうち、月の一つは其方の面

權八　影の二つは母、娘。

はん　その內ひよつと、もしわたしに、赤兒が出來たら母さんの

きぬ　その喜びは、心の悲しみ。

はん　そりや又なんで

きぬ　なんでとは、これが悲しう

ト思ひ入れ。權八制して

權八　これはしたり、姑御樣、今悲しいと仰しやるは、あの子の產ませた初孫の、せわいわやくを思し召し、まだ孫も見ぬ前方に

きぬ　取分け子より可愛きは、孫ぞと世上の譬へには、云へどどうしてそれがまア

權八　ハテマア、その時はお心も、ちつとは、晴るゝ

きぬ　なんの晴れやう。曇り勝なる

はん　エ。

きぬ　浮世ぢやわいの。

ト顏を外けて思ひ入れ。また唄になり、お半、琴にかゝる。お絹、剃刀をあてる。この時仕掛けにて權八の前髮落ちて、元服の體。これにて琴唄一ぱいに切れる。お半見て

はん　ほんに似合うたお顏ばせ。

ト權八の側へ寄る。

きぬ　似合うた面を

ト鏡を取つて權八に差出す。權八取上げる。この鏡へ三人の顏うつりし思ひ入れにて

權八　鏡へうつりし面は三人。
きぬ　初うかむりの面影は、變れど變らぬ聟どのと、似合ひ相應、娘のお半。
はん　そんならわたしと似合ひの女夫。
權八　二人が仲へ姑の
きぬ　年たけし身のその上に、心も心ならざれば。醜き影に我れながら
はん　なんのあなたが、さほどまで
きぬ　イヽヤ、面影やつれねど、胸の曇りに我が心、鏡にうつるものならば
權八　さこそは影のみにくからん。
きぬ　みにくい母が
權八　イヽヤ、あなたは變らぬお姿。
きぬ　なんの、どうして

ト鏡を見んとする。權八、鏡を取つて、前なる火鉢へ打ちつける。これにて二つに割れて飛び散る。

半絹　これは。
權八　破鏡再び照さず。覆水盆に

半絹　エ。

ト兩方よりちよつと寄るを、權八、銅盥を打かへし

權八　返らぬためし。

トこれにて兩人思ひ入れあつて

きぬ　水も戻らず、鏡も二つ

はん　われても末にあふとのしるし。エヽ、嬉しうござんす。

きぬ　それ聞くさへも

トむつとする。權八隔てる。

權八　母者人。

きぬ　聟どの

はん　こちの人。

トこの時、門口の百姓權八、フツと聞きつけ、内を覗き

百權　エヽ、有り難いな。

トにつたりする。

きぬ　エ。

　　トきつと思ひ入れ。氣を變へて

南無阿彌陀佛々々々々々々。

　　ト珠數にて紛らす。唄になり、お絹、上の障子の内へツイと入る。權八跡見送り、思ひ入れあつて、件の大小を持ち、これをお半恥かしさうに權八の手をひいて、のれん口へ連れて入る。百姓權八、門口より覗いて

百權　イヤ　氣の揉める奴等だ。

　　トうそ／＼と内へ入り、そこらを見て

なんだ、爰らは水だらけだ……コレ、鏡も割つたな。鏡の割れたのは構はぬが、あの聟めは……

イヤ、こいつは氣障だワ。

　　トあたりを方附ける。通り神樂になり、向うより鐵、三、盜人にて、菰をかむり、ウロ／＼出て

鐵　ハイ、宿無しが二人で一文

三　ハイ、旦那、お久し振りでござります。

百權　通れ／＼。

二人　ハイ、一文のお願ひ。
百權　エヽうるさい奴等だ。
ナニ、お剩りか。犬にやるより、わいらにやらう。待つてゐろ。
ト二人を見て思ひ入れあつて
二人　ハイ、有り難うござります。
ト捨ぜりふ云つてゐる。此うち始終通り神樂、捨て鐘。百姓權八、のれん口より、鹽鰹の頭ばかり附きし中落を提げて來り
百權　鹽が辛くつて喰へるものではない。彼奴等にやつてしまはう……コレ、鹽鰹のあらをやるぞ。
二人　エヽ、有り難うござります。
百權　サア、持つて行け／＼。頭を大事に喰へ。
二人　ハイ／＼。
ト二人は鹽鰹を貰ひ、花道の方へ行く。百姓權八、ウソ／＼附いて行き
百權　コレ／＼、昨夜の仕事は、頭だ／＼。
二人　アノ、頭にか。

ト鰹の頭より、盗まれしと噂ある柿の縞財布の百兩を出し

これか。

百權　エヽ、靜かに云へ。

鐵　コレ、權八。頭が尋ねる神妙劍とやらが、爰の内にあらうと云はれるから

三　昨夜のやうに仕掛けて見たが、あれぢやァ爰の内にも

百權　かゝり人のお絹といふは、助太夫が妾ゆゑ、慥かあの女が、その一巻を持つてゐやうと思つて、いろ〳〵と目を附けるが知れねえ。そこで小簞笥にあつた財布の金を、ちよろまかしたワ。

三　そいつは奇妙だ。

鐵　時にてめえ、無暗に縛つたが、痛くはないか。

百權　痛くないものか。ひどく縛つたから、今に爰がヒリ〳〵するワ。

ト手に殘りし繩の痕を見せる

三　コレ、權ぱ。百貸してくれ。一杯飲んで行く。

百權　百ばかりあつたかも知れぬ。

ト紙の大叺の莨入れを出して渡す。鐵、中を尋れ、四文錢百ばかり出して、その時、中にある手紙を

出し

三　皆借りるぞよ……コレ、この文は女の手だな。

鐵　ほんに、こりやァてめえの女房、三日月おさよが手だぞよ。

百權　さうよ。あのおさよに切りを叩かせて置いた時、病氣だと云つて寄越したから、引取るのも面倒だから、おらァ人を頼んで、死んだと云つてやつたが、今に死んだと思つてゐやうよ。

三　イヤ、情の無い亭主だ……ほんにそれで思ひ出した。因幡どんがわれが所へ、手紙を寄越された。

ト手紙を出して渡す。百姓權八取つて

百權　アヽ、こりやァ神妙劍を頼むとの事。その上これぢやァ、づきが來たな。

ト手紙を破つて懷中する。

二人　づきが廻つた、油斷がならない。

百權　そんならこの金は、おらが方へ預かつて置かう。

二人　さうしやれ〳〵。

百權　おれも其のち、爰の内をふけるワ。

トこの時奥にて

與五　權八や〳〵。

ト呼ぶ。百姓權八思ひ入れあつて

百權　又呼びやアがる……コレ、捕まるな。

二人　呑み込んだ〳〵。

ト兩人は件の鰹を提げ、通り神樂にて向うへ入る。百姓權八、百兩の金を懷中する。奥より幸左衞門瀧右衞門、與五七出て來り

幸左　これは早、今日は、御苦勞樣にござりました。

瀧右　イエ〳〵、此やうな事は有うちでござります。もうお暇いたしませう。

幸左　お歸りなされまするか。日暮れではあり、コレ與五七、ちよつと送つてあげやれ。

與五　ハイ〳〵、畏りました。

瀧右　イエ〳〵、それには及びませぬ。

幸左　でも、この間は物騷でござりました。

ト百姓權八を見て

コリヤ權八、あなたのお穿き物を直せ。

百權　アイ。

ト小言云ひながら、そこら見廻し、雪駄片し、藁草履片しを直す。瀧右衛門歸らうとして思ひ入れあり

瀧右　イヤ、これはわしが穿き物ではござらぬ。

ト自身にそこらを尋ねる。

幸左　これはしたり、お穿き物を直さぬかえ。

百權　直しましたわい。

瀧右　でも、わしがのではござらぬ。

百權　それをおれが知るものか。

瀧右　これは御挨拶。

幸左　おのれ、其やうな御挨拶が

百權　飯炊きには住んだが、大家の穿き物を直しには奉公はしねえ。

幸左　おのれ、其やうな事を

百權　エヽ、知りませんよ。

トづう〳〵しく奥へ行く。與五七見兼ねて

与五　うぬはマア、あなたの仰しやる事を
百權　やかましいワ。旦那ぢやァあるまいし。後見は居候ふも同じ事だワ。
与五　まだ其やうな

ト立ちかゝるを、幸左衛門、瀧右衛門とめて

幸瀧　これはしたり、外聞が悪いワ。
与五　それだと申して
百權　どうしたと。
与五　こいつ、うぬは
二人　これサ、靜かにしやれな。

ト与五七をなだめる。百姓權八大風を云ふ。この爭ひよろしく、曲撥になり、この道具まはる。

本舞臺、奥座敷の體、屛風兩方に建てあり。尤も平舞臺に飾り、この時門口替つて、跳への開き柴門になる。よき時分より彈き流しの唄、時の鐘にて道具納まる。

トよき所に丸行燈ともしあり、唄切れる。合ひ方、捨て鐘。上の方の屛風を明ける。中に權八、お中、

床杯の體よろしくあつて

權八　コレ、お半どの、すりや其方が、この才次郎を見染めたは、去年の如月、伊勢路にて、その時母御と連れ立つて

はん　あの都を出て鎌倉へ、參る道にて石部の泊り、その合ひ宿のお前さん、大小さすが立派な殿振り、とても女子に生れ來て、あんなお方と添臥しの、それ叶はずば一生に、男は持つまい、持ちやせぬと、お前に立てる心の操。その心根を露はども、御存じのない才次郎様。ようマア聟入りして下さんした。それと申すも女子の念力。エヽ、有り難うござりまするわいな。

權八　それ程までに思うて下さる、女中があるとは夢聊か、知らぬ事とて、しかもその夜に

はん　エ。

權八　サ、その夜にそれと知るなれば、仕様もやうもあらうのに、神ならぬ身の露はども、知らぬ同士なる合ひ宿の、其方は下り、此方は上りの道筋兩方へ、別れ／＼の旅路ゆゑ

はん　逢ふ事さへもいたづらな、心の出たもお前から。今聞けば母さんが、云ひ號けなさんした、そのお方は才次郎さん、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

權八　わしは見捨てる心はない。併し其方の今云やる、その合ひ宿の次の間で、ついした事のわざくれ

が、誠となつて思はずも、今となつては現在の

ト下の屛風へ思ひ入れあつて

ハテ、云ひ譯のないしだら。

ト思ひ入れ。お半心附かず

はん そりや、わたしが事でござんすかえ。モシイナア、なんのこれが思はぬ縁、もう〳〵わたしや未來をかけ、心の底まで打解けて

權八 その詞に相違なくば、もそつと此方へ

はん どうや、らわたしや、嬉しいやうな、怖いやうな。

權八 何が怖うて

はん サアそれはな。

權八 ハテ、春の寒さが、身に浸みるわいなう。

ト二人よろしくこなしあつて、屛風を引廻す。この時、風の音して、凄き合ひ方になり。下の屛風の中、パッと煙硝火あがる。建てたる屛風のよき所の破れより、髮の毛段々に伸びたるが、蛇の如くにうれり出で、上の方の屛風へかゝり、丈拔群の伸びたる髮の毛まとひ上がる事、これにて屛風の中へ入

ろ。お半の「アツ」と叫ぶ聲する。權八、屏風を引明けキツと見る。件の髮の毛、お半が腕へからむ體。
これにて苦しむ。權八キツとなつて髮の毛をとらへ

合點のゆかぬこの場の不思議。お半が腕へ、まとふは女子の

ト刀を拔き、件の髮を切る。殘りの毛は、スル〳〵と屏風の破れへ引いて取る。

はん　アヽ、苦しいわいなア。

ト襲はれる體。下の屏風の内にても、お絹の苦しむ聲する。

權八　今の不思議は姑の寢所。殊に襲はる今の聲。

ト屏風を明ける。中にお絹、寢卷の形にて、夜具にもたれ、寢入りし體。權八思ひ入れあつて

お半が襲はれ、又ぞろや、母御も同じ

ト兩方へ思ひ入れあつて

女房お半……姑御。

半絹　エ。

ト眼を開き、思ひ入れ。

權八　今の襲はれ、親子とも、怖い夢でも

はん　アイ、わたしが腕を蛇が

きぬ　わしは思はず劍難に、あうたと見たは夢うつゝ。

權八　お半が恐るゝ蛇も、母御があひし劍難も、慥かに正體

ト件の切つたる髪の毛を見せる。お半思ひ入れ。お絹、思はず我が髪をいらひ見て、切つてあるゆゑ

きぬ　ヤヽヽヽ、すりや正夢にて、わたしが髪の

權八　おのれとうごめく、娘へ嫉妬の

はん　アノ、母さんが

權八　アヽ、心柄なる

きぬ　エ。

ト思ひ入れあつて

面目ない／＼。

ト額を隱す。權八これにて思ひ入れ。時の鐘になり、以前の土手助、狀箱を持ち、バタ／＼にて走り出て來り

土手　ヘイ／＼／＼、田糸樣へお目にかゝりたうございまする。この程參つた土手助でございまする。

トこの聲に幸左衞門出かゝり窺ふ。お絹顏を上げて

きぬ 土手助どのとは、本庄樣より

土手 左樣でござりまする。助太夫樣の儀につき、一大事が出來いたしました。

きぬ ナニ、一大事が

トこれにて權八思ひ入れ。

はん 心許ない、奴どの

幸左 不意の知らせは、もしやあなたの

土手 委細は卽ち助七樣より、あなたへ御狀。

ト差出す。お絹取つて、狀を開き見て

きぬ ナニ〳〵……「一昨二十日の夜、龍の口にて、因州の囚人平井權八と申す者、親助太夫太刀取りにて、既に死罪の場所に於て、助太夫を殺害なし、村雨の劍を奪ひ逃げ去り候ふ。それにつき其方、親どもより預かり置き候ふ品、大切に致さるべく候ふ。萬事は追つて、先づは早速知らせ遣はすものなり。田糸どのへ、本庄助七」……ヤヽヽヽ、すりや旦那樣を、平井權八。

トきつとなる。權八、狀の文言に思ひ入れ。

土手　私しはまだ外へ、お知らせ申すお方もござれば、すぐにお暇。

幸左　これは御苦勞、旦那へよろしう。

土手　ドリヤ、一走り。

ト捨て鐘になり、逸散に向うへ走り入る。お絹は權八へ思ひ入れ。

はん　すりや父さんを、權八といふ者が、討つて行くへが知れぬとかいなァ。

きね　お主と申し。お情を、うけしこの身は外ならぬ

幸左　緣は切つても御恩の主筋。

權八　して、母御にも、これなるお半も、討たれし本庄どのといふ、そのお人に緣ばしござるか。

きぬ　わしが以前の主人といふは、因州の御家中助太夫樣、恥かしながらお情うけ、儲けしは娘のお半、この子を連れて離別なし、下つて來る道、思はず石部の

權八　すりや京都に勤番の、その節お前は本庄家に

ト思ひ入れ。

きね　腰元づとめの名は田糸。

幸左　町家へ戻つて、その名はお絹。

はん　わたしが實の父さんは、緣は切つても本庄樣。

權八　さては其方は血を分けた、娘であつたか。ハテ、知らぬ事とて

ト思ひ入れ。

幸左　尤も心よからぬ旦那。仕官の邪魔と二人の女、あかぬ離別にこの家へ歸り、今では緣は無いものの

はん　男に持つた才次郎さん、武家を望みがよい幸ひ。いはゞお前も舅の敵。どうぞわたしが力となつて

權八　敵討ちたい賴みであらうが、さりながら、その文言では敵は平井

幸左　權八ならば手がゝりが

權八　エ。

ト我が事と心得恟りする。

幸左　慥かに彼奴が本庄の

ト思ひ入れあつて、奥へ向ひ

コリヤ、權八、ちよつと來やれ〳〵。

ト これにて合ひ方になり、百姓權八出で來り

百權 ハイ〳〵、私しを又お使ひかえ。アヽ、日の暮れたのに

ト何心なう扣へる。幸左衞門詰め寄つて

幸左 ヤイ。おのれは平井の權八と申すか。

百權 左樣でござります。私しは平井の權八でござりまする。

幸左 いよ〳〵それに相違がなくば、女二人がおのれは敵、逃がしはせぬ。サ、お半、其方の親御の敵はこの者。サ、聟どの、助太刀してやらつしやれ。

はん そんならわたしが父さんを、切つてのいたは、わが身かいの〳〵。

ト恨めしき思ひ入れ、百姓權八、合點のゆかぬ思ひ入れにて

百權 モシ〳〵〳〵、滅法界な。覺えもない私しを、ナニ、親の敵だえ。してマア、わしが殺したといふお人は、どこの人で、何と申します。サ、それを仰しやりませ〳〵。

幸左 オヽ、證據といふはなけれども、おのれが家名も平井權八。討たれしお人はお半が父親、本庄助太夫樣。討つたる場所は龍の口。知らせの文體。コレ、見をれ。

ト狀を見せる。百姓權八、よく〳〵見て

百權　成る程、これぢやアわしが名に、似寄りの平井權八と、書いてはあるがこりや間違ひ。私しは武州の葛西領、平井村の權八とて、因州とやらの囚人ぢやアござりませぬ。殊に一昨二十日の夜とござります。その日はお內の留守居番、きつと張り番して居ました。モシ、お絹樣、お前あれ程御存じだ。云ひ譯をして下さりませな。

ト一々云ひ譯する。幸左衞門思ひ入れあつて手紙を見て

幸左　イカサマ、申せば因州の囚人。

きぬ　二十日の夜には留守居の權八。成る程それでは、こりや間違ひ。外に敵がなけりや叶はぬ。

ト思ひ入れ。百姓權八こなしあつて

百權　そんならわしに、疑ひはござりませぬか。

權八　よもやこの者ではござりますまい。

百權　嬉しやそれで落附いた。

ト思ひ入れ。權八こなしあつて

權八　この才次郎も緣組みいたし、祝言の夜に舅の橫死、聞捨てにはなりますまい。これより直に、助太刀いたし遣はしませう。

はん　すりや、お前はわたしが父さんの、敵討の助太刀して

きぬ　討たしてやらうとあるからは、思ひ立つ日が最上吉日。もしや敵はあの者かと、心あたりもあるからは、この鎌倉を離れぬうち、この家を内々忍び出で、六浦川には因幡の御陣屋、これへ便つて敵の様子。

幸左　成る程、一緒に參るもあたりの人目。わしは娘を同道して、六浦の濱に待合はさう。お絹どのは、聟どのを同道して

きぬ　二人連れにてお跡から、目立たぬやうに、叔父御様。

　　　ト此うち幸左衛門身ごしらへして

幸左　町人ながら、わしも助太刀。

權八　アモシ、それでは跡の取り始末。平にあなたはお殘りなされて

幸左　そんなら六浦の川端まで、送つてなりと

百權　名の間違ひで暫くも、疑ひ受けたこの權八。わしも面晴れ、お供して

幸左　イヤ／＼決して。餘人はどうも

百權　でも私しは疑ひを

權八 受けた下男の平井の權八、左樣に申すもこりや尤も。叔父御樣、お連れなされませ。苦しうもござりますまい。

百權 それぢやアわしも面が立ちます。

きぬ お半が行きやらばわが身には、屆ける品が

ト合ひ方になり、あたりより件の梅の鉢植ゑを出し、梅をソツと拔く。下より袱紗包みの品を出し、あたりへ憚かる思ひ入れにて

旦那樣よりお預けありし、こりや大切な

ト神妙劍といふ事を隱し

用意の金子。爰に隱してあつたゆゑ、盜人の手へ渡らいで、まだしも仕合せ。サ、娘、大切に

ト渡す。お半取つて

はん ヤ、こりや金ならぬ

きぬ アコレ、わしが行くまで、必ずともに

ト思ひ入れ。二人の權八、この品に目を附ける。

幸左 どうやら空も雨氣づく。この浴衣なぞ上へ羽折つて

ト件の紅葉の浴衣を渡す。お半、上張りに着て、百姓權八、絹屋といふ弓張りを持ち、先に立ち

百權　サヽ、降り出さぬうち、そろ〳〵と

はん　母さん、お先へ

きぬ　跡から直に

權八　わしは、あなたを

はん　來て下さんせえ。

ト唄になり、百姓權八先へ立ち、お半、幸左衞門附いて向うへ入る。兩人殘り、お絹跡見送つてゐる

權八　アヽ、思ひがけない今宵の仕儀、連添ふお半の實の親を、人手に討たして、今から助太刀。

ト思ひ入れ。お絹近寄つて、權八が胸づくしを取つて

きぬ　恨めしいわいなう、コレ、權八樣。

權八　ア、コレ

ト合ひ方變る。

きぬ　エヽ、お前はなア……いつぞや石部で思はずも、隣り座敷の合ひ宿に、一際目立つ前髮姿、娘持つ身の恥かしい、宿の炬燵に火がないと、云はしやんしたを機にして、つい差向ひのおじやら

言、それが高じた嬉しい思ひ。本意ない別れに堪え兼ねて、あの定宿のお客はと、お名を問うたりや因幡のご家中、家名は平井權八樣。

權八　アヽコレ、その權八といふ事を

きぬ　荒立て云はゞお主の敵、娘が爲にも父の仇、その敵ぞと知りながら、云ふに云はれぬこの身の迷ひ。

權八　すりや某を權八と、存じてゐらるゝ姑の、それもいつぞや石部の宿の

きぬ　そのお心が忘れ兼ね、ゆかしいお方は平井氏、權八樣と明暮れに、思ふ其うち今日爰へ、才次郎と變名して、ござんしたとは譯あらんと、心を附けしに疑ひなき、助太夫樣を討つたる知らせ。さてこそ敵はお前ぞと、知つたるゆゑに娘のお半、殊に預かる品までも、あの子に渡して叔父御を僞り、爰を出しぬきその跡にて、お前に胸を打明けて、連れて立退き添ひたい願ひ。權八樣、慈悲ぢや、情ぢや、手を合す。モシ、どうぞ連れて退いて下さりませ。

ト思ひ入れ。權八こなしあつて

權八　今の頼みは理りながら、いはゞ敵のこの權八、その上こなたを連れ退けば、助太夫へは道立たず、貞女を捨てる心よな。

きぬ　貞女を破りその上に、一人の娘も、捨てる心になつたのも、みんなお前へ迷ひから

權八　さほどの心を聞く上は、此方とても包むに詮なし。我が親人を人知れず、闇打ちにせし助太夫、自身の白狀相違なく、それゆゑ斯く云ふ權八が、親の敵と存ずるゆゑ、龍の口にて手にかけました。

きぬ　さうとは推察したなれど、お前に迷ふが因果の道理。仇も恨みもいとひませぬ。否ではあらうが、わたしを連れて

權八　拙者に隨ひ、來る心か。

きぬ　無間地獄へ墮ちるも承知、しるしは目前この髷の、切れた樣子も

權八　思へば最前屛風越し、切つたる髮は嫉妬の一念。

ト切つたる髮を出し見せる。

きぬ　みな心がら

權八　ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ。刀を取つてあたりを窺ひ、お絹を切る心にて拔きかける。お絹キッとなつて

きぬ　切られるとても



権八　ヤ。
きぬ　手にかけさんすりや、この身の本望。
　　トきつとなる。
権八　命を捨てゝも
きぬ　わたしを一緒に
権八　それ程までも
きぬ　思ふが因果。
権八　是非に及ばぬ。お半に見替へて
きぬ　エヽ、アノわたしを
権八　コレ。立退く用意。
きぬ　嬉しうござんす。
　　ト縋つて手を合はせる。
権八　コレ、密かに〳〵。
　　ト思ひ入れ。唄、時の鐘、雨車の音にて、この道具鷹揚に廻る。

本舞臺、うしろ黒幕、正面に柳の大樹、ヽヽヽ、六浦川といふ榜示杙、土橋、よき所に浪板、切り穴、枯れ蘆しげり、所々に稲村、掛け稲、舞臺前浪板、爰に百姓權八、頰かむりにて、件の浴衣を上張りしたるお半、袖頭巾にておぶはれてゐる見得。柳の梢に以前の累の凧かゝりゐる體。道具納まる。

ト雨の音、矢張り捨て鐘、禪のツトメ。百姓權八空を見て

百權　アヽ、どうやら小降りになつて來た。サ、お半さん、爰へ下りなさい。

はん　コレ、權八や、叔父さんは、まだござんせんかや。

百權　あなたは蠟燭を買ふといつて、跡へ殘りなされた。ナニ、氣遣ふ事はござりやせぬ。わしに取附いてゐなさい。

はん　それぢやというて、この暗いので、わしや怖うてならぬわいの。

百權　ナニ、暗いといつて怖い事はないわな。叔父さんは蠟燭を買ひに殘らしつた。丁度幸ひ、お前はわしに、斯う取りついて

ト引寄せて、しなだれる。

はん　アヽコレ、其方、何をしやるぞいの。

百權　何をするものか、この權八が締めるのだ。

はん　そりや何を云やるぞいの。それにしても母さんも、才次郎さんも、跡から來なさんす筈。もう見えさうな

ト向うへ思ひ入れ。

百權　あの手合ひが來て堪るものか。叔父さんも來ないうち、ちよつと爰でてんがうしやるな。

トしつこくしなだれる。

はん　エヽ、滅相な。わしや其方の爲には主でないか。家來の身で、アタ不作法な。てんがうしやると、きく事ぢやないぞ。

百權　こりやアおつかない。お主のお半さんがお腹立ちだ。ハヽヽヽヽ。モシ、色戀にばかりは、主家來の隔てはないよ。お染久松を見なさい、あれがよい手本だわな。ちよつとマア此方へ

はん　エヽ悪い事を……アレ叔父さん、來て下さんせ、權八がナ

百權　野暮を云ひなさるな。大きな聲はしないものだ。

はん　あれいな。

百權　エヽ、情のこはい。

ト逃げ廻るを追ひ歩く。禪のツトメになり、向うより幸左衛門、絹屋の弓張りを灯し、雨にあうたる體にて早足に來り、泣き聲を聞いて

幸左　ヤ、さういふ聲は、お半ぢやないか。

はん　叔父さんかいなア。この權八が、わたしを無體に

幸左　ナニ、權八めが

ト立ちかゝつて權八を引退け

コリヤ、おのれ、お半を捕へて、理不盡とやいはん。言語道斷、憎くい奴め。

トお半を圍ふ。

百權　アイ〳〵、御免なされませ。お前さんが蠟燭を買ひにござつた跡、どうやらこの子と差向ひ。味な心に信濃屋を、思ふ心に奈良の茶屋、とんだ梅川だ。

幸左　默り居らう。おのれマア、深切らしう吐かし居つて、道々娘をなぐさまうといふ拵へ事ぢやな。供には連れぬ。サ、爰から歸りをれ〳〵。

トきつと云ふ。

百權　エヽ、左樣なら、お供には參られませぬか。

はん　どうしてマア其方のやうな者を。サ、早う歸りや〳〵。
百權　南無三、脈は上がつた。左樣なら、私しはお先へ參じます。
幸左　知らぬわえ。
百權　エヽ、利生の無いお屋敷だ。

　　トロ小言を云ひながら花道へ來り、跡を見返り、窺ふ。此うち時の鐘、靜かなる禪のツトメ、兩人思ひ入れあつて

はん　して、父さんの敵といふ、手がゝりがござんすかいな。
幸左　手がゝりとてもおれは町人、その上、わしに義理ある悴の彌市、一體あれは因州の生れ、繼母の讒にて國を立退き、伊勢參りとまで落ぶれて、來たのをわしが取りあげて、取り立てやつたも十八年、高崎屋といふ江戸の絹屋に奉公、その悴に逢うて、其方の身の上、敵の手蔓。
はん　アノ、母さんの事までも
幸左　相談して賴む心ぢや。アヽコレ、それにしても才次郎やお絹は、なぜマア遲い事ぢややら
はん　そろ〳〵と行て見ようわいな。
幸左　サ、降らぬうち、ちつとも早う

ト行かうとする。百姓權八、手頃の割り木を拾ひ、窺ひ寄つて提灯を打ちおとす。兩人悄りして

アヽ、狼藉な

ト云はんとする。百姓權八、手早く幸左衞門が差した一腰を引拔き、切り下げる。これにて幸左衞門

タヂ〳〵として、

こりや騙し寄つてこの深手。おのれは正しく

百權　權八だワ。

幸左　ヤヽヽヽヽ、さてこそおのれ

ト、たぢ〳〵となる。お半絶つて

はん　そんならお前は手を負うてかいな。コレイナア、才次郎さん、早う來て下さんせ。あの權八が叔父さんを

百權　やかましいワ。叔父の一人や二人殺したといつて、大事ないワ。コレ、叔父さん、昨夜内へ入つて百兩盜んだも、矢ツ張り内にゐる、この權八だワ。ソリヤ、その金もこの通り

ト懷中より財布を出し、幸左衞門に探らせる。

幸左　ヤヽヽヽ、そんならおのれが、昨夜の盜人。

百權　アイ〳〵。盗人はわしサ。コレ、お半さん、この金で見世を持ちやせう。小石川にしようか。とんだ絲屋だな。

トしなだれる。

はん　エヽ、否ぢや〳〵。アレ、權八めが叔父さんを

百權　ヤイ、やかましい。自由になれ。

幸左　おのれ權八、やはか娘を

トよろめきかゝる。

百權　エヽ、まだ死なゝいか。

ト切る。幸左衞門、權八にむしやぶりつく。このはずみに幸左衞門、權八が帶に挾みし、手紙の入りし紙莨入れをしつかりと握り、ウンと倒れる。お半駈寄るを引寄せ

おれが心に隨はねば、この叔父さんも、爰で斯うして

ト切り下げる。幸左衞門苦しむ。

はん　エヽ、むごたらしい。

百權　むごいと云ふはお半坊、得心せねば死なないやうに

ト お半をしたゝかに打つ。

はん　すりや、どうあつても

百權　叔父は白刃で、てめえはこれで

ト 幸左衞門を切り、お半をしたゝかに打つ。これにて兩人一度に落入る。

コレ、お半、死んだ眞似をせずと、云ふ事をきかないか。コレサ。

ト いろ〳〵して

イヤア　空死だと思つたら、こいつはほんに、死んだワ〳〵。サア〳〵、惜しい事をした。

ト 懐を探し、懐中の一卷を探し見て

どうかこりやァ卷き物のやうだが

ト いろ〳〵して空にかざし、見る事あつて

文字は定かに解らねど、神妙劍と書いてあるは、そんなら兼ね〴〵、因幡小僧が欲しがつた、神妙劍とはこの事か。仕舞つてあつたは梅の鉢、道理で知れぬと仲間が話し。づきの廻つた因幡に遣るより、こりやァ此方へ取上げ婆ァ。

ト 懐中し

娘の餓鬼でも主殺し、のがれる工面は

ト思ひ入れあり。幸左衛門の三尺帯を取つてお牛の首へかけ、死骸を柳の枝へ吊し、捨てゝある莚を取つて死骸を隱し、莨入れを摑みしまゝの幸左衛門の死骸を川へ打込み、思ひ入れあつて

アヽ、氣が盡きた。一服のまうか。

ト帶のまはりの莨入れを尋ね

南無三、莨入れを落したわえ。

トあたりを尋ねる。この時、向うに人音するゆゑ、思ひ入れあつて下の方の稻村の蔭へ隱れる。時の鐘、かすめたる禪のツトメ。向うより權八、大小にて、頰かむり。お絹を連れて、窺ひ〳〵出て來り、舞臺へ來り

きぬ　權八さん、道々も云ふ通り、娘の手前、どう思うても、わたしやお前を

權八　義理を思ふも道理至極。某とても身の誤まり、既に死罪のその場にて、助太夫を手にかくれば、私しならぬ天下の科人。

きぬ　遁れたとても天の網、召捕らるれば淺ましい

權八　死恥かくは目のあたり。それを思へば潔う

ト思ひ入れあつて

武士の手本と

ト刀へ手をかける。お絹、その手に縋つて

きぬ　そんならお前は腹切つて

權八　死ぬより外に

ト又死なうとする。お絹とり縋り

きぬ　そりや胴慾な權八さん、お前は死んで侍ひの、道は立たうが、跡に殘つて、モシ、わたしや世間の笑ひもの。さりながら、死なしやんすのも無理ならず。ならう事ならお前と一緒に、わたしも手にかけ殺して下さんせ。權八さん、一緒に殺して下さりませ。

權八　尤もなその詞。さはさりながら、わしが刃でお前を殺せば、聟入り致した才次郎、姑を手にかけ殺せしと、沙汰のあつては譯知らぬ、長兵衛どのまで跡の難儀、と云つてこのまゝ見捨てゝも

きぬ　後の浮名は立たうとも、六浦の川へ身を沈めれば、お前も惡名附く事なう、二人別れてこの川へ

權八　すりや、身を投げて、わしも一緒に

きぬ　どうぞ連れて行て下さりませ。

ト縋つて思ひ入れ、權八もこなし。

權八 聞き屆けました。成る程川へ身を投げて、二人もろとも

きぬ 未來永々

權八 見捨てはしませぬ。サ、早う用意を

きぬ エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。一つ鉦の入りし合ひ方に替り、兩人思ひ入れあつて土橋の上へ上がり、權八大小を取つてあたりへ置く。お絹は珠數を出して思ひ入れ。

權八 西の方こそ十萬億土、彌陀の御國へ救はせ給へ。

きぬ よしないわたしがあるゆゑに、侍ひらしう殺さぬが、それがわたしの

ト縋る手を取り、權八思ひ入れ。

權八 ア、返らぬ繰り言。最後を清う。コレ、迷はぬやうに

きぬ 南無阿彌陀佛。

權八 南無阿彌陀佛。

ト云ひさま、透を見て權八、お絹を橋の上より前なる川へ突き落す。ドンと水音する。このはずみに

お半の死骸、柳の枝折れてバッタリと稻村の間へ落ち、心附き、うめく聲する。權八、川をキッと見て思ひ入れ、本釣り鐘になる。權八、手早く大小を取つて挾み、キッとなり

權八 邪慳とさぞや思はんが、お主の爲ゆゑ囚人と、なつたも尋ぬる品あれば、取り得るまでは死なれぬ命。赦して下され、田糸どの。やがて未來で云ひ譯いたさう。南無阿彌陀佛々々々々。

ト思ひ入れあつて

今宵のうちに、一まづ江戸へ

ト行かうとする。この時お半うめく。聲を聞きつけ

爰にも女中のうめく聲……正氣を失ふ正しく女……コリヤ、女中、心を慥かに

ト水をすくひ、注ぎかけ、介抱して

心が附いたか。

トこれにてお半きつとなつて

はん おのれ、やみ〳〵叔父さんの、敵は權八、恨めしい。

ト百姓權八と心得、權八へむしやぶりつく。權八は我が名を云はれ悔りして、お半を引附け見て

權八 ヤヽ、其方はお半。

はん　才次郎さん、逢ひたかつた〳〵わいなア。

ト取りつく。權八思ひ入れあつて

權八　先へ出でたる其方がこの體。して叔父者人、あなたの行くへは

はん　迯つて來をつた權八が、あの叔父さんを切り殺し、その上に母さんが、それと云はねど實の親、助太夫様より預かりし、大切な神妙劍の一巻。あの鉢植ゑへ隱し置き、金ぢやというてわたしへお渡し。懐中せしに見えぬのは、疑ひもなく權八が、持つて行つたに違ひない。才次郎さん、どうぞ取り得て下さりませ。

權八　ヤ、、、、すりや最前に母親が、鉢の梅の根元より、取出せしは權八が、尋ぬるところの神妙劍。

はん　サア、權八がその品を

權八　持つてうせたも同じ名の、あの權八が行くへといひ、様子存じた母親も、知らぬ事とて水中へ。思はず知らず、ホヽホイ。

ト悧りする。お半縋つて

はん　その權八は叔父さんの敵。して母さんは、お前が一緒と思ひしに、なぜに爰には

ト尋ぬる體。權八思ひ入れあつて

權八　サ、母人は密かにわしが

はん　アノ、母さんのお行くへは

權八　隨分堅固ぢや。

はん　それでわたしも

權八　ヤ。

はん　落附いたわいなア。

權八　ア、何にも知らいで

はん　エ。

權八　氣遣ひ無用。

ト思ひ入れ。薄ドロ〳〵になり、川の中より煙硝火燃えあがる。お絹の切り髮、蛇の如くになり、這ひ上がつてお半にまとふ。お半驚き

はん　アレ、蛇が

ト恐れる。權八、取捨てんとする。ドロ〳〵にて飛びかゝる。これにてお半苦しみ倒れる。切り髮消

える。權八立ちかゝつて

權八　コレ、お半、心を慥かに、お半ヤアイ。

ト介抱する。向う、バタ／＼になり、頬冠りにて顔を隱せし、因幡小僧才次郎、逸散に走り出て來る。跡より捕り手四人、追ひかけ來り、立廻り。このうち權八はお半を介抱してゐる。四人は舞臺にて才次郎をキッと捕へ

捕一　お尋ね者の因幡小僧。

捕二　實名は才次郎。

捕三　天下の網にかゝつた曲者。

捕四　召捕つて行く。腕

四人　まはせ。

ト引立てるを、振りほどいて左右へ投げつけ、逸散に下座へ入る。このうち禪のツトメ。

四人　おのれ曲者。

ト追ひかけて同じく入る。權八跡を見送り、思ひ入れあつて、お半を抱きかゝへて

權八　いま役人のあの一言、お尋ね者の因幡といふは、實名は才次郎、知らぬ事とて權八も、その名を

知らで才次郎。ハテ、怪しい場所を

ト思ひ入れ。この時、百姓權八、窺ひ〳〵出かゝりゐる。

サ、ちつとも早う

ト袖頭巾のまゝなるお半を背負ひ、よき所まで行きかゝる。この時、風の音して、件の累の凧、梢より絲目切れて落らて來り、お半が額の前へ落ちかゝる。うつたうしく掴む。この時、本釣り鐘にて、空へは月を引出す。權八、空を見て

二十三夜の月魄は……アヽ、最早眞夜中。

ト川へ目を附ける。背に負はれしお半、掴みし凧を取りのける。この時お半の顔、お絹の顔になつて、恨めしげに上より權八の顔を覗く。權八と、百姓權八は、前なる川へ面影のうつりしを見て、きつとなつて

ヤ、お半が面は母親の

百權　こりやア化け物か。

はん　エ。

ト件の凧にて顔を隠す。百姓權八、手拭にて顔を隠す。これを木の頭。

権八　ハテ、恐ろしい。
トこれをキザミにて、三人よろしく、ひやうし
幕
（作者　鶴屋　南北）

五建目口
忍ヶ岡蓮池番屋の場

役名｜｜鬼王新左衛門。百姓、平井村の權八。因幡小僧才次郎。辻番人、畑右衛門、花菱屋若い者、甚助。梅澤屋手代、金八。

五建目役觸れ濟むと、時の鐘になり、幕の内にて

大勢　盗賊なるぞ。召捕れ〳〵。
トロ々に呼はる物音する。ト知らせにつき物音しづまり、通り神樂になり、幕明く。

本舞臺、三間の間、正面九尺の辻番小屋、上の方に板戸を建て、下に辻行燈・天水桶・軒口には樋を仕掛け、うしろ黒幕、舞臺前に飛び込みの池、枯れたる水草、すべて鎌倉忍ヶ岡、蓮池番屋。爰に畑

右衛門、やつし一本差し、足輕にて、六尺棒を持ち、往來を制してゐる。金八、質屋の手代。甚助、大磯の茶屋男、その外仕出し大勢立ちかゝり、ワヤ〳〵云うてゐる。通り神樂打ち續け。

○　彼奴も大方、因幡小僧の同類でござらう。

△　太々しい男でござる。

畑右　サア〳〵、そこに立つてゐては惡い。通らつしやい〳〵。

ト棒にて追ふ。仕出し捨ぜりふあつて下座へ入る。金八、甚助、番屋を覗きゐるを、畑右衛門見附けて

コレサ〳〵、この手合ひは何を覗くのだ。サア〳〵、通らつしやい〳〵。

ト棒で追ひ立てる。

金八　アヽ、モシ〳〵、私しは何もお番屋を、覗くのぢやァござりませぬ。

甚助　爰の辻番へ出てゐる新左衛門どのに、用があつて來た者でござりまする。

畑右　アヽ、そんなら貴樣達は、合ひ役に頼んだ、新左衛門を尋ねて來たのか。

金八　左樣でござりまする。私しは梅澤屋と申します、質屋の手代でござりまする。

甚助　私しは大磯の茶屋でござります。別して胡亂な者ぢやござりませぬ。

畑右　それに違ひもあるまいが、その新左衛門は、いま時廻りに出た。この番屋には、權八といふ胡亂な奴が、捕へられて預けてあるから、二人ながら爰らをまごついて、巻添へにあはぬやうにさつしやい。

甚助　エヽ、そんなら盗人が捕まつて居りますかえ。道理でごたつくと思つた。

金八　甚助さん、斯うしませう。幸ひ惠方だ、辨天樣へ參詣して、歸りに是非逢つて、斷わつてゆきませう。

甚助　さうしませう。何でも今夜は、云ひ譯はきゝますまいぞや。

金八　そりやァ承知サ。サ、行つて來ませう。

ト通り神樂になり、兩人下座へ入る。この時、番屋の内より嘉藤次、喜之助、捕り手の形にて出て來り

嘉藤　コリヤ〳〵、番の者。今召捕りしは因幡が同類、暫くこの所へ預け置く。おつゝけ組子を同道いたして

喜之　その節參るでござらう。取逃がさぬやう、油斷しまいぞ。

畑右　畏りました。取逃がす事ぢやァござりませぬ。

嘉藤　云ひつけ申した。イザ、お來やれ。

ト通り神樂にて、兩人下座へ入る。畑右衛門殘つて

畑右　さて〳〵迷惑な。とんだ者を預かつた。その上今のごたつきに、コレノ〳〵

ト天水桶のあたり、手桶、柄杓、駒留めの繩など投げ散らしあるを見て

爰らを微塵にしをつた。

トあたりの品を方附ける。通り神樂になり、向うより新左衛門、花色木綿、山形木瓜の紋附きの布子羽織、藁草履、朱鞘の大小、屋敷印の箱ぶらを提げ、棒を突き

新左　火の廻り〳〵。

ト云ひながら出て來り、直に舞臺へ來る。畑右衛門見て

畑右　コレ〳〵、早く歸つて下さいな。跡に大騷ぎな事があつた。

新左　畑右衛門どの、何が其やうに大騷ぎがござつた。

畑右　こなたが廻りに行つた跡で、代官所のお役人が、盗人を追ひ駈けてござつた。番屋の前で縛らしつて、直に預けてござつた。殊に因幡とやらの同類だげな。必ず油斷さつしやるな。貴樣が歸つたで、わしはちよつと氣を附けて

新左　これはしたり、わしが歸ると早々、貴樣はもう酒屋へ通ふのか。今いふやうな盜人を預かつて、一人では番はならぬ。受取りに來るまで、爰にゐて下されく。

ト箱ぶらを取つて行かうとする。新左衞門とめて

畑右　ハテ、この人は、わしは今まで一人で番をしてゐましたぞや。そんならお互ひの事だ。直に戻つて來る……イヤ、賴みがある。今のお役人のござらぬうち、あの用水桶へも、水を汲み込んで置いて下され。ドリヤ、こなたに預けて、わしは

ト行きにかゝる。新左衞門とめて

新左　コレサく、其やうにマア囚人の番をしたり、用水を汲み込んだり、どうしてわし一人では出來ぬ。こなたも、もうちつと、殘つて下されく。

ト畑右衞門を引張り留める。

畑右　これはしたり、今直に歸るといふに

ト兩人行かう、やるまいと爭ひゐる。此うち通り神樂。金八、甚助出かゝり見て

二人　ヤア、鬼王さんぢや。逢ひたうござつたく。

ト新左衞門を捕まへる。

新左　ヤ、こなたは梅澤屋の
金八　アイ、金八でござるぞ。
甚助　花菱屋の甚助も、もう〳〵今夜は
兩人　待ちませぬぞ〳〵。
新左　サヽ、ようござります〳〵……コレ、畑右衞門どの、此方に掛合ひの用事もあれば、猶々もそつと居て下され。
畑右　ハテサテ、ゆるりと用を足さつしやい。其うちおれは、ちよつと引掛けてくるよ。
　ト通り神樂になり、箱ぶらをさげ、足早に向うへ入る。新左衞門追はうとするを、二人とりつき
金八　コレサ〳〵、新左衞門さん、あまり投げやりでござる。もう〳〵斷わりは、聞きませぬぞ〳〵。
新左　尤もでござる〳〵。
甚助　モシ〳〵、その尤もごかしも久しいものぢや。マア〳〵、爰へござりませ〳〵。
金八　今夜はスツパリ此方からお斷わりだ。
　ト二人して新左衞門を番屋の内へ連れて入る。
　コレ、新左衞門さん、疾に流れたあの鎧、曾我の屋敷で請けさつしやらねば、祐兼樣で請けると

仰しやる。いつそ其方へ、方を附けてしまはつしやりませ。

新左　左様ではござりませうが、あの鎧は祐信様のお預かり。譯ござつて貴様の方へ、少しのうちの預け物。それを外様へ請けさせては、この間も申す通り、曾我のお家は斷絶いたす事でござる。何分金子才覺いたすまで

金八　イエ〳〵、なりませぬ〳〵。

甚助　モシ〳〵、鬼王様、聞けば鎧は百兩の質ぢやげな。わしが方の揚代も百兩、その金の代りに、少しの間、これ預かつてと云はれるゆゑ、不請ながら預かつて置いた印子の尊像。あまり延び〳〵ゆゑ、高麗寺の方丈様へ、その話しを致したら、幸ひと寺の寶物に求めたいと、講中の衆が金を拵へ、今にもそれへ賣り相談。モウ〳〵、一日も待ちませぬ。斷わりました〳〵ぞ。

新左　サヽ、御尤も〳〵。先達ても申す通り、あの御佛は、義經公御所持ありし、多聞天の印子の尊像逆澤瀉ともろともに、曾我の預かり。然るに祐成様、廓通ひの揚代の代り、少しの間其許を頼み百兩の代りにお預け置き申しましたなれども、箱根へ勅使の道房卿へ、神妙劍と村雨の劍の代り、御寶差上げよとの仰せ渡され。近々鎌倉へ差上げねばならぬ尊像、修覆と申し立て、日限延引いたすにつき、曾我のお家へお疑ひ。祐信様、滿江様は北條様へお預けの身。その儀について御兄弟、

影を隱して日蔭の御身。なか／＼以て打捨てゝは置き申さぬ。明日中には、心當りもござるゆゑ、きつと請け戻しまする。それまでの所をお待ちなされて

甚助　イエ／＼、待たれませぬ／＼。

金八　さうでござる／＼。お前の方が百兩、わしの方が百兩、都合では二百兩、どうして明日出來るものだ。お前は寺へ賣りなさい。わしも又、祐兼様へ、差上げてしまひます。鬼王さん、斷わりましたよ／＼。

新左　サヽ、左様ではござらうが、そこをお二人とも御勘辨下されて

金八　イエ／＼、なりませぬ／＼。サア、歸りませう。

甚助　さうさつしやい／＼。

ト兩人小言を云ひながら行かうとする。新左衞門、二人をきつと留めて

新左　コリヤ／＼、町人、待て／＼。

兩人　イエ／＼、待たれませぬ。

新左　待たれずばよい。此方も無理は申さぬが、內證で辻番持ちこそ致せ、身も曾我様の御扶持人ぢやお主のお爲とこれ程までに、譯を申して詫びるのぢや。それ聞入れねば是非がない。誰に詫びる事

もない。二人ともに相手に致し、切り死いたしてお上への申し譯、鬼王も腹切るまでの事ぢや。命を捨つるも主人の爲、お家の爲、サ、二人ともに左樣心得、身が相手に

ト刀を取つて立ちかゝる。これにて兩人慄へ出し

兩人　アヽ、コレ〱、滅多な事をさつしやるな〱。

新左　イヤ〱、毒喰はゞ皿ぢや。サ、支度しやれ〱。

ト刀へ手をかける。

金八　アヽ、待ちます〱。

甚助　左樣々々、貴樣が待つなら、わしも待ちます。

兩人　鬼王さん、待ちませう〱。

新左　イヤ〱、嚇しをくれると思はうが、さうではないぞ。云ひ譯に捨てる命。不請ながら

ト矢張り立ちかゝる。兩人縮み上がる。この時番屋の上の方の板戸を、縛られし手にて後ろむきに明け、百姓權八、顏を出し、窺ふ。

兩人　モシ〱、待ちますよ〱。もう〱、きつと待ちますよ。

新左　すりや、只今申した事を聞き分けられて、明日までのところを、猶豫して下さるか。

金八　ハテ、今までさへ待ちましたに、命を捨てゝも待つまいとは云ひませぬ。
甚助　外へは、なか〳〵相談しませぬ。
兩人　コレ、待ちますよ〳〵。
新左　左樣に得心して下されば、此方も忝う存ずる。鬼王めも命を拾ひました。エヽ、忝う存ずる。
ト手を突く模樣。
兩人　なにサ〳〵、それには及びませぬ。きつと待ちます。
新左　然らば明晩には私し方より、きつと受取りに參る間、それまでのところを
兩人　ようござります〳〵。待ちまする積り。その代り、必ず明晩
新左　受取りに參りませう。
兩人　お賴み申します。
新左　承知しました。
兩人　ヤレ、落付いた。
ト通り神樂になり、二人は袖引合ひ、思ひ入れあつて逸散に向うへ入る。新左衞門殘つて思ひ入れあり

新左　此方が無理と知りながら、あのやうに申したは、誠に道に違うた事。一寸伸びれば尋といへど、なんでマア明日の晩まで、どうして金の才覺が

ト思ひ入れ。此うち百姓權八、繩附きのまゝ、ソロ／＼出かゝり、上の方へ逃げ行くを、新左衛門見附け

ヤア、盗人め。

ト權八を捕へて

うぬ、逃がしてよいものか。アヽコレ、合ひ役はおれにばかり預けて、エヽコレ

百權　モシ／＼、逃げはしませぬ。手水に行きやす。

新左　イヤ／＼、ならぬ／＼。こりやア柱へ縛つて置かざアなるまい。

ト件の所へ連れゆき、柱に縛る思ひ入れ。百姓權八、口小言を云つてゐる。新左衛門、向うを見て

アヽコレ、もう歸りさうなものぢやが

ト行燈の灯にて、天水桶を見て

アヽ、兎に角水も汲んで置かずばなるまい。あの合ひ役めが歸つて、小言を吐かすであらう。

ト手桶に水のあるを提げてゆき、向うを見て思ひ入れあり

今のやうに、明日の晩とは云うたれど、なか〳〵金は……アヽ、それからそれまで……これはしたり、用水桶の中も、一向埃だらけに

ト手を捲り、桶の中より水垢の附いたる竹の箍、又は古草履の類、埃を引上げ、取捨てるとて、中より件の財布、百兩を出し、思ひ入れあつて

ヤ、こりや財布のまゝに大枚の、しかも小判で……こりや天道の恵みにて

ト空を伏拜む。百姓權八聞いて

百權　天道樣より、おれを拜みやれ。

新左　ヤ、なんと。

ト これにて時の鐘の頭を打込む。

百權　今聞いてゐたこなたの難儀、その金高は二百兩、不足であらうがその百兩、半雜作でもするがいい。

新左　すりや、この金は

百權　わしがのだ。

新左　われが金といふ、證據があるか。

百權　色は照柿、矢筈の紋、絹の財布に小判で百兩。

新左　ヤ。

ト辻行燈の灯にかざし、よく〳〵見て

成る程、違はぬその通り。すりや、この金は

百權　おれが隱した。追ひ詰められて是非なくも、抛り込んだる用水桶。まだその外に大事の一品、濡れて惡さに樋竹へ、隱してあるのもわしが代物。そりやア出しても不通用。その百兩が入用なら貸して進ぜう、遣はつしやい。

新左　アノ、この金を

ト思ひ入れあつて

道ならねども、今さしあたる

百權　遣はつしやるか。

ト新左衞門思ひ入れあつて

新左　暫く借用。コレ

ト百姓權八に向ひ手を合せ、こなしあつて金を懷中する。

百權　恩に着るなら、解いて下さい。

新左　ヤ、すりや、その繩をか。

百權　この繩附きぢやァ送られて、ツイ拷問に金の行き道、白狀されて其方も難儀。それよりおれを逃がしたが、貴樣の勝手と思ふから

　　トこれにて新左衞門思ひ入れあつて

新左　成る程、爰を

　　ト走り寄り、百姓權八の繩を解き

サ、ちつとも早く

百權　世話でごんした……ドリヤ、樋竹の

　　ト探り寄つて、件の神妙劍を取出し

因幡に渡さず、こりやァ此方で

　　ト懷中へ捻ぢ込む。

新左　合ひ役の來ぬ間に

百權　そのうち來やせう。

ト行かうとする。向うを見て思ひ入れ。

新左　あの提灯は

ト辻行燈の灯を吹消す。時の鐘、忍び三重、向うより畑右衛門、酔うたる體にて、箱ぶらを提げて出て來り

畑右　エヽ、あの昆布鱈は、まだ鹽が出かねたか、素的に辛かつた。エヽイ。

ト舞臺へ來る。百姓權八は上の方、新左衛門は下の方へ來る、この時下座より因幡小僧才次郎、頰かむりにて、ウソ〳〵出てくる。

なんだ、行燈が消えたな。コレ、新左衛門どの〳〵。

ト尋ねる。權八、才次郎に行き當り、思ひ入れあつて

百權　ヤ、因幡か。

ト聲立てるを、才次郎「コレ」と押へる。畑右衛門聞きつけ

畑右　ナニ因幡……ヤ、逃げるのか。

ト百姓權八と心得、新左衛門へかゝるを、新左衛門その提灯を叩き落す。これにて、ヨロ〳〵として才次郎に取り附く。才次郎は振り拂つて、前の池へ飛び込む。この間に新左衛門、花道へ行きかゝる

畑右衛門、權八へむしやぶりつくを、權八取つて引敷く。これにて木の頭。新左衛門、金を懷中する。

双方途端よろしく、ひやうし

幕

すぐに通り神樂にてツナギ、引返し

（作者　鶴屋南北

五建目

曾我屋敷の場

役名——鬼王新左衛門。百姓、平井村の權八。弟、團三郎。辻番人、畑右衛門。伊豆次郎祐兼。梅澤屋手代、金八。花菱屋若い者、甚助。盗賊、鐵。鬼王妹、十六夜。鬼王女房、月小夜。

本舞臺、三間の間、正面破れし襖、下の方玄關のかゝり。よき所に佛壇を取附け、鞘をかけし槍かけてあり。上の方障子屋體、誂への門口、禮帳を吊し、柾木の生垣、すべて住み荒れし曾我の屋敷、爰に團三郎、下の方へ大盥を直し、裂れを洗濯してゐる。金八、甚助、立ちかゝり、ワヤ〳〵云うてゐる。曲撥にて幕明く。

ト直に通り神樂打ちつゞけ。

團三　コレサ〱、この衆は、兄貴が明日の晩までと云はれたなら、それまで待つて、その上に埒が明かずば、その時の話にするがよいワ。まだよう〱晝中に、催促もあまり氣がないぞえ。

甚助　イエ〱、晩の事を今から云つて置かぬと、差かゝつて又お斷わりかも知れぬワ。

金八　それだによつて、前以て斷わりに來たのだ。鬼王樣がお留守なら、弟御の團三どの、お前にきつと斷わりましたよ。

團三　ハテ、この衆は、わしが聞いたというて解らぬ相談。兄貴に逢うて掛合はつしやいの。

甚助　それを貴樣に指圖は受けねえ。大きな間拔けぢやアないか。

團三　ナニ間拔けだ。この野郎め、とつけもない世迷言をまき出したな。こゝな亡者の提灯持ちめ。

甚助　どうしたと。亡者とはおれが事か。

團三　われが事だわエゝ。

甚助　この唐變木め。

團三　ナニ、東方朔とは、何が東方朔だ。この業人め。

ト甚助の顔をくらはす。

甚助　うぬ、ぶちやアがつたな。

ト立ちかゝる。金八とめて

金八　コレサ、マア、靜かに云はつしやいな。

甚助　それでも、ぶつたわな。

團三　ぶつてもよいぞ。よい〳〵野郎め。

金八　ハテ、靜かに云ひなさいな。

團三　イヽヤ、靜かに云ふまいワ。おれが內で、おれが云ふのだ。

兩人　そんなら勝手にするがよい。ハヽヽヽヽ。

團三　コレ、わいらは笑つたな。町人に笑はれては、濟まぬぞ〳〵。

ト聲高に云ふ。兩人嘲笑ひゐる。團三無性に中つ腹を云ふ。鳥追ひ唄、通り神樂、向うより月小夜やつし、縞の前垂れ、草履下駄、丸盆に姬糊をのせ、出てくる。跡より十六夜、帽子、振り袖、衣裳、屋敷女中の拵へ、若黨、中間附き出て來り、花道にて

月小　お前は鬼王どのゝ妹御、千葉樣へ御奉公に行きなされた

十六　アイ、十六夜でござります。奥樣のお使ひに、吳服所へ參りがけ、久しうお便りないゆゑに、お立寄り申しましたわいな。

月小　そりやマア、ようお寄りなされた。サア〳〵、一緒にお出で。

十六　お前もお變りなう、おめでたう存じまする。

月小　アイ、變る事もないが、相變らない曾我樣のお屋敷。年が明けても矢ッ張りこの形サ……オヤ、又ばゝアを云ふやつサ。……モシ、お前方、御苦勞だね。

ト供の者へ挨拶する。鳴り物になり、この人數舞臺へ來る。團三郎怒りゐて

團三　サ、今笑つた事をあやまりましたと、團三樣に手を突かぬと、料簡せぬぞ〳〵。

月小　これはしたり、ちつとの間留守を頼んだに、何を其やうに

ト内へ入り

オヤ、お前方、よく來なさつたの……サア〳〵、お前も折角お出でだに、わざつと寄つて行きなさい。

トこれにて十六夜、内へ入る。

團三　イヤア、てまへは妹の十六夜だな。久し振りで來たはお宿下がりか。よく來たの。定めし土産を持つて來たであらうな。

十六　ハイ、お前も御息災でおめでたうござります。今日は奥樣のお使ひの次手。まだ宿下がりには參

りませぬわいなァ。

園三　イヤ、また大概なら宿下がりにも來ぬがよい。來たところが、遊山にはならないで、苦勞を求めに來るのだ。

月小　これはしたり、何の云はずともいゝ事を、ヅカ〳〵と云はないものだ。ぬし達も聞いてゐなさるに

園三　コレ〳〵、姉御、お前が糊を買ひにござつた跡で、わしも手傳うて、仕掛けてある洗濯を始めたところへ、彼奴等が來て、大風な事を吐かすから

甚助　モシ〳〵、月小夜さん、わしやァあの人が業人と云つたから、そこでわしも聲高に云つたものだ

園三　業人と云つたが、どうした〳〵。

月小　これな〳〵、靜かにしねえな。あの子も來てゐるぢやァねえか。温なしくもねえ……して、お二人は、定めしこの間の、あの一件で

金八　左樣サ。昨日鬼王どのに會ひましたが、今日晩方までに、あの鎧をきつと請けるとの事。

甚助　わしが方の百兩は印子の尊像。あの蓮池番屋でお目にかゝり、掛合ひは致したが、夕方までに解らずば、是非とも外へやりますと、鬼王樣へ

兩人　きつと云うて下さりまし。

月小　そりやアモウ、お前方が云はねえでも、わつちらが亭主の……鬼王どのも承知して、金の才覺、殊に昨夜直々應待さんしたといふ事なりや、モウ、きつと仕埒を……イエ、間違ひもござんすまい。晩まで待つて下さんせいな。

金八　ようござります。御亭主と違ひ、行渡りのよいおかみさん。それといふのが、どうでもぬしは

甚助　圓覺寺の堂前で、苦界の勤めをしなさつた、評判者の三日月おさよ。イヤ、あの時分は、戸の明いた間がなかつたね。

團三　それ〳〵、その時分はおれも素見したが、その三日月樣が、兄貴の女房に

月小　エヽモウ、その噂はよしねえな。あの子も來てゐる。お供の衆も聞く手前、お里が知れるわな。コレ、お前方も、晩まで待つて進ぜて下さんせえ。

兩人　待ちは待たうが、その晩方に

團三　鹽花でも振られるな。

月小　これはしたり、其やうな事を

兩人　モシ、賴みましたよ。

ト門口へ出る。

月小　アイ、お近い内に……イエ、廻つてお出で……オヤ〱、癖になる奴サ。

トこの時園三郎、門の戸をバツタリと締めて叩き

園三　性を附けろヨウ。

月小　エヽ、よしねえな。

ト通り神樂になり、兩人捨ぜりふにて向うへ入る。十六夜こなしあつて

十六　左樣なら、わたしやお使ひ先の事なり、もうお暇申しませう。兄さん、鬼王樣へ、よろしう仰しやつて下さりませ。

園三　アヽ、もうてまへ歸るのか。久し振りだに、泊つてゆかれないか。

月小　どうして、屋敷方の奉公に、そんな自由な事が……併し、折角來なさつたに、鬼王どのに逢うて歸りなさんせいな。

十六　アイ、ならう事なら、兄さんに、逢うて參りたうござります。

月小　さうでござんせう。

ト門口に向ひ

モシエ、あの子は、もそつと暇取りやせう。お前方は、外に御用もあらば、足してお出でなさんせぬか。

侍ひ　ハイ〳〵、左樣なれば私しどもは、呉服所へお先に參り、後方お迎ひに參りませう。

月小　それがようござんせう。

十六　そんなら必ず、迎ひに來て下さんせえ。

侍ひ　へイ〳〵、畏りました。

ト通り神樂になり、侍ひと中間は向うへ入る。三人殘つて

園三　モシ〳〵、姉御、あのマア二人の奴等を、晩方までと云つてやらしつたが、もしそれまでに、二百兩といふ金が出來ねば、お預かりの二品も手に入らず、又この上に祐信樣の、御難儀になりうかと、わしはそれが氣になつて

ト涙ぐむ思ひ入れ。十六夜もこなしあつて

十六　樣子は何やら存じませねど、お屋敷にても曾我のお噂。祐信樣はお預けの御身分と、奥向きのお話しを、聞く度每に案じられ、有やうは御樣子を、承はりたう今日幸ひ

月小　さうでござんせう。僅かな事も大仰に、云ひ立てるのは世間の習ひ。何を云うても大枚な、金の

いる事。その相談も女房の役、才覺工面と思つても、いはゞわつちも苦しがり、身を切賣りに恥かしい、切りを叩いた

ト思ひ入れあつて

オヤ、こんなお屋敷者もねえもんだ。ホヽヽヽヽ。ほんに仕掛けた御老母様のおひへの裏。日のかげらねえうちに

トあたりの裂れを取出し、盥の中にて糊を揉みつける。

團三　アヽ、手が冷たからう。わしも手傳はうか。

十六　イエ〳〵、糊付け物をどうしてお前が……モシ、月小夜さん、わたしがお手傳ひ申しませう。

ト立ちかゝる。

月小　成る程、鬼王どのゝ歸りまで、手持ち無沙汰な十六夜さん。そんならお前、久し振りだ、助けて下さんせ。

十六　ハイ、手傳うてあげませう。

團三　成る程、男は役に立たねえ。

ト鳥追ひ唄、通り神樂になり、月小夜、小裂れを出し、十六夜、盥にて糊をもみつける。團三郎戸板

を出す。月小夜、件の裂れを戸貼りにする。この鳴り物を借り、向うより新左衛門、印子の尊像を懐中なし、濡れたる財布を羽織の袂に入れ、足早に出て來り、ズツと入る。月小夜見て

月小　モシ、こちの人。歸りなさんしたかえ。さぞマア何やかやで、心遣ひも……サ、吸ひなさい。

ト長煙管にて吸ひつけ出す。

新左　これはしたり、ちつと氣を附けやれな。

ト叱りつける。月小夜思ひ入れあつて

月小　こりやアわつちが……ハイ、不調法いたしました。モシ、それはさうと、御奉公に行きなさんした十六夜さんが、お使ひ先ぢやというて、寄りなさんしたゆゑ、お前に逢はさうと、とめて置いたわいなア。

新左　アヽ、妹の十六夜か。

十六　兄さん、お變りもなう、おめでたう存じまする。久しうお便りも承りませぬゆゑ、お使ひ先ながら、お立寄り申しましたわいな。

新左　十六夜、よう寄りやつたの。して、今日は奥向きの御用でか。

十六　アイ、呉服所へ、金子を持つての今日のお使ひ。それゆゑ取分け、心遣ひでござりまする。

ト懐中より袱紗包みの百兩を出して思ひ入れ。新左衞門見て

新左　すりや其方が、お使ひ先のその金を

十六　即ち數も小粒で百兩。

新左　アヽ、其方が百兩、小粒の金を

十六　ハイ。心遣ひでござりまする。

トこなし。新左衞門も思ひ入れあつて

新左　成る程、それは心遣ひな持ち物ぢやわいの。

園三　モシ／＼、兄貴、今あの梅澤屋の手代と、大磯の花菱屋が來てね

月小　ほんに、晩方までの約束を、きつと斷わつて行きましたが、お前、其やうな掛合ひを

新左　成る程、致したに相違ないが、昨夜和田樣へ參り、願ひ下ろした金子百兩、やう／＼と借用いたし、その金にて請け戻した印子の尊像。

ト赤地錦の袱紗に包みし厨子入りの尊像を出す。

月小　エヽ、そんならお前が

新左　請け戻して參つたが、道が違うて、それで先から催促に……まだ／＼鎧の金の百兩は、三浦樣へ

願うて置いたからは、これも押つけ參る筈。必ずともに、案じぬがよい〳〵。

月小　それでわたしも、安堵したわいなア。

十六　左樣なら、わたしやもうお暇申しませうかいな。

新左　もう歸るか。

月小　これはしたり、まだろく〳〵馳走もせず、もそつと居なさんせ。今に供の衆が迎ひに見えやうわいなア。

十六　アイ、左樣なら迎ひの來るまで、奥で休んで待ちませう。

團三　それがよい〳〵。其うちおれも一寢入り。

新左　ちつと休みやれ。

十六　迎ひの來るのを待ちませう。

ト通り神樂になり、團三郎、十六夜は暖簾口へ入る。新左衞門、送つてゆくとて、佛壇の紙位牌を見つけ、持つて來り

新左　コレ、女房、この紙位牌に男の戒名。こりや何者の

ト合點のゆかぬ思ひ入れ、月小夜こなしあつて

月小　お前に訊かれて、どうやら話すもおかしいが、そりやァ何サ、死なれたわたしが先の亭主。今日命日だと思ふから、戒名を出して、お前の留守に回向したのサ。いはゞその佛は、佛檀の居候ふサ。

新左　アヽ、死んだといふ其方の亭主か。命日なれば、回向してやるがよい。南無阿彌陀佛々々々々々々

　トまた佛壇へ直し

佛になつてのかゝり人も、緣でがなあらう。ハヽヽヽヽ。イヤ、わしも昨夜は金の工面で、大きに駈け歩いたて。

　ト羽織を脱いで投げ出す。月小夜取つて

月小　さうでござんせう。したが、その骨折りも無駄にならず、ようマア百兩といふ金が

　ト羽織を疊むとて、袂より件の濡れたる財布を出し

モシ、このお羽織の袂に、何やら濡れた……こりやァ財布ぢやアないかえ。

　ト見せる。新左衞門思ひ入れあつて

新左　そりやアノ昨夜……アイヤ、最前大磯から戻りがけ、拾うたゆゑに、袂に入れたを、とんと忘れて

月小　エヽ、拾ひなさつたか。そりやアお前、めでたいの。春の初めの春袋、こりやア仕合せが直りやせうわいな。

新左　イカサマ、こりやよい緣起ぢやわいの。

月小　その緣起にあやかりなさる爲、この財布は解いていゝかえ。

新左　ようなうて。財布ばかりあつても、肝心の金が無うては

月小　それもさうだね。御老母樣のおひえの肩入れ。裂れが足りぬ。丁度幸ひ

ト云ひさま、絲を拔き、財布をほぐす。

新左　アヽ、そんならあなたの召し物の、足し裂れにしやるのか。

月小　アイ、丁度足らいで、尋ねてゐる最中、よい物があつたわいの。

ト小盥の中の裂れと一つに揉みつけ、門口に立てかけし戸板へ、いろ／＼の裂れを貼りつける。其うちに　黑羽二重に庵に木瓜の古き袖、又は蝶千鳥の染め中形、その外、いろ／＼の繼ぎ、中に件の財布の切れを交ぜて貼りかける。此うち新左衞門思ひ入れあつて

新左　ほんに、糊があらば、わしもこの辻番の、御修覆をして置きませうか。

ト辻番火鉢と刷毛を出し、件の糊にて貼りかける。これより變つた合ひ方、かすめて通り神樂。

月小　イカサマ、人といふものは、水の流れと同じとは、よく云つたものだぞ。わたしも生れは東なる浮き中川の川つゞき、平井村といふ在所に育つて、惡い男を持つたゆゑ、流れせはしき長屋の勤め。その賤しいわつちらが、假にも曾我の御家老の、女房になれるとは、ほんに緣づくだね。

ト云ひながら戸貼りする。

新左　イヤ、また身が親どもと同じ扶持人、赤澤の十內とて、これは河津樣のお馬添へ。その者の娘、月小夜と申したを、御主人御存命の砌りより、云ひ號けして女房に持ちしが、舅親の十內が、心惡さに離緣して、その後添への其方も月小夜。

月小　今云ふ通り、お恥かしいが堂前で、三日月おさよと云はれたわつち、それが二度目の月小夜とは手前の氣でも役に立たずと思ふもの。鬼王さん、さぞお前、行屆かない勝でありやせうね。

新左　どう致して、其方こそ、わしがやうな埒の明かぬさんぴん侍ひ。その身貧な男を思ひ切り、去られてうせた以前の月小夜、今では武家へ奉公と、聞けば聞く程道知らず……イヤ、浮世は持ちつ、持たれつだなア。

ト通り神樂になり、向うより祐兼、上下、大小にて、侍ひ三人を隨へ出て來り、門口にて內を窺ふ事あつて、家來へ思ひ入れ。侍ひ、門口に向ひ

侍ひ　たのもう。

新左　ドウレ。

　ト門口に向つて扣へる。

侍ひ　拙者は即ち祐兼が家來。鬼王どの御在宿なるか。この段承れよと主人の云ひつけ。

新左　何とお云やる。工藤の御舍弟、祐兼樣がお使ひとな。即ち拙者新左衛門

　ト云はうとする。門口にて

祐兼　在宿いたさば次郎祐兼、それへ參つて面談いたさう。

　ト合ひ方になり、上座へ通る。新左衛門思ひ入れあつて

新左　すりや、あなた樣が左衛門樣の御舍弟、伊豆の次郎祐兼樣とな。思ひがけなき曾我への御入來。御用の趣き一通り、陪臣なれども鬼王へ、仰せ聞けられ下さりませう。

祐兼　成る程、祐兼わざ〳〵參つたる、仔細と申すは別儀でない。先達て頼朝公より、仰せあつたる印子の尊像、逆澤瀉、今以て延引なす。さるによつて祐信、滿江、お預けの身分。さほどのお咎め受けながら、差上げぬとは言語道斷。この旨きつと承り、殊に依つたら新左衛門、繩打ち來れと武將の嚴命、兄祐經が名代に、罷り越したる次郎祐兼。鬼王、返答は、ナ、なんと。

新左　ハッ。御尤ものお尋ね。右二品のその一つ、多聞天の印子の尊像。即ちこれに

　　ト佛壇より持ち來り、よき所へ置き

今一品は逆澤瀉、二品揃へて今日中に。それまで何卒御猶豫なし下さるやう、祐兼樣、偏へに願ひ奉りまする。

祐兼　して又鎧は、何ゆゑ揃へて

新左　差上げませぬは威しの修覆、今日中にはきつと出來。何卒この儀、祐兼樣

祐兼　身共に願うてくれろとか。いよ〳〵それに相違なくば、申しなだめて遣はさんが、それも眞赤な僞りにて、金の代りにあの品々、慥かに外へ預け物。

新左　イヤ、全く以て

祐兼　左樣でなくば、只今これにて

新左　右申す通り鎧の修覆。

祐兼　然らばすぐさま取寄せ見せい。

新左　サ、それは

祐兼　猶豫なすのは、賣り代なしたか。

新左　全く以て
祐兼　相渡さぬか。
新左　サア、それは
兩人　サア〳〵〳〵
祐兼　返答いたせ。鬼王、なんと。
ト押しかゝつてキッと云ふ。新左衞門當惑の體。通り神樂になり、向うバタ〳〵にて、百姓權八、ツカ〳〵と走り出て、門口にホッと息をつき、こなし。
百權　あの髮結ひ床のごてつきは、おれを尋ねるのでもなかつたか。臑に疵持つ笹原走りと、悑りさせた……それといふのが懷にある、神妙劍のこの一卷
ト思ひ入れあり
なんでもこれで、一元手拵へねばならぬ。
トあたりへ思ひ入れ。戸貼りに干してある財布の裂れにフッと目を附け、立寄り見て
こりやア絹屋で物した財布の裂れに、似寄りの繼裂れ……そんなら昨夜辻番で、貸した百兩、その時の新左衞門が

ト内を窺ひ

鬼王どのゝ屋敷は爰かえ。

ト内へ入る。新左衞門、合點のゆかぬ思ひ入れにて

新左　鬼王どのと馴れ〳〵しく、貴樣は誰だ。

百權　アヽ、そんなら昨夜の暗まぎれ、貴樣はわしが面を覺えぬと見えた。あれ程昨夜蓮池番屋で、しかも金まで

ト云はうとする。

新左　ヤ。

ト思ひ入れあり

其方は覺えがあるか知らぬが、此方は一向

ト逢つては惡いといふ思ひ入れ。百姓權八ムッとして

百權　覺えがねえと云はつしやるが、コレ、覺えがなくば、ないにもしようが、慥かな證據を持つて來て、その時口を明かさぬやう、コレ

ト門口に貼つてある財布の裂れをめくり、持つて來り

コレ、この財布の裂れは、どこから來て、爰の門口、戸貼りの貼りまぜ。こりやアどうしてモシあつたのだえ。

ト新左衞門が目先へさしつける。よき時分月小夜、腰高の古き茶臺に、茶を汲んで出て來り、窺ひゐる。

新左　サ、その裂れは

百權　出どころを云やれ。どうだ。

ト月小夜これを聞いて中へ入り

月小　お前はどこのお人か知らねえが、そりやア今ぬしが途中で拾つた財布。春袋ゆゑ、祝つてわたしが

トこの時、百姓權八と顏見合せ

ヤ、お前は

ト悧りする。

百權　おれが嗅アのおさよだな。

月小　死んだと思つた權八どの

百權　とんだ所で

月小　エヽ。

ト驚くはずみに茶碗を落す。新左衛門見て

新左　ハテ、不調法な。

ト思ひ入れあつて

そんなら常々病死の噂。先の亭主が今爰へ

百權　ヤ。

新左　蘇生したのか。ハテ、仕合せな男だの。

ト目を附ける。月小夜、權八の胸づくしを取つて

月小　コレ、よくお前、騙したの〳〵。よもや嘘ではあるまいと、コレ、朝晩こなたを

ト走りゆき、佛壇より以前の戒名を持つて來り

今も今とてこなさんの、命日忌日と思ふゆゑ、戒名出して回向する。幼な馴染のこなたゆゑ

ト新左衛門へ氣がね。あたりへ思ひ入れあつて

今の夫の聞く手前、外のお方へ面目も、なき仕合せと思へども、云はねばならぬお前の僞り。わたしに稼がせその上に、病氣づいたで女房から、便りをすれば、こなさんは、死んだというて友達

が、知らせて來たを眞にうけて、戒名つけて回向する。それに似もせぬ皆僞り。よくマアこなさん、騙したのノヽ。

ト戒名を突きつけて思ひ入れ。百姓權八、こなしあつて

百權 やかましいワ。死んだ〳〵と云つてくれるな。初春早々縁起が惡いワ。おれも、われも平井村の在郷に育つた轉び合ひ。切りも叩かせ稼がせたは、おれがあがきにやつたのだ。程なくわれが病氣といふ、文が來たので愛想が盡き、おれは死んだ、と成る程噓は云つてやつたが、そりやア道樂者の當り前だワ。誰も賴みもしねえのに、戒名をくつつけて、いらざる事を。われも大きな苦勞性だぞ。

ト戒名にて煙管を拭いて捨てる。

月小 エヽ、さういふこなさん、無法者ゆゑ

百權 イヽヤ、おらア横は云はねえ。それとも云ふ氣があるなれば、爰ぢやア外聞が惡い。おれと一緒に來い。

ト手を取つて引つ張る。

月小 アヽ、コレ、わたしやア

百權　あよべといふに。

ト引立てるを、新左衞門中へ入つて

新左　こりやアこなた、鬼王が女房をどうするのだ。

百權　コレ、女房たアこなさん、誰にこの女を貰はしつたえ。

新左　ヤ。

百權　ハテ、去り狀やらぬわしが嚊アを、曾我の屋敷の御家老に、女房にされちやァ面が立たぬよ。その上おまけが昨夜の百兩

新左　サ、その百兩は

月小　そんなら昨夜出來たる金は

新左　イヽヤ、外から借りた金。

百權　外から借りたその金が、どうしておれの財布の裂れに

ト件の裂れを見せる。

新左　サ、その絹裂れば……他聞の手前。それゆゑその首尾、爰ではどうも

百權　云はれぬ羽目か。さうであらうよ。おれも宿無し同然な、ごろつき仲間の苦しがり、その百兩を

踏まうとか。そんな非道な屋敷なら、ぶつ座つての居催促。曾我樣だけにふんぞつて、貧乏ゆるぎもするのぢやァねえ。マアさう思つて……オイ嬶ア、茶を一杯くれろ。

　ト きつと思ひ入れ。月小夜「さては」と思ひ入れ。新左衞門當惑のこなし。通り神樂になり、向うより畑右衞門、スタ／＼と出て來り、門口から

畑右　鬼王、宿にか。鬼王の盜人はゐるか。畑右衞門が來たぞ／＼。

　ト 内へ入る。新左衞門、ハッと思ひ入れ。百姓權八、手拭をかむり顏を隱す。月小夜、何心なく

月小　コレ、畑右衞門さん、門口から大音に、鬼王の盜人とは、その譯を云ひなさい／＼。

畑右　コレ／＼、内儀、盜人といつてもよい。コレ／＼、新左衞門、貴樣はマア、とつけもねえ事を仕出したな。昨夜番屋へ預かつた因幡が同類、あれ程こなたに頼んで出たに、その跡で取逃がし、おぬしもそこに居合さず、おれ一人が難儀となり、捕へて出さねば盜人の同類と、名代に牢へ入らねばならぬ。サ、昨夜の盜人は、どこへ逃がした／＼。云はねばこなたを連れて行つて、おれが身拔けをせねばならぬ。ちよつと來て、云ひ譯をしやれ／＼。

　ト 新左衞門を無體に引立てる。これにて切なき思ひ入れ。

新左　サヽ、その預かりの盜人は、きつと張り番いたしたなれど、ついした拍子に

月小　エヽ、そんなら昨夜あの番屋へ、預かりの盗人を、逃がしたゆゑにお前の難儀。その盗人も、そんなら慥かに

ト百姓權八へ目を附け、ハツと思ひ入れ。

畑右　お屋敷内にいろ〱と、取込みあるも又例の、曾我樣ならぬそわ〱と、枝に枝出るお館の

祐兼　その御家風もお定まり。貧乏神の住みよき屋敷。

畑右　その辻番に預かつて、逃がした盗人詮議して

百權　捕へて見れば恩のある、お方をよもや……イヤ、とんだ話しだ。

トこの聲に畑右衞門思ひ入れあつて

畑右　ヤ、さういふわれは、慥かに昨夜の

百權　頭、昨夜はおやかましうござりました。

ト圖々しく云ふ。畑右衞門うろたへ

畑右　ヤア〱、わりやァ昨夜の盗人だな。この屋敷にゐるからは、いよ〱違はぬ、新左衞門は同類だな。

ト立ちかゝる。

月小　アヽコレ、滅相なっ、どうしてマア鬼王どのが

畑右　それでも現在、コレ〳〵、爰に盗人が

百權　コレサ、あんまり盗人々々と、大風に云はつしやるな。その盗人の物を、また物する者もある。併し爰にゐる鬼王どのに、斷わつてわしは逃げたよ。そんならおればかりが惡くはあるまい。新左衛門に譯を聞くがよい。おいらは逃がしたから逃げたのだ。

祐兼　こりやあの者が申すも尤も。察するところ、曾我の家來の新左衛門、わりや盗みを致すか。イヤサ、夜盗を致すか。

新左　全く以て、何しに左樣な

祐兼　イヤ〳〵、盗人夜盗に相違あるまい。ヤイ鬼王、現在夜前の盗人を、隱まふからは、同類に相違ない。アノこゝな、大泥坊めが

ト新左衛門を引附け

コリヤ、ヤイ、曾我と工藤は近しき一家、その家柄でありながら、いかに貧苦に迫ればとて、武士のあるまい夜盗を引込み、盗人の上前取るか。貧乏屋敷はそれでも濟まうが、一家の端の工藤の恥辱、そこに心が附かぬのか。貧すれば鈍すると、白痴の知れねえ

ト散々に打擲して

大盗人め。エヽ、もぢ〱としたこの面わえ。

トくらはす。新左衛門思ひ入れ。月小夜立ちかゝるを、百姓権八引附けて

百権　イカサマ、何と云はれても口出しはあるめえ。サ、新左衛門、あなた方の見る前で、おれを縛つて突き出さずば、貴様も武士が立つまい。サ、縛つて出しやれ。出すならおれが貸した百両も、附けて出しやれ。サ、縛らつしやい。縛れよ。縛らないか〱。

ト両手を組んで身を摺りつけ

預け先から紛失の、盗人を縛つて出せば、おれも又、斯う〱だと云ひ上げる。金を返して身抜けをするか。よもや身抜けは出来まいな。

ト足にて蹴飛ばし、きつとなる。新左衛門思ひ入れあつて

新左　この身に誤まりあるゆゑに、ヂッと無念を堪ゆれば、附け上がつたる盗人めが

百権　盗人なれば、縛つて出せ。

新左　サ、それも一旦借用の、あの百両にてこの尊像。取戻したるばつかりに

ト件の尊像を見せる。月小夜、権八思ひ入れあつて

月小　そんなら怪しいその金で、請け戻したる印子の尊像。
百權　サ、縛つて出さぬか。お砂利の上でありやうに、コレ、口があるわえ。
新左　云はれて見れば皆尤も。
月小　憎いながらも以前は縁者。
百權　去り狀やらねば亭主だぞ。
月小　サ、それゆゑ非道と思へども
新左　手出しのならぬも出所の、惡い百兩借用の
月小　敵持つ身のその上に
新左　金が敵の鬼王が
月小　重なる難儀、道ならぬ
新左　知らぬ事とてさしあたる
月小　それに遣うて今更に
新左　仕様もやうも情なき
月小　今の夫婦が災難は

新左　朝夕祈る佛神の

月小　しるしもないか、鬼王どの

新左　月小夜……これを思へば世の譬へ

月小　四百四病の病ひより

新左　貧ほど辛い

ト思ひ入れあつて

ものはない。

ト兩人縋り寄つて思ひ入れ。

百權　その世迷言は聞くにやァ及ばぬ。女房の月小夜、昨夜の百兩、持つて行かうか。

畑右　イヽヤ、行くならわりや盜人、縛つて出せば此方は苦拔け。サア、われを縛つて

ト百姓權八へかゝるを振り切る。この途端に權八、懷中より件の神妙劍を落す。祐兼、新左衞門、目を

附け

新左　さもうづ高き袱紗の裂れ。慥かに一卷

ト寄るを、百姓權八ちやつと取つて懷中する。

畑右　縛つて出さねば

トかゝるを、祐兼聲かけ

祐兼　イヽヤ、この者盗人ながら、見どころのある面魂ひ。尋ね問ふべき用事もあれば、只今よりして放し囚人。畑右衛門とやら、其方にも祐兼が、尋ねたき仔細もあれば、矢張りそのまゝ

畑右　そんならあなたの仰せと申し、役人中へ右の訴へ。

百權　首の細つた權八に、御用とあるは、慥かにこれでか。

ト件の一巻をちよつと見せる。

祐兼　コリヤ、他人の見る前。ナ、必ずその品外々へ、ナ、合點がいたか。その代りにはわれが命は、刀に掛けて

百權　ヘイ、有り難うござります……さて、これからは百兩の、返事するまで動かぬ屋敷。その質草にやアその尊像　金の濟むまで

ト尊像を取つて懷中する。

新左　ヤ、すりやその尊像

百權　こなたに貸した昨夜の百兩、金の濟むまで預かるのだ。

新左　イヽヤ、その品渡しては
祐兼　鬼王、尊像渡さねば、只今鎧もろともに、この祐兼に相渡すか。
新左　サ、その儀は何卒
祐兼　然らば百金償ふまで、その御佛はあの者へ
新左　ハテ、是非もなきかさ押しに、否む時にはどのやうな
月小　難題云ふも知れぬお裁き。そんならあなたの詞に附いて、少しの内など、ナ、モシ、ぬしへ渡して

ト新左衛門に呑み込ませる。

百權　あの百兩の金の濟むまで、曾我の屋敷に居しかつて、貧乏ゆるぎもするものか。
祐兼　今宵限りに尊像、鎧、揃へて渡せ、さもなくば、太郎祐信、その身の寂滅……畑右衛門、其方はこの家の目代がはり
畑右　あたり離れず善惡を、あなたへ告げる役目の私し。
新左　左樣なれば祐兼樣
祐兼　二品揃へて

月小 今宵のうちに

百權 貸した百兩、女房もろとも

新左 それも後まで

祐兼 權八とやら

百權 旦那樣、首尾して參りませう。

ト唄になり、祐兼に侍ひ附き、畑右衞門附添ひ向うへ、百姓權八奧へ入る。新左衞門、月小夜殘る。

合ひ方。

月小 ほんに、死んだというて、わたしを騙した權八どの、今に心の直らぬ惡者。鬼王どの、お前必ず美人局だと、疑つてくんなさるなよ。

新左 そりやモウ、日頃から眞實な其方。なに疑うてよいものかいの。

ト此うち奧より十六夜、團三郎、出て來り

團三 コレ〳〵、兄貴、月小夜どの、今の奴等がお前方を、苛めるを見ては、腹が立つて〳〵、一番わしも云はうとは思つたが、そこを辛抱して、奧で泣いてゐた奴サ。

十六 日頃から心の惡い工藤の御舍弟。あのお方はお上よりの、お使ひとも思はうが、憎てらしい町人

十六　體のあの人は、そんならあれが
月小　アイ、わたしが以前の亭主でござんす。
十六　ほんに見るから憎體な
　　ト新左衞門が肩先の破れしを見て
新左　コレ、兄さん、お前の着る物が、ソレ、いかう破れて、綿が出るわいなア。
團三　アヽ、そんなら今のもやくに、布子の肩を破りをつたか。
月小　ほんにこりや大疵だ。ざつと四百値が下がつたわえ。マアく、そんな物を着て見ともない。
　　姉御、ちよつと縫つて置かつしやいな。
十六　そんならわたしがちよつと縫うて……と口ぢやア云ふが、針仕事はお恥かしいが、一向なもの
　　サ。
月小　そんならわたしが、ちよつと縫うてあげやうかいなア。
十六　そんなら縫うて上げておくれ。
　　ト針箱を出す。
十六　合點ぢやわいな……サ、兄さん、ちやつと脱ぎなさんせ。

新左　なんの〳〵、大事ないわいの。

園三　ハテ、見つともないわな。併し、その布子を脱いだら、兄貴は風邪をひくであらう……オヽ、爰に先刻おれが被つてゐた蒲團がある。これでも着なさい。

新左　イヤ〳〵、大方十六夜の、迎ひの衆が見えやうぞや。

十六　イエ〳〵、まだ間がござんせう。

新左　そんならちよつと縫うてもらはうか。

ト布子を脱ぎ、襦袢一つにて蒲團を着て

しつかい雲助の行跡ぢや。

ト十六夜、布子を取つて

十六　これはしたり、此やうにマア破りをつて、こりやモウこのまゝでは……モシ、姉さん、こりや繼をあてざなりますまい。裂れがあらば下さんせ。

月小　アイ、その針箱の中にあるわいな。

十六　アイ〳〵。

ト中より小裂れを取出し

丁度よいのがあつたわいな。

新左　どうでもよい程に、早う縫うてくりや〳〵。

十六　アイ〳〵、合點でござんす。

　　ト合ひ方になり、入り相の鐘鳴る。肩の破れへ件の裂れをあて、伏せ繼をする思ひ入れにて

何がマア兄さんに、誤まりがあるか知らぬが、いかに身貧といひながら、假にも曾我の御家來を身穢ない町人が、打ち打擲に着る物まで、此やうに破るとは、さぞお前、口惜しうござんせう。女子のわたしでさへ、その心根が思はれて、熱い涙がこぼれますわいなァ。

　　ト繼をあてながらハッと泣く。

新左　これはしたり、ぶち打擲にあうたおれさへ、辛抱してゐるを、なんの側から、いらぬ事に涙をこぼして、エヽ、役にも立たぬ。サ、よくばちやつと、着せてくれ〳〵。エヽ、寒くなつた。

十六　さうでござんせう。もう出來ました。サア、お着なされませ。

新左　ヤレ嬉しや。さて寒い目をした。アヽ、これで人心地になつた。

　　ト布子を着る。時の鐘にて向うより最前の供侍ひ、小箱の提灯を持ち、走り出て來る。此うち團三郎行燈へ灯をつける。

侍ひ　ハッ、お迎ひに參りました。

月小　ほんに大儀でござんした。コレ、十六夜さん、迎ひが來たぞえ。

十六　アイ〳〵。左樣なら、あまり暗うならぬうち、お暇申しませうわいなア。

新左　さうぢや〳〵。折角見えたに馳走もせいで、ア丶、悪い耳を聞かせたわいの。

十六　また其うちにお宿下がりに、參るでござりませうわいな。

ト門口へ出る。

月小　ほんにその時は、きつと馳走をしようわいな。

園三　なんならおれが送つて行かうか。

十六　イエ〳〵、あの衆が見えたゆゑ、送るには及びませぬが、モシ、月小夜さん、日頃から苦勞の多い兄さんを、この上ともにお前のお世話、妹のわたしはお屋敷奉公、心に任せぬ事なれば、もしもわたしが身の上に・御苦勞かける事あらば、その時どうぞ

月小　エ。

十六　ハイ、おさらばでござりまする。

ト唄、時の鐘にて、淚を隱し、心殘して、家來附き、向うへ入る。

新左 ほんに女といふものは、妹めも内のしがを見居つたで、氣を落して行きをつたが、アヽ、兄弟は持たうものぢや。

月小 そりやア男と違つて、隅々に心が付いて、しほらしいは女の兄弟。

團三 コレ〳〵、姉御、女の兄弟は心が附くが、男の兄弟は役に立たぬといふ事かえ。

月小 なにサ、さうぢやアないが、なんぼあの子が行渡りがよいというても、そこが武家に育つただけわたしが見ては、行渡りがないのだわな。

新左 コレ〳〵、月小夜、可哀さうに、なんで妹が行渡りがないのぢや。

月小 ハテ、そりやお前、モウあの年になつては、親兄弟の難儀を見ては、町家の娘子供なら、直にお前、勤め奉公をする氣になるが、何をいつても、そこらにかけちやア、誠に世間知らずの鷹揚な生れサ。

新左 コレ〳〵〳〵、月小夜、其やうに云へば、あの妹が、どうやら心が足りぬやうぢやが、よし又勤め奉公を致さうというてから、侍ひの妹に、遊女賣女の奉公させては、先祖へ立たぬわえ。

トきつと云ふ。

月小 オヤ〳〵、お前大分熱くなりなすつたの。あの妹御に、遊女賣女の奉公を、させぬと云ひなさる

が、現在女房のわたしは、切りを叩いた上がりだか、それぢやァお前、侍ひが立ちやすまいね。
新左　ヤ。
月小　それぢやァお前女房に、恥をかゝせるそのせりふ。いはゞわたしやァ切り見世女。それが曾我の御家老の、おかみさんになつてゐては、世間へ定めし外聞が惡からう。お氣に入らずば、去つてしまひなさいな。エヽ、味な事を云つたものだ。
新左　味な事とは、われが事だワ。いつにない亭主に向つてそのせりふは、アヽ聞えた、こりやァてまへ、先の亭主が來たゆゑに、おれに氣を持たせて、前の亭主へ戻る氣になつたのぢやな。
月小　イヽエ、さうぢやァねえが、お前こそ女房のざんそう。飽が來たなら去りなさいな。
團三　コレ〳〵、兄貴々々、何だか急に姉御が、去れ〳〵といふが、成る程古い亭主が來たからの事だ味に搦むなら、去つてやりなさい〳〵。
月小　エヽ、何だな、間拔けの癖に、兄贔屓して見苦しい。コレナ、こなさんは小遣ひでも折々心附けるのは、この姉さんがしなさるよ。何の事だ、きいた風な。氣に入らずば、出してやりねえな。
新左　どうでもこりやァ元の亭主へ、氣が替つたと見えたわえ。
月小　サ、さう思はゞ、去り狀附けて、暇くんなさいな。

新左　オヽ、暇をやらう。われが方から其やうに云ふ事なら、成る程・今から暇をやらう。
月小　おかたじけ。重荷を下すよ。その氣になつたら、サヽ、去り狀くんな。
新左　オヽ、やりかねるものか。
團三　コレ、兄貴、去り狀書くなら、ソリヤ硯箱。
　　ト取つて出す。
新左　書いてやるぞ〳〵。エヽ、心の知れた
　　ト腹の立つ思ひ入れにて、サラ〳〵と去り狀認め
サ、お定まりの三下り半。
　　ト差出す。月小夜取つて
月小　オヤ、よもやお前が書きはしないと、思つた去り狀
新左　飽きも飽かれもせぬ女房、われが方から俄に緣を、切られてほしいと見たゆゑに、身共も武士ぢや、心の變つた女なら、後とも云はず暇の狀を
月小　これさへ取りやア、わたしが心もさつぱりと
新左　濟んだであらうが、濟まぬは身共。併し去り狀渡しても、女房が持參の諸道具を、附けてやるま

で、矢張りこの家に

園三　爰の屋敷の、ごろつきになつて居なさい。

月小　イヽエ、わつちが持つて來た、着類諸道具なくなつたを、附けてやるまで居ろといふ、それは大概云ひ草で、實のところはたつた今、捲き上げられた尊像が、欲しさのまゝにわたしへ去り狀、大方そこらでござんせう。

新左　いかにも其方が云ふ通り、先の亭主へ預けた尊像、欲しさのまゝに女房を離別、書いて渡した暇の狀。

月小　古い亭主は情無し男、今の亭主は物云ひが、几帳面でも錢無しの

園三　その男にも去られたこなた。亭主は二人、同じ內

月小　あつて甲斐なき他人向き。

新左　その他人ゆゑこの內に、いはゞ女房のかゝり人。

月小　亭主のお前が承知なら

新左　女房……ではない他人の月小夜。押しも押されぬ鬼王が、何にも云はず暇やるも、あの尊像に怪我あつては……イヤサ、穢れた女の心にや迷はぬ。キリ〳〵爰を出て行け……ではない、滅多に

外へ、出やんなよ。

ト唄になり、思ひ入れあつて團三郎附いて奥へ入る。月小夜殘り

月小　エ、、何の事だ。去り狀くれた女房に、必ず外へ出るなとは、手前勝手な鬼王どの。何だかこいつは氣が知れねえの。

ト行燈の前にて、去り狀を讀みゐる。合ひ方、時の鐘、奥より百姓權八出て來り、思ひ入れあつて

百權　所詮いつまで居たとても、百兩といふ金は出來ない。百兩の抵當に金佛一體と、この佛を取上げ婆ァにして、ドリヤ、お歸りなさらう。

ト行かうとする。月小夜縋つて

月小　コレ、權八どの、死んだと思つて今日までゐたに、よう息災で來なさつた。コレ、誠にお前が死んだと思うて、爰へも嫁づき

百權　エ、、やかましいワ。おれがちつと逢はぬうち、亭主を持つたふんばりめ。退きやァがれ。

ト踏み倒して行くを縋つて

月小　待ちなさいな。そりやてん〳〵の我が儘氣儘といふものだよ。わたしだといつて、老い朽ちた身ぢやァなし、亭主が死んだと聞いちやァ、水氣のあるうち嫁づかねえと、末が詰らぬわな。それ

で亭主を持つたのを、お前も野暮らしく燒き餅か。エヽ、いゝ機嫌だの。

百權　それだといつて、だき寢をした女房が、外の亭主を持つたを見ては、なんぼおれがやうな惡黨でも、ちつとは色氣もあるから、小腹も立つのサ。

月小　さう思ふなら、女房にしてくんな。

百權　馬鹿を云へ。假にもわれは侍ひの女房だワ。

月小　イヽエ、わたしは去られたよ。

百權　ナニ去られた。よく嘘を吐きやァがる。

月小　イヽエ、眞面目だよ。その證據はの、コレ、去り狀を取つたわな。

ト見せる。百姓權八思ひ入れあつて

百權　アヽ、そんならてめえ、あの鬼王と別れたか。

月小　別れねえでなるものかな、こんなマァ貧乏屋敷に、いつまで居られるものだ。お前といふ男の來たを幸ひ、直に暇を取る氣になつたのサ。あの鬼王どのも、お前に百兩の借りはあり、その代りに尊像は取られる、仕樣がなさにいさくさなし、去り狀を寄越した心はノ、てつきり向うも

ト權八に囁き、相談して

斷ういふ羽目だらうよ。

百權　アヽ、そんならおれが盜んだ百兩は貸し下され。代りに取つたこの尊像を取らうが爲に、われに去り狀寄越したのか。

月小　サア、わたしはさう思ふが、あんまり押の強い鬼王どの。そこでわつちが思ふには、斯うして裏を掻いてやらうと思ふはな。

ト又囁く。百姓權八呑み込み

百權　こいつは奇妙だ。マア、何にしろその相談で

ト兩人あたり見廻し、月小夜は佛壇より厨子入りの觀音を取つて來り、手早く尊像と入れ替へ、渡し思ひ入れあつて

月小　斯うして置いて鬼王を仕事にかけ。昔に返つてお前の女房。

百權　成る程、てめえは少つとのうちも、鬼の女房に氣のきいた年增になつた。

月小　エヽ、嬉しがらせるを久し振りで聞いた。コレ、この尊像とやらはわたしが預かるよ。

ト懷中する。

百權　なぜ〳〵。そりやァ百兩の代りだワ。此方へ寄越せ。

月小　イヽエ、こりやアわたしが預かるよ。お前にこれを遣つて見なさい。又わつちを置去りにして、どこへ行かうも知れぬ。こりやア滅多には遣らねえよ。

百權　イヤ、如才のない事を云ふな。それにしても、昔取つた杵柄だ。色氣はたつぷりだぞ。

　　　トいちやつく。

月小　エヽ、よしねえな。

百權　エヽ、いゝぢやアねえか。

月小　それだといつて

百權　べら坊め、寄りやアがれ。

　　　ト引寄せる。此うち新左衞門出かゝりゐたりしが、この時、ツカ〳〵と寄つて

新左　間男見附けた〳〵。

月小　アヽ、鬼王さんか。

新左　ナニ、鬼王さんか。コリヤ、ヤイ、月小夜め、うぬ、大それた。おれを差置き、男と引附いて、見附けたぞ〳〵。間男されては武士が立たぬ。重ねて置いて四ツにするぞ。

　　　ト立ちかゝろ。百姓權八思ひ入れあつて

百權　アヽ、モシ〳〵、御免なさい〳〵。いはゞこの女も、まんざら知らぬ仲ぢやァなし、無駄を云つたが誠となり、ツイ只今のやうにふざけましたは、私しが不調法、どうぞ御料簡……と云つたらよからうが、否だヮ。

新左　ヤ、ナニ

百權　コレ、この女を貴樣、どこから貰つた。いはゞ其方が間男だ。四ツに切らうが、八ツに切らうがおれが勝手におれが切るヮ……嗅ア、怖くはないぞ。此方へ寄つてゐろ〳〵。

トこの時團三郎、出かゝり聞いてゐる。

新左　コリヤ〳〵、女房とは、そりや何を申す。その月小夜は、身が女房ぢやぞ。

月小　エヽ、よしてもおくれ。お前、これ程わつちに去り狀をくれたによ。それに女房も氣が強い。コレ、去り狀を持つてゐるわな。

ト出してびらつかせる。

新左　成る程、去り狀は書いたなれども、今更急に暇はやらぬ。それともおれが手を切つて、外へ行く心なら、最前この男が取上げた。あの尊像を戻して行け。

百權　イヽヤ、女房と尊像とは筋違ひだ。おれが嗅アをこの年月、なぐさみものにした上に、首にかゝ

つた昨夜の百兩、貸した代りのこの尊像、持つて歸るは當り前だワ。

月小　アヽ、そんならお前の心は、あの尊像が欲しいから、わたしに去り狀寄越したのかえ。そりやアお前、あんまり水臭い仕方だ。サ、權八さん、去り狀があれば、天下晴れてお前の女房だ。サ、あよびねえな。

ト百姓權八の手を取つて行かうとする。團三郎この中へ入り

團三　イヤ〱、あの尊像を置かにやア、動かす事アならねえぞ〱。コレ、兄貴、あれ程までに苦勞したあの尊像、ナニ遣る事があるものか。殊に彼奴は盜人だワ。訴へ出れば首が飛ぶ。サ、甘口なうち、置いてゆけ〱。

百權　成る程、おらア盜人だ。百兩盜んで隱した夜盜、その金を又借りる奴は、同類だワ。おれより先へ首が飛ぶワ。二才野郎め、サ、おれを訴人して、この尊像を、取戻して見やアがれ。

ト團三郎を蹴飛ばす。團三郎思ひ入れあつて

團三　エヽ、コレ、兄貴、こなたはいかに苦しいとて、とんだ奴から借りた金。今ぢやア此方の枷になり、口出し手出しもならねえワ。また、姉御も姉御、貴樣もこれぢやアあんまりだぞ。

月小　コレ〱、兄さん、あんまり氣を揉みなさんな。昔馴染と紅花色だ。死んだと聞いては此やうな

貧乏屋敷に居るのも苦界、先の亭主が息災なら、ナニこの内にゐるものか。去り状取つたでわつちは身抜け。跡で兄弟、苦勞をしなさい。

園三 エヽ、女の口から圖々しく。もう料簡が

ト月小夜を引附ける。

月小 エヽ、姉さんをどうするのだ。

園三 姉ぢやアねえぞ。

ト ぶつてかゝる。新左衞門とめる。月小夜、莨盆の火入れを取つて

月小 エヽ、イケふざけた

ト打ちつける。この火入れ、誤つて新左衞門の眉間にあたり、疵つく

新左 コレサ、園三、マア何事も、急かずに、ゆつくり

園三 イエ〳〵、あんまり無法な

ト新左衞門の疵を見て

ヤヽ、兄貴、こなたの眉間に、それ〳〵、疵が

トこれにて新左衞門探り見て、無念の思ひ入れあつて

新左　すりや現在の亭主の面へ

月小　アイ、疵を附けたは、去られた女房。

新左　ヤ。

月小　怪我で附けたる月小夜が、月のさはりのお前の面、手が廻つても女房の、わたしがしたなら、持ち出す時は、磔刑道具。サ、願つて出なさい。

新左　武士の面へ女房の手で。疵附けられては新左衛門、一分立たぬ。相手は以前の亭主の權八。

トきつと云ふ。

百權　ヤ。

新左　そこを云はぬが魚心、あれば其方も水心、あるのは人情。その尊像を戻してくりやれ。

百權　そんなら女房が間違ひで、縁は切れても今日までも、亭主といつた鬼王ゆゑ、疵附けられちやァ成る程立つまい。爰は一番聞き分けて、尊像やらうが、月小夜は

新左　ハテ、去り狀をやるからは、勝手に連れてゆくがいゝ。

月小　いよ〳〵わたしを、權八さんへ

新左　くれてやるからその尊像

團三 欲しいばかりに女房に、疵附けられてもチツと辛抱。
新左 その辛抱もお主の爲ゝどうぞ身共に
百權 返してやらうワ。昨夜の金には足が附く。百兩返さぬ其うちは、この家がばねにいしかつて、當分會我の居候ふ。久し振りでの女房と、つもる話しも今までの、亭主がゐちやァ欝陶しいのサ、金戻すまで兄弟二人、氣轉きかして爰を出ろ。
ト思ひ入れ、新左衞門もこなしあつて
新左 こりや尤もなこなさんの云ひ言。わしも百兩拵へて、尊像受取るそれまでに、前の亭主と今の亭主、一つに居るもひよんなもの。當分わしがこの内を、離れてゐませう。其うちこの家を貴樣に貸した。さう思つて、遠慮なう
百權 アヽ、そんなら女房ばかりでなく、當分内まで月小夜に附けて
月小 それぢやァわつちも氣が置けねえ。その相談に極めなさい、
團三 イヤ／＼、さうはならぬぞ。女房取られたその上に、内まで取られていゝものか。兄貴が何と云はうとも、おれがならぬぞ／＼。
百權 ならずばいゝワ。サァ嬶ア、支度をしろ。

ト身拵へする。新左衛門とめて

新左　イヤ〳〵、弟が何と云はうとも、大事ない〳〵。矢ツ張り爰にござりませ……コレ、團三、兄が
この家を出て行くも、心あつてのおれが頼み。必ずわれもその心で、居候ふ同然に、小用を足し
て進ぜるがよい。

團三　そんならわしは、跡に殘つて

月小　使ひはやまもあるものだ。お前は殘つてゐておくれ。

百權　今夜は殊に祝言同然。コレ、酒を五合買つて來な。

ト錢を二百投げてやる。

團三　アノ、おれに酒を買ひにやるのか。

百權　キリ〳〵行つて買つて來い。

團三　イヽヤ、おらア否だ〳〵。

新左　これはしたり、用があらうと殘した團三、云はるゝ通り、買つて來て進ぜやれ。

團三　それだといつて

百權　否だといふのか。

新左　イヤ〳〵、弟は行く氣ぢや。隨分素直に、ナ、早う使ひを

ト錢を持たせ、團三郎を無理に外へ突出す。

團三　兄貴がそれほど云はれるなら、行くは行かうがわしは、あの二人を見ると、腹が立つて〳〵

新左　これはしたり、行かぬかえ。

團三　エヽ、行きますわいの。

ト通り神樂、時の鐘、團三郎小言を云ひながら向うへ入る。

新左　サア、これからは、主のわしが出て行きます。お客人、その代りにやア件の品を

百權　戻してやらう。百兩がはりの、印子の尊像。

ト袱紗を取つてあたりへ捨て、厨子のまゝ渡す。新左衞門取つて、

新左　再びわしが

ト見ようとする。月小夜、中に立つて、怪我のふりにて、行燈へさはり、わざと消して

月小　オヤ、粗相な、あかりが

百權　消えたら幸ひ

新左　痴話を側から

月小　見られぬ趣向の
百權　丁度闇星に
新左　行燈が機轉を
月小　きかして爰を
百權　キリ〳〵こなたは

ト立ちかゝる。新左衞門は門口へズツと出て、戸をしやんと閉して

新左　おしげりなさい。

ト唄になり、新左衞門外にて思ひ入れ。百姓權八、かき金をかけ、月小夜は件の火入れの割れしに踏みかけ、思ひ入れあつてこれを取上げ、落ちてある袱紗も足にさはるゆゑ、拾ひ取つて思ひ入れ。百姓權八、月小夜の手をひき、障子の内へ入る。新左衞門、門口に殘つて思ひ入れ。

新左　現在女房が亭主の面へ、疵を附けてもそれなりに、辛抱をしたその上に、家まで明けて渡したも、この尊像を取り得ん爲。さはいへ惡黨、あの權八、もしや渡せしこの品に

ト厨子を開き、星あかりにかざし、よく〳〵見て

暗うて定かならざれど、持ち歸つたる尊像と、どうやら佛體

トよく／＼星にかざし見る事あつて

ヤヽ、こりやコレ正しく佛壇の、觀世音の古ひし佛。……ヤヽヽヽ。眉間の疵の無念さへ堪へしに、又ぞろ渡せしこの似せ物。これといふのもあの權八、おのれ踏んごみ、この詮議。

トきつとなる。時の鐘の頭を打つ。新左衞門しやんと裾をからげる。凄き合ひ方。身拵へして戸をしやくる。明かぬゆゑ、門の戸を毀し、暗きゆゑあちこち尋ねる。この時向うより園三郎歸り來り、門口に窺ふ。新左衞門、探り／＼障子屋體へかゝる。この時向うより前幕の鐵、菰をかぶり、窺ひ／＼出て來て、花道に臥しゐる。新左衞門、屋體へ探り寄つて屏風を取りのける。向うの壁、抜けるほど切りこぼちあり、月小夜、壁より出ようとしてゐる。園三郎は内へ入り、火打箱を打つても、急き込んでゐるゆゑ火のつかぬ思ひ入れ。新左衞門は月小夜の髻を探り見て

新左　月小夜か……おのれ權八。

ト云ひさま、あたりを闇討ちに切り散らす。月小夜、件の壁の崩れより逃げんとするを、捕へて引戻す。此うち園三郎行燈を附ける。このうち門口の生垣を押分け、百姓權八、尊像を咬へて、忍び出て、内を窺ふ。内には新左衞門、月小夜立廻りの物音を聞き、權八、神妙劍と一緒に持つて、うなづいて花道へ足早に行き、臥したる鐵に足踏みかける。鐵、起上がつて、百姓權八を見て

鐵　づきが廻つた。神妙劍は

トこれにて權八、鐵を引寄せ囁き、すぐさま菰を取つてかむり、一散に向うへ入る。鐵、門口へ來り生垣より忍び入る。此うち團三、灯をつける。これにて壁の崩れを見て

新左　すりや、この壁の崩れより

團三　兄貴、大事の尊像は

月小　亭主が持つて、爰から先へ

ト云はんとする。新左衞門一太刀浴せ、立廻つて、髻を摑んで白刃を振り上げる。月小夜、その手をとめんとして、新左衞門が布子の肩先を摑み、思はず件の繼のあたりし所を引切るはずみに、布子の破れより百兩、書き物と共に、バラ〱と落ちる。新左衞門は月小夜が髷の中より、件の尊像落ちるに心附かず、團三郎側より見附けて

團三　それ〱、兄貴、髷の中から何やら落ちたワ。

と行燈を差出す。

新左　ヤヽ、なんと。

ト取上げる。

月小　お前の肩の繼の中、落ちたは慥かに

ト百兩と戒名を見て

小粒のまゝに大枚な、こりやコレ金を

新左　亂れし髪の中よりも、落ちたは尊像。そんなら惡黨權八が

月小　持つて行つたは、あれも似せ物。

團三　兄貴の布子に縫ひ込む金）

ト金を集め、包みし反古を見て

ヤヽ、金百兩と、書いたは妹十六夜が

月小　同じ手跡のこの戒名。コレ

ト差出す。新左衞門よく〳〵見て

新左「春月院妙貞信女、建久四年正月八日、俗名十六夜。御回向願ひ奉り候ふ」。……ヤヽヽ、

そんなら妹は吳服所の、金にて兄を助けんと

月小　先へ歸つて死ぬ覺悟。今日を卽ち命日と、殘し置いたる百兩の

新左　云ふに云はれぬお主の切端。さるにても月小夜が

月小　二人の亭主へ二つの似せ物。どちらへ誠を盡しても、道に背くと思ふから、髷の中より落したその品、拾つた主は鬼王どの。

新左　心づくしも知らぬ身の、現在女房を、切るもお主の

月小　お爲と聞いて妹御の、その肩先へ縫ひこむ百兩。直に持ちゆき、鎧の質請け。

新左　そんならこれより、直さま質屋へ

ト金と尊像を取上げる。この時向うより畑右衞門出て來て、門口に立ちぎく。

團三　鎧を持つてござるなら、この上下で

ト麻上下を差出す。新左衞門着ようとして

新左　併し女房がこの苦痛。見捨てゝどうも

月小　イヽエ、わたしは去られた女房。他人になんの

トこの時畑右衞門ズツと入り

畑右　鬼王、われには

トかゝるを立廻りにて、件の肩衣を引かけ、きつとなる。

月小　せめて去り狀

新左　未來の門火

畑右　その品渡せ。

トかゝるを立廻つて、袴の紐をしめる。團三郎、去り状を火鉢へ打込む。煙硝火立つ。

月小　それで成佛。

團三　モシ

ト月小夜へ思ひ入れ。

新左　南無阿彌陀佛。

鐵　うぬを

ト崩れより出てかゝるを、團三郎取つて押へる。新左衞門、畑右衞門をあて、花道へ行き振りかへる　これを木の頭、月小夜ガックリとなる。畑右衞門見事にかへる。これをキザミにて、双方よろしく、ひやうし

幕

引附けると曲撥になり、新左衞門氣を變へ、逸散に向うへ入る。直に通り神樂のツナギ、引返し。

（作者　鶴屋　南北）

六建目　大詰

見越ヶ嶽對面の場

役名━━━工藤左衛門祐經。伶人、舞鶴實ハ曾我の姉、二の宮。曾我五郎時致。八幡三郎行氏。宇佐美七郎祐貞。坂本三郎祐家。四の宮小次郎祐忠、伊東六郎祐國。久須美太郎祐光。宇佐美藤次祐政。因幡之助妹、花琴。二の宮妹、星月。狩野妹、稻瀨。久須美妹、名越。伊豆次郎祐兼。鬼王新左衛門。辻番人、畑右衛門。蜘蛛澤の瀧夜叉。源の賴家公。

本舞臺、三間の間、正面岩山にて、坂を取りつけ、左右岩組み。上の方に谷へ落ちる仕掛け、下より杉の梢。蔦かづら搦みしを見せ、、、、見越ヶ嶽といふ石の傍示。爰に祐兼、上下大小にて、奴姿の土肥平、美登平、庵に木瓜の箱提灯を持ち、立ちかゝりゐる。瀧夜叉、忍び頭巾、黒の形、龕燈を持ち、兩人に取卷かれゐる。時の鐘、時の太鼓にて幕明く。

ト兩人提灯を上げ、瀧夜叉と立廻りあつて

二人　怪しい曲者、動くまいぞ。

瀧夜　滅多な事をなされまするな。殊さら提灯の紋どころは、庵に木瓜、あなたは正しく

祐兼　身は次郎祐兼なるが、忍び出立ちの其方は……そちや蜘蛛澤の瀧夜叉ならずや。

瀧夜　左樣でござります。かねてあなたのお頼みに任せ、今日左衞門祐經樣のお館へ、頼家公入來につき、夜明けぬうちに山手より、屋敷へ忍ぶもあなたのお指圖。

祐兼　見越ケ嶽の麓なる、兄祐經が山屋敷、今日頼家入來あり、柏ケ峠の椎の木にて、作らせし富士太鼓、それにて舞樂の調べあれば、山神を祈りの爲、この今樣こそよき幸ひ、其方木陰に忍びゐて頼家はじめ兄祐經、失ふ手段を、合點か。

美登　殊更工藤の一門方、頼家公のお供とあれば、館の內は殊なき取込み。

土肥　そのドサクサが最屈竟、必ずともに仕損じなきやう、瀧夜叉どの

瀧夜　そりやア氣遣ひさつしやるな。見らるゝ通り、手馴れし尖り矢携へて、庭の茂みの梢に忍び、射て落さんは瞬くうち。お氣遣ひなされまするな。

祐兼　忍びに名を得し其方なれば、この一大事も頼みし祐兼。然らば汝は夜明けぬうちに、屋敷へ忍んで

瀧夜　心得ました。

トこの時鷄の聲、明六つの鐘鳴る。皆々思ひ入れあつて

二人　ありやもう明六ツ。

祐兼　程なく夜明け。汝は急いで

瀧夜　梢づたひに谷間の館へ。さうだ。

ト山颪になり、瀧夜叉、件の半弓を腰に附け、上の方の松の梢の藤かつらに取附き、谷へ下りろ。禪のツトメになり、向うより畑右衞門走り來り、舞臺を見て

畑右　祐兼樣でござりまするか。

土肥　おぬしは畑右衞門

美登　あわたゞしい

二人　何事だ〳〵。

畑右　祐兼樣の御意をうけ、鬼王の樣子窺ふところ、月小夜の裏切りや、あの十六夜めの調達で、鎧の金も手に入り、尊像もろとも鬼王が、二品持つて、アレ〳〵、これへ參ります〳〵。

祐兼　爰へうせたらその二品、この方へ奪ひ取つて、この祐兼が鎌倉へ差上げ、兒左衞門に鼻明かせ、狩場の役目は身が勤め、三ケの莊もあはよくば

畑右　祐兼樣の領地となり

美登　工藤の家は、あなたが丸呑み。

祐兼　コリヤ、密かに〳〵。

ト又禪のツトメにて、向うより新左衞門、鎧を抱へ、尊像を懷中して、足早に出て來り、提灯の紋を見て

新左　庵の内に木瓜しるせし提灯は……あなたは次郎祐兼樣。

祐兼　左樣申すは鬼王か。

新左　ハッ、先刻あなたの仰せありし、逆澤瀉の鎧、まつた印子の尊像、持參いたして祐經樣のお館へ。心も急けば祐兼樣。これにて拙者は

ト行かうとする。皆々取卷き

皆々　鬼王、待て。

新左　この鬼王に用ばしあるか。

畑右　その二品をてまへから、祐經樣へ上げられては、ちつと此方が不都合だ。

祐兼　二品身共が受取つて、兄祐經へ持參する。鬼王、二品

皆々　置いて行け。

新左　さては持参の二品を、祐兼様に渡せとか。

祐兼　いかにも。

新左　然らばこの品あなたへと、申したいがマアならぬ。曾我の難儀となつたる二品、鬼王持参仕る。餘人のお手は決して借りぬ。祐兼様、道を開いて、お通しなされて下さりませ。

祐兼　ヤア、舌長なその詞、是非とも身共が受取らう。たつて渡さにや、刀にかけて

ト立ちかゝる。新左衞門きつととめて

新左　すりや、どうあつても二品を

畑右　この畑右衞門がその鎧

トかゝるを立廻つて

新左　指でもさすと、手は見せぬぞ。

祐兼　重ね〴〵のその廣言。殺らして二品奪ひ取れ。

畑右　鬼王、キリ〳〵

皆々　渡せエヽ。

新左　たつてとあらば是非がない。どいつ、どなたの容赦なく、から竹割りだが祐兼様、道おッ開いて

通さつしやい。

祐兼　面倒な。ソリヤ。

三人　うぬを

トかゝるを、新左衞門見事に立廻つてキツとなる。これより鳴り物を借り、正面の坂を小楯に大ダテよろしくあつて、新左衞門、畑右衞門を切り下げ、奴二人も切る。この時祐兼鎧を奪ひ取り、駈けゆく。新左衞門立廻つて石坂へ上り、立廻りのうち、件の鎧を舞臺前の岩間へ取り落す。兩人思ひ入れあつて

新左　ヤ、、折角手に入るあの鎧

祐兼　この谷底は工藤の庭先。

新左　すりや、祐經樣のお屋敷へ

トト畑右衞門起上がり

畑右　觀念ひろげ。

ト切りつける。立廻りよろしく、三人山の上にてキツと見得。曲撥の合ひ方にて、この道具、三人を乘せたまゝ、知らせにつき、段々と引上げる。下より山幕附いて上がり、この人數を隱す。下座にて

呼び 今様はじまり。

ト呼ぶ。花やかなる鳴り物に變り、知らせにつき、山幕切つて落す。

本舞臺、正面三間の間、黑塗り柱の御簾屋體、高足、黑塗り高欄、鍍金の金物、雲霓彩色の蹴込み。日覆より白梅の吊り枝。すべて祐經館の道具。結構に仕立てたる道具に納まる。又知らせにつきセリ上げ。

眞中に管絃太鼓を飾り、上の方に舞鶴、小結ひ烏帽子、千羽鶴のちらし、庵に木瓜の紋附きの素袍の上を引かけ、白梅の枝を持ち、眞中に祐經、羽織衣裳、鳥兜と、秋野の狩衣を持ち、片手に今の鎧を持ち、下の方に時致、小結ひ烏帽子、蝶ちらし、庵に木瓜の紋つきの素袍、厚綿なる衣裳、右の手に撥を持ち、左にて件の鎧に手をかけし體。富士太鼓舞樂の見得。白梅、空より散りかゝりし體。右の鳴り物にて三人をセリ上げ、道具納まる。鳴り物變つて三味線入り音樂の合ひ方。三人キツとなつて

祐經 池の氷の凍々は、風わたつて解け、窓の梅の北面は、雪封じて寒し。

舞鶴 袖ひちて結びし水のこほれるを

時致 春立つ今日の風やとくらん。

祐經　春立つ風や德若に、御代萬歳と壽を、祝す左衞門祐經が、この庭先へ落ちかゝる、鎧はまさに逆澤瀉。

舞鶴　今思はずも、管絃ある、この庭先へ澤瀉の

時致　その鎧ゆゑ、養父の難儀と聞きつるが、今手に入るも二所權現、神の應護にありけるや。

祐經　まつた左衞門祐經が、武運全きしるしなるか。何にもせよ

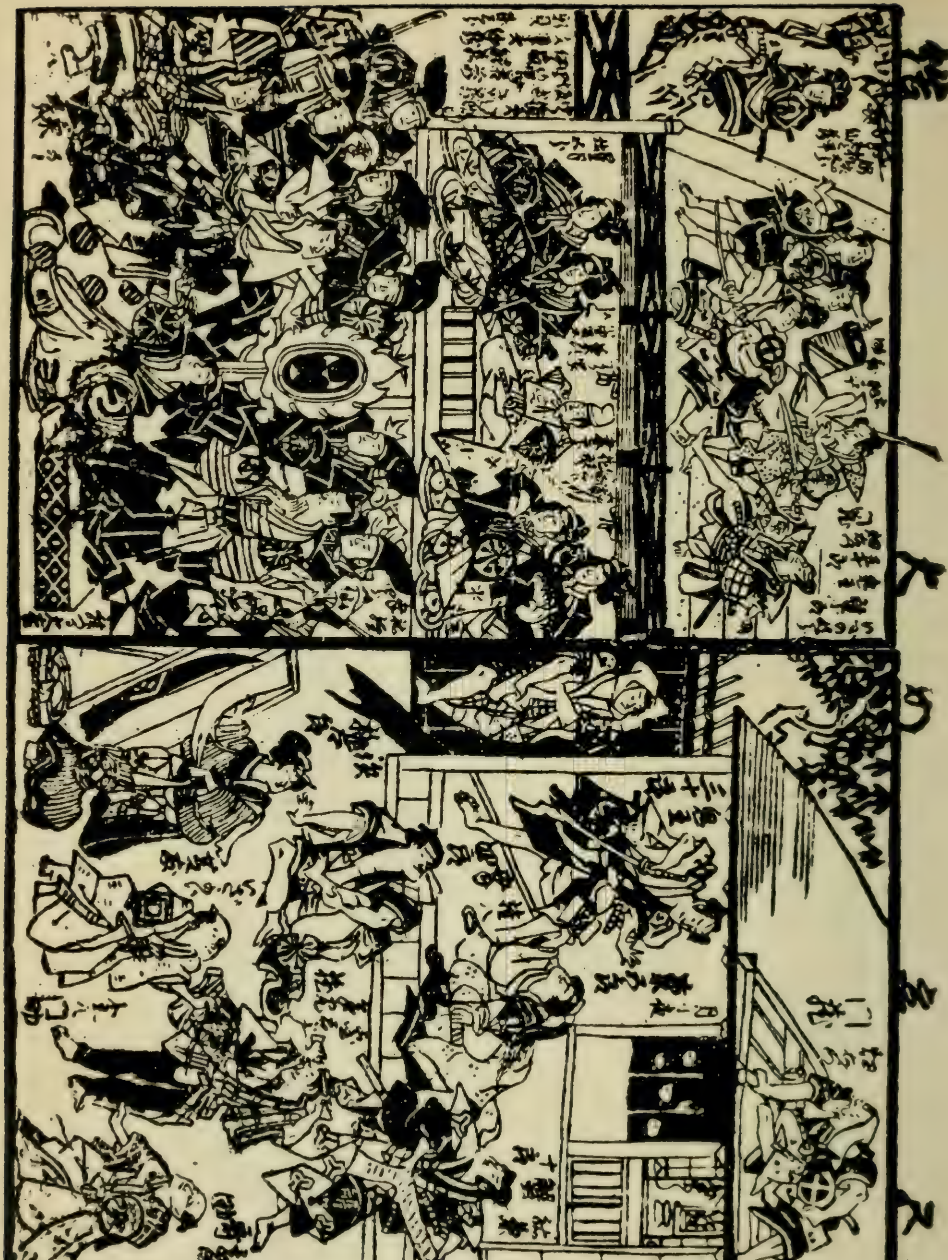
舞鶴　正しき神の

時致　奇瑞ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時奥にて

呼び　賴家公のお入り。

ト呼ぶ。對面三重になり、祐經は上の方へ行かうとする。時致は鎧の草摺を扣へ、きつと見詰める。この時奥より八幡三郎、ツカ／＼と出て、件の鎧を取つてきつとなる。祐經思ひ入れあつて二疊臺へ上がる。舞鶴、時致、右の三重にて花道へ行く。この途端に奥より、祐政、祐光、祐國、祐忠、祐家、祐貞、いづれも立烏帽子、庵に木瓜の紋附いたる花色の素袍にて出て來り、對面三重一ぱいに並よく住ふ。舞鶴、時致、花道に扣へる。また奥にて



呼び　頼家公のお入り。

ト二度目の呼び。下り葉になり、正面の御簾巻上げろ。眞中に頼家、金烏帽子、狩衣、刺貫、中啓を持ち、左右に花琴、稲瀬、星月、名越、めい〳〵小結ひ烏帽子、庵に木瓜の素袍の上ばかり着たる形にて、樂の道具を持ち控へゐる。鳴り物打上げ、管絃になり

祐貞　頼家公の御前間近く、兩人、席を

皆々　下がれエ、。

トこれにて舞鶴、時致思ひ入れ。

祐經　今日我が君頼家公、祐經が山館へ、お成りのお沙汰あるにつき、饗應のため、舞樂のまねび富士太鼓。これ卽ち皐月下旬の御狩の砌り、山神を祈りの御神樂、それを表して今日の催ふし。

八幡　名におふ伊豆の赤澤山、柏ヶ峠に生ひ立ちし、三本の椎の古木、これをひかして管絃太鼓にしつらひ、神を諫めの舞樂の調べ。左衛門祐經の指圖に依つて、この如く飾らせ置きし役目の某、陪臣なれども八幡の三郎行氏。卽ちこれなる着長こそ、曾我どのへお預けある、源氏八領のその一つ、逆澤瀉の御鎧、御前に飾り置きましてござりまする。

ト頼家の上の方、鎧櫃の上へ逆澤瀉を飾り、よき所へ下がつて扣へる。

花琴　頼家公のお側には、工藤の一族、因幡之助光基が妹の花琴。
稲瀬　狩野之助宗茂が妹稲瀬。
星月　二の宮太郎朝忠が　妹　星月。
名越　久須美彈正景光が　妹　名越。
祐貞　お供は斯く申す、宇佐美七郎祐貞。
祐家　坂本三郎祐家。
祐忠　四の宮小次郎祐忠。
祐國　伊東六郎祐國。
祐光　久須美の太郎祐光。
祐政　宇佐美藤次祐政。
稲瀬　兄々達の名代とて
女皆　頼家公を警固のた
祐貞　いづれも工藤の
皆々　一門類葉

祐政 殘らず相詰め

皆々 ましてござる。

賴家 祐經をはじめ、一門の諸大名、この賴家を警固の役目。神妙の至り、滿足に思ふわやい。

皆々 ハヽア。

祐經 いかに行氏。

八幡 ハア。

祐經 今日左衞門祐經が、館に於て舞樂の調べ、その役人と申せし兩人。一人は婦人、次なるは勇々しき小冠者。紋は庵に木瓜を、附けたるは心得ぬ。して兩人は何者なるぞ。

八幡 御尤もの御尋ね。あの兩人は、今日樂の役人にて、一人は舞鶴、今一人は小蝶といへる伶人を、二の宮樣より送られし、近しき一家御一門、素袍の紋もそれゆゑに

祐經 工藤一家の庵に木瓜。ハテ、勇ましきあの若者。樂人とあらば、これに飾りし赤澤の、その椎の木のこの太鼓、賴家公の御前にて、樂の調べを、サヽ、打てよ兩人。

時致 ナニ、討てよとは面白い。指圖に任せ某が、いでや打たんず、その太鼓。

ト立上がつてキツとなる。舞鶴抑へて

舞鶴　アコレ、御前でござんす、何事も
時致　でも
舞鶴　ハテ、行儀に〳〵。
時致　合點だ。
ト思ひ入れ。岩戸神樂になり、兩人とも思ひ入れあつて、三寶に乘せたる撥を持つて舞臺へ來る。此うち大名皆々「アリヤ〳〵」の聲。引張りよろしく、「ドッコイ」と納まる。
祐經　今日の管絃は富士太鼓。古へ津の國四天王寺に、淺間といへる樂人あり
時致　その淺間とはかねて聞く、富士を討つたる無道人、それに等しき御身こそ
祐經　ヤ、なんと。
舞鶴　富士と淺間のその起り
時致　詳しう語り
二人　申すべし。
トきつとなる。これより三保を㕝せし誂への合ひ方。
舞鶴　さても古へ内裏にて、七日の管絃ありし時、樂に名を得し浪花潟、淺間といへる者さむらふ。

時致　それにも増る住吉に、富士とやいはん名譽の樂人、比べて見れば雲の上、猶はるかなる富士の峯。

八幡　その富士だにも世を早う、あかで別れしその人の

舞鶴　討たるゝ事もあの太鼓、父の敵もあの太鼓、打ちて心を慰めて、打てや〳〵と責め鼓。

祐經　すりや、その富士は討たれしか。

舞鶴　されば候ふ。討たれし富士が妻、子供、五つと三つを守り立てゝ、恨むは淺間と思へども、勅を蒙むる樂人の

時致　近寄る事も情なや、無念に送る月も日も

舞鶴　十八年のたつか弓……されば古歌にも、信濃なる、淺間ヶ嶽も燃ゆると思へば

時致　富士の煙りの甲斐やなからん……甲斐やなからん伊豆の國

祐經　柏ヶ峠の露霜と

時致　ヤヽ、なんと。

祐經　いでその頃は、安元二年神無月、中の二日の事かとよ。東下りや駿河舞。これこそ富士が舞ひ衣

ト件の狩衣を見せる。

舞鶴　模樣は野邊の草づくし、桔梗、苅萱、破帽額、秋野の摺りし狩衣、たふやかに着なしつゝ、東尾

崎を鞭打ちて

八幡　木の間隠れに磨かれし、月の出汐や赤澤の、恨みの椎の木あの如く

祐經　名けて卽ち富士太鼓、討たれしも富士、討つも富士、やがて皐月の富士ヶ根に

時致　ヤ、なんと。

祐經　サ、富士を討たれて無念なか。

時致　さん候ふ／＼。

祐經　天晴れ健氣の小冠者が生立ち。その有樣を見るにつけ、悔んで返らぬ遠矢の射損じ。

時致　その遠矢こそ父の落命。今日ぞ仇討、討たいでおかうか。

祐貞　ナニ仇討を

皆々　討つとは何を

舞鶴　サ、打つは卽ちあの太鼓、赤澤山の椎の木を、作りなしたる富士太鼓。

時致　椎の木なくばやみ／＼と、父も討たれじ、恨めしや、思へばこれなる太鼓こそ、打てばそのまゝ父の仇。持つたる撥を劍と定め

ト立ちかゝる。舞鶴キッととめて

舞鶴　嗔恚の焔は太鼓の烽火の、天にあがれば雲の上人。

ト謠ひがゝり。これより地へ取り

〽誠の富士おろしにたへずもまれて、裾野の櫻、四方へパツと散るかと見えて花衣、差す手も引く手も伶人の舞なれば、太鼓の役は、元より聞ゆる名の下、空しからず、類ひなや、なつかしや。

ト此うち時致、祐經に立ちかゝらうとする。舞鶴、扇を開き、舞の模様にてとめる。上の方、梅の梢より瀧夜叉、弓矢をつがへて祐經を覘ふ。時致、撥を持つて太鼓を打ちながら立廻りよろしくあつて梅の梢をキツと見て

時致　梅の梢に窺ふ曲者。

瀧夜　南無三。

時致　エイ。

ト撥を手裏劍に打つ。瀧夜叉見事に飛び下り

瀧夜　祐經、觀念。

ト切つてかゝる。祐經立廻つて投げる。瀧夜叉起上がつて行くを、時致捕へて襟髮を摑み、締めあげ

る。瀧夜叉苦しみ、落入る。

皆々　これは

ト祐經見て

祐經　太鼓の役を勤むる童、我れに刃向ふ曲者を、何の苦もなく仕留めし勇力。天晴れ健氣のその振舞ひ。

時致　かゝる匹夫が刃向ふゆゑ、もし過ちのある時は、この年月の望みも空しく水の泡。それゆゑ彼奴は、まツこの通り。

ト見事に投げ捨てる。

祐經　この年月の望みとは、して若者には、望みあつてか。

時致　望みといふはこなたの首。親の敵、祐經觀念。

八幡　ヤレ、早まるな。

ト隔てる。舞鶴、時致を留める。祐經思ひ入れあつて

祐經　この祐經を親の敵と、憤激なすべき小冠者が振舞ひ。仔細ぞあらん、ナヽ、なんと。

舞鶴　お尋ねなうても此方より、願うてもなき今日只今。舞樂の役人舞鶴と實名憚り、入り込みし妾

こそ、世に亡き河津が實子なる、一萬箱王が姉、二の宮と申す者。祐經樣、時世につるゝこの姿お恥かしう存じまする。

祐經 さては河津が胤なりとや。いつぞや箱根へ社參の砌り、曾我へ養子の十郎祐成、折よくその節面談なす、その一萬に似寄りの面ざし。もしやあれなる若者こそ

時致 その一萬が弟の箱王、北條どのゝ烏帽子子にて

祐經 曾我の五郎時致なるか。

舞鶴 三年ぶりにて今日只今

祐經 絶えて久しき二の宮、時致。

時致 東下りの祐經どの

祐經 ハテ珍らしい

三人 對面ぢやなア。

ト此うちうしろ「アリヤ〳〵」の聲よろしく「ドッコイ」と納まる。舞鶴、時致をとめてきつと見得。

時致 親の敵、祐經觀念。

八幡 ヤレ待たれよ時致樣、皐月下旬の富士野の狩倉、惣奉行たる左衛門樣に、過ちあつては曾我の御

時致　難儀。時節を待たれよ、御兄弟。

舞鶴　すりや、その役目濟むまでは、手出しもならぬか。姉者人弟 時致、ハテ是非もなき

時致　エヽ、いま〳〵しい。

ト三寶を摑み碎く。

祐經　まだその上に、曾我の越度は逆澤瀉、鎧は思はず手に入りしが

八幡　その鎧も尊像も、忠義の鬼王手に入りしと、願書を添へて拙者へ訴へ。さすれば曾我への疑ひも

ト願書と尊像とを出す。

祐經　今日晴れ渡る春霞、御狩終らば討たれてくれん。證據に遣はすこの一品。

ト烏兜を取つて差出す。時致取つて

時致　祐經どの〻下され物。落手いたせし樂人が、敵の首を烏兜

舞鶴　皐月下旬の役目も終らば

祐經　討たれてくれんが、見事討つかよ。

時致　おんでもない事。まツこの通り

ト兜を引裂く。中より切手二枚落ちる。舞鶴取つて

舞鶴　こりやこれ狩場の

祐經　切つて本意を、遂げよ時致。

時致　して、その頃は

祐經　河津が形見、敵討。この狩衣を

ト管絃太鼓の上へかける。仕掛けにて富士の形にかゝる。皆々見て

時致　太鼓にかゝる狩衣の

ト思ひ入れ。祐經、白梅の枝を取つて狩衣の上を打つ。白梅散つて白雪と見える。

祐經　形は富士の

舞鶴　ヤ。

祐經　裾野で逢はう。

時致　祐經どの

舞鶴　コレ。

トよろしく入れ替つて

三人　さらば。

ト　かけりこなり、アリヤ〳〵の聲、引張りよろしく

幕

杜若艶色紫

かきつばたいろもゑどぞめ



来十一日より
大々叶

杜若艷色紫

序幕

向う兩國の場
萬壽屋寮の場

役名――浪人、佐野次郎左衛門。駕籠舁き、お守り傳兵衛。萬壽屋太平次。船頭、金屋金五郎。萬壽屋娘、お村。蔦屋佐次郎。非人、づぶ六の三。中間、權平。若黨、丹治。藝者、お鳥。若い者、利助。見世者師、甚太。口上云ひ、三右衛門。見世物師、太郎一。男藝者、歌十。梁田伴藏。釣鐘彌左衛門。藝者、お岸。同、お民。女輕業、玉本小三。萬壽屋の遊女、八つ橋。杜若姐え、土手のお六。船橋次郎左衛門實ハ修行者、願哲。

本舞臺、三間の間、正面、蛇娘の看板掛けし見世物小屋。布まぜの幕、木戸前よろしく、三右衛門は木戸番に立ち、上の方に輕業の高小屋、玉本小三丈、ひゐきゟと柿色へ白あがりの幟を立て、下の方に茶店、揚弓場の後ろを見せ、こゝに願哲、麻衣、深き菅笠、襟につんぼといふ小札を掛け、敷き蓙

の上に鉦を打つてゐる。側にづぶ六の三、同じく古菅笠、乞食の形にて座つてゐる。丹治、一本差し若黨の拵へにて狀箱を持ち、權平、中間の姿にて、奪ひ合つてゐる。見世物師萬八、半七、太郎二、この二人を留めてゐる。仕出し大勢立ちかゝつてゐる。すべて向う兩國の體、さんげ〳〵、辻打ち、揚弓の音にて幕明く。

ト皆々捨ぜりふにて二人を留め

萬八　コレサ、行き違ひの喧嘩なら、込む所だ。不請しなさい〳〵。

三右　此方の小屋の前では御免だ。喧嘩なら、脇へ行つてもらはう〳〵。

半七　見た所が、二人ながら屋敷衆だ。大方、酒の上から始まつた事でごんせう。

太郎　大概な事なら、不請しなさい〳〵。

丹治　イヤ〳〵、不請ならない〳〵。エヽ、權平め、その狀を見せやァがれ。

權平　おきやァがれ。うぬは何か、おらが屋敷をお暇の出た、次郎左衞門が若黨の丹治だな。浪人者の痩せ臑を嚙る二才野郎め、この狀へ指でも附けると、腕骨を擲き折るぞ。

丹治　何をこの駄折助め。その手紙は、慥かにうぬが主の伴藏が、あの町人の大金持ち、釣鐘彌左衞門の所へ屆ける狀であらう。いさくさの無い文言なら、おれが見ても大事ないワ。又、見せられぬと

權平　云つちやァ怪しいワ。サア、白ッ子なら、見せろ〳〵。箆坊め、旦那の狀の封を切つて、なに、途中で見せられるものか。馬鹿を云やァがれ。

ト狀箱を引つたくつて、丹治をくらはす。

丹治　うぬ、ぶちやァがつたな。

ト立ちかゝるを皆々とめて

皆々　ハテ、不請さつしやい〳〵〳〵。

三右　お前も早く、行きなさい〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて引分けてゐる。このうち矢張り辻打ち、權平立廻りのうち、木刀を落し、足早に下座へ入る。丹治追ひかけんとするを、皆々とめる。仕出しは捨ぜりふにて下座へ入る。木刀落しあり。

丹治　コレエ〳〵。この手合ひは、なぜ相手を逃がした〳〵。濟まねえぞ〳〵。

三右　コレサ〳〵、お屋敷さん。大概なら不請してやんなさい。

三人　お前、おとなしくもない。どうしたものだ〳〵。

丹治　ヤイ〳〵〳〵。おとなしいの、おとなしくないのといふ、筋ではないぞ。身共は豐島の御家中、

佐野次郎左衞門が家來、この程旦那は御浪人。それといふも同家中に、梁田伴藏といふ奴があつて、其奴が仕業で、旦那は御浪人。その惡者の伴藏の中間が、持つてうせるあの狀を、見ようといふのを、てめえ達が譯も知らずに、なぜ逃がした〳〵。サア、野郎を、連れて來い〳〵。

萬八　モシ〳〵、そりやアお前、無理といふものだ。喧嘩と見たから引分けました。それほど連れて來いと云はつしやれば、居るか居ないか知らないが、こゝらを探して進ぜうよ。

半七　ソレ〳〵、もし輕業へでも入つて居るも知れぬ。あそこへ入つて見さつしやりませ。

丹治　そんならてめえ達も、共々尋ねてくれるか。

太郎　懸り合つたが不請だ。尋ねてやります。

丹治　きつと尋ねて下さいよ。

三人　心得ました。これは迷惑な事だ。

ト、辻打ちになり、四人は、ワヤ〳〵いうて上の方へ入る。三右衞門は蛇の小屋へ歸り、竹を持ち、捨ぜりふ。この時、蛇の小屋の幕を揚げ、釣鐘彌左衞門、町人の一本差しにて、何やら相談したる體にて出てくる。

三右　旦那、もうお歸りなされまするか。御用は方附きましたかな。

彌左　これは若い者。暫時も稼業の邪魔を致した。さぞ不請であらう。これは餘り些少ぢやが、酒でも飲みやれサ。

ト懐中より一分出して遣る。ぶ六の三これを見てゐる。

三右　これは旦那、有り難うございます。斯樣な事なら、いかほどでもお邪魔をなされませ。ハヽヽハ。

彌左　又々樣子によつては參らずばなるまい。

トあたりを見廻し、願哲が側へ寄り

コレ／＼、願哲坊、何事も首尾よくやつたら、禮はずつしり、

ト云はうとするを、願哲咳をして紛らす。彌左衛門呑みこみ

オツト、承知いたした／＼。委細の事は青柳へ行つて、詳しく頼む工面だが、コレ、商賣とはいふものゝ、あの器量で蛇使ひとは、惜しいものだ。

三右　この頃は太夫が拂底ゆゑ、よんどころなく出なさるが、モシ、いゝ氣な姐御だね。

彌左　イヤモウ、女にしては剛的なものだ。コレ、亭主は無いかの。

三右　有りやすよ。有りは有るが、まことに亭主は結構人、役に立たず。お守り傳兵衛といつては、小

指にいぢられてゐやす。あれがほんの、鬼の亭主に間抜けがなる。この頃は追ひ出されてゐやす

彌左　えて、あのやうな烈しい女には、其やうな亭主があるものよ。時に、青柳で一つ飲まうが、おぬしも行かぬかえ。

三右　そりやァ有り難うござりやす。お供いたしやせう。

ト行かうとする。

づぶ　モシ〳〵、旦那、わつちもめえりやせう。一杯振舞ひなされませ。

ト酔ひたる思ひ入れにて立ちかゝる。

彌左　アヽ、埒もない。てまへ達に飲ませる酒があるものか。

づぶ　なに、ねえ事があるものだ。おらァ今朝から京屋の油揚げで、四人こなから三度きめたが、飲ませねえな〳〵。

三右　エヽ、ふざけるな〳〵。

づぶ　ナニふざけるものだ。こなたは二朱か一分か貰つたからよからうが、おいらは今日は貰ひが無いから、酒でも、振舞つて下さい〳〵。

彌左　エヽ、附くな〳〵。

づぶ 附いてもいゝわな〳〵。

ト辻打ちになり、彌左衛門に三右衛門附き、づぶ六の三は捨ぜりふにて、下座へ入る。すぐに向うより金五郎、袷廣袖、白綿入れ、やつし、下に浴衣を着たる船宿の形、下駄がけ、金屋といふ枕箱を提げて出てくる。後より勘八、判人の拵へ、單衣羽織を挾み、裾をからげ、呼びながら附いて出て來り花道にて

勘八 コレサ〳〵、金屋の金五郎ぢやアねえか。待ちやれ〳〵。

金五 オヽ、こなたは判人の勘八どのか。

勘八 コレ〳〵、勘八どのも氣が強い。われはあの、額俵屋の小三が譯を、どう附ける〳〵。

金五 サア〳〵、尤もでござりますが、往來ばたで人も聞きますから、マア、あすこまでござりませ。

勘八 どこまでも、行きませう〳〵。

ト辻打ちになり、兩人本舞臺へ來て、有りあふ床几に腰をかける。

金五 モシ〳〵、勘八さん、あの小三が事は、もう四五日、不請ながら待つて下さらぬか。

勘八 ナニ、又待てか、久しいやつサ。コレ、あの小三は、一體おれが判で、額俵に勤めをしてゐたものを、てめえといふ蟲が附いて、それからの氣紛れ。どこへ鞍替へに出しても、おぬしが附いて

廻るによつて、親方も思ひ切つて、年のある女を、三十兩なら渡さうと、この勘八に話された。そこで、おれも、どうぞして、てめえの手が切れるやうにと、横網の見世物師を頼んで、この頃は輕業の見習ひにやつておくが、それでもおぬしは、しみしつこく附きまとふが、それほど欲しい女なら、三十兩で渡さうと、相場はとうに極つたが、今に其かたが附かねえ。今日中にも埒を明けにやア、唐天竺へなりと鞍替へだ。さう思やれ〳〵。

金五　サア〳〵、さう云はつしやるも皆尤も。知らつしやる通り、小間物屋の奉公人、三十兩といふ金引負ひしたらまだな事、さうなうては所詮出來ぬ身分ぢやが、わしが兄の傳兵衞どのに、連れ添ふ女房は、評判者のお六どの。あの人を頼んでおいた事、こなさんもその節に、承知さしつたらやござらぬかいの。

勘八　サア、まんざらあの姐御の頼み、マア、その時は呑みこんだとは云ふものゝ、あんまり延び〳〵になるが切なさ。久しいやつだが、ぶつかけて見るのよ。そんなら、こなた、きつと三十兩の金の工面を

金五　氣遣ひさつしやるな、男まさりなお六どの、どの道、譯を附けませう。

勘八　そんなら必ず頼んだよ。遲いと、小三は、奥州へなりと鞍替へに出すよ。

金五 案じなさるな。呑みこんでゐるよ。

勘八 ア、、その呑みこみが矢ツ張り案じられる。

ト變つた輕業の鳴り物になり、捨ぜりふ云うて勘八引返して向うへ入る。金五郎跡を見送り

金五 まづ、あゝは云つてやるものゝ、三十兩といふ金を、あのお六どのへ工面を頼むも、あんまり此方が心ないといふもの。殊に、兄貴の傳兵衛どのは、山の宿の内を出てゐられるげな。兄貴の縁の無い時は、いはゞ、此方は猶の事、赤の他人の金五郎。ア、これに附けても、ちつとなりと、小三めに逢ひたいものだが。

ト思ひ入れ。この時輕業の小屋の中にて

口上 東西。

ト辭する。鳴り物打ちあげる。

いよ〳〵此ところ太夫玉本小三、綱のもとへかゝりまする。

ト輕業の鳴り物になり、上の小屋の上へ、玉本小三、振り袖、襷がけ、娘輕業の形にて、綱渡りの見得、青傘をさし、鞠を遣ひながら半身出かゝつて、思はず金五郎を見て、いろ〳〵氣を揉む思ひ入れ。

金五郎も見て

金五　アヽコレ〳〵、小三か。今も今とて、てまへの事で、判人の勘八と。……コレ〳〵。

ト懐より文を出し

マア、何にしろ、この文を。

ト打附ける。誤まつて小屋の中へ落ちる。小三の影、小屋へ隠れる。

南無三、わきへ落ちた。こりや堪らぬ事をしたわい。

ト本意なげに思ふ所へ、矢張り鳴り物にて、權平、スタ〳〵と出て來て

權平　ハテ、あの二才めは執念深いやつだ。この手紙を彼奴に取られまいと、逃げる拍子に、肝心の挟持方棒を落した。どこへやつたやら。

ト尋ね廻るを、金五郎見附けて

金五　待たつしやい。貴樣は慥か豐島の家中、伴藏樣の中間、權平どのぢやアないか。

權平　さう云ふは、次郎左衛門が邸に見える、あの傳兵衛とやらが弟の

金五　アイ、金五郎と云ふ者ぢやが、今、貴樣が云ふには、この手紙を取られまいと、逃げる拍子と云はしつたが、その手紙といふは。

權平　サア〳〵、その手紙といふは、おらが旦那の伴藏樣が、あの町人の彌左衛門の所へ遣はさるゝ手紙

を、佐野の若黨丹治めが、見せろと云ふのよ。彼奴に見せ〻堪るものかと、見せろ、見せまいで大骨を折つたのよ。

金五　アヽ、そんなら次郎左衛門の家來衆が見ては、惡いといふ手紙か。

權平　イヤモウ、大きに惡いよ。

金五　見て惡いなら、わしも見ようわいの。

ト取らうとする。ちやつと立廻って

權平　イヤア、こりやァ惡い事を云つたわえ。おぬしも佐野の身寄りの者だの。

金五　サア、それだによつて、おれが見るのぢや。

權平　ほんに、こいつは氣が附かなんだ。どうしてこれを

ト狀を持つて逃げようとする。金五郎捕へる。權平振り切つて逃げる。立廻りよろしく、權平向うへ、金五郎追ひかけて入る。矢張り此うち輕業の鳴り物。下座より、頭へ疵を附け、件の文を卷いたる木刀を持ち、丹治出てくる。見世物師三人、詫びながら出て來て

三人　モシ〳〵、お屋敷さん、御料簡なされませ〳〵。

丹治　イヽヤ、ならぬ。地藏の顏も三度といふが、コレ、あの權平めが輕業小屋には居まいかと、尋ね

に入つたが、群集の上からバッタリこの木刀。殊に、何やら書いた物。この宛て名が身が相手だ。身共の面に疵が附いたぞ。サア、相手を出せ〳〵。

萬八　モシ〳〵、御尤もぢやアござりますが、上から落ちたその木刀、なに、わしどもが存じませう。そりやお前、無理でござる〳〵。

丹治　ナニ、身が無理を云ふものか。なんでも相手を、連れて來い〳〵。

三人　イヽヤ、そりやア、無理だ〳〵。

ト爭ふ。辻打ちにて、向うより金五郎、狀を持つたる權平と、爭ひ〳〵出て來り、あちこちと、この中を駈け歩く。皆々ワツといふて立ち騷ぎ

三人　ソリヤ、喧嘩だ〳〵。

ト三右衞門駈けて出て來り

三右　危ない〳〵。そつちへ、行かつしやい〳〵。

ト木戶幕を揚げて、小屋の內へ入る。この時、正面に、模樣の打掛けを着た蛇女、うしろ向きになつてゐる。三人は、ワヤ〳〵云うて下座へ駈けて入る。丹治は權平を見附け

丹治　イヤア、權平だな〳〵。見附けたぞ。

ト同じやうに追ひおろくとて、文を巻いたる木刀を、願哲が方へ何心なく捨てる。願哲これを取る。三人ゴツチヤの立廻り。輕業の鳴り物。以前の高小屋の所へ、小三半身出かゝり、いろ〳〵思ひ入れ。權平は文箱の蓋ばかり握り、箱と狀は立廻りのうち、上の方へ投げあげる。小三は以前の文と心得、程よくこの狀を取る。この時、バラ〳〵とほぐれかゝるを、小三輕業の振のうち、文と思ひ見る事。三人立廻りのうち、丹治は脾腹を突かれ、上の方へ倒れる。權平は箱の蓋ばかりを持ち、うろたへて向うへ走り入る。金五郎はその跡を追つて入る。

小三　モシ。

願哲　この木刀に搦んだ文は

ト この聲に聞き、前に落ちたる木刀を、願哲取つて思ひ入れ。

ト 揚弓入りの合ひ方。蛇娘こちらを振返ると、土手のお六にて、打掛けの片袖通し、下は廣袖、扱帯の形にて、草履下駄をはき、小屋の中より、ソロ〳〵出てくる。願哲お六顔見合せ

願哲　姐御。

ろく　坊さん。

願哲　いま頼まれた仕事は承知か。

ろく　首尾よくやつたらお互ひに
願哲　なんだかこゝへ一通の
ろく　文の宛て名は
願哲　金五郎、小三。
ろく　エ。

ト思ひ入れ、ヅイと小屋へ隠れると、丹治心附き

丹治　そんなら狀は

ト願哲が方へ、ツカ〳〵と行かうとする。お六ちやつと丹治の手許を捕へる。

アイタヽヽヽヽ。

ト双方見合つて、仕組みよろしく、輕業の小屋の内にて

口上　先のは替りイ。

ト願哲ちやつと伏せ鉦を打つ。お六は蛇を差し附ける。丹治驚き、「ワッ」というて見事に返る。とたん一度に木の頭。お六は木戸幕を下し、隠るゝと、かんから太鼓の音、これをキザミにて、ひやうし

幕

本舞臺、三間の間通したる屋體。上の方九尺の方へ伊豫簾を掛け、下九尺戸の間へ中じきり入り、こゝに杜若の三布暖簾。軒に杜若の丸提灯を吊し、上手に障子たて切つたる屋體。正面の屋體と繫ぎし道具。八つ橋と掛け行燈。誂へ竹の門口。路地の出入り。舞臺前は杜若を澤山に、盛りの體。長床几に毛氈かけ、二脚並び、すべて三河島萬壽屋の寮。こゝに男藝者歌十、若い者利助と拳を打つてゐる見得。蛙の聲、紙砧、鐙の合ひ方にて幕明く。

歌十　コウマ〳〵。

利助　スムユ〳〵。

歌十　オツト來なさい。

利助　いま〳〵しい。

歌十　イヤ、來なさいといへば、この次郎左衛門様は、もうお出でがありさうなものだが。

利助　旦那はお留守の事なり、お迎ひにも行かれない。

歌十　サア〳〵、其うち庭の掃除でもして置かうか。

利助　それがようござりやす。

ト誂へ、賑かなる流行り唄のやうな鳴り物になり、向うより萬壽屋の娘お村、藝者お岸、同お鳥、同お民、對に杜若を染めたる浴衣、八つ橋に杜若を染めたる前垂れ、杜若の團扇を持ち、下駄草履にて出てくる。あとよりお六、帽子、奥女中の拵へ、供の中間は甲斐絹の袱紗包みを持つて出て來り、門口へ來て

ろく　コレ、お前方、ちつと物が尋ねたうござるわいな。

むら　アイ〳〵。見ましたところが、どうやらあなたはお屋敷のお女中様

きし　わたしらへの御用とは、そりやマア何を

皆々　お尋ねなされますえ。

ろく　サア、別の事でもござらぬが、お前方はそのやうに、派手な浴衣の杜若、そりや何ぞ趣向があつての事でござるかいの。

むら　サイナ、こりや今日萬壽屋の寮で、八つ橋さんが身請けのお客の趣向ぢやわいなア。

ろく　エヽ。すりやアノ萬壽屋の寮で、アノ吉原の八つ橋どのが

四人　さうぢやわいの。

ろく　モシ〳〵、それはマア幸ひ。どうぞお前方、その八つ橋どのゝ親方へ、わしを逢はせては下さんせ

ぬか。
とりアイ、そりやお易い事でござりまする。コレ、利助どん、あなたは此方の旦那さんにお逢ひなされたいと云うてぢやわいな。
利助ハイ〳〵、隨分お逢はせ申しませうが、只今不動樣へ、八つ橋樣を連れまして參られましたが、左樣なら、私しが、お逢はせ申しませう。マア〳〵、あれへお通りなされませ。
ろくそんなら其方頼みます。どうぞその八つ橋どのに、逢はねばならぬ事もあり、お邪魔であらうが、あの者も連れまして
歌十マア〳〵、奥へいらつしやりませ。
ろくこれはマア、ちやつと參つて、モシ、お世話でござんす。
ト流行り唄になり、お六は供の中間を連れ、利助案内して、簾のかゝりし屋體を通り、奥へ入る。この唄を借り、向うより釣鐘彌左衞門、一本差し、羽織、町人。蔦屋の佐次郎、茶屋の亭主にて出て來り、すぐに舞臺へ來り、床几にかゝる。
歌十これは彌左衞門樣、お出でなされましたか。
佐次モシ、若旦那、御覽じましたか。この萬壽屋の紫の杜若、今を盛りは名にしおふ、八つ橋さんの

名にめでゝ、今日の趣向を三河島とは、どんなものだね。

彌左　成る程、あの八つ橋が江戸紫に、咲いた花から思ひ附き、吉原藝者を一對の、茶汲み女の前垂れがけ、姿も派手な貌世花、三河島の寮へ、茶見世の趣向は面白いわえ。

とり　アレ、皆さん聞かしやんせ。わたしらを惣揚げにして、廓の中の餘所行きに、ほんに「俄」に出るやうな、形も揃ひの染め浴衣。

きし　この前掛けの、ほら〳〵と、どこへ行先き、譯もなう、引連れられて來て見れば

たみ　八つ橋さんの居やしやんす、寮をその儘茶見世の景色。

むら　そんなら矢ッ張りわたしらも、今日一日は「俄」に出た心になつて

四人　つとめようわいな。

歌十　イヤ又　ぬし達がその對の形で茶見世を出したら、そいつはモウ、ざつと流行りますと、ホヽうやまつて、朝比奈のせりふはどうだ。

むら　又、重い口から地口かえ。

歌十　ナニ、重い口だ。これは不躾け、重い口とは死ぬとの事よ、とはどうだ。

佐次　おきやァがれ。よく洒落れる男だ。

歌十　洒落れた櫻になぜ駒つなぐ。

佐次　これはしたり、あんまりこぢつけだ。いゝ加減にしねえか。時に、八つ橋さんは、三河島の不動様へ、太平次さんが附いて行かれたが、もう歸りさうなものだが

彌左　時に、蔦屋の四丁、なんと、酒にしようではあるまいか。

佐次　ハイ〳〵、よろしうござりませう。幸ひ八百善が仕出しも來てゐる筈だ。お若い衆や、お肴を爰へ、みんな出さつしやいな。

皆々　畏りました。

ト女形も手傳ひ、暖簾口より銚子杯、廣蓋にいろ〳〵の取り肴、これをよき所へ直し

女皆　サア〳〵、彌左衛門さん、御酒になされませいな。

彌左　ドリヤ、おれが始めて廻さうか。酌してくれろ。

ト彌左衛門猪口を受け、皆々捨ぜりふにて酒盛り始まる。流行り唄になり、向うより八つ橋、後ろ帶、おいらんの餘所行きの拵へ。太平次、やつし羽織、萬壽屋の亭主。餘程あとより梁田伴藏、羽織大小、次に船橋次郎左衛門（實は願哲）羽織大小にて出る。權平あとに、草履を摑んで出て、花道にて

伴藏　コレ〳〵、そこへ參るは八つ橋ではないか。イヤ又、仲の町で見たと違ひ、後ろ帶の素人風。イ

ヤモウ、どうも云へぬワ。

太平　これは伴藏樣ではござりませぬか。今日はお聞きでもござりませうが、私しが寮の杜若の盛りを幸ひに

願哲　梁川氏を同道いたし、參つてござるが、いまだ知る人ならぬ身の、なんと申してよからうか。當時吉原萬壽屋にて、二とも下らぬ八つ橋どの。

八橋　これはマア、お歴々の御挨拶。この頃までも吉原に、勤めてゐんしたわたしゆゑ、親方さんの寮へ出て、外珍らしい事ゆゑに、日毎に隅田の櫻時、尾久の白魚くみかけて、摘み草ながら王子樣、お參り申して今日は又、お願ひあつて不動樣、あのおみくじを願ふゆゑ。

權平　そこでおいらん、願ひ參り。さうお參りがお好きなら、わたしらが方の御堂へも、ちつとお參りなされませ。

八橋　お前の御堂とはえ。

權平　エヽ、流石は廓で籠の鳥、わたしが故郷を知らずかえ。もうこれよりはるか辰巳の方、安房も上總も向うづら、夏も合羽を着殺しは、涼風さぞと寒さ橋、地名は云はねど、裏屋ながらも小庭には、夕顏棚の下涼み、長い頭の親と子が、住み荒したる四疊半。夕河岸待つて芝蝦の味、花も活け

るが俳諧も、巧者ぢやねえが、アヽ錢はねえ。

ト此とたん、見物「築地」と褒める。

アレ、あの通り。

伴藏　たはけ面め。

願哲　然らば梁田氏

伴藏　御同道いたさう。

太平　ハイ、お先きへ參りまする。

ト鳴り物になり、この人數本舞臺へ來り、よき所へ住ふ。

女形　八つ橋さん、今お歸りかえ。

八橋　これは皆さん、揃ひがよう出來たわいな。

歌十　時に、おいらん、お早うござりました。アヽ、こりやァ伴藏樣、御家來の權平どのもござつたか。

權平　どうだ、お前、この頃は洒落が上がつたであらう。

歌十　勿論サ。

權平　時に、わしは爰にゐたところが無駄であらう。お若衆や、こなた衆の部屋へでもやつて下さい。

利助　心得ました。わしと一緒に

歌十　こなたが行くなら、おれも附合つてやらう。モシ、旦那、私しはちよつと。

權平　話しがあるワ、來さつしやいよ。

ト流行り唄になり、歌十、權平、利助、奥へ入る。

彌左　時に、太平次どの、今日の趣向は、出來たね〳〵。

太平　これは彌左衛門樣、今日はあなたの御趣向が、吉原中へパツと致して、大評判でござりまする。

彌左　それは有り難いわえ。この彌左衛門はこれまで新造買ひで、内證には、ろく〳〵近附きにもならなんだが、今日はお出入り屋敷の次郎左衛門樣が、いよ〳〵八つ橋を身請けさつしやるその祝ひに、あの佐次郎が思ひ附きで、三河島の寮へ八つ橋が座敷を拵へ、池に盛りの杜若、この上とじやく懇ろに賴みます。

太平　これは有り難うござります。時に、コレ、蔦屋、まだ次郎左衛門樣のお出ではないか。

佐次　これはしたり。次郎左衛門樣はたつた今、お前と一緒にござつたぢやァねえか。

太平　ナニ、次郎左衛門樣がわしと一緒に。

ト合點のゆかぬこなし。

伴蔵　コレサ、亭主、次郎左衛門どのが、ソレ〳〵、そこに。

ト八つ橋思ひ入れあつて、

八橋　ドレ、どこにぢやわいな。

顕哲　コレサ、八つ橋、次郎左衛門は爰にゐるワ。

八橋　エヽ、あのお前さんが

ト思ひ入れあり。

佐次　モシ、佐次郎さん、あの次郎左衛門さんの譯には、昨日お前の所から

モシ〳〵、お知らせ申してあげたのは、お前を身請けなされました。こゝにお出での次郎左衛門

樣。

女皆　エヽ。

ト驚く。八つ橋も思ひ入れ

太平　コレ〳〵、佐次郎、こゝにお出での次郎左衛門樣とは、どこにござりますな。

八橋　コレ、佐次郎さん、わたしを身請けの相談は、花の初日にお前の所で

佐次　サア、その時は佐野樣が、身請けの話しをなされたゆゑ、太平次さんへも掛合つたが、それから待

てど暮らども、ふッつりばつたり音沙汰なく

伴藏　所へ身共が射術の先生、今同道いたした次郎左衛門どの、あの萬壽屋の八つ橋をと、お頼みあるゆゑ、蔦屋とも引合せ、内談に及んだところ、次郎左衛門様の事ならと、太平次が挨拶、そこで早速身請けの相談。

彌左　買ひがゝりから、借金から、身代金を一つにして、蔦屋へ渡しに行つたのは、懇意づくで頼まれた、この釣鐘の彌左衛門、證據といふは

ト紙入れより一札を出し

おいらん、見なさい。「次郎左衛門様、萬壽屋太平次」。コレ、御亭主、こなたの印形。なんと、嘘ぢやアあるまいがの。

八橋　そんなら今の今までも、話しのあつた事ぢやゆゑ、身儘になつたは、佐野次郎左衛門様ぢやと思うてゐたは

太平　同じ名前の間違ひで、こりや、てつきりと仕事にかける

ト思ひ入れ。彌左衛門證文見せ

彌左　この印形では動きは取れまい。

八橋　それぢやというて、これまでに、つひしか一度御見せぬ

ト願哲へ思ひ入れ。願哲莨のんで居て

願哲　この船橋の次郎左衛門ぢや。

八橋　エ。すりや、あなたは船橋

願哲　次郎左衛門とは身共が事ぢや。八つ橋、おぬしは知るまいが、其方が町にゐた時の、客を迎への茶屋の縁、錦繪に描いた其方の姿、二度が三度と見る度に、思ひは増せど素寒貧、痩せ浪人のはぶしでは、とても立たない全盛狂ひと、思ひ切つたが、仕合せと、入間の屋敷へ召し出され、高祿取りの身となれば、すぐに身請けと志し、これまで一度のお情けにはあづからねども、思はぬ人を此方から、顔を見たさによそながら、土手の蛙のなき別れ、それも時節がくる時は、今日ぞ根曳きの杜若　八つ橋、なんと武士の惚れたは、また格別のものであらうが。

八橋　すりや、アノ、わたしをそれ程に。知らぬ事とて今日までも、數ならぬ身を、アイ、嬉しうござんす、忝うござんすが、わたしばかりはお前の儘に

願哲　ならぬといふのか。

八橋　アイ、さうぢやわいな。

佐次　コレ〳〵、そりやァおいらん、あの佐野さんへ心中立て、

八橋　エ。

彌左　隱さつしやるな。佐野の次郎左衞門さんとの仲は、互ひに起請も取交し、女房約束してゐても、コレ、あのお人は天竺浪人。

八橋　エ。アノ、主がどうして

伴藏　コレサ、八つ橋。次郎左衞門は、殿の御祕藏ある、二字國俊の一腰、金色肌へを通す如くと、濡れ衣と附けられし、お家の重寶失つたその科で、屋敷はとうに梵天國。今ぢやァどこにゐる事やら、行くへも知れぬ風來者。

八橋　エ、すりや、アノ主がお屋敷を

彌左　サ、それだによつて幸ひと、河岸を替へたがよからうぞえ。

八橋　一旦二世といひ交し、たとへば主が浪人の、女房になつて褄を肩、つゞれはおろか身に菰を、まとつて辛い、恥かしい、憂き世渡りをすればとて、番うた詞を立て通すが、江戸の女郎の意氣地とやら。起請を反古にはたに附き、里の地獄になるやうな、そんな卑しい八つ橋でも、アイ、憚りながら、ないわいなァ。

皆々　ヤア。
　　　　ト思ひ入れ。
顯哲　流石は五町で名を取つた、萬壽屋のおいらん、八つ橋ほどあつて、よい膽だ。併しおぬしがそれほどに、意氣地を立てようと思つても、身共が身請けしたからは、自由に詞は交されまい。
八橋　サア、それは
顯哲　それでも意氣地を立てゝ見る氣か。
八橋　アイ、立てるわいな。
顯哲　どうしたと。
八橋　聞けばわたしが身代の、殘りはかゝる仕儀なれば、親方さんへ譯云うて、兎角お前の身請けは變替へ。つぐなふ金の數かぎり、命のかぎりわたしの身を、一生廓の憂き勤め、身は百歳の姥となり、禿に縋り、新造衆に、腰を押されて、杖突き乃の字で道中しても、いひ交したお方を退け、外の男の女房にならず、女郞で朽ちて、川竹の、意氣地を立てゝ見せませう。
太平　オヽ、八つ橋、さうぢや。なんのマア、拵へ事のこの身請け、其方にはかまはせぬ。この太平次が變替へする。

願哲　コレサ、太平次。身共も侍ひ。一旦證文濟んだ身請けの八つ橋、おぬしは一札を反古にするか。
太平　サア、それが間違ひ。殊に殘りの身代も、まだ濟まぬ其うちは
佐次　モシ〳〵、親方、後金代りとこなさんに、しつかりとした品物を、あれほど渡して
太平　サア、あの折紙なら、お馴染みの、佐野樣からと思うたに、おぬしも向うとぐるになり、この太平次を、やつつけたのぢやな。
彌左　そりやアおぬしが、後の祭りの私し料簡。なんでも一札取つたからは、是非とも此方の身請けだワ。
八橋　イヽエ、わたしは心が濟まねば
　　トすんと立つて奥へ行くを、願哲裾をひかへ
願哲　八つ橋、待ちやれ。こゝがおぬしの浮む瀬か、又沈むかの、二つ一つだ。
八橋　イヽエ、わたしはとこまでも、今云うたより外に心は
願哲　ハテ、そりやア一圖だ。それよりは、この船橋に身を任せ、榮華を盡す心はないか。アヽ、何とらやいふ太夫の句にも「さぞ櫻、われは廓の榮種さへ」。どうだ八つ橋、返事が聞きたい。
　　ト八つ橋、杯を取つて

八橋　モシ、船橋さんとやら。淸き眺めとなる雲井の月も、又、賤しい女郎の身で、櫺子から見るお月さんも、變りはないが、冴え、曇るは、誰が身にも、同じ浮き世の、月は一つの

願哲　ヤ。

八橋　おいて下さんせ。

ト杯を打ちつける。唄になり、八つ橋ズイと奥へ入る。

伴藏　コレ、さう惡しくしては、世話を致した身共が、濟まぬぞ〳〵。

佐次　モシ〳〵、伴藏樣、御尤もでござりますが、たとへ今更その亭主が、變替へしようと申さうが、その節中へ入つたわしが、その儘には置きませぬよ。

彌左　さうだ〳〵。金がいるならいくらでも、その仕送りは彌左衞門。コレ、太平次、おぬしもまんざらおいらが顏を、よもや汚しても置くまいな。

太平　そりやモウ、これまでに御相談の、極まりましたこの身請け、あなた方の仰しやるところも、まんざら無理とも存じませぬが、何を申すも、わしもあの佐野さんと思ひの外、つひにお出でなされぬあなた。

願哲　サ、これまで一日一夜でも、あの八つ橋を求めねど、戀ひ慕うたは船橋の、同じその名の次郎左

衞門、是非に身共が根曳きする。女の方が不承知でも、亭主よろしう、おぬしの働き、兩腰帶す身共が、斯樣に、兩手を突いて頼み入る。

ト思ひ入れ。

太平　これはしたり、お客のあなたが其やうに。殊に、お武家の船橋樣へ、左樣なうても私しも、間違ひとはいふものゝ、印形据ゑたは此方も不念。いづれあなたのお顏も立てゝ

願哲　然らば承知いたされて

太平　マヽ、何事も八つ橋に、申し聞かせて色よい御返事。

彌左　こりや、さうなうては叶ふまい。

佐次　この相談が間違へば、あんまり茶屋が氣のきかぬ。

願哲　おぬし達より身共が立たぬ。されども御亭主が今の挨拶。安堵致した喜びに、奥へ參つて庭前の

太平　咲き揃うたる杜若、花を肴に旦那樣。コレ、藝者衆、あなたへお一つ。

藝者　心得ました。サア、お客樣。

願哲　酒にしようか。伴藏どの。

太平　マア、入らつしやりませ。

ト唄になり、一件殘らず奥へ入る。この唄を借り、向うより佐野次郎左衛門、着流し大小、深編笠にて出てくる。跡より、づぶ六の三附いて出て來り、すぐに本舞臺へ來て

づぶ　モシ〳〵、旦那〳〵。待ちなさいな〳〵。

次郎　これはしたり、身は持合せがない。重ねて遣はさう。さう心得てくりやれ。

づぶ　ナニ、さう心得てくりやれ。モシ、お侍ひさん、わしは乞食、物貰ひでござりやす。ナニ、お前持合せがなくば、貰はずとようござりやすが、わつちが向うの日陰に晝寢してゐたら、コレ〳〵非人と、起した上で、萬壽屋の寮はどこだと聞きなさるから、ハイ、あそこでござりますと教へてあげたに、禮を一言云ひもせず、お手の内と願つたら、無いなら無いで濟む事を、こゝまで四五丁附かしておいて、とゞのしまひが持合せがねえとは、モシ、旦那、そりやアお前、お情けないぞえ。

ト醉つたる思ひ入れにて管を卷く。

次郎　サア〳〵、其方が云ふが尤もぢやが、折惡しう持合せがない、と申すも恥かしながら、今日のところは、料簡いたせ〳〵。

つぶ　モシ、料簡しろなら、ようごせえやす。わつちもお前、乞食こそしてゐやすが、男だわな。錢の

ねえ侍ひに、無理に下さいとも云ひやすめえ。ようござりやす。二文や三文貰つたといつて、遣つたといつて、高の知れた話しだ。憚りながら、お持合せがござりませずば、わつちが貸して上げやせう。サア、遣ひなさい〳〵。

ト さしに通せし錢を、次郎左衛門が前に投げつける。

次郎 ヤイ〳〵〳〵、おのれ非人の身を以て、慮外とやいはん。身のほど知らぬ蠅蟲めが

ト思ひ入れ。この聲に奥より、八つ橋出かゝつて窺ふ。門口よりは利助が出かゝる。

づぶ なんだ。蠅蟲だえ。モシ、わつちは蠅蟲だが、お前は冷飯も食へねえ浪人さん。ドレ、ちつと顔を見て進ぜう。

ト立ちかゝるを、次郎左衛門キツと捕へ

次郎 おのれ、賤しい身分を顧ず、無禮失禮、尾籠な人非人め。

ト取つて投げる。

づぶ アヽ、痛い〳〵。コレ、侍ひ、なぜ、手ひどくするのだ〳〵、

ト立ちかゝる。利助留めて

利助 お侍ひ様。此奴はこの三河島にをります、づぶ六の三と申しますが、食ひ倒れでござります。何

事も私しにお免じなされまして、ハイ／＼、御免なされて遣はさりませィ

次郎　左様ではあらうが、あまりと申せば

ト利助顔を見て

利助　ヤ、あなたは次郎左衛門様でござりまするか。

ト次郎左衛門思ひ入れ。八つ橋これを聞いてこなし。

づぶ　ナニ、次郎左衛門だ。道理で風の神が鳥おどしといふ形だ。

利助　コレサ、無駄を云はずと、早くあつちへ行け。

ト三の袖をつかまへて花道へ連れて行く。

づぶ　アヽコレ、若い衆／＼。さりとては、襤褸ざはりが、荒い／＼。引けば破るゝ、摑めばあとに、しくじり侍ひ、昔しは遣り手、若い衆や、船宿の附け届け、禿子供の仕着せまで、表向きはわしが名で、みんな其方の工面づく。

ト新内を語る。

利助　エヽ、何を云やァがる。

づぶ　ヤイ、侍ひめ、よく投げたな。

次郎　どうしたと。

　　ト立ちかゝる。

利助　アヽモシ、お道理でござりまする。

　　トとめる。

づぶ　なんだ。道理だ。これが正直の、道理をぬいで編笠の、其しやツ面を

　　ト立ちかゝる。

次郎　まだうせをらぬか。

づぶ　イヨ、成田屋ア。

利助　早く行きやれな。

　　ト四つ竹節になり、利助、追ひ立て〳〵、兩人向うへ入る。あと合ひ方。次郎左衛門笠を取つて思ひ入れ。八つ橋見て

八橋　次郎左衛門さん。

次郎　八つ橋か。

　　ト内へ入る。

八橋　マア、よう來て下さんしたなア。

ト縋つて思ひ入れ。

次郎　道理ぢや〳〵。主人にならでは差上げぬ、次郎左衛門が大切な、命をかけて誓ひし仲、さほどに思ふは尤もぢや。われも其方を身儘にと、相談のうち去りがたき、主用ゆゑに、おとづれも、粂の岩橋中絶えしが、しばしの暇に今日こゝへ、來ても多用の次郎左衛門、無理で逢ふのが互ひの喜び。其うちゆるりと。八つ橋

ト八つ橋を引退け、すぐに行かうとする。八つ橋驚き

八橋　モシ、お前はとうにお屋敷を

次郎　ヤ。

八橋　御浪人の身であらうがな。

次郎　コレ〳〵、その事どうして

八橋　さればいな。先刻に廓へお前とも、折々見えた伴藏づらが、お刀とやら紛失にて、次郎左衛門は浪人した、暇が出たと、さま〴〵の、憎しい口を聞くうちに、差し込む癪もどこへやら、道理で便りも無い筈、一筆知らせがありさうなものと、案じの上にも心では、ちつと恨んでゐたわいな。

ト次郎左衛門ホロリとして

次郎　サア、さうあらうと思ふゆゑ、隠してゐたが、伴藏に、樣子聞いたら是非がない。次郎左衛門が絶體絶命。其方が身の上相談を、兎や角思案も、宿直の夜、お家の重寶、濡れ衣の一腰、何者の仕業にか、盗み取られて役目の越度。切腹をも仰せ附けらるべきのところ、お慈悲を以てその座でお暇。何卒右の一腰を、五十日のうちに、詮議し出せば召し返さんと、有り難き御意承り、それより諸所を尋ぬれども、主人の罰か、今以て、行くへも知れず一腰の、詮議の日數も忽ちに、一兩日を過しなば、この儘われは一生埋れ木。とはいへ、これまで知れざる在所、一兩日に手に入らうや。所詮、武運に盡きたる身と、思ひ諦め、切腹と、覺悟極めてよそながら、せめて其方へ暇乞ひ、亡き後にては一遍の、回向を嬉しく受けるであらう。聞けば、いづくの人にやら、身請けされしとあれば重疊。隨分ともに仲よう添やれ。八つ橋、さらば。

ト又行かうとするを、その儘膝にしがみ附き

八橋　マア〳〵〳〵、待つて下さんせ。

次郎　ヤア、いつまで居たとて、果しはないワ。

ト振切るを取附き

八橋　イエ〳〵、死なしやんすりを留めはせぬ。覺悟の事なりや、潔よう腹切らしやんせぢやが、詮議の日數が、今日ぎりといふではなければ、早まらずと、役に立たずとわたしにも、その一腰のあらましを、云うて聞かせて下さんせ。

次郎　エヽ、それほどまでに云やる事、云うて益なき事ながら

ト八つ橋を引退け、下にゐる。

その濡れ衣の一腰は、銘は國俊、縁は赤銅、斜子も色繪の水に鳥、目貫きは金にて龍の高彫り、鐔は無赤の金覆輪。

八橋　それさへ尋ね出すならば

次郎　再び歸參の次郎左衛門。が、とても開かぬ不運の某、未練に日限りの期を待たず、切腹なすがせめての事。

八橋　サア、さうでもあらうが

次郎　ヤア、詮ない事を。

ト八つ橋を突退け、行かうとする。よき時分、奥より、船橋の願哲出かゝりゐる。

願哲　身共が身請けの八つ橋と、席を同じう、尾籠の振舞ひ。

八橋　エ。
願哲　八つ橋、みだら千萬な
　　　トこれにて次郎左衛門思ひ入れ。
次郎　つひに見馴れぬお侍ひ。して、其許は。
八橋　今宵わたしを身請けぢやと、思ひがけない主さんの、お名も矢ッ張りお前と同じ
次郎　次郎左衛門といふお方か。
願哲　いかにも左様。入間の屋敷へ有り附きし、身共は船橋次郎左衛門。
次郎　拙者は當時浪人の、家名は佐野の次郎左衛門。
願哲　よき折柄にお互ひに
次郎　お目にかゝつて知る人に
願哲　この上ともに
次郎　次郎左衛門どの。
願哲　次郎左衛門どの。
兩人　御別懇に。

ト兩人顏見合せ

談ずるでござらう。

ト思ひ入れ。この時奥より、藝者お岸出て來り

きし　モシ、八つ橋さん、お前に逢ひたいというて、お屋敷のお女中さんが、先刻から奥に待つてお出でなさんすわいな。

八橋　エヽ。アノ、わたしに、お屋敷のお女中さんが、逢ひたいというてかえ。

きし　アイ、太平次さんも何やらお前に

八橋　エ。アノ、親方さんまで

ト思ひ入れ。次郎左衛門こなしあつて

次郎　樣子は何か知らねども、お屋敷の奥向きより、其方に急に逢ひたいとは、何とも以て

ト思ひ入れ。

八橋　わたしもさうは思へども、委細を聞かぬ其うちは

次郎　案じられるもこりや尤も。マア、何にしろ、其方は行きやつて。

八橋　合點でござんす。モシ、何事も後にゆるりと、次郎左衛門さん。

願哲　ヤ、身共か。
八橋　イエ、アノ、佐野の
次郎　身が事か。
八橋　アイ。
願哲　こりや門違ひか。

ト合ひ方になり、八つ橋合點のゆかぬこなし。お岸附添ひ、簾のうちへ入る。簾一ぱいに巻きおろす。
兩人殘つて

次郎　承れば、其許が
願哲　根曳き致すはあの八つ橋。
次郎　すりや、其許が身請けして
願哲　眺むる花は杜若。
次郎　イヽヤ、拙者が先約ゆゑ。
願哲　たとへ貴公が先約でも、金子を遣はし、印形まで、取置かしたは身共でござる。金の戻らぬ其うちは、この船橋が身請けの八つ橋。指でも附ければ武士の意地。

次郎　そりや身共とて同じ事。馴れなじんだる傾城を、外に身請けを致されては、第一、拙者の武士が立たぬ。

願哲　こりや面白いその一言。すりや其許は、女郎を外へ取られては、武士が立たぬとお云やるか。まさかの時の心がけ、女郎で武士の面を立てるか。

次郎　ヤ、なんと。

トきつとなる。

願哲　人は知らぬと思はれうが、殿の祕藏の二字國俊、そのお刀を失うて、扶持に離れた其許が、それにも懲りず八つ橋を、外へやつては侍ひの、面が立たぬとお云やるか。身請けが出來れば佐野氏には、殿へ云ひ譯、本地へ歸參の手蔓になるか。

次郎　サ、その儀は

願哲　劍の詮議もなほざりに、身請けばかり氣を揉んで、誠の武士といはるゝか。

次郎　サ、それは

願哲　まだ年若な。ハヽヽヽヽ。

トあざ笑ふ。次郎左衞門思ひ入れあつて

次郎　船橋どのの御教訓。斯くいふ佐野の次郎左衛門、成る程、貴公の詞に附き、尋ねる品こそ歸參の蔓。さはいへ馴染みを重ねたる、あの八つ橋を

願哲　是非とも身請けは船橋が、今宵のうちに後金調達。たとはゞ二日、三日たりとも、女房に持たねば世間へ立たぬ。近頃不請にござらうが、あの八つ橋は

次郎　貴公が身請けをなさるぢやまで。

願哲　いかにも。

次郎　然らば拙者は、無い緣と、諦めたとて、間々ある習ひ。

願哲　たかゞ、廓の浮れ女、遊女。

次郎　さはいへ、一旦

願哲　ヤ。

次郎　次郎左衛門どの

願哲　次郎左衛門どの

兩人　重ねてお目に

　　ト互ひに思ひ入れあつて

かゝりませう。

ト唄になり、次郎左衞門、思ひ入れあつて、正面の暖簾の内へ入る。願哲殘る。合ひ方へ、入り相の鐘。

願哲　まづ、こゝまでは首尾よく化も

ト思ひ入れ。合ひ方になり、暖簾口より伴藏、門口の路地より權平、窺ひ〳〵出て來り

伴藏　船橋どの。

願哲　伴藏どの。

權平　お旦那、あなたに

伴藏　權平にちやつと聞いたが、あの狀箱は。

權平　この間お渡しなされた狀、彌左衞門へ渡さうと思つて、出かけた兩國で、佐野が家來に見附けられ、逃げんと致して思はずも、あの手紙を見失ひましたが、旦那、こりやアどう致しませうな。

伴藏　今更それがどうなるものか。併し、ちよろまかして、彌左衞門へ賣りこかした二字國俊、佐野が慥かに來てゐては

願哲　必ず穩密。

伴藏　心得ました。

　　ト　この時圍ひの内にて

ろく　そんならこなたが八つ橋どの。

　　ト　願哲この聲を聞き

願哲　ヤ、慥かにあれは……コレ。

　　ト　矢張り捨て鐘。伴藏呑み込み、奥へ入る。權平は元の路地口へ入る。願哲は圍ひの方へ目を附ける。誂への合ひ方、時鳥の啼く聲。お六、そつと障子を明けると、八つ橋と差向ひの體。願哲は舞臺にて、衝立を蔭にして窺ひゐる。

ろく　鶯の、かひこのうちの時鳥ぢやが、父に似た、妹の八つ橋。

八橋　そんならお前が、姉さんかいなア。

ろく　其方はいとけない時ゆゑ、譯は何にも知るまいが、音信不通に外への養子。行くへはいづくと思ふうち、此ほどふつと聞き出し、逢うて云はねばならぬ譯。コレ、妹、姉が云ふ事、聞いてたもいなう。

八橋　モシ、姉さん、そりやマアどういふ

ろく　サア、云はねばならぬ其わけは、勤めの其うち、豊島の御家中、あの佐野次郎左衞門といふ人に
其方は馴染んで、女夫の約束。

八橋　アイ。それがどうして

ろく　サア、その次郎左衞門といふ人に、其方はどうも添はれぬぞや。

八橋　エヽヽヽ、そりや又なぜに。

ろく　コレ、わしと其方が父さんは、田島内記といふお方、佐野の家に仇ある二人。

八橋　エヽ、すりやアノ主に

ト立ちあがつて下の方へ、ツカ／＼と行かうとするを、お六、ずんと立つて八つ橋を掻きのけ、入れかはつて上の方へ八つ橋を突きやり、ありあふ障子屏風を開き、きつと留める。

ろく　サア、驚きやるは尤もながら、コレ、様子知つての事ではなし、今の盛りの男振り、其方の惚れたも無理ではない。さはいへ、實の父さんは、同じ家中にありし時、僅かな越度を種として、佐野の親子が讒言にて、七年以前、父さんは、いとしやお腹なされたわいなア。

八橋　エヽ。

ろく　手こそおろさね、敵は佐野の次郎左衞門。その仇人より起請まで、取交してゐる妹の八つ橋、こ

この道理を聞分けて、今からふッつり縁切つて
八橋　そんならあなたは、父さんの仇も同前。
ろく　サ、それぢやによつて、縁切つて
八橋　そんなら主とは
ろく　縁は切れぬか。
八橋　サア、それは
兩人　サア／＼／＼。
ろく　聞分けなければ自害して
　　ト剃刀を出し、死なうとする。
八橋　アヽコレ、待つて
　　ト障子屏風を引廻し、縋つて留める、立廻り、屏風を枷によろしくあつて
八橋　コレ、姉さん、お前のお頼み聞き入れて、向後ふッつり、縁を切りませう。
ろく　すりや、あの人を
八橋　縁切る證據は、この起請。

ト起請を出す。お六取つて

ろく　そんなら、これを渡したからは

八橋　思ひ切つたるこの身の潔白。

ろく　エヽ、嬉しう

八橋　いつそわたしが

ト捨てゝある剃刀を取つて死なうとする。お六うろたへて留める。立廻りよろしく、お六は八つ橋を留めて、起請をちやつと見る。この時、願哲キツと見上げ、お六と顔見合せ、伸びあがる。お六、「これ」と願哲へ起請を見せる。願哲顔で抑へる。お六は起請を懐ろへ入れる。唄、時の鐘、チヨンと知らせに附き、簾一ぱいにおろす。この時、上の屋體にて

ト聲する。願哲思ひ入れあつて、暖簾に入る。合ひ方。脇の口よりお岸、お民、雪洞を持ち、彌左衛門も出て來り

彌左　お岸や〳〵。お民はゐないか〳〵。

きし　モシ、彌左衛門さん、何をお呼びなさんすぞいな。

たみ　わたしらは座敷へ、灯をともさうと思うてゐるところを

彌左　コレサ〲、てまへ達を呼んだのは、さつき奥で、おれが預けておいたあの脇差は、てまへ、持つてゐるか。
きし　イヽエ、ありや奥の戸棚へ、しまうて置いたわいな。
彌左　コレ〲、ちつとの内でも手離し憎い代物。てまへ達、取つて來てくれ。
たみ　エヽ、マア、それに仰山な、呼び立てやうでござんしたわいな。
彌左　ハテ、仰山でなうて。コレ〱、早く取つて來て、くれろよ〲。
きし　エヽ、悪い人使ひぢやわいな。
ト暖簾口へ入る。彌左衞門殘り
彌左　佐野の次郎左衞門が來ては、滅多に手離しては置かれぬて。
ト矢張り合ひ方。佐次郎一腰を持ち、お岸お民附いて出て來り
佐次　ハテ、おれが持つてゐるから、いゝよ〱。
きし　でも、わたしが預かつてゐやんした。
たみ　マア〲、此方へ寄越しなさんせ。
彌左　アヽコレ、どうした〲。

佐次　申し、彌左衞門さん、お前があの手合に預けなすつた彼の品、わたしが持つて來やしたよ。

たみ　それぢやというて、わたしらが預かつた品ぢやによつて

彌左　アヽ、この事か。それなれば、よし〳〵。

ト一腰を取つて

慥かにおれが受取つたよ。

きし　あんまり大事になさんすお脇差ぢやによつて、わたしらも

たみ　心遣ひでござんした。そんなら、お脇差は、きつとお渡し申しましたぞえ。

彌左　きつとおれが受取つたよ。

ト合ひ方になり、お岸、お民、奧へ入る。

佐次　モシ、これを尋ねる次郎左衞門が來ては、お前、うか〳〵持つてゐられまいぞえ。

彌左　そりやア大事ない。この國俊は、一旦賣り物に出た刀、おいらが盜んだ品ではない。今にでも豐島の屋敷へ差上げさへすりや、大金になる代物。

トこの時太平次、路地口より出て、門口の外に窺ふ。

佐次　コレ、彌左衞門さん、その豐島といふは、あの佐野の次郎左衞門の勤めてゐた屋敷ぢやアないかえ。

彌左　さうサ、外から急に賣りに來たこの國俊、俗にいふ「濡れ衣」よ。

佐次　モシ〱、聞いたばかりで見た事はございませぬが、なんと、わしにも、その國俊の拵へ、ドレ、お見せなされませ。

彌左　サア、見ておかッし。

ト思ひ入れあつて

そりや、どうだ。縁頭は兵衞の水鳥、目貫は龍、鍔は金覆輪。結構であらうがな。

佐次　イヤ、又、聞いたより、とんだ品物だ。

彌左　この一腰を豊島家へ差上げれば、伴藏樣のお手引で、この彌左衞門はお出入りの筆頭。伴藏樣も立身なさるゝワ。詰らぬ者は次郎左衞門、なほ歸參の綱が切れるワ。

トこの時八つ橋、上の屋體より、障子を明けかけ、窺ふ。

佐次　成る程。さう仰しやれば次郎左衞門どのは上がつたり。併し、佐野に手柄をさせたくば、あのおいらんがスッパリ切れて、船橋樣へ河岸を替へるが、いつち好い料簡だ。

彌左　此方はこれ程に思つてゐれど、あの八つ橋は夢にだも

ト唄になり、兩人うなづき合ひ、正面の暖簾口へ入る。八つ橋障子の内より、窺ひながら出て來り、

こなしあつて

八橋　さつきの主の話しにたがはず、あの拵への一腰は、そんなら矢ッ張り二字國俊、あの品ゆゑに御流浪の、あの品此方へ手に入れる

ト胸を定めし思ひ入れ。

太平　八つ橋、其方も今の樣子を

トそつと内へ入る。

八橋　旦那さん、こりやいつそ鬼になつて

太平　その心なら

八橋　身を捨てゝこそ浮む瀬も

太平　それも男の爲ならば

トこの時奥にて

願哲　太平次。

ト呼びながら出る。跡より伴藏附いて出て來り

亭主、これに居たか。最早身は歸宅いたすが、變替へるなら、先達つて渡したあの金、きり〳〵爰へ

へ並べて出しやれ。

太平　サア、そこでござりまする。だん／＼と私しも申し聞せて、八つ橋は、いよ／＼あなたの思し召しに違はぬやう、身請けされて參ると申しまする。

願哲　すりや。最前まで不承知なあの八つ橋、身が致す身請けに叶うて參るぢやまで。併し、俄かに變つた天氣、一圓身共呑みこめぬ。

八橋　さう思はんすも、尤もでござんすが、最前聞いた主の身の上。その一腰は彌左衞門が持つてとの事。それを願うて貰うた上、主の方よりお屋敷へ上げなさんすが、これが緣の切れ。女子のわたしにあの一腰、取つてもらうてその身の歸參。……知らぬ事とて、アノ父さんの

ト圍ひの內へ思ひ入れあつて

この上お前のお世話になつて、わたしが身請けを、必ずともに。

願哲　すりや、得心して身請けされ、心に隨ふ氣になつては、ナウ、伴藏どの

伴藏　アヽ、そんなら彌左衞門が持つてゐる、あの一腰を手切れにして、佐野が手を切る心とは、こりやア八つ橋、いゝ料簡だ。

願哲　さういふ心になつたなら、望みの通り彌左衞門が、あの一腰をやりもせう。それも身共が抱いて

寢た上の事だが、それ承知か。

八橋　イヽエ、それでは

願哲　不得心か。

八橋　ナニ、どうなろと、お前の儘に。

願哲　いよ／＼緣を

八橋　切らいでかいなア。

ト此うち奥より、次郎左衞門何心なく出て來り、これを聞いてゐて、腹の立つ思ひ入れ、いろ／＼あつて、キッと氣を變へ

次郎　八つ橋、そちや何と申す。

八橋　エ。そりやアノ、ナ

ト當惑する思ひ入れ。

伴藏　貴公は次郎左衞どの、いつの間にこゝへ。

願哲　次郎左衞門どの、まだお居やつたか。

次郎　船橋氏、おれにて、樣子あらまし承つた。八つ橋とても、身が後ろに居るとも知らず、どうな

りとゝ云やつたが、いよ〳〵縁を切る心か。コレ、八つ橋、その縁は、誰れと切るのぢや。

八橋　知れた事、お前さんと。

次郎　ヤヽ、なんと。

太平　モシ、次郎左衞門樣、お心にも障りませうが、以前と違ひ、今ではあなたは御浪人。すりや、お前樣は勿論、あの八つ橋も出世もならず

ト思ひ入れ。

次郎　縁を切るのがよからうと、其方までが申すのか。そりやハヤ、さうありさうなものぢやが、コレ、八つ橋、いよ〳〵われも縁切つて、同じその名の次郎左衞門、身請け間違ひなんぞとは、初手から知れた拵へ事。これで物事解つたわえ。

ト思ひ入れ。

八橋　サア、その間違ひは知らねども、斯うなる事が否なれば、とうにお前が身請けして下さんしたなら、なんの事もなかつたに、お前の方から待たせておいて、今更わたしが知つたやうに、覺えもないねすり事。わたしにまで氣を揉ませ、あげくの果はお屋敷を

ト云ひかけ

それゆゑどうぞこんな氣に、なりたい事はなけれども、云ふに云はれぬ

ト思ひ入れ。

初めて逢うた船橋さんが、聞けば手を變へ、品を變へ、知らぬ事とて今日が日まで……サア、その深切な心意氣、聞いては義理にもお前と切れ、この身を主へどうなりと、任せて暮らすが、得であらうわいなァ。

次郎ヤヽ、何と申す。エヽマア、われは……コリヤ、ヤイ、いかにも身共は屋敷をお暇、この身となつては誰れあつて、見ぬ顏するがこりや當世。それとこれとは、譯が違ふワ。恥かしながら萬壽屋へ、通つた節は相應に、コリヤ、ヤイ、阿房を盡した次郎左衞門。今思へば、たわけた事と心せば、恨む所存はなけれども、さほどの性根になる事なら、最前の折、あの如く、愁嘆致してとゞむれば、かゝる席へは面も出さず、少しは武士の心底を、殘す程の儀もあらうに、なまじ詞に花を添へ、足を引留め、忽ちに、手の裏返す今の云ひ分。列座のうちには、肩を並べし、朋友の聞かるゝ手前。斯樣な事には尾鰭を附け、譏り笑ふは浮世の習ひ。次郎左衞門は面皮を缺いた。コリヤ、ヤイ、後ろ指を差さるゝわいやい。不實者めが。

トきつとなる。

八橋　サア、それが矢ッ張り、お前の身から起る事。

次郎　どう致した。

八橋　サア、たとへうるさい客人でも、逢うてその儘、お前は否、なぜ來なんしたと云はれうか。まして嘘にも云ひかはしたお前ぢやものを、愛想にも口へ出るまゝ、いろ〳〵云うたは勤めの習ひでござんす。それにかゝつて、うか〳〵と、なんぼ日長の折ぢやとて、居やしやんしたが粗忽といふもの。それがわたしの科かいなア。

次郎　エヽ、すりやモウ、あの折

八橋　イヽエ、とうから

次郎　ヤア。さうとは知らず

ト刀へ手を掛ける。

太平　アヽモシ

ト隔てる。

願哲　イカサマ、腹も立ち申さう。毫頭無理とは存ぜねど、刀に手を掛け、どう召さるゝ。この八つ橋は身請けして、申さば今日から身が女房。これまでこなたと添ひ臥しの、勤めの身ではござらぬぞ。

これ程なりとも疵が附けば、武士の女房、主たる、この船橋が捨てゝ置かうか。否とも刀の役目でござる。殊に、一腰失うて、未だ詮議もそれなりに、コレ、こなたの緣は何で切る。現在あれなる八つ橋が、尋ぬる所の二字國俊、貰うてやらうといふではないか。そんならまんざら八つ橋が、憎いとばかりも云はれまい。

伴藏　それに、うか／＼無分別、もしもの事がある時は、こなたを人が白痴だといひます。白痴にならない用心さつしやい。

次郎　おてまへ達まで其やうに、教訓まがひの憎てい口、一々胸に承知云たした。未練は殘さぬ。さつぱり退いて遣はすぞ。

願哲　八つ橋、心は殘らぬか。

八橋　なんの心は……あれ聞いて、夜か明けたやうぢやわいなア。

次郎　われも心が殘らねば、次郎左衞門も心が殘らぬ。武士のあるまい事ながら、おのれが詞を金鐵と、思うたゆゑに、身が方から、書いてやつた起請も、きり／＼戻せ。

八橋　サア、その起請は

ト思ひ入れ。

願哲　返さぬ心か。
八橋　イヽエ、どうして。
願哲　そんなら早く。
八橋　それぢやといふて
次郎　きり〳〵戻せ。
願哲　エヽ、うぢ〳〵と

ト八つ橋の懐ろへ手を入れ、守り袋を引出し

これであらうが。

ト次郎左衛門の前へ投出す。次郎左衛門手早く取つて、改め見て

次郎　ヤア、この中に起請は無いが

ト思ひ入れ。八つ橋もこなしあつて

八橋　起請はとうに捨てたわいなア。
次郎　こりやモウ、おのれ

ト立ちかゝるを、願哲留めて

願哲　その身の歸參の蔓となる、あの國俊は貴殿はいらぬか。
次郎　ヤ。
願哲　抱いて寢たうへ、しつぽりと、肌と肌との濡れ衣、こなたにやるのが手切れのしるし。
次郎　すりや、船橋が抱いて寢た、その上ならでは濡れ衣も、次郎左衛門には渡さぬのか。
願哲　詞つがうた上からは
次郎　もし間違へば絕體絕命。浪人したれど離さぬ一刀、備前國光、殿より拜領、次郎左衛門が武士の魂ひ。

トすぐさま拔いて、願哲が目先きへ差出す。願哲白刃をキツと見て

願哲　天晴れ銳きその金色。さこそ異名も

ト次郎左衛門白刃を引き、有合ふ莨盆を二つに切り

次郎　水もたまらぬ「籠釣瓶」。品によつては
八橋　エ。
次郎　覺えてうせう。

ト時の鐘、唄になり、しやんと納め、向うへ走り入る。此うち彌左衛門、佐次郎出かゝり、窺ひゐる。

八つ橋「ワツ」と泣き伏す。太平次駈け寄つて、介抱して

太平　コリヤ、八つ橋、尤もぢや〳〵。

願哲　二人の縁が切れたる上は

彌左　もう正體を顯はして

佐次　よいとも〳〵。彌左衞門樣。

伴藏　首尾よく行つて

皆々　重疊々々。

彌左　サア、これからは八つ橋は、彌左衞門が抱いて寢る。思へばこれまで、よくも辛抱した事サ。

ト八つ橋に寄り添ふ。八つ橋、太平次こなしあつて

八橋　合點のゆかぬ、彌左衞門さんの、今の詞のはし。

太平　そんならこれなる八つ橋を

願哲　身請けしたのは、釣鐘の

彌左　小身ながら、わしでごんす。

八橋
太平　エヽ。

彌左　その驚きは尤もだ。全體、八つ橋には、とうから氣のある彌左衛門、新造買ひで通つたは、伴藏様との云ひ合せ。お出入り屋敷の次郎左衛門、彼奴が附いてゐるうちは、屋敷の聞えもあるゆゑに、誠は惚れぬ面でゐて、今ので解つた、コレ、八つ橋、誠はおれが女房にするワ。

願哲　身請けの客に見立てられ、よんどころなく頼まれた、この船橋の次郎左衛門。持つて廻つた狂言で、縁さへ切れば屋敷の聞え。

佐次　次郎左衛門といふ同じ名から、どぢを張つたはこの蔦屋。太平次どのをはめた氣で、した仕事もうまくゆき

伴藏　皆有りやうは彌左衛門から、金を引出す此方の魂膽。

歌十　うまく行つたら、わつちらも、早く御祝儀頂戴を

願哲　コレ、八つ橋、おぬしを仕事にかけたのよ。

八橋　そんなら身請けと云はしやんした、船橋さんは表向き。アノ、内證は釣鐘の

太平　彌左衛門様がさする事。それといふのも濡れ衣、二字國俊を、いよ〳〵お前が

彌左　遣らうと云つた事だ。おれが心に叶つたら

八橋　願ひ通り、その一腰、どうぞわたしに

彌左　ハテ、手切れのしるしとあるからは

八橋　この八つ橋に下さつたら、その時こそは、折紙添へて

彌左　そりやア其方で勝手にしやれ。

太平　必ず間違へて下さりますな。

　　トこの時門口の方より、藝者お鳥、ぶら提灯をともし、駕籠舁き、四つ手駕籠を舁ぎ出てくる。

とり　アイ、船橋樣の送りのお駕籠を

願哲　然らば身共は罷り歸るぞ。

彌左　何かはあなたのお骨折り

伴藏　身共は殘つて彌左衞門が

佐次　おめでた酒と出かけませう。

願哲　八つ橋、必ず彌左衞門と、仲よう添うて暮らすがよい。太平次、何かといかい世話。

太平　これを御縁に折々は

願哲　話しに參らう。八つ橋。彌左衞門。

　　ト駕籠に乘りながら

ハテ、羨ましいわえ。

ト唄、時の鐘になり、駕籠は向うへ、その外の人數殘らず捨ぜりふにて奧へ入る。八つ橋殘り、さし俯向きゐる。空には時鳥。障子を明け、奧女中姿のお六窺ひゐる。太平次は八つ橋の側に寄り

太平　コレ、八つ橋。

八橋　親方さん。どうせうぞいなア。

太平　オヽ、尤もだ〳〵。が、その切りにくい緣切らば、あの佐野樣の歸參の蔓。これといふのも、彌左衞門が、寢たその跡で、國俊の、一腰やらうといふからは、首尾よく受取り、折紙添へて、屋敷へ御歸參。

八橋　これ渡しなば主さんの、心も解けてこれまでの、女夫の結び。さりながら

太平　便つてござつたお屋敷の

八橋　あの姉さんへ立てる義理。所詮、この身は

ト空を見て

冥土の鳥と、もろともに

ト有りあふ硯箱を引寄せる。

太平　こりやゝ切れ文を書く心か。

八橋　アイ、せめて一筆。

　ト圍ひの方を見て

お前はそこに

　トこの聲に、障子シヤンと閉す。これをキツカケに獨吟になる。太平次こなしあつて奧へ入る。矢張り時鳥の聲。

唄〽ふりかゝる、身の憂き事に綾もなき

　ト此うち八つ橋、巻き紙を出し、書置を書きにかゝる事、よろしくあつて

不孝と、男の爲ゆゑに、是非なう縁は切つたけれど、外の男に帯紐を、解いては所詮身を捨てて、覺悟きはめし云ひわけは

　ト矢張り書置を書く。ゆつたりと道具ぶん廻す。

唄〽皐月の空の時鳥、啼いて行くへも知らぬみじか夜

　トよきほどに、靜かなる禪のツトメになる。

本舞臺、三間の間、後ろ黒幕。小高き杣の垣。よき所に庚申塚の小さき祠、格子あけたて。下に、右王子道、左日暮しの里、と記したる石の榜示杭。すべて根岸のあたりの道具よろしく、納まる。

ト向うより今の四つ手駕籠、小田原を提げて出て來り、舞臺へ來て

駕甲 オツト、棒組み、紐が解けた。肩を貸してもらはう。

駕乙 合點だ。

ト紐を結びゐる。矢張り時の鐘、禪のツトメ。また後より四つ手駕籠、提灯をつるし、捨ぜりふにて出て來り、駕籠の中の願哲、中より窺ひゐる。後の駕籠、舞臺へ來て

駕丙 てめえ達はどうした。

駕甲 紐が解けた。

トこの時兩方の駕籠より手を打つて呼ぶ。駕籠の者一人づゝ行つて、差寄り、中より聲を聞いて

駕舁 ハイ〳〵、畏りました。

ト中より侍ひ姿の願哲、奥女中姿のお六出る。

駕丙 ハイ、お包みがござりました。

ト袱紗包みをお六に渡し、捨ぜりふにて、四人は駕籠を舁ぎ、下座へ入る。兩人あたりを窺ひ、顔見合せ

願哲 姐御。
ろく 願哲さん。
願哲 今日は御苦勞。
ろく うまく行つたの。
願哲 うまく行かねえでどうするものだ。さう立つたところは、誰れが蛇遣ひの姐えと見るものだ。まる向きの奥女中だ。
ろく よしてもくんねえ。ほんに、姐えといへば、おらアどこか八つ橋に似てゞもゐたかして、萬壽屋の宿六めが、ほんの姉だと思つての。
願哲 成る程。さう云へば、あの八つ橋によく似てゐるの。
ろく 勿怪の調法お顏だの。
願哲 法華長兵衞は男達サ。
ろく 幡隨院長兵衞は高麗屋サ。
願哲 エヽ、埒もない。サア、もう脫ぐがよい。おらア頭から先きへ。
ト鬚や鬘を取り、序幕の坊主頭になる

ろく　オヤ〳〵。それぢやァ還俗ぢやァなくつて、俗還だの。
願哲　無駄を云はずと脱ぐがいゝわな。
ろく　今、脱ぐよ。ほんにこんな物を引ッ張つてゐると、氣が詰まつてならない。下司ばつてゐるぢやアねえかの。

ト云ひながら帶を解く。願哲も大小、羽織を取り

願哲　コレ、何ぞ附いたら、あの損料屋めが

ト困る思ひ入れ。

ろく　オイ〳〵、こゝにあるワ〳〵。

ト袱紗包みより風呂敷を出す。

願哲　成る程、如才ない嗅衆だぞ。仕事も如才あるまいな。
ろく　おらァ如才なくつても、この頃は一向サ。
願哲　なぜ〳〵。御亭主はどうした。
ろく　聞きねえ。あんまり智慧のない、働きのない男だから、叩き出してしまつたのよ。
願哲　氣の短い。それぢやァ可愛い男もなくつて、何にせうと、こんな仕事を

ろく　そりやア、あの金五郎と小さんの事に就いて、金のいる事があるのよ。

願哲　その金五郎は、今叩き出したといつた、傳兵衛どのゝ弟ぢやアないか。それに何も、金を拵へ

ろく　サア、兄貴があんな意氣地なしで、可哀さうだからの事サ。

願哲　達引き者だの。

ト此せりふを云ひながら、兩人衣裳を脱ぐと、願哲は木綿袷、ひとへ帶の形。お六は、廣括け、誂への形になり、お六は脱いだ物を袖疊みにする時、願哲が衣裳の間より守り袋落ちる。願哲取つて

こいつはお客になつた。

ト お六悔りして

ろく　とんだ事を。おらア月末だものを。

願哲　何サ、この臍の緒の事よ。

ろく　どうしたのだえ。

ト願哲は臍の緒を出して、守り袋を別に持ち

願哲　こりやァあの八つ橋が少さい時、おれが誘拐かして、田町のぜけんへ賣つてやる折、肌に掛けてゐた彼奴の臍の緒よ。

ろく　そんならお前が、かどわかして賣つたのか。それにしちやァ、よく八つ橋がお前を知らずに

ト着物を疊みながら、臍の緒を見ずに云ふ。

願哲　どうして、たつた六つの年の事だものを。

ト云ひながら、又守り袋を中に入れ、下に置いて、着物を疊む。

ろく　なぜ又、これを持つて來たのだ。

願哲　サア、若しこなさんが、あの手で遣りそくなつた時、こいつを玉に使はうと思つて。

ろく　馬鹿な事を云ひねえ。誰だと思ふ、土手下のお六さんだ。

願哲　そりやァさうだが

ろく　そして、あの彌左衛門さんの所から取る、肝心の物はどうした。

願哲　そいつを間が惡くつてまだ取らない。明日にでも行かずばなるまい。併し氣遣ひしないがいゝ、金は今日取らないでも、コレ、こゝに、彌左衛門が酒をくらつて、忘れて立つた其うちに、身を摺り變へた二字國俊。

ト脇差しの身を拔いて見せる。

ろく　そりやァ濡れ衣の事だらう。豪勢に切れさうだの。

願哲　大金になる代物よ。
ろく　早い手廻しだ。そんなら可哀さうに八つ橋は、縁を切つたり、否な奴に抱かれて寢て、あの濡れ衣を貰つて、次郎左衞門に遣つたところが、似せ物だの。こいつはちつと殺生だ。
願哲　マア、そんなものだけれど
　ト此うち願哲、着物もお六のと一つに風呂敷へ包み
願哲　イヤ、こいつはぬかつた事をしたわえ。この濡れ衣の折紙は、あの親方の手へ渡つてゐる。あれを彼方へやられちやァ。こりやァ蔦屋に呑みこませて、今夜のうちに捲上げさせよう。どうでも直ぐに引ッ返して
ろく　あの三河島へ行くのかえ。
願哲　もうこの形ぢやァこつそりもので、蔦屋にでも逢はにやァならない。おれに構はず歸るがいゝ。
ろく　こんな包みはどうしたものだ。
願哲　そいつはおれが歸るまで
　トあたりを見て、庚申塚の祠の中へ包みを入れ、格子戸を締め
斯う忍ばせて、この濡れ衣ばつかりは、手離されない大事の代物、差してゐるのが大丈夫だ。

ト一腰は差す。

ろく　そんなら、わッちやア先きへ行くよ。今日の金を受取つたなら

願哲　合點だよ。エヽ、降りさうになつて來た。

ろく　早く歸らつしやい。

ト矢張り禪のツトメにて、願哲足早に向うへ入る。トかすめて時の鐘。お六あとを見送り

成る程、惡い事にかけては上なしだぞ。其また惡い人とうなづいて、今日のやうな事をしたのも、金五郎どのや小三坊に、三拾兩の金の出入り。何もこの身の慾徳にしたといふぢやアなけれども、今思案して見れば……アヽ、まゝよ、あとの祭り。ドレ、マア、內へ。

ト合ひ方になり、お六手拭ひを頭へ卷き、二足三足行きかゝり、足にかゝりし今の守り袋を取上げ

アヽ、願哲坊が取落して

ト云ひながら、守り袋の裂れを見て

ハテ、よく似た物も

ト思ひ入れあつて、我が守り袋を襟に掛けしまゝ取出し、比べて見て

こりやア同じ錦の裂れ。

トこれにて手早く臍の緒の包みを出し

「文祿二年癸の巳十月誕生の女子、みつ」。……エヽ

ト我が守り袋よりも臍の緒を出し、包みの年を見比べ

オヽ、こりやわしが臍の緒とも。今の話しに八つ橋を、かどわかして賣つたといふ。妹が見えぬも六つの年。そんなら萬壽屋の亭主が推量、丁度當つて、八つ橋が、誠の姉で。……さうとは知らず、頼まれて、緣を切らせに行くばかりか、可哀さうに起請まで

ト以前の起請を出して思ひ入れ

妹へ云ひわけ、せめての事。あの願哲が摺り變へた、正眞の濡れ衣を、貰つてやるのが姉の詫び。こりや斯うしてはゐられぬわい。

ト守り袋の中へ起請も臍の緒も一しよに入れ、ぐる／＼と卷き、懷ろへ入れ、帶を締めながら、時の鐘の送りにて、向うをキッと見て思ひ入れ。この見得にて、道具廻る。

本舞臺、向う三間の間平舞臺、茶壁腰貼り、杜若と八つ橋の模樣、萬壽屋の寮、座敷の飾り附け。誂への門口。寒竹の垣根。よき處に三つ蒲團、錦の夜具、杜若の六枚屏風。こゝに彌左衞門、寢卷きの形。

お岸お民、お鳥、皆々獅子をしてゐる。銚子、杯、取り肴などを取散らし、朝顔附きのぼんぼり照らしあり。獅子の鳴り物にて道具とまる。
ト向うより次郎左衛門、頬かむり、大小にて、窺ひ〳〵出て來り、内の様子にためらひ、寒竹の藪へ隱るゝ。奥より伴藏、佐次郎、歌十、權平出てくる。
彌左　獅子はどう〳〵。
女皆　アヽ油斷は致さぬ。
ト　よろしくあつて
伴藏　コレノヽ、釣鐘。おぬしは思ひがけなく、今夜は極樂淨土へ行つた心持ちであらうな。
佐次　そりやアお前の仰しやる通りだ。して、アノ、おいらんを抱いて寢ると、お前はあの國俊をまじめに遣る氣か。
彌左　ハテ、遣らにやァ八つ橋がなびかねえワ。その彼方へやる國俊は、コレ。
ト　願哲が差して來た一腰を見せて
これを八つ橋にやるワ。
佐次　アヽ、モシ。こりやアどうか拵へが變つてゐるぞえ。

彌左　ア、、コレ。シイ〳〵。何を云ふのだ。この刀は誠の國俊よ。ナ、コレ。

　　ト佐次郎に囁き

　承知か〳〵。

佐次　成る程、違はぬ二字國俊。イヤ、結構なお道具だ。

伴藏　その筈よ。おいらがお屋敷の御先祖からの讓り物だワ。

　　ト此うち彌左衛門は蒲團の下へ一腰を入れる。

佐次　時に、わしは歸りがけに、あの顛哲や、姐えの所へ

　　ト云はうとする。

權平　コレサ。その顛哲や、あの姐えが事は、沙汰無し〳〵。

佐次　成る程。こりやア誤まつた。

歌十　時に、旦那、ちつと浮きたうございますね。

彌左　エヽ、よくむしる奴だぞ。コレ、下一枚だ。

　　ト紙入れより一兩出してやる。

歌十　これはおれが鍼の療治、はどうだね。

女皆　また洒落かいなア。

伴藏　時に、おらア今夜は泊つて行かうぢやアないか。何だか豪氣に醉つたぞ。

彌左　醉ひなすつたら、駕籠を呼びにやりなさい。

伴藏　エヽ、この男は、追ひ出すな〱。

彌左　それでも、邪魔だわな。

伴藏　さう聞いては、猶々歸らぬ。

佐次　モシ、旦那、斯うなされませ。わたしが歸りがけに駕籠を寄越しまするよ。

伴藏　ハテ、歸らぬといふに。

ト醉つたる思ひ入れ。

女皆　アヽ、モシ、危なうござります。

權平　サア、蔦屋さん、お前の所まで行きやせう。

佐次　さうしなさい。

歌十　アヽ、降らねえうちに行かうぞえ。

佐次　おしげりなさいよ。

彌左　そんなら明日逢はうぞえ。

ト流行り唄、時の鐘になり、酔つたる伴藏を女形介抱して奥へ入る。權平は留守居提灯をともし、佐次郎、歌十、捨ぜりふにて向うへ入る。彌左衞門床に殘る。次郎左衞門は外より窺ひゐる。

彌左　ハテ、此八つ橋は何をしてゐるやら。こゝはお定まりの、狸寢入りと仕らうか。アヽ、コレ〳〵きつい蚊だワ。コリヤ、蚊帳を吊つてくれねえか。コレ〳〵。とんだ蚊だ。夜着でもかぶらう。

ト頭より夜着を冠つて寢る。時の鐘、合ひ方、蛙の聲する。次郎左衞門ソツと戸を明け、そろ〳〵入り、屛風の方へ窺ひ寄つて、蒲團の下の一腰をソツと取つて、ぼんぼりの灯をかりて見ようとする。

奥にて

とり　サア、八つ橋さん、此方ぢやわいなア。

トこの聲に次郎左衞門うろたへ、外へ出る。この時門口に、螢四五疋飛んでゐる。次郎左衞門はこの螢の火と朧の月影にて、一腰の拵へを見ろ事。奥よりお鳥、八つ橋を連れ、出て來り

八橋　お鳥さん、どこにぢやぞいな。

とり　アイ、この屛風のうちに

八橋　居なんすかえ。

とり　アイ。そんならしつぽり

八橋　エヽ、おきなさんせ。

とり　推量して居やんすわいな。

ト奥へ入る。八つ橋床の方へ來て

八橋　アヽ、こりやきつい蚊ではあるぞ。なぜマア蚊帳を吊らずに

ト この聲を聞き、彌左衞門顔を出す。

申し、彌左衞門さん、お前の顔を立てるほどに、持つて居さんす一腰を

彌左　サア／＼、遣りは遣らうが、コレ／＼、まだお祭りの渡らぬうちは

八橋　マア、それを下さんせいな。

ト此うち次郎左衞門は、一腰の拵へ違うてゐるゆゑ、騙されしといふ思ひ入れ。

彌左　それだといつて、まだ寢もしねえで

八橋　そんなら嘘かえ。

彌左　嘘ではないよ。てめえに渡す。この國侍はの

ト蒲團の下を尋ねる事あつて

ヤア〳〵、こゝに置いた一腰が、無くなつた〳〵。

八橋　エヽ、ナニ、その一腰が

彌左　サア〳〵〳〵。見えぬワ〳〵。

ト狼狽へて尋ねる。此うち次郎左衛門は内へ入り、さては似せ物と心得、彌左衛門が前へ一腰を突き附け

次郎　二字國俊は、これぢやといふのか。

彌左　エ。

ト恟りして

そんならわれが盗んだか。

次郎　こりや似せ物ぢやワ。

ト投げ附ける。

八橋　ヤア、次郎左衛門さん。

次郎　畜生め。

ト刀を抜く。八つ橋飛び退く。彌左衛門も「ワツ」と逃げる。これを一刀に切り倒す。八つ橋逃ぐる

か追ひ廻す。伴藏何心なく出て

伴藏　駕籠はまだか。

ト云ひながら見附け

ヤア、人殺し〳〵。

ト云ふを後ろなぐりに切り倒し、八つ橋へ切つてかゝる。立廻つて、引き倒す。八つ橋は下より書置きをひろげ

八橋　モシ。

ト次郎左衞門が顏へ兩手にて差し附ける。

次郎　何を、ばいためが。

ト引ッたくるはずみに、書置きは次郎左衞門が手へ、ぐる〳〵とまとふ。八つ橋起上がり、屏風の中へ走り入る。次郎左衞門追ひかけ行く。

八橋　コレ、一言

トばた〳〵と音して屏風倒れる。次郎左衞門は八つ橋を押し伏せ、書置きのまとひし手にて口を押へて乘りかゝり、胸元へ白刃を押當てたる見得。雷鳴の音、本雨にて、この道具廻る。

本舞臺、正面は後ろ黑幕、稻むら、竹藪、眞中に蒲鉾の非人小屋。上の方に建仁寺垣、内にこけら葺きの屋根を見せ、振りよき柳、その外樹木植込みの模樣。萬壽屋寮の後ろを見せたる道具に納まる。

トこゝにづぶ六の三、蚊いぶしを焚き附けてゐて、空を見上げ

づぶ　アヽ、こいつはどうでも鳴つてくるわえ。筑波の方が豪氣に光る。蚊いぶしでも焚き附けて、雷鳴をどこへかやらにやアならぬ。ハテ、うるさく鳴る雷鳴だ。

ト火を焚いてゐるうち、雷鳴大きくなる。悧りして「桑原々々」と耳をふさいで小屋の中へ入る。矢張り捨て鐘、雷鳴。向うより願哲、俵を冠り、國俊の刀を衣に包み、手前の刀も差して

願哲　桑原々々。

ト駈けて出る。あとよりお六

ろく　願哲さん〳〵。オヽイ〳〵、願哲さん。待ちねえな〳〵。

ト追ひ駈けて來り、舞臺へ來て

コレサ、待ちねえといふに、素敵に駈けるの。

願哲　オヤ、姐御か。待てと云ふやら、何と云ふやら、耳をふさいで駈けて來たから、さつぱり聞こえ

なんだ。

ろく　お前、雷鳴は嫌ひか。

願哲　怖くてならねえ。

ろく　成る程、雷鳴の嫌ひな風だ。

願哲　おいてくんな。コレ、姐御。おれを呼びかけて來たは、今道で云つた事か。雷鳴がお前を怖がるであらう。

お六　さうサ。お前が持つてゐるその國俊をの、ちつとわッちに、貸してくんねえ〳〵。

ト急いたゝ體にて、衣に包みし一腰へ手をかける。

願哲　コレサ、どうもこりやア貸しておかれねえ。今にも彌左衞門どのゝ方から取りに寄越せば、あの金と引替への國俊だから、どうもぬしには貸されねえよ。

ろく　ナニ、明日はぢきに返すわな。ちよつと貸しねえよ。ちいッとつゝうくつにする。

願哲　コレ、つゝうくつにされて堪るものか。つゝうくつにするなら、これを貸さう。この刀を持つて、行きねえ〳〵。

ト差して來た手前の刀を渡す。

ろく　ナニ、つゝうくつぢやアねえ。餘所へちよつと見せる所があるから。

願哲　エヽ、とんだ事だ。餘所へ見せちやァ、そりやァ猶わるい。サア、これを持つて、行きねえ〳〵。
ろく　イヽエ、これぢやァ悪いよ。國俊を寄越しねえよ。
願哲　エヽ、ひつこい。否だと云ふに。
ろく　寄越しねえ。
願哲　否だ。
ろく　寄越しやァがれ
願哲　太いあまだ。
ろく　あまとは誰れが事だ。
願哲　知らねえ。
ろく　寄越さねえか。

ト濡れ衣を奪ひ合ふ事。立廻りのうち、願哲、お六を蹴飛ばす。お六ムツとして立ちかゝる。とたんに雷鳴きびしく鳴るゆゑ、お六思はずひるむこなし。願哲は「桑原々々」と耳をふさぎ、「ワツ」といふて蒲鉾小屋の中へ入る。お六これを見付け、追ひかけ行かうとして、捨てゝある刀を見付け、手早く取上げ

妹へ云ひわけ、是非とも國俊。

　ト思ひ入れあり

もう斯うなつちやア

ト刀を拔き、小屋の上より突き込む。此うち捨て鐘、雷鳴、蛙の聲。內よりづぶ六の三、突かれし體にて、うめきながらよろけ出る。願哲は後ろへ拔け、恟りして慄へゐる。づぶ六の三は深手ゆゑ、うめくばかり、物を云はれぬ仕組み。

サア、願哲。あの國俊を、サア、國俊を

ト願哲と心得、滅多切りにする。願哲窺ひゐて、側へ差寄り、くらがりにて、手傳ひ、殺させる仕組み。この時向うより、四つ手駕籠に消え提灯を吊し、空駕籠の歸りにて、駕籠舁き一人先き棒、後肩はお守り傳兵衞にて、咬へ煙管にて出て來り、本舞臺よき處まで來り、先き棒「ワツ」というて駕籠を捨て、引ッ返して向うへ逃げて入る。傳兵衞もうろたへ、「ワツ」といふ拍子に、咬へた煙管を落し、續いて向うへ逃げ、花道にて俯向けになつて隱れゐて窺ふ。舞臺は三人、間違ひの立廻り。お六の持つたる白刃は前の流れに落す。づぶ六の三はむしやぶり附き、お六の小指くひ切る仕組みよろしく、お六は指を押へながら、とゞめを刺さんとあたりを探り、白刃なきゆゑ、手に觸れし傳兵衞の煙管を

取つて、づぶ六の三の咽喉を貫き、國俊を尋れる思ひ入れ。傳兵衞は、探り〳〵舞臺へ來り、空駕籠を探り見て、この中へ入らうとして、駕籠の際に落ちてあるお六の落せし臍の緒の守り袋と八つ橋の起請を拾ふ。この時、塀の内にて拍子木打立て

大勢　切つた〳〵。

トこの聲を聞きお六、手前の事と心得、悔りする。こゝにて捨て鐘、忍び三重、蛙の聲して、屋根の上へ次郎左衞門、頰かむり、白刃を持ち、書置きを咬へし八つ橋の切り首を下げて、窺ひ出る。願哲逃げんとして、づぶ六の三が咽喉に殘りし煙管を取つて腰へ挾む。お六は國俊を尋ね廻り、塀の際へ行き當ると、切り首の咬へし書置き、ばら〳〵とお六の目先きへ落ちかゝる。驚くはずみにお六書置きをちぎる。傳兵衞は探り廻り、煙管は取らいで小指を拾ふ。思ひ入れあつて帶へ挾む。次郎左衞門は首を腰に附け、舞臺へ飛び下りる。この音に驚き、お六は花道へ、願哲は一腰を持ち、東の花道へかゝる。傳兵衞、そろ〳〵窺ひゐる。次郎左衞門は後向きになりて、無念の思ひ入れあり、腹切らうと支度する。傳兵衞窺ひ見て、思ひ入れあつて

傳兵　ヤ、旦那樣。

トこの聲にお六、願哲悔りする。傳兵衞は次郎左衞門に取附き、切腹を留める模樣、よろしくひやうし

早拍子木、「切つた〳〵」の聲、時の鐘の送り。東西の兩人、窺ひ〳〵入る。知らせに附き、シャギリ。

幕

大切　お六住家の場

役名——修行者、願哲。お六母、お倉。小間物屋、金屋金五郎。中間、權平。判人、勘八。見世物師、三右衞門。同、萬八。同、半七。同、太郎二。酒屋の御用、仙吉。男藝者、歌十。女輕業、玉本小三。杜若姐え、土手のお六。佐野次郎左衞門。お守り傳兵衞。

本舞臺、三間の間、上の方障子屋體、内に蚊帳吊りかけてあり。よき所に長持を直し、正面暖簾口、まひら戸、棚。下手惣銅壺の竈、水瓶、流し、臺所道具飾り附け、引き戸の門口。本疊敷き、下の方破りの壁、誂への通りに飾り、軒に蓬、菖蒲を下げてあり。すべて淺草山の宿、見世物師の住居よろしく、さんげ〳〵の鳴り物にて幕明く。

トこゝにお倉、やつし、婆アの形、仙吉は酒の御用にて、疊を上げ、根太を離し、緣の下へ逃げたる蛇を尋ねゐる體。門口に傳兵衞、盥に水を入れ、雜巾にて門口を拭き掃除をしてゐる。

くら　どうぢや。居ますか〳〵。

仙吉　伯母さん、そこらの方を突ツつきねえ、此方へ來るであらう。

くら　オイ〳〵。こゝに居ますか〳〵。

ト棕梠箒の柄にて、緣の下を尋ねる。傳兵衞は外より、戸を閉てたるまゝにて

傳兵　モシ〳〵。太夫は、居ましたか〳〵。

仙吉　待ちなさい。今つらまへるわな。

傳兵　早く〳〵、つらまへて下され。氣味が惡うて、こゝが明け悪いわな。

仙吉　エヽ、臆病な事を云ふ。

ト捨ぜりふにて、二人は蛇を追ひ廻す。傳兵衞外にて心遣ひしてゐる。八人藝の鳴り物になり、向うより見世物師萬八、三右衞門、輕業の子供二人、いづれも浴衣がけにて出て來り、門口へ來て

萬八　コレ〳〵、傳兵衞どの、外へ出て何をまご附いてゐる。

三右　折角詫び事が濟んだに、又追ひ出されたのかえ。

傳兵　イヽエ、わしが内では今、太夫が逃げまして、それを探すとて、内はモウ、取つてかへします。

萬八　ナニ、太夫が駈け落ちをしたえ。

トこの聲を聞いてお倉

くら　モシ〳〵。案じさつしやるな。あの傳兵衞が、太夫〳〵と云ふは、長虫の事ぢやわいの。

萬八　アヽ、蛇の事か。そんな事でごんせう。

トこのうち仙吉蛇を捕へて

仙吉　そりや捕まへた。箱を持つて來なさい。

ト椽の下より蛇を捕まへて出す。お倉誂への箱を出し

くら　サア〳〵。爰へ入れませう〳〵。

ト捨ぜりふにて箱へ入れる。

仙吉　サア、傳兵衞さん、疊を敷きなさいよ。

傳兵　オツト、合點ぢや。もう居はせぬかえ。

萬八　サア〳〵、手傳うてやりませう。

ト内へ入り、見世物師兩人も手傳ひ、根太板を並べ、疊を敷き

傳兵　これはどなたも御苦勞。サア〳〵此方へ、ござりませ〳〵。サテ、マア、分けて口上樣。夜前は大きにお世話でござりました。まだお禮にも參りませぬ。忝うござります。

三右　これはしたり、何の禮には及びませぬが、モシ、お袋、さぞ強情勝ちでござらうが、そこは何を云うても、氣の足らぬ男の事、亭主はいはゞ世間の飾りでござるから、何事も料簡して、持つてやつて下さりませ。

くら　イヤモウ、昨夜から大きにお前のお骨折り、この母も喜びまするぞえ。

萬八　さうでござらう。この間から傳兵衛どのが、あまり氣の毒と思ふから、昨夜、よく〳〵お六どのに詫び事して、元の鞘へ納めましたが、コレ、傳兵衛どの、こなさんも内儀に氣を揉まさぬやうに、何と云はつしやるとも、ハイ〳〵と素直にしてござるがよい。ハテ、亭主は女房に負けうちでござるわいの。

傳兵　イエモウ、お前が折角其やうに、深切に世話して下さるから、この上とも、女房がどのやうに申しませうとも、ハイ〳〵と、隨分云ふ事をきゝませう。アレ、見さつしやりませ。表口も今朝から掃いたり、拭いたり、これで三度、この位る精出したら、女房のお氣にも入りさうなものでござりますて。

三右　成る程。さう往生してござれば、物事に間違ひはござるまいて。して、姐御は、こりや、うたゝ寢かな。

くら　イヤモウ、別してお六も樂寢ばかりでもござるまい。今朝から氣色はわるし、どうやら氣合ひも惡い樣子でござつたて。イヤ、それはさうと、こなさん達、子供を連れて、こりや何か用でもあつてござりましたか。

萬八　サア、子供を連れて來ましたは、なんでござるわいの。昨夜急に府中の町から、六社樣の祭禮に就いて、三日の市があるから、輕業を買はうというて來たのぢや。そこで相談も極まつたによつて、今夜、夜立ちにして、高井戸までも行く積りぢやが、ぶッつけの初日ゆゑ、子供に一遍稽古もさせたし、ちつとの間、こゝの内を借りる氣で來ました。

くら　それは易い事でござります。隨分稽古さつしやりませ。

三右　それは忝い。それに就いて、この間こちの内へ預けて置いた衣裳長持ち。世話でござつた。わしらが、ちよつと擔げて行きませう。

萬八　オイ、合點ぢや／＼。

ト長持ちの上の鼓箱や三味線なぞを取り除け、捨ぜりふにて長持ちへかゝる。傳兵衞うろたへ、長持ちへうちかゝつて

傳兵　モシ／＼、この長持ちを、どうさつしやります／＼。

半七　とばを詰めて、先きへ送りますて。

傳兵　そんなら、もう持つて歸らつしやりますか。

萬八　さやうサ。

傳兵　アヽ、そりやお前、どうもこの長持ちは、手離してやり憎うござります。

萬八　そりや、なぜやられませぬ。

傳兵　サア、この長持ちをやられぬと云ふ譯は

　　トもぢ〳〵して

アヽ、なんでござります。アヽ、この間はきつう物騷なによつて、明日の朝でもよからうと申して、それでやられぬと云ひました。明日の事にさつしやりませぬかいの。

三右　ハテ、傳兵衛どのとした事が、明日の朝ぢやとて、別して變つた事もござらぬが、さう云はつしやる事なら、ようござる。明日の事にしませうかえ。

傳兵　サア〳〵、さうさつしやりませ〳〵。

萬八　イカサマ、物騷と聞いては、今夜やるのは危ないものだ。この間も三河島で、非人が一人切られましたが、その男の咽喉を、何ぢやゝら、無理に引破つたやうな疵がござりましたげな。しかもそ

の晩の事であつたが、萬壽屋の寮で、八つ橋が無理殺しにあつたとやらっその殺し手は、佐野次郎左衛門とやらいふ侍ひださうなが、切るとその儘行くへが知れぬとて、今に詮議最中でござるて。

ト何心なく話すを、傳兵衛聞いて、一々心遣ひの思ひ入れ。お倉心附かず

くら　成る程。さういふ噂も聞きましたが、人を切るの、殺すのと、思ひ切つた事をする者もあればあるもの。天の罪で、ぢきに捕へられませう。ナウ、傳兵衛、さうぢやないか。

傳兵　アイ、大方ぢきに捕まりさうなものでござりまするて。

ト思ひ入れ。お倉こなしあつて

くら　ヤレ／＼、蛇にかゝつて大きに骨を折つたわいの。マア／＼、一服吸ひませう。

ト傳兵衛の、紙叺莨入れを探して見て

傳兵衛、煙管は無いか。

傳兵　アイ、この間落しましてから、まだ買ひませぬて。

くら　アヽ、煙管は無いか。この人とした事が、何なと有りさうなものぢやに。

ト莨入れの中の守りを見附け

ハテ、この切れは見たやうな守りぢやが、こりや慥か、あのお六が掛けてゐる

傳兵　サア、わしもさう思ひまするて。
くら　オヽ、てつきり、こりやお六か守り。違ひないぞや。
傳兵　さうは思ひまするが、こりや拾ひましたて。
くら　そりや、どこでいの。
傳兵　ハイ、三河島で拾うて戻りましたが、ツイその晩に、大事の煙管を
くら　落したのか。
傳兵　アヽ、惜しい事を致しました。
くら　イヤ〳〵、あまり惜しうもない煙管であつたわいの。
三右　イヤモウ、煙管の無いほど不自由なものはござらぬわいの。ほんに、奥を借りて、稽古をやつて
　　行かうかえ。
子役　もう稽古は始まるのかえ。
仙吉　おいらも鳴り物をしてやらうか。……そりやアさうと、姐御はまだ寝てかえ。わしが起して來よ
　　うか。
傳兵　アヽ、イヤ〳〵、寝る程寝ねば、氣分がわるうござるわいの。矢ツ張り寝させて置いて下され。

萬八　イカサマ、こゝらへ氣を附けて、隨分女房の機嫌を取らつしやいよ。

傳兵　サア、それが亭主の役でござります。

三右　ハヽヽヽヽヽ。サア、稽古は奥でやりませう。

ト流行り唄になり、見世物師・子供、皆々鳴り物道具を持ち、お倉は傳兵衞の守りへ心を殘し、奥へ入る。あと合ひ方、時の鐘、傳兵衞殘る。向うより男藝者歌十、ウロ〳〵出て來り、門口に窺ひゐる

傳兵衞これに氣附かず

傳兵　あの衆の今の話し。その八つ橋を切つたのは、次郎左衞門と知れてあれば、在所知るれば

ト長持ちへ心遣ひあつて

その夜に切られた非人が、口に殘つた

トこの時長持ちの中、ホト〳〵と物音する。駈け寄つて思ひ入れあり。

モシ、さぞ氣詰りでござりませうが、どうぞ暫く辛抱して

ト思ひ入れ。外より歌十、窺ひゐて

歌十　ハイ。お頼み申しませう〳〵。

トこれにて傳兵衞、門口へ來て

傳兵　アイ、何でござります。

歌十　イエ、苦しうない者でござります。御免なされませ。

ト内へ入り

イエ、私しは、吉原の萬壽屋から參りましたが、この間は何かと、彼の人の事に就き、さぞ心遣ひでござりませう。委細の事は私しに申し遣はしまするほどに、極く内々でお目にかゝつて參れと、親方が寄越されました。お心置きなう、お逢はせなされて下さりませ。

ト傳兵衞思ひ入れあつて

傳兵　モシ〳〵、お前、どれからござりましたか。何ぢややら合點のゆかぬ事いはつしやるが、そりや間違ひであらうぞえ。

歌十　イヽエ、違ひはしやせぬ。お六さんの内は爰であらうに。

傳兵　アイ、爰は爰ぢやが、留守でござる。わしは留守を預かつた餘所の者でござる。サヽ、歸つて下さりませ〳〵。

ト門の外へ突き出す。

歌十　エヽ、間違ひかえ。そんならようござりやす。ドリヤ、外を尋ねませうか。

トてんつゝになり、向うより、垂れを下せし四つ手駕籠へ、金五郎頬かむりにて附き、スタ〳〵と出て來るゆゑ、歌十は西の歩みへかゝり、駕籠の行先きを花道にて見定め、思ひ入れあつて花道へ入る。駕籠は門口へ下す。

金五　ちつとの間、待つて居て下さい。

駕舁　合點でござりやす。

トこの時輕業の鳴り物になる。金五郎ソッと内へ入る。

金五　兄貴でござりますか。

傳兵　オヽ、弟の金五郎ではないか。

金五　アイ、こなさんが爰の内へ戻らしつた事を聞いたによつて、逢ひに來ました。殊に、ちよつと頼みたい事もあつて。

傳兵　オヽ、この兄に頼みたいとは

ト駕籠に目を附け

見れば、誰れやら駕籠に乘つた人もある。こりや、おぬしは、てつきり

金五　女を一人連れて參りました。

傳兵　ヤア、そりやどこの女中を。

金五　サア、ちつとした譯やひ、連れて退かねばならぬ義理、まだ年のある奉公人。こなさんの所なちつとの間、貸して下さりませ。

傳兵　すりや、女を連れて駈落ちしたといふのか。

金五　アイ、頼る所は兄貴の內と、極めて參りました。サア、小三、うつとうしからうが、こゝへ出やこゝへ出や。

傳兵　アヽコレ、ひよつと勝手が

金五　サア、それぢやによつて、この內へ

傳兵　ヤ。

ト思ひ入れ。この時奥にて

三右　東西。

ト鳴り物打ちあげる。

金五　アヽ、ありやァ輕業の

傳兵　稽古ぢやわいの。

ト奧にて

三右　太夫お目見得。

ト程よく鳴り物にかゝる。金五郎垂れを上げる。中より玉本小三。誂への形にて出てくる。

駕舁　サア、行くべえ。

ト駕籠舁は走り入る。小三は内へ入り

小三　金五郎さん、此方のお世話になるのかえ。

ト矢張り輕業の鳴り物。

金五　當分、マア、居候ふと見えるわいの。

傳兵　アヽ、この女中が其方のか。ハテ、怪しからぬ形ぢやの。

小三　アイ、思へば女子の恥かしい、此やうな形で參るは、御免なされて下さりませ。以前はわたしも小三といつた勤めの身、親方さんの氣にたがひ、此やうにあられもない、女子の輕業。お前のお氣には入るまいが、今日からどうぞ、可愛がつて下さりませいな。

金五　アレ、あの通り、親兄弟も無い女、當と云つちやアこなさんばかり。無理な無心でござらうが、ちつとの間、こゝの內の、居候ふに賴みます。

ト此あたりよりお倉、蚊遣りの火鉢を持ち、出かゝつて窺ふ。鳴り物やむ。

傳兵　これはサテ、迷惑な。わしぢやとて、去年の冬から爰の內へ、小糠三合持たぬ入り聟。何をさせても埒明かず、念のいつた不器用者。とうに爰を追ひ出され、ねんごろやいの衆の世話で、昨夜、やう／＼女房のお六どのへ訴訟して、歸り早々、なんぼ身內の者ぢやというて、居候ふには賴みにくい。ハテ、わしでさへ、居候ふ同然な亭主ぢや。それともに否なら、こゝのお袋とも相談して

くら　サア／＼、わしも先刻から聞いてゐたが、今では娘にかゝる身分、わしぢやとて返事はどうも

ト氣の毒なる思ひ入れ。此うち、蚊帳を捲つて、お六、惡婆の拵へ、煙草盆を引寄せながら、煙管にて莨吸ひ附ける思ひ入れにて聞いてゐる。

傳兵　アレ、お袋もあの通りぢや。マア／＼、今日は惡いゆゑ、友達でも賴んで、どこぞ外へ行くがよい。サア、歸つてくれ／＼。

ト二人を外へ押し出す。

金五　サア、さう云はつしやるも尤もだが、こゝの姐御のお六どの、まんざら知らぬわけでもなく、兄貴へは沙汰なしに、小三が身の代、かゝりの金、賴んでおいた譯なれば、姐御に逢つたその上で

傳兵　サア、さうではあらうが、わしが弟、この傳兵衞が緣者、おぬしは爰へは

ろく　イエ、わッちが內へ幾日も置くよ。

傳兵　オヽ、さう云ふは

金五　姐御かえ。

ろく　金五郎さん、何も遠慮をする事はねえわな。常からあれほど懇ろに、金の事までどうなりと、工面が出來ずば、斯う〳〵と、受合つても、たうとうそれも無駄事。その上この身に降りかゝる

金五　エ。

ろく　サ、なんであらうと、譯道の、まんざら解らぬ事ぢやアなし、たかゞ小三をこなさんが、連れて逃げたといふ始末、世間にいくらもある事だよ。聞けばあの子も身の代は、さのみな金でもねえ話し。そんならどうでも、道行きさへ附いたなら、いさもあるまいわな。不自由勝ちではあらうがの、當分こゝの居候ふと、案じを極めてねえ。

傳兵　これはマア氣の毒な。わしが緣で此やうに、世話、厄介が殖えるを見ては

ろく　ハテ、うつちやつて置きねえな。何もお前に緣があるの、無いのといふ話しぢやアねえよ。若いうちはいくらも有りうち。人の世話は人がしねえで誰れがするものだ。何もお前の身寄りだ、

身寄りでねえといふ譯ぢやアねえよ。早い事がある。面倒なら、お前とわッちが緣を切つてサお前を出しても、あの手合ひは、世話をするよ。それでなけりやア、人でもぐいぐい(?)でもねえわな。

金五　モシ、そりやア忝うございます。それでわしも大きに安堵しました。コレ、小三、姐御に禮を云やいの。

小三　アイ〳〵。常から噂には聞いてゐやしたが、この間ちよつと兩國で、お目にかゝつたお六さん、この上ともに、どうぞ世話して下さんせえ。モシ。金五郎さん、もし判人の勘八さんが、爰に居る事を聞き出して。今にも來さんしたら、どうマア方を附けさんすえ。

金五　サア、どうと云つたら、どうかならうワ。

くら　イヤ、又お六が呑みこんでは、さうやかましうかゝつても來ますまいわいの。

傳兵　イヤモウ、わしは亭主といふものゝ、年中女房の厄介者、重荷に小附けが殖えられては、見て居るわしの氣がたまらぬ。

ろく　サア、お前がそんなに心遣ひをするなれば、三尺店でも持たさうわな。松坂町や横網ぢやア、當りさはりもあらうから、斷うしねえ。北新町が、藪の內、手頃な店を見附けて來ねえ。時分がい

いから、店を持つなら今頃サ。脚榻、一枚に比翼蓙、四隅へ吊り手を下げておきやア、蚊帳は吊らずと吊つた面サ。小三坊も、何も世渡りだ。渡り引きが濟んだら、奥山へでもよからう。この頃は曲馬も素敵に現金になるげな。さう云つてもこの節は、女の事だよ。

小三　どうなとよいやうにお頼み申します。

ト此うち三右衞門、奥より出て

三右　ヤア、小三坊、爰の内へ流れて來たのか。

小三　オヤ、お前は、口上さんか。

三右　コレ〳〵、小三坊、案じさつしやるな。わしらは明日府中の町へ立つて行くが、なんと行つて見る氣は、ないか〳〵。

ろく　コレ、そりやアさうと飯時分であらう。傳兵衞さん、なんぞ拵へて、飯を進ぜねえな。

傳兵　オイ〳〵、どうで今から炊かねばならぬて。

ト米櫃へかゝり、米を量り出す。

ろく　ソレ、見なさい。もうそれだ。父さんも大概知れたものだわな。どうで人出入りは多いから、三度が四度でも炊きなさいな。

くら　オイ〳〵、わしが手傳つて、炊きませう〳〵。

ろく　モシ、コレナ、飯ばかりでもねえわな。傳兵衞さん、お前、横町の吉坊が所へ行つて、鰹でもあるか、見て來なさいな。

傳兵　オツト、合點ぢや。

ト思ひ入れあつて、門口にて

コレ、鰹があつたら、見てばかり歸るのか、取つてくるのか。

ろく　エヽ、知れた事だわな。菜の物にするから取つてくるのだわな。よく人に氣を揉ませらア。待ちねえ。錢を持つて行きねえ。

ト枕箱の引出しより四文錢一本出す。この時引出しにて小指を痛め、思ひ入れあつて

アイタヽヽヽ。

くら　アヽコレ、どうしやつた〳〵。

ろく　ツイ指を引出しの鐶で

ト思ひ入れあり

ほんに、ついでに砂利場へ廻つて、治丹坊も買つて來ねえ。

傳兵　エ丶、この四百のうちで、鰹も買つたり、醫者様も買つてくるのかえ。
ろく　エヽ、自烈つてえ。十二文の膏藥を買つて來ねえといふ事だわな。
傳兵　それでもこなた、治丹坊といふから、醫者どのを連れてくる事ぢやと思うて
ろく　口強情な。早く行つて來ねえな。
傳兵　オツト、合點ぢや。
　　ト四つ竹節になり、傳兵衛、錢を四百文持ち、向うへ急ぎ入る。金五郎氣の毒なる思ひ入れ。
ろく　金五郎さん、見なさい、よつぽどな置いてき堀サ。
　　トうか〳〵云ふ思ひ入れ。
オヤ、お前の兄貴だつけ。その代り、餘ツほど人は善いよ。
金五　イヤモウ、強情勝ちでござりませう。
ろく　ほんに、まだ忘れた事があつた。アヽコレ、誰れぞ
　　ト思ひ入れ。
コレ、仙坊は來てゐるが。仙坊々々。
　　ト呼び立てる。奥より仙吉出て來り

仙吉　アイ〳〵、來てゐるわな。姐さん、何だえ。
ろく　コレ、ぬしは賴まれてくんな。あの聖天町の伊勢又まで行つてくんな。コレ、
　　　ト質屋の通ひと、銀の長煙管を渡し
　これを持つて行つての。番頭さんにの
　　　ト仙吉に囁く。
　早く取つて來ねえ。
仙吉　アイ〳〵、風呂敷でも持つて行かうか。
ろく　その前垂れでも持つて行きねえ。
仙吉　オツト、合點だ。
　　　ト前垂れを取つて
　姐さん、もし入れ替へが足らねえと云つたら、どうせう。
ろく　いゝよ。ふだんこれで通用するよ。早く行きねえ。
仙吉　ぢきに行つて來やす。
　　　ト四つ竹節になり、仙吉向うへ走り入る。奧より萬八、子役を連れて出て來り

萬八　モシ、姐御、どうかさしつたさうなが、病氣はようござりやすか。

ろく　何サ、風をひいたのよ。

萬八　この頃は流行りやす、大事にしなさい。時に、もう一遍稽古をやらうぢやァねえか。

三右　そりやァよからうが、モシ、母さん、もう飯拵へにかゝらつしやらうの。

くら　オイノ、飯も汁も仕掛けにやらぬわいの。コレ、小三さんとやら、女房の役ぢや、お前も手傳うて覺えさんせ。

小三　アイ、さうしませう。併し、わたしやァ聞いた事があるが、一升の飯を炊くにやァ、柄杓を一本立て、二升には二本立てるものぢやァござりませぬかえ。

ろく　エゝ、この子もおきねえな。一升の米に柄杓を一本、二升には二本のと、一斗炊くにやァ　十本立てにやァならねえのと、さう臆劫にして見ねえ、大丸や越後屋の臺所は、氣のきかねえ船幽靈が拔け參りをするやうだらう。こいつは大笑ひだ。

くら　コレ〳〵、その炊きやうは

三右　サア〳〵、稽古を始めませうか。ほんに三味線が無かつたの。

小三　三味線は金五郎さんが出來るよ。

三右　そりやァ幸ひだ。お前やつてくんねえ。

金五　なに、誠に間に合ふまいによ。

三右　どうでもいゝわな。ほんにまだ笛が足りぬワ。

ろく　笛は斷うしねえ、母さん、お前でも吹いてゐねえ。

くら　エヽ、あの子とした事が、年寄つた婆が齒も無うて、どうしてマァ。

ろく　ハテ、持遊びの笛でも有らう。女の按摩が吹くやうにやつておきねえな。

くら　これは又、迷惑な事ぢやわいの。

ろく　小三坊は、飯炊きの稽古もいゝが、どうで商賣にする氣なら、いゝ序でだ。輕業を一遍渡つてもらひな。

金五　何も商賣、男の爲だワ。やらかせ〳〵。

小三　それでもマァ、飯炊きの方から覺えようわいな。

三右　其方の稽古の其うちは、前藝として、子供からやらう。サア〳〵、てめえ達も、支度をしろ〳〵

子供　心得ました〳〵。

ト子役は帶を前へ廻し、尻ツたぐりのやうに、帶へ浴衣を挾む。お六は釜に米を持つて出る。

ろく　サア〱、其方は輕業の稽古を始めねえ。此方は飯炊きの稽古だ。

三右　成る程、こいつは無駄がなくていゝ。輕業と飯炊きと、兩方兼ねての、始まり〱。

トこれより金五郎は輕業の三味線、三右衛門は太鼓を打ちながら口上の思ひ入れ。お六は釜へ水を入れ、捨ぜりふにて小三へあてがふ。小三米を洗ふ。お六指圖する。此うち輕業の鳴り物。

三右　さて〱、これより、前藝ながらも若年者は、その體卽ち、くる〱と廻りまするを、これを名づけて、淀の川瀨の水車とござりまする。

ト子役二人組み合ひ、反つてゆく。此うち三右衛門、何なりと口上よろしく、鳴り物生け殺しあるべし。お六は小三に指圖して、竈へ釜をかけ、柄杓を立てゝ見て、手前も合點ゆかぬ思ひ入れ。

なんだ、水加減か〱。

ト釜元へ來り、釜の中を覗き、薪の焚き加減を見る思ひ入れ。お六は爼板に菜を一把、干し大根一把のせ、庖丁を持ち立ちかゝる。

さて〱〱〱、飯の炊きやうは、初めチョロ〱、中パッパ、赤子泣くとも蓋取るな。これがお飯の、炊アきイかアげんでござります。

トお六は干大根を見せる。

そりや、はり〳〵〳〵〳〵とう。

ト矢張り輕業の鳴り物。此うち子供は反りしまひ、片脇へ寄る。お六は同じ大根を取つて刻む。三右衞門は小三の手を取つて、稽古せいといふ思ひ入れ。小三恥かしがるこなし。三右衞門は、釜の下を焚いてゐる小三を無理に引出し、支度させる事よろしく

三右　東西。

ト鳴り物打ちあげる。

これよりは差代りまして、太夫唯今まで飯ごしらへの、釜もと小三、綱のもとにて離れ業、名づけまして深草の少將百夜の車。この儀が發端、最初でござい。

ト鳴り物になり、引窓の綱を取つて來て、屋體の柱へ結び、殘りを門口へ繋ぎ、綱を下げて、小三に番傘を持たせ、足の指へ綱を挾ませ、稽古しろといふ思ひ入れ。小三恥かしき思ひ入れ。

さて〳〵〳〵、これよりは足を左右へグッと伸ばせば、弘法大師の、大の字〳〵。

ト小三恥かしさうにひろげかねる。

ろく　もつと、ふんばりねえ〳〵。グッとふんばりなよ。恥かしくはねえよ。

ト小三、やう〳〵少し足をひろげる。

三右　ドッと褒めたり。

皆々　ヤンヤ〳〵。

ト　お六こなしあつて

ろく　いつそ焦げる匂ひがするよ。

小三　おまんまじあらうぞえ。

三右　ほんに飯だ。

ト　駈けて行き、釜の蓋を取つて

奇妙々々。

ろく　飯になつたか。

三右　ま一度、褒めたり〳〵。

皆々　ヤンヤ〳〵。

三右　まツ黒に焦げた。

くら　何を云はつしやる。

ト　この稽古のうち、小三は懐ろより袱紗に包んだ過去帳を落し置く。お倉何心なく取上げ見て

小三　こりや過去帳ぢやが、誰れがマアこゝへ。

　アイ、そりやわたしが親達の御戒名、昔し思へばなつかしき、その過去帳はわたしが御先祖。

（ト此うちお倉、よく〳〵見て）

くら　ヤ、この過去帳を御先祖と云はつしやるは、そんならお前は三州にて、八つ橋村の郷士たる

小三　アイ、塚本與太夫が娘お三。それをどうして、アノ、お前は

くら　ヤア〳〵。知らぬ事とて、モシ〳〵、私しはその與太夫様に、御奉公いたしましたる、三之助と申す者の女房。夫はお主へお暇願ひ、二人の娘を連れて、御當地へ下る道、親仁どのは病死。お六が妹は、六つの年、掛川宿に逗留の、其うち妹を見失ひ、江戸へ下つて姉一人、旦那の事も、風の便り、御主人方もお果てなされ、郷代官も召上げられ、皆、散り〳〵と聞きましたが、そんならお前は

小三　召使ひの乳母が連合ひ、心の悪い者ゆゑに、わたしを只の奉公ぢやと、偽り云うて人手へ渡し、廻り〳〵て吉原の、額俵屋の小三といふ、賤しい勤めはするけれど、先祖の過去帳大切に、離した事はござんせぬわいなア。

くら　オヽ、お出かしなされました〳〵。コレ〳〵娘、常からわれにも噂した、此お子が、旦那の娘御

樣。
ろく　エヽ、さう云ひなさりやア、わッちが爲にも主人だね。そりやマア、とんだ話しになつて來た。
モシ〳〵、お孃さん、必ずお案じなされますな。わッちらはお前の御家來だわな。併し六つのその時に、別れた妹を、可哀や人手に
くら　ヤ。
　　　トお六思ひ入れあつて
ろく　金五郎さんも、落附いてゐねえよ。
金五　サア〳〵、さう緣が搦んで來ては、今日からはみんな緣者といふもの。
小三　それぢやア猶々、心強うなつて來ましたわいな。
三右　ハテ、緣といふものは。味なものでござるの。
　　　ト皆々捨ぜりふにて喜ぶ。四つ竹節になり、向うより仙吉、前垂れに、女帶と小袖を包み、通ひを持ち、スタ〳〵と歸り來り
仙吉　アイ、姐さん、入れ替へて來たよ。
ろく　オヽ、早かつたの。

ト取つて

コレ、金五郎さん。小三さんに、これなりと着せ申しなさい。

金五　こりやァ忝うござりやす。コレ〳〵、小三、禮を云はつし〳〵。

小三　お六さん、お志し、有り難うござりまする。

ろく　エヽ、何だな。わッちが爲にはお前はお主サ。

くら　こりやお六、よう氣が附きましたわいの。

ろく　お主と聞いちやァ、どんなお世話を申したとて、なんのお前、禮どころぢやァねえわな。

仙吉　モシ〳〵、お六さんえ。今質屋の見世へね、どこの奴等か二三人連れて來てね、お六おばァが内はどこだと、尋ねてゐやしたよ。

ろく　ナニ、アノ、おれが内をか。

トぎよつとしたる思ひ入れ。

くら　コレ、お六、

金五　お前、どうぞさしつたかえ。

ろく　イエ、わッちを尋ねて來たといふは、そりやァてつきり、この子の出入りか。

小三　わたしが爰にゐる時は、却つてお内の、もしや難儀に

ろく　ちつと間、奥の二階へ

くら　案内してやりませうか。

金五　お頼み申します。

ろく　案じなさるなよ。

トヽ唄になり、お倉は小三、金五郎を連れ、上の屋體へ入る。三右衛門、萬八、仙吉、子役は暖簾口へ入る。お六殘つて、奥口を見廻し、思ひ入れあつて、書き置きの半分をソッと懐ろより出し

これに附けても拾うたこの品。實の妹と知らぬ身の、願哲までを殺したからは

トヽ思ひ入れ。向う揚げ幕にて

勘八　向うの内だ〳〵。

トヽお六これを聞き、キッと思ひ入れ。角兵衛獅子の鳴り物になり、向うより判人勘八、見世物師半七、同じく太郎二、スタ〳〵と出て來り

こゝの内だ〳〵。モシ、御免なされませ。

トヽ皆々内へ入る。

半七　お六さん、この間はお目にかゝりませぬ。

ろく　オヽ、横網の手合ひか。

太郎　アイ、こゝへござつたは、小三を預けさしつた吉原の判人。

勘八　アイ、勘八といふ者でござります。お六さん、お初にお目にかゝりやした。

ろく　アイ、よく來なすつた。して、お前、何の用でわッちが內へ。

半七　モシ、姐御、出しなさいな。

太郎　出しなさいな〳〵。

ろく　出せ〳〵とは、そりや何を。

勘八　ハテ、年のかゝつたあの小三、身の代金は三十兩、これも濟まさず、小間物屋の金五郎が引ッぱらつて、彼奴が緣でこゝの內へ。何もかも聞いてゐた。

半七　吉原に置いても、ぶッつけ太夫よ。

太郎　輕業師でも太夫の小三。

勘八　四も五もいらねえ、小三を出しやれ、太夫をこゝへ

三人　出してもらはう〳〵。

ろく　やかましいわな。がや〱〱と、世間へ外聞が惡いわな。アヽ、そんなら何か、太夫を出せと、こなさん達は、それを云ひに來たのか。

勘八　さうサ。太夫を出しやれ、出してもらはう。

太半　出しやれな〱。

ろく　ヤレ、靜かに云ひねえな。道行きは解つてゐるわな。コレ、こゝの內へ來て、太夫を出せなら出してやらう。おらが內の太夫は、コレ、これだよ。

ト箱の中より大きなる蛇を出して見せる。三人飛び上がり

勘八　アヽ、コレ、おらアそんな太夫は、モウ〱、きつい嫌ひだ。

半七　早く其方へしまひなさいな。

ろく　それだといつて、蛇遣ひの內で、太夫といふはこればかり。山かゞしでも、ひばかりでも、青大將は猶の事、好みとあれば蝮もあるよ。コレ、仙坊や、あの手合ひに、この太夫を渡してやりや。

仙吉　オツト合點だ。

ト暖簾口より出て、大蛇を取つて

サア、遠慮なく持つて行きねえ。

勘八　アヽ、どうして〳〵、蛇太夫はおいらはいらねえ。太夫の小三を
皆々　出しやれな〳〵。
ろく　エヽ、外聞の悪い。靜かにしやれな。それほど太夫に逢ひたくば、仙坊や、箱の中の太夫を、みんな出さつし。
仙吉　合點だ。そりや、太夫だ。
ト箱の蓋を取つてぶちまける。指し金の蛇すさまじく出て歩く。皆々驚き
皆々　そりや、蛇ぢや〳〵。
ト立ち騷ぐ。仙吉大蛇を持つて
仙吉　そりや、太夫だ〳〵。
皆々　アヽ、御免だ〳〵。
ト向うへ駈け出す。八人藝の鳴り物になり、仙吉は蛇を持ち、四人を追ひ廻す。皆々逃げるを、追ひかけて入る。お六殘る。この鳴り物にて傳兵衞、鰹の片身おろしを提げて、摺れ違うて出て來り
傳兵　なんぢや、マアあの衆は、大勢連れで、蛇一疋が、あのやうにもマア怖いものか。エヽ、臆病な。とは云ふものゝ、矢ツ張りわしも怖うないでもない。

ト捨ぜりふにて門口へ來り

ろく　サア〳〵、鰹を片身、取つて來た〳〵。治丹坊も買うて來たぞえ。サア〳〵、鰹は刺し身か、揩り身か、何に作るのぢやな。

傳兵　エヽ、なんだな。お前マア、強氣に手間を取つたの。肴屋はどこぞへ越したか。箆坊に長くかゝつたの。今時分持つて來て、何の役に立つものかな。そしてマア、目高ほどな魚を、片身々々と縁起が惡い。わッちらは貧乏しても、鰹を片身提げて、二合半、しみつたれに買つた事はねえよ。アヽ、あんまり氣がきかねえぢやァねえか

ろく　それでもこなた、肴屋に片身ほか無いもせぬもの。

傳兵　エヽ、又かな。片身ばかりとは何の事だ。きざな上にも、きざを云ひなさんな。エヽ、不縁起な。

トロ小言いうて鼠啼きをする。奥より三右衛門、萬八、子役二人、捨ぜりふにて出て來り、傳兵衛氣の毒さうな顔をしてゐる。

三右　これはしたり。又御亭主は姐御に氣を揉ますわいの。さても〳〵、苦々しい人ではあるぞ。

ろく　コレ、お前方も聞きなさいな。ほんにわつちは、しがねえ暮しもしてゐるがの、つひに肴を片身買つたり、酒だといつても、二合半買ひした事はねえよ。それにマア、しみつたれた。エヽ、よ

く氣を揉ませるぞ。

三右　成る程、そりやア御亭主が惡い。重ねてから、姐御が一升といはゞ、こなたが二升も三升も、その上を行く程に云はねば、内が揉める種ぢや。内が揉めては、身上の爲に惡い。さういうて、又借錢が出來たというて、身上の爲にもならぬが、マア、何でも姐御の云ふやうに、ハイ／＼と云うてゐるがよいて。

傳兵　ハイ／＼、この上さやう致しませう。

三右　忘れさつしやるなよ。

ろく　なに、あゝ云つても、その時ばかりサ。

萬八　モシ、姐御、今日は大きにおやかましうござりました。モシ、傳兵衛さん、先刻あゝ云ひなさつたが、あの長持ちは、二人して持つて行きませうよ。

三右　さうしませう。片棒舁いて行かうか。

　　ト又かゝるを、傳兵衛二人を留めて

傳兵　アヽ、モシ／＼、あれほど先刻、明日の事にさんせと云うたぢやござらぬか。なんであらうと、明日の朝でもよいぢやアないか、

ト留めるを、お六、まぢ〳〵見てゐる。

三右　サア、又こゝまで來るのが憶劫ぢやによつて、持つて行かうとは云うたが、そりやモウ、明日の朝でも

萬八　よいとも〳〵

傳兵　そんなら、マア〳〵、さうざつしやるがよい。ヤレ、嬉しや、それで安堵した。

ト暮れ六つの鐘鳴る。お六思ひ入れあつて

ろく　コレ、傳兵衞さん。それで安堵か知らねえが、もう日も暮れたよ。行燈でも出しなさいな。

傳兵　オツト合點だ。

ト丸行燈を出し、火打ち箱引寄せ、灯をつける。

ろく　もう蚊いぶしもいる時分だよ。なんだな、お前、あの長持ちばかり氣にして、お前何ぞ入れて置いたか。

ト長持ちの方へ來る。傳兵衞又ちやつと思ひ入れあつて

傳兵　アヽ、なに、別しての物でもないが、洗濯した單衣物と、松坂縞の古袷、昨夜歸つてこの中へ

ろく　入れなすつたか。

傳兵　ハイ。

ト兩人思ひ入れあつて

ろく　エヽ、御大層な。

ト目を附けて思ひ入れ。向うより歩き一人出て來り

歩き　モシ〳〵、お六さん。會所からね、傳兵衞さんを連れて來いとの事でござりまする。御苦勞ながら、ちよつとござりませ。

傳兵　アイ、わしを會所から

ト思ひ入れ。

ろく　アヽ、そりやァわッちが行かう。いはゞ、お前は入り聟の、內の主は、女でこそあれ、わッちだよ。おれが行つて來よう。お前、內に居な。

ト下駄をはいて門口へ出る。

歩き　左樣なら、お早くお出でなされませ。

ト引つ返して入る。

傳兵　アヽ、そんなら、こなた行つて下さるか。

ろく　さうサ　お前のやうな者をやつて、とんだ馬鹿な事を云はうも知れねえ。
三右　左樣々々。そりやァ油斷はなりませぬ。ハヽヽヽヽ。道まで連れ立ちませうか。
ろく　お前方も歸るのか。
皆々　さやうサ。
傳兵　大儀ながら、行つて來さつしやい。
ろく　知れた事サ。行かねえぢやヤサ。ぬし達も、道まで一緒に來ねえ。
皆々　姐御、ござりませ。
ろく　留守を明けなさんな。
傳兵　アイ。

ト唄になり、お六思ひ入れあつて、皆々附添ひ、向うへ入る。傳兵衛殘り、行燈を出し、蚊いぶし火鉢をよき處へ置き、捨ぜりふにて、思ひ入れ。此うち合ひ方。

アヽ、なんでもむづかしいおかみさんだ。口出しするほど、ひッ叱かられる。

トあたりを見廻し、門の戸を締め、そろ／＼と長持ちへ來り、蓋を取る。時の鐘、合ひ方。長持ちの中より、次郎左衞門出かゝる。

次郎　傳兵衞。

傳兵　モシ。

ト押へ

昨夜、やう／＼、お供申して歸りましたが、親子の心知れぬゆゑ、この長持ちへ。

トあたりへ思ひ入れあつて

して、御所持なされし、書置きの

次郎　ソレ。

ト書置きを出す。傳兵衞その端を取つて、見る事あつて

傳兵　コレ／＼、この文言は八つ橋どのが、僞りならぬ心の書置き。

トこの時金五郎、小三出かゝりゐて

金五　傳兵衞どの。

傳兵　ヤ。

ト恂りして蓋を締め

わりや金五郎、いつの間に。

ト思ひ入れ。次郎左衛門は長持ちへ隱るゝ。

金五 ハテ、わしが來たのも、モシ。そんなら旦那は

ト長持ちへ思ひ入れ。

傳兵 コレ。

ト奥の方へこなしあつて

三河島の歸りがけ、拾うて歸つた書き物は、八つ橋どのへ旦那から、遣はされた起請とやら。外に守りに入つたのは、コレ。「文祿二年癸巳年七月五日誕生」。同じ守り袋は、女房のお六が、常に掛けて

金五 そんならもしやお六どのは、切られて死んだ八つ橋どのゝ

小三 ひよつと身寄りの

ト思ひ入れ。金五郎は長持ちの方へ來て

金五 モシ、旦那樣、私しとても、お刀の、詮議いたさん手蔓にと、つい入り込みし吉原の、これなる小三に馴染みを重ね、この程思はず兩國で、あの伴藏が下部の者、手紙を持參いたせしを、もしや證據にならうかと、爭ふうちにその狀を

小三　アヽ、モシ、その文ならば、わたしや又、お前の文ぢやと心得て、大事に持つて

ト懐ろより、兩國にて取つたる手紙を出す。金五郎取つて

金五　ナニ〳〵「お六と申す女、願哲といふ修行者を頼み、八つ橋と佐野の仲を裂く手段、われら致し置き候ふ、ことさら二字國俊の一腰は、あの願哲に詳しく頼みおき候へば、其方胡亂とも存じられ候はゞ、ぢき〳〵お掛合ひ致さるべく候ふ、彌左衛門どのへ、梁田伴藏」。ヤア、こりやコレ、證據になるべき手紙。

傳兵　この文言のお六といふは、そんなら女房の

ト惘りする。長持ちの口より次郎左衛門出ようとする。

アヽモシ

ト心遣ひ。金五郎手早く狀を取つて、蚊遣り火鉢へ落す。パツと烟り立つ。

コリヤ、金五郎、その狀を、なぜ蚊遣りのうちへ

金五　サア、思はず怪我で蚊いぶしへ

傳兵　そんなら、お六と名があるゆゑ、わざと蚊遣りへ

ト思ひ入れ。

小三　又ぞろわたしを判人の、あの勘八が、ひよつとマア
傳兵　それぞ幸ひ、床板を、めくつておいたこの下家へ。
　ト疊を上げ、板を剝がして、小三を忍ばせ
金五　そんなら小三を
傳兵　ちつとの内だが、せめて蚊遣りを
　ト大火鉢を床下へ入れ、元のやうに直す。この時捨て鐘、合ひ方になり、向うより願哲、前幕の坊主にて法衣の形、跣足にて、古傘へ一腰を入れ、これを擔ぎ、首に掛けたる鉦を打ちて出る。あとより權平、頰冠り、前幕の中間の形、ウソ／＼と出て來り、花道にて囁き合ひ、權平は先きへ駈け拔け、門口の蔭へ入る。金五郎は疊を直し、奥へ入る。願哲門口に立つて、鉦を打つてゐる。
傳兵　手がふさがつてゐる。通らつしやい／＼。
願哲　ナニ、手がふさがつてござるかえ。そんなら一服のんで行かう。
　ト戸を明けて入り、內を窺ふ。
傳兵　なんだ、この人は、無遠慮な坊さんだが
　ト思ひ入れ。

願哲　ハテ、見た事もありやせう。毎日々々修行に歩く坊主だ。ちつとは見覺えもありさうなものサ。
モシ、こゝはお六さんの内かえ。

傳兵　アイ、さやうサ。

願哲　内にかえ。

傳兵　留守でござります。

願哲　アヽ、留守かえ。そんなら一服のんで待ちやせう。火を一つお貸しなさい。

傳兵　アヽ、火かえ。火入れにあればいゝが

ト莨盆を見て

南無三、消えた。待ちなさい。

ト長煙管を取つて、煙草ついで、行燈の灯から取附け

サア、付けなさい。

願哲　アイ、土足で居りやす。御免なされやせ。

ト傳兵衛がのんでゐる長煙管に、願哲は前幕に拾ひし煙管を出し、吸ひ附ける事。傳兵衛、まぢ〳〵とこの煙管に目を附け

傳兵　ハテ、よう似た
願哲　エ。何が似やした。
傳兵　アイ、わしがこの間落した煙管に、よう似たといふ事サ。
願哲　アヽ。お前、煙管を落したか。
傳兵　アイ。
願哲　わしやァ拾つたの。もしこの煙管ではないかの。
傳兵　どこで拾はしつた。
願哲　三河島でサ。
傳兵　オヽ、わしも三河島で落しました。
願哲　そんならこなさんの落した煙管であらうぞえ。マア、註文を云つて見ねえ。
傳兵　ナニサ、それでもあるまいが、わしが煙管は、吸ひ口が嚙みひしやいであります。
願哲　オヽ、コレ〳〵、嚙みひしやいであるワ。まだ覺えがないかえ。
傳兵　雁首もひしやげてゐます。
願哲　オヽ、ひしやげてゐるワ〳〵。もつと覺えはないかえ。

傳兵　この間わしが手細工に羅宇をすげたが、その時羅宇が少し細目ぢやによつて、釜屋艾の包み紙を、食ひ裂いて巻いておきましたが、もしそれなれば、わしが落した

願哲　待ちなさい〳〵。證據だ。

ト雁首の方を抜いて見る。下に反古にて巻いてある。

コレ〳〵、成る程、艾の包み紙で巻いてあるワ。

傳兵　ハヽヽヽヽヽヽ。サテマア、よう廻り廻つて來たものでござります。これが矢ツ張り元へ戻る、縁づくでござりますてな。

願哲　さうサ。そんなら、この煙管は、お前に進ぜませうが、いよ〳〵こなさんの煙管だの。

傳兵　なに嘘を云ひませう。わしが落した、あの安煙管でござります。

願哲　イヤモウ、別して安煙管でもござるまいよ。事によつたら大金に

傳兵　エ。

願哲　アイヤ、わしや土足でござりやす。御無心ながら、足が洗ひたい。水を一杯くんなさい。

傳兵　アイ。

ト思ひ入れあり

ドレ、汲んでやりませうか。

ト唄になり、盥へ水を汲み、持つて來り、願哲が前へ置く。願哲足を洗ふ事、この唄弾き流しにて、この唄を借り、向うよりお六、屈托の體にて戻り來り、内を窺ふ。内には願哲、捨ぜりふにて足を洗ひゐて

願哲　こりやハヤ　御亭主さん、お初に參つて、とんだお世話になりやす。

ト お六この聲を聞き、悔りして、願哲を見定める思ひ入れあつて、手荒く戸を明ける。

オヽ、悔りしたワ。

ろく　こなさんよりも、此方が悔りしまい事か。

傳兵　オヽ、お六どん。歸らしつたか。

願哲　アヽ、お六さんのお歸りか。

ろく　願哲どの。ようこなさんは

願哲　エ。

ろく　よく來なすつたの。

ト思ひ入れ。

傳兵　コレ〳〵、お六どの。會所からの用は、何の事だえ。

ろく 何でもいゝ。打つちやつて置きねえ。コレ、この坊さんは、今來たのかえ。

傳兵 オイ。たつた今、てまへに逢ひたいというて

ろく この坊さんが、ア丶わッちに、逃げる所も逃げずに逢ひにくるとは、よく土性根の

ト云ひさして思ひ入れ。

願哲 コレ〳〵、お六どん。こなさん、大分わしに向つて、恨みつらみのある樣子。その譯を云はつしやいな。

トこれにてお六、その譯を云はれぬ思ひ入れ。

ろく サア、その譯というては、どうもそれと

願哲 よもや譯は云へまいよ。三河島のあの寮で、八つ橋が切られたる、相手は知れた次郞左衞門、隱れ所も嗅いで來た。

ト傳兵衞ギックリする。

又その晩に道はしで、切られた非人が咽喉元に、突き立てゝあつたこの煙管。

トこれに又傳兵衞悔りする。

こりやア此方の御亭主の、傳兵衞どのゝ煙管だけな。

ろく　エ、アノ、それがどうして

ト思ひ入れ。

願哲　今も今とて現在の、その持ち主が、わしがのだと、きつと云はしておいてから、この煙管を賣りに來た。「笊屋おもちや」に見せたなら、土人形か、ヽヽヽにだし籠（?）そんな値安な物ちやァねえ。人の命と吊り替への、煙管でゆかずば、まだ外に、コリヤ

ト兩國で拾ひし文を出して

文の宛て名は「金五郎、小三」。これにもチヨツピリ血は附けど、場所が違つたばつかりに、まだしも仕合せ。さりながら、まんざらでもねえ拾ひ物。煙管でゆかずば、この文でも、より取り見取りの商ひ物。亭主の煙管で物を云はうか。

ろく　それは

ト思ひ入れ。

願哲　但しは文で家探しせうか。

傳兵　サア、それは

三人　サア〱

願哲　文か、煙管か、煙管か、文か。脂のつまつた古煙管、それと通らぬ事ながら、亭主の雁首もぐ心か。姐御、土性根附けて、返事をしやれな。

トきつと云ふ。お六口惜しき思ひ入れ。傳兵衞も思ひ入れあつて

傳兵　何かの譯は知りませぬが、手詰めの樣子。マア、どういふ譯ぢやろくエ、、おきなさいな。譯も、樣子も、お前の知つた事ぢやァねえ。滅多に口を出しなさんな。殊に、わざ〳〵來たこなた、モウこれほども敷居から、外へは出さぬ願哲どの。尋ぬる品のその行くへ、取戻さぬ其うちは、滅多に爰は歸されぬ。

ト門をシヤンと閉め

トきつと云ふ。

願哲　歸れといつても此方から、滅多に歸らぬ屋體骨。出家を泊めるは大方に、法衣の奉加に附く心か。ろく法衣も法衣、こなさんの、隱して持つてゐやしやんす、その濡れ衣の一腰を

ト此あたりより次郎左衞門、長持ちの蓋をソツと明け、内を窺ふ。

願哲　坊主が破れた濡れ衣。

ろく　銘は慥かに二字國俊。

傳兵　すりやアノ、それを

　　ト この時願哲、行燈のあかりにて、盥にうつる樣子を見て

願哲　願哲樣のお御足を、おすましなされた泥水へ、うつるは慥か

傳兵　エ。

　　ト驚き、盥を打返し、水をこぼす。この水、下家へこぼれし思ひ入れにて、床下より蚊遣りの煙りパッと立つ。次郎左衞門また長持へ入る。

ろく　床の下よりあの煙り

願哲　疊をあげて

　　ト お六を掻き退け、疊へ手を掛ける。傳兵衞これを押へて

傳兵　イヽや、滅多にこの下は

　　ト疊を押へ、願哲が前にある小三の文を手早く取つて、行燈の火にて燃す。

願哲　ヤ、證據の文を行燈の

傳兵　ほんに思はず傳兵衞が、怪我で燃したるあの煙り。

ろく　そんなら下家の煙りでなく
傳兵　しがらむ緣の竹簀の子。
願哲　民の竈に折わろう
ろく　立つや淺間の峯ならで
願哲　煙りも細き屋體骨。
傳兵　一人ばかりか二人まで
願哲　かゞんでけつかる居候ふ。
傳兵　サ、これも證據はあのやうに
願哲　煙となつてもあの煙管
ろく　ほんに思へば世の中の
傳兵　人と莨の善し惡しは
ろく　煙りとなつて後の世に知る。
願哲　正しく爰に

ト下家へかゝるを、お六押へる。長持ちへ行くを、傳兵衞隔てる。ちよつと立廻りのうちに、傘の中

より一腰落ちかゝる。お六見附けて

ろく　ヤ、慥かにこれが

トかゝるを

願哲　ヤ。

トちやつと隱す。

ろく　願哲どの。

願哲　姐御。

ろく　話しがあるよ。

ト唄になり、三人思ひ入れあつて、願哲傘を抱へ、暖簾口へ入る。傳兵衞思ひ入れあつて

傳兵　ほんに先刻に頼ましつた膏藥、買つて戻りながら、すつぱりと忘れてゐた。サア、お誂への人參香、きつと渡しましたぞえ。

ト蛤貝に入りし膏藥を渡す。

ろく　なんだな、お前。買つて來たら來たやうに、とうに渡していゝ事を。痛みのあるのを知りながらお前も餘ッほど深切な人だよ。

ト小指の痛む思ひ入れ。傳兵衛、ヂロ〳〵見て

傳兵　コレ、お六どの、貴樣、その小指はどうした。

ろく　アヽ、これかの。

傳兵　オイ、その小指はどうした。

ろく　アノ、こりやァの

傳兵　どうしたのぢやえ。

ろく　サア、こりやァ

ト思ひ入れあつて

心中して切つたのサ。

傳兵　ヤヽヽヽヽ。ナニ、心中を

ろく　アイ、切つたのサ。こなさんが爰の内を出てゐるうち、粋な二才にくらひこみ、眞の事だと此方から、十本揃つた指なれど、はしたにするとは、野暮な奴サ。

傳兵　アヽ、そんなら貴樣、わしが内を出てゐるうち、よい色が出來たゆゑ

ろく　その男に切つたのサ。コレサ、傳兵衛さん、女房が間男して、指を切つたと聞いたなら、お前ァ

ノ、腹が立たうの。エヽ、イヤサ、蟲があつちやァ腹が立たうの。

傳兵　イヽエ、一向腹は立ちませぬ。

ト思ひ入れあつて

ろく　そりやア、なぜ腹が立たねえ。

傳兵　ハテ、立てたといつて、あんまり立ちばえもしますまい。それぢやによつて、なんの腹を立ちませうぞ。

ろく　ソレ、見なさい。さうお前は氣まづい人だア。なんぼわッちがやうな者でも、間男に指を切つたと聞いたなら、嘘にも腹を立つ筈よ。それに、さつぱり構はぬは、あんまり性なし上總木綿。女房の身で愛想がつきるワ。腹が立たずば出て行きねえ。昨夜、やう〳〵詫び事で、歸した亭主のこなさんを、又改めて追ひ出すよ。サア、出て行きねえ。もう一分一厘、この內へ、こなさん置くのは、おらァ否だよ。

トこれにて傳兵衞、うぢ〳〵して

傳兵　そりやハヤ、女房の間男するを、亭主が燒き餅やかぬばかりに、又、內を拂はれますか。わしもちつとは男らしう、燒き餅とやらを、燒いて見ようと思うても、生れ附きで、とんと出來ぬのぢ

や。

ろく　サア、それが矢ッ張り女房を、有るが無しに思ふから、それで腹が立つよ。さういふ水くさい男は、愛想が盡きた。サア、出なさい〳〵。早く出て行かつしやいよ。

ト傳兵衞を門の方へ突きやる。此うち、お倉出かゝりゐて、この中へ入り

くら　これはしたり、お六、何をマア可哀さうに、入り聟の傳兵衞どのを。コレ、何もかも聞いてゐたが、そりや、無理といふものぢや〳〵。

ろく　コレ、母さん、なんだなお前。役に立たずの入り聟の腰を押して、實の娘を、突き出し物にするのかえ。

くら　こりやいかな事。なんでマア、娘のわれを突き出し物にしはせぬがな。何を云うても、正直なあの人を

ろく　そんなら構はず退いてゐるねえ。それとも口を出す氣なら、親だといつて、こなさんも、もうこの内には置き憎いよ。

くら　これはマア、親を置き憎いとは

ろく　年寄りは嫌ひだよ。

くら　ヤア。ナニ、年寄りが嫌ひぢや。
ろく　お前も一緒に行かば行きねえよ。
くら　エヽ、マア、われは、現在、親に

ト腹立てるを、傳兵衛とめて

傳兵　アヽ、モシ、母さん、お前腹も立ちませうが、常から男も及ばぬ氣前、何事もマア、わしにお免じなされて
くら　それでも、餘りといへば
傳兵　ハテマア、御不請なされませ。
ろく　傳兵衛さん、お前、わッちが斯う云つちやア、よもや爰には居られまいの。
傳兵　サア、出された内に、まぢ／＼と、また詫び事をするまでも、近所へなりと、マア爰を

ト立上がるを

くら　こなたが出るなら、わしも出る。オヽ、この母も内には居ぬ。
傳兵　アノ、お前もわしと一緒に
ろく　おらア出さぬが、こなさんが、出て行くなら勝手にしなせえ。

くらオヽ、勝手にせいで。エヽ、不孝者めが。

傳兵　また追ひ出される傳兵衞が、僅かなれどもあの着替へ、出るには持つて

ト長持ちの方へ寄るを、お六走り寄つてこれを支へ

ろく　イヽヤ、こなたの着替へなら、荷を留めるのはある習ひ。お前は爰を出て行くとも、女房の威光で荷は留める。亭主の着替へは女房の、わッちがこの身に引受けて

傳兵　男の着類は行き丈も、揃はぬものを女房の、こなたの肩に掛けさせては、役に立たぬとてわしも男ぢや。どの道これは持つて行く。

ト長持ちへかゝる。

ろく　初手からわッちが氣に入らぬ、亭主は一時、片時でも、持つてゐられぬ、こなさんの、着類は留めるその代り、足手まといであらうとも、お袋ならば附けてやる。直ぐにこなさん、邪魔ながら

傳兵　成る程、連れて出て行かう。

ろく　出て行く氣なら去り狀を、渡さぬうちはいつまでも、道具は此方へ留めて置く。氣遣はすとも

ト思ひ入れ。

傳兵　去り狀欲しくば遣りもせう。その去り狀に附けてやる、買うて戻つた膏藥の、蛤貝もしつくりと、

片々にならぬやうに

ト守り袋と起請、臍の緒を一つにして、膏薬の貝もろとも差出す。お六取つて、思ひ入れあつて

ろく　これやコレ、その夜に失ひし、あの八ツ橋が生れし年度。起請も共に。そんならこれを

傳兵　拾うたのみか、女房が、切つたる指に相應な、その膏薬の貝の中。

ろく　すりや、この中に

ト貝を明ける。中に切れたる小指ある。

これやコレ、小指の

傳兵　縁は切れどもその指の、切つたが證據となる時は

ろく　エ。

ト思ひ入れ。傳兵衛走り寄つて、お六が胸づくしを捕へ、キッとなつて

傳兵　コレ、役に立たねど男の端。なぜ物事を打明けて、わしに話して下されぬ。

ト合ひ方變つて、思ひ入れ。

くら　ヤア、そんならお六が、氣隨氣儘も

傳兵　親に難儀をかけまいと、思ふ心か、疑へば、あの長持ちへ傳兵衛が、入れて置いたる着替への品、

この臍の緒の樣子では、切られて死んだ八つ橋が、こなたの實の妹ゆゑ、お上へ願うて下手人にあの長持ちの中なる着替へ。厄病神で敵とやら、譬への通りにやる所存か、コレ、お六どの、こなたの胸を云うて下され。

くら　先刻にちやつと見ておいた、對の守りの切れといひ、そんなら切られた八つ橋といふは、六つの年にかどわかされた

ト愁ひの思ひ入れ。

ろく　お光といふ事知つたなら、なに緣切りにかゝらうぞ。こなたの弟の金五郎どの、小三を女房に持たせるには、身拔きをさせる三十兩。その金の工面と、大それた、あの願哲ともくろんだ、わるい仕事も八つ橋が、姉といつて騙り事。それが矢ッ張り實の姉、めぐる因果に妹も、次郎左衞門の手にかゝりし、根を尋ぬれば、わしが仕出した事と諦めて、あの長持ちのその中も、明けて云はれぬ、そんぢよそれ、預かる心で渡さぬを、妹の敵と訴人する、心であらうと傳兵衞どの、そりやァあんまり、情けないく。疑はれたと腹が立つわな。

トいろく思ひ入れ。

傳兵　サア、疑ふ心はなけれども、何をいうても甲斐性なし。物事屆かぬ生れ附き。あの弟の金五郎、

小三とやらが事につき、金のいるのをこなたにまで、頼んだ事も知らぬ身の、男まさりのこなたゆゑ、世話してやらうと思ふから、惡い仲間へ入つたも、元の起りは弟め、小三とやらに

くら サア、小三とやらはわしが主筋、まんざら知らぬ他人へ金、拵へてやらうといふ、心になつたは天道様が、お六へその世話せいとある、こりやお知らせで

傳兵 只大事なは旦那どの。人を殺して日蔭の身。尋ぬる品も手に入らず、行きかゝつたるその夜半に、拾うて戻つた二品に、非人が口に殘つたは、女房が小指と、途方にくれ、隱まふお主に、連れ添ふ女房、皆人殺しの疑ひかゝり。緣に繫がる傳兵衞が、何の役には立つまいが、おれも男の端ちやもの、親御を附けて出て行けば、親や亭主に災難を、掛けまい爲と見てとつた。コレ、それに違ひがないならば、成る程、親御は預かつた。氣遣はずとも、當分こゝを

ろく 逃げも走りもならぬ身の、小手をゆるめし羽搔ひじめ、籠の鳥なる此お六。いはゞお上の放し飼ひ。

ト雨肌ぬぐと、下は繩にかゝりゐる。

傳兵 ヤヽヽ。

くら そんなら其方は

ろく　人を殺せし次郎左衛門、隱まひ置く事、明白に、訴人あつてのわッちへ疑ひ。小指の事から云ひ上げて、その人殺しは私しと、科をこの身に引受けて

ト門へ出かゝるを、お倉、傳兵衛縋り留める。立廻り。この時門口の壁の腰廻りを中より切り、願哲ヅッと這つて出て、崩れより、猿轡を掛け、縛り上げたる小三を引出す事あつて、願哲向うへ小石を投げる。捨て鐘になり、勘八先きに駕籠舁き二人、駕籠を舁ぎ、窺ひ〳〵出て來り、皆々立ちかゝつて小三を駕籠へ入れ、囁き合ひ、願哲附いて向うへ入る。

くら　いかに男に優つたる、氣性の其方といひながら、この年寄つた母を捨て、殊にはこれまで逢ひもせぬ、六つで別れた妹のお光、人手にかゝつて

ト長持ちの方へ愁ひのこなし。

ろく　サア、わたしもあれなる長持ちに、忍んでござるお方には、云ひわけもないあの體裁。いらざる跡でちぎれたる、この書置きが出たゆゑに。

ト ちぎれし書置きを出す。

傳兵　おれもこれ程氣を揉むは、あの長持ちの代物を、首尾よくこゝを落したく、殊に、尋ぬる一腰の、その手がゝりは奥に居る

ろく　あの相摺りの願哲を、留めて置いたも、あなたへお六が云ひわけ。引ッ立てゝ來て三つがなわ、劔の詮議。

ト奥へ行かうとする。金五郎あわたゞしく出てくる。この時向うより歌十先きに案内して、黑仕立ての捕り手大勢窺ひ出て、門口に立つてゐる。

金五　姐御々々。奥に來たとの願哲が、持つて來た證據の煙管は、首尾よく取返しは返したが、事によつたら小三なぞと、思つたうちに灯りを消し、見えぬといふは氣がゝりだ。兄貴、行燈を借さつしやい。

ろく　ナニ、願哲が見えぬとは

傳兵　彼奴を逃がさば詮議の蔓。

金五　勝手が知れまい、奥を探して

くら　マア、それにせい、床下の

ろく　あの子も氣遣ひ。マア、爰へ。

金五　そんなら小三を

ト疊を刎ね退け、根太板を取る、權平飛んで出る。

権平　次郎左衛門は慥かに長持ち。

ト傳兵衛立廻つて、キツと捻ぢ上げ

傳兵　思ひがけない下家から、此奴が爰に忍ぶといひ

金五　もしや小三は

ト下家を見て

ヤヽ、いつの間にやら

ろく　あの子の行くへは

傳兵　委細は此奴が

ト捻ぢ上げる。

權平　アイタヽヽヽ。

傳兵　きり〳〵吐かせ。

ト思ひ入れ。

權平　そんなら云ひます。願哲が小三を連れて、したみの崩れから

ろく　そこから抜けて行く先きは

權平　額俵屋へ返すといふて

傳兵　慥かに尋ねる一腰を、差して行つたに極まりました。

くら　お六は早う跡追うて

ろく　心得やした。取返しにはわッちが行つて

ト行かうとするを、お倉留めて

くら　アヽコレ。とはいふものゝその繩目、其方はお上の

ろく　科人ながらも、これはつかりは

ト行かうとする。

權平　お六は科人、滅多にわれを

ト縛り繩へ手を掛け、立廻りに、この繩バラ〳〵と解けて權平の手に殘る。傳兵衞、權平をキッと捕へ

傳兵　繩目の解けた云ひわけは、この傳兵衞が

ト此とき長持の蓋を刎ね退け、次郎左衞門出ようとするを、傳兵衞駈けゆき、留めて

アモシ、滅多に爰へは

權平　さてこそ、爰に。

ト長持ちへかゝるを、次郎左衛門抜討ちに權平を切り下げる。

ろく　流石は御所持の籠釣瓶

傳兵　水もたまらず。

くら　あと構はずと

金五　怪我せぬやうに

ト お六戸を明け、門口へ出かゝると

歌十　ソリヤ。

捕手　捕つた〱。

トかゝるをお六、千鳥に投げ退け、花道へかゝる。捕り手、バラ〱と内に入るを、傳兵衛残らず下家へ投げ込み、手早く疊をシャンと置き

傳兵　ヨイヤナ。

ト上へ乘り、押へる。お倉は行燈を持ち立ちかゝる。歌十は外より入るを、金五郎シャンと戸を締める。これにて歌十は首を締められ、苦しむ。金五郎キツと押へる。この模樣、一度の仕組みよろしく銅鑼の送りにて、ひやうし

幕



お六は向うへ一散に入る。捨て鐘にてツナギ、直ぐに引返し。

本舞臺、三間の間、通したる高土手。向う打抜き、吉原の二階を見せ、暗おとしに星の出たる體。誂への通りに飾り、前の通り流れ、重なりし葭、辻行燈、草井戸。尤も土手より田中へ下り口のもやう時の鐘、蛙の聲、禪のツトメにて幕明く。

ト爰に四つ手駕籠を繩からげにして、駕籠舁き二人これを擔ぎ、勘八附いてゐるを、願哲棒鼻を押へて引つ返さうとする見得。

勘八 サア〳〵、駕籠の手合ひは構はずと、早く、やらつしやい〳〵。

駕甲 合點だ〳〵。サア、坊さん

駕乙 放さつしやい〳〵。

願哲 イヽヤ、やる事はならねえ。コレ、判人、この小三は、この願哲が揚げて來ねば、こんたは玉を失ふであらうに、それに今更、三分や一兩で渡してやられるものか。宿場を稼がせ、切りを叩かせても覺えがある。それが否なら、おれが內へ擔ぎ返す。コレ、駕籠の手合ひ、せうさん堀まで引ッ返してくれろ。

駕甲　そりやァ迷惑だ。

勘八　コレ〳〵、願哲坊。そりやァてめえの蟲がいゝといふものだ。金五郎に素直にやつたところが三十兩よ。其うちを此方へ口錢取らねばならぬ。それにてめえは、二十兩寄越せとは、あんまり横といふものだ。ハテ、代物は此方の玉だ。駕籠の手合ひ、構はずと、やらつしやい〳〵。

駕舁　合點でござります。放さつしやい〳〵。

願哲　やかましいワ、極樂蜻蛉めら。願哲樣がお聲のかゝるまでに、ちつとでもやりやァがると、うぬらにかゝるぞ。死んだやうにして居やァがれ。サア、勘八、二十兩おれに寄越すか。それが否なら、持ち返す。サア、どうだ〳〵。

勘八　どうといつて、二十兩やられるものか。何もむづかしい事はねえ。跡はおれが呑みこんだ。駕籠をやれ〳〵。

駕舁　合點でごんす。

願哲　行きやァがると、うぬらにかゝるぞ。

勘八　エヽ、構ふ事はねえ、やれ〳〵。

願哲　イヽヤ、ならねえ。

勘八　エヽ、放しやァがれ。
願哲　放さねえワ。
ト兩人揉み合ひ、勘八思はず上の方の草井戸へ落ちる。願哲覗き見て
願哲　ヤア、勘八めは井戸へ落ちたな。よくしたものだ。
駕舁　エヽ、井戸へ落ちたえ〳〵。
ト立ち騷ぐ。
願哲　エヽ、やかましい。默つてゐろ〳〵。
トあたりの石を取つて、井戸の中へ、投げ込み〳〵して、思ひ入れある。駕籠舁き二人慄へてゐる。
コレ、あの野郎が死ねば、この中の玉はおれのものだ。ちつとばかりわいらにも符牒分けをするぞ。
口をしやべるな。默つてゐろ〳〵。
駕舁　アイ〳〵。
願哲　サア、呑みこんだら、せうさん堀まで擔ぎ返せ。
駕舁　合點でございます。
ト二人は怖々舁き上げ、願哲附いて、花道へかゝる。時の鐘になり、向うよりお六走り出て來り、願

哲に行き合ひ

ろく　ヤァ、願哲か。

願哲　お六か。

ろく　逢ひたかつたによ。

トきつと留めて

よくマア、こゝに居をつたなう。

願哲　コレエ、お六、いはゞ、われもおれが同類だワ。なんでおれが跡を、追ひかけて歩くのだ。

ろく　追ひかけて來たはこの間、こなたが差して行きやつた、二字國俊のあの一腰、いはゞ、豊島の屋敷にて、紛失したる盗み物、次郎左衛門様へ渡さねば、どうもならぬ義理ゆゑに、受取りに來た濡れ衣、その國俊をわしに下んせ、貰はうぞよ。

願哲　おきやァがれ。貰はうぞよも氣が強い。其方はそれでよからうが、願哲様は骨折り損。そんな勝手はよしにしろサ。

ろく　イヽヤ、まだそればかりぢやァ來はせぬワ。隱しておいた小三まで、揚げ玉にして來たであらう。見れば舁き出す四つ手駕籠。慥かに中は小三どの。お六が詞の甘いうち、からかはずとも、渡して

願哲　行きやれサ。
成る程、駕籠は小三だが、工面が惡さに揚げ玉だ。それを其方で踏み玉とは、たけの知れねえ惡玉と、異名を取つた程はある。折角おぬしが欲しがれど、破れ衣はまだな事、濡れ衣なら、コレ爰に、持つてゐれども、こればかりは、否だ、ならねえ、不承知だ。姐御、マアさう思つてもらはうよ。

ろく　おいてもくんねえ、坊主の癖に、刃物ばかりか小三まで、濡れ手で粟の濡れ衣、それからわッちが、マア先きへ。

ト手をかける。願哲立廻つて

願哲　そんならどうでも

ろく　たッて渡さにやア、もう是非に

ト抜かうとする。願哲その手を留め、キッとなつて

願哲　女に似合はぬ刃物三昧。骨は盜まぬ、わいらも手傳へ。

駕舁　合點だ。

ト息杖にて打つてかゝる。お六拔いて切り拂ふ。兩人手を負うて逃げる。お六は駕籠へ駈け寄り

ろく　コレ、小三。案じさんすな。

願哲　あまめ、くたばれ。

ト切り附ける。これより立廻りよろしく、誂への鳴り物を借り。兩人土手の上にて大ダテあり、トゞ願哲を切り倒し、一腰取つて

ろく　これぞ尋ぬる二字國俊。

次郎　手に入つたるか。

ト下座より次郎左衛門出る。

ろく　ヤア、お前は佐野の

次郎　出かしたお六。

トこの時若い者大勢、六尺棒、山谷、田町、淺草町の弓張りにて、バラ〳〵と取巻き

大勢　人殺し〳〵

ト棒を振上げる。次郎左衛門、お六を圍うてキッとなる。

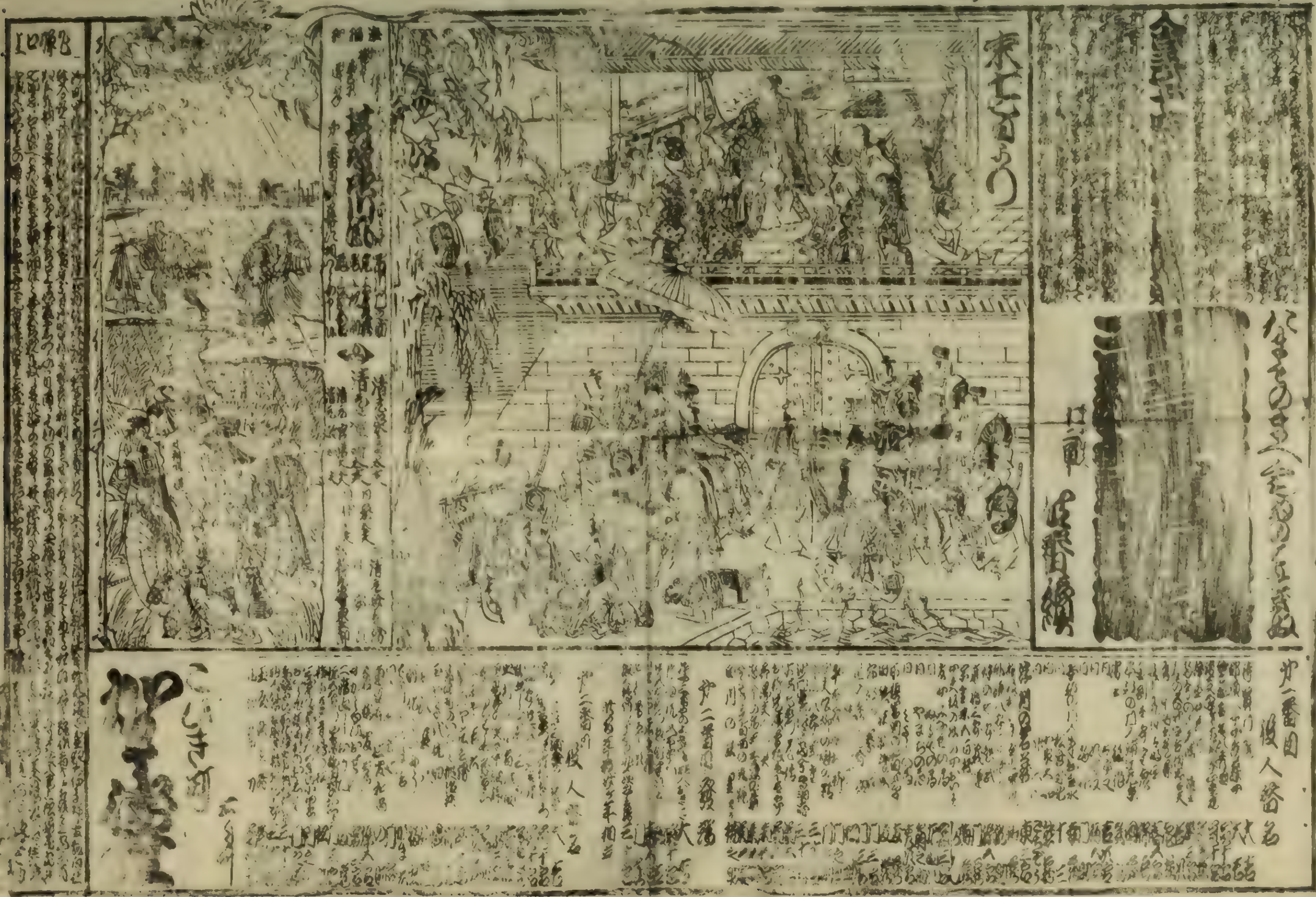
頭取　まづ、今日はこれぎり。

めでたく

打出し

玉藻前雲居晴衣

たまものまへくもゐのはれぎぬ



第一番目　役人替名
第二番目　役人替名

玉藻前御園公服

三建目

紀州女夫坂の場

役名――平太郎妹、お柳。お柳妹、お露。磯上飛忠太持國。八郎一子、綠丸。鹿島三郎義連。女夫坂の賤女、お磯。木樵、岩淵の和田四郎。進の藏人春俊。那須ノ八郎宗重。

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黃幕、よき處に誂への柳の大樹、日覆ひ一ぱいに同じく吊り枝、この枝に仕掛けあり、下手草井戸、釣瓶をおろし、下座の口山路の模樣。舞臺前、岩組み、谷底の體よろしく、すべて紀伊の國、女夫坂のかゝり。ここに絆纏、股引きの侍ひ二人、餌差し竿を持ち、腰に黐箱、火打ち袋を提げ。空を見上げ、わや〳〵云うてゐる。これを磯上飛仲太、烏帽子、小手、脛當て武者草鞋、素袍の下ばかり括りあげたる形にて、床几にかゝり、鳥さしに下知してゐる見得。こだまトヒヨ、山颪しにて、幕あく。

飛仲　ソリヤ、そこだ〳〵。

侍甲　イヤ、此方へ來た〳〵。

侍乙　ソレ、そこだ。

二人　ソリヤ、來た〳〵。

ト皆々空を見て、鳥をあちこちと追ひあるき、竿にて荒さうとする思ひ入れ。

飛仲　ヤア〳〵、異形の鳥が、虛空はるかに向うの方へ

二人　鳥の行くへを、いづくまでも

ト駈け出さうとする。

飛仲　アイヤ、各〻、まづ休息いたされよ。今に、又ぞろ爰へ飛び來らん。まづ〳〵。

二人　ハツ。

ト扣へる。

飛仲　この程より、和朝に見馴れぬ怪しき鳥、この紀伊路を飛行なすゆゑ、進の藏人、鹿島の三郎、この飛仲太は怪しき鳥を、狩りにとばかりにはあらず、眞は、鳥羽の大臣、遁世せられ、諸寺諸山の靈場、順拜の御立願にて、大館をお出ましありてお行くへ知れず。然るところ、この紀伊の國は、根來、高

野、加太、熊野を初めとして、靈社、靈場、數ある國なれば、大方はこの國へお出でと、田熊法眼どのゝ指圖によつて、怪鳥狩りを幸ひ、大臣を尋ね參らせ、再び御歸館あるやうにとの心配。御自分がたも隨分ともに、心を附け、鳥を捕へるばかりでなく、君のお行くへ、尋ねてよからう。

侍甲　委細畏りました。併しながら、下々の我れ〳〵、尊顔を拜し奉りし事もなければ、この儀に當惑。

飛仲　そりやその筈の事。御顔の樣子は、身共が詳しく話し申す。

二人　それは有り難う存じまする。

ト此うち又山颪し、トヒヨになり、日覆ひへ誂への異形の鳥二羽、舞ひ下がる。皆々見て

飛仲　アレ〳〵、又ぞろ、怪しき鳥。油斷めさるな。

二人　心得ました。

ト又鳥なさゝうとする。これよりこだまの入りし合ひ方になり、向うより進の藏人、鹿島の三郎、いづれも侍ひ烏帽子、小手脛當て、武者草鞋、素袍の下ばかり括りたる拵へ、鷹を据ゑ、半纏股引きの、侍ひ兩人附き添ひ、つか〳〵と出て來り、花道よき所に留まり

藏人　三郎どの、御覽の如く、怪しき雌雄のあの鳥に、鷹を合せんと存ぜしところ、鳥とは申しながら、空をかける事自在をなす稀代の鳥。

三郎　あれに飛仲太どのもお出で。一手になつて手柄をなさん。サヽ、お越しなされい。

藏人　然らば、お先きへ

ト矢張り右の鳴り物にて、この人數、本舞臺へ來る。

飛仲　これは御兩所、御苦勞に存じました。

トこの時、鳥は虚空へ飛び去る。三郎これを見て

三郎　ヤア、怪鳥は又々、山深く

藏人　これより山中は我れらが係り。

飛仲　いかにも。お手柄お待ち申す。

藏人　御兩所には、暫く御休息。

三郎　藏人どの。

藏人　後刻、閑談。

ト唄になり、藏人鷹を据ゑ、侍ひ一人附いて下座へ入ると、すぐに在鄉唄になり、向うよりお露、振り袖衣裳、在所娘の拵らへ。お磯、同じく在所女の拵へにて、兩人とも薪を脊負ひ、草鞋がけにて出てくる。餘程後より、和田四郎、やつし衣裳、輕衫をはき、草鞋がけにて、煙草をのみながら出て來り

和田　オイ／＼。そこへ行くのはお露ぢやァねえか。いゝ事を教へてやらう。

ト早足に來り、お露に戯れる。

つゆ　エヽ、惡い事を

ト云ひながら本舞臺へ逃げて來る。和田四郎追ひ廻す。お磯留めながら、皆々本舞臺へ來る。この時、三郎、和田四郎を見て

三郎　ヤア、其方は柚の和田四郎ではないか。

和田　これは三郎樣。飛仲太樣。

三郎　ハテ、よい所で逢つた。……かねて其方に申し附ける用事あつて、わざ／＼も尋ねるところであつた。

和田　それは幸ひな所でお目にかゝりました。して、その御用と仰しやるは

三郎　サア、外の儀でもない

ト云はうとするを

飛仲　アヽコレ、鹿島氏、こゝは途中。殊に、あたりにも

トお露、お磯へ思ひ入れ。三郎呑みこみ

三郎　イカサマ、さう早急に話も出來ねば
和田　左樣なら、アレ、あれにござる森の中には、鎭守の社もあれば
飛仲　成る程、こりやアいゝ思ひ附き。その社殿にて、何かの密談。
三郎　然らば案内いたせ。

ト山颪しになり、三人へ侍ひ附いて下座へ入る。お露、お磯殘り

つゆ　お磯さん、わたしや和田四郎さんに逢うて、どうせうと思うたわいなア。
いそ　さいなア。よい所にお侍ひ樣がござんして、和田四郎づらを連れて行つて、此やうな嬉しい事はないわいなア。
つゆ　斯ういふ間に山へ行つて、もう一荷、脊負うて來ようぢやないかいなア。
いそ　ほんにさうせうわいなア。

ト立上がり、向うを見て

アレ、あそこへござんすのは、平太郎さんの妹の、お柳さんぢやないかいなア。
つゆ　ドレ。ほんに、姉さんぢやわいなア。
いそ　オヽイ／＼。お柳さん／＼。

二人 オヽイノヽ。

ト向う揚げ幕の中にて

りう お磯さんも、お露さんも、待ちなさんせいなア。

ト謠への在鄕唄になり、向うよりお柳、在所娘の拵へ、柴を脊負ひ、絲丸、小さき熊手を持ち、片手に持遊びを持ち、お柳に手を曳かれて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

お磯さん、お前はよう精出しなさんすなア。

いそ なんのいなア。精を出すのはお前の事。兄御平太郎さんといひ、妹御の此お露さん。そう上、この頃は御浪人のお客さんはござんす。其かんかくから飯炊いたり、その隙には山稼ぎ。ほんに見上げた事ぢやわいなア。

りう なんのいなア。兄さんに女房さんが無ければ、みんなわたしが仕打ちぢやわいなア。

いそ いつぞやは聞かうと思ひましたが、やもめ暮らしのお前の内に、久しくゐさんす其お子は、平太郎さんのお子でござんすか。どなたのお子でござんすえ。

りう ハイ。この子は兄さんの子ではござんせん。

いそ そんならお内方にござんす、御浪人とお前の仲に出來たを、世間を憚り、わざとお主あしらひを

といふやうな事でござんせう。ナア、お柳さん。

りう　イヽエイナア。どうして其やうな事があつて、よいものでござんせう。あの御浪人樣はお主筋。父さんは侍ひの時、下野の領主、那須の八郎樣に勤めて、横曾根平内というた者。さすれば正しう、兄弟三人の爲めにもお主樣。又關東にてそれなりに、お行くへ知れざる藻女樣。この頃噂に聞けば、神誘ひにお逢ひなされたといふ事でござんす。

つゆ　モシ、姉さん。ついに女子の神誘ひに逢うた話しは、聞きませんわいなア。

いそ　イエ〳〵。其やうに、片圖に物を云はぬものでござんすぞえ。今時は天狗樣も、女子の方がお好きかも知れぬわいなア。オホヽヽヽ。

りう　神隱しにならしやんした、藻女樣は仕方もないが、どうぞして御鏡を尋ね出して、八郎樣を元のお大名にせにやならぬというて、兄さんも共々に、詮議してござんす。

つゆ　昔は大勢の御家來を、お持ちなされたお方が、今ではわたしたち兄弟三人を便りに、ほんにいとしいと云はうか。まだしも此お子が姉さんに、よう馴染んでぢやによつて、八郎樣も、兄さんも、喜んでゞござんす。

いそ　さういふ事なら、いつそその御浪人樣と、お柳さんと、夫婦にならしやんすればよい。

りう　アヽ、勿體ない。假りにもお主様に、そんなみだらな事がならうかいなア。もう〳〵、座輿にも、其やうな事、云うて下さんすな。

トこの時　下座より鹿島三郎、以前の形にて出て來り、あちこちを見て

三郎　若大臣様よりお預かりの、鷹を怪鳥に合はせしところ、此方の方へ追ひ來りしと思つたが、どちへ逸れたかしらん。

ト獨り言を云ひながら、お柳を見附けて

ヤ、其方は百姓平太郎の妹

りう　あなたはいつぞや私し方へ、お出でなされたお侍ひ様。

三郎　オヽサ。其方に用事あつて、是非に逢はねばならぬところであつた。

りう　いやしい賤の私しに、お歴々のあなた様が、どのやうな御用がござりまして。

三郎　その用事といふは、鷲塚金藤次様が其方に惚れて

いそ　エヽ。すりやアノ、お柳さんに

トこれにて三郎心附き

三郎　ヤイ〳〵、下司女めが。最前といひ、今といひ、身共が話しの邪魔ひろぐ女郎め、わいらは爰に

用事は無い。きり／＼と立歸れ。

りう　イエ／＼、あの衆たちはわたしと一緒に、山稼ぎに行くのでござんす。サア、お磯さん。

ト立ちかゝるを抑へて

三郎　イヤサ、其方には申し聞ける仔細がある。……ヤイ、女郎め、べろ／＼と何してうせる。きり／＼と行きをらぬか。

いそ　お柳さん、そんならお先へ。

りう　アヽ、モシ、一緒に行かうわいなア。

三郎　イヽヤ、やる事はならぬ。……うぬら、そこらにうろついてけつかると、ぶちはなすぞ。

ト刀へ手を掛ける。

磯露　ハイ／＼。

ト氣の毒なる思ひ入れ。モヂ／＼しながら下座へ入る。

りう　コレ、二人の衆、待ちなさんせいなア。

ト振り切つて行かうとするを、引廻してきつと留める。此うち綠丸、お柳に附いて、うろ／＼して三郎の額を見て

綠丸　アレ、怖いわいなう。

りう　アヽ、何も怖い事はござりませぬ。私しに斯う附いてお出でなされませ。

三郎　コレ、お柳、餓鬼に構はずと、おれが云ふ事を、下にゐて聞きやれよ。

ト引据ゑる。

りう　ハイ〳〵。

ト仕方なしに下にゐる。これより合ひ方になる。

三郎　今、出頭の鷲塚金藤次どの、其方に殊の外の執心にて、閨の伽にも致したく、身共へくれ〴〵の頼みゆゑ、侍ひのあるまじき、女子を捕へてのわり口說き。こゝをよう聞けよ。人間と生れ、その身の出世を、思はぬ者は無い浮世。今、身が申す事聞分けて、ウンと返事さへすれば、身共が仲人して、金藤次どのゝ奧方になれば、その身ばかりか、兄平太郎の出世になるワ。こゝの道理を聞分けて、得心しておくりやるまいか。

りう　そりやモウ、折角あなたの思し召し、有り難うござりまますれど、この儀はどうも、御返事が出來ませぬ。

三郎　ムウ。斯ういふうまい相談は、願つてもねえ事を、返事が出來ぬといふからは、アヽ、聞えた。

さすれば、われが兄の平太郎が、主人といつて世話をする、浪人者の那須の八郎と、わりやアくッついてゐるな。

りう　どう致して、左樣な事が

三郎　なければすぐに金藤次どのゝ、屋敷へ連れて行かうか。

ト手を取る。

りう　そりや、あまり御無體な。

三郎　無體と思はゞ思ふまで。武士が一旦云ひ出して、その儘では濟まされぬ。サア、おれと一緒に歩んで行くか。

りう　サア、それは

三郎　但し得心して行く心か。

りう　サア、それは

三郎　手荒くせうか。

りう　サア

二人　サア／＼／＼

三郎　お柳、返事は、どゞどうだ。

トこの時風の音、トヒヨになり、下座より件の鳥舞うてくる。これを、三郎の据ゑてゐた鷹、怪鳥を目がけ飛び、追ひ廻す。トゞ怪鳥は空へ舞ひ上がる。鷹は柳の枝へ足を引つかけ、飛ばれぬことあつて鷹はあせつてゐる。綠丸これを見て

綠丸　アレ〳〵、鷹が鳥を追つて、面白い〳〵

ト手を叩き喜ぶ。三郎聞きつけ

三郎　ナニ、鷹が

ト我が手を見て

ヤア、若大臣樣が御祕藏の鷹が、柳にかゝつて

ト柳を見て獨りあせる。此うちにお柳は綠丸の手を曳き、そつと逃げて入る。三郎いろ〳〵氣をもみ又お柳の方を見て、そこに居ぬゆゑ

ヤア〳〵、鳥は逃げる。お柳は飛んでしまふ。鷹は柳にひツかゝる。こりや、どうせう〳〵。

トうろ〳〵してゐる。下座より藏人、飛仲太出て來り、この體を見て

藏人　こりやコレ、若大臣樣御寵愛の鷹。この儘に打捨て置かば、鷹の命は目のあたり。如何いたした

ものでござらう。

飛仲　イカサマ。猿猴ならでは登りがたきこの梢。何とも以て致しやうがござらぬ。

三人　ハテ、困つたものでござる。

ト此うち下座より、和田四郎出かゝりゐて、この時前へ出て

和田　あの鷹の命、助けてあげませうか。

ト皆々和田四郎を見て

飛仲　ヤア、其方は木樵の和田四郎、鷹の命を助くるとは

和田　さればでござりまする。御覧の如く、丈抜群の柳の梢。杣木樵の我れ〳〵でも、登りがたき高木なれば、杣仲間を呼び寄せ、大勢しかけて根元より、切り倒すその時は、自然と鷹のとまりし枝は外へ落ちる。そこをおさへて足皮を放しなば、鷹に少しも怪我なき工夫。この儀は如何でござりませう。

三郎　成る程、流石は和田四郎。性は道によつて賢し。我れ〳〵なぞが存じも附かぬよい分別。なんと左様にはおぼさぬか。

蔵人　イカサマ。この儀よろしきやうなれど、幾年となく星霜つもりし柳の樹、無下に切る時は、後の

憂ひも計りがたし。どうも柳を切る事は

三郎　ナヽ、何とお云やる。其許は外に何ぞ御工夫あつて、若大臣様御秘藏の鷹を、助くる手段がござるか。

藏人　サア、その儀は

三郎　お手段無ければいらざるお指圖。和田四郎、急いで樹を切る用意いたせ。

和田　畏りました。すぐに爰へ人數を集めて

ト人集めの竹法螺を吹く、勢子やうなる太鼓の鳴り物になり、向うより杣、五人、いづれも木綿やつし輕衫をはき、腰に斧を差し、小さき竹の子笠を冠り、走り出てくる。この中へ交り、那須の八郎、浪人者の山狩りに出たる好みのなりにて、粗末なる半弓と矢を持ち、竹の殿中笠をかざし、額を隱して出て、皆々と一しよに下手に扣へる。

杣　人數を集める合圖の竹法螺。聞くとその儘走せつけましたが、和田四郎どの

五人　何御用でござるな。

和田　その御用といふは、これなる柳の大木へ、鷹が足並ひッかけて、アレ、あの通り苦しむゆゑ、柳の幹を切り倒し、鷹の命を助けるのだ。いづれもすぐに支度さつせえ。

五人　心得ました。

ト皆々笠を脱ぎ、腰の斧を取つて立上がり、柳の樹へかゝる。この時八郎、笠投げ捨て

八郎　アイヤ、この柳を切る事、御無用になされませう。

ト五人の杣を掻きのけ、留めながら前へ出る。皆々八郎を見て

藏人　ヤア、貴殿は那須の八郎どの。

三郎　ほんにさうだ。いつぞや大館勤番の夜に、八手の御鏡紛失させ、まだその上に、田熊どのゝ息女藻女と、不義密通が現はれて、浪人なされた扶持離れ。

飛仲　面も冠らずその儘で、我れ〳〵列座の其ところへ、柳を切る事無用とは、なんで留めにお出やつた。

八郎　各々方の仰せの如く、身の誤りより肌薄き、浪人者の活計にて、山野をかけり鳥獣を、撃つて身すぎの八郎宗重、不意に吹き立つ竹法螺は、何事ならんと杣仲間の、中へ交りて様子を聞けば、鷹の命のその代り、あれなる柳を切らんとは、いづれも方の思し召し、相違のやうに存じまして、恥も恥辱もいとひなく、申したのでござります。

三郎　イヤナニ、八郎どの、柳を切るを我れ〳〵が、料簡違ひとお云やるのか。

八郎　いかにも。

三郎　ハヽヽヽヽ。そりや何といふたわ事だ。若大臣様が御秘藏の、鷹の命が危ないゆゑ、人數を集めて切り倒すを、料簡違ひとは片腹痛い。

八郎　アイヤ、それが即ち料簡違ひ。鷹の命を助けても、年經し柳の命お取りなされば、同じ事かと存じまする。

三郎　ヤア、云はして置けば、さま〴〵のよまひ事。柳に命があるものか。

八郎　イヽヤ、命がござる。

三郎　そりや又どうして。

八郎　草木とは申せども、四季折々の時を知り、若葉ともなり、又青葉ともなる。秋は葉隠れ、冬は木枯し。花あれば實あり。何ぞ性なき者に變化の理あらんや。大樹百年にして神となるといへり。斯程の古木にしてこの末に、何百年と命數の計りがたきを、命數の限りある、鷹の命を助けん爲に、いたづらに切り捨てなば、木魂神となつて、その咎め、無いともあながち申されまじ。殊に先の大臣お惱みの折柄、即ち鷹を助けて、柳の命を取る時は、同じ殺生と存ずるゆゑ、おとゞめ申したが、誤りでござるかな。

三郎　サア、それは

八郎　但し、外に御批判がござるか。

飛仲　オヽ、批判がござる。柳は切らずと、その儘にして置かうが、鷹の命はどうして助ける。

八郎　その助ける仕樣は、幸ひ持ち合せたるこの小弓にて、たつた一矢で射落しまする。

飛仲　ヤア、血迷うて何を差し出た。鷹を射殺す位るなら、尾羽打枯した浪人者の、指圖は受けぬ。すつこんでお居やれ。……ヤア、和田四郎、彼れにかまはず、切り倒せ。

和田　心得ました。

ト皆々斧を持ち、立ちかゝる。

八郎　イヽヤ、切らせる事は相成らぬ。

ト皆々を支へる。

皆々　何を小癪な

八郎　イヽヤ、ならぬ。

ト八郎弓矢を持つて皆々を留める。六人は斧を振りあげる。八郎、五人を下手へ突きのけ、和田四郎とちよつと立廻り、膝に引敷きながら、手早く弓に矢をつがへ、鷹を目當てに切つて放つ。これにて鷹の足皮を射切り、鷹は日覆ひへ引いて取る。皆々見て

皆々　ヤア〳〵、鷹は虚空に飛び去つた。

八郎　鷹も柳も、双方とも、命助ける拙者が仕様、御覧の通りにござりまする。

ト和田四郎を突き放し、皆々へ目禮して思ひ入れ。

藏人　天晴れ射術の八郎どの。

飛仲　射術にもしろ、何にもしろ、鷹は飛んで行くへわからず。さすれば死んだも同じ事だ。若大臣様への申し譯は、何としようと思ふのだ。

八郎　アイヤ、そこが平日据ゑ置く鷹。拳へ戻すを御存じなき、各ゝ方でもござるまい。よし又それを御存じなくば、鷹を据ゑなさるゝお役目に、疎いやうに存じられまする。

飛仲　ムウ。

藏人　かゝる手練のありながら、世の諺に、田熊の娘藻女と、不義の汚名を受けし上、御鏡の紛失が、越度となつて今の流浪。

八郎　申すも便なき身の誤まり。さりながら、先の大臣御惱みのこの時節に、何とて貴殿ははる〴〵とこの紀伊路まで遊獵めさるゝな。

藏人　さればサ。この度日本に珍らしき怪鳥、飛行なすゆゑ、陰陽の博士に申し附け、大館記錄所の書籍

を、殘らず吟味いたせしに、かゝる怪鳥はその昔、天竺より唐土へ渡る。時は卽ち殷の代、白面の妖狐出でゝ、殷の帝を惑はし、人民を惱ませし時、この鳥出でゝ舞ひ遊ぶ。名づけてこれを双鸞と呼ぶと、時の博士より關白家へ奏聞。さすれば、聖代に不吉の鳥なるがゆゑに、捕へんがその爲め三郎どの、飛仲太どのもろとも、遊獵ならぬこの鷹狩り。殊更當節鳥羽の大臣、御遁世ありて、蓮華坊と自ら稱され、靈佛靈社御順拜の立願にて、大館を出で、ほのかに聞けば、當時この紀伊の國を御巡りのよし。承つて狩倉の、折を幸ひ御行くへを、相尋ねるのでござりまする。

三郎　それといふのもなまじひに、貴殿の兄の安部泰親、大臣の御顏を相しつゝ、今御就任あると雖も君には正しく下賤の相あり、これを除かんには、一萬人の手の內を受け給へと、出かし顏に申せしより、起つての御遁世。

飛仲　誠に陰陽師身の上知らずと譬への通り、人の相の難非難くッつけても、那須の一家は同罪と、八郎どのゝ兄なれば、可哀や遂に閉門とは

三郎　ほんにたわけた詮索た。

ト八郎へ當て附けて云ふ。八郎ムッとして、氣が替へ、藏人に向ひ

八郎　大臣は御在任の望みなく、御身に下賤の相あるは、麿が不德と剃髮なされ、世を捨て人と館を出

でさせ、習はぬ道のわらぐつも、お痛はしき儀でござりまする。

藏人　然るによつて、御弟として輔惟君へ、御就任を勸め奉れども、親兄の禮を思し召し、御承引なく、然るゆゑに、當節一天下に大臣なし。

八郎　さすれば四海は常闇同然。

藏人　ぢやによつて、先の大臣の御惱み、一日も早く平癒あるやう、千々に心は碎けども、肝心の御祈念に、無くて叶はぬ御鏡の、紛失は是非もなし。

八郎　お氣遣ひ下されな。數日を待たず、御鏡は、きつと詮議いたし、差上げまする。

飛仲　イヽヤ、そりやァひが事だ。現在自身が勤番の夜、大切な御鏡を、盗み去られるお手際で、なんの詮議が出來るものか。

三郎　大切なる御鏡と、知つて盗む程の者を、うつそりかんの大だわけが、詮議しようからとて、ツイそれと知れる所に、持つてをらうか。身共なぞが盗賊なら、さう巧く……イケ馬鹿々々しいなんと、藏人どの、左樣には思さぬか。

藏人　アイヤ、三郎どの。貴殿のやうにお云やれば、どうか在所を、御存じもあるやうで

三郎　ヤア。

藏人　イヤサ、御存じあらう筈はないが、申さば朋友のよしみとやら。とも〴〵詮議に、盡し遣はされい。

三郎　成る程、こりやア拙者が申しぞこなひ。とても出ぬ寶とは知れてはあるが、とも〴〵詮議いたしませうよ。

藏人　イヤナニ、八郎どの。寶首尾よく差上げて、生國野州へ伊達道具、飾り花野の那須の氏。

八郎　その會稽も心を籠め、たとへ高麗唐土に隱すとも

藏人　アイヤ、さのみ遠く詮議に及ばぬ。彼の古歌にもある通り、……「春雨の、分きてそれとは降らねども、受くる草木もおのがいろ〳〵」。……赤き花に赤き雨、青き花に青き雨と、雨露の惠みは變らねど、受くるおのが色々にて、人の心もまツその如く、表の花は形よく、内には含む鬼薊、そこらあたりに刺あれば、心を籠めて、必ずともに。

八郎　ハツ、委細承知仕る。忠義の二字と聖德の、頭に宿る神力にて

藏人　寶詮議を、那須の宗重。

八郎　吉左右お知らせ申す時は

藏人　よろしく奏聞。

三郎　進の藏人。

藏人　御兩所お先きへ。

四人　おさらばでござる。

ト唄になり、藏人こなしあつて、侍ひ一人、杣五人附いて、向うへ入る。八郎と三郎、飛仲太顔見合せ、こなしあつて、八郎は下座へ入る。三郎、飛仲太、和田四郎殘り

和田　アヽ、詰まらぬ者はおれ一人。鷹の事からしや〳〵り出て、一番手柄と思ひの外、あの八郎めに奪ひ取られ、これがほんの犬骨折り。鷹は飛び去る。

三郎　イヽヤ、その犬骨折りしてやるその譯は、兼ねて某、田熊法眼どの、鷲塚金藤次どのと合體なし那須の八郎が勤番の夜に、盗み取つたる八手の御鏡、肌身離さず、これ爰に

ト懐より、袱紗包みの神鏡を出して、思ひ入れ。

和田　すりや、それが誠の、御鏡でござりまするか。

三郎　盗み取りは取つたれども、今、藏人めが詞の端々。どうか氣取つた樣子。身共が持つては危ないもの。ところで、思ひ附かぬ和田四郎へ、この御鏡を預け置けば

和田　エヽ。すりや、その品を私しに

三郎　これをきつと守護してをれば、やがて田熊どのは關白職、天下の政事を取計らひ、心にたがふ殿上人はおッ下し、身共らが公卿となり、何大臣と官位昇進。その時には其方も、武士に取立てゝくれるワ。それまでの約束代りのこの御鏡。大事に持つて出世を待てサ。

ト神鏡を渡す。和田四郎受取る。

飛仲　それはさうと、飛び去つたる鷹の行くへ、この儘打捨て置いては、若大臣よりお祟りも計られず。

三郎　イカサマ。これより手分けして詮議なさん。

和田　左樣なら、この品に付いて、必ずお心遣ひなされまするな。

三郎　必ずともに、人に氣取られるなよ。

和田　蟲にも刺さす事ぢやございませぬ。

飛仲　天晴れ片腕。

三郎　和田四郎。

和田　いづれも樣。お別れ申します。

ト、木魂、山颪しの合ひ方になり、三郎、飛仲太、侍ひ殘らず向うへ入る。和田四郎殘つて

待てば海路の日和とやら、斯うもまんが直るものか。………これが出世の品とは、ハテ、とんだ

物だなア。

ト出して見たり、又懐へ入れたりして獨り喜んでゐる。この時お露、お磯、以前の形にて出て來り

露磯　和田四郎さん、まだ爰にかいなア。

和田　オヽ、これはお磯坊にお露坊。其やうに山稼ぎをするものぢやァねえワ。ちつと夜稼ぎといふ事をして見ねえか。

トお磯に戯れる。

いそ　アヽコレ。主ある者に、冗談をさんすないなア。

ト突きこかす。

和田　年増に刎ねられたら、先刻にも懲りず、生娘にしよう。

トお露に戯れる。

つゆ　先刻といひ、アタしつこい。わたしや其やうな事は知らぬわいなア。

ト振り離す。和田四郎二人の袖を捕へて

和田　さう二人ながら酷くはしねえものだ。男が斯う云ひ出したからは、二人に一人、得心してもらはにやならぬ。年増か、生娘か。長か、半か。附け目なしに何方へでも乘る氣だが、どうだえ、

どうだえ。

いそ　お前も男。云ひ出した事を、この儘で濟まされまい。わたしが仲人して、お露さんを執持たうか
いなア。

つゆ　アヽモシ、滅相な。其やうな事がどうしてマァ

いそ　イヽエイナア、わたしが悪いやうにはせぬ程に

トお露に悪いやうにはせぬと呑みこませる思ひ入れあつて

ナ、任せて置かしやんせいなア。

和田　任せて置けと云ふからは、お露を執持つか。

いそ　あの子はとうから、得心してぢやわいなア。

和田　得心とは面白い。定めて手入らずの。エヽ、有り難い。

ト無性に喜ぶこなし。

いそ　シタガ、物は堅うせにやならぬ。杯事と云うたところが、こゝは道中。手早くツイ抱き附くに
も、初心なお露さん、恥かしがつて埒が明かぬによつてナ、お前、見ぬ振りしてござんせいなア。

和田　馬鹿を云つたものだ。見ぬ振りをしてゐちやア、口を吸ふ事も出來ねえ。

いそ　ほんにさうでござんす。こりやどうしたらようござんせう。

トいろ〳〵考へ、思ひ入れ。

和田　オツトいゝ事がある。さう初心ぶるなら、手足と口は自由になり、目ばかり見えぬやうにしたら恥かしい事はあるまい。

いそ　さうすればようござんすが、どうすれば目が見えぬやうになりますえ。

和田　それは斯うするぢや。

ト手拭ひを出し、目隠しをして

これぢやア恥かしい事はあるまい。

いそ　こりやアようござんす。そんならもそつと、其方の方へ寄つてござんせ。

和田　オツト合點だ。

ト和田四郎上手の方へ行き、濟ましてゐる。

いそ　サア〳〵、お嫁御さんは聟さんの儘でござんす。早うお側へ

ト云ひながら、早く逃げろと仕方する、お露呑みこまず

つゆ　お磯さん、何云うてぢややら、わたしや否いなア。

いそ　エヽ、この子も呑み込みの惡い。

　　　トちよつと囁き

ナ、早うお側へ。

　　ト向うへ行けと敎へる。これにてお露、拔き足をして花道へかゝる。

エヽ、辛氣な。わしが手を取つて聟どのゝお側へ、サア／＼

　　ト捨ぜりふ云ひながら、同じく拔き足をして、お露と一緒に揚げ幕へ走り入る。和田四郎これを知らず

和田　エヽ、子供といふものは、恥かしがるものだ。肝心の聟どのが盲目同然。どんな形をしてもいゝぢやアねえか。サア、來な／＼。

　　ト同じく捨ぜりふ云うて、あちこちと探り廻るところへ、お柳、綠丸の手を引き、以前の形にて、何心なく來かゝるを、和田四郎、お露と心得、無暗に捕へる。お柳恟りして

りう　エヽ、こりや無體な和田四郎さん。何さんすぞいなア。

綠丸　お柳を捕へて、どうするのだ／＼。

　　ト持つたる熊手にて、和田四郎をさん／＼に打つ。

和田　アヽ、痛え〳〵。

ト悄りして手拭ひを取り

ヤ、わりやお柳。……そんなら二人に騙かられたか。いま〳〵しい。

りう　お前もマア、無性に人に抱き附いたり、引ッついたり、ほんに、ちと嗜なましやんせいなア

和田　イヤモウ、面目次第もない、と云ふ所を云はぬその譯は、金藤次様がおぬしに惚れてござると聞いたから、あなたへおれが執持つて、奥様にするワ。なんと、嬉しいか〳〵。

りう　三郎様といひ、お前までが、其やうな事。聞きともないわいなア。

和田　お大名の奥様に上がるに、味を知らいでは不躾だ。おれがちよつとお風味を

ト戯れる。

りう　エヽモウ、座興もいゝ加減にしておかんせいなア。

ト突きこかす。和田四郎起上がり

和田　ハテ、此やうに女子に嫌はれる筈ではないが、待てしばしわが心、當時世界に和田四郎ほどの男はない筈だが、おれが顏は、どうぞしたかしらん。

ト懐より以前の御鏡を出し、ためつすがめつ、髪の風を直し

どう見ても菊五郎をぬけといふ男で、おまけに少し淺友といふところもあり、これで女の惚れぬ
　といふは、ハテ面妖な

　　トこれにてお柳、和田四郎の持つたる鏡を見て

りう　お前も餘ッほどの自惚れ。山稼ぎに歩くまで、鏡を持ち歩くやうな嫌味な男は、當時流行らぬわ
　いなア。

和田　イヤサ、この鏡は嫌味で持ち歩くのぢやアねえ。こりやア八手の御鏡といつて、大館樣の大事な
　寶だが、譯あつておれが預つてゐる。女に生れた名聞に、拜んで置くがいゝ。

　　ト出して見せる。お柳取つて

りう　すりや、これが、八手の御鏡とやらでござんすかえ。

和田　オヽサ、縁あらばこそ拜まれるワ。

　　トお柳よく／＼見て

りう　エヽ、有り難い。この御鏡こそ御主人の、日頃お尋ねなさるゝお品。ちつとも早く八郎樣へ

　　ト持つて行かうとするを、和田四郎あわてゝ留め

和田　ヤヽ、そんならあの浪人めが、尋ねる品であつたのか。さうとは知らず口走つたが、その品渡し

てたまるものか。

りう　イヽエ、渡して下さんせ。

和田　渡すどころか、他言されては身の上だ。

りう　其方の身の上より、御主人の身の上、御身にかゝつた御鏡なれば

ト振り切つて駈け出す。和田四郎、緑丸を捕へて

和田　コリヤお柳。われが返さにや平太郎が、主人と吐かすこの小倅。今斧で打殺して

ト斧を振りあげる。お柳恟りして

りう　アヽコレ、滅多な事さんすなえ。

トつか／＼と立戻り、この中へ入り、緑丸を圍ひ

此お子滅多に、手籠めにさせては濟まぬわいなア。

和田　そんなら鏡を戻すか。

りう　エヽ、この品兄さんにお渡し申して、那須のお家の再興を

和田　さうされて詰まるものか。われがさう吐かすなら、此方も酷い役ながら、餓鬼めを殺したその上に、おのれを金藤次どのへ連れて行き、妾にあげて金にする。

りう　イヽエ、なんの金藤次づらに
和田　行かねば、そんなら鏡を返すか。
りう　こればつかりは
和田　エヽ、面倒な。手籠めにして
　　　トお柳の持つて居る御鏡を取らうとする。お柳は渡すまいとあせる。立廻りのうち誤つて、上手の谷底へ御鏡を取り落す。
　　　ヤヽ、大切なる御鏡を。
りう　あの谷底へ。
　　　ト岩組みの谷底へ下りようとする。
和田　エヽ、しみしつこい。おのれに遣つてたまるものか。いつその事に鏡は後でおれが取る。おのれは金藤次様へ、參りますと返事をしろ。
　　　トお柳を斧でしたゝかにくらはす。
りう　エヽ、穢らはしい。なんの返事を
和田　さう吐かしやア、餓鬼めを殺して

ト綠丸をくらはす。

りう　其お子に過ちある時は

ト留める。

和田　われも一しよに

ト お柳と綠丸を左右に置き、あちこちとくらはす。お柳は綠丸を打たすまいと留める立廻りのうち、急所をしたゝかに打たれ、これにて「ウム」と悶絶して、苦しみ倒れる。利田四郎驚き

南無三、お柳は氣を失つたか。……お柳やアイ〳〵。

ト呼び生ける。綠丸悔りして、お柳に取附き

綠丸　こりやお柳が死にやつた。どうせう〳〵。どうせうぞいなう。

ト大泣きに泣き落す。山颪しになり、いづくともなく烏三羽ほど飛び來り、お柳の死骸に取附き、あちこちしてゐる。

和田　金藤次樣へ差上げて、大金にする大事な代物。こりやア大變だ。

トあわてながら、下手の草井戸の繩釣瓶を汲み上げ、水を飲ませ、いろ〳〵介抱しても心づかぬこなし。和田四郎思ひ入れあつて

鳥が死骸をせるゝ樣子では、どうしても絆は切れたと見える。ハテ、惜しい事をした。併し鏡の事を見知つた女なれば、これも勿怪の幸ひだ。侍ひならとゞめといふところだが、斯うして

ト斧にて死骸を思ふ存分くらはし

これぢやアよもや生き返る事はあるまい。これからは谷底へ下りて、御鏡取上げ、それ〳〵

ト上手の岩組みを下りようとする。此うち綠丸始終泣いてゐたりしが、この時有合ふ熊手を取つて

綠丸　お柳を殺した憎いおぢいめ。

ト後より打つてかゝる。和田四郎驚き、振り返つてその手を捕へ

和田　エヽ、ませた餓鬼め、何をするのだ。この場の樣子を見かぢつた小悴。おのれも生けて置かれぬ。殺生ついでだ。一思ひ

ト引ッ捕へ、トゞ危ふき所へ、下座より那須の八郎、何心なく出て來り、この樣子を見て、あわてゝ抑へ

八郎　ヤア、こなたは和田四郎。なんで我が子を手籠めにするのだ。

和田　サア、それは

八郎　樣子があらう、それ吐かせ

ト屹度云ひながら、お柳の死骸を見て

ヤ、、こりやお柳を何者が

綠丸 あのおぢいが叩いたゆゑ、お柳は死にやつたわいの。

ト泣きながら云ふ。八郎驚き、介抱して

八郎 こりや絆は切れたか。ホイ。

トこなし。此うち和田四郎窺ひゐて、後より斧にて、騙し打ちに打つてかゝる。八郎危ふく留める。この時薄ドロ／＼にて、柳の蔭より山神、異形に出る。和田四郎には見えぬこなし。山神と共にお柳、すつくりと立つ。この途端に和田四郎、斧を持つたまゝ見事に中がへりする。これをきつかけに、チヨンと木の頭。お柳につこりと思ひ入れ。八郎、和田四郎が様子を見て、心得ぬこなしにて、綠丸を脇に引寄せる。双方よろしく、ひやうし

幕

四建目　　九尾妖狐出現の場

役名――沙門、蓮華坊實ハ鳥羽の大臣。金剛太郎重虎。海賊、荒磯浪九郎。同、浮洲の岩

藏。華陽夫人の靈。

本舞臺三間の間、正面奥深くに一面の浪幕、所々に岩組み。少し上手に寄せて、苔蒸したる誂への自然石、仕掛け物好みあり、この側に、草生ひ茂り、舞臺前、流れの浪板。切り穴。下の方に苫船一艘繫ぎあり。すべて紀伊の國逢瀬の濱、海上を遠目に見たる飾り付けよろしく、こゝに侍ひ二人、半素袍の下ばかり。これに、白丁の下を穿きたる仕丁四人、うろ〳〵してゐる。浪九郞、岩藏、海賊の拵へにて、これに立ちかゝりゐる。この見得、時の鐘、浪の音にて幕明く。

浪九　サア、うぬらがまとつたその濫袍

岩藏　四の五となしに片ツぱし、きり〳〵脫いで

浪岩　うしやアがれ。

侍甲　ヤア〳〵、何と云ふ。すりや二人とも、道案內と思ひの外

皆々　田夫野人の、追剝ぎやなア。

浪九　知れた事だ。海道通路の旅人は元より、湊下りの浦船を、目掛けて働く

浪岩　海賊だワ。

皆々　イヤア。

ト驚き、ガタ〳〵慄へる。

浪九　何も驚く事はねえ。コレ、エヽ、今わいらがほざいた通り、鳥羽の大臣といふ公卿どのには、コレ、岩藏。

岩藏　オヽ、それ〳〵。遁世とやらを望んで、そんならいよ〳〵館をば、駈落ちしたに間違ひないか。

侍甲　オヽ、それゆゑにお行くへを、尋ね求むる我れ〳〵兩人。殊更この程、これなる紀の路においでのよし、町々の風聞。

侍乙　それ〳〵。その在所を尋ね出せば、御褒美にありつくといふものだ。なんと其方も共々に

侍甲　詮議いたしてくれまいか。

岩藏　イカサマ、金にさへなる事なら、詮議してやるまいものでもねえが、何をいふにも、雲を摑むやうな尋ねもの。

浪九　オヽ、岩藏が云ふ通り、大臣さんのぐれを尋ねる事だ。當座の褒美に手附けの金と、いつちやアありはしまい。その代りに、わいらが溫袍

岩藏　後生ながらに取つてやるのだ。サア、身ぐるみ脫いで、置いて行け。

皆々 すりや、どうあつても、我れ〳〵の衣類まで
浪九 オヽ、おいら二人が今こゝで、頼まれた其しるし。
岩藏 手附け代りに
浪岩 貰ふのだ。
侍甲 ヤア、云はせて置けば、推參なる匹夫めら。彼れらに構はず、早お行きやれ。

ト皆々行きにかゝる。浪九郎、岩藏これを捕へ

浪九 ヤイ〳〵、待ちやアがれ。匹夫だの、こつぷだのと、聞いた風な。
岩藏 面倒な。片ツぱしから、引ツ剝げ〳〵。

ト皆々振り切つて行かうとするを、浪九郎、岩藏、有合ふ舟の梶にて、皆々を打ち倒す。

皆々 アヽコレ〳〵、聊爾いたすな。脫ぎます〳〵。

トこれにて浪九郎、岩藏、捨ぜりふにて引ツ剝ぐ。皆々裸になり

侍甲 アヽコレ、いかに都で無禮講が流行るといつて、大臣さまのお行くへを尋ぬるに
侍乙 それ〳〵、裸で道中がなるものか。
皆々 道理で昨夜も張り込んだ。

浪九　やかましい。早く行きやァがれ。

侍二　仕丁ども、參れ。

ト浪の音。侍ひ二人に仕丁附いて、皆々下座へ入る、此うち浪九郎、岩藏、衣類を掻き集めて見送り

浪九　なんと、ひつこしのねえ。餘ッ程の判じ物だ。

岩藏　さうよ。あれが正眞の、天王樣のお神輿かつぎ、よい〳〵めいてゐるワ。そりやァさうと、この間中鳥羽の大臣さんは、役をやめて、行くへが知れねえと、人の噂に違ひなく、そんならいよ〳〵大館から、駈落ちした樣子だが、所詮在所を尋ねて、都へ知らせたといつて、高の知れた褒美であらうよ。

浪九　ちげえねえ。それよりは眞ッ裸にして見やれ。大臣の事だによつて、なんと云つても路銀はこつてり。引揚げるが上分別といふものだ。

岩藏　コレ〳〵、待ちやれよ。先刻の長濱で、出合つた沙門めは、さう云やァどうか大臣くさいやうだが、彼奴に足を附けて見ようぢやァねえか。

ト時の鐘を掠めて、浪の音にて、下に繋ぎし船の舳より、苫をあげ、中より金剛太郎、蓑をひッかけ、竹の笠をかざし、そろ〳〵出て來り、後に窺ひゐる。

浪九　この濱傳ひに、那智へかゝるのであんべえ。なんと、此奴をばらしながら、鵜飼ひのあたりで頑張るべいか。
岩藏　それがいゝ。これから大臣をぶッちめりやァ、懐にずつしり路銀の金。
浪九　そいつをせしめたその上で、都へ直ぐに訴へりやァ、濡れ手であはよく褒美の金。
岩藏　それが誠に、四でよし、五でよし。
浪九　そんなら岩藏。
岩藏　サア、來やれ。

ト兩人衣類を持つて行きかゝる。この時太郎思ひ入れあつて

太郎　二人ともに、待ちやがれエ、。

ト前の方へ出る。兩人悔りして、太郎を見て

浪九　なんだ頭横柄に。つひぞ見た事もねえ野郎めが
岩藏　ひよッくらひよいと出やァがつて、おいらに用とは
浪九　なんの事だ。
太郎　ヤア、何事とは、小ざかしい蛆蟲めら。穢らはしいその口の端にかゝるさへ、勿體ない大臣さま

の、其お在所を尋ね出し、手籠めにせうとは野太い雜言。サア、吐かしやアがれ。

岩藏　ムウ、聞えた。すりや、うぬも駈落ちして、鳥羽の大臣にとッついた二本棒だな。いゝワ。斯うなるからは隱しはしねえ。見當り次第金にする、二人が目算。併し、そんじよそこらといふ、その居所はおいらも知らねえ。

浪九　よし又知つてゐやうがまゝ、大金になる仕事の蔓、うかうか云つてつまるものか。

太郎　さう吐かしやア是非がない。大臣さまの御在所、密かに詮議をなさんが爲、姿を變へて徘徊なす、金剛太郎重虎が、摑みひしいで、云はせて見よう。

岩藏　ヤア、こまご事吐かさばいつその事、うぬから先きへ。

浪九　オヽ、疊んでしまへ。

　　ト以前の桛を持つて打つてかゝる。太郎これを受留め、ちよつと立廻り。これより木魂、浪の音の入りし鳴り物になり、太郎、兩人を相手にタテあつて、トゞ太郎刀を拔いて打つてかゝる。これにて浪九郎岩藏一散に逃げ出す。太郎追ひ廻し、三人とも下座に入る。鳴り物打上げると、時の鐘の頭を打込み、すぐに唄淨瑠璃。

〽雨もよひ、しぐるゝ山を重ね來て、都もよその雲井なる、過ぎし寛和の昔さへ、玉の臺も何

のその。登らぬ身にし有明の、月を友なる旅の空。

ト此うち時の鐘、木魂をあしらひ、よき時分、花道より、鳥羽の大臣、有髪の僧、鼠色の麻衣、木綿の股引き、足駄にて、蔦の搦みし杖を突き、行者の拵へよろしく、出て來り、花道にとまり、思ひ入れ。唄淨瑠璃一ぱいに切れる。

鳥羽「說きおける言の葉しげき中にしも、まことの法の花ぞ色濃き」……ア、一たび人臣の位を極めし身ながらも、その身の不淨をおもんみて、早くも浮世を遁れんと、名を蓮華坊と改め、五百戒を心に保ち、或る夜ひそかに大館を忍び出で、卽ち沙門の身となれば、今は心も吉野の行尊、役の優婆塞のおとぞ懷かしき。ア、思へば富貴も浮べる雲。悟れば心外無一物。ハテ、樂しき法の教へぢやなア。

〽ふみも習はぬ道もせを、わたる御法の高足駄、名にし逢ふ瀨の片原に、しばし休らひをられける。

トこの文句一ぱいに、鳥羽の大臣舞臺へ來る。唄淨瑠璃切れると、薄ドロ〳〵、トヒヨになり、前幕の怪鳥二羽飛び來る。これに連れて、小鳥大分飛び來る。此うち怪鳥は日覆ひへ舞ひ上がる。殘りの小鳥は上手の塚の上へ飛び行くと、忽ち羽を縮め、ばら〳〵と落ちて死ぬ。この途端に煙硝火立つ。鳥羽



の大臣これに目を附ける。薄ドロ〳〵やんで、矢張り木魂、時の鐘、かすめて浪の音。

鳥羽 ハテ、心得ぬ、小鳥の振舞ひ。

トあたりを見廻し、自然石を見て思ひ入れ

ムウ。爰は紀の國逢瀬の濱。この古跡こそその昔、吉備大臣入唐のその砌り、金毛九尾白面の、年經る妖狐わが朝へ、渡りし事を悟り知り、即ちこの所の地中へ封じ、名づけてこれを狐塚と稱す。狐念凝つて空舞ふ鳥、地を走る獸まで、この石に觸れ近附けば、落命なすと聞きつるが、安部の泰親奏したる、これなる一卷。

ト思ひ入れあつて、懷中より結構なる一卷を出し

これぞ正にもろ〳〵の、相を記せしその中に、天竺にては華陽夫人、芙蓉の面も惡女の相、我が朝にては小野の小町、容顏美麗にありながら、即ち凡人の相を現はす。予も如何なる業因にや、一たび人臣の位を極めたれども、その相の賤しきを知りしゆゑ、直ちに任を辭し、遁世なしてあらゆる靈場、巡行なさんず志し。この一卷を所持なせしも、難苦行の心の戒め。さるにてもこの毒石、永劫がその間、浮まん便りを失へり。草木國土悉皆成佛とあるからは、この石も亦成佛せん事疑ひもなし。今、敎諭して、佛果を得させん。

トこれよりのゝつとになり、鳥羽院珠數を持つて石に向ひ

汝元來頑石頭、その性は善。諦聽せよ。善惡不二、迷悟一致なり。この惡靈いづれの所よりか起れる。早く狐念を離散して、速かに成佛を遂げよ。

ト杖を上げて石を打つと、大ドロ〳〵になり、以前の怪鳥舞ひ下がり、塚の中へ入ると、焰硝火パッと立つ。この途端に鳥羽大臣、タヂ〳〵となつて撞となる。ドロ〳〵かすめて、大薩摩の淨瑠璃になる。

大薩摩〽それ梨花海棠の雨を帶び、妖冶の姿も消え失せて、今は果敢なき石魂の、忽ち魔魅の風につれ、怪しき華陽の朧影、ゐんくわいとして佇みたり。

ト此うちよき時分、又大ドロ〳〵になり、右の塚左右へパッタリと割れる。この中に埋めたる瓶あつて、仕掛けにてその中より本水の泡を吹出し、次第に吹上げる。これにて瓶の外へ溢れ出る。トゞこの池の中より、華陽夫人の靈魂、髮を亂し、白き好みの怪しき衣を着たる拵へ、よろしく出る。よき程に淨瑠璃切れる。

華陽　そも我れこそは天地の、開け初めたる時よりも、中有の間に縱横なし、儒佛を魔界に引入れんと思ひし事も水の泡。一度怨魂の石となり、迷ひの雲の深くして、又ぞろ惡趣に誘なはれしも、未た業因盡きざるか。アラ、恥かしき身の、有樣ぢやなア。

ト思ひ入れ。このうち薄ドロ〳〵にて、鳥羽の大臣心附き、起き返り

鳥羽 ハテ、心得ぬ。夢ともなく、現とも覺えず。さては放心なしたるか。

トあたりを見廻し、華陽夫人の靈魂を見て

ムウ。怪しげなる婦人の樣。もしや障碍の

ト思ひ入れ。

華陽 只一陣の魔風につれ、遙かの遠流もいつしかに、思はず爰へ流れ來て、してこの國は

鳥羽 大千世界大日本。

華陽 それぞ幸ひ。唐と日本と隔つれど、人を助くる出家の御身。何卒妾を、助けてたべ。

鳥羽 イヽヤ、五戒を保つこの行者。女は穢れ。

華陽 すりやどのやうに願うても

鳥羽 便り求めて、少しも早う本國へ

ト行かうとする。華陽夫人の靈魂、「モシ、」と袖を押へて思ひ入れ。大ドロ〳〵になり、鳥羽の大臣、タヂ〳〵と引戻されて、思ひ入れ。この時、持ちたる一卷、思はず開かれる。大臣キツとなつて

これは。

ト思ひ入れ。大薩摩淨瑠璃。

大薩摩〽池の藻屑に引かへて、玉を欺むく粧ひは、あたりも輝く風情なり。

ト大ドロ〱にて、華陽夫人の靈魂のおどろの髮、仕掛けにて美しき黑の下げ髮に變り、着附けは引拔きにて、白綾の唐女、振り袖衣裳、緋の袴の姿になり、鳥羽大臣を留める。兩人よろしく、キッと見得。これより三味線入り、誂への鳴り物になり、矢張り薄ドロ〱、鳥羽大臣、開きし巾の畫と、靈魂を見比べて、思ひ入れ。

鳥羽　斑足王の寵愛たる、華陽夫人の面差しに、寸分たがはぬ夫人の容貌。

華陽　その華陽とは聞き及ぶ、惡意を含みし魔魅の妖婦。その相好に妾が面、その儘なりとは恥かしい。世の人々の口の端に、かゝるも妾が身の穢れ。今は便りも無き身といひ、思へば果敢なき妾が業因へ生き長らへて何かせん。せめてはこれなる潮に沈み、海の藻屑と消え果てん。さうぢや。

ト舞臺の浪板へかゝる。鳥羽大臣留めて

鳥羽　不便なる其方が心根、殊に容顏麗はしき、年さへ未だ老けずして、水に溺れて死なんとは、あまりといへば

ト華陽夫人をキッと引留める。

華陽　イヽヤ、生きて憂き恥晒さんより、せめては消えて死を遂げん。こゝ放してたびたまへ。
鳥羽　イヤ、死は易うして、生は難し。未だその身に天命を得ず。死を急ぐこと、本意にあらんや。
華陽　さはいへ國家を亂したる、妖婦に似たるその上に、國を隔てし上からは、誰れあつて自らに、情けを加ふる者あらず。
鳥羽　イヽヤ、見捨しぬ。殺しはせぬ。
華陽　エ。

ト思ひ入れ。

鳥羽　見捨て難きは神國の、卽ち掟。
華陽　すりやアノ、妾が行く末を

ト此うち鳥羽大臣、華陽夫人の顏を、よく〳〵見て、又一巻と見合せ、思ひ入れ。

鳥羽　麗なる相とはいひながら、實にうるはしき容貌の、芙蓉の露を含める有樣。

ト華陽夫人の姿に見惚れ、思ひ入れ。

華陽　でも貴僧には行者の御身。とても妾が便りには
鳥羽　イヽヤ、その艶色に、心の迷ひ。

華陽　エヽ。

ト思ひ入れ。

鳥羽　コレ。

ト華陽夫人へ立ち寄る。薄ドロ〳〵にて、この時、前の流れへ、白き龜出で、あたりを舞ひあるく。
兩人これを見て、思ひ入れ。合ひ方變る。

これなる流れへ、怪しき白龜、現はれ出でしは、もしや聞きつる鼈なるか。

華陽　日本にては伊邪那岐の、男女の交りしたまひし、戀の起りは鶺鴒の

鳥羽　戀教へ鳥ならねども、折を幸ひ、この白龜。

ト華陽夫人、白龜を取上げる。

華陽　翼重ぬる思ひ羽の、この鴛鴦といつしかに

トきつと思ひ入れ。大ドロ〳〵にて、この龜、仕掛けにて二羽の鴛鴦と化し、トヒヨになつて空へ舞ひ上がる。

鳥羽　ヤヽ、今浮みたる龜の、忽ち、番ひの鴛鴦と姿を化して、アレ〳〵〳〵、翼並べて舞ひ行く有樣。

華陽　これぞ御身の妹脊事、番ひ離れぬ雌雄の鳥。

鳥羽　予も今よりは其方が側、離れぬ誓ひは

ト思ひ入れあつて、我が足を見て

土を踏まざる願望の、行を破つて

ト穿きたる足駄を脱ぎ捨てゝ、華陽夫人へ寄り添ふ。この時、上の方へ金剛太郎、白丁高くゝりの形にて先に立ち、續いて烏帽子、白丁の仕丁大勢、バラ〳〵と出かゝり、扣へゐる。

華陽　すりや、御身には妾ゆゑ

鳥羽　出家堅固も何のその。破戒のしるし。

ト持つたる珠數を引き切る。

華陽　エヽ。

ト思ひ入れ。

鳥羽　「玉の緒の、解くる心も見えなくに。

華陽　われのみなどか、思ひみだるゝ。」

鳥羽　再び任に立返れば、予は人臣の極みたる

華陽　こゝよなき威勢の大臣の君。

鳥羽　只何事も心の儘。

華陽　もし天道に叶ひなば

鳥羽　御身を麿が内子とせん。

華陽　エヽ。返す〳〵も

鳥羽　イザ、大館へ

ト華陽夫人の手を取る。

金剛　大臣の還御。

仕丁　ハヽア。

ト皆々平伏する。

華陽　モシ。

ト思ひ入れ。鳥羽大臣振返り、華陽夫人を見て

鳥羽　ても、あてやかな

トこれにて華陽夫人、装束の袖を顔へ當て、につこりと思ひ入れ。この途端にチョンの木の頭。大臣も思ひ入れあつて

容貌ちやなア。

ト唐樂、下り葉になり、双方引ッ張りの見得よろしく、ひやうし

幕

五建目　楊枝村隱れ家の場

役名　鷲塚金藤次秀明。梓巫女、眞弓。伊豆の平馬。齊坊主、西念。庄屋、出來作、鹿島三郎義連。賤の女、お磯。木樵、和田四郎。播磨守安部泰親。妹、お露。お柳の靈魂。那須八郎宗重。横曾根平太郎。

本舞臺三間の間、常足の二重。向う鼠壁、暖簾口、これに燈明を照らし、上の方、反古貼りの障子屋體、藁葺きの軒口を見せ、いつもの處に門口。爰にお柳、お露、序幕の形にて、西念、道心坊主にて百萬遍の音頭を取つてゐる。庄屋出來作、百姓大勢、百萬遍を繰つてゐる。すべて紀州楊枝村隱れ家の體。百萬遍、てんつゝにて幕明く。

西念　南無阿彌だん佛。

皆々　南無阿彌だん佛。

西念　願以此功德

ト鉦を打ち

平等施一切、同發菩提心、往生安樂國。

りう　これは〳〵、皆さん、御苦勞でござりました。サア、お茶を一つおあがりなされませ。

皆々　イヤ、構はつしやるな〳〵。

ト皆々よろしく住ひ

時に、今日の念佛は、何の志しでござる。

りう　今日の佛樣は、兄さんや、わたしらが爲には實の父さんの、七回忌でござりまするわいなア。

西念　ハヽア、爰の親仁どのは、もう七年になりますか。此やうに兄弟が寄つて、法事をするとは、仕合せな佛樣だ。茶菓子まで叮嚀に、さぞ忙がしうござりませうな。

つゆ　何を致しまするも女の手で

西念　平太郎どのは、どこへござりました。

りう　只今寺參りから歸られまして、奥へ行つて寢てゞござんす。

出來　平太郎どのも忙しないゆゑ、くたびれたのも尤もでござる。

西念　この法事で忙がしいのに、お柳どの、其方はなぜ手傳ひませぬ。

つゆ　サア、聞いて下さんせ。姉さんはこの間、山へ仕事に行かしやんして、何やらやつさもつさがあつて、その場の事はそれぎりに、内へ歸りなさんすと、その日から、今まで仕つけた百姓業も、一向に出來ませぬわいなア。

西念　ハテ、そりや困つたもの。お柳どの、こなたは心持ちでも惡うござるか。

りう　イエ〳〵、わたしや何ともござりませぬ。

出來　それに又、仕つけた業の出來ぬといふは

皆々　どういふ譯でござるな。

りう　サア、それはな。

出來　アヽ、聞えた。爰の内の小さい子を連れた御浪人。

西念　お柳どのもやもめの事なり、内談で乳繰り合ひ、始終は浪人どのゝ、お内儀になる心で、百姓仕事をさしやらぬか。

りう　なか〳〵其やうな譯ではござりませぬ。奧にお出でなさるゝは、わたしが爲には大切なお主様。

仔細あつて御浪人。

つゆ　その上折わるい瘧の病ひ、早う御本復遊ばして、元の本地へ御歸參あるやう、明暮れ願うて居りますわいなア。

出來　こなた衆の爲には、大切な主筋といふ、して御浪人どのは何國の生れで、名は何といふ。

柳露　サア、そのお名は

出來　云はれませぬか。その名は滅多に云はれまい。

西念　包むに於ては、いよ〳〵それと

出來　目を附け置いた御詮議の、那須の八郎宗重、捕へて出せば褒美の金。

西念　必ずぬかるな。

皆々　合點だ。

ト暖簾口へ行きにかゝる。お露支へるを振り切り、奥へ踏み込むと、奥より横曾根平太郎、木綿やつし百姓の形にて、出來作が手先きを捉へ、ツカ〳〵と出てくる。お柳、お露見て

柳露　ヤア、お前は兄さん。

皆々　平太郎どの。

平太　夏の夜は、蚊を疵にして五百兩と、晋子其角が發句にあらねど、この間からの疲れやら、ツイとろとろとうたゝ寢の、枕の許へ泥臑を、踏ん込んだ奴は、どこの猿松だ。

出來　イヽヤ、おらァ猿松ぢやァねえ庄屋の出來作。それにわりやァ手向ひして、詮議者の肩を持つか。

平太　オヽ、成る程、この平太郎は御詮議者の肩を持つ。見れば皆同じ村の衆。女子と侮つて、法事をかこつけ詮議呼ばはり、いかにも御詮議者を隱まつた。ハテ、何が怖くて隱すものか。奥にござるはわしが御主人、花も實もある味のよい、しかも盛りで秋のなす、八郎様を隱まつた。今日の澁茶の口取りに、一切れ位ゐは振舞ひませう。ゆるりとそれで、賞翫さつせえ。

ト出來作を見事に投げて、思ひ入れ。

皆々　そんならいよ〳〵、あの浪人。

平太　何ぞ用なら、おれが聞かうか。

出來　ナニサ、それには及ばぬが、ちよつとお近附きにならうと思うて

平太　そんなら晩に、ゆるりとござれ。

皆々　とは云ふものゝ

平太　どなたもようござりました。

ト皆々を門口へ突き出し、戸をピッシヤリ。西念見て

西念　成る程、平太郎どのは、以前は侍ひと聞きましたが

皆々　萬事の事に、天晴れ〳〵。

出來　皆の衆、今日の佛はよい子持ち。惣領は平太郎どの、その妹がお柳どの、末の妹がお露坊。

この三人と掛けて、化粧道具と解く。

皆々　して、その心は

出來　ハテ、よいきやうだいぢやといふ事サ。

皆々　何を云はッしやる。サア〳〵、ござりませ。

トてんつゝになり、念佛太鼓にて五人とも花道へかゝる。右の鳴り物にて向うより、梓巫女眞弓、口寄せの拵へにて、竹の笠を冠り、風呂敷包みを持ち、お磯、田舎娘の形にて、出て來り、皆々と行き合ひ

これは新田のお磯女郎、どこへござつた。

いそ　庄屋樣初めどなたも、お揃ひでござりますなア。

西念　わしも當月は、精靈會の佛まつりゆゑ

眞弓　いちこのわたしも、勸進しながら參りましたら、此お方が仰しやるには、當村の平太郎樣とやら
いふお内に、法事がござりますと聞きましたゆゑ、連れ立つて參りました。

出來　それは幸ひ、今も今とて佛話しで、長座しました。

眞弓　左樣なら、もうお歸りでござりまするか。

皆々　こなた衆も早くござつて

眞弓　回向して參りませう。

ト皆々捨ぜりふあつて、五人は向うへ入る。眞弓とお磯は舞臺へ來り

いそ　お許しなされませ。今日はさぞお取込みでござりませう。

柳露　これは〳〵、新田のお磯さん

平太　ようござりました。あの女中樣は

眞弓　ハイ、私しはこの前、村方へ折々參りました、梓巫女でござります。

りう　それは幸ひ、今日はこちの内に、志しの事もあれば、こなたへお入りなされませ。

眞弓　左樣なら御免なされませ。

ト兩人内へ入り、思ひ入れ。

平太　妹、お茶でも上げぬか。

いそ　必ずお構ひなされまするな。モシ、平太郎樣え、今日の法事はお前の親御樣の、七回忌の事なれば、この巫女さんがござんしたこそ幸ひ、今日の佛樣を、口に寄せてはどうでござります。

りう　成る程、日頃から戀しと思ふ、父さんの事なれば、末々の便りも聞きたく、わたしらが無事な事もお聞かせ申したら

つゆ　この上の孝行は、ござんすまいわいなア。

眞弓　イヤモウ、今日の佛樣の事は、上方でも話しに聞いてをりました。この平太郎樣とやらの親御樣、わたしも今では遁れぬ者、御法事を聞いて、わざ／＼參りましたわいなア。

平太　イカサマ、一家一門此やうに揃つて、親の追善をするといふも、全く大江戸八百八町のお取立てゆゑの事。斯樣な有り難い事はない……それにつけても、ちよつと何れも樣へ。

ト　これにて皆々座を直し、尾上松緑七回忌追善口上、よろしくあつて

いそ　ヤレ／＼、殘暑の時分、御苦勞でござりました。サア、お茶を一と口。

ト　本の湯を出す。平太郎口をしめす。

りう　ほんにマア、これでは佛樣も、大抵な喜びではござんすまい。喜び次手に、梓の巫女さんを賴ん

で、いかさま口寄せ、ようござんせう。

平太 併しながら、親仁を口に寄せたら、さぞおれを不器用者と叱るであらう。こりやアよしにしませう。

つゆ たとへ役に立たずと叱らしやんしても、矢ツ張りお前や、わたしどもの爲ぢやわいなア。

平太 成る程、それもさうかえ。併しながら、梓にかゝる佛樣の

眞弓 座の下がると申すはひがこと。血筋のお方が御回向なされ、手向けの水が、何より御功德でござりまする。

いそ 其やうな事を聞いたゆゑ、お前を連れて參りました。わしも後で爰のお内を借り、母さんを口寄せませう。

平太 そんならいちこさん、御苦勞ながらお賴み申しまする。

眞弓 ハイ〳〵畏りました。

ト よき所へ住ひ、風呂敷を取出す。

りう コレ〳〵妹、末の子は親の不便が深いとあれば、其方水向けに

つゆ そんならわたしが……アイ〳〵、合點でござんす。

ト有合ふ茶碗へ水を汲み、臺へ載せ、佛壇の樒の葉を取つて水を向ける。此うち眞弓は包みの中より、梓弓を取出し、小さき棒にて吊して、目を閉ぢ、こなしあつて

眞弓　天清淨、地清淨、內外清淨六根清淨、天の社、地の神、家內には井の神、庭の神、別して竈の神、その外日本六十餘州、大小の神祇八百萬神十善四庄の御神、しろしめ給へと申す。梓の巫女の寄せ口に、マ寄りくるワ〳〵。露どの〻手向けの水、血筋の緣とて忝い。よくこそ梓にかけて下された。

りう　血筋の妹が手向けの水、禮を仰しやるには及びませぬ。南無阿彌陀佛々々々々々。

平太　モシ、親仁樣、お懷かしうござります。この世にござる時は、ろく〳〵孝行も盡しませぬ。只今までの不孝の罪、御免なされて下さりませ。

いそ　優しい兄弟衆の其お詞、他人のわたしでさへ涙がこぼれるもの、親御樣はさぞ嬉しうござんせうわいな。

つゆ　この後は兄さんはじめ、わたしらも、命日忌日は弔ひます。後の事をお案じなされますなえ。

四人　南無阿彌陀佛々々々々々。

眞弓　血筋と思へばこそ、露どの、其やうに云うてたもるが、云はれて今は懷かしい。戀しき人に數の

枕はかはさねど、千年も

ト眼を閉ぢて現のやうになる。お柳へ乘り移る思ひ入れ。

りう　男女と形は變れども、親子となればこれ妹、手向けの梓を借り、寄りくる家は親にもあらず、露の兄弟。

三人　ヤヽ、なんと。

ト　お柳を見て思ひ入れ。薄ドロ〱、寢鳥、一つ鉦の入りたる凄き合ひ方になり、ポツと煙硝火燃える。皆々うつとりとなり、お柳はスツクと立つてこなし。この時平太郎現のやうなる思ひ入れにて、お柳を見て思ひ入れ。

平太　合點の行かぬお柳の素振り。ハヽア聞えた。日頃から懷かしいと思ふ親仁樣、未來の便りを聞いたゆゑ、嬉しいと思うての事か。そりやァおぬしばかりでなく、おれとても同じ事。あまり其やうに思つて、煩つてくりやんなよ。

りう　流石は肉身分けし兄の詞、知らぬ事とて妹を、憐れみたまふ御心底、あまりこの身に

平太　ヤ。

りう　猶この上もお主へ忠義怠りなく、紛失なしたる御鏡の在所を尋ね、御主人もろとも歸參なし、家

名相續なしたまへ。

平太　いふにや及ぶ。忠孝に私しなく、心は千々に碎けども、失せさせ給ひし八手の御鏡、今に行くへ知れず、主人をはじめ我れとても、日蔭にひそむ今の窮迫。

りう　その儀は少しも氣遣ひあるな。今日思はずも逆徒のやから、この家へ來る事あるべし。これによつて詮議せば、寶の手がゝり疑ひなし。

平太　すりや此ところへ、御鏡所持なす者來るとや。エヽ忝い。主人の御運の開く瑞相。さりながら、心得ざる妹が一言、通力自在もあらずして、何故それを知つたるぞ。

りう　愚かな事をのたまふものかな。我れはこの世の者ならず。

平太　ヤヽ、なんと。

りう　梓にかけられ、今更語るも恥かしながら、恐れ多い、御主人那須の八郎樣、二世と語らふ女夫坂木樵が爲に思はずも、この世を去りし、わたしや妹の

ト云ひさして、思ひ入れ。

平太　ヤア、最前から合點ゆかざるお柳の有樣、狐狸の見入れる物の怪か。何にもせよ、心を附けよ。

ト水向けの茶碗を打ち返す。これにてドロ〳〵打ち上げる。煙硝火もパッと消える。皆々心附きホッ

と思ひ入れ。平太郎こなしあつて

平太　お柳、心が附いたか。

りう　モシ、兄さん、わたしやどうぞ致したかえ。

平太　何だか知らねえが、おれも夢現のやうに覺えたが、今おぬしは女夫坂で、木樵の爲に殺されたと囈言のやうに

りう　エ。わたしのその事を……兄さんとした事が。其やうな事を云うてよいものかいなァ。

平太　それでも今、現のやうに

りう　アレ、又かいな。緣起のわるい、鶴龜々々。

ト思ひ入れ。

つゆ　成る程、お前方が云はしやんす通り、わたしが今水向けすると其まゝ、我れ知らず氣がうつとり。

眞弓　施主方のお前さん方は、御尤もでござんすが、わたしは商賣でありながら、いつの間にやらツイとろ〳〵。

つゆ　お前がとろ〳〵としなさんしたのは、よその惡性男が、この巫女さんの心意氣を聞かうため、お前の生き口を寄せたのかも知れぬわいな。

りう　ほんに、それ〳〵、まだ年若な女中さん、どこぞにお樂しみがあらうも知れぬ。巫女さんの笠の直しやうで、色氣のあると、無いとは、知れるとの事。

　　ト お露お磯、眞弓の笠を見て

つゆ　モシ〳〵、この笠が仰向けてござんすぞえ。

眞弓　イヤ、これは面目次第もござりませぬ。

平太　そいつはおれも氣が惡くなつたわえ。道理こそ年若な巫女ゆゑ、兎角色の世の中だなア。今も今とて妹が、主人と枕を交せしと、問はず語りにツイうつかり……サア、うつかりせずと巫女どのに、お初穗でも上げぬか。

眞弓　なんの、それには及びませぬ。

　　ト 思ひ入れ。この時、向うより、百姓一人走り出て來り

百姓　平太郎どの、内にか。今こゝへ鷲塚金藤次樣がおいでなさる。お座敷を掃除して、待つてござれござれ。

りう　何と云はしやんす。金藤次づらが此ところに

平太　來るも一つは佛の導き。

りう　寶詮議の、よき手がかり。

平太　お露は奥で何かの用意。二人の女中は暫く爰を

眞磯　畏まりました。

柳露　左様なら、皆さん。

眞磯　これはお報謝になりました。

ト念佛太鼓、てんつゝになり、眞弓とお磯に百姓附いて向うへ入る。お露は奥へ入る。平太郎はお柳に囁き、そこら方附けてゐる。時の鐘、誂への合ひ方になり、向うより以前の出來作を先きに、鷲塚金藤次、薄肉、剃り下げ鬘、上下衣裳大小。あとより伊豆の平馬、絆纏股引き、大小の捕り手四人を召連れ　網乘り物一挺、これを警護して出で來り

出來　恐れながら申し上げまする。あれに見えまするは、横曾根平太郎の住家にござります。

金藤　すりや、あれなる茅屋が、平太郎の隱れ家とな。彼れら主從は元來京家の侍ひ、心柄とはいひながら、兄泰親もろとも天下の囚人。出口々々をさし固め、取逃がさぬやう用意いたせ。

平馬　その儀は少しもお氣遣ひなされまするな。泰親めは斯くの如く網乘り物。とても叶はぬ網の魚。併し那須の八郎主從は

金藤　風をくらふも計られず。片時も早く案内いたせ。

　　ト右の鳴り物にて舞臺に來り、駕籠をよき所へ直し

出來　平太郎どの、都よりお役人様がお出でなされた。

平太　先刻御案内がござりましたゆゑ、お待ち申して居りました。むさくろしうとも、まづ〳〵あれへお通り下さりませう。

金藤　某は大內記錄所の使者。罷り通る。

　　ト上座へ通る。お柳見て

りう　ほんにマア、いつの間にやら金藤次樣、形も立派なお侍ひ。さりながら、相も變らず髭むしやむしやと、あのマア憎い顏わいなア。

平太　これはしたり、そりや何を申す。金藤次樣は記錄所よりのお使者、殊には京家のお歷々、滅多な事を云ふまいぞ。して今日のお使者の趣き、どのやうな事でござります。

金藤　默りをらう。わいらに申し聞したとて、馬の耳に風とやら、下司下郎の知つた事ではない。すつ込んでをらう。併しながら云うて聞せたいは、コレお柳、おぬしが都にゐるうちから、いろ〳〵云へど、身共が申す事、一向に聞き入れぬが、今主從爰と聞いたゆゑ、そもじの顏が見たさに、

今日の使者を申し受けて、わざ〳〵參つた心中男、まんざら憎うもあるまいがナ。是非とも今日は、身共が返事を

りう　成る程、その思し召しは有難う存じますが、どうぞその事ばかりは

金藤　成らぬといふは、云ひ交した男へ立たぬといふのか。

りう　云ひ交した男とはえ。

金藤　知るまいと思ふか。現在主人の那須八郎と、不義ひろいだであらうがな。

りう　モシ、滅多な事を。

金藤　隱しても隱されぬ。女好きなる那須の八郎、八手の御鏡宿直の折から、田熊法眼が娘、藻女と忍び合ひ、乳繰り合つてゐるうちに、預りの御鏡紛失（脫文？）しぶといお柳め。使者の樣子を聞いたら、その一言で今に後悔。よし〳〵、この上は厄病神で敵とせう。して、那須の八郎は

平太　主人八郎は、この節瘧りの病ひにて、打臥しをりますれば、たとへ大臣の使ひ、大命たりとも、お受け致すは思ひもよらず。

金藤　イヽヤ、その手は食はぬ。假病をかまへ、期を延すとは卑怯な八郎。者ども、踏んごんで、引摺り出せ。

皆々　心得ました。

ト立ちかゝる。

平太　モシ、滅多な事を

皆々　何を此奴が

ト平馬出來作捕り手四人、平太郎を突き退け、上手の障子屋體へかゝる。物音して、皆々見事に反つて落ちる。途端に障子引拔くと、内に那須の八郎、浪人の拵へ、緑丸を圍ひ、刀をかまへ、キッと思ひ入れ。

皆々　那須の八郎、手向ひか。

八郎　浪人しても那須の八郎、これなる一間は城廓同然、慮外いたさば、手は見せぬぞ。

金藤　ヤア、緩怠なるその一言、大館より内意を蒙むる我れ〳〵に、敵對なさば、違命の罪だぞ。

八郎　全く以て大臣へ對し、刃向ふ所存は無けれども、理不盡なる各〻の計らひ、何故あつて此狼藉。

出來　ヤア、とぼけまい御浪人。科はその身に覺えがある筈。

金藤　大臣の仰せ、一通り申し聞さん、その前に、汝等に見せるものがある。ソレ、囚人を引出せ。

平馬　畏りました……科人、出ませい。

ト時の鐘、合ひ方になり、網乘り物の中より、安部の泰親、惣髪刺貫、丸括けの形、小手を免したる繩附きにて出る。此うち捕り手は下手へ入る。平馬は泰親をよき所へ引据ゑ下にをらう。

ト八郎平太郎、お柳。泰親を見て

八郎　ヤア、あなたは兄者人、泰親樣。

平柳　思ひがけないこの繩目。

泰親　方々の不審尤もなれど、某し忠心に私しなく、日毎の參入怠らずと雖も、お側には佞人あつて、罪無き我れを斷くの仕合せ。

平太　腑甲斐なき其お心、潔白なる事ならば

八郎　何故上聞なされませぬ。

金藤　その詫び事の上聞も、ならぬ證據は泰親も、我が身を初めこの繩目。

八郎　して、その仔細は。

金藤　この節大臣の御惱み、日毎に重らせらるゝゆゑ、御祈りに用ゆべき八手の御鏡は、弟八郎が紛失させたる大惡人。まつた兄の泰親は、鳥羽の大臣の御寵愛ありし、玉藻の前を、畜生の相ありと上

聞せしより、以ての外のお怒りにて、今この態。八郎とてもまッその如く、御鏡の行くへ知れねば、泰親もろとも命の瀬戸。

りう　思ひがけなき御兄弟方の御難儀。モシ、どうぞ仕樣は、ござりませぬかいなァ。

泰親　某しが家は、代々陰陽師の頭たるゆゑ、萬事の善惡、上聞に及ぶと雖も、一つとして粗忽なかりしが、合點の行かぬ此度のお怒り。これといふのも大臣には、佛門に入り給ひ、諸國行脚の折から、唐土より熊野浦に着岸せし、女を供して歸らせられ、玉藻の前といふ名を下され、日夜の御寵愛淺からず、淫酒に耽り、俄かに御心猛々しくならせられしも、御傍らに彼の婦人あるゆゑ。これを思へば貴賤に限らず、愼しむべきは色情の道。

ト思はずお柳の顏を見て

ヤヽ、これなるお柳が人相は、人界ならぬ異形の有樣。

ト思ひ入れ。お柳これを聞き、ハッと顏を背け

りう　アモシ、滅多な事を。

泰親　サア、云ふに云はれぬ浮世の習ひ。陰陽師身の上知らずと、斯く成り果てし我れ〳〵兄弟。

平太　いつ會稽の春にあひ、お家に花の咲く事やら

八郎　知れざる鏡の行くへといひ

金藤　われもお柳が色香に迷ひ、べん〳〵だらりも大臣へ不忠。

泰親　何と申す。弟八郎はこれなるお柳と不義いたし、それゆゑ寶詮議も怠りしとや。

八郎　なか〳〵以て私しどもは

出來　イヤ、さうは云はせねえ。一つ村に居るこの庄屋が、樣子は殘らず知り拔いた。二人が不義は、おれが證人。

泰親　すりや、其方は不義に心を蕩かされ、寶詮議を怠りて、もしや外から御鏡差上げなば、君への申し譯は如何いたすぞ。

八郎　サ、それは

泰親　但し云ひ譯あるか。

八郎　サ、それは。

トつかへる。泰親は八郎が襟髮をとらへ

泰親　チエヽ、おのれはなア。正しく御鏡紛失も、大館の侍女たる藻女と、不義ゆゑその身の越度に落ち、家來の妹と不義を働く人非人め。それも尤も、其方はじめこの小兒も、戌の年月日時揃ひ

し生れ。こゝな畜生め。

金藤　すりや、八郎親子は戌の年度揃ひしとや。ハテナア。

泰親　いづれもの手前。面目もござらぬ。この上は、身が手に掛けて。

ト八郎の刀を取つて立ちかゝる。平太郎、お柳とめて

平太　アイヤ、憚りながら御主人八郎樣に、不義はごさりませぬぞ。

泰親　ヤ、なんと。

平太　田熊の息女藻女樣の事は、若氣の至りと申せども、申さば戀にやもめの事、御鏡紛失いたせしゆゑ、子までなしたる仲なれど、あかぬ別れも上への恐れ。その上、相手の藻女樣、この程行くへ知れざる沙汰。さすればこれを咎むに足らず。まツた妹のお柳の事は、現在兄の平太郎、緣者の證據と申されんが、鏡にかけて不義でござらぬ。

金藤　コリヤ、平太郎、これほど知れた不義者を

平太　その不義者こそ、外にござる。

金藤　ナニ、不義者が外にある。して、その不義者は、何國の、誰れだ。

平太　外でもござらぬ、御自分樣。

金藤　ヤ。

平太　證據は卽ちさいつ頃、お柳が都に在りし時、懸想して、送つたるこの短册。
「風になびく、その枝にこそ大鳥の
　　せめて一夜は、塒かりなん」。
風に靡くは柳の枝、柳は卽ち妹お柳、塒かりなん大鳥は、卽ち鷲塚金藤次樣、流石京家のお侍ひ、顏に似合はぬ手爾乎波の戀歌。押附け戀慕のこの短册。それが主人の不義でない、慥かな證據。これでも御批判ござるかな。

金藤　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

平太　こゝが卽ち思案の外。左樣なものではござるまいか。

金藤　よいワ。不義の批判は外道ゆゑ、此まゝにも致さうが、那須の八郎は御鏡を失ふ大罪人。

泰親　罪もいや增す弟八郎、餘人の手にかゝらんより、いつそ身共が
　　ト思ひ入れ。

金藤　待たつせえ、泰親。那須の八郎は天下の科人、こなたの自由にはなりますまい。

泰親　ぢやと申して。

平馬　ハテ、成敗いたすは金藤次様。滅多な事を仰しやるな。違命の罪だぞ。成敗い

金藤　囚人を生かさうと、殺さうと、身共が心一つ。外の奴らが指でもさゝば、

たさぬその先に、どれ、しやツ面を

ト八郎を引附け

成る程、なま白けた面骨だ。道理こそ、そこらあたりのめいた犬が、びろ〳〵するわえ。今聞けば

うぬら親子は戌の年度揃ひしとの事。道理こそ、寶詮議の心も無く、尻尾を振つてめいた犬に、

じやらくらする小胸の悪さ。さかりの附いた、アノこゝな、畜生侍ひめ。

ト扇にて打ち据ゑる。八郎無念の思ひ入れ。

八郎　この身に越度あるゆゑに、ヂツと堪へてゐればこそ

泰親　あまりなるこの打擲。

金藤　何がなんと。

八泰　おのれは、チエヽ。

ト立ちかゝるを、平太郎、両人を押へて

平太　コレ、必ずともに。

八泰　ぢやと申して。

平太　ハテ、あなたは御存じあるまいが、最前梓の折から不思議に妹、現のうちに、寶詮議の手がかりに、この家へ來る逆意の輩。

皆々　なんと。

平太　御鏡首尾よう取戻し、御歸參になるそれまでは、大切な御身ではござりませぬか。短慮は功をなさずの譬へ、ヂッと辛抱なされませ。

ト思ひ入れ。金藤次此うちギックリと思ひ入れ。

八郎　何か樣子は知らねども、詮議の手がかり、あると申せば

金藤　ヤア、なまぬるい詮議呼はり。それまで、べん〳〵だらりと待たれるものか。いつそこの場で泰親兄弟。

泰親　仰せにや及ぶべき。斯くなる上は兼ねての覺悟。

八郎　人手にかゝり死なんより、いつその事に

ト兩人とも腹を切らうとする。

平柳　モシ、必ずともに
　　トとめるを、金藤次兩人を突き退け
金藤　流石は八郎、よい覺悟。身共が介錯。
　　ト刀を振り上げる。お柳は金藤次に縋り
りう　モシ、どうぞ暫しの御猶豫を
金藤　頼みとあれば、聞き屆けてくれうが、そんなら身共が頼みも叶へて。
りう　アレしつこい。其やうな事は
金藤　知らぬとあれば、二人が首を
　　ト思ひ入れ。平太郎見て
平太　アイヤ、憚りながら金藤次樣、その戀私しが、お執持ち致しませう。
金藤　何と申す。すりや、其方がこの戀を
平太　お執持ち致し、あなたの望みを叶へませう。
りう　モシ兄さん、滅多な事を
平太　ハテ、おぬしが心たつた一つで、お二人樣の御難儀も、詮議の日延べも妹が胸。立てろばかりが

貞女ではない。昔よりも例しある、貞女を捨てゝ貞女を立てる。ナ、サア、こゝの道理を聞きわけて、金藤次樣へ色よい返事を。合點がいたか。

ト思ひ入れにて呑みこませる。お柳呑みこみ

りう　成る程、お前の云はしやんす通り、貞女を破つて貞女を立てる……いかにも、あなたのお心に隨ひませう。

金藤　ヤア、そんなら身共へ

りう　色よい返事を致さずとも、一つの功を立てませう。

平太　そんならおぬしは金藤次樣へ、色よい返事は外にして、一つの功を立てるとは、そりや何事。

金藤　上へ對して一つの功より、身共は矢ツ張りおぬしが色香を

泰親　すりや、お使者には、大臣の事はお構ひなく、彼れが色香をはる〴〵と、これまで聞きにお來やつたか。

金藤　サ、それは

泰親　然らば女が申せし詞、何ゆゑ貴殿は取上げ召されぬ。

金藤　サ、それは

泰親 御返事が承りたい。

金藤 そんならお柳が詞を、聞き届けてくれうが、一つの功を立てるとは。

りう この程先の大臣樣の、日每に募る御惱み。その病根を斷ち切らば、それを一つの功となし、寶の詮議、日延べの願ひを

八郎 心得ざるお柳が一言、大臣の御惱みは、典藥が祕術を盡し、諸寺諸山にてもその祈り

泰親 それを何ぞや、女の身で、輕々しう平癒とは

金藤 餘人は格別、この金藤次は呑みこめぬ。

平馬 イカサマ、これは御尤も。女心の淺はかに、頭痛の病ひと聞いたゆゑ、鷲の看板の粉藥か、丸藥か、但し又

出來 上下揉んで腹四文、飛んだ所へ揉み下げる。女按摩の提重(?)かも知れませぬ。

りう 成る程、其やうにさみなさるも御尤も。さりながら、御惱平癒はわたしが胸に。ハテ、盜人の晝寢も、心當てのあつての事。何はともあれ私しに

金藤 申し附けてもくれうが、して、御平癒なき時は

りう お二人樣は元より、私しが命も差上げませう。

金藤　面白い。詞番ひし上からは、僞りならざるその爲に、兄平太郎は暫時人質。

八柳　ヤヽ、なんと。

平太　コレ〳〵、妹。おれが人質に行くは大事ないが、先の大臣の御惱みを安受合ひにして、もし癒らぬ時は、御主人はいふに及ばず、おぬしもおれも、命の切端。

りう　成る程、お前までが其やうに、お案じなさるは尤もなれど、その功といふは。コレ

ト囁く　平太郎思ひ入れあつて

平太　ヤヽ、すりや、あの柳の

りう　アモシ、

ト思ひ入れ。

平太　さういふ事なら聞き違ひもあるまい。そんなら今より私しは

平馬　旅宿に伴ひ、きつと糺明。

八郎　すりや其方が

泰親　平癒ござらば早速に

金藤　人質返して詮議の日延べを

泰親　もし僞るその時は
平太　重なる科ゆゑこの兄も
出來　三人四人の命が寂滅
りう　わたしが身にもかゝはるゆゑ
八郎　見事平癒を
りう　いふにや及ぶ。
金藤　然らば奥にて、泰親もろとも。
泰親　左樣ござらば、金藤次どの
りう　暫しが間御休息。
八郎　御兩所樣を案内いたせ。
平金　とはいへ、お柳を

ト平太郎、門口へ出ようとするを、八郎「コレ」と戸を締める。金藤次はお柳へ立ちかゝる。泰親隔てる。皆々思ひ入れ。チヤン、と唄になり、平太郎、平馬、出來作は向うへ、金藤次、泰親、お柳は綠丸の手を引き、奥へ入る。八郎殘り、あと合ひ方になり、こなしあつて

八郎　世の衰への端なるや、大館には佞人多く、忠臣は枯木の如く、百夜に空しきその上に、大臣には御惱の折から、兄泰親どの御祈念に、無くて叶はぬ八手の御鏡、某宿直の折から紛失ゆゑ、今の浪人。これにつけても妻藻女、子までなしたる仲なりしが、父法眼に勘當うけ、家出して行くへ知れず。便り少なきこの身の上。いかなる宿世の因縁やら、我れ〳〵親子は戌の年揃ひし生れ。最前兄泰親どの、某しを犬なりとの惡口、身にしみわたりし御教訓。何卒實詮議と思へども、折悪しき瘧の病ひ。よくも武運に盡きたるか。こりや一思案せにやならぬわえ。

ト手を組み、思案の思ひ入れ。時の鐘、合ひ方になり、向うより和田四郎、前幕の形にて斧を持ち、跡より出來作も斧を持ち、附いて出て來り、兩人花道にて小聲になり

出來　和田四郎どの、彼の代物は。

和田　金藤次どのより預かつた、この御鏡、お柳めが知つたゆゑ、打ち殺したと思ひの外、息吹き返して……後日の邪魔ゆゑ人知れず、コレ

ト囁く。出來作呑みこみ

出來　そんなら彼奴を

和田　コレ。

ト兩人思ひ入れあつて、舞臺へ來て、下の方よりスツと入り、窺ふ。八郎これを知らず、始終思ひ入れあつて

八郎　最前お柳が、一つの功を立てんと云ひしは、この場を延ばす一時のがれ。この上は金藤次を討つて捨て、兄泰親どのを伴ひ、この所を立退かうか。イヤ〳〵、それでは後日に兄者人、いよ〳〵重なる御身の罪科。というて失つたる御鏡の、手がゝり無ければ、生きて詮なき某しの身の上。いつその事に腹切つて、申し譯とは思へども、この儘死なば、後に殘りし妻や子が、路頭に迷ふを見るやうで……アヽ、思ふまい〳〵。死すべき時に死なざれば、死にまさる耻の上塗り。さうぢや、南無阿彌陀佛。

ト腹を切らうとする。よき時分よりお柳出かゝりゐて、この時、つか〳〵と走り寄つて

りう　モシ、待たつしやれ。こりや何ゆゑの御切腹でござりまする。

八郎　何ゆゑとは、所詮傾むく我が運命、それぢやによつて。

りう　成る程、忠義一圖のお心から、其やうに思はしやんすは尤もながら、時節を待つて家名の花、今日開くお前の御運。

八郎　ヤヽ、なんと。

りう　最前金藤次づらへ、先の大臣の御惱み、平癒いたさせんと受合ひしは、お前のお命助けたい、わたしが心底。

八郎　その志しは嬉しけれど、良藥祈念に怠りなき、大臣の御惱みを平癒させんと、其方づれが受合ひしゆゑ、邪智深き金藤次、平太郎を人質に取つたる上、もしこの事成就せざる時は、忠臣たる家來を敵の手へ渡し、一命終らば無益の犬死。

りう　成る程、賤しいわたしゆゑ、其やうに思はしやんすも御尤も。さりながら、この程大臣樣の御惱は、同國女夫坂の柳の大木、その幹の下に一つの髑髏、これは大臣の現世のしるし、風吹く度に柳の動くは、即ち頭痛の御惱。その柳さへ切る時は、立ち所に御惱平癒は疑ひなし。

八郎　ハテ、奇異なる事の物語り、如何いたして其方は存じをるぞ。

りう　サア、それも云ふに云はれぬ、この身の俗性。

八郎　ヤ。

りう　イエ、俗物語りに常々から、過ぎ行かしやんした、父さんの話し。

八郎　イカサマ、所に久しき老人の物語り、殊には年回の折なれば、我れを導く前表ならん。

りう　其お心なら少つとも早く、その柳を切つてお前のお手柄に、御惱平癒、それを功に詮議の日延べ。

八郎 然らば、片時も早うその柳を……チエヽ、心は矢竹に逸れども、折悪しく瘧は頻りにさしくる熱氣

ト瘧の病ひに苦しむ思ひ入れ。

りう エヽ、腑甲斐なき其お心、忠義の爲と心を勵まし

八郎 いふにや及ぶ、大臣の御爲。これより直ぐさま、柳の下へ

ト行かうとする。この時、出來作、斧を持つて窺ひ寄り

出來 八郎、うぬを。

ト斧にて打つてかゝる。八郎よろめきながら、ちよつと立廻り、斧をひつたくり、出來作を當てゝ

八郎 幸ひ手に入る斧を以て、女夫坂なる柳の根元へ

トつか／＼と行きにかゝる。

りう モシ。

八郎 ヤ。

ト振り返る。お柳ちよつと氣を變へ

りう めでたい門出の、家名に花の

八郎 盛りはやがて

ト瘧に慄へる。

りう　ヤコレ、我が夫。

八郎　女房ども。

りう　早うござんせ。

八郎　合點だ。

ト時の鐘にて向うへよろめきながら入る。お柳見送つて、ホロリとして

りう　モシコレ、我が夫、その柳を切つて捨てれば、先の大臣の御惱みは平癒なれど、この身はこれが一生の

ト思ひ入れ。この時奥より金藤次と和田四郎窺ひ出て

金藤　そんなら女夫坂の柳を切れば、先の大臣の御惱みは平癒とや。先きへ仕掛けて、おれが手柄に

りう　イヤ、お前をやつては

ト金藤次をさゝへる。和田四郎は自分の斧を金藤次に渡し、お柳を突き退け

和田　この斧を以て、柳を早く

金藤　合點だ。

ト斧を持つて行きにかゝる。お柳やるまいと立廻りのはずみ、和田四郎以前の鏡を落す。お柳取上げ見て

りう　こりやコレ、御鏡。

金藤　それを

ト山颪し、時の鐘になり、金藤次は件の鏡を引つたくり、お柳を突き退け、一散に向うへ入る。お柳は跡を追ひかけ行かうとする。此うち出來作心附き、お柳にかゝる。お柳和田四郎出來作三人の立廻りのうち、奥より泰親は以前の形、繩を解き、大小にて、お露も附き出て來り、この立廻りの中へ入る。泰親は出來作を見事に投げる。又起き返り來るを、お露は百萬遍の珠數を出來作が首へ引掛け、とめる。お柳、和田四郎立廻りながら、花道まで行つて、舞臺を見て

りう　これは。

つゆ　こゝ構はずと

泰親　片時も早う。

りう　さうぢや。

和田　うぬをやつちやア

ト兩人立廻りながら向うへ入る。此うちに前の捕り手一人出て、泰親にかゝるを見事に切り倒し、キツと思ひ入れ。皆々この仕組みよろしく

幕引附けると、山颪し、時の鐘にてツナギ、すぐに引返し。

幕

本舞臺、向う淺黄幕。所々に草土手、萩、薄、秋草のあしらひ、眞中に柳の大木、同じく吊り枝、これにいろ〳〵好みあり、よき處に草井戸、繩釣瓶を置き、誂への通り。こゝに金藤次、前幕の形、斧を持ち、立ちかゝりゐるを、八郎も斧を持ち、これを留めてゐる見得。すべて紀州女夫坂、柳の下の體、禪のツトメにて幕明く。

金藤　瘧ぶるひの那須の八郎、何ゆゑ身共をさゝへるのだ。

八郎　大臣の御惱平癒は、これなる柳の根を斷つて、御全快を功となし、寶の日延べを願ふのだワ。

金藤　小癪な事を。手柄は仕勝ち、柳はおれが

八郎　女房が心を盡せし柳、やはか汝に

金藤　何をおのれが

ト斧にて打つてかゝる。八郎、病中ゆゑにかよはき立廻りのうち、金藤次の懷中より前幕の御鏡落ち

る。八郎取上げ見て

八郎　ヤヽ、こりやコレ、尋ぬる御鏡。

金藤　南無三、それを

ト兩人爭ふはずみに、件の鏡を柳の枝へ打上げる。

八郎　ヤヽ、大切なる御鏡は、柳の枝へ。

金藤　身共が取り得て

ト又禪のツトメにて、兩人立廻りのうち、向うよりお柳と和田四郎立廻りながら出て來り、お柳は兩人を突き退け、八郎を圍ひ、キッと思ひ入れ。八郎見て

八郎　オヽ、そちや女房お柳。

りう　こちの人、御身に怪我はなかつたかえ。

八郎　この身に恙はなけれども、大事の鏡はあの枝へ。

りう　わたしが取り得て、お前の願ひを

金藤　女ぐるみに、合點か。

和田　心得ました。

ト四人立廻り。八郎は金藤次、和田四郎を引附け、斧を振上げ打たうとして、瘧の病ひ起りし體にて、苦しき思ひ入れ。お柳見て

りう　モシ、こちの人、心を慥かに。

八郎　チエ、、心は矢竹に逸れども、又もや瘧が

ト思ひ入れ。

金藤　この虚に乘つて

和田　女め、うぬを。

ト兩人は八郎を蹴飛し、お柳は和田四郎の山刀を打落す。これにて和田四郎は有合ふ繩釣瓶の水を、八郎にザップリ浴びせる。これにて八郎「アツ」と思ひ入れ。金藤次見て

金藤　野郎めをおツ方附け、鏡を早く。

和田　合點だ。

ト兩人柳へかゝらうとする。お柳さゝへる。此うち八郎心附き、兩人を見事に投げ退け、お柳を圍ひ、キツと思ひ入れ。

金和　ヤ、、瘧の病ひと思ひの外

りう　我が夫八郎どの、この體は。

八郎　忠義に凝つたるこの宗重、天の助けに瘧りの本腹。もうこの上は千人力、鏡を取り得て本地へ歸參。うぬら一々、觀念ひろげ。

金藤　何を小癪な。

ト誂への鳴り物になり、四人立廻りあつて、和田四郎、柳へ登る。八郎も跡に附き、だん〳〵に登り、上にて八郎と和田四郎見事なる立廻り。下にはお柳と金藤次立廻りのうち、金藤次の斧、あやまつて柳をどうと切る。薄ドロ〳〵になり、切り口より本蘇芳の血汐流れ出る。これと共にお柳の五體へ血汐滲み出る。上にても立廻りのはずみに枝を切る。この切り口よりも血汐走る。八郎は鏡を取り、和田四郎を踏み附ける。金藤次はお柳の體を立て

金藤　ヤヽ、柳と共にお柳が血汐。

りう　嬉しや、今ぞこの身の念願成就。

八郎　鏡は我が手へ戻らせ給ふ。

金藤　南無三、それを

ト八郎、和田四郎上より飛び下りる。皆々鏡を楯に立廻りのうち、下座より平太郎、前幕の形に一本

差しにて、三郎義連を引ッ立て、出て來り、この中へ入る。皆々見て

平太　あなたは御主人。妹もろとも

りう　ヤア、お前は兄さん、

八郎　平太郎。して、この者は

三郎　金藤次どのに一味の義連。

金藤　八郎主從、疊んでしまへ。

和田三郎　合點だ。

ト六人立廻りのうち、お柳は三郎を當てる。平太郎は和田四郎を見事に切り倒す。八郎は金藤次を、ちよつと當てる。平太郎こなしあつて

平太　ヤヽ、妹が五體へこの血汐。何ゆゑ其方は手を負うた。

八郎　合點のゆかぬは柳の枝、その切り口よりたばしる血汐。

平太　心得がたきこの場の不思議。

りう　成る程、御不審な御尤も。今こそ明すわたしが身。恥かしながらお二人樣、お聞きなされて下さりませ。

二人ヤヽ、なんと。
ト思ひ入れ。誂への合ひ方になり、お柳こなしあつて
りう もと我れは人間ならず。年を榮ゆるこの一木、卽ち柳の精魂たりしが、いつぞや領主鷹狩りの折柄、旣に切り倒さるべきを、那須の八郎樣に助けられ、いつか御恩を報ぜんと思ふうち、御子息綠丸樣危ふき御難儀、お救ひ申さんとせしところ、誠のお柳どの、樵夫の爲にあへなき横死、その五體へ、我が精魂をかいなして、ゝゝゝゝ御恩送りも情けなや、輪廻はかなき妹脊の緣、今日の御難儀助けたく、現在夫にこの身を切れと、刃物を渡し勸めしは、命を捨てゝ御恩返し。又二つには、假りに一夜のお情けを、受けし夫を世に出したさ。この上は片時も早く、鏡を取り得て御歸參あらば、草葉の蔭にてわらはが喜び。
平太 ハヽア、驚き入つたるその一言。さては誠のお柳は、木樵の爲に、あへなき最期とや。
八郎 今まで知らざる凡夫のおろか。さては其方は、柳の精魂にてありしよな。
平太 最前思はず梓弓、かゝりや繫がる血筋の妹。
りう その五體をかり寢の床も、今が別れとなつたるか。お名殘り惜しい宗重樣。
八郎 我れとても、思ひは同じ妹脊の語らひ。たとへ柳の精魂たりとも、一旦結びし互ひの愛着、那須

の八郎宗重は、同じ形の女房を、二人持ちしと笑はゞ笑へ、何とてこの身の恥ならず。

平太　有り難き其お詞、今の仰せを未來の引導。せめてあの世の成佛得脫。

りう　最早この世に思ひ置く事、さら〳〵無い。早う柳を切つてたべ。

二人　でも、現在の

りう　覺悟の上は、苦痛を助けて。

平太　然らば

八郎　是非に及ばぬ。南無阿彌陀佛。

ト柳をどうと切る。ドロ〳〵になり、お柳「アッ」と苦しむ。兩人立寄つて思ひ入れ。この時、金藤次と三郎心附き、八郎の懷より鏡を出し

三郎　八手の御鏡、忝い。

金藤　鹿島三郎、この間に早く。

三郎　合點だ。

ト行きかゝる。八郎支へるを、振り切り駈出すを、平太郎引附ける。

金藤　この上は柳を切つて、おれが手柄に

八郎　何をおのれが

ト金藤次を突きのけ、また柳を切る。ドロ〳〵になり、お柳の五體より心火燃えて、柳の枝へ引いて取る。この途端、殘りの柳の葉、一時に枯れ葉となる。

八郎
金藤　さてこそ柳は

ト金藤次、柳へかゝらうとする。お柳スツクと立ち身にて、金藤次を連理引きのやうに引附けて

りう　嬉しや、今ぞ念願成就。

八郎　成佛得脫。

平太　不便や妹。

トこの時、三郎振り切り、向うへ逃げて入る。

南無三、御鏡

ト行かうとする。

金藤　うぬをやつちやア

トかゝる。金藤次又引附けられ、動かれぬこなし。

八郎　早行け。



市川
海老蔵
尾上菊五郎

平太　ハア。

トかけり、大ドロ〳〵。平太郎向うへ入る。よろしく

幕

返し　和歌の浦朧山の場

役名　那須女房、藻女。衞士、福作。同、太郎又。同、次郎又。同、當作。鹿島の三郎義連。横曾根平太郎。玉藻の前。

本舞臺、三間の間、正面大樹の杉林。うしろ黒幕。よき所に誂への岩。上の方に茅葺きの古家、戸帳に岩屋の祠と書き、室の軒より鐵の籠を吊り、舞臺は誂への本水。すべて紀州の和歌の浦、朧山の景色。幕の中より仕丁福作、太郎又、次郎又、當作、いづれも白丁、烏帽子にて、一升徳利、鉢肴など取りちらし、酒盛りの體。山颪し、夜神樂にて幕明く。

福作　サア〳〵、いゝ加減に杯を廻さねえか。

太郎　ハテ、この男はせはしない。おいらは、やう〳〵今飲みかゝつたのだ。

次郎　おきやアがれ。よく嘘を云ふものだ。さつきから、てめえ一人で飲んでゐるわえ。

當作　さうだ〳〵。茶碗を取つたが最後、一生離した事のねえ男だ。
太郎　ハテ、この男は、おればかり、こめるな〳〵。
當作　イヤ、こめるといへば、當時大館のお羽利き、あの田熊法眼樣は、公卿でも武家でも、差別なくこめるでないか。
福作　それはその筈の事だ。法眼樣には、大臣でも云ひなり次第。先達て渡海した唐女を、今では官女として、御寵愛に方圖がないワ。
次郎　それはそれにして、此方はかまはず、やらかせ〳〵。
皆々　それがいゝ〳〵。

ト捨ぜりふにて酒を飲みゐる。矢張り夜神樂にて、向うより三郎義連、袱紗包みの御鏡を持ち、走り出て來り、舞臺の皆々を見て

三郎　ヤア、わいらは玉藻の前のお供に來た、仕丁どもだな〳〵。
福作　左樣でござります。お前は三郎樣。
皆々　義連樣ではござりませぬか。
三郎　さうだ〳〵。コリヤ〳〵、衞士ども、よい所で逢つた。身共は金藤次と心を合せ、奪ひおいたる

八手の御鏡、那須の八郎に見付けられ、彼奴の家來の平太郎といふ土民、身共が跡より追ツ駈し來るワ。わいらはおれが加勢して、その平太郎めを、殺らしてくれろ〳〵。

太郎　お氣遣ひなされまするな。玉藻の前樣を警護の我れ〳〵、その野郎めがうせをつたら

次郎　有無を云はさずふん縛り、狼藉したと云ひ立てゝ

當作　、、、たいほんの形とやら、仕置きの手ごめでいつか往生。

福作　して、その鏡は御所持かな。

三郎　卽ち爰に肌身離さず持つてゐる。必ずともに、見えたら、ぬかるな。

四人　心得ました。

ト向う、バタ〳〵にて人音する。

三郎　アレ〳〵、あの足音は、慥かに追ひ來る平太郎。

福作　うせたら寄つて、高手小手。

四人　お氣遣ひなされますな。

ト突く棒、さす股など取出し持つてゐる。矢張り夜神樂にて、向うより平太郎、前幕のなり、一本差しにて出て來り、篝のあかりにて三郎を見附け

平太　鹿島義連、爰にうせたか。
四人　合點だ。
三郎　そりやこそ來たぞ。
　　ト平太郎へかゝるを掻きのけ、三郎を引附ける。四人は平太郎を取卷き
平太　イヽヤ、狼藉無禮は致さぬ。この義連こそ、八手の名鏡所持なす曲者。狼藉者、そこ動くな。
三郎　ぬかすな、土民め。また御鏡を持つたりとて、口外立てするおのれが怪しい。衞士ども、合點か。
四人　動きやァがるな。
平太　すりや、これなる義連に、わいらも組みする衞士どもだな。
福作　イヽヤ、今宵は玉藻の前、この和歌の浦へ神詣で。辻々固めの我れ〳〵が
三人　狼藉者ゆゑ繩打つて。
平太　さてこそ一味の仕丁めら。妨げひろがば一々に、土民が用意の犬おどし、刀の錆だが退くまいか。
太郎　玉藻の前御歸館まで、固めの我れ〳〵。刃向ひ立てとは
三人　狼藉者め。

三郎　息の根とめろ。

四人　合點だ。

ト立ちかゝる。

平太　こりやモウ是非に及ばぬわえ。

ト白刃を抜く。これより三郎はじめ皆々平太郎と立廻りあつて、キッとなる。誂への鳴り物にて、五人を相手に立廻り、トゞ禍作、太郎又を見事に切る。次郎又、當作は下座へ逃げて入る。三郎は鏡を持ち、逃げるところを、平太郎追ひ駈け引ッ捕へ、鏡を奪ひ取り、三郎を引敷き、キッとなつて

嬉しや、忝や。これぞ御主人八郎様の、難儀となつたる八手の名鏡。我が手に入りしか、エ、、忝い。

三郎　それを

ト刎ね返してかゝるを一太刀浴びせる。これにて三郎倒れると、この途端にドロ〴〵になり、平太郎の持つたる鏡、仕掛けにて手を離れ、上の杉の木の枝へ飛ぶ。これにて兩方の窓蓋をおろす。雷序になり、狐火燃え、篝の火消えて闇になる。

平太　ハテ、爭はれぬこの場の動搖。不浄を禁ずる鏡の威德。血汐の穢れに我が手を離れ、あれなる杉

の一枝へ、飛び去る奇特に引きかへて、群がる陰火は、まさに狐火。

ト此うち始終薄ドロ〳〵、雷序にて、鏡へ白面の妖狐うつる。平太郎は狐火と鏡に目を附け、思ひ入れあつて

ヤヽ、灯影にあり〳〵御鏡へ、うつるは金毛白面の、妖狐の姿現はれしは、さてはこの程聞き及ぶ、この日の本へ渡りし悪狐、妨げなすか。速かに、立去れ〳〵。

ト切り拂ふ。大ドロ〳〵、狐火群がり、杉の枝の鏡、仕掛けにて水船へ入る。

ヤヽ、大切なるあの御鏡、又もやこれなる水中へ。いでこの上は、さうぢや。

ト水船へ飛び込まうとする。この時大ドロ〳〵、狐火群がり、支へる思ひ入れ。これにて白刃にて切り拂ふ。矢張りドロ〳〵にて、平太郎は我が持つたる白刃にて自然に我が身を切り、苦しむこなしにて水船の方へさしより、鏡を取らんと水中へかゝり、又ドロ〳〵烈しく、平太郎持つたる白刃を自然と我が腹へ突き立て、苦痛のこなし。ト、白刃を我が手に引き廻し、水船へ見事に落ちる。大ドロ〳〵にて、水船の三方より吹き水。血汐の穢れにて件の鏡を差し金にて吹き上げる。これと共によき所へ白氣立昇る。件の御鏡は白氣に巻かれ花道の上へ引かれ、虚空へ引き上げると、好みの鳴り物になり、上の方の宮の戸帳を巻き上げる。中に藻女、女六部の拵へにて、錫杖を突き、立ち身。件の白氣に

藻女　目を附け、思ひ入れ。
旅寢の夢か幻しに、俄かの動搖。それのみならず水中より、怪しき白氣立ち昇るは、まさしく鏡の
ト思ひ入れ。この時向うにて
呼び　玉藻の前樣參詣。
ト三郎心附き、藻女へかゝる。ちよつと立廻りあつて又
玉藻の前樣參詣。
藻女　合點の行かぬこの場の大變。殊に夜陰に思はずも
ト思ひ入れ。
三郎　すりや玉藻の前の
藻女　ハテ、心得ぬ。
三郎　怪しい女め。
ト藻女へかゝる、立廻りあると、又向うにて
呼び　參詣。

ト呼ぶと、樂になり、藻女振切つて行きにかゝる。三郎「われを」と留める。立廻り、大ドロ〳〵にて兩人、タヂ〳〵となり、氣を失ふと、ドロ〳〵かすめて、大薩摩の淨瑠璃になる。

大サツマ〽あゝら怪しや忽ちに、一天俄かに掻き曇り、霧かあらぬか朦々たる、雲間を分けて御手洗へ、うつるは月の面影の、身には羅綾の五重ね、玉藻の姿はでやかに、悠然たる粧ひは、げにも怪しく見えにけり。

ト、ドロ〳〵、下り葉になり、花道の上より人形の雲下りる。よき所にてとまる。この時、藻女心附き、起上がつて

藻女　さては俄かに立覆ふ、雲の端立に思はずも、放心せしか。ハテ、いぶかしい。

トこの時、雲の中にて

玉藻「君すめば、よする玉藻のみがき出でて

藻女　ヤ、なんと。

ト大ドロ〳〵になり、右の雲左右へ開く。中に玉藻の前（平太郎と早替り）十二單衣、緋の袴、吊り冠のまゝ立ち身、檜扇をかざし、八手の御鏡を持ち、よろしく思ひ入れ。

黑白は定かならねども、見れば雲間に、あり〳〵と

玉藻　千代も傳へよ、和歌の浦風。」

藻女　ヤ。

ト思ひ入れ。此うち薄ドロ、矢張り下り葉にて、玉藻の前は雲に乘つたるまゝ、花道よき所へ下りてとまる。藻女これにキツと目を附け

さてこそ高位の御姿は、

三郎　すりや、當大臣の內子たる

ト心附き

藻女　これ。

ト押へる。玉藻の前、つかつかと舞臺へ來る。

慥かにそれこそ

トさしよつて鏡へ手をかける。玉藻の前これを振切り、袖にて顏を隱すと、ドロドロになり、雨窓落下りる。これにて暗くなる。

ヤヽ、今まで夜半の月あかりも、霧かあらぬか、黑白もそれと

トまた三郎は藻女へかゝる。この立廻りのうち、玉藻の前岩臺へ上がり

玉藻　この身の仇たる名鏡は

　ト鏡を出す。三郎この聲を聞き

三郎　ナニ、名鏡とは

　ト三郎行かうとする。藻女さゝへて立廻り。此うち下の方にかけてある鳴子繩を取つて、三郎は藻女へかゝる。藻女、三郎を投げるはずみに、鳴子カラ〳〵と鳴る。これにて、玉藻恟りする。この途端に、玉藻の惣身より仕掛けにて光り出る。

藻女　ヤヽ、玉藻の前の惣身より

玉藻　これぞ手に入る鏡の威徳。

藻女　ヤ。

三郎　それを

　トかゝるを立廻り。藻女は仕込みの錫杖を拔き、三郎を見事に切る。これを木の頭。

玉藻　無禮者めが。

　トきつと見得。藻女仕込みの白刃を隱す。これをキッカケに木になり、玉藻の前の惣身より、左右へ光り出る。雨窓蓋引上げ、あかるくなる仕掛けよろしく、ひやうし

幕


市川海老蔵
尾上菊五郎

二番目　發端　　八丁繩手の場

役名――遊女、三浦屋の上總野後ニ非人おきさ。竹垣佐吾右衞門。同、惣領半次郎。藍玉屋庄兵衞。非人、仁助。腰元、若葉。若黨、金森丹下。出村曾平次。浪人、鵜飼九十郎後ニ非人次郎兵衞。

道具出來次第、知らせにつき、幕の外へ口上、上下にて、口上觸れと一緒に出て

頭取　東西々々、高うはござりますれど、口上を以て申し上げ奉りまする。第一番目の狂言の中へ、第二番目の發端を一幕差加へ御覽に入れまする。尤も一番目時代狂言の中にて、二番目の世話狂言を致しまする事ゆゑ、この段は分けてお斷わり申し上げまする。即ち右二番目の發端より、二番目の序幕まで、年數二十ケ年相經ちまする狂言。即ち二番目發端役人替名、これよりお耳に觸れまする。恐れながら御神妙にお聞き下さりませう。

ト役觸れあって

右の役人殘らず罷り出で相勤めまする。いよ〱この所、二番目狂言發端、その爲口上左樣に御

覽下さりませう。

ト入る。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、眞中に非人小屋、高札とも後向きに飾り附け、右後の方より折廻し繩張り。その向うに正面向きにて仕出し大勢見物してゐる。爰に曾平次、老けたる拵へ、野袴、ぶつさき羽織。侍ひ大勢附き。仁助、非人の役にて手を突き、下の方にお源、世話女房の拵へにて、赤子を抱へてゐる。時の太鼓にて幕明く。

曾平　コリヤ〳〵、非人ども。この度遊女町三浦屋の抱へ女、上總野と申す女郎と、浪人鵜飼九十郎と申す、二十一二の男、心中いたすを見咎められ、それゆゑ以後の見せしめと、この八丁繩手に於て、諸人に面を晒し、その上にて非人の手下に下さる定法。即ち今日この所にて引渡す間、早く二人を引取れよ。きつと申し渡したぞ。

仁助　ハイ〳〵、畏りました。昔からの御定法、きつと引取りまして、私しどもの仲間に入れますやうにござりまする。なんぼ身分の重い人でも、これからは私しの組下、しつかりと引取りまするでござりませう。

げん　ハイ〳〵、お願ひでござりまする。

倉平　コリヤ〳〵、其方は何者ぢや。
げん　ハイ〳〵、私しはその九十郎どのと、上總野どのとの仲に出來た、新太郎と申しまするこの子を里に取りました者でござりまする、今度二人とも、非人になると申す事を承り、それでは誰れにこの子を引渡してようござりませうやら。もしひよつと、この子の緣に引かれ、私しまで乞食になるやうな事でもござりましては、迷惑いたしまするゆゑ、お願ひに上がりましてござりまする。どうぞ二人にこの子を、お渡しなされて下さりませ。
倉平　成る程、尤もの願ひ。最早刻限なれば、二人の者をこれへ引け。
ト小屋の後にて「ハア」と大勢の聲する。時の太鼓、二上りの合ひ方になり、上總野、傾城夏着の形。九十郎、五十日、古き單衣を着て、二人とも腰繩にて、非人大勢この繩を取つて出て來り
皆々　下に居らう。
トこれにて上總野、九十郎、思ひ入れあつてよき所へ座る。
倉平　兩人ともによつく聞け。抱へ遊女の身を以て、年の内に男と馴合ひ、まつた九十郎ことも、揚代金滯りの上、遊女と合體いたし、相對死いたすべき所存、不埒至極によつて、重きお仕置にも相成るべきところ、お上のお慈悲を以て、非人の手下に下さる段、有り難く思ひ居らう。

ト上總野、九十郎俯向いて思ひ入れ。お源、九十郎の側へ寄り

げん　コレ〱、九十郎どの、こなたは〱、よい氣な人でござるの。三年前からこの子を里に寄越して、一月二月は里扶持もくれたが、それから二年八ヶ月、一文も寄越しやせぬぞや。女郎狂ひの金は遣うて、現在の子を育てる、里扶持を寄越さぬといふは、この子は死んでも構はぬかいの。揚句の果には心中を仕損なうて、この晒し者、乞食非人とならしつては、里扶持どころか、ちやんころ無し。錢さへ取らぬその上に、捲添へにあつてはつまりませぬ。サア〱、この子を返しまする〱。

ト赤子を九十郎に突きつける。九十郎、迷惑なこなしにて

九十　成る程〱、御尤もではござりまするが、今この所で悴を受取りましては、何にも知らぬ新太郎、乞食にいたすが、何とも不便でござりまする。

上總　誠に、わたしに乳は無し、此方へ引取れば、見す〱見殺し。爰のところをお聞きわけ下されまして、どうぞこの子は

げん　イエ〱、そりやお前方の勝手といふもの。里扶持も寄越さぬ上に、乞食の子を育てる事は、マア否でござる。オヽ、穢ない、けがらはしい。きつと其方へ返しました。

九十　左様ではござらうが、是非ともこの子は

げん　押しの強い事云はしやんせ。思ひなしか、抱いてゐるのさへ穢ならしいやうな……きつと渡しましたぞ。馬鹿々〵しい。

上總　二人は覺悟の上なれど

九十　何にも知らぬ悴まで

げん　乞食にするのも其方の勝手。ヤレ〳〵、これで心が濟みました。

ト九十郎、上總野、顏見合せて當惑の思ひ入れ。

九十　エヽコレ、かてヽ加へてこの難儀。たつた一人の男の子、世が世の時であらうなら、立派な武士に仕立てんと、思ふに甲斐なき若氣の至り、乞食非人の手に下るも、心柄とは諦めても、辨まへ知らぬ悴まで、憂き目を見する世の成行き。

上總　辛い勤めの其うちに、派手や浮氣の心中で、子まで見捨てる不料簡と、お笑ひ下さるお方々もござりませうが、眞實誓文其やうな、浮氣な事ではござりませぬ。命を捨てるもよく〳〵な、二人の死ぬを見附けられ、諸人に恥を晒しもの。

九十　死ぬにも死なれぬ天下の掟、非人の手下。それも子ゆゑに引かされて

倉平 乞食になつても、命は惜しいものと見える。女は女とも思はうが、浪人の九十郎、侍ひの身で賣女にたらされ、心中なぞとは餘りなたわけ。まだ幼なき悴まで、同じ非人に致すとは、これがほんの、親の因果が子に報ふか。ハテサテみじめな。ハヽヽヽヽ。

庄兵 ハイ／＼、お願ひでござります／＼。

ト庄兵衞、町人の拵へにて仕出しの中より出て、手を突く。

倉平 ヤイ／＼、其方は何者だ。

庄兵 ハイ／＼、私しは藍玉屋の庄兵衞と申しまする、町人でござりまする。これに居りまする鵜飼九十郎さまの御親父とは、懇意な私し。どういふ仔細か御浪人になつて、今この御苦勞、何とも氣の毒に存じまして、お願ひに出ましてござりまする。

倉平 して、願ひとは何の願ひだ。

庄兵 外の事でもござりませぬが、私しには未だ家を繼がせる、子とてもござりませねば、どうぞその新太郎どのを養子に貰うて、相續いたさせたうござります。尤も親知らず、音信不通で貰ひ請けたく、行く／＼は親御のお附けになつた、新の一字を私しの庄兵衞へ合せ、新兵衞と名乘らせ、玉屋の家を繼がせたうござりまする。

ト これを聞き九十郎、上總野よろこび

九十　すりや、何と云はつしやる。親どもより懇意ゆゑ、この場の難儀を見兼ねて、この新太郎を養子にして、庄屋の跡目を

庄兵　サ、それも親御に請けし御恩、少しばかりの報じ心。あはれ立派な侍ひにも、なされたいお心でもござりませうが、見す〳〵この場で乞食非人……イヤサ、是非ともお子は私しが

九十　エヽ、忝い〳〵。誠に地獄で佛と云はうか。庄兵衞どの

上總　渡りに船と申しませうか。夫婦は明日をも知れぬ命……サア、此まゝ土になりまするとも、御恩は忘れは致しませぬ。

二人　エヽ、忝うござりまする。

庄兵　イヤ、そのお禮はあちらこちら。この子寶を申し請くれば、私しも猶大喜び。そんならいよ〳〵そのお子を

ト庄兵衞、九十郎の抱いてゐる赤子を受取る。

上總　どうぞ貰うて下さりませ。

これを思へばあの世の命、人に知られて助かりし、肌の守りの

ト懐中より守りを出し

これは松山の、矢弓稲荷の御影。既にこの子が憂目をも、庄兵衞様のお情で、又助かるも不思議な縁。これも矢ッ張り守りのお庇。どうぞ行末めでたう、その子に附けて下さりませ。

ト庄兵衞に渡す。

庄兵　何か有り難いこのお守り、しつかりと附けて置きまする。……お役人様、右の譯ゆゑ私しがお願ひ、お計らひなされて下さりませ。

曾平　子は三界の首枷と、たとへの通り二人とも、定めし當惑。これが武士の情とやら、其方の願ひに任せ、兎も角も勝手次第。

庄兵　エヽ、有り難うござりまする。

曾平　併しながら、たつた一人の侍ひの男子、町人匹夫の養子にやつて、有り難いと涙を流す根性では女郎と心中するも尤も。あの男は、立派な男だ。ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。九十郎口惜しき思ひ入れあつて、氣を變へ

九十　いかやうお笑ひあるとても、今日から乞食のこの二人。お町人様のお情で、悴ばかりは立身出世。

げん　そのお出世なら今日までの里扶持、サラリと拂つて下さりまし。

庄兵　それもわしが内で、スッパリと勘定しませう。
仁助　片時なりとも、乞食の子と云はれたその餓鬼。養子にするなら足洗ひの金を
庄兵　オットヽ、これで負けてもらひませう。
　　ト懐中より一兩の包み金を出してやる。
仁助　オヤ〳〵、口はきいて見やうものだ。
　　ト受取り、懐へ入れる。
曾平　この上は二人とも、其方達へきつと引渡したぞ。
仁助　ハイ〳〵、きつと受取りましてござります。
曾平　然らば身共が役目もこれまで、直さま歸宅。
庄兵　私しもこの子を大切に、ドリヤ、歸りませう。
上總　兎角行末よろしきやう
九十　庄兵衞様。
　　ト庄兵衞思ひ入れあつて
庄兵　アヽ、様といふ字を附けらるゝも

曾平　ヤ。

庄兵　これが浮世でござりませう。

ト唄になり、庄兵衞は子を抱き向うへ、曾平次は供の侍ひを連れ、下座へ入る。九十郎、上總野、仁助殘り、九十郎思ひ入れあつて

九十　人の情も喜びも、斯うした身ゆゑ一人の子を、側に置かれぬのみならず、二人は今日から袖乞ひとは、何たる因果、これとても、身で身を責めるこの身の破滅。

上總　昨日は人の身の上も、いたづら者と心中を、笑うた者が今日は又、我が身にめぐる斯うした憂き目。さはさりながら廓の勤め、苦勞苦界の中よりも、たとへ乞食になるとても、二人一緒になるのぢやもの。

九十　云やればそれもそんなものかえ。三日すれば忘れぬといふ譬へもあり、これからはお前の仲間入り、何事も世話を願ひます。

ト諦めし思ひ入れ。

仁助　さうサ〳〵。若いうちは何でもして見るがいゝ。又その内に外から手を廻し、金さへ出しやア、いつでも足は洗へるわな。サア、これからおいらが小屋へ來て……併し、心中者の二人は、分け

て置くが定法なれど、そこはおいらが呑み込んで、すぐに一緒に

九十　そいつは有り難い。そんなら嗅ア

仁助　コレ、嗅アとはおぬしの事だわな。

ト上總野は向うを見て、我が子の事を案じろ思ひ入れ。うつかりしてゐる。

ト上總野の背中を叩く。上總野悧りして

上總　アイ。

九十　コレ、何をうつかり

上總　でも、あの子の

ト仁助思ひ入れ。

九十　サア、參りませう。

ト思ひ入れ。時の鐘の送りにて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、前通り卒塔婆垣、上の方へ寄せて松の立ち樹。時の鐘、雨車、木魚入りの合ひ方にて道具とまる。

ト向うより佐五右衛門、さんすいな侍ひの拵へにて、懐に赤子を入れ、羽織を帯に挟み、古き大黑傘をさし、素足にて出て來り、花道にて

佐五　アヽ、折わるいこの雨。

ト赤子泣く。

オヽ、泣くな／＼。母親が病氣ゆゑ、乳貰ひに行つた先で、傘まで借りてくるとは、餘ッほど蟲がよいわいの……オヽ、泣くな／＼。どうでも餘所の乳は、飲み足らぬと見えるわえ。

ト此やうな事を云ひながら本舞臺へ來る。下座より曾平次、以前の形にて、足駄・傘、家來に箱提灯を持たせ、出て來り

曾平　コリヤ／＼、其方は竹垣佐五右衛門ではないか。

佐五　あなたは伯父御曾平次様、夜に入つていづれへお越し。

曾平　今日は遊女上總野、浪人の九十郎、非人の手下へ引渡す、検分の役目。右兩人の仲に、三歳なる男子、これも同じく非人になるべきところ、藍玉屋の庄兵衛と申す町人、貰ひ請けて相續させるとの願ひ。右の悴は庄兵衛の願ひに任せ遣はしたが、子を持つ親の心は同じ。身共二人の娘はあれど、女で家は繼がれぬゆゑ、其方が一人の悴、半次郎を無理所望。早速の承引。半次郎を養子

に致し、身の總領と娶合すつもり。併し左樣いたすと、其方が家の胤を失ふと存じ、この間産みしお霜を、其方が許へ遣はしたが、息災で居るか。

佐五　左樣でござりまする。有りやうは、乳もないところへ下されたお霜。女房はござつても、疾に乳はあがりまする。致し方なく、貰ひ乳をして歩きまするて。

曾平　それは氣の毒。其方が方より十歳の男子を貰ひ、その代りとして、當歳の乳飲みを貰うては、こりや迷惑であらう。併し、行く／＼半次郎は仕合せ。身の家を繼ぎ、總領の娘を女房に致せば、イヤ仕合せ者。イヤ、云つて置く事がある。娶合せるお才には、左の腕に心といふ字に似た痣があるゆゑ、いろ／＼と致すが、サテ、生れつきは拔けぬものぢや。

佐五　エヽ、生れつきの痣がござりますとな。併し面と違ひ、見えぬ所で仕合せでござりまする。有りやうは私しも、伯父御樣のたつてのお頼みゆゑ、一人の悴半次郎を養子に遣はし、その代りぢやと下されたこのお霜。當歳と申し、女房は乳もなうて病身者、誠に困り果てまする。併し、爰が侍ひの意地と存じ、少身な私しながら、親どもより讓られました道具へは、そつとして手もかけませぬ。卽ち親どもが祕藏仕りました、家の紋附き、笹の丸を散らしましたる割り笄、これなぞは賣りも仕りませぬ。

ト笄を出して見せる。

曾平　ムウ、流石は曾平次が甥の佐五右衞門、身貧な中でも身を離さぬ誠の武士、先達てより度々身が屋敷へ無心合力……イヤサ、それも一家の事なれば、どうがな致して遣はさうと、思ひながらも延引はしたが、現在の伯父の某、その貧窮は見ては居ぬ。佐五右衞門、其方が身にも、仕合せな事があるわやい。

佐五　それは耳寄りな儀でござりまする。して、どのやうな幸ひでござりまする。

曾平　サア、その譯は

ト家來を見て

コリヤ〳〵、身はこれに用事もあれば、苦しうない程に先へ歸り、別に道まで迎ひに來やれ。

家來　畏りました。

ト家來皆々向うへ入る。

佐五　御家來まで遠ざけられし、伯父御樣のお心は

曾平　サア、聞きやれ。身が主人、里見多門正どの、未だ跡目に立てる男子なきゆゑ、かねてお部屋お園の方と心を合せ、其方より養子に貰ひし半次郎こと、即ちお園の方が產み落した里子と僞り、

大殿をくろめなば、元よりお部屋に鼻毛の伸びた多門樣、ずる〳〵べつたり半次郎を、養子にな
さんは必定。さすれば折を窺ひ、毒藥を以て殿を失ひ、半次郎は大家の跡目、お園の方は身が宿
の妻、半次郎が世となれば、其方も卽ち大家の後見。なんと此やうな幸ひはあるまいがな。

ト佐五右衞門一々呆れし思ひ入れ。

佐五　すりや、何と仰しやりまする。あの半次郎を、お部屋の實子と僞り、里見家の養子として
會平　殿は間もなく毒殺して
佐五　御逝去あれば、直ぐさま家督。
會平　いかにも。
佐五　里見の主は半次郎。
會平　さうとも〳〵。
佐五　拙者が爲にも實の悴。
會平　それ〳〵。
佐五　お園の方はあなたの女房。
會平　オヽ。

佐五　何事も伯父様のお心のまゝ……と申したいが、なりませぬ。

曾平　ヤ。

佐五　コレ。あなた様はなう。

ト木魚入りの合ひ方になり

今日も今日とて晒し者の御検分、ちつとは理非もお裁きになり、悪を懲らす役目ではござりませぬか。甥の私しなればこそ、即座に御意見……申しまするまでもござりませぬが、三代相恩の主人を殺して、家の栄へたその例しは、和漢ともにござりませぬ。イヤ、また成就いたすにもせよ、不義の富貴は浮べる雲たる事を、知らぬあなたでもござりますまい。里見様の御近習頭、何が不足でその悪念。悪事を聞いて耳を洗ひし、毛唐人もござりまする。なんぼ身貧な私しでも、道に背きし悪事には、組みする所存は毫頭ござりませぬ。不肖ながら、佐五右衛門めが御意見、道理と思し召さば、思ひとまつて下さりませ。養子にあげた半次郎、悪人の名を取らすのが、いかにも不便でござりまする。伯父御様、どうぞ聞きわけて、その巧み、とゞまつて下さりませ。

トいろ〳〵に云ふ。曾平次こなしあつて

曾平　アヽ、誤まつた〳〵。甥なればこそ深切のその意見、忝い。其方が諫めに恥ぢ入つて、向後悪

事は思ひとまらう。アヽ、恐ろしや〳〵。

佐五　すりや、拙者めが意見、お聞き濟みあつて

曾平　思ひとゞまらいで何とせう。思ひとゞまる誓ひの金打。

ト刀を抜き

その金打は

ト油斷の佐五右衛門に切りかける。佐五右衛門、身をかはして

佐五　こりや何となされまする。

曾平　大事を聞いて、同心せぬおのれゆゑ

佐五　すりや、現在の甥の私しまで、殺してなりとその惡念

曾平　オヽ、思ひ立つたるこの一儀。人の意見や理屈詰めで、ひるがへさうか。馬鹿な事を

佐五　そりや又あんまり

ト刀を持つた手をグツと掴む。

曾平　アイタヽヽヽヽ。

ト刀を落す。佐五右衛門その刀を取る。

佐五　所詮一應再應では、聞入れもあるまいなれど、子は可愛うはござりませぬか。

曾平　可愛いゆゑにこの巧み。わりや又身共が刀をもぎ取り、身構へて居るは、何か、意見を諾かぬ腹立ちで、身共を切る心か。

佐五　勿體ない。どうして左樣な

曾平　イヤ〳〵、切る氣であらう。切られよう。成る程、其方が云ふ通り、おりや惡人だ。一家一門の面よごし。生きてゐては邪魔であらう。サア、切れ〳〵。

佐五　モウ〳〵、何しに私しが

ト寄るを引附け

曾平　ヤイ、動きやァがるな……一家々々と吐かすさへ、薄穢ならしい三ぴん侍ひ。うぬがやうな奴を甥に持つた、この曾平次は何たる因果。鹽噌薪に不自由ゆゑ、お助けなされて下され、合力なされて下されと、度々身共が屋敷へ、無心にうせた事を忘れて、なんだ、この伯父樣を惡人だ。コリヤ、惡にもしろ、善にもしろ、身が料簡でする事だ。まだも一家のよしみを思ひ、出世させうと思ふゆゑ、話して聞かせりや、そばへた痴言。よくもうぬは吐かしたなァ。

ト さん〴〵に打据ゑる。佐五右衞門起上がり、無念の思ひ入れ。

佐五　伯父御樣、イヤサ、曾平次樣、そりやあんまりでござりまする。

トきつと云ふ。懐の赤子泣くゆゑ、ゆすぶりつけながら

コレ、この乳呑み子もあなたから、忰が代りに押附け養女。元より少身な拙者め、その上女房は長の煩ひ、扶持切り米のその外は、元結又は傘の骨、その内職もこの頃は、乳母と下男と手一つに、それもせぬゆゑお屋敷へ、時折々の御無心も、申さぬではござらねど、一家と申すは名ばかりにて、ついに一度合力なされて、下された事はござりませぬぞや。それに今の惡口は、あまりといへば

トまた赤子泣くゆゑ、ゆすぶりながら

曾平　無駄を吐かさず、くたばつてしまへ。

こりや、どのやうに申しても

トまた切りつけるゝ佐五右衞門も懐の子をゆすりながら、いろ〳〵あしらふ。トヾ曾平次の刀を引つたくるとて、手があまつて曾平次の脇腹へ突つ込む。

佐五　ヤア、こりやアうぬ、現在伯父を

ヤ、よける刀の手があまつて、思はぬ深手。

曾平　伯父を殺すか。

ト大聲で云ふ口を押へて

佐五　生けて置いては里見家の大事。道ならぬとは思へども、こりやモウ是非に

ト懷の子泣くゆゑ、思はず手を放す。曾平次そのまゝ切りつけるを、かい潜つて見事に投げ、キツと見得。これより鳴り物。懷の赤子を枷に、危ふきタテあつて、ト　佐五右衞門、曾平次を切り倒す。この時以前の割り笄、あたりへ落ちる。佐五右衞門これを知らず、いろ〳〵思ひ入れあつて

惡人ながら現在伯父。赦して下され。南無阿彌陀佛。

トこの時向う、バタ〳〵と音するゆゑ、佐五右衞門ちよつと隱れる。雨車にて、向うより若葉、腰元の形にて、風呂敷をかむり、半次郎の子役、小さき大小、袴の形、手拭をかむり、若葉に手を引かれ跡より銀助、中間の形にて、懷へ赤子を入れ、春慶塗りの箱に萌黄の大紐附きしを抱へ、右三人とも俄雨にあひし體にて、駈けて出て來る。

若葉　ヤレ〳〵、恐ろしい雨ではあるぞ。若旦那樣、さぞお冷たうござりませう。コレ、銀助どの、どうぞ仕樣はあるまいかの。

銀助　もう〳〵、斯うなされませ。お前樣方は、この木の下に、雨宿りしてござりませ。私しは近所の

出入り町人の所で、傘や提灯を借りて參りまする。其うち、このお孃樣を預けまする。

ト若葉に赤子を渡す。此うち非人の藤兵衞、菰をかぶり出て、窺ひゐる。

この箱も、どうぞ濡れぬやうにして下され。中には小間物や、呉服物がござる。餘程の金目の物ゆゑ、大事にして下され。

若葉 お才樣は、御寐なつておいでなさるゝ。濡れぬやう、この箱の中へ

ト箱の蓋を明け、赤子を入れ、蓋をよろしく立てかけ

斯うして置きませう。ちつとも早く行つて來て下され。

銀助 畏りました。

ト行きさうにして、右の笄の片しを踏み

アイタゝゝゝ。

ト取つて見て

オヤ〱、なんだ。こんな物が落ちてござりました。綺麗なものだ。若旦那、お前樣に上げませう。

ト半次郎に渡す。

半次　こりや笄ではないか。慥かにもう片し、落ちてはないかいの。
　ト　これを聞き、非人藤兵衞、あたりを尋ね、片しの笄を拾ひ、見物に見せて懐へ入れる。
銀助　ナニお前様、そんな笄がどこにござりまするものか。そりや火箸の片々でござりませう。そんな事より、ドリヤ、借りて来ませう。
　ト　逸散に向うへ走り入る。跡に若葉と半次郎、いろ〳〵支度してゐる。この時、藤兵衞、赤子の入りし箱を引浚ひ、赤子ぐるみ持つて向うへ走り入る。若葉悃りして
若葉　ヤア〳〵、大切なお孃様とあの箱を、盗人めが……誰れぞ捕へて下され。盗人ぢや〳〵。
　ト　半次郎を連れて、同じく走り入る。時の鐘になり、上の方より上總野、九十郎、乞食になりし體にて、合傘にて出てくる。下の方より佐五右衞門出て
佐五　今の女中が、取られたも女の子。
九十　此方の悴も今頃は
上總　乳に困つて
　ト　佐五右衞門の懐の子泣く。
佐五　オヽ、泣くな〳〵。

九上　ヤ、そこにも幼ない

トこれを聞き、佐五右衛門は人殺しゆゑ、見附けられじとソッと逃げる。上總野、九十郎は、もしや先刻の庄兵衛かといふ心にて、窺ひ、顏見ようとする。この仕組み。佐五右衛門、花道へ行きかける兩人思ひ入れあつて

もしや我が子の

トこれを聞き

佐五　エ。

ト振りかへる。チョンと木の頭

九上　はてなァ。

ト不思議さうに向うを見送る。これをキザミにて、よろしく、ひやうし幕の外、佐五右衛門、落ちつきし思ひ入れにて、向うへ入る。シャギリ。

幕

六建目　御遊の場

役名――那須の八郎妻、藻女實ハ池藻の前。衞士又五郎實ハ木幡彈正景澄。輔雅の君。雀の宮

の神主、舌切忠太夫。烏丸中納言光兼。磯上飛仲太仲國。金剛太郎重遠。衞士、當作。同、太郎又。八郎一子、綠丸。伴の七郎熊武。官女、水無瀨の局。同、山路の局。同、三芳の局。田熊法眼俊次。進の藏人春俊。那須の八郎宗重。鳥羽の大臣。玉藻の前。

本舞臺三間の間、正面網代塀。左右見切り、花盛り。こゝに烏丸中納言光兼、裝束、公卿の拵へにて、上の方に住ひ、磯上飛仲太、伴の七郎、上下、衣裳にてゐならび、下の方に水無瀨、山路、三芳、ぬろで、いづれも白無垢緋の袴の官女にて、めい〳〵海棠の花槍を持ち、東西に一人づゝ立ち別れ、花いくさの見得。三味線入りの中の舞ひにて幕あく。

トよろしく花軍の立廻りあり、この鳴り物にて向うより、田熊法眼俊次、白髮、法眼袴の形、これも海棠の花槍を持ち出て、花道にてこれを見て、つか〳〵と舞臺へ來り、入れ替つてこの中へ入り、下の方へ無性に突き立て、追ひまくり、しやんと留める。皆々思ひ入れ。

官女　ヤ、あなたは田熊法眼樣。

飛仲　御位る定めの花いくさ。供への稽古に横槍を入れられ

七郎　老大臣方と定めたる、女官達へ加勢めされて、

光兼　若大臣方と定めたる、女官達を追ひまくられしは、さては貴殿も

官女　老大臣方でござりますか。

田熊　イヤ、どちら方と申すでもござらぬが、いはゞ兄君、殊に一旦大々臣の任を受け給ひし鳥羽の君を、其まゝ元に直すのが、マア順道かと存じまして。

三人　こりやアさうありさうな事でござる。

水無　法眼樣はじめ、方々にもお聞きの通り、この程白川の大臣さま御平癒ありしも、那須の八郎樣の功とて、御勘氣御免のその上に

ぬる　今日八手の御鏡受取りの役目にて、再び參入あるとの事。

山路　それについては、かねて仰せ下りし人質とあつて、八郎樣の一子緑丸

三芳　先き程召されたとの噂でござりまする。

田熊　ムウ。その那須の八郎は、身共が娘藻女の不義の相手。その緑丸と申すは、二人が仲にもうけし幼な子。それゆゑ娘は勘當なせしに、貴殿も知つての通り、女の身にはためしない、神隱しにあつて行くへ知れず。然るに八郎めは、この程勘當御免を蒙むり、再び出仕を願ふと雖も、疑ひかゝりし者なれば、人質を差出せよと、彈正臺より申し渡されしが、すりや、いよ〳〵人質を差上げ

し上、名鏡受取る役目を乞ひ受け、參入いたす彼れが胸中、方々には何と思はるゝな。

光兼　されば、その八郎と申すおのこは、おのれが守護なす八手の御鏡を、失うたるお咎めにて、高砂やアも謠ひ倦きたる、長々の浪人者。

飛仲　失させ給ふ御鏡は、玉藻の前より大臣へ差上げたれば、手めえは取つたと思ひの外

七郎　僅かの功を笠に着て、勘當御免を蒙むつて、又ぞろ御鏡を受取りの役目、何ともハヤ、面の皮の厚い男でござる。

田熊　サア、その面の皮をかいて、出仕いたす彼れが胸中。方々油斷召さるゝな。

水無　それぢやによつて人質を、差上げたではござりませぬか。その綠丸と申すは、お前の實のお孫。其やうな事云はずとも

官女皆々　いとしがつて遣はされいなア。

トこの時唐樂の音聞える。

七郎　アレ〳〵、最早大臣は、唐土驪山宮のおん催し。

官女　ほんに、樂の音色もたゞならぬ。

田熊　鳥羽の大臣には、玄宗皇帝、御寵愛の玉藻の前には楊貴妃にて、いま酒池肉林の御遊興。

光兼　局たちには、はや〳〵南殿へ伺候あつて

官女　委細心得ました。

　　ト右の鳴り物にて、官女四人奥へ入る。田熊法眼あとを見送り、思ひ入れ。鳴り物は管絃になる。

田熊　何はともあれ、人質を取り置かば、此方に七分の強み。だん〳〵手筈がうまうなつて参るわえ。

飛仲　それは格別、何かに附けて邪魔になるは白川の老大臣。かねて牒し合せし、調伏の計略は如何でござるな。

田熊　その儀も彼の金藤次と牒し合せ、この白絹へ調伏の祕文を、生々と記しおいてござる。

　　ト箱の中より白絹と密書を出して、三人に見せる。

光兼　これは法眼、何をお云ひやる。こりやこれ白絹、どこに文字が書いてござるか。それ〳〵、下々にて致す、どふんとやらにさも似たり。

田熊　ハテサテ、貴殿なぞの知らぬ事。年寄つてもぬからぬ法眼。他人を憚る一つの手段。伴の七郎、密かにこれをお見やれ。

　　ト七郎へ密書を渡す。

七郎　ドレ。……………「田熊法眼どのへ、金藤次」。…………………ナニ〳〵。「老大臣調伏の祕文、他見を憚り、

唐土舜慶泊が薬法を用ひ認めたる間、矢張り白絹と相見え候ふ。尤も人間の血汐を注ぎかけられ候へば、忽ち文筆現はれ申し候ふ。」

飛仲　すりや、この白き絹へ、人間の血汐を注ぐ時は

三人　天晴れ妙計。

ト手紙を法眼へ戻し、思ひ入れ。法眼懐中して

田熊　この白絹は伴の七郎、葎壁門の乾の隅へ、土を穿つて人知れず

七郎　埋める手段、心得ました。

光兼　成る程、法眼には身に引受けて、よく若大臣の肩を持ちやるな。

飛仲　それといふも鳥羽の大臣、まこと先の大臣の胤ならず、素性を糺せば法眼どの

田熊　コレ

ト押へる。この時向うより又五郎、白丁、衞士の形にて出て來り、花道に手をつき、こなしあつて

又五　申し上げまする。

田熊　其方は衞士の又五郎。

三人　あわたゞしい。何事ぢや。

又五　ハッ、只今陽明門へ、田舍の神主らしき者、怪しげなる女を一人同道いたし、法眼樣へ直き〳〵に、お目にかゝりたいと申しまするが、通しませうか。いかゞ計らひませう。

田熊　ムウ。合點のゆかぬ。その怪しげなる女子と申すは、もしや行く〳〵知れざる身が娘の、藻女ではないか。ハテナア。

ト思ひ入れ、又五郎向うを見て

又五　兎かう申すうち、アレ〳〵、その女はおめず臆せず、此ところへ、參りまするワ〳〵。

トてんつゝになり、向うより當作、次郎又、衞士の形、六尺棒を持ち、藻女は前幕の衣裳方々破れ、髮も亂れし體。忠太夫、白き行衣のなり、手甲股引き、旅の形にて、藻女を連れ、出て來り、花道よき所にて

仕丁　下がれ〳〵、下がりをらう。

忠太　アイ〳〵、下がるは下がりやすが、田熊法眼どのに逢つてから下がりをする。

藻女　それまでは一戸上がる。上がるわいな。

當作　ヤア、田熊樣と、わいらがやうな氣違ひ女と

次郎　さほてんの幽靈に、お近附きは無えワ。

二人　下がれ〳〵、下がりをらう。

藻女　イエ〳〵、上がります〳〵。

ト爭ひながら、この人數本舞臺へくる。田熊法眼、藻女を見て

田熊　ヤア、わりや行くへなくなつた、この法眼が娘でないか。

藻女　アイ、わたしや女子ぢやによつて娘。男なら忰。

又五　ア丶、神隱しにならしやつたといふ、法眼樣の御息女でござりまするか。

皆々　成る程、變な調子だわえ。

忠太　ヤレ〳〵、嬉しや。左樣なら、あなたが田熊法眼樣でござりまするか。私しは下野の國、雀の宮の神主、舌切忠太夫と申す者。この度紀州熊野本社へ參詣いたしました下向の折柄、その山中にこの女中が、何かキヨロリカンとしてゐらるゝから、何人だと聞いても、何だか一向他愛の無い事ばかり、親はと聞けば、都の内で田熊法眼といふ者の娘。自らも以前は大館へ宮仕へせし者ぢや、其方都へ連れ參れと、何か大風な物の云ひやう。氣違ひかも知れませぬゆゑ、否とは云つて見たが、何も後生と、今日まで私しが路銀で、やう〳〵爰まで連れて來ましたが、聞けば違はぬお前の娘御、慥かにお受取りなされませ。

田熊　成る程、身共が娘に相違はないが、此奴は那須の八郎といふ者と、不義いたした科によつて、親子の縁を切つて勘當したれば、あかの他人。此方に毛頭かゝり合ひはないぞ。

忠太　エヽ、そんならなけなしの路銀を遣つて、連れて來た上に、………ほんの骨折り損の草臥れ儲けか。こいつはとんだ目にあつたわえ。

又五　マア、何はともあれ、お娘御の、神さそひにあつた話しを

藻女　サア、不義の科から勘當受け、どこを便つて、この身のお詫びをと、くよ／＼と思うてゐるうちに、何か脊の高い山伏樣が來たと思はんせ。そこでその山伏樣が、目をねぶつて、おれと一緒にと、わたしをおぶうて、行く道々も、そつと目を明いて見りや、まん／＼たる海の上。又その雲の上。峯やら、谷やら、越すやうに思うたが、その山伏樣が云ふには、サア、こゝがおぬしとおれが棲家ぢやと云ふを見れば、家は無し、杉の木が、によき／＼とおひ重なり、夜明けて見れば、その山伏樣は鼻の高い大男。ところへ又、鼻の高い坊樣がござんして、おれは僧正坊といふ者、われが嫁入りの仲人ぢや、さて聟といふのが太郎坊、次郎坊は添ひ聟。イヤモ、來る人も／＼、鼻の高い衆ばかり。それから、喜びぢや／＼と云ひ出して、先づ落ち附きの吸ひ物は、蛤でなうて生栗。三々九度の杯ごとも、冷酒にあらで熱湯酒。花聟どのが鼻の先を火傷するやら、亂騷ぎ。まづま

づ、それから、夫婦になつて暮らすうち、亭主の鼻の高いでおけばよかつたに、ふとした事で、わたしや出來心でな、居候ふの木の葉天狗と間男して、追ひ出されると思つたら、いつか熊野の山の奥とやら、そこでこの顏の長い男に逢つて今の譯。わたしが思ふに、大方十日ばかりも、天狗どのと女夫になつてゐやんした。なんとマア、きやうとい女子でござんせうがな。皆さん、愛い奴ぢやと褒めてやつて下さんせえ。

トいろ〳〵仕方話しにて話す。皆々思ひ入れ。

田熊　ヤレ、益體もない物の云ひやう。勘當は致したなれど、法眼が一人の娘を棒に振つてのけた。コレ、娘、われが神さそひになつて、今年で丁度六年になるわやい。

藻女　それはマア、われ知らず、長逗留いたしましたわいなア。

又五　モシ、法眼樣、マア〳〵、何事もなくお歸りになつた娘御樣。めでたい次手に、どうぞ御勘當を

光兼　それ〳〵、麿も烏丸なれば、天狗とは羽根仲間。まんざら他人でもない。只管我れ〳〵に免ぜられ

飛仲　左樣々々。御息女の勘當は、免されて遣はさるゝがようござるて。

田熊　エヽコレ、惡い奴なれども、一旦天狗道に落ちたを腹癒せに、いゝワ、勘當免してくれるワ。

藻女　それでわたしも、鼻が高うなつたわいなア。
忠太　ヤレ〳〵、それでこそ、この忠太夫も、世話甲斐があつて、鼻が高うござります。
當作　イヤサ、鼻はさのみではないが、顔は長いてナ。
忠太　エヽ、お前方は、おれが顔の長いのは、今始まつた事ぢやァねえ。古い〳〵。
又五　ほんに、古いと申せば、お娘御樣のお召し物が、あまり見苦しくなりました。お召し替へになつてはどうでござります。
田熊　イカサマ。コレ、當作、次郎又、娘を長局まで連れて行て、はした女どもに云ひ附けておくりやれ。
兩人　畏りました。
又五　コレ、雀の宮の神主どの、こなたも臺所へ行つて
藻女　飯なと食べたがよいわいなア。
忠太　ハイ〳〵。左樣なら、後方お目にかゝりませう。
當作　サア、ござれ。
ト管絃になり、次郎又、當作先きに、藻女と忠太夫下座へ入る。

田熊　ハテ、不思議にも存命にて、歸る事は歸りをつたが、以前に變る娘が素振り。

又五　折に幸ひ、今日那須の八郎どのもお出でになるとの噂。これでは聟にお取りなさるゝでござりませうな。

田熊　イヤ、聟などには、いつかな〳〵。今日八手の鏡の受取りさへ、法眼が氣に入らぬに、白川の大臣、頭痛の御痛み祈りの爲とは表向き、彼れめは安部の泰親と合體なし、當大臣御寵愛なる玉藻の前を、怪しき女なりと老大臣へ申し上げ、鏡を以て玉藻の前が實性、見出さんとの計略と、この法眼は存ずるが、方々には如何思はるゝ。重き役目を蒙むりしこそ幸ひ、又ぞろ彼れめを

三人　深い所へ

又五　おやりなさるゝ目ろみかな。

四人　ヤア。

ト思ひ入れ。又五郎は手早く田熊法眼の持ち來りし花槍を取つて

又五　此お槍は、即ち海棠の造り花。そんならこれが花いくさの

ト田熊法眼の方へ突き出す。田熊法眼思ひ入れあつて花槍を取り

田熊　衛士に似合はぬ詞の機轉。どうやら役にも……オヽ、幸ひ。

ト田熊法眼は皆々に囁く。

三人 そんなら彼れめを

又五 エ。

田熊 大事を聞いた上からは。……エイ。

ト田熊法眼、礫を打つ。又五郎受け留め、これを見て

又五 こりやコレ、お金。こりやどうだ。

田熊 オヽ、不審は尤も。コレ。

ト囁く。又五郎思ひ入れあつて

又五 アヽ、そんなら今日の花いくさ。若大臣方と名乗つて出て、わざと不覺を

田熊 コリヤ。……合點か。

ト思ひ入れ。

又五 それにしては、あまり不束かなこの金子。

三人 骨は折らさぬ。我れ〳〵も。……エイ。

トめい〳〵順よく包み金を礫に打ち附ける。これを又五郎、一々見事に受け留める思ひ入れあつて

又五　ヤ。又ぞろ三包み。
　　ト につこり思ひ入れ。
　これなら承知。ムウ。
　　ト 兩手を脾腹にあてゝ倒れる。
二人　ハテ、氣の早い。
田熊　それでゆかずば……コレ。
　　ト 花槍の仕込みを拔いて見せる。
三人　そりやソレ、仕込みの
田熊　コリヤ。
　　ト 押へる。よろしく管絃にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、結構なる九尺の唐屋體、緞帳の上下唐垣。芭蕉の葉の見切り。舞臺前所々に寄せ石、これに牡丹の造り花よろしくあしらひ、三味線入り跳への唐樂。この道具とまると、よき所まで押し出す。

ト竹笛の入りたる誂への雲上なる獨吟になり、よきほどに唐樂あしらひにて、三方の緞帳を卷き上げる。こゝに鳥羽の大臣、唐裝束、玄宗皇帝の拵へ。玉藻の前、楊貴妃のこしらへ、好みの通り、笛を調べゐる見得。よき所に誂への臺に八手の鏡を飾り、獨吟一くさり切れる。兩人こなしあつて

鳥羽　雲にはいゝゝせう(?)を帶び、花には姿を思ふ。その唐土の玄宗と、貴妃が浮名を流せしも

玉藻　天の河風小夜吹けて、しかも文月七日の夜、驪山の宮の手枕に、すゐな帝の勅諚。

鳥羽　今宵は星も逢ふ夜にて、天にあつては比翼の鳥、地にあらば連理の枝。

玉藻　それは巫山の朝の雲。

鳥羽　ゆふべの雨と誓ひしに

玉藻　見ぬ唐土のさゞめ言。

鳥羽　それを移して日の本の

玉藻　大臣へ妾が及ばぬ戀。

鳥羽　イヤ、貴妃にもまさる玉藻の前。

ト手を取る。

玉藻　大臣様

鳥羽　ハテ、あてやかな

玉藻　オヽ、恥かし。

ト唐團扇にて顏を隱し、しなだれる。これより又獨吟になり、笛を奪ひ合ふ和らかな濡れの模樣あつて獨吟納まる。この時、下座より田熊法眼先きに、光兼、飛仲太、七郎に官女四人、誂への杯臺、二つ口の銚子なぞ持ち、あとより當作、次郎又、海棠の花槍を持ち出て來り、皆々左右へ別れて住ひ、こなしあつて

田熊　ハテ、大臣樣には、今日御任定めの式。唐土驪山宮の御まなび。

光兼　お羨ましき御遊興

七郎　戰は必定。身方の勝利。

飛仲　御代萬歲と、たゞ〳〵

皆々　おめでたう存じ奉りまする。

鳥羽　オヽ、麿を祝して人々は奏聞。

玉藻　君にもさぞや御滿足。……局たち、早く九獻を、

官女　畏りました。

ト銚子、杯臺を持ち、立ちかゝる。この時、揚げ幕にて

呼び　輔雅君のお入り。

ト呼ぶ。田熊法眼思ひ入れあつて

田熊　ソリヤ

ト當作、次郎又に目くばせする。

二人　ハツ。

ト件の花槍をしごくと、鞘落ちて本身の槍になる。これを掻い込んで一散に向うへ走り入る。

鳥羽　ムウ、すりや輔雅が參入。ハテ、さてはいよ〳〵先大臣の嚴命によつて、任に就かん結構なるか。

ハテ、小ざかしい。

玉藻　もしも若大臣樣の代ともならば、君にはあらぬお別れかと、モシ、自らはそればつかりが、悲しうござりますわいなア。

トしなだれかゝる。

田熊　アイヤ、其お心遣ひは、御無用に遊ばされませう。我れ〳〵がよろしく

四人　計らひ置きましてござりまする。

ト思ひ入れ。又「お入り」と呼ぶ。三味線入り、早下り葉になり、向うより輔雅の若大臣、壺折衣裳、檜扇を持ち、若大臣のこしらへ。進の藏人春俊、上下衣裳にて參内傘をさしかけ、後より金剛太郎重虎、稚兒髷、白丁の露を取り、荒事師のこしらへ。これを當作、次郎又、槍にて取卷き、立廻りながら出て來り、花道にて

金剛　ヤア、我が君輔雅君に、何科あつてこの狼藉。惡くヂタバタ騒ぐが最後、うぬら一々、いけ首を引ッこ拔くぞ。

次郎　ヤア、手向ひひろぐと違命の罪。

當作　そこ一寸も

二人　動きやァがるな。

金剛　何を。

輔雅　麿が舍人に狼藉あつては、先大臣への恐れあり。藏人、とゞめい。

藏人　ハツ。……御諚なるぞ、金剛太郎、必ず荒氣を出すまいぞ。

金剛　でも。

藏人　コリヤ。

トこれにて金剛太郎チッとなり、この人數、しづ〳〵と本舞臺へ來て、よろしく住ふ。

水無　若大臣樣輔雅君には、お早うお出で

官女
皆々　遊ばされました。

輔雅　先大臣白川君、まつた當大臣の兄君お勸めにて、輔雅參入いたす折柄

藏人　日華門のほとりより、思ひもよらず伏せ勢起り、君をはじめ我れ〳〵を、劒戟を以てあの如くお圍みあるは、如何の儀でござります。

鳥羽　オヽ、それは其方に覺えがある筈。弟には先の大臣に願うて、當大臣の任を奪ひ、押して大權を握らん、いはゞこれ謀叛も同然。

光兼　それゆゑ衞士に申し附け

次郎　取圍んだが誤りか。

皆々　なんと覺えがござらうがな。

輔雅　こは思ひもよらぬ方々のお詞。尤も先大臣の仰せには、當大臣政事を怠り、明暮れ玉藻の前が色香に耽り、不德の至りと世上の譏り。斯くの如きは天神へも恐れあり、麿に代つて任に就けとたつての御諚。さはさりながら、親兄の禮を重んじ、强いて辭退なしたれども

藏人　出でて返らぬ御仰せ、若大臣さまも思し煩ひたまふ折から、參上せよとの再度のお使者、さるによつて、進の藏人供奉仕り、參上いたしてござる。

金剛　その神妙な若大臣樣に、謀叛などと名を附ける田熊法眼、この重虎が目に物見せうか。

輔雅　天神地神も上覽あれ、謀叛などとは穢らはしい。必ず御疑念あらせらるゝな。

鳥羽　イヽヤ、その詞僞りならん。其方安部の泰親と合體なし、我れに匹夫の相ありと、退隱の父大臣へ奏聞に及び、剩へ、これなる玉藻の前、八手の御鏡を不思議に取り得、大館へ守護し歸りし、大功ある女なるを、强ひて遠ざけんと計りしも、其方が指圖であらうがな。

輔雅　こは存じよらぬお詞。毫頭以て左樣の覺えは

玉藻　イエ〳〵、無いとは云はせぬ。自らにも畜類の相ありと、あられもない泰親の奏聞。これとてもそなた樣の、妾を遠ざけん、下心からでござりませうがな。

輔雅　何故あつてこの輔雅、左樣の企み致さんや。

玉藻　何ゆゑとはまざ〳〵しい。御身この玉藻の前に心を掛けられ、折に觸れては戀歌の手爾葉、手に取らず戻せしに、さては兄君を失ひ給ひて、自らを内子となして、大任に就かん下心、なんと覺えがござりませうが。

輔雅　エヽ。

ト悒りする思ひ入れ。

鳥羽　ヤア、大任を望むのみならず、予が寵愛の玉藻の前に、心を掛くる憎くき輔雅。檢非違使に命を下し、きつと禁獄申し附けよ。

輔雅　おほろげならぬ御難題、一つも覺えは無けれども、檢非違使の辱めを受けんよりは、我れと我が手に、刃に伏して申し譯。藏人、參れ。

ト立ち上がるを、藏人キッと留めて

藏人　アイヤ、暫くお待ち下さりませう。……御兄弟の御爭ひを、藏人逐一承るに、とやかく論は無益の至り、幸ひあれに八手の御鏡。この日の本は神の御國。あの御鏡に誓ひに立て、曇らぬ心の潔白を

輔雅　いかにも、兄君の御疑念を晴らさん爲、この場に於て神に誓ひを

田熊　アイヤ、その誓言もどかしい。もうこの上は手ばしこく、かねて約束の如く、花いくさに勝たれた方をこそ、大任に就けまゐらせん。當大臣の兵には、卽ち斯くいふ田熊法眼。

ト件の花槍を持ち、身拵へして前へ出る。

皆々　して、若大臣方の兵は何者。

トこの時下座より又五郎出かゝりゐて

又五　若大臣方のお役目は、この衛士の又五郎めが、勤めまするでござりませう。

金剛　イヤ、心知れさる餘人は頼まぬ。若大臣方は、この重虎が、どいつ、どなたの嫌ひはねえ、一番相手になりますべえ。

ト立ち上がる。

輔雅　重虎、扣へい。たとへ老大臣の仰せをもどくとも、望みにあらぬ大大臣の位ゐ。その花いくさに負けるも幸ひ、この輔雅が心の潔白。

玉藻　すりや、いよ〳〵この場に於て、天永のむかし、兄弟宮のためしに習ひ、今、目の前に御位ゐ定め。

鳥羽　それは宿彌と當麻の蹴速、相撲の勝負に位ゐの爭ひ。

藏人　これは優しき海棠の、花の槍にて御位ゐの

田熊　花を咲かすか。

又五　花を散らすか。

光兼　花々しく、色香爭ふ

皆々　花いくさ。
玉藻　それをば御覽遊ばして
鳥羽　いでや賀杯を廻らさん。
又五　とく〳〵用意。
田熊　イザ
又五　イザ
二人　イザ〳〵。
ト三味線入りの白囃子になり、田熊法眼と又五郎、海棠の花槍を持ち、左右へ立別れ、拵へ事の立廻り。又五郎われを忘れて強くなる。田熊法眼と敵役、「違うた〳〵」と仕方して、又「金をやる」といふ思ひ入れ。この度々に又五郎弱くなる仕組み。田熊法眼圖に乘り、手ひどく頭をくらはす。敵役ヤンヤと褒める。又五郎腹を立て、口小言を云ひながら、田熊法眼を手ひどく押し付ける。
田熊　アヽ、これぢや〳〵。
ト金の仕方して見せる。
又五　イヤ、もう錢にも金にも替へられぬ。もう自棄だ。

トきつとなる。

敵役　コレ〳〵、これぢや〳〵。

トあぶ〳〵して金の仕方して見せる。

又五　否だ〳〵。この品返す。約束變替へ。

ト光兼、飛仲太、七郎へ、最前の金を礫に打ち返す。この金皆々の顔へあたり、三人顔を押へて思ひ入れ。

サア、斯うしてしまつて、此方の思ふ存分に、今に腹癒せ。マカショトナ。

トこれより又五郎キツとなり、田熊法眼を弄り物にする立廻りの仕組み。此うち田熊法眼の懐より以前の密書を落す、又五郎手早く懐中して、田熊法眼をしたゝかに打ち据ゑ、又五郎は上の方に、田熊法眼は下の方に、この仕組み納まる。皆々思ひ入れ。

藏人　勝負は見えた。若大臣の勝となつた上からは

女形　御大臣は輔雅君。

田熊　イヤ、まだ殘つて……下郎め、觀念。

ト花槍の仕込みを拔いて、突いてかゝる。當作、次郎作立ち上がり、金剛太郎も敵役も立ちかゝるを、

藏人留める。又五郎は田熊法眼が突きかけし槍の鹽首を取つてキッと引附ける。鳥羽の大臣こらへかれ

鳥羽　緩怠なり。おのれ匹夫め。

ト檜扇を振上げ、立ち身。又五郎左右を留め、この途端に皆々見得よく留まる。よき時分藻女、下げ髪に替へ、蒔繪の掛け盤に槍を持ち、出かゝりゐて、この時中へ入り、鳥羽の大臣をとめ

藻女　これは〳〵、大臣樣、久しぶりでお目もじ致しましたわいなア。

鳥羽　ヤヽ其方は先年、惡神の爲に誘引せられし、法眼が娘の

官女　藻女さんではござんせぬかいなア。

鳥羽　留めるな、藻女。憎くい匹夫め。麿が手に掛け

ト又五郎へ立ちかゝる。

藻女　これは蓮葉な大臣樣、マア〳〵、お待ち下さりませ。……ほんに、蓮葉といへば、あの井戸に桐の葉が落ちてあつた。其方、拾うておぢやいのう。

又五　ハイ〳〵、お庭の掃除は衞士の役。

田熊　約束違へし又五郎め

敵役　よく深い所へやりをつたな。

次郎　その返報は、宮奴仲間が

當作　ちよつと、斯うして。

ト左右よりかゝるを、ポン〳〵と投げのけ、又立ちかゝるを、双方へちよつと締め上げ

又五　ハヽヽヽ。同じ仲間の竹熊手、ほでさしひろぐは、いゝ、ほうきに御苦勞。ドリヤ、お庭でも掃くべいか。

ト兩人を引ッ立て、こなしあつて下座へ入る。

田熊　いらざる所へ娘の藻女、おのれが知つた事では無いワ。すツこんでをらう。

藻女　ハイ〳〵。左樣なら私しは、おまんまを食べてしまひまする。どなたもお許しなされませ。

ト飯を食ひにかゝる。藏人こなしあつて

藏人　たとへ若大臣にはお望みなくとも、一旦の契約なれば、花いくさに勝つたる上は、大臣の位ゐは、輔雅君でござりませうがな。

敵役　サア、そりやア

金剛　但し其方は負け腹で、横車を押さつしやるか。

敵役　サア、そりやア

皆々　サア／＼／＼

ト思ひ入れ。玉藻の前こなしあつて、鳥羽の大臣へしなだれ、囁く。大臣こなしあつて

鳥羽　いかにも、玉藻の前が申す通り、たとへ花いくさには勝つとても、道に背きし不徳の弟、大任に就けんとは思ひもよらず。コレ、先大臣の仰せなりとも、いつかな／＼。たつてとあらば先大臣をも、きびしく押し込め、弟は遠流に處し、その外、麿に逆らふ生公卿ばら、一々罪科に申し附ける。この旨きつと心得い。

敵役　ハヽア。

藏人　こは大臣の仰せとも存ぜず、一旦の御掟も世上の鑑、御異變とあつては世は常闇。

田熊　ヤア、善惡ともに、出でゝ返らぬ君の仰せ。

飛仲　いで、我れ／＼が、目にもの見せうか。

光兼　詞を背けば違命の罪人。

金剛　ヤア、横しま非道の生くら刀

藏人　この藏人に立たうと思ふか。

敵役　オヽ、立てゝ見せう。

金剛　見せよ。

敵役　見せうワ。

皆々　なにを。

ト皆々キツとなる。此うち藻女、飯を食ふことあつて、この時眞中へ出て

藻女　そりや皆さん、無理ぢや〳〵。

田熊　とは又、なぜ。

藻女　オヽ、お腹がくちいわいな。

田熊　ヤイ、娘、又してもわりやァ出しやばつて、何が無理ぢや。それとも譯を存じてゐるなら、それを申せ。

藻女　皆さん方、時節が參りませぬ。

皆々　なんと。

藻女　たとへ人間に幸ひが來ようが、笑ひが來ようが、一寸先きの見えぬは人間の悲しさ。そこを見抜くが、しばしのうちも、天狗と夫婦になつて、一生高い所から見下ろして、あの人は、いつの幾

日に幸ひが來る、この人は、何月の幾日に願ひが叶ふといふ事は、見通しの藻女。それぢやによつて、まだ時節の來ぬうちは、わッぱさッぱと爭ふは、皆さんの無理といふものでござんす。

鳥羽　ムウ。たとへ、臣の位ゐにをつても、禍福の到るは計られぬ人界の常。しばしも魔道に入つたる藻女。して、麿が上なき位ゐの望みはいかに。

藻女　ハイ、叶ひまする。

敵役　して、我れ〳〵が大望は。

藻女　叶ふ段ではないわいなア。

玉藻　コレ、妾が願ひは。

藻女　ハイ、玉藻の前樣の願ひが叶へば大事

玉藻　エ。

藻女　サア、隨分叶ひまする。

田熊　それが定なら、災ひも三年とやら。

藻女　果報は寢て待てと申しまするぞえ。斯う見渡したところが、皆樣のお望みも、きつと叶ひまする程に、どこへなと行つて、裸にでもなつて、晝寢して待つてゐやしやんせ。まだ暑うござるわい

なア。

田熊　そんならこの場は藻女に

敵役　預けて退去。

藻女　若大臣樣にも淸龍殿へ

藏人　お成りとあらば、供奉は我れ〳〵。

輔雅　大臣のお怒り和らぐやう、よしなに賴む、藻女どの。

鳥羽　心知れざる輔雅を、方々警護。

敵役　ハア、。

　　ト こなしあるを、立役支へて

皆々　まづ、入らせられませう。

　　ト 管絃になり、輔雅先きに、藏人、田熊、七郞、飛仲太、光兼に女形附き、金剛太郞も隨つて入る。藻女殘る。引違へて下の方より忠太夫、結構なる蒔繪の飯鉢を持ち、ウロ〳〵して出て來り

忠太　ヤレ〳〵、腹がペコ〳〵するから、茶漬けを一杯下せえと云つても、下々だの、はしたのと安く云やァがつて、構ひ附けねえから、あの臺番所とやらで、飯櫃をちよろまかして來たが、ア、

コレ、そこらに椀でも茶碗でも無いかしらん。

トうろ〳〵してそこらを尋ねる、藻女これを見て

藻女　コレ、其方は飯食ふなら、爰に掛け盤があるぞえ。

忠太　ヤア、お前は天狗さんのおかみさん。ヤレ〳〵、地獄にも知る人、ドレ、ゆつくりと飯でも食ひませう。

藻女　飯ならわしが給仕してやらうわいな。

忠太　それは憚りでござりやす。どうでも馴染の人でなけりや話しが解らぬわい。

ト忠太夫飯を食ひかゝる。鳥羽の大臣これを見て

鳥羽　見れば一飯の食事を致すを、喜見城の樂しみとも見ゆるが、ハテ、下々と申す者は、うらやましいものぢやなア。

玉藻　して、大臣のお樂みわえ。

鳥羽　そりや云はいでも知れた事。この日の本の名所舊跡、又は花紅葉を寄せつくしても、其方の色香に代へる樂しみは無いてや。

玉藻　あの僞りなおことば。過ぎつる夜半も、お情け薄い御諚、自らは、よう聞いてゐましたわいな

ア。

トつんとする。

鳥羽　何を玉藻が申すやら。そちや、無き名の濡れ衣を、麿に着せるのぢやな。

忠太　なんだ、ぬぎおきの濡れ衣を着せる。それよりは、仕立ておろしの浴衣でもかぶせればいゝに。

藻女　これはしたり、飯食ふうちは物云はぬものぢや。それ〳〵、口のはたに飯粒が附いてあるわいな。

コレ、そしてあなたは、大大臣様ぢやぞえ。

忠太　エヽ、大大臣様だ。そりやァ大變だ。こんな事を云つて、罰があたりやしまいか。モシ、御覧な

されませ〳〵。……ドレ、もう一杯替へようか。

玉藻　それぢやによつて、自らには秋の風こ

鳥羽　コレ、なんの其方に秋の風。

玉藻　イヽエ、秋風ぢやわいな〳〵。

忠太　モシ、天狗さんのおかみさんえ。この暑いのに、秋風ぢや〳〵と云はつしやるが、ありやァマァ、

どうしたのだえ。

藻女　ありや大大臣様の女夫喧嘩ぢやわいなァ。

忠太　エヽ、そんならアノ大大臣様も、女夫喧嘩をするものか。こいつは珍らしい。

藻女　サア、大大臣様の女夫喧嘩も珍らしいが、わしが今までゐた、杉の梢の夫婦喧嘩は、又おつなものぢやわいな。大天狗の亭主が、片肌脱いで横を云ふと、小天狗の女房が勇み肌で、中ッ腹を云ひながら、亭主の胸ぐらを取るかと思へば、長い鼻へ取り附いて、やつさもつさ、鼻ねじりが始まるわいなア。オヽ、羽團扇の投げ打ちやら、亂騒ぎ。モシ〳〵、あなた方、女夫喧嘩なら、ちつと投げ打ちの稽古をなされませ。

忠太　それ〳〵、なんでも投げ打ちをしなければ、夫婦喧嘩の形へは入りませぬ。

鳥羽　ムウ。して、その投げ打ちとやらんは、いかやうに致すものぢや。

忠太　投げ打ちの仕やうは、わたしが教へて上げやせう。……斯う向う鉢巻きで、片肌脱いで「エヽコレ此あまア、長屋あるきばかりしやがつて、又よく亭主の讒訴ウ云やがつたな。叩ッくじくぞ、山の神め」……と云ひながら、何でもそこにある物を、手當り次第に抛るのでござりまする。

ト飯櫃の蓋を投げて見せる。

鳥羽　ハテ、いかうむづかしいものぢや。……この久方のあまめが。千早振る神代もきかぬ男宮の、さかしらを云ひ立てる、この足引きの山の神め。

ト思ひ入れあつて、飯つぎを抛り

斯様いたすのか〳〵。

忠太　ハヽヽヽ。マア、そんなものサ。

玉藻　アレ〳〵、大臣にはあのやうに宣ふが、自らは如何いたすればよいのぢや。

藻女　モシ、斯う仰しやりませ。

ト玉藻の前に囁き、教へる事あつて、玉藻の前呑みこみ

玉藻　アレ、大臣の宿六どの、妾が顔を踏み給うて、姫一人をはぐませかねる、働きのない大臣様には飽きた程に、早う去り狀とやらの、仰せを賜はりたいわいなァ。

ト藻女に教はり、こつぶ杯臺なぞを投げ散らす。

藻女　サア〳〵、それでよし〳〵。サア、これからは、仲直りの一段ぢや〳〵。

忠太　それ〳〵、仲直りに一つ締めませう。

鳥羽　それは如何いたすのぢや。

忠太　いかにも唐人の眞似をしてござるとて、仲直りにまで通辭がいるか。

藻女　サヽ、何であらうと、私しどものするやうに遊ばしませ。

四人　ヨイ〳〵。

ト手を打つ。これを見ながら、鳥羽の大臣、玉藻の前、不器用に手を打つ。この音に又五郎、呼ばれると心得し思ひ入れにて、竹熊手を持ち、下の方より出て

又五　ハヽア、お手の鳴つたは、御用でもあるかしらん。

ト下の方へつくばひゐる。皆々これを知らず、兩人は屋體へ上がり、こなしあつて

玉藻　モシ、大臣樣、以前の如く睦しうなつたる上は、この末とてもお見捨てなう

鳥羽　なんの見捨てゝよいものか。この國にも替へられぬ其方ぢやもの。

玉藻　そりや御眞實の仰せでござりますか。

鳥羽　彼の名鏡を誓ひに掛け

玉藻　仇し心のないやうに

鳥羽　其方一人を月雪花

玉藻　片時お側を

鳥羽　離れず、離さず

玉藻　夜のお伽に

鳥羽　比翼の枕。

玉藻　嬉しうござんす。

鳥羽　可愛の者やの。

ト兩人よろしくあつて抱く。

忠太　こればつかりは通辭はいらぬ。

藻女　サヽ。閉帳ぢや〳〵。

ト唄になり、緞帳をおろす。これにて又五郎ウンと目を廻す。忠太夫、藻女悔りしく

忠太　ヤア、あの人は、目を廻した〳〵。

藻女　ほんに、こりや衞士の又五郎ぢやわいな。

忠太　癇癪でも起つたのた。コレ、氣をしつかりと持たつしやい。

藻女　宮奴どの〳〵。

ト兩人して呼び生ける。藻女心附き、そこにある瓶子の酒を、無性に又五郎の口へ注ぎこみ、又呼び生ける。これにて又五郎、やう〳〵氣が附き起き上がる。

忠太　ヤレ、氣が附いたかいの〳〵。

又五　ヤレ〳〵、氣が惡いぞ〳〵

忠太　ヤア、そんなら貴樣は、今のいちや附きを見て

藻女　氣を失うたのかいなア。

又五　イヤ、氣がわるい〳〵と思つたら、カッとのぼせて、つい目を廻したさうだ。

忠太　エヽ、助倍な男だわえ。

又五　大きにお世話でござりました。時に氣が附いて見りやア、何だか剛氣にいゝ心持ちだ。なんでも二合五勺引ッかけたといふ心持ちだ。

忠太　そりやアその筈の事だ。どうしても氣が附かぬから、天狗樣のおかみさんが、やみ雲にこなたの口へ酒をつぎ込んだのだ。

藻女　コレ、お館樣の酒を振舞うたぞや。

又五　アヽ、そんならお杯を頂戴したのだな。何でもいゝわえ。アヽ、いゝ心持ちだ。心持ちはいゝが、氣が惡くつて堪へられぬ。モシ、天狗樣のおかみさんえ。どうぞしてくんなさらねえか。コレコレ、氣味合つて見る氣はねえか。どうだ〳〵。

トだん〳〵醉ひの廻りしこなし。

藻女　そんならこの藻女に、色事せいといふのかや。

又五　平つたく云やァさうサ。コレ、お前も鼻の高い亭主に追ひ出された面當てに、鼻の低い男と色になるのも、又氣が變つてよからう。どうだ、氣はねえか〱。

トしなだれる。

藻女　わしや色事は否いのう。

忠太　そんなら不承知かえ。まだ去り狀取らぬ、しかも天狗樣のかみさんと色事をして、こなた、鼻高どのに七兩二分渙はれるだらうぜ。

又五　鼻の高い人がイザゴザを云やア、顏の長いこなたを渡りにやるからいゝワ。そんならいよ〱、お前は女房には否かえ。

藻女　女房にならう。

又五　エヽ。

藻女　それが、むづかしうなうてよからうぞや。

又五　イヤ、あんまり嬉しくつて又目を廻しさうだ。

忠太　成る程、天狗界を遍歷して來た程あつて、物事の解りは早いな。

又五　そんならいよ〳〵、お前は女房。
藻女　こちの人。
又五　きつとだね。
藻女　オヽくど。
又五　エヽ、畜生め。

ト引寄せて抱く。

忠太　成る程、大館といふ所は、とんだ所だ。あれといひ、これといひ、丁度二度だが、アヽ、面が長い。

トこなし。管絃になり、奥より田熊法眼出かけゐて

田熊　ヤイ、娘、おのれは〳〵。不義の科にて勘當され、それにも懲りず、勘當ゆるすと其まゝ、人もあらうに、最前親に無禮をした下郎めと不義ひろぐ。おのれがやうなすそつぱりが、廣い世界にあらうかい。
藻女　サア、わしもさうは思ふが、下界へおりて男を持たぬと、天狗道へ立たぬわいなア。
忠太　こりやア娘御が尤もだ。亭主の天狗の去り狀は、この忠太夫が取つてやるワ。構ふ事はねえ、男を持たつしやい〳〵。

藻女　コレ、天狗どの、わしや今日から立派を男を持つて、こなさんを思ひ切るぞや。

ト空へ向つて云ふ。

又五　さうだ〳〵。今日からおれが、亭主ぢや〳〵。

田熊　ヤイ〳〵〳〵。心の違うた阿房同然な娘、何と云はうが、素性賤しい下郎めを、この法眼が聟には取らぬぞ。

又五　イヤ、素性は歴とした系圖を持つてゐる。

田熊　して、その系圖は。

又五　即ちこゝに。

ト最前拾ひし密書を出して見せる。

田熊　ヤ、そりやソレ慥かに。

藻女　成る程、こりや好い系圖ぢやわいな。サア、父さん、聟に取らんせ〳〵。

ト寄るを、藻女隔てゝ

又五　取らずば系圖をお上へ出さうか。

藻女　サア、取らんせ。

トギックリ思ひ入れあつて

田熊　エヽ、いま〳〵しい、そんなら下郎を

又五　お前の聟に

忠太　さつさと取りやれ。

田熊　マア〳〵、取つた。

三人　そりや、斯うして取つたワ。

藻女　これから其方を

又五　帯紐解いて

忠太　サツサ、取つたり〳〵。

ト皆々手拍子にて浮かれる。よき時分より光兼、下座より出かけゐて

光兼　怪しい宮奴……捕つた。

ト又五郎へかゝるを、引廻して

又五　鵜の眞似をする烏猫どの。

藻女　鼠でも取らんせ。

ト兩人して光兼を突飛ばす。これにて光兼、忠太夫へこけかゝり、これより兩人猫の見得。田熊法眼と又五郎、藻女　けしかけろ。よろしく。管絃になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、高足の簾御殿、階、高欄、竹の節の欄間、金張り附き、左右網代塀。上の方に誂への井戸。うしろ軒口に結構なる大ぶりの螢籠を吊しあり。簾一杯下りてゐる。こゝに金剛太郎と伴の七郎、以前の白絹を引き合ひ、よろしく見得にて道具納まる。

ト兩人ちよつと立廻りあつて

七郎　こりやア重虎、身が所持なせし白絹に、手をかけて、何とする。

金剛　何とするとは怪しき白絹、この重虎に渡して行け。

七郎　小癪な素丁稚め、邪魔ひろぐな。

金剛　改め見るワ。

ト立廻りのうち、薄ドロ〱になり、發端の怪鳥二羽、日覆ひより下り、件の白絹を咬へ舞ひ上がり、桐の木の梢にとまる。

二人　南無三、小鳥が白絹を

七郎　この旨急いで鷲塚どのへ。

金剛　われには詮議が

ト かゝるを振り切り、一散に向うへ入る。金剛太郎續いて追ひかけんとする。この時揚げ幕にて

呼び　那須の八郎出仕。

金剛　八郎様が出仕とあれば、折を窺ひ彼の白絹。ソレ。

ト 梢に目を附け、心を殘し、奥へ入る。

呼び　出仕。

ト 三味線入りの樂になり、矢張り薄ドロ〳〵、右の鳴り物へ雷序を打込み、所々に狐火出る。向うより那須の八郎、剃立て長上下、大小の姿にて出て來り、花道にて舞臺に目を附け、キッと留まり

八郎　ハテ、心得ぬ。那須の八郎宗重が、身の誤まりの雲晴れて、忝くも今日今宵、館へ出仕の階下に到れば、簾洩る風のかほりこそ、大臣の御祕藏ある、亂菊と名けし名木。ことに集まる數多の狐火。梢に怪しき小鳥の白絹。仔細ぞあらん。恐れ多くも

ト つか〳〵と行き、刀を拔いて切り拂はんとして、桐の木の枝を打ち落す。これにて小鳥白絹を落し、日覆ひへ引いて取る。これと共に狐火消えて、雷序と樂打ち上げる。八郎白刃をチヤツと納め

狐火消えて、小鳥も飛び去り、残るは白絹。誠に思はず桐の一葉、打ち折つたるは、ハテ、心がかりな。

ト簾の内にて

玉藻 桃花緑水に映じ、黄鳥南枝に啼く。……誰ぞ簾を上げい。

官女 ハア、●

ト音樂、唄になり、簾巻き上がると、内に玉藻の前、十二單衣の形に着替へ、褥の上に脇息にかゝりゐる。よき所に結構なる香爐臺。うしろに琴を立てかけ、官女四人左右に附き添ひ、銀の燈臺をともしあり。官女、八郎を見て

御座間近う、何者ぢや。

八郎 ハツ、拙者ことは先達て、御勘氣を蒙むりし那須の八郎宗重。この度先の大臣、御惱平癒ましますこと、柳の大樹を切り折りし、某が功とあつて、御勘氣ゆりて召返され、今宵俄かのお召とあるも、先達て失させ給ふ八手の名鏡、玉藻の前樣御所持との事。その名鏡は某に申し請け、立歸れとある身の面目。八郎宗重、御座を恐れ、只今の出仕。何卒、名鏡、偏へに願ひ奉りまする。

玉藻 すりや此程自らが、和歌の浦へ社參の路次にて、思はず手に入る八手の名鏡、先の大臣の仰せに

よつて、受取る役目の其方が、那須の八郎宗重か。

八郎　ハッ。

玉藻　公卿と武家とは拔群の相違、いはゞ大大臣の御不便、あまり筋目なき自らなれど、內子といはる上からは、受取る役は、公卿、殿上人ならんに、武家おこされし先の大臣の御胸中、何とも以て訝かしゝ。渡す妾は輕くとも、鏡は名におふ日の本の寳。殊更一たび失ひて、詮議とても仕出さず、自らが手に入りしを、ようも輕ゞしく、受取りにおぢやつたの。

トきつと思ひ入れ。八郎もこなし。

水無　內子の逆鱗、御尤もにはござりますが、先の大臣より使ひの武士。

ぬる　役目を受けし八郎が

山路　これまで勘氣のお方といひ

三芳　何卒武士の願ひの通り

水無　お聞濟み遊ばさるゝやう

四人　願はしう存じまする。

ト皆々思ひ入れ。玉藻の前は三寳の鏡を取つて

玉藻　然らばこれに飾りある、名鏡を其方へ

八郎　速かにお渡し下されませう。

玉藻　さほどまでに願ふ八郎、殊に自らに附添ふ者まで、今の勸め。大臣樣へは自らが、御機嫌よしなにとりなしせん。那須の八郎、名鏡すなはち渡すであらう。

八郎　ハツ、家の面目、冥加至極、有り難く存じ奉ります。

玉藻　受取り渡しは禮儀あり。殘らず別間へ。

四人　ハツ。

ト管絃になり、官女四人は思ひ入れあつて奥へ入る。

八郎　然らば名鏡は八郎へ。

玉藻　いかにも。……其方へ渡す名鏡は

ト八郎を上よりよろしく見おろす。雲上なる合ひ方になり、玉藻の前思ひ入れあつて、側にある短册箱より、短册を出して上の句を書き

那須の八郎、其方へ渡すこの名鏡、受取つてたも。

八郎　ハツ。

　　トしと〳〵と階を上がり、件の短冊を受取り見て
名鏡ならぬこの短冊。殊に一首の上の句は
　　ト思ひ入れあつて
「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて」。こりやコレまさしく戀歌の上の句。

玉藻　閨の灯し火消えなんと、思ひ玉藻の胸の火は、藻に棲む蟲の、コレ、あの螢火と同じ事。云ふに云はれぬ恥かしい、啼かぬ螢の我れと我が、身で身を焦す胸のうち、推量してたもいなう。

八郎　すりや、玉藻の前樣には、拙者によみ給ひしこの戀歌。かゝる武骨の東武士、お弄りあるか、お情けない。

玉藻　イヽヤ、自らは僞り云はぬ。まこと其方に今逢うて、大小立派な那須の八郎、殿上には見もやらぬ、きつとしやつた殿振りに、恥かしながら

八郎　憚り多くも、御戀慕あつてか。

玉藻　心のうちを、推量してたもいなう。
　　ト檜扇にて顏を隱す。

八郎　エヽ有り難や。忝なや。いはゞ大大臣の御寵愛深き、この日の本の美人と呼ぶ、玉藻の前樣、御

心かけさせ給はるとは、武士の冥加に餘りし某。

玉藻　すりや、自らへ色よい返事を

八郎　罷りならぬ。

トきつと云ふ。

玉藻　ヤ。

八郎　エヽ、お情けないお心に

玉藻　なんと。

ト合ひ方變る。

八郎　氏も素性も存ぜねども、上なき君に思はれ給ひ、內子とまで仰がれ給ふ、御身を以て不義密通、道に背きし人面獸心。

玉藻　ヤ。

トぎつくり思ひ入れ。

八郎　那須の八郎は誠の武士、左樣な戀歌は存ぜぬ、知らぬ。見下げ果てたる、流石は婦人。お怒りあらば御手討ち。命にかけてもお諫め申す。

ト きつと云ふ。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻 すりや、自らが思うた事もいたづらに、その短册の詠歌さへ、仇となり行く妾が胸の炎さへ、苦しさ、つれなさ。……其方へ戀路が叶はねば、自らとてもその如く、所持する名鏡、なんのマア、破却なすとも渡しはせぬ。その御鏡もコレ、爰に。

ト 三寶に飾りし鏡を取つて見せる。

八郎 ヤヽ、あなたの願ひの叶はぬ時は

玉藻 いつかな鏡は、渡さぬ〳〵。

八郎 すりや、どのやうに願うても

玉藻 返事が出來ねば鏡は渡さぬ。

八郎 その御返事は

玉藻 サア

兩人 サア〳〵〳〵

玉藻 願ひを叶へて、たもいなう。

ト 高欄にもたれ、上より思ひ入れ。八郎こなしあつて

八郎　道を守れば、今日の役目の等閑。叶はぬ時は、又もこの身は埋れ木の、先祖の家を失ふ時節。家を思へば道ならぬ

玉藻　不義と知りつゝ自らが、どうぞ願ひを

八郎　叶へますれば名鏡は

玉藻　すぐに其方へ

八郎　お渡しあるか。

ト八郎思ひ入れ。

玉藻　證據が見たい。

八郎　エ。

玉藻　僞りならぬ證據は即ちこの短册、連續さする

八郎　すりや、私しに戀歌の下の句

玉藻　この短册へ

ト短册を差出す。八郎取つて、思ひ入れあつて、そろ〳〵二重へ上がり、硯を引寄せ、件の短册へ下の句を記し

八郎　憚りながら

ト差出す。玉藻の前取つて、よく／＼見て

玉藻　わが影にさへ別れてしかも」。

八郎　「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて

玉藻　わが影にさへ別れてしかも。」しかも戀歌の、連續せしからは

八郎　名鏡お渡し下さるか。

玉藻　この日の本にかけ替へなき、寶は其方に

八郎　アノ、拙者めに

玉藻　渡されぬ。

八郎　ヤヽ、すりや何ゆゑにお渡しなきぞ。

ト詰め寄ろ、

玉藻　不義者ゆゑに。

八郎　ヤヽ、なんと。

玉藻　大臣の寵愛淺からぬ、妾に向うてこの戀歌、重ね／＼の不義の科人。宿直の者ども、詮議しや。

ト奥にて

藏人　ハア丶。

ト管絃になり、二重舞臺へ輔雅君、奥より平舞臺へ、田熊法眼、浦上飛仲太、進の藏人、めい〳〵手燭を持ち出て來り、八郎を見て

田熊　不義者ありとのたまひしが

飛仲　これに居るのは那須の八郎。

藏人　最早御勘氣御赦免の

輔雅　忠義の武士たる八郎が、御兄君の寵愛ある、玉藻の前へ

玉藻　いやとよ、若大臣のお詞さる事ながら、玉藻の前へ不義を云ひかけ、大臣をはじめ輔雅君を、調伏呪詛の兆しある、那須の八郎は不忠の侍ひ、必ず御油斷なさるゝな。

八郎　ヤア、女と思ひ心を許させ、われを不敵の曲者に、仕立てんとなす企みよな。

藏人　殊に貴殿は先達て、宿直の夜半に失ひし、八手の名鏡、玉藻の前の御手に入り、その身のあかりは立たねども、御惱平癒も貴殿の働き、その功にめでゝ今日も、名鏡受取るその役は、那須の八郎と厳命ありしは、こりや先大臣が御心あつての事ならずや。さるによつて其許にも、一人の悴を人質

に差上げ置く。然るに役目を怠りて、又もや不義の疑ひ受けては、貴殿の武士が立つまいぞよ。

田熊 立つも立たぬも呆痴の八郎、先達て身が娘藻女と、不義を働き、親も許さぬ悴を儲け、今度は以前に上越す大膽、御臺所へ不義なぞとは、道を知らざる大だわけ。

飛仲 この上は官人ばらに申し附け、繩打つて獄屋へ引く。サア、八郎、御前に叶はぬ、きり〳〵爰を

ト立ちかゝるを、八郎立廻つてキッとなり

八郎 イヽヤ宗重、御臺所へ不義なりとは、何を以て

玉藻 その證據は自らへ、今も送りしこの短冊。戀歌と見せたるその下の句を、詠ぜし其方、これが慥かな不義の證據。まつた若大臣を調伏の心ある事察せしは、其方が出仕のその砌り、これなる桐の一枝を、切つて持ちしは、謀叛の心底。桐の葉による秋の夜の、月の鏡を渡さんや。不忠の八郎、これでも其方は云ひ譯あるか。

八郎 ヤヽ、なんと。

輔雅 その枝、これへ。

飛仲 ハアヽ。

ト桐の枝を差出す。輔雅は玉藻の前に持ちし短冊をも受取り、よく〳〵見て

輔雅 「夜や更けぬ、閨の灯し火いつか消えて、わが影にさへ別れてしかも」。こりや正に、忍びあはんず戀歌の心。八郎、近う。

八郎 ハツ。

ト階へおづ〳〵上がるを、輔雅は桐の葉の枝にて八郎を打擲する。八郎ハツと思ひ入れ。後ずさりに、ツカ〳〵と下りて平伏する。

輔雅 いかに八郎、この短册は何事ぢや。戀歌を認め送りしは、云ひ譯もなき其方が越度。まことに尊き桐の一枝、打拂うた不忠者。斯樣の武士を大館に、とゞめ置くも恐れあり。急いで彼れを、遠ざけい。

飛仲 畏つてござりまする。八郎、立たう。

トかゝる。八郎思ひ入れあつて

八郎 某出仕の折に望んで、思ひがけなき玉藻の前樣、近習を遠ざけ、戀歌の上の句。返事なさねば御鏡は、渡すまじきお詞ゆゑ、是非なく記せしこの下の句。それをこの身の科となし、遠ざけんとは心に一物。裏の裏行く玉藻の前。彼の唐土の妲妃にも、おさ〳〵劣らぬその胸中。面は美女にありながら、惡鬼に等しき上からは、悔んで返らぬ申し譯。この場に於て

ト刀に手を掛ける。藏人留めて

藏人　すりや、其許は大館にて

八郎　階下を穢すも恐れあれど、只今の君のお詞、いと重きこの身の罪。藏人、介錯頼み入る。

ト思ひ入れ。藏人キッと留めて

藏人　早まり召さるな、今一應、申し譯さへ立つたる上は

八郎　イヽヤ、二度まで不義の汚名、世上の人の嘲りに、かゝらぬうちに

藏人　コレ、待つた。

ト八郎を留める。この時奥にて

藻女　たわけ者の那須の八郎、待て。

八郎　ヤ、なんと。

藻女　以前の女房藻女が留める程に、マア／＼、待ちなさんせいなア。

ト管絃にて、奥より藻女先きに又五郎、くはへ煙管に莨盆を下げて出て來り、又五郎はよき所に大あぐらにて莨のみゐる。八郎見て

八郎　ヤ、そちや行くへなうなりたる女房藻女。堅固でありしか。

藻女　お前も無事でゐさんす事、倅が事も別條なく、息災などゝいふ事も、爰にゐてゞも遠目から、何もかも、よう見て知つてゐるわいなア。

八郎　すりや其方は只今まで、姿を隱し、いづれにありしぞ。

藻女　アイ、お前と不義の科あらはれ、爰にござんす父さんの、心に違うてちつとの間。天狗道へいざなはれ、これまで覺えぬ女の身で、天狗さんの豆腐とてこい、酒屋へ走れ、駕籠呼ぶ世話はなかつたが、使ひにあるくも枝から枝、人目に見ては女の輕業、木鼠野禽同然に、餘ッほど身輕になつたわいなア。

　　ト藻女の樣子に目を附けて、思ひ入れあつて

八郎　常には似ざる藻女が、詞しどろに蓮葉なる、其ものごしは何とやら……コリヤ、女房。倅緑も成人してナ

　　ト何心なく寄るを、又五郎隔てゝ

又五　オット待つたり、八郎樣。今では女中はわしが女房。衞士の又五郎がお內儀だ。滅多に側へ寄つてもらひますまい。

八郎　すりや藻女が今の亭主、アノ其方が……そりや、誰れが許して。

田熊　その許し手は、この法眼。子まである女房の、ある身を以て忝くも、大臣の内子と寵愛ある、玉藻の前様へ不義云ひかけ、その身を知らぬ不屆き者。その胸中を見極めて、身共が許して娘の藻女、彼れめが妻に遣はしたワ。

玉藻　法眼とても一人の娘、添はす男を恨みてや、下部に遣はす胸中は、不忠不義と見極めつかん。さすればあつて益なき八郎、自らが目通りにて、縛り首うて、田熊法眼。

トきつと云ふ。

田熊　畏つてござりまする。……サア、八郎、腕廻せ。

ト立ちかゝる。

藻女　アヽコレ、父さん、待ちなさんせ。八郎どのと縁切つたわたしが、構ふ事は無けれども、主をお前が手に掛けては、刀の穢れと思ふから、留めるぞえ。それに又、介錯さんしては、刃金がこの上、なまくら物にならうわいな。

田熊　そりや又、なぜ。

藻女　ハテ、八郎どのは戌の年戌の月戌の日戌の時の生れ。その縁を引いてやら、悴も同じ戌の年月日時の生れ。親子ともに畜生の、血筋があると心附き、影を隱したこの藻女。存へて添うてゐるな

れば、女房にまでも畜生の、うつらぬうちに此方から、思ひ切つたは何とマア、智慧のある女ではないかいなア。

又五　成る程、こりやア思ひ切り所ぢや。シタガ、先の亭主の八郎様も、女房子に倦いたやら、鏡を受取る人質に、我が子を先きへ寄越したは、思ひ切つたといふ心。この上女房の藻女が、身腹痛めた悴と思ひ、その子を持参の嫁入りは、おいらは少つと不承知だ。

藻女　そりや氣遣ひさしやんすな。腹は借り物。なんの悴をわしが方へ、受取つてよいものかいなア。

玉藻　こりや尤もな藻女とやらんが詞。かゝる不忠の那須の八郎、現在妻にも見限られ、そちや侍ひの道が立つまい。それでもおめ〳〵命が惜しいか。生害いたす心はないか。

八郎　馴染み重ねし妻にまで、うとまれし身の何面目、命は捨てゝも名は末代、切腹なして

ト刀へ手を掛けるを、藏人押へて

藏人　貴殿がこの場で自殺いたさば、老大臣の名へ不審かゝり、那須の家名は今日限り

八郎　絶えなん事の口惜しさに、いろ〳〵思へど、名鏡お渡しなきゆゑ

玉藻　然らば鏡は相渡さん。

八郎　ヤ、なんと。

玉藻　さほど思はゞ鏡は渡さん、さりながら、自らへ不義いひかけ、桐の小枝を切つたる科、その云ひ譯は、ありや、八郎。

八郎　サ、その云ひ譯は

　　　トつかへる。

藻女　そりや云はいでも、腹切つて、命を捨てたら、云ひ譯も立ちませうが、その命を捨てもせず、役目を勤める仕樣はあれど、こなさん、そこへ心がつかぬか。

八郎　なんと。

藻女　ハテ、お前の生ませた綠丸、殊に役目の人質と、寄越したからは覺悟の上。年端もゆかぬあの子の命、思うて見れば、風の前なる灯し火同然。あの子に腹を切らすれば、その身の潔白、云ひ譯立てる。親子は同姓同血の、これが卽ち大臣へ云ひ譯。

又五　イカサマ、これはいゝ料簡。

藻女　なんと智慧者であらうがな。

八郎　すりや辨へなき子悴を、母の身として殺せとな。

藻女　それぞ卽ち下世話にいふ、親の因果が子に報ふ、道理と思ひ諦めて、親の手に掛け、あの子の介

錯。

又五　それで亭主も疑ひ晴れ、こなたを女房に持つのも安堵。

藻女　また我が子の介錯いたした上、その後にては忰の血汐、肉もろともに親の身で、賞翫させるがよい慰み、それを否むは心に一物。この刑罪は、如何思し召されまする。……なんと、よい智慧ぢやござりませぬか。

玉藻　こりや一しほのよい慰み。八郎、其方は如何思ふぞ。

八郎　縁は切つても藻女は、我が子に腹を切らすを勸め、我れは卑怯の侍ひと、人の誹りを受くるとも親にもまさる忰が忠義、殊には名鏡受取らば、先祖の家も立つの道理。御諚に應じて忰が介錯、切腹さするでござりませう。

玉藻　さある上は法眼用意。其うちこれなる御鏡は、其方へ。

ト田熊法眼へ鏡を渡す。田熊受取り

田熊　ハツ、法眼守護仕るでござりませう……官人。小忰もろとも、用意の品、急いでこれへ。

仕丁　ハツ。

ト管絃になり、仕丁二人、大俎板を吊り出て來り、よき所へ直す。次郎又、當作。緑丸を引ッ立て出

て來り

次郎 仰せに隨ひ、那須の八郎が小悴

當作 お目通りへ召し連れましてござります。

綠丸 ヤア、母さまいなう。

ト駈け寄るを、藻女思ひ入れあつて

藻女 コリヤ、綠、わが身は惡い父親を持つて、思はぬ災難、必ずわしを恨むまいぞや。コレ、八郎どのと緣切つた上は、今から其方の母ではない。さう思うて、サ、ぬしの手しほで成人しや。

ト八郎の方へ突きやつて、思ひ入れ。

綠丸 それでもわしは

ト藻女の方へ行くを、八郎引附け

八郎 イヽヤ、母とは緣無き其方。殊にこの場で某が、子に腹切らせ、親が介錯。必ず未練な死を遂げな。

綠丸 エヽ、アノわしを

ト慄ふ。玉藻の前目を附け

玉藻 子を捨つる藪は今眼前、身を捨つるは、アヽ稀れなもの。いよ〳〵悴を身代りに、腹切らせなば名

鏡渡さん。さりながら、血汐の穢れ、鏡へ恐れ。まことに親の悲しみ、愁ひを拂ふは九献の用意。腹切らするを慰みに、妾は琴を。……その品これへ。

官女　ハア。

ト官女四人は長柄土器と琴を持ち來り、めい／＼よろしく直す。

田熊　緣が切れゝば某が、孫と思はぬ面晴れに、三寸繩にその餓鬼を。

トかゝるを、八郎ちよつと立廻り、藻女は田熊を押へる。此うち八郎、刀の下げ緒にて綠丸を縛り、綠丸「ワツ」と泣き倒れるを、ありあふ手拭ひにて猿轡を掛ける。輔雅思ひ入れ。

輔雅　さはいへ不便の小兒の有樣。親の手づから我が子の介錯。

藏人　思へば殷の紂王の、その心にもおさ／＼劣らぬ

ト玉藻の前思ひ入れあつて、ニツコリとする。又五郎も思ひ入れ。

又五　上々樣は九献の樂しみ。われらはこゝで德利酒。

藻女　他人にあらぬ親と子が、この悲しみは

ト思ひ入れ。

田熊　猶豫いたさば名鏡は

八郎　是非とも身共が

田熊　然らば餓鬼が切腹の、暫時四方をとり圍む

飛仲　その手配りは。……そりや。

仕丁　動くな。

　ト左右より八郎を取卷く。

田熊　キリ〱、介錯。

　ト立ちかゝる。

藻女　コレ

トちよつと田熊法眼を留める。これをキッカケに玉藻の前琴にかゝり、誂への獨吟になる。八郎思ひ入れあつて、緑丸を爼板の上へ仰向けに寢かし、刀を拔いて水をかけ、寢刃を合すことよろしく、件の白絹を出し、白絹を卷き用意する。飛仲太と仕丁取卷きゐて、皆々こなし。八郎は緑丸の腹へ突き立てんとして、いろ〱思ひ入れ。藻女は愁ひを隱し、見ぬふりをしてゐる。八郎おくれて切りかねるこなし。次郎又、當作、この體を見て、左右よりかゝるを、突き退け〱立廻つて、この途端に緑丸の腹へ突き立てる。これまでに唄一くさり切れる。藻女見かねて駈け寄るを、田熊法眼押へて

田熊　コリヤ娘、なんで駈け寄る。

藻女　エ、わたしが思はずさし寄るは、あの琴の音に浮れ寄る

田熊　ヤ。

藻女　浮かれ〳〵し酒機嫌。

又五　浮かれて側へ

藻女　醉うたまぎれに一さしの

ト又寄るを、田熊法眼支へる。この時薄ドロ〳〵かすめて、雷序になり、狐火あまた出て琴の上へまとふ。又五郎はこれと一緒に思はず放心する。狐火、琴の絲の筋を渡る。これより早めたる琴の手になり、その音を出す。藻女は八郎の方へ思ひ入れあつて、扇を開き、醉うたるふりにて舞ひに事よせ、扇にて顏を隱して思ひ入れ。綠丸は苦しみ、おち入る。八郎は思ひ入れあつて、白刃を捨てゝ泣き落す。これで唄一ぱいに切れる。藻女心附き、走り寄つて刀を取上げ、綠丸の首を打落し、白刃をすぐに八郎の目先きへ突き出す。八郎思ひ入れあつて、白刃の血を口にて拭ふ。この時また薄ドロ〳〵になり、狐火消える。又五郎こなしあつて

又十　我が子を親の身替りに、むごい目見する辛抱も

藻女　云はぬは天晴れ。

田熊　ヤ。

ト目を附ける。藻女思ひ入れあつて

藻女　大腰抜けの八郎どの。

八郎　これといふのも名鏡を

ト玉藻の前の方へ目を附ける。藻女は白絹へ目を附け

藻女　誠に我が子を介錯の、白刃を巻きし白絹に

又五　何か怪しき文字の様子。

ト両人引合せ見る。件の白絹へ血汐附きて、文字白くなる。田熊法眼驚き

田熊　さては最前渡したる、あの調伏の白絹が

藻女　エヽ。

田熊　それを

トかゝるを、八郎キツと當てる。此うち矢張り薄ドロ。玉藻の前の顔、仕掛けにて白面の狐になる。

皆々見て

輔雅　ヤヽ、放心なしたる玉藻の前。面變りしこの體は。

藏人　年經る妖狐のその面差し。

藻女　さてこそ變化の所爲なるか。

皆々　事の實否を

ト藻女は件の白絹を持ち、つか〳〵と二重へ上がる。田熊法眼はこれを取らんと行きかゝるを。八郎また當てる。藏人も二重へ駈け上がり、皆々玉藻の前に詰めかけ

輔雅　お目覺まされよ

皆々　玉藻の前。

トこの聲に玉藻の前、フット目を覺まし、元の顏になる。

藏人　いよ〳〵怪しき

トかゝるを、キッとなつて

玉藻　緩怠至極。

ト管絃になり、簾下りる。舞臺に八郎と法眼、飛仲太、仕丁殘り

八郎　我が子の切腹、見屆け召さるゝ上からは、八手の鏡は某へ、お渡しあれよ、法眼どの。

田熊　イヽヤ、この法眼が内子より、賜はりしこの名鏡、渡す事罷りならぬ。
八郎　今更表裏のその詞、是非とも拙者へお渡しあれ。
田熊　たつてとあらば汝も刑罪。飛仲太、彼れに繩打ち召され。
飛仲　心得ました。腕まはせ。
八郎　すりや、どうあつても
田熊　鏡は渡さぬ、こゝ放せ。
　ト立廻つて田熊法眼振切り、正面の簾の中へ入る。八郎追ひ行くを、飛仲太と仕丁支へる。この時下座より金剛太郎走り出て、この中へ入る。
金剛　八郎どの、してお役目は。
八郎　おのれ、法眼、鏡を渡せ。
　ト管絃になり、八郎同じく簾の中へ入る。
飛仲　狼藉働く八郎宗重。二人は童を、合點か。
次郎　心得ました。童め、覺悟。
　ト金剛太郎にかゝり、立廻りのうち、飛仲太下座へ入る。あと三人よろしく立廻り。此うち奥より藏人、

ツカ〳〵と出て來り

金剛　春俊どの。
藏人　玉藻の前の怪しき様子、先の大臣へ申し上げん。この旨其方は宗重へ。
金剛　心得ました。
藏人　さうぢや。

ト早三重になり、藏人は一散に向うへ入る。仕丁、金剛太郎へかゝる。

金剛　こりやァわいらは何とする。
次郎　疑ひうけた那須の八郎。
當作　腰押しひろぐ金剛太郎。
次郎　取つて押へて高手小手、繩かけて引く。腕廻せ。
金剛　小癪な兩人、そこ動くな。
兩人　腕廻せ。

ト立廻り。大ダテあつて、金剛太郎は兩人を下座へ追ひ込み

金剛　大臣の御前、心もとない。憚りうけて

ト階へ踏みかける。この時簾の中にて「エイ」と聲あつて、太刀音する。

ヤ、あの太刀音は

トためらふ。ドロになり、簾の中より差し金にて、鏡飛んで上の方の桐の梢へ上がる。ト管絃になり、簾巻き上がる。中に鳥羽の大臣、那須の八郎の切り首を引下げ、血刀を持ち、藻女、田熊法眼、この樣子を見て、慄へてゐる。桐の梢の鏡、仕掛けにて光りさす。鳥羽の大臣これにキッと目を附ける。小鼓の樂になる。

鳥羽　ハテ、爭はれぬ鏡の威德。魔が居間とも憚らず、劍戟を振る那須の八郎、手討ちになせし血汐の穢れ。俄かの動搖。アレ〳〵、桐の梢に飛行する名鏡。內子がこれに居合さば、取り得ん事もあるべきに、あるに甲斐なき其方は藻女。

ト思ひ入れ。

藻女　大臣の御諚、誠にお道理。內子樣なら飛び去る鏡も、元へ戻らせたまふ噂。わたしは賤しき法眼が、娘なれども、てんぽの皮。この振り袖へ御鏡の

田熊　戻りなば親の面目、この上あらん。娘、鏡を取り得る仕樣は。

藻女　氏も素性もなけれども、內子にあらぬ藻女が、扇へもしや

鳥羽　取り得よ、藻女。

ト藻女持ちたる舞ひ扇にて、思ひ入れあつて招くと、ドロ〳〵烈しく、鏡は藻女の手へ渡る。直ぐに取上げ

藻女　ヤヽ、思はず鏡は藻女が、かざせし袖に戻らせたまふか。エヽ、有り難や、喜ばしや。

鳥羽　出かした藻女。名鏡これへ。

藻女　イヽヤ、名鏡は藻女が、慥かに守護する内子の役目。

田熊　なんと。

トこの時又五郎窺ひ寄つて

又五　鏡は衛士の下郎めが

ト奪ひ取つて行くを、鳥羽大臣引附ける。又振り切つて二重より飛び下りる。鳥羽の大臣續いて駈け行くを、金剛太郎支へる。この間に又五郎井戸の中へ飛び込む。田熊法眼驚き、行きかゝるを、藻女留める。鳥羽の大臣は金剛太郎を振切り、井筒へかゝる。井戸の中より槍を突き出す。鳥羽の大臣これを捕へて引く。これにて忠太夫、四天の形に着かへ、槍を持つたまゝ現はれ

忠太　大臣の俗性。

トかゝるを、鳥羽の大臣、槍を奪ひ取り

鳥羽　緩怠至極。

トきつとなる。

藻女　お騒ぎあるな大臣樣、やんごとなき御身にも、妾が疑ひ。

鳥羽　ヤ、なんと。

藻女　父法眼も天下の敵。

田熊　その高言を

ト抜いて切り附けろ。藻女その刀を奪ひ取り

藻女　今こそ天の、これ御罰。

ト田熊法眼の腹へ白刃を突き立てろ。鳥羽の大臣驚き

鳥羽　ヤア、娘の身として現在の、親を害すは神國の

藻女　この日の本には類ひなき大惡人。助けおかれず、手にかけまする。

田熊　大惡人とは何を以て。

鳥羽　女ながらも辨へなき

藻女　辨へおるゆゑ親どもへ、今こそ門火の庭前に、吊りおく螢の蟲籠を

鳥羽　なんと。

藻女　エイ。

ト簪を螢籠へ打ち附ける。これにて螢籠の前側砕け、螢飛び散る。これを合ひ圖に四方にて、門を固めの太鼓を打つ。皆々思ひ入れ。

鳥羽　螢の飛ぶを合ひ圖となし

田熊　所々にて合はす太鼓の音。

藻女　四門を固むる兼ねての手配り。

田熊　さては身共を

ト寄るを立廻つて、田熊法眼を二重より突き落す。鳥羽の大臣立ちかゝるを、金剛太郎、忠太夫、左右より支へる。

鳥羽　親に手向ひ、狂氣の女。

藻女　狂氣いたさぬ、自らが、親と存じて殺害なす。親を殺すが天下の爲。

鳥羽　親を殺すを天下の爲とは。

藻女　疑はしくば一通り、女ながらも藻女が、詳しく語つてお聞かせ申さん。大臣をはじめ父法眼、すさつてよつく承はれ。

鳥羽　やゝ、なんと。

ト誂への鳴り物。藻女は階に腰を掛け、キッとなつて

藻女　もと自らは、それなる法眼が娘、忝くも大館へ御奉公。然るに若氣の誤りにて、那須の八郎と不義密通、男子を儲けし事現はれ、八郎宗重お咎めうけ、我れもとも〴〵漂泊の折柄、夜毎に怪しき赤氣、大館に棚びく珍事、安部の泰親が内々の訴へ。これ正に、大臣の寵愛限りなき、玉藻の前の素性こそ、人間ならぬ妖狐なりと、聞きしもいつぞや紀の路なる、朧山にて怪しき光明。その時修行者に姿をやつし、又今日久々にて、親を便つて益もなき、戯れ事を云ひ立てゝ、入り込み見るに折よくも、別れし夫子に對面は、天の幸ひ時來り、妖狐の正體見出さんには、戌の年月日時揃ひし親子の血汐、天竺まかだ國金鳳山の藥王樹に、この血を注いで護摩木となし、御鏡を形代に、妖氣の祈りなす時は、極めて惡狐の性を現はす。これ唐土の雲仲子が、照魔鏡の祕法の第一。その戌の年の揃ひし夫子、忠義の爲に命を捨てさせ、あじやらに紛らし自らが、涙一滴こぼさぬは、右の護摩木を成就なし、天下の愁ひを拂はんと、その功ありて計らずも、我が子を切つたる血の

したゝり、この白絹にかゝると其まゝ、怪しき文字は自らが、素性を記して呪詛なす祕法。まこと妾は大臣の胤、藁の上より田熊法眼、水子の悴を産屋に入れ替へ、鳥羽の大臣と尊敬させ、大臣の胤の自らを、娘となして不義と云ひ立て、科に落して殺さん巧み、大臣の胤を絶やさん企て、それ存せしは法眼一人。大臣と申すは、筋目賤しき田熊が悴。その身は知らぬに極まれども、罪科のがれぬ神國の、一時に報ふ天の御罰。思ひ知つたか田熊法眼。……我れ男子にてあるならば、大大臣ともなるべきに、女子に生まれし果敢なさは、故なき旅に頭を下げ、無念の月日を送りしも、斯かる惡事を見出さん爲。女なれども自らこそ、雲の上人の胤なるぞよ。佞人の田熊が一子たる、紛れ僞る似せ大臣、すさつて三拜仕れ。

ト早下がり葉になり、廣振り袖を詞の切れ目〱に脱ぎ、下には白衣やうなる肌着を着こみ、平舞臺を見おろし、白絹を差し附け、キッとなる。鳥羽の大臣、田熊法眼思ひ入れあつて

田熊　ヤア、この身に覺えなき高言。其方は田熊が實の娘、大臣の胤とは何のたわ言。

鳥羽　麿に向つて不埒の詞、僞りとは思へども、もしや實義に極まるや。これぞと申す證據ありや。

藻女　證據は眼前名鏡の、飛び去り給ふを自らが、勿體なくも差招けば、忽ち戻らせ給ふこと、これぞ貴き血筋の證據。その上、紀州熊野の柳の大樹、根先きに埋めし箱のうち、輔雅君調伏の、あの人

形に添へたるは、即ち白絹と同じ秘文の田熊が手跡。

田熊　ヤヽ、すりや柳の木の根元に埋めし

忠太　大樹の柳の切り株より、出でたる人形、添へたる願書。藻女樣は先大臣の御胤にて、當大臣こそは田熊の胤、產家に入れ替へおきたりと、願書に記して調伏呪詛、大願成就なさしめ給へ、願主は卽ち田熊法眼、これ御大事と早速に、藻女樣へ訴へて、熊野で逢うたる體になし、お連れ申した雀の神主。人形二つ、願書に覺えがござらう。

ト釘を打つたる藁人形に、願書も共に出して思ひ入れ。

鳥羽　イヽヤ、この身に覺えない。さはさりながら、一言の答へもなきは、さては田熊か胸中に、覺えあつてか。ナヽ、なんと。

田熊　エヽ殘念や、口惜しや。これまで工みし我が惡逆。いかにも大臣と尊敬せしも、この法眼が實の悴、娘といひし藻女は、先大臣の正しき御胤。二十餘年がその間、それなりに過ぎ行きしが、いかに大臣の胤なりとて、女童に見出されしか。思へば〳〵、チエヽ、殘念やなア。

鳥羽　すりや法眼は、いよ〳〵麿が

田熊　我れこそ實の親なるぞ。

鳥羽　ト無念の思ひ入れ。鳥羽の大臣、田熊法眼をキッと見て
ヤヽ、さては肉身分けし親人といふは……ホヽホイ。
ト思ひ入れ。
エヽ、とは知らずしてこの年月、上なき床を穢したる、ためし少なきさかしら事。思へば思ひ廻すほど、空恐ろしき惡逆無道。さりながら、我れを憫れむ心底は、この身にとつて勿體なき、天の御罰に親子が成行き、せめて苦痛を助けの爲
田熊　ヤ。
ト見上げるを、鳥羽の大臣、小さ刀にて田熊法眼の首を打落す。皆々見て
皆々　現在親を
鳥羽　手にかけたるも惡人の、親と一つでない證據。直ぐに、この身も
ト鳥羽の大臣、手早く腹へ突き立てる。
藻女　さこそあるべきその生害。惡事に組みせぬ、これ潔白。
鳥羽　エヽ、忝い。存ぜぬ事とてこの年月、筋なきこの身に金巾子の、冠りを捧げし天罰の、報うて子として親の介錯。

藻女 それは惡事をうとみし介錯。那須の八郎は忠義の介錯。貴き胤の自らが、知らぬ事とてかはせし枕。臣下の夫となりはてゝ、一子を儲けしその爲に、素性知れたる上からは、一日も連れ添はれじと、家出なして行くへ知らさず。

鳥羽 心づかひの御胸中。それにひきかへ、惡人ながらも親を討つ、世にも稀れなる大惡無道。あの世へ赴き親人の、責め苦を心身に引受けて、未來の苦艱を助くる孝行。

藻女 八郎親子が生血は、妖狐を見出す祕法の第一。

鳥羽 その一言を忠死の宗重、あの世で逢ひなば云ひ聞かせん。

ト思ひ入れ。この時奥にて

呼び 祈りの刻限。

金剛 もはや泰親

藻女 祈りの時刻。

鳥羽 大臣の胤にあらぬ身は、玉藻の前に迷ひしが、素性賤しき卽ち證據。

藻女 妖狐を退け、やがて豐の御代萬歲。

ト八郎の切り首と文字の白絹を取上げ、きつと思ひ入れ。この時、光兼と飛仲太鎭ひ出て

兩人　さては女は

トかゝるを、金剛太郎と忠太夫引取り、立廻つて引附ける。鳥羽の大臣白刃を拔く。これを木の頭。藻女は首と白絹を見て、思はず泣き落す。これをキザミにて、よろしく拍子幕引附けると、すぐにドン〳〵のツナギにて、引返す。

幕

大詰　青龍殿祈りの場

役名――八郎女房藻女實ハ池藻の前。衞士又五郎實ハ木幡彈正景澄。輔稚の若大臣。金剛太郎重虎。秦親門人、辻浦左京。同、峯岡主水。同、松倉外記。同、小泉大和。同、神谷宮内。播磨守安部の泰親。玉藻の前實ハ金毛九尾の妖狐。

本舞臺正面屋根を見せたる道具、大簾一面にかゝり、うしろ結構なる張り物。上の方に破風口、黒格子、すべて青龍殿のかゝり、好みの道具。平舞臺よき所に誂への護摩壇。この四方に竹を立て、注連繩を張り、眞中に北辰の宮、所々に二百八燭を點じ、こゝに安部泰親、白の行衣の形、髮をさばき、幣束を持つてゐる。左京は黃の行衣にて、同じ色の幣を持ち、大和は萠黃の行衣、同色の幣を持ち、主

水は赤の行衣、これも同色の幣を持ち、外記は黑の行衣、同色の幣を持ち、宮內は白の行衣、これも同色の幣を持ち、五人とも淺黃刺貫、烏帽子、湯襷にて、扣へゐる。うしろに半素袍、股立ちの侍ひ四人詰め寄り、扣へゐる。早下がり葉、これにかすめて、ドン〳〵をかぶせ、引返して幕あく。

大和　青黃赤白黑、祈念の卜者

五人　いづれも用意いたしてござる。

泰親　身不肖なれども、播磨守安部の泰親が卜筮、關白どのゝ命に隨ひ、易の表を考ふるに、妖氣頻りに覆ひ、異形大臣に添ひ奉ること眼前たり。

大和　さるによつて、加茂明神へ祈誓なし、蟇目の弦を行ひ

外記　再び先の大臣に勘文をさゝげ

宮內　斯く青龍殿に於て今日の御祈念。

主水　八百萬神こと〴〵く勸進なし

大和　東西南北、中央の役目の我れ〳〵。

外記　用意調ふ上からは、いざ泰親どの

五人　御祈念〳〵々々。

泰親　この上は諸行の方々、玉藻の前をこれへ招待、願ひ奉りまする。

ト この時、簾の中にて

呼び　玉藻の前樣お入り。

侍ひ　すりや、玉藻の前樣のお入りとや。

ト早下がり葉になり、正面の簾を卷き上げる。こゝに玉藻の前、十二單衣、緋の袴の形、半眼に泰親を見て、思ひ入れあつて

玉藻　泰親が最後の願ひ、靑龍殿へ自らを、今日の招ぎ。それへ行て、逢ひませうわいなう。

ト三味線入り、小太鼓の樂になり、玉藻の前、二重舞臺より、しづ〳〵と下りて來り、二疊臺へ直る。後の簾は直ぐに下ろす。

泰親　まづは今日のお役目、御苦勞の御入り。

玉藻　見れば靑黃赤白黑の、淨衣を着たる五人の小者。

五人　魔魅の障碍を祈念の者。

玉藻　いゝや、障碍の祈念に事よせて、こりや自らを、呪咀なすのであらうがな。

泰親　なんと。

玉藻 この程の問答に面目を失ひ、先の大臣へ勘文を、捧げてのこの祈り。再度の問答、又も泰親絶句なさば、其まゝ置かうや。して、その壇の構へは何と。

泰親 祈りの故實、壇上に北辰北斗を飾れるは、この程よりの魔魅の障碍、事明らかに顯はさんため。

玉藻 すりや泰親には、いよ／＼アノ自らを。ムウ。

ト思ひ入れ。これよりノツトになり

泰親 まづ四方三面の壇上には、中央に北斗北辰を勸請なし、七十二府人ヽおヽふヽくヽはヽ(?)童子。

大和 二十八宿を四方に分ち

主水 青龍、朱雀、白虎、玄武は、卽ち五色の御幣束。

外記 八百萬神悉く、四方に發ヽしヽ(?)大天王

宮内 中央には太聖不動

泰親 まつた四角には四天王、二十八燈の明りを照らし、今ぞ障碍の降伏退散。

五人 怨敵退散々々々々。

玉藻 ホヽヽヽヽ。ほんに仰々しい禁裏の御祈念。目にも見えざる魔畜の障碍、その災ひも我れゆゑと、泰親が愚昧の卜筮。その業に暗くして面目を失ひ、又もや再度のこの祈り。不審もあらば

云ひ聞かさん。この上、今日の問答に誤りあらば、その身は元より、安部の家名は、断絶ぢやぞ。

泰親　いかにも。先達ての問答に、天に風雲の變化に水火の異み、人に不時の病ひ、これ定業の因縁とあるゆゑ、いかにも泰親が理に伏せしが、この程和歌の浦へ參籠のその折柄、殊に夜陰にその身より、光りを放ちし怪しき有樣。そも〳〵正法に不思議なし。人間の身よりして、光りの出づべきやうやある。これ怪しむべきの第一なり。

玉藻　ハテ、泰親はよく〳〵愚昧のたわけ者。正法に不思議なければ、人の身より光りを現はすを怪むや。その折柄は勅使といひ、殊に行くへ知れざる重寶、思はず手に入る御鏡の、その奇特にこの身の光明。汝知らずや、そも〳〵元恭天皇の妃、衣通姫は、その身すぐれて美はしく、御身の外まで通るゆゑ、衣通と名く。また聖武天皇の御妃、身より光りを放ち給ふがゆゑに、光明皇后と稱し給ふ。卽ち帝叡感のあまりならずや。それを咎むるものならば、これにても正法に不思議なしと申すやいかに。この場に於て速かに、返答いたせ。サヽ、何とぢや。

泰親　サアそれは

トつかへる。

玉藻　童遊びの祈りの壇上。愚かな事を。

トきつとなる。この時奥にて

呼び　お入り。

ト早下がり葉になり、正面の簾巻き上げろ。中に輔雅の大臣、金冠、白衣の形、側に池藻の前（元の藻女）廣袖、襠衣裳にて扣へゐる。奥より金剛太郎、白丁を引張り、弓矢を持ち出ろ。あとより官女四人、いづれも懐劍を持ち、つか／＼と出て來り

金剛　素性怪しき玉藻の前

皆々　動くまいぞ。

ト取巻く。玉藻の前思ひ入れあつて

玉藻　ヤア、仰々しき女ばら。殊にお入りと思ひの外、輔雅どのゝこの體は。

池藻　その不審尤も至極。大臣には仔細あつて俄かの薨去。

玉藻　ヤヽ、すりや鳥羽の大臣には、果敢なく世を去り給ひしとや。

輔雅　素性は變れど兄君の、薨去によつて宣旨を蒙むり、今日就任の上からは

池藻　改めて大大臣の輔雅君。

輔雅　サア、この上は、たとへ如何ほどあらがふとも、及ばぬ魔魅の正體を

泰親　猶この上は泰親が、祈念の幣束

池藻　邪正をうつすは名鏡の、威德を以て

玉藻　名鏡とは、そりやいづれにありや。

池藻　ヤア〳〵、景純、名鏡守護なし、はや參れ。

ト向う揚げ幕の中にて

景純　お召しに任せて、只今それへ。

ト、ツツカケに、かすめたるドン〳〵にて、向うより又五郎、實は木幡彈正景純、凜々しきなりにて、件の名鏡を持ち、走り出で來り、キツと見得。

泰親　木幡彈正景純

金剛　お來やつたか。

景純　この程怪しき玉藻の前、見現はさんずその爲に、衞士とやつせし某こそ、木幡彈正景純が、守り奉りしこの名鏡。照魔鏡にはあらねども、御身の正體、鏡の威德。

池藻　戌の年度の親子が生血

泰親　藥王樹の護摩木もろとも、炎の中へ。

ト護摩木を取つて、護摩壇の中へ打込む。煙硝火立つ。薄ドロ〱になり、玉藻の前ウツトリとなる。景純、鏡を差附ける。

金剛　蟇目三度の弦音に

泰親　魔性の正體現はさずんば、諸神諸佛を祈りの白幣。

五人　怨敵退散々々々々。

ト金剛太郎は弓矢を取り直す。泰親をはじめ五人の社人、持つたる幣束にて玉藻の前を打つ。これにて玉藻の前苦しみ、大ドロ〱。金剛太郎かゝると、引抜きにて、怪しき好みの姿になり、後ろへ狐火燃える。

皆々　ヤヽ、玉藻の前の

池藻　さてこそ怪しき

景純　變化の有樣。

玉藻　チエヽ殘念や。我れは三國自在に飛行し、天竺にては斑足太子、唐土にては殷の紂王、いま日の本に押し渡り、鳥羽の大臣を失ひ、魔界になさんと近寄りしに、泰親が祈りの徳、殊には八手の

名鏡の、光りに恐れこの身の正體、金毛九尾白面の、姿をやみ〳〵顯はすか。エヽ、殘念やなア。

皆々　さてこそ三國傳來の、妖狐であつたか。

玉藻　大臣をはじめ、引裂き捨てん。

泰親　愚かや、青黄赤白黑の祈りの幣束。

五人　立去れ〳〵。

ト大ドロ〳〵になり、玉藻の前は主水を引ッつかむ。池藻の前と官女四人は輔雅君を守護する。景純金剛太郎は玉藻の前へ詰め寄る。泰親と殘りの社人は祈りにかゝる。玉藻の前、無念のこなしにて、主水を引裂く。この見得にて簾おりる。

金剛　ハテ、爭はれぬ蟇目の奇特。まつた博士の丹精に、眼前奇瑞を顯はせしか。

景純　疑ひもなき加茂の御神、守護なし給ふか。エヽ、忝い。

池藻　これも偏へに神國の、神の御末のかけまくも

金剛　尊とき御代の

皆々　萬々歲。

輔雅　いやとよ、されども斯程まで、自在を得たる老狐なれば、天地の間に縱横なし、猶も障碍をなさ

ん も知れず。

景純 仰せにや及ぶべき。三國自在に飛行なし、國家を惱ます稀代の惡狐。

輔雅 その正體をしとめずして、其まゝおかば天下の大事。

金剛 金殿樓閣殘りなく、手分けをなして狩り出さん。

景純 方々、ぬかり召さるな。

ト奥の方にて、「アリヤ〳〵」の聲する。この時大ドロ〳〵、雷の音。上の破風を蹴破り、玉藻の前、金毛九尾白面の妖狐の姿にて出で、黑雲に乘り、呼び樋の口を乘り、花道の上よき所まで來る。皆々この體を見上げる。

玉藻 一旦姿は顯はすとも、猶も日本にとゞまつて、時節を待つは都より、東にあたつてよき山野、那須野ヶ原へ飛び去らん。

ト玉藻の前、上にて思ひ入れ。大ドロ〳〵、出端の鳴り物にて、雲に乘りたるまゝ向うへ飛び行く。舞臺の人數見得よく、「アリヤ〳〵」と懸け聲にて、よろしく

幕

月出村廿六夜調

つきもでおらろくやのひとふし

月出村廿六夜諷

序幕　道行の場　淨瑠璃「其噂吹川風」清元連中

役名――玉屋新兵衞。三國屋小女郎。植木賣り、寺島の松。猿廻し、三作。家主、茂右衞門。輕子、おかん。玉屋手代、左助。同、平次。小舟乘り、茨の藤兵衞。

一番目、玉藻前中乘りの幕ひきつけると、直ぐに佃ぶしになり、雷の音、夕立の模樣にて引返し。道具出來次第、知らせにつき、佃ぶし、時の鐘、雨車、雷の音になり、舞臺前、雨落より、開帳札、高尾大明神と記したる幟をセリ上げる。すべて永代橋あたり夜の體。幕外へ上の方より、左助、手代の形、玉屋の番傘をさし、平次、同じく手代にて、弓張り提灯をともし、出て來る。下手よりおかん、深川の輕子女にて、丼を叩き、茂右衞門、家主の形、三國屋の丸提灯を持ち、おかんと番傘を相合にて出て來り

左助　迷子の〳〵新兵衞樣やアい。

茂右　迷子の〳〵小女郎さんやアい。

平次　モシ〳〵、左助さん、そこへも迷子を尋ねて來ました。

左助　あの提灯は三國屋のしるし。モシ、お前方は、深川の衆ではござりませぬか。

かん　ハイ、私しどもは、深川の三國屋でござりまする。

左助　そんなら、こなさん方も、何ぞ尋ねに

かん　サア、聞いて下さんせ。わたしが江戸へ送つた、三國屋の小女郎さんが見えぬ。大方玉屋の新兵衞さんと駈落ち。それではわたしが濟まぬから、尋ねに出ましたわいな。

茂右　わしは本所番場町の家主でござるが、わしが長屋から、深川へ通ひのこの女中。聞かるゝ通りの難儀ゆゑ、わしも共々尋ねてやります。

左助　それは御苦勞でござります。わしが主人新兵衞も、家出いたしましたが、そんなら二人の駈落ちと見えます。兎角近所に事なかれでござります。

茂右　家主も、此やうな時が否でござります。それに又、折わるいこの雨。先刻は大きな雷でござりましたな。

かん　ありや通り物でもしたのでござんせう。
茂右　通り物といへば二人の衆も、駈落ちをするなら斯ういふ譯で、暫く影を隠すと
左助　それ／＼、置き手紙してござればよいに。
かん　サア、わたしも其やうに思うたから、小女郎さんの文庫を見たら、此やうな書き物がござんしたわいな。

ト懐より書き物を出して見せる。

茂右　そいつは、てつきり書置きかも知れぬ。早く讀んで見さつしやい。
かん　イカサマ、それがようござんせう。

ト書き物を開き、淨瑠璃の役觸れあつて

茂右　なんの事だ。そりやァ淨瑠璃の役觸れだ。
かん　その淨瑠璃に語られぬうち
茂右　ちつとも早く、この川筋の上手の方へ
左平　迷子の／＼新兵衛様やァい。
茂右　小女郎さんやァい。

ト皆々呼びながら、向うと上手へ入る。知らせにつき、件の開帳札と幟をセリ下げる。時の鐘、雨車大雷にて幕明く。

本舞臺、正面黒幕、うしろ、草土手、秋草のあしらひ、眞中に水神の森のしるしの石碑、これに竹垣、「このあたり殺生無用」の高札、すべて殺生石と見える心。この左右に、三浦屋、上總屋、としるしたる番傘を開き、この蔭に新兵衞、小女郎、雨宿りの體。上の方に淨瑠璃臺、よき所に櫻の立ち樹、葉櫻の吊り枝、木母寺邊夜の景色。幕引きつけると、大雷ドンと落ちる音。これをキッカケに上手の張り物を打ち返す。爰に淸元連中居並び、前彈き無しに直ぐ淨瑠璃。

〽こい仲は、墨を硯のふた思ひ、いつか流れへ捨てられて、星へ手向けの戀の歌〽名にし東の宮戸川、岸邊にうたふ一諷を、聽いての後に死なうなら、せめて百八煩惱の、珠數の玉屋の新兵衞が、繰り言多き思ひ寢の、小女郎も同じ死出の旅、對の姿もしどけなく、濡れたるあとに雨濡れて、仇しが原の草の露、一足づゝに消えてゆく。

ト本釣り鐘、淨瑠璃の合ひ方になり、左右の傘をあげる。爰に玉屋新兵衞、やつし一本差し。小女郎深川藝者にて、道行の心。腰へ褄を差し、兩人對の形にて、雨宿りしたる體。傘を傾け、兩人、雨も

晴れしといふ思ひ入れ。

〽仇の仇たる仇の世も、今宵かぎりの身の上に、冥土とやらは暗き道、闇は綾瀬や向ふ岸、數も限らぬ提灯は、今に二人の新盆と、思へばいとゞ果敢なやと、泣いて心の佃ぶし、吹けよ川風、上がれよ簾、中の小唄と添へ乳して、ぬしの寢顔によう似た嬰兒を、抱いてどうして斯うしてと、樂しみ暮らした甲斐もなう、淺きえにしとばかりにて、行き惱みてぞ立ちどまる。

新兵　思ひがけないあの雷、今死ぬる身ながらも、暫しはいとふ雨宿り。

小女　互ひの袖も濡れた同士、それが高じて今宵の仕儀。所詮添はれぬ事なれば、今の雷さんに、打たれて死んだが增しかいなア。

新兵　その繰り言は尤もなれど、添ふに添はれぬ譯合ひは、其方にも常々云ふ通り、親々より云ひ號けある、あの幼な馴染みのお霜と、添へば其方に義理立たず、また云ひ號けを反古にすれば、親々への不孝。思案は二つ、身は一つ、それゆゑにこそ今の成行き。

小女　わたしとても同じ事。知らしやんす通り、兄さんの心が惡さに、わたしは深川で藝者の勤め。身儘になつて、女夫にならうと思へども、お前に添はせる事はならぬ、いつまでも勤めをせいと無得心。それよりお前と一緒に、末長う未來で添ふが、わたしや嬉しうござんすわいなア。

新兵　これを思へば昨日まで、あの梅本の居續けに、隣り座敷の連れ彈は〽噂にも、氣立てが粋で、なりふりまでも、派手で蓮葉で、しやんとして、かつら男の主さんへ、惚れたが無理かえ〽夏の夜に、呼び通したを内から迫かれ、逢はぬ不首尾の遠ざかり、男の癖ぢやないかいな、惚れたが無理かえ〽餘所に聞ゆるあの唄も、今は我が身にかゝり船、露の二人が袖と袖。

小女　ほんに果敢ない二人が身の上。今更云ふでは、なけれども
〽元この戀は過ぎし夜の、座敷ばかりの附合ひに、ちよつとお顔を三めぐりの、夜の雨より濡れかゝり、吾妻橋と五百崎の、文の知らせと合圖の手管、首尾を小宿に待乳山、睦言つもる床の内、人目の關や鵲の、わたせる橋場の初あらし、晴れぬ心の隅田川、今は濁りに染めやらぬ、蓮の臺に世帯とは、思ひの外の女夫ぞと、離れがたなき風情なり。

新兵　外ならぬ其方の心底。この上は必ず共に、未來は一つ臺の女夫。

小女　嬉しうござんす。そんなら追手のかゝらぬうち

二人　最期の場所へ

ト行きにかゝり、向うを見て

新兵 ヤヽ、あの人影は
小女 何かの様子を
新兵 コレ。
ト兩人囁く思ひ入れ。
〽折に向うへ一筋の、千種の野邊の花道を、浮世渡りはさま〲に、あかしを友に猿廻し、緣日戻りの植木賣り、臺輪をかたげて二人連れ。
ト聖天の鳴り物になり、向うより松、植木賣りの拵へにて、臺輪へかんてらをともし、これを擔ぎ、跡より三作、裁附け、淺黄頭巾、猿廻しの拵へにて、篠竹を持ち、風呂敷包みの上へ猿を背負ひ出て來り
〽これは御存じ寺島の、松は根生ひの江戸育ち、御贔屓うけて大木に、猿が人眞似猿すべり、こゝらで一服ひねり松、一つかしの木、煙草の檜、煙り輪にして釣り葱、連れの二人は扇と扇重ね扇ぢやないかいな、世事の話しも夜の友、浮きに浮かれて來りける。
ト兩人振りあつて舞臺へ來り、新兵衞小女郎を見て
松 ヤア、待て〳〵。この暗い所に、女と男が居るぞよ。

三作　見れば若い二人連れ。して、お前方は

小女　サア、わたしらは……オヽ、それ〳〵、今まで木母寺に居りましたが、連れにはぐれましたゆゑ

新兵　二人で江戸へ歸ります。見れば一人は植木屋どの、連れのお方が背負うてござるは、何でござります。

三作　ハイ、これは猿でござります。

小女　エヽ、氣味の惡い。

三作　怖い事はござりませぬ。猿めも夜更けて眠いやら、よう寢て居りまする。

松　氣味の惡いはお前方、夜夜中といひ、合點のゆかぬ形素振り、こりやァ色だな。

三作　心中と見たに違ひあるまい。

松　心中ならば惡い料簡、未來で夫婦にならうといふのか。

三作　先の世の事は知れませぬ。ハテ、死んで花實は咲きますまい。命があればどうかなりませう。爰の道理を聞きわけて

松　早くこの場を、猿廻し。

〽お猿はめでたやな。

ト猿廻しの合ひ方になり、三作、包みをおろし、猿を抱いて揺り起せども、猿はよく寝たといふ思ひ入れあつて

三作　こちの太夫は、よく寝られたさうな。

松　さりとは此奴、寝ごい奴。

兩人　さりとは〳〵

〽のほゝよほゝさんな又あろかいな。聟入り姿も、のつしりと〳〵と、嫁御の機嫌も直つたりやそこでころりとかへつたり〳〵〽日吉祭りは見事な事よ、四社のおこしのちやうさや、ちやうさ、猿は山王の遣はしめ、三萬三千三百三十、しかも櫻にぶらりと下がつた、只も下がるか、子猿抱いて下がつた〽のほゝよほゝ、さんな又あろかいな、コレ〳〵〳〵、爰から早う戻らんせ戻らんせ、どうやら日和も上がつたぞ〳〵。

トこの文句のうち、兩人、猿は寝てゐるゆゑ詮方なく、松、篠竹を持ち、猿廻しのやうに舞臺を叩き三作悔りして飛びのき、これより三作を猿にして、兩人よろしく振りあつて納まる。新兵衞小女郎、思ひ入れあつて

新兵　ほんに日和も上がつたさうな。

三作　この間に早う、二人の衆。
新兵　若いに似合はぬ、段々との思し召し
小女　御深切の程、有り難うござんす。
三松　なんの、禮には及ばぬこと。
〽必ず短氣を出さぬやう、早くこの場をさる〳〵、心を添ふるこませもの、どうした縁やこれわいさ。
ト荷物を負ひ、この文句にて松、三作、下座へ入る。兩人跡見送り
小女　あれ聞かしやんしたか。他人のお方さへ、あのやうに云うて下されども
新兵　所詮長らへゐられぬ命。
小女　覺悟の上の今際まで、お前に貰うた松山の、矢弓稻荷樣のこのお守り、肌身離さず大事にかけて、これ、爰に。
ト守り袋を出して見せる。
新兵　神佛にも見離され、消えてゆく身でありながら、世間の譏りを思ふゆゑ、最期の身支度、その外にも、形見ごゝろの附け屆けに、大切なる色紙を人手に渡し、預かり手形も取つたれど、今は詮

なきこの成行き。

ト懷より手形を出して見せろ。

小女　是非に及ばぬ二人が仲。

新兵　又もや人目にかゝらぬうち

二人　ちつとも早う

ト互ひに守り袋を預かり、手形を懷中して思ひ入れ。

〽いざと手を取りふた面、我れは浮世に秋の夜の、長き別れとなりけむと、足の歩みも陽炎の命をわれと鷄の聲、明けなばうしや水神の、森に塒の小夜がらす、心も空も影くらき、眞菰隱れや程ちかき、川添ひにこそ着きにけり。

トこの淨瑠璃のうち、兩人傘を持ち、東の歩みより中の間を通り、花道へ來る。淸元連中は、あほりにて返す。正面の道具はよき方へ引いて取る。黑幕を切つて落す。

舞臺正面より奧へかけて、眞崎稻荷を見せたる打拔き舞臺。前側は亂杭、しがらみ、川邊の心。上下に眞菰のしげり、この蔭より四つ手を下ろしたる苫船をよき所まで押出す。すべて隅田川渡し場の體

時の鐘にて道具納まる。

ト此うち兩人舞臺へ來る。

新兵　最後は同じこの川の、底の藻屑とかねての約束。

小女　そんなら爰で

新兵　夜明けぬうちに。

小女　モシ、まだ夜の明けるには間があらう。この世の別れに、新兵衛さん

ト新兵衛の顏を見る。

新兵　それぢやというて

小女　ハテ、大事ないわいなア。

新兵　そんなら小女郎

小女　わたしやどうやら

新兵　ヤ。

小女　オヽ寒む。

ト兩人こなし。傘にて姿を隱す」時の鐘、鴉の聲になり、向うより茂右衛門、以前の形にて丸提灯を

持ち、跡よりおかん附いて出て來り、花道にて

茂右　ハヽア、もう夜が明けるさうだわえ。先刻の手代衆は、木場から砂村の方を尋ねに行き、わしらはこの川筋を尋ねに來たが、もう爰は隅田川の渡し場。こりや、どこまで行くのでござるな。

かん　ほんに、さぞお草臥れでござりませう。お前さんや、わたしどもに、此やうな苦勞をかけるとは憎い奴等。今にも見附けたら、首へ繩を附けて、引摺つて行かにやなりませぬ。

茂右　大事の代物を連れてゆくのみか、新兵衞さんも毎日小女郎の所へ通ふ樣子、定めて勘定も澤山ござらうな。

かん　イエ〳〵、その事はこの間も見て居りますれば、新兵衞が身にも代へられぬ、大事の寶の色紙とやらを質に入れて、わたしが方への勘定は、皆いたしました。

茂右　それはまだしもの事。この上は此方の代物、小女郎さへ尋ね出せば、外に云ひ分は無いといふもの。

かん　御苦勞ながら、もそつとそこらを、お尋ねなされて下さりませ。

茂右　合點だ〳〵。見當り次第に二人の奴等

かん　ひどい目にあはせてやらにやアなりませぬ。

ト云ひながら、舞臺の方を透かして見て

ヤア、向うに見える傘は

ト兩人舞臺へ來て

茂右　ヤア、覺えあるこの傘。

兩人　そんなら爰に二人の奴等。

ト傘を引退ける。新兵衞、小女郎、しどけなきこなし。兩人見て

うぬら、見附けた。

トかゝる。新兵衞、小女郎振り切る。また起上がつてかゝるを、新兵衞、砂を取つて打ちつける。これにて兩人「アツ」と思ひ入れ、新兵衞、小女郎の手を取つて

新兵　覺悟はよいか。

小女　南無阿彌陀佛。

兩人　南無阿彌陀佛。

ト川へポンと飛びこむ。この水音を聞いて、苫船の中より藤兵衞、四つ手引きの拵へにて出ながら

藤兵　今のは慥かに、身投げださうな。

茂右　ヤア。

ト恟りする。藤兵衞、四つ手へ手をかける。木の頭

藤兵　こいつは强氣に重い。

ト腰を入れて網を引揚げる。この先へ小女郎の帶の端見える。茂右衞門、おかん、川を見込む。これをキザミに、ひやうし

幕

序幕返し

牛島東福寺の場
番場町張子屋の場
牛の御前境内の場

役名――玉屋新兵衞。三國屋小女郎。東福寺所化、淨雲。茨の藤兵衞。玉屋庄兵衞。同手代、左助。若狹屋萬七。三國屋吉六。二階廻し、おかん。女髮結ひ、おせん。二位官和尙。家主、茂右衞門。鍛冶屋、鐵五郎。長屋、藤六。船頭、長吉。同、長八。所化、玉觀。同、雲慶。同、綱山。同、綱入。同、綱門。新兵衞云ひ號け、お霜。女乞食、おたつ。同、おてふ。

本舞臺、正面黑き門、この柱にいゝゝゝゝ、立春大吉の札、よき所に葭簀張りの茶屋、すべて牛島東福寺の門先。

爰に鐵五郎、いさみの形にて、女乞食のお辰、お蝶を引附けてゐる。これを鯛入、鯛門、黒衣、禪坊主にてとめてゐる。藤六、やつし。長吉、船宿の若い者、赤飯の荷ひをかつぎ、立ちかゝりゐる。茶屋の亭主、支へてゐる體。弔ひの半鐘にて幕明く。

ト皆々捨ぜりふにて爭ひゐる。直に流行り唄になり、向うより鯛山、所化のこしらへ、黒衣、禪宗の袈裟にて先に立ち、後より白無垢をかけたる蓮臺の輿、定役四人にて擔ぎ、茂右衛門、麻上下、若い者四人、羽織の形にて蛇形の綟燈籠を持ち、ズツと跡より萬七、羽織町人、一本差し。がま吉、丁稚にて袱紗包みを持ち、藤兵衛、やつしの形にて、二升入りの酒と澤庵一本提げて出て來り、ワヤ／＼云ふを見附け、藤兵衛、茂右衛門、先へ駈けぬけ、中へ入り

藤兵　コレサ／＼、乞食嗅アに長屋の手合ひ

茂右　赤飯にも構はず、何をごたつくのだ。

鐵五　こりやア藤兵衛さん、大屋さん、聞ゝなさい。もう佛が來るであらうと、赤飯を素的に急いで擔いでくると、この乞食めらが出やァがつて、まだ施主も食はねえ赤飯を、くれろと吐かすワ。それから起つたごたつきだ。

萬七　アヽ、ぬし達は、赤飯を買つて來たのか。

藤六　左様サ、わたしはお前、假にも店判をついた親分だから、先へ來て赤飯の世話をするのだ。

長吉　わしらも深川からの馴染み、二階剃しの弔ひには、船宿は當り前であらうと、めでたく送つて來たのだ。

藤兵　アヽ、そんなら赤飯をくれろ、ならねえと、それから起つた間違ひか。大概にするがよい。

茂右　意地の穢ないごたつきだ。コレ、兄ィや、てまへ達は今日の弔ひに、施主にしようと、編笠を買つて來たに、よく先へ來たな。施主がなくつてお祭りがつかへるなら、施主はどこぢやと尋ねるには人がかゝるから、據なう大屋が施主になつて來た。コレ〳〵、爰に笠があるから、わざつと冠つて、施主になつて下さい〳〵。

ト腰に提げし編笠を取つてやる。

長藤　アヽ、そんならわしらは、施主になるのかえ。

藤兵　ハテ、先刻も云ふ通り、弔ひを立派にして、施主の少ないのは、冷素麺に辛子のないやうなものと、籤取りにして、貴樣達が當つたではないか。そんなら施主は當り前だ。

鐵五　エヽ、せう事がない。施主になるべい〳〵。ぬし達も冠つて

長藤　イヤ、とつけもない目にあふものだ。

がま　コレ〳〵、藤兵衞さん、あのマァ狩り者のおかんが弔ひにしては、大分仰山なかゝりだな。
長吉　モシ〳〵、あんな蛇を持つて來やした。
鯛山　こりや餘程のお物いりでござりませう。モシ、何病氣で死なれました。
茂右　なにサ、病氣も無かつたが、この頃ちつと氣の揉める話しが出來、夜つぴて迷子を尋ね歩いて、蛤の天麩羅と、西瓜の食ひ合せ、その上蟹をしたゝか食つて死んだのサ。一體この佛は、おらが長屋にゐても、獨り者の事で內へも歸らず、深川の旦那へ通ひ奉公の二階廻し、えて吉も餘ッ程貯めた話し。死ぬ時にわしに云ふには、爰に花に貰つた金が七兩二分あるから、これで素的に弔ひを賑やかにして下されと、遺言をしたから、そこで身分不相應の弔ひを始めたのよ。
鯛人　イカサマ、よい心がけの女中でござる。
たつ　モシ〳〵、お前方は留めッ放しにして、乞食はぶち殺されてもいゝのかえ。
てふ　わつちらは體が痛むよ。アイタヽヽヽヽヽ。
茂右　ハテ、こいつらは、噂を聞いてねだるな。家主が挨拶だから不請しろ。その代り、赤飯はいくらでも食はせる。ハヽヽヽヽ。
たつ　そいつは有り難い。それを規模に、濟ませてしまひませう。

二人　濟ませやせう〳〵。

茂右　嚊アも濟ませるといふ。長屋の衆、不請ながら手を打つて下さい。

鐵五　乞食と手を打つも、おかしな話しだ。

長吉　さうだ〳〵、こいつは少し打てないね。

藤兵　これサ〳〵、乞食はまだ結構だ。かつたいに棒打ちといふ事がある。かつたいと棒打ちをするより、乞食と手を打つが増した。

鐵五　イカサマ、そこもあるわえ。打つべい〳〵。

皆々　アヽ、よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。

鯛山　これはどなたも、遠方御苦勞でござりました。

茂右　サア〳〵、この勢ひで、葬むつてしまひませう。

鯛山　もう一刻延びました。お急ぎなされませ〳〵。

皆々　さうしませう〳〵。サア、佛をやらかせ〳〵。

ト流行り唄になり、輿を舁ぎあげ、この人數皆々門の中へ入る。あと掠めて禪のツトメ。

萬七　時に藤兵衞とん、いよ〳〵あの玉屋の新兵衞めと、深川を駈落ちした、貴樣の妹小女郎は、川から生きて上がつたの。

藤兵　聞きなさい。この間隅田川へ、四ッ手網を下ろして、うと〳〵とやらかした夜明け方に、何やら大きな魚が引ツかゝつたと思つて、引揚げたところが、妹の小女郎、船へ入れて介抱したところ息を吹返したと思ひなせえ。それから内へ連れて來て、養生をさせたら、仕合せと此方のもの。一緒に身投げをした新兵衞は直ぐに往生。妹を助けるとは、日頃わしが正直のお庇、妹が守りに松山樣のお札があつたが、なんと信心の德は、爭はれぬものだね。

萬七　そいつは奇妙だ。そんならいよ〳〵新兵衞めは、川流れで死んだの。

藤兵　死なねえでどうするものた……モシ、それにしても、深川の親方の方へ、五十兩の金をつけば年が拔けます。さうすればお前の女房に、今でもあげやす。どうだ、氣があるかえ。

萬七　氣のあればこそ、兄の貴樣を賴んで……併し、あの新兵衞めが生きてゐるうちは、此方へ色男の株は廻るまいと思つたに、彼奴か死んで話しが出來る。あの野郎が內に、里見のお屋敷から、定家の色紙に鑑定書を添へて、この間下がつたその譯といふは、その色紙の箱を、寸法に合はせてのお誂へ。その箱の出來るまで、玉屋の內に預かりといふ事を聞き出し、新兵衞を騙てゝ、深川

の物いりに、その色紙をおれの手先で質に入れ、死人に口なしと、新兵衛を盗人にして、おれが詮議した面で、その色紙をお屋敷へ差上げれば、一廉の金だワ。その金で小女郎の年抜き。なんと旨い話しではないか。

藤兵　それにしても、妹をわしが内へ置く事を、深川の親方へも知らせてやり、お前の事も大方は話したから、何にしろ五十兩早く拵へて、親方の方を早くつけてしまふがよい。晩には是非親方も、わしが内へ來ますから、お前逢つて、極めてしまひなさいな。

ト思ひ入れ。弔ひの鳴り物になり、向うより吉六、羽織、子供屋の拵へにて出て來り、二人を見て

吉六　イヤア、萬七さん、藤兵衛さん、二階廻しのおかんの弔ひにござつてか。わしも歸りにこなたの所へ寄つて、小女郎が樣子も、よく〳〵見て行かうと、そこで彼奴の弔ひに來たのサ。

藤兵　こりやァ吉六さんか。たつた今お前の噂最中。

萬七　何にしろ、あの身を投げた小女郎は、おれが方で相談するから、その積りでゐるがよいぞよ。

吉六　それは有り難いね。この人の妹だが、身を投げたといふ評判があつては、とても住替への代物どうぞお前、お頼み申しやす。

萬七　金の高も聞いたが、隨分承知だよ。

吉六　イヤモウ、お待ち申して居りまする……イヤ、それはさうとお前さん、大きにお力落しでござりませう。

萬七　そりや、なぜ〳〵

吉六　モシ旦那、お隱しなさるな。あの二階廻しのおかんは、お前さんが內證で、お世話なさるといふ專ら評判でござりました。

萬七　おきやァがれ、何の科であのおかんを

吉六　エヽ、お前お隱しかえ。死んで仕合せ、生きてゐて、この相談をあの女が聞いたなら、蛇になるか、鰻になるか、後の始末がむづかしいね。

萬七　とつけもねえ手合ひだ。コレ、必ず賴むよ。

藤六　承知でござりやす。モシ、吉六さん、弔ひが始まつてゐる。赤飯の世話でもしてやらうか。

吉六　わしもちよつと、帳に附いて來ようか。

藤六　サア、寺へ參りませう。

ト弔ひの鳴り物になり、萬七、吉六、藤兵衞、門の中へ入る。向うより庄兵衞、親仁の拵へ、杖を突き、左助、手代の形にて、供をして出て來り、花道にて

左助　モシ、旦那、若狹屋の萬七樣は、この弔ひにござつたさうにござります。

庄兵　そんなら、あのお人を賴んで、忰新兵衞めが質入れしたといふ、大切な定家の色紙、鑑定書の在所探さねば、玉屋の身代にかゝわる事ぢやわいやい。

左助　左樣でござります。どうぞ萬七樣にお屋敷の手前、日延べの事をお賴みなされませ。

庄兵　イヤモウ、在所が知れねば、おれは忰が代りに、牢へ入らにやならぬわいの。

左助　左樣でござります。サ、お供いたしませう。

ト件の鳴り物にて、兩人舞臺へ來る。この時、門の內より淨雲、長髮なる所化にて、黑衣、禪宗の袈裟、白帷子にて、塗り網代の笠、半紙綴ぢの店經を讀みながら出て來り、兩方ゆきちがうて

淨雲　アヽ、どうぞ今夜は、近所だけ先へしまうて來ようか。

ト行くを、庄兵衞見附けて

庄兵　ヤ、所化の淨雲どのぢやござらぬか。

淨雲　ヤ、これは玉屋の大旦那樣、お暑いに、どちらへお出でなされまする。

ト笠を取る。長髮の體。庄兵衞見て

庄兵　貴僧は、いかう長髮でござるの。

淨雲　ハイ、先達てより暑氣中りやら、誠に持病が手傳ひまして、久しく床につきましたが、この間は餘程快うございます。

庄六　それは御難儀、隨分大事にさつしやるがようござる。

淨雲　有り難うございまする……イヤ、庄兵衛樣、この間噂で承りましたが、新兵衛樣が家出をなされたとやら、その上不慮な噂も聞きましたが、いよ〳〵左樣では、お氣の毒な儀でございますな。

庄兵　忝うございます。どこで御籤を取りましても、命に決して別條は無いと申す事、それが誠に命綱。イヤ、それにつけてもお前の事、先達てよりのお頼みゆゑ、相應な寺があるから、お前をそこへ据ゑようと、檀家の世話人衆の相談で、今朝わしが所へ、掛け金の五十兩、こりやお前を寺持ちにしようと、講中が掛け貯めたこの金。わしも聞かつしやる通りの取込み。こりやお前へ渡して置きませう。コレ左助、今の金を

左助　ハイ〳〵。

ト財布のまゝ五十兩を出し

モシ、五十兩ございます。慥かにお受取りなされませ。

ト渡す。

浄雲　これは〳〵、お志しの掛け金、有り難うござりまする。いづれ私しが據りまして、宜しからうと思し召しまする寺なら、何分お頼み申しまする。お取込みとあればこのお金は、愚僧がお預かり申して置きませう。

ト財布を懐中する。

庄兵　イヤモウ、常から物堅いお前ゆゑ、檀家衆の受けがよいぢや。誠にお前は以前は侍ひ。親御は慥か人手にかゝつて

浄雲　左樣でござりまする、二十ヶ年以前、實の親ども私しと離別いたし、緣ござりまして御家中へ養子。その養父こと、八丁繩手で闇討ちにあひ、直に家は御改易。その砌り、養父曾平次の實の娘三歳になりますが、俄の雨を凌ぐため、家來の小者、何やら荷物の中に寢させ置きましたを、金目な品と心得まして、盗み取られましたとの事。いづれに育ちまするやら、養父橫死と同じ日の由。私しも身の上を悔みまして、斯樣に出家いたせしは、誠に大腰拔け。養父の敵を討ちませぬは、武士の風上にも、置かれぬ奴でござりまする。

庄兵　それはイヤ氣の毒千萬。してお屋敷では、未だ養父を討ちし者の、御詮議はなされませぬかな。

淨雲　イヤモウ、却つて養父を討つたる者が、今更知れましたる時は、私しがマア心の内は、どのやうに

庄兵　ヤ。

淨雲　ハテ、出家の身分、その敵の知れませぬが、愚僧の仕合せ。捕へられなば是非ともお仕置ア、恐ろしや〳〵。南無阿彌陀佛々々々々々々。

　ト思ひ入れ。

庄兵　成る程、こりやァ今更仕様はござるまいてナ……して、お前、これからいづれへござります。

淨雲　ハイ、店經に廻りまするが、あなたはモウ、お歸りなされまするか。

庄兵　左樣でござる。こなたと道まで話しながら、連れ立つて行きませう……コレ、左助、てまへは跡へ殘つて、萬七樣に逢うて、色紙日延べの事を、何分お頼み申して來やれ。

左助　畏りました。お目にかゝつて、是非ともお頼み申しませう。

　ト弔ひの鳴り物、庄兵衞先に淨雲、帳を繰りながら向うへ、左助は門の内へ入る。矢張りこの鳴り物にて、右の道具引いて取る。

本舞臺、禪寺の本堂の體。正面本尊、天人の欄間より、誂への旛大分に下がりある。半鐘の音にて道具とまる。

ト奥より玉觀、雲慶、鯛入、鯛山、黑衣、禪宗の袈裟、所化の拵へにて、鐃鉢、銅羅、誂へのきん太鼓、この道具を運び、佛前へ蠟燭をともす。この時鐵五郎、編笠をかむり、片肌脫ぎにて、戶板に並べし白赤飯のへぎを大分持つて來る。藤六、長吉、これも編笠にて、赤飯の荷ひを持ち出す。がま吉土瓶茶碗を大分取つて來る。長屋の者四人、件の棺を持ち來り、正面よき所の輿の臺へ据ゑる。仕出し大勢出て、よき所へ坐る。藤兵衞、赤飯を盛る。皆々手傳ひ、吉六配る。茂右衞門、萬七、蛇がしら四本を束れ、持ち來り

萬七　この蛇の頭は、どこへ置くのだ〳〵。

ト あちこちして、欄間にかけたる萠黃色の旛に引かけ、誤まつて旛を落す。

南無三、旛を引き落した。

鐵五　その蛇と一緒に、そこらへ寄せて置くがよい。

吉六　玆へ寄越しなさい。詰らぬ物を持つて來たな。

ト よき所へ掛け置く。

茂右　モシ、お所化樣、佛の戒名は何といひます。
四人　おめこう院おかんこ信女。
茂右　覺えよい戒名だ。コレ〳〵、てめえ達は、まだ編笠をかぶつてゐるか。
鐵五　施主だから、いゝぢやアねえか。
藤兵　いつまでも施主でゐるものか。モシ、大屋さん、お前の役だ。口上を云ひなさい。
茂右　成る程、弔ひの口上は、家主の役でござる。

ト思ひ入れあつて

略儀ながら、これより口上を以て申し上げ奉りまする。まづは殘暑のおいとひなう、遠方御苦勞樣に、斯樣に賑々しく葬禮にお出で下さりまする段、輿の中なる佛、おかんこ信女は申すに及ばず、長屋店中總寺中、いかばかりか有り難き仕合せに存じまする。佛の儀は、殊の外慾深き生れ、有金も餘程ござりましたるにつきまして、葬禮の儀も、殊の外念を入れまして、當院の住持とも相談を仕り、昔し天竺にて、釋尊思ひつかれましたる葬禮の儀は、かん〳〵のうきうれんすと申すもの、唐音にて相勤めましたるを、今日弔ひに取組み仕り、御覽に入れまする。亡者の儀も末期に及び、好みましたる儀にござりますれば、棺の内の佛にも、葬禮の儀を聞かせたうもご

ざりますれば、早桶の繩をほどきましてござりまする。まづは住持各〻樣へ、お目見得御禮でござりまする。

トこの時所化四人、輿の臺を下の方へ筋かひに置き、これへ腰をかけ、鯛山は太鼓、雲慶は鐃鉢、鯛入は銅鑼、玉觀は枠にかけたるきんを摺り鉦に見立て、各〻衣の袖を捲り、鳴り物になり、よき程あつて奧より二位官和尙、紫衣、誂へ禪宗の頭巾をかぶり、如意を差し、長き松明を持ち、沓をはき、出て來る。鯛門、所化にて、天蓋をさしかけゐる見得。茂右衞門思ひ入れあつて、鳴り物打ちあげる。

東西々々、高う扣へましたるは、卽ち住持二位官和尙。持ちましたるは祕藏の松明、これは死人に火車の附きましたる節、これにて拂ふの道具。まづは和尙引導に相かゝりまする。

ト二位官和尙思ひ入れあつて、鳴り物掠めて打つ。

二位 それ、つら〳〵おもんみれば、汝かん〳〵のう、きうのきうれんす、きうはきうれん、さしよならえ。西方十萬億土へおかんこ信女。かん〳〵と往生する事疑ひなし。南無阿彌陀佛々々々々々

ト松明にて棺の上へ思ひ入れして

引導とは……ひいはう〳〵ホウ。

ト松明を持ち、上の方の椅子にかゝる。鐵五郎、藤六、長吉、編笠を頭巾のやうに拵へしなかむり、

各自扇を持ち、袖を手へ巻き附け、身拵へして、舞臺眞中へ立ち並ぶ。

茂右　高う迎へましたる今日の施主方へ、お慰みのため、弔ひの踊りを御覽に入れ奉りまする。解りませぬところは、私し口上を以て申し上げ奉りまする。まづは三人の者、踊りにかゝりまする。

ト口上濟む、と三人とも、扇をたゝみ、一時に後へ投げる。四人の所化鳴り物にかゝり、二位官和尚松明を如意にてこすり、胡弓と見せる。直に地へ取り、鳴り物入り。

〽葬禮のふきう往生、お布施がりかんで寺難儀、どそならえ。隱亡、湯灌しよ穴掘り香剃り、あてみんさ、めん〳〵がよくても死んだげな。

ト三人踊る。この音を聞き、棺は段々とうごめき、とゞ倒し、早桶の中よりおかん、女形を坊主に剃りこぼち、頭に所々毛の殘りし鬘。胡麻鹽を附け、摺り鉢をかむり、經帷子にて踊り出る。

〽西方如來さん、そっちうめいたがよい〳〵か、頓死頓病折れ口で、西瓜と天麩羅食傷さ、嘘ならえ。本當のう所化達が

かん　お弔ひでは浮かみんせん。

ト踊り廻る。

〽佛が踊れば和尚も踊る、施主まで浮かれて踊るぞえ、坊主々々〳〵小坊主。

閻魔の前でも踊るぞえ。

三人　オヽサテ合點だ。

ト思ひ入れ。鳴り物早めて打上げる。おかん思ひ入れあり

かん　往生とはツイぽつくり

トこなし。藤兵衞、萬七。おかんを捕へ

二人　この佛は、魔がさした〳〵。

かん　イエ〳〵、魔はさゝぬが、輿の中で蚊がさしたわいな。

藤兵　アヽ、そんならおかんこ信女は、蚊に食はれて生きかへつたか。

かん　アイ、蟹を食つて死んだわたしが、蚊に食はれて生きたわいな。

皆々　イヤア、佛が生きたワ〳〵。

萬七　このおかん佛に生きられては、此方の工面が

かん　ヤ、お前は萬七さん

萬七　こいつは堪らぬ。

ト逃げ出すを、おかん追ひ廻して捕へ

かん　エヽ、男づら、お前マアようわたしを、騙さんしたの〳〵。
萬七　アヽ、コレ〳〵、外聞が惡い〳〵。靜かにしろ〳〵。
藤兵　外聞か當分か知らないが、なぜこの佛は、摺り鉢をかぶつて死んだ。
かん　サア、わたしも合點がゆかぬわいなア。
茂右　ハテ、盆の内に死んだ佛は、摺り鉢をかぶせて置かぬと、あの世から娑婆へ來る精靈が、見附け次第に頭をくらはすとの事。もし疵が附いて、間違ひが出來ると、盆前になつて店子をぶたれるは、家主が合點せぬワ。そこでかぶせたものよ。
かん　頭痛の呪ひ同然なこの摺り鉢。コレ、萬七さん、いつぢやと思ひなさんす。盆前と聞いては、亡者のわたしも云はにやならぬぞや。いつぞや小女郎さんの遊びの金、二階廻しに請合はせ、どうなさんすと催促すりや、お前なんと云はんした。有やうは小女郎は附けたり、其方におれが氣があるゆゑ、毎日通ふと云はんすゆゑ、誠と思うて仇まくら、かはした程のいとしいお前。それぢやによつてわたしが請合ひ、この物前に勘定濟まねば、内證の手前、云ひ譯がござんせぬ。折角死ねば生きかへる。生きたところが深川へ、この姿では歸られず、この世迷へばあの世で迷ふ、ほんに迷ふといふ文字は、誰が書きそめしぞ。エヽ、恨めしい、萬七さん

藤兵　爰らでどろ〳〵

鐵五　合點だ。

ト弔ひの太鼓を打つ。

萬七　エヽ、いゝ機嫌な手合ひだ。コレ、おかん、おらアてまへに請合つてもらつた借りは無いぞ。この佛めは樣々な熱を吹くな。無駄を吐かすと、女とは云はさぬ、ぶッ挫くぞ。はッツけ坊主め。

かん　ナニ借りは無い。エヽ、こなさんはあつかましい。その上に、知るまいと思ふか、あの身を投げた小女郎さんを、コレ爰にゐる藤さんが連れて戻り、相手の男が死んだから、天下晴れて妹を、親方へも渡りをつけ、萬七さんの女房にやると、可哀さうに、いかに相手が死んだとて、その日論見が癪の種。その上、食傷で死んだこのおかん。エヽ、お前方は惡い巧みを

藤兵　コレ〳〵、佛ッ滅多な事を云ふまいぞ。萬七さんは格別、おいらはそんな相談は、知らないぞ知らないぞ。

かん　イエ〳〵、同じ長屋のわしぢやもの、よう知つてゐるわいな。

萬七　よし知つてゐやうが、ゐまいが、もう斯うなつちやア、うぬがやうな死ぞこなひに、お取上げがあるものか。こゝな間拔あまめ。

ト おかんをくらはす。おかん、顏を抱へて倒れるを、茂右衞門初め長屋の者ども腹を立て

茂右　コレ〳〵、この野郎は馬鹿な奴ぢやアないか。貸借りは相對づく。なぜおらが店子の佛をぶちやアがつた。

鐵五　佛をぶたれては、長屋の者が合點しないぞ。

藤六　あの野郎を、締めろ〳〵。

茂右　家主が尻持ちだ。この猿唐人め。

ト 後に立てありし蛇の束れたる藤の搦みしまゝ取つて萬七をくらはす。

萬七　うぬ、大屋め、ぶちやアがつたな。

鐵五　ぶつたがどうした。店子が大屋の尻押しだワ。

萬七　ナニ、大屋の尻を押す。店子の亡者めらが

三人　この野郎め。

ト 天秤棒、或ひは手頃の割り木等を持つて、ぶつてかゝる。萬七も蛇の頭を持つてかゝる。茂右衞門ひつたくる。この時、蛇の頭へ萠黄の藤からみ、皆々の棒を一つにして、大蛇のやうに見える。

藤兵　モシ〳〵、お寺樣、間違ひが出來ました。仲人を呼びに、太鼓でも打ちなさい〳〵。

二位　合點ぢや〳〵。

ト件の鳴り物を烈しく打ち、藤兵衞とめる。茂右衞門、萬七、鐵五郎、吉六、その外皆々件の蛇の頭を遣ひながら、捨ぜりふにて奥へ入る。おかんは萬七を突きこかし、打敷をまくり、下壇の下へ入る所化皆々下座へ入る。二位官和尙殘り

二位　イヤハヤ、怪しからぬ佛ではあるぞ。

トあたりに取散らしたる物を方附ける。かすめて靜かなる禪のツトメになり、向うより長八、高瀨の船頭にて、跡より新兵衞、釣合ひ惡き長八が紺の單衣を着て、三尺帶を締め、悄れたる體にて出て來り

長八　モシ〳〵、お前、何も其やうに、くよ〳〵思はつしやる事はねえわな。

新兵　さうではあらうが、可哀や女ばかり殺しては、どうもわしが、死んだ小女郎へ

長八　ハテ、それだからお前、坊主になつたら、死んだ女中も浮かまうではないか。

新兵　左樣ではござりませうが、アヽ、可哀さうな事をしましたわいの。

ト悄々として舞臺へ來る。長八思ひ入れあつて

長八　ハイ、ちとお頼み申しませう。

二位　これや、小坊よ、案内があるぞ。

　　トこれにて鯛門出て

鯛門　どれからござりました。

長八　ハイ、私しは榎木戸の船乗りでござりまするが、ちつとお願ひがあつて参りました……モシ、お若いの、此方へ来なさい〳〵。

新兵　ハイ、御免なされませ〳〵。

　　ト下の方に塵をひねつてゐる。

二位　して、願ひとは何事でござるな。

長八　イエ、別の事でもござりませぬが、私しがこの間、水神の森の下に、船を附けて居りましたが、暁方でもござりましたか、浪除けの杭にひつかゝつて、苦しみまするこの若いの、引あげて様子を聞きましたら、女と二人心中に、身を投げたところ女は死んで、わしばかり助かりました、殺してくれと云はれますから、そりやァお前無分別、女の死んだが氣にかゝらば、坊主になつて、浮かませてやらつしやるがよいと、やう〳〵その相談にきめて、わしが内へ置きまして、今日連れて参りました。お前様のお弟子になされて下さるまいかと、そのお願ひに上がりましてござり

まする。

二位　それは珍事でござる。二人で身を投げて、一人助かるとは、成る程、こりやまだ壽命のあるしるしでござる。して、女中は死なれましたか。

新兵　左樣でござりまする。

二位　南無阿彌陀佛々々々々々々。

新兵　只今このお人が申されまする通り、二人一緒に身を投げても、汐時の惡いのか、一向に死にきれず、汐の干潟に打上げられ、このお方のいかいお世話。此やうに單衣物まで借りまして、お願ひに上がりました。死んだ女が菩提の爲、私しを、どうぞお弟子になされて下さりませ。それがお願ひでござりまする。

二位　成る程、尤ものお願ひ、隨分と弟子に致して進ぜませうぞ。

長八　それは有り難うござりまする。

新兵　左樣なら少つとも早う、サヽ、お香剃りを、お頼み申します〱。

二位　これは餘り性急な事でござる。その上、こなたの旦那寺がござらう。一應はこれへも屆けねば、致し憎いが、貴殿の寺はどれでござるな。

新兵　ハイ、私しが寺は、慥か牛島の東福寺でござりまする。
二位　ヤ、その東福寺はこれでござるが、愚僧が檀方の内で、貴殿は何屋の何といふ人でござる。
新兵　エヽ、これが東福寺様でござりまするか。私しは玉屋庄兵衛と申す者の忰、新兵衛と申しまする
二位　エヽ、玉屋庄兵衛どのゝ御子息か。これはしたり、お見外れ申した不調法。併し、滅多に寺へは御參詣にはならぬが、元服なされて、初めてゞござりませうな。
新兵　左樣でござりまする。まだ前髪のござる時、參つたまゝでござりまする。
二位　左樣かな。御信心な儀でござるが、とても内へ知らせましたら、よもや親達が、坊主にしようとは申されまい。
長八　こりや邪魔の出來ぬうち、お弟子になさるがようござりまする。
新兵　左樣々々、とても思ひ立つた事でござるから、早う剃つて下さりませ。
二位　左樣に申さるゝ事なら、ようござる、愚僧が香剃り致して進ぜう。
新兵　ハイ〳〵、有り難うござりまする。
二位　コリヤ、小僧、剃刀を持つて參れ。
鯛門　ハイ〳〵。

ト　あたりより箱入りの剃刀を、金盥と共に持つて來る。

長八　これはハヤ、お手づから、お世話樣でござりまする。

ト　この時、二位官和尚、鋏にて新兵衞の元結を切る。新兵衞は散らし髪になる。二位官和尚思ひ入れあつて

二位　念佛衆生せつしゆふせ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト　手合せする。この時分、奥より左助出かゝり、よく似た人と思ひ、窺ひゐる。新兵衞、髪を揉みしまひ

新兵　モシ、お所化樣、毛請けを貸して下さりませ。

綱門　ハイ〳〵。

ト　そこらを尋ね廻りても、團扇も無きゆゑ、佛前にある七本卒塔婆を持ち來り

毛請けは見えませぬ。これでもお使ひなされませ。

ト　渡す。

新兵　これは七本卒塔婆ではござらぬか。

二位　左樣でござる。併し、卒塔婆で香剃りの髪を請けまするも、これも佛緣でがなござらう、南無阿

彌陀佛々々々々々々。

ト既に剃りにかゝる。左助、この時走り寄り

左助　アヽ、モシ／＼、お待ちなされませ／＼……ヤア、お前は若旦那樣でござりまするな。道理こそ知れませぬ筈。モシ／＼、お前樣のお行くへが知れませいで、お內は誠に亂騷ぎ。サア／＼、お歸りなされませ。

ト手を取りにかゝる。

長八　アヽ、コレ／＼、そんならこのお人は、お前の旦那か。

左助　左樣でござりまする。

新兵　コレ／＼、左助、とてもモウわしは、內へとては歸らぬ程に、この段を親仁樣へも、よう話してくれ。そして、お屋敷から參つた、あの色紙と鑑定書は、小女郎が花代につまつて、あの出入り朋輩、若狹屋の萬七、あの男を賴んで質入れしたほどに、委細はあの萬七に聞けば解るゆゑ、よいやうにしてくりやれ。あの品も、お屋敷の預かり物と知らば、なんの質に置かうぞ。こればかりは云ひ譯ない。誠に、內に安閑としてゐると、あの云ひ號けのお霜と、祝言をせねばならずそれでは小女郎へつがうた詞が反古になるゆゑ。あの女と二人、派手な衣裳を拵へて、心中して

と身を投げたに、女は死んで、わしは助かる。よく〳〵な業人。もう〳〵、浮世に飽いて、コレこのお方を頼んで、坊主になるつもりぢやほどに、一家親類へこの由を云うてくれ。サア、香剃りをお頼み申しまする。

左助　アヽ、モシ〳〵、それはお前様、餘りな思ひ切りでござりまする。あの色紙の行くへが知れませぬので、お前様が盗んで駈落ちしたのであらうと、誰れ云ふとなく悪い噂。あの品が出ませぬと、大旦那は入牢とならうも知れませぬ。今一度お歸りなされませ。

新兵　サ、それ程の御難儀ぢやによつて、出家するのぢや。今更内へづか〳〵戻つて、ひよつと物事がめでたうゆけば、おれはあの内の跡取りではないか。その時はソレ、嫁を取れと云ふワ。それ、その嫁は誰れぢや、云ひ號けゆゑお霜を持てと、親類が勸めるワ。ソレ、その時は、死んだ小女郎へ、どうして義理が立たうぞ。それぢやによつて、矢ツ張り坊主ぢや。サ、お香剃りを〳〵

左助　成る程、これは御尤もでござりまする。

長八　どうでこの人は、死神ではなうて、坊主神に見込まれたのであらう。矢ツ張り坊主になるがようござらう。

左助　不料簡な事をなさるゝよりは、坊主の方が増しでもあり

新兵　それぢやによつてこの通りを、親類内へ話してくれ。どう思つてもおれは

　　トこのせりふ云ひながら、また月代を揉みにかゝる。この毛請けに使ひし七本卒塔婆の裏に書きし、戒名、施主の名を書きたるを新兵衞見附けて、思ひ入れ。

ヤ、「俗名玉屋新兵衞菩提のため、施主三國屋小女郎」……ヤヽヽヽヽ、似寄りの名もまゝあれど、玉屋新兵衞菩提のためと書きたる上、施主は三國屋小女郎。誠に命日は……ヤ、今月今日。もしもこの程二人連れ立ち、身を投げたその時に、あの小女郎が助かつて、わしは死んだと思ふから、お寺へ頼んで寄越したか。そんなら、彼奴は死にもせず、生きてゐるかえ〳〵。

　　ト俄に腹の立つ思ひ入れ。おかん、打敷を上げ、窺ひゐる。

二位　それに致せこの卒塔婆は、どこから頼んでこの寺へ

　　トよき時分より鯛入立出で

鯛入　ハイ〳〵、その卒塔婆は、先程女髪結ひのおせんとやらいふ女中が、深川から參つたというて、この香奠を添へて、戒名も無い佛、川へはまつて死んだ男、まだ戒名もない程に、よろしくお附けなされて、御回向をお頼み申しまするど、香奠と一緒に持つて見えました。慥か小女郎といふ藝者から寄越されました。

ト香奠を新兵衞へ渡す。

二位　もしやお心當りはござりませぬか。

ト新兵衞、香奠を見て

新兵　ヤ、女の手跡で回向料、三國屋小女郎と書いたる手は、こりや死んだと思うた小女郎が手ぢや。

そんなら彼奴は、死なずにゐたかいやい〳〵。

ト腹立てし思ひ入れ。おかん、前へ出て

かん　新兵衞さん、小女郎さんは、死なぬぞえ〳〵。

皆々　ヤ、化け物ぢや〳〵。

ト逃げ出す。

二位　コレ、この女中は、葬禮の半に蘇生した佛。

かん　二階廻しのおかんぢやわいな。新兵衞さん、恥かしうござんす。

新兵　はんにこなたは、深川のおかんぢやないか。どうしてマア

かん　サ、わたしが俄にとりつめて、往生したも、お前や小女郎さんが、身を投げて心中と、聞くとそのまゝ持病の癪。おいとしいお二人と、思うてゐるうち、合長屋、兄の惡者藤兵衞が、内へ連れて

來たのは妹の小女郎、あの惚れてゐる萬七を、内へ引ッ込み深川の、年の殘りも勘定して、萬七どのへ女房にやると、聞くとわたしはとりつめて、死んだ葬禮、思はぬ蘇生。そんならお前も死なぬのかえ。小女郎さんにこのおかん、お前も息災で、こりや近年は、死んで生きるが流行りと見えた。

新兵　それでわかつたあの小女郎め。わしに愛想が盡きたゆゑ、心中と僞つて、もしか死んだその跡で、あの萬七めが女房になる約束で、あの兄めと云ひ合せの惡だくみ。おのれマア、どうしてくれうぞ。

ト腹の立つたる思ひ入れ。

左助　さう聞いては、腹の立つのも御尤も。

長八　寢返りをした女め。振り込んで、ぶッ挫け〳〵。

ト長八立騷ぐを二位官和尚とめて

二位　アヽ、コレ〳〵、人の過ちある事を、出家が聞いてそのまゝに。後では寺の名の出る事。どうか仕樣が

新兵　どうしたらマア腹が癒よう。あのマア情なし藝者づらめが。腹が立つわえ。

かん　サ、その腹立ちを晴らす仕様は。モシ、わたしが智慧は、斯うぢやわいな。

ト新兵衞へ、とつくりと囁く。

新兵　アヽ、そんならおぬしが經帷子、胡麻鹽あてゝ、彼奴が内へ

かん　幸ひ盆の十三日、その新盆を幸ひに、ヒユウドロ〳〵と出かけたら、なんぼ氣強い藝者でも、癪を起すか、目を廻すか。

新兵　それで彼奴が死にをれば、手も濡らさずに戀の意趣。見かへられたる萬七めも、どうぞ首尾よう目を廻させ

かん　男も女もとり殺せば、お前もわたしも恨みが晴れ、濡れ手で粟とはこんなもの。

二位　佛が二人出來たなら、その弔ひで寺は大慶。

左助　日が暮れたなら早速に。

かん　その幽靈の稽古が肝腎。

新兵　親仁の年忌に、幽靈は如何な事ぢやが、これも追善、手向けの水。

かん　わたしが脫いで

長八　早く支度を

新兵　ドリヤ、着替へようか。

ト新兵衞帶を解き、おかん、帷子を脱ぐ思ひ入れ。長八、左助、皆々手傳ふ思ひ入れにて、捨ぜりふよろしく、時の鐘、鐃鉢の音にて、道具廻る。

本舞臺、番場町張子屋の體、二重舞臺、軒に盆提灯を吊し、下の方勝手元、揚げ流し、水瓶、その外臺所道具の書き起し。よき所に半窓。その前に精靈棚、門口に小女郎の衣裳を棹に通し、その側に件の守りと、松山のお机、竹に掛け干してある。門口に張子の達磨、下張りのまゝとり散らし、上の方障子屋體、筒行燈をともしあり、すべて七月十三日の夜、鐃鉢、甚句の合ひ方にて道具とまる。

ト萬七、吉六、酒機嫌にて踊つてゐる。藤兵衞、達磨の干したるを片寄せてゐる。あたりに誂への銚子、杯をとり散らしてある。

藤兵　モシ〳〵、お前方も、いゝ加減に踊りなさるがいゝ。盆前だに、よい機嫌な手合ひだ。

吉六　これは兄貴、どうだ。いゝ機嫌どころか、おいらは小女郎の相談がきまれば、盆前に五十兩取れるもの、誠に大浮きさ。

萬七　その盆前にさしかゝつて、金のいるのはおればかり。爰にゐるあの吉六どのゝ方も、年拔きの五

十兩。兄い藤兵衛も、小女郎を貰ふ支度金が

藤兵　わしが妹の支度金は、まだ外に五十兩。そいつを取つても、今直に上げるのではない。當分わしが内で、藝者に出すつもり。餘ッほど稼いだ上に、お前の方へ進ぜますワ。いはゞ女房にやらうといふ、その五十兩は手附といふものだ。

萬七　それぢやァ深川の年抜きが五十兩、兄貴が五十兩、都合で百兩、金は出しても小女郎は、矢ッ張り町藝者。あの子に逢ふ度に、花代が出るのか。

藤兵　左樣サ。茶屋小屋は勿論、お前のお内から呼びに寄越さしつても、花代を取りやす。その代りにころばすのは、お前の物だから勝手にするがよい

萬七　そりやァ又、世話をする旦那だもの、そこらは目こぼしもあらう。何にしても高い代物だ。

藤兵　高い筈サ、明日から雇ひに出すにしても、丸裸だわな。帶も着物も川へはまつたから、あの通り汐水に染まつて、毎日干すが、しめりが取れぬ。

吉六　そりやァその筈サ。併し、お月樣で干したといつて乾くまい。それに、あの守りやお札も濡れたのか。

藤兵　ありやァ妹が懐にあつた、矢弓樣のお札サ。時に今夜は、お迎ひ火を焚くものだ。このマア干

した達磨も片寄せて置かうか。

ト達磨を隅へ片寄せる。

吉六　アヽ、そりやァ達磨だの。わしは悪い目だ。西瓜船が着いたと思つた。

萬七　何を、無駄を云ふな。して、小女郎は内か。

藤兵　アヽ、いま髪を結つてゐやす。コレ、妹や、よくば來さつし。妹や〱。

ト簾の内にて

小女　アイ〱、いま參りますわいな。

ト合ひ方になり、藤兵衞が大縞の浴衣を着て、平括けの帶。女髪結ひおせん、手を拭きながら出て來り、二人を見て

これは深川の親方さん……萬七さん、ようお出でなされましたな。

萬七　おせん坊、爰まで結ひに來るのか。

せん　アイ、どういふ事か、小女郎さんは、わたしが結うてあげぬと、外の手では氣味が悪いと云うてな。

藤兵　モシ、御覧じませ、妹が形はわしが浴衣サ。とんだ化け物だね。

萬七　併し、別條もなく助かるとは、それも今兄貴が話した、矢弓様のお守りの所爲であらう。イヤ有り難い稻荷様だ。誠に仕合せな事だ。

小女　お稻荷様は有り難うござんすが、有やうはあの時に、いつそ殺して下さんしたら、今の思ひはござんすまいに、いとしい男と死別れ、わたしが一人殘つたとて、なんのこれが仕合せでござんせう。生き殘つたは、却つてわたしが不仕合せ。助けなさんしたお稻荷さんが、恨みでござんすわいなア。

せん　これはしたり、なんのお稻荷さんを恨みなさんして、よいものかいなア。

藤兵　モシ〳〵、おせんさん、打ちやつて置きなさい。ありやア稻荷様に云ふのぢやない、わしに云ふねすり事だ。この間鐘ヶ淵で、網にかゝつて上がつたは妹、それからわしが看病して、とう〳〵此方の物にしたから、今日はめでたく髮を結つて、深川の方の年拔けが濟めば、萬七さんと相談づくで、今日からでも町藝者に出すつもりサ。それに、聞きなさい、心中して死んだ男の事ばかりくよ〳〵と。コレサ、てめえを釣り出して、死なうとした新兵衞め、いはゞおれが爲には妹の敵。同じやうに網にかゝつて上がつたとて、なんの彼奴を助けるものか。いゝ加減に無駄を云ふものだワ。

小女　モシ、兄さん、そんならわたしの氣合ひが直ると早々に、アノ町藝者と云ひなさんすが、どうでもわたしや、出にやならぬのかえ。

藤兵　知れた事サ。深川の親方も、心中の身投げ藝者、抱へても居られぬから、早々住替への相談。折よく萬七さんが聞きつけて、五十兩の年拔きも出さうし、その上、身のまはりの支度金も五十兩出して、都合百兩で、行く〳〵はあなたの女房。當分のうちは、町藝者に出すを合點で、取極めた相談サ。

小女　その相談は、極まつたでござんせうが、兄さん、お前マア、よう考へて見なさんせ。云ひ交した新兵衞さんと、身を投げたわたし。ぬしばかり死なしやんして、わたしはおめ〳〵助かつて、人さんのお世話になり、町藝者に出る時は、世間で何と云ひませう。呼ばれた先の客人へ、どうして顏が合はされませう。これぱかりは、わたしやどうも否でござんすわいな。

藤兵　ナニ否だ。否ならよいと云ふやうな、兄さんだと思やァがるか。よう〳〵這ひづる時分から、親知らずに貰つたうぬ、煮て食はうが、燒いて食はうが、兄の威光で好きにするわえ。

小女　そのやうに、お前の氣に叶はぬ妹なら、わたしを貰うた親許へ、譯を云うて返しなさんせ。して、實の親は、どこでござんすえ。

藤兵　その親は、ナニ、アノそりやァ

小女　どこから貰ひなさんしたえ。

藤兵　べら坊め、不通に貰つた貧乏人、今時分は死んだも知れない。それまでおれが知るものか。

小女　なんの知れぬ事がござんせう。尋ねて返して下さんせいなァ。

藤兵　まだうぬァ兄に口答へひろぐな。萬七さんの世話にならにやァ、ぶんのめしても得心させるワ。うぬ。

ト割り木を持つて打つてかゝる。皆々とめて

萬七　コレ、兄貴、そりやァこなた、氣が早いといふものだ。

吉六　左樣サ。コレ、わしが方の年拔けが濟まねば、此方の代物だ。手荒くさつしやるなよ。

せん　小女郎さんも、氣も揉めやうが、マァ〳〵、相談づくになされませ。

萬七　さうサ〳〵、物事相談づくにするがよい。併し、身を投げようとした妹。この上またどんな事をしようも知れぬ。兄貴、必ず刃物を散らして置かぬがよい。

藤兵　さうぢや。さう死神にとツつかれては油斷がならぬ。小刀一本でも出しては置かれぬ……爰には出刃も刺身庖丁も、取上げ婆ァだ。

ト そこらを尋ね、刃物を殘らす取上げる。

吉六 それにしても今の話しは、今夜中に解りますか。

萬七 いづれ兄貴と、もう一遍談じねばならぬ。

小女 いくら相談しなさんしても、わたしや不承知でござんすぞえ。

藤兵 ナニ不承知だ。このあまめ、うぬ、叩ッ挫いて

ト 立ちかゝる。

萬吉 ハテマア、靜かにさつしやい。

藤兵 それだといつて、あんまり口が過ぎますわな。

ト 合ひ方になり、鐃鉢の音。萬七、吉六、藤兵衛をなだめながら、奥の方へ連れて入る。小女郎を、

おせん、なだめながら殘つて

せん お前も定めし氣も揉めやうが、惡い兄さんを持ちなさんしたが、その身の不仕合せといふもの。其うちには、よい智慧も出ませうほどに、マアく、急かずと氣を長うしてゐなさんせ。それにつけても、おいとしいは新兵衛樣、お前のお賴みなさんした通り、わたしやお寺へ行て、御回向を賴んで參りました。大方明日は、戒名も附けて下さりませうほどに、また明日參つて、戒名を

貰うて參りませうわいな。

小女　そりや嬉しうござんす。したが、兄さんへは、沙汰なしに頼むぞえ。

せん　承知でござんす。新盆ではあり、お精靈樣に、線香も絶えぬやうになされませ。モシ必ず不料簡な事しなさんすなえ。わたしや明日參りませう。

ト出かける。

小女　おせんさん、また明日來て下さんせえ。

せん　アイ〳〵、參るわいな。

ト干しある着物を見つけ

これはしたり、夜干しにしたとて乾かうかいなア。男といふものは氣の附かぬもの。掛け竿にかと掛けて置きなさんせ。

ト干し物を取込み、よき所へ置き

ハイ、左樣なら又明日。

小女　また來なさんせえ。

ト唄に鐃鉢の音。おせん思ひ入れあつて、向うへ入る。合ひ方。

ほんにマア、あのおせんさんは、丁度わたしの兄弟のやうに、よう世話して下さんす。わたしも又、新兵衛さんの事が、どうして忘られう。いとしい男はむごたらしう、水に溺れて死なしやんす。跡に殘つてこれがマア

ト思ひ入れあつて

これはしたり、香爐も消えてある。ドレ、盛つて置きませうか。

ト唄かすめて鐃鉢の音。向うより鐵五郎、藤六、長吉、竹笛を吹きながら、所化の玉觀、雲慶を引つ張つて出てくる。跡より淨雲、店經に出し體にて出てくる。

鐵五　コレ〳〵お所化、おらが內は爰の裏だ。寄つて話して行きねえな。

玉觀　それは有り難いが

雲慶　今夜は店經に出ました。

淨雲　モシ〳〵　あなたは鍛冶屋の鐵五郎樣、お前樣は、この裏でござりまするか。

鐵五　さうサ。寄つて話しなさいな。今夜は盆だから、若い者が寄つて、竹笛の稽古を始めるつもりサ

藤六　コレ〳〵、鐵公、てめえは夜なべだらう。この暑いのに、鍛冶屋の夜なべはあやまるの。

鐵五　馬鹿を云へ、盆前だぞ。

玉觀　盆前だから、取分け坊主は急がしうござりまする。

長吉　その代り、お布施がしつかりだらう。少つと奢りねえな。

雲慶　また惡口を仰しやります。

鐵五　マア、少つと寄りねえ。イヤ、とんだ切り見世だ。

ト三人して三人の所化を引つ張り、手が廻らぬゆゑ、淨雲は此方へ來る。そのうち三人、所化を引つ張つて路地へ入る。淨雲殘り、跡を見て

淨雲　ヤレ／＼、しつこい若い衆ぢや。たうとう二人は引ッ張られて行つたか……慥か張子屋藤兵衛樣は、爰であつたか知らぬ……モシ、お頼み申しませう／＼。

ト門口より訪れる。矢張り合ひ方。内には小女郎、新兵衛の事を思ひ出したる體にて、門口へ心づかず

小女　どうで邪慳な兄さんが、わたしが儘にも、よもやしては下さんすまい。と云うて親方さんへは五十兩、その金の出來ぬときは、わたしが生きてゐるうちは、藝者奉公せねばならず、生きてゐては、人さんの笑ひ物。矢ッ張りわたしや新兵衛さんへ心中立て、死んだら惡い噂も拔けやう。こりや矢ッ張り死ぬ心に

ト あたりを見廻す。淨雲門にて、この樣子を窺ひゐる。

自害せうにも刃物さへ、取上げられて不自由な憂き目。どうぞ外に、よい死やうが

ト 思ひ入れあつて、引窓の繩を上げてあるを見附け

ほんに、あの引窓の繩でなりと、見苦しい事ながら、首かゝりして

ト 綱を執へて

此マア綱を、どうしたらよからうやら。人さんの噂に、聞いたやうにして、この踏つぎの上から

飛んで、一思ひに

ト 踏臺を持ち來り、よき所へ置き、その上へ上がり、繩を持つて、思ひ入れあつて

跡で人さんが笑はうとまゝ、先立たしやんした新兵衞さんの、お跡を慕うて、南無阿彌陀佛。

ト 飛ばんとするを、淨雲窺ひゐて、あわてゝ抱きとめ

淨雲　アヽ、コレ／＼、早まるまいぞ／＼。

小女　イエ／＼、放して下さんせ／＼。

淨雲　ハテ、死なうとは惡い料簡ぢや。マア／＼、待たつしやれ／＼。

ト 抱きおろして、介抱して

女中の死なうといふは、親子喧嘩か、色事か。大概知れた筋合ひ。必ず不料簡な事さつしやりまするな。わしも今、東福寺から爰の内へ、店經に來た所化でござる。いはゞ檀家の女中、見殺しにはしませぬ。マア〳〵、待たつしやれ〳〵。

トとめる。小女郎思ひ入れ。

小女 マア、どういふ譯で、死なうとさつしやる。

御出家樣の御深切なお詞、その譯と申しまするは、わたしや三國屋の小女郎と申す、藝者でござんすが、云ひ交した男がござりまして、若氣の至り、心中に身を投げましたが、どういふ事やらそのお方は川へ沈み、わたしはその時兄さんが、下ろした網にかゝつたゆゑ、直に引あげ介抱して、息災にはなりましたが、つれないは兄さん、わたしに外の男を持たすとの事。もしさういふ事になつては、死なれた男へ立ちませぬゆゑ、それでわたしや、首かゝりして、死なうと思ひますわいなア。

淨雲 成る程、さう聞いては、云ひ交した男を殺し、不心中ゆゑ死なうといふ、これも尤も。それを又お前の兄御が、其やうに云うても聞きわけぬのか。

小女 固意地な生れ、外の男を持たすと云うて、聞きわけて下さんせぬわいなア。

淨雲　ハテサテ、それは困つた事ぢやな。併しお前は、云ひ交した男は死なれるし、外へやらうと云はれるも尤も。現在云ひ交した男が生きてゐられたら、よもや其やうな無體な事も

小女　アイ、わたしも左樣存じまする。死なれた人は外にして、現在この世に約束した、男があると云うたなら、尤もな事ぢやと思うて、聞きわけてもくれませうわいなア。

淨雲　イカサマ、そこらぢや、それはよい〳〵。死んだ人でなうて、息災である男に、云ひ譯がないと云ふのが近道。それに極めるがようござるぞや。

小女　サア、よい事はようござりませうが、してその男は、どこの何者ぢやと聞かれたら、そのお方が無うては

ト思ひ入れ。

淨雲　成る程、お前と云ひ交したといふ、男が無うてはそれも出來まい。ハテ、困つたものぢやの。

ト手を組む。小女郎こなしあつて

小女　最前から深切に、思うて下されまするあなた。申し兼ねた事ながら、云ひ交した男はわしぢやとどうぞお前樣、少つとの間、わたしが色になつて下さんせいなア。

淨雲　ヤア、この坊主に、こなさんの色になつてくれとか。これは御免〳〵。どうしてマア出家の身で

左樣な事が……俗に落ちたら兎も角も、この姿では……イヤ〳〵、其やうな事は、決して罷りなりませぬぞ。

小女　さう仰しやるも御尤も。切ないいまゝに無理なお願ひ。モシ、折角おとめなされて下さんした事ながら、とてもわたしや、死なねば叶ひますまい。お前樣も、爰をお歸りなされて下さりませ。

トほろりとする。

淨雲　そりやハヤ、歸るまいものでもないが、わしが歸れば、歸つた跡でお前は

小女　ハイ、只今のやうに、死なねばどうも

ト思ひ入れ。

淨雲　さう思はるゝを見捨てゝ歸れば、跡で死ぬであらうし、助けんと思ふには、色ぢやといふ相手が無くてはならず。アヽコレ、悪い所へ來かゝつて、女中一人を助けようと、殺さうと、こりや愚僧が心一つになつて來たわえ。

ト手を組んで思ひ入れ。

小女　とても死なねば、女子の道も立たぬばかりか、嫌な男に添はねば、現在兄さんの心に違ふ手詰めの今宵。こりやモウわたしや

ト思ひ入れ。浄雲、顏を上げて

浄雲　色になりませう。

小女　エヽ。

浄雲　お前の難儀を見捨てもならず、佛に誓ひし出家の身で、派手な藝者のお前の色ぢやと、墮落せぬ身で破戒の僧。人の命を助ける僞り。いかにも色ぢやと云つて進ぜう。

小女　エヽ、嬉しうござんす　それではわしが云ひ交した、男へ心中届くの道理。そんなら必ずでござんすぞえ。

ト思ひ入れあつて、手を合せて拜む。この時奧にて

藤兵　サア〳〵、萬七さん、表の方が風が參りやす。

トこの聲を聞き

小女　ありや兄さんぢやわいなア。

浄雲　オツト、承知ぢや〳〵。

ト盆棚へ向ひ、店經にかゝる。小女郎そこらを方附けゐる。藤兵衞、萬七、吉六、醉うたる體にて出て來り、小女郎を見て

藤兵　コレ、妹、今日は日もよいから、わざと萬七さんと、杯をして置くがよい。親方も承知だから、さうしやれ〳〵。

ト銚子、杯を持つてくる。小女郎、思ひ入れあつて

小女　モシ、兄さん、先刻に云うたぢやないかいな。わたしには、云ひ交した男があるゆゑ、そのお方への心中に、外の男はどなたにも、様子があつて持たれませぬと、あれ程お前に

藤兵　コレ妹、いゝ加減に馬鹿を云へ。われが云ひ交したといふ男は、身を投げて死んだでないか。それとも外に男があるか。

萬七　さうだ〳〵。併し生きてゐる色があるなら、此方もまた相談ものだが、よもや死んだ男の外に、てまへに色が

小女　アイ、外にござんすによつて、そのお方に、どうも義理が悪いわいな。

藤兵　ナニ、死んだ奴の外に、云ひ交した男があるか。

小女　ハイ、しかもそのお方は、ソレ、ツイそこに、聞いてぢやわいな。

三人　聞いてゐる他の男とは

小女　アレ、アノ、ぬしぢやわいなア。

ト浄雲の方へ指さして見せる、皆々悄りして

藤兵　イヤア、妹の云ひ交した色男は、あの店經の

萬七　坊主の色か……イヤア。

小女　それぢやによつて、わたしやどうも外のお方の

藤兵　世話にはならぬと強情云ふのか。いゝワ、どうするものだ。

ト浄雲へ立ちかゝつて

モシ、坊さん、ちよつと此方へござりませ。

浄雲　店經に參つた、愚僧に御用かな。

藤兵　左樣サ。

ト浄雲、念佛を申しかけ、此方へ來る。

モシ、お前は東福寺からござりましたか。

ト合ひ方。

浄雲　左樣でござる。今晩店經に參りました。お前がお内の

藤兵　アイ、茨の藤兵衛とはわしでござるが、今聞けばお前、わしが妹と云ひ交してござると、あの女

のロから聞きましたが、坊主の身で、いよ〳〵さうか。

浄雲　こりやハヤ、お初に、お目にかゝつた藤兵衛様。成る程、其許へは沙汰いたさぬが、妹御のあの小女郎とは、愚僧、よんどころなう、色でござる。色でござるぞ〳〵。

藤兵　そりやア、どこでこなた、色になつた。

浄雲　サ、その色になつたのは、アノ、どこでか色に

小女　アヽ、モシ〳〵、そりやお前、深川でぢやわいな。

ト呑み込ませる。

浄雲　成る程〳〵、深川々々。

藤兵　して、深川はどこで

浄雲　深川は、慥か海福寺々々々。

小女　アヽモシ、違うた。ソレ、色になつたは、アノ、洲崎の汐干の時分、武蔵屋で

浄雲　アヽ、武蔵屋は向島ではござらぬか。洲崎にも……ほんに、ござつた〳〵。汐干によつて三月の事ぢや。ついした事で、この女中と色になつた愚僧。後々は還俗して、女房にも持ちませうと、物事かたう約束した、いかにもわしは色でござるぞ。

小女　あれ聞きなさんせ。あれ程までに云ひ交したお方があれば、外の男は、わたしやどうでも持ちませぬ。兄さん、さう思うて下さんせ。

萬七　コレ〳〵、兄貴、今まで聞かぬ坊主の色客。こいつはてつきり

藤兵　ハテ、色なら色にして置いて、モシ、わしに任せて置かつしやりませ……コレ、坊さん、お前、妹が色なれば、爰にござるは深川の親方、ぬしの所へ年抜きの金がいるが、今夜その金が出來ますかえ。

淨雲　エヽ、アノ色ぢやと云へば、金がいりますかえ。

小女　アヽモシ、その金の事は、どうしてお前に

藤兵　コレ妹、色だといふ人の所から金が出ないで、どこから出るものだ。但し金が出ないのは、この坊さんは色ではないか。

小女　イエ〳〵、あなたが眞實の

淨雲　色でござるぞ。

藤兵　色なら女の身抜きをする、金を出さつし。

淨雲　そりやいかほど

藤兵　たんとでもない、五十兩。

淨雲　エヽ。

ト悧りする。

藤兵　藝者を色に持つ程な、御所化樣でも妹の、身の代は五十兩。店經のお布施を掻き集めても、五十か百のひねり錢。それとも盆のお供物に、耳を揃へて五十兩、色なら出すか。

淨雲　サア、そのお金は

藤兵　出さずば色と云つたは噓か。

淨雲　イヽヤ眞實

藤兵　そんなら金は

小女　どうしてあなたへ

藤兵　拵へるか。

小女　サアそれは

藤兵　サア

小女　サア

二人　サア〳〵

藤兵　よもや坊主の色ではあるまい。

トきつと云ふ。小女郎苦しき思ひ入れ。此っち淨雲、懷中の金を出しかけ、いろ〳〵あつて、この時思ひ切つて

淨雲　女中の身の代五十兩。

ト藤兵衞へ打ちつける。恟りして取上げ見て

藤兵　ヤア、こりや五十兩。どうして所化のこなさんが

小女　エヽ、アノ、お前の

淨雲　その金出さねば女中の身が、生死にかゝはる氣の毒さ。一寺を預かる禪僧の、檀方衆の志し、それを無足に藝者の身の代。兄御寮、それ出すからは、いよ〳〵愚僧は色でござるぞ。

トきつと云ふ。皆々思ひ入れ。この時路地より、玉觀、雲慶、歸り來り、淨雲を誘ふ心にて、門口より覗き、この體を見て囁き合ひ、立ち聞きゐる。

藤兵　よもやと思つた五十兩、金さへ取れば誰れでもいゝ、成る程こなたは色であらう。

小女　無理に賴んだその上に、思ひもよらぬ五十兩、あなたにそれを出させては

ト寄るを押へて

浄雲　ハテ、金を出さねば色ぢやと云はれぬ。それぢやによつて出した金。いよ〳〵こなたは愚僧が色ぢや。心得てゐさつしやれ。

萬七　そんなら所化は小女郎が色か。いかにひねつた藝者でも、坊主を色とは、色氣がねえな。

トこの時酔うたる吉六、ふら〳〵しながら起上がり

吉六　イヤア、その色客が出した金なら、小女郎が身拔きの五十兩。約束だ、サア、兄貴、おれが取るぞ、おれが取るぞ。

トひよろ〳〵する。藤兵衞、財布のまゝ渡して

藤兵　エヽ、酔つてゐながら慾張るの。約束なれば是非がない。惜しいものだが五十兩、お前に渡せば妹は兄の代物、證文を寄越しなさい。

吉六　勿論々々。やります〳〵。サ、これが小女郎の年期證文サ。

ト紙入れより出して渡さうとするを、小女郎中より取つて

小女　イヽエ、わたしの證文は、あなたへお渡し申さねば、どうも義理が

藤兵　誰れにやるのだ。

小女　御出家様へこの證文、お預け申して身抜きの金、わたしがきつと拵へて、お返し申すそれまでは
せめてこれなとお渡し申して

ト淨雲へ渡す。淨雲取つて

淨雲　藝者子供の年期證文、出家が取つても不用な品、お返し申す筈なれど、返したなればこなたの身
の上、どのやうな

ト藤兵衛へ思ひ入れあつて

然らばこれは預かりませう。

ト懐中する。吉六、横に寝る思ひ入れ。この時門口より玉観、雲慶入り

二人　様子はみんな聞いたぞ。
淨雲　ヤア、そんなら譯を
雲慶　友吟味するお寺の習ひ。誠に日頃は物堅く、おいらを苛める淨雲が
玉観　藝者を女房に持つといふ、一部仔什を皆聞いた。この通り方丈様へ
淨雲　アヽコレ、これには段々譯合ひの
二人　出家が女房を持つといふに、なに譯合ひがあるものだ。

萬七 さうだ〳〵。堕落破戒のその坊主、こなた衆はこの譯を、よく和尚に告げさつしやい。告げるにしても證據のため、衣も袈裟も剝がつしやい。わしも側から手傳つて

二人 お頼み申します。

淨雲 アヽコレ、樣子のある事、聞いた上にて

萬七 何も樣子は知らねえ。藝者と色の捨て坊主。キリ〳〵衣を

二人 いつそ斯うして

ト淨雲に立ちかゝり、袈裟、衣を引つたくる。萬七これを手傳ひ、淨雲、白帷子一つになり、縋つて

淨雲 アヽ、コレ〳〵、これには段々樣子のある事。何事も、穩便に〳〵

玉觀 イヤ〳〵〳〵、穩便にはならぬ。日頃からわしらが事、小言を云うたその返報。

雲慶 見た通り寺中へ觸れる。覺えてござれ。

ト二人は袈裟、衣を持ち、捨ぜりふにて向うへ走り入る。

淨雲 アヽ、コレ〳〵、これには段々譯のある事。お住持樣へは、必ずともに穩便に

ト向うを見て

淨雲 アヽ、もう行たか。これが寺中へ沙汰あつては、覺えなき身に不慮の災難。その云ひ譯も云はれ

ぬ仕儀。

ト小女郎へ思ひ入れ。

小女　初めて逢うて打ちつけに、お頼み申したわたしが科人。モシ、どうぞ仕様は

ト當惑の思ひ入れ。

淨雲　仕樣もやうも今更に、あらはに云はゞ女中の難儀。預かり置いたあの金を、出して救うたばつかりに、却つて愚僧が身の難儀。これといふのもあるまじき、色と云うたるその罪が、忽ち報ふも出家ゆゑ……もう斯うなつては

ト思ひ入れあつて小女郎の手を取り

サ、愚僧と一緒に

小女　お前はわたしを

淨雲　身は雲水の定めなき、その行く先までこなたを連れて

藤兵　イヽヤ、妹はやられない。

淨雲　でも五十兩愚僧が手から。證文までも受取つて

藤兵　あの五十兩はコレ爰に、醉ひ倒れたる親方に、渡して年季の證文は、こなたが取らうが現在の、

兄が前からこの女、貰つたといふ證據があるか。

淨雲　サ、さういふ分けはなけれども

藤兵　そんなら誰れに妹を貰つた。

淨雲　ヤ。

藤兵　初手から兄の氣に入らぬ、納所坊主がたつた今、寺をこくつてこの末は、はつち坊主は見るやうだ。そんな詰まらぬ客人に、なんで妹をやるものか。それとも女が支度金、耳を揃へて五十兩、持つて來たなら相談もの。マア、それまでは妹は、貧乏ゆるぎもさせないワ。

淨雲　すりや、身の代のあの外に

藤兵　兄を貢ぎの金がいるわえ。

萬七　この萬七は承知して、兄貴の前へ五十兩、拵へて來たなれば、その時妹は矢ッ張りおれに

藤兵　約束通り進ぜます。

萬七　それで安堵だ。

藤兵　これから妹が支度金。

萬七　拵へかゝる工面に行かうか。

小女　アヽモシ、その金持つてござんしても、わたしは行かぬ、萬七さん、さう思うて下さんせ。

萬七　そんならどうでも。

藤兵　ハテ、何と云はうと、わしが承知だ。モシ、必ず氣遣ひ

　　ト呑み込ませるとて、寢てゐる吉六をしたゝか踏む。吉六、目を覺まし

吉六　アイタヽヽヽ、誰れが踏んだか。これは眞平。ハヽヽヽヽ。

　　ト他愛なき事を云ふ。吉六が懐中より、財布出かゝつてあるを見附け

藤兵　コレ、親方、萬七さんもお歸りだ。一緒に行きなさい。

　　ト介抱しながら、外へ見えぬやうに、そつと財布を取つて袂へ入れる。吉六これを知らず

吉六　ナニ一生懸命だ。そりやァ誰れが……こいつはとんだ話だなァ。

萬七　歸るなら、一緒に行かうといふ事だ。

吉六　ナニ歸るなら一升飲ますと……エヽ、素的だの。

　　トよろ／＼するを、萬七手を引つ張り、外へ出て

萬七　コレ、兄貴、必ず小女郎は

藤兵　ハテ、胸にありやす。

吉六 ナニ胸にある。そいつは何が

萬七 エヽ、おへねえ連れだ。

ト四つ竹の合ひ方になり、萬七、醉つてゐる吉六を、引つ張り〳〵、捨ぜりふにて向うへ入る。

藤兵 カウ、坊さん、店經濟んだら用はねえ。

淨雲 イヽヤ、愚僧は金まで出して

藤兵 誰れが頼んだ。イケ馬鹿々々しい。

ト無理に淨雲を門口へ突き出す。

淨雲 すりや、これ程の目にあうたも、餘所に見なして、アノ其方は

小女 イエ〳〵、見捨てはせぬ。御恩のお前は

ト淨雲の側へ行かうとするを、藤兵衞引退け

藤兵 エヽ、打ちやつて置け。今時の坊主に油斷がなるものか。

淨雲 イヽヤ油斷のならぬは兄弟。こりや云ひ合せて愚僧が所持の、あの金を出させるための、拵へ事であらうがな。

藤兵 拵へ事とは何の事だ。おれが頼んだ事ぢやアねえぞよ。

淨雲　成る程、こなたは頼まぬ。頼んだはあの女中。よもや忘れはしまいな。
小女　なんのそれを忘れませう。お痛はしいそのお姿。あなたのお身の納まる仕様も
淨雲　エヽ、よい口な事ばかり。今となつて其やうな事、云うたとて屆く事か。金を戻して
　　ト内へ入るを藤兵衞とめ
藤兵　エヽ、何を云はつしやる、御出家。回向が濟んだら用ないこなた。キリ〳〵爰を
　　たてヽ
　　ト淨雲の手を取つて、無理に門口へ突き出す。淨雲、ヨロ〳〵と轉げる。藤兵衞、門口をピツシヤリ
　　歸らつしやりませ。
　　トかき金をさす。淨雲起上がり、「ムウ」とこなしあつて
淨雲　遊里の女子はあゝしたものと、知れてはあれど色情に、迷はぬながら女の口に、たくしこまれた
　　この身の誤まり。こりや兄弟して、手管とやらにかけたのぢやな。
　　トきつと思ひ入れあつて氣を替へ
　　アヽ、まゝよ。
　　トすご〳〵と花道へ、思案しい〳〵行き、こなしあつて

とはいへ、脫衣されたら侍ひの胤。出村は武士だ。
ト本舞臺へキッと思ひ入れ。この時藤兵衞、門口をソッと明け、淨雲と顏見合せ、藤兵衞、門口をピッシヤリたてる。淨雲氣を替へて
思案しにやならぬわえ。
ト唄になり、手を組み、思案しい〳〵向うへ入る。跡に小女郞、浮かぬ顏にて俯向きゐる。
藤兵 コレ、妹、何もそんなにふさぐ事はない。女は氏なうて玉の輿だわな。ナニあの納所坊主に……
それともてめえ、行きたくば、やりもしようが
ト此せりふの內、懷の金財布を、小女郞へ見つからぬやうに、あちこちして、足許に落ちてある稻荷樣のお札を、足でソッと取つて、財布の形を見せじと、件の札紙に包み
コレ、二つどりなら坊主はよしやれ。ハテ、罪になるわな。それより萬七どのゝ方が、餘ッほど氣が利いてゐる
ト此うち路地の裏、鍛冶屋の槌の音。竹笛の稽古の音聞える。藤兵衞、聞きつけて
アヽ、あのチヤン〳〵は、また長屋に佛が出來たか……イヤ〳〵、鍛冶屋が夜なべだな。イヤ、べら坊に精を出す野郞だなア……アヽ、あの笛は、若い奴等が稽古か。やかましい。日が暮れる

と吹きやアがる。彼奴等もしまひは按摩だわえ。

ト此せりふの内、件の札紙を脇へ足にて隱す。小女郎心附かず

小女　モシ、兄さん、お前、流し元に、何してゐなさんす。

藤兵　サア、おれが爰にまごついてゐるのは、アノ、なによ。オヽ、それ〳〵、盆といふものは水のいるものだから、水が無くば汲んで置かうと思つて、それでアノ、水瓶を

ト蓋を取つて、中を見て、素知らぬ體。

小女　瓶に水がござんすなら、水向けを汲みかへて置かうわいな。

ト大鉢を取つて行かうとするを

藤兵　アヽ、コレ〳〵、水を汲みかへるなら、おれがしよう。爰へ寄越しや。

ト水瓶の側にまごついてゐるゆゑ、小女郎、大鉢を持ちゆき渡す。藤兵衞、捨ぜりふにて水を入れかへ渡す。此うち矢張り鍛冶屋の槌の音、稽古の笛聞える。向うよりおかん、紺の手拭にて頰かむりをして、弔ひの太鼓と撥を持ち、新兵衞が着てゐたりし紺の單衣を着て、後より新兵衞、おかんの經帷子を着、胡麻鹽をあて、大風呂敷をかむり、忍び〳〵出て來り、門口にておかん、內を指さし、兩人囁き合ひ、新兵衞路地へ入る。おかん。內を窺ひゐる。

小女 兄さん、お前、お迎ひ火は焚きなさんしたかえ。

藤兵 馬鹿を云へ。この暑いのに、どうして焚かれるものだ。

小女 エヽ、お前も勿體ない。盆ぢやといふに、お迎ひ火も焚かぬといふは

藤兵 併し蚊いぶし代りに焚くもいゝが。そこらに苧殼があらう。

ト尋ねる。この時奥にて、ドンと物音する。兩人恟りして

なんだ、あの音は。また盗人猫がなまり節へかゝつたな。うぬ、イケ畜生め。叩き殺してやらう

シツ／＼。

ト合ひ方、捨ぜりふにて、奥へ駈けて入る。小女郎思ひ入れあつて

小女 常から心よからぬ兄さん。早氣の毒なは御出家様、わたしが頼んだばつかりに、思ひがけなう、持つてござんす五十兩、その上にお寺へ知れての御難儀、元の起りは皆わたし。云ひ譯したうても、よもやお寺へあの儘では

ト盆棚を見て、こなしあつて

新兵衛さん、さぞ迷うてゞござんせう。と云うてわたしもお前に別れ、なんで生きて居られませう。折を見合せ又ぞろや、身を投げてなとお跡から

ト思ひ入れあつて

お迎ひ火を焚くほどに、どうぞわたしが内のお棚へ來て、ならう事なら逢ひたうござんす。必ず浮かんで下さんせえ。

ト誂への合ひ方、風の音、件の竹笛、槌の音する。小女郎、苧殼紅殼など取あつめ、門口へ出かける。おかん、ちやつと隱れる。小女郎、外へ出て、迎ひ火の拵へする。この時おかん、そつと內へ入り、太鼓を持つて精靈棚の下へ入る。小女郎、門口にて迎ひ火を焚きつける。矢張り鳴り物聞える。風の音。中窓をソツと明け、新兵衞、內へ忍び入り、あたりを見廻し、盆棚へ上り物の菓子を食ひ、茶湯の茶を飮みゐる。小女郎、これを知らず

お迎ひ火を焚いてあげたほどに、どうぞ此方の內へ來て下さんせ。まだ戒名は知れぬゆゑ、俗名玉屋新兵衞樣、頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々。

トよろしくあつて水向けをしまひ、火をしめし、鉢を持つて盆棚へ置かうとして、思ひ入れあつて

どうやらお棚に

新兵　アイヤ、小女郎。エヽ、恨めしい。

ト思ひ入れ。棚の下にておかん、ドロ〳〵を打つ。小女郎悄りして

小女　ヤア、さう云はんすは新兵衞さん、逢ひたかつた〳〵。ようマア來て下さんしたなア。

新兵　ナニ、よう來てくれたとは、エヽうぬ。こゝな嘘吐き藝者め。エヽ、恨めしい。

トおかん、ドロ〳〵を打つ。程よく竹笛の合ひ方、槌の音は一つ鉦に聞える。新兵衞のせりふ、切れ目〳〵にドロ〳〵。

小女　サア、尤もでござんす〳〵。どうでわたしもお前の跡から、モシ、浮かんで下さんせ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

新兵　イヽヤ浮かまぬ、嘘吐き藝者め。おればかりに身を投げさせ、うぬはそのまゝ這ひ上がり、あの萬七が女房にならうとは、思へば〳〵恨めしい。よくおれ一人殺したなア。

ト又おかん、ドロ〳〵を打つ。

小女　イヽエイナ、なんのわたしがお前一人を先立てゝ、わたしばかりが助からうといふ、其やうな不眞實な、わたしではござんせぬ。どういふ事にか、思はず兄さんの下ろしたる、四ツ手の網にかかつたばかりに、助かつたわたし。それゆゑ今日も今日とてナ、お前のためにお寺へ布施物、四十九日も弔うてナ、折を見合せわたし一人、死んでお前に逢ふ氣ぢやわいなア。

新兵　イヤ、その手はくはぬ。嘘吐きめ。今更さうは拔けさせぬ。あの萬七を、しかも今夜日がよいと

て、祝言の杯もしたとの事。その上、彼奴がために江戸藝者に出て稼がうとは、思へば〳〵腹の立つ。噓吐き藝者め。

ト盆棚の下にてドロ〳〵。

小女　これいなア。なぜ其やうに疑つて下さんす。先刻にも情ない、御出家様をお頼み申し、五十兩といふ金までも出させましたも、兄さんが萬七さんへ添はすといふ、それを斷わり云はうため。おいとしや御出家様、わたしゆゑにお寺に聞え、思はぬ御難儀。それといふのも、お前へ立つる、わたしの心中。

新兵　それをおれが知るものか。エヽ、おのれ、恨めしいわい〳〵。

ドロ〳〵。

小女　コレ、知らぬとはお情ない。わたしやお前へ心中に、これ、見さんせ。

ト左の手を捲り

新兵衞一心命、とは、野暮な昔の刺青ながら、わたしが手には此やうに、産みつけたるこの痣の形は、丁度「心」といふ字。外の文字は彫つたれど、心の文字は產れの痣。これ程までに思ふわたしが胸の中、この世を去りし業通にて、それがお前に知れぬかいなア。

新兵　ナニ知るものか。兎角無暗に恨めしい。おれと一緒に冥土へ來れ。

ドロ〳〵〳〵。この時茂右衞門、路地の内より錠を振つて

茂右　締まりますノ〵。

小女　そりやモウお前が、わたしを、一緒に連れて行て下さんすなら、行かいでかいなア、サア、參りま

ト云ひながら出て、門口へ來り、内を覗き、悔りして、慄へ〳〵、見てゐる。

すく。どうぞ連れて行て下さんせ〳〵。

新兵　ナニ冥土へ連れて行けと。うぬ、それは嘘だワ〳〵。嘘吐きめ。

小女　なんの嘘を吐くものかいなア。これほど誠を明かすわたし。それを嘘ぢやと云はしやんすは、こりやお前は、合點のゆかぬ幽靈さんぢやわいなア。

新兵　ナニ合點のゆかぬ幽靈だ。うぬ、おれを疑ふな。疑はれては佛が立たぬ。サア、冥土へ來れ〳〵

ト盆棚より下りて來り、小女郎が手を取つて引ッ立てる。

小女　行かいでかいなア〳〵。サア、連れて行て下さんせ。お前と二人暮らすなら、無間の底へも行きたうござんす。

ト縋りつく。新兵衞思ひ入れあつて

新兵　そんならてめえ、おれが行く所なら、無間地獄の底までも

小女　行かいでかいな、新兵衞さん、氷の地獄、火の車。

新兵　呵責の責めもいとひなう

小女　お前ゆゑなら何のいとはう。新兵衞さん

新兵　小女郎

小女　いつそ殺して下さんせいなア。

ト抱く。おかん見て、太鼓を投げ出し

かん　エヽ、勝手にしなさんせ。

トこなし。門口の茂右衞門も、こなしあつて

茂右　夢になれ〳〵。

ト門口を明けて内へ轉げかゝる。兩人悔り。この聲に藤兵衞、何心なく出て、この體を見て

藤兵　イヤア、幽靈だ〳〵。

ト騒ぐ。この聲を聞き、路地より鐵五郎、藤六、長吉。役場提灯、長鳶、六尺棒なぞを持ち出て來り

二人　なんだ、幽靈だ〳〵。

ト茂右衞門も起きて騷ぐゆゑ、新兵衞、おかん驚いて駈け廻る。おかんは以前の盆棚の下へ駈けこむ
新兵衞は水瓶の所へ隱れる。皆々思ひ入れ。小女郎を介抱して

藤兵　ヤイ、妹やァい〱。氣を慥かに持て〱。

小女　イヽエイナア、わたしや氣は慥かでござんすが……新兵衞さんも別條なうて、わたしが所へ恨みを云ひに

藤兵　ナニ、新兵衞の幽靈が。その幽靈は、どこへ行つた〱。

小女　どこへ行つたやら。大方消えたであらうわいなア。

茂右　併し、また幽靈の搖り返しがあらうも知れぬ。この子は爰へは置かれまい。

長吉　さうだ〱。この子は奧へ連れて行くがよい。怪我でもあつては惡い。此方へ來なさい。

小女　ハテ、大事ないわいなア。モシ、幽靈さん、消えなさんしたかいなア。

長吉　イヽエサ、危ないよ。來なさいよ〱。

ト無理に引ッ張つて奧へ連れて入る。

藤兵　モシ〱、大屋さん、今出た幽靈は、白いばかりぢやァござりませぬ。黑い幽靈もゐやした。

茂右　サヽ、わしもさう見ました。黑白二人の幽靈だ。待ちなさい〱。慥か水瓶の後に、白いものが

見えるワ。

皆々　其奴が幽霊だ。突き出せ〳〵。

ト流し元へ駈けより、捨ぜりふにて棒にて突く。新兵衛堪り兼ねて駈け出る。この時、藤兵衛が隠せしお札と財布、足に搦み、何心なく逃げるを、皆々追ひ廻す。新兵衛向うへ逃げて入る。

藤兵　南無三、白いのは逃がしたが、まだ黒いのが一疋ゐたぞ。

茂右　アレ〳〵、精霊棚の下に、眼ばかり光るは幽霊であらう。

四人　突き出せ〳〵。

ト長鳶や棒にて下を突く。中にておかん呻る。

そりや幽霊が、呻るぞ〳〵。追ひ出せ〳〵。

ト又突く。おかん堪へ兼れ、逃げ出す。皆々追ひ廻し、ぶち倒し、藤兵衛押へて

藤兵　サア〳〵、騒ぐまい〳〵。黒い幽霊は、生捕つたぞ〳〵。

三人　お手柄〳〵。面を見ろ〳〵。

トおかんを引立て、弓張や行燈にてよく見て

藤兵　イヤア、丸い頭の幽霊は

三人　今日蘇生した合ひ長屋

かん　おかんぢやわいなア。

四人　大べら坊め。

かん　オヽ恥かし。

ト顔を隠す。時の鐘の送りにて、道具廻る。

本舞臺、向う黒幕、松杉の大樹重なり、牛の御前の宮の後を見たる體。よき所に神木の杉、注連を張り、所々に石燈籠、物凄き道具。時の鐘、誂らへの合ひ方、谺の音にて、道具とまる。

ト向うよりお霜、白無垢の振り袖、しごき、おぼこ娘の拵へにて、灯をともせし鼎を頭へさゝげ、高足駄、釘と金鎚を持ち、跡先へこなしありて出て來り、直に舞臺へ來て

しも　嬉しや〳〵。今宵が七日の滿願ゆゑ、往來の人に逢ふまいと、爰までも來るうち、往來も途絶え

いつもの通り、あの神木へ

ト杉の下へ來り、思ひ入れあつて

云ひ號けの新兵衛さんは、小女郎さんといふ藝者さんに、わたしや見替へられ、とても添はれぬ

事なれば、我が身の命を七日のうちに、お取りなされて下さりませ。添はうと思ふ新兵衛さんのお顔も知らぬ果敢ない生れ性でござりまする。どうぞこの身を立ち所に命をお取りなされて、新兵衛さんと小女郎さんと、添はせてあげて下さりませ。大願成就、なさしめ給へ〳〵。

ト一心に伏し拜みゐる。向う、バタ〳〵にて新兵衛、件の財布を、足に引つかけ出て來り、花道にて

新兵　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵、あの兄めが追ひ駈けて來る樣子であつたが、餘程後になつたやうぢや…………オヽ、爰は牛の御前の社内さうな。ちつとマア爰らで、息をしてから逃げませう。したが、あの樣子では、小女郎が胸も、大概知れたやうぢやが

ト舞臺へ來り、お霜を不思議さうに窺ひ見て

ヤ、幽靈ぢやな。

しも　お前がかいな。

ト二人とも互ひに膽をつぶし、「ワッ」と云うて左右へ倒れるはずみ、お霜が頭の灯消えて、穿いたる足駄の齒ぬける。新兵衛も悑りして

新兵　女の幽靈樣、浮かんで下さりませ。南無阿彌陀佛々々々々〳〵々。

しも　モシ〳〵、男の幽靈樣、わたしや幽靈ぢやござりませぬほどに、どうぞお前樣、消えて下さりま

せ。南無阿彌陀佛〻〻〻〻〻〻。

新兵　なんぢや、幽靈ではない。さうでもあらうか。なんぼ盆ぢやというて、其やうに幽靈も來まいがして、白い女中は何ぢや。

しも　アイ、わたしや迷ひの者ではござりませぬ。呪ひ者でござりまする。

新兵　ナニ呪ひ者ぢや……成る程、寺と違うて、牛の御前のお宮の前。アヽ、そんならこなたは、丑の時參りぢやの。

しも　アイ、左樣でござりますする。只今わたしや、お前のお姿を見て、ハツと思うて爪づいてナ、足駄がぬけまして、ツイ爰へ

新兵　轉けさしつたか。

しも　ハイ。

新兵　ハテ、それは危ない事、怪我はござらぬか。

しも　有り難うござりまする。お庇で怪我は致しませぬが、お前樣、マア、なんで其やうな白い形で

新兵　ハイ、わしがこの白い形は、ちつと譯のある女に、恨みを云はうと思つて、そこで幽靈の眞似をして嚇したのサ。

しも　エヽ、そりやマアなんで其やうな、眞似をなされまする。
新兵　アノ、それといふも、その女とわしと心中して、身を投げたからの事サ。
しも　エヽ、心中に身を投げさんしたのかえ。
新兵　左樣サ……して、今聞けばお前、穿き物の齒が拔けたではないかえ。出しなさんせ。直して上げよう。
しも　これはしたり、お慮外でござりまする。
新兵　ハテ、大事ない、出しなさい〳〵。
しも　左樣なら、お慮外ながら

ト足駄を差出す。新兵衞取つて

新兵　モシ、そこに釘があるかえ。
しも　アイ、爰にござりまする。
新兵　序にその金鎚を貸しなさい。
しも　アイ〳〵。

ト差出す。新兵衞、足駄の齒を入れ、釘を打ち、思ひ入れあつて

新兵　イヤ、又お互ひに此やうな形で、逢ふといふも不思議な縁ぢやが、お前、誰れを呪ふために、時參りをさつしやるのぢや。

しも　アイ、わたしや誰れを呪ふのでもござりませぬ。お話し申せば恥かしながら、わたしには云ひ號けの殿御がござりまするが、今以て、云ひ約束を致したばかり、夫に持ちまする男の顔さへ知らぬわたし。誠にそのお方は、外に增す花あるゆゑに、云ひ號けのわたしが事は、思うても下さんせぬ。その嫌はれたわたしゆゑ、いつそこの身をこの身で呪うて、死ぬるものなら一日も早く、私しも死にたい願ひ。その云ひ號けのお方へ、好いた女中を添はさうと、それが私しの願ひでござりまする。

新兵　ハテサテ、お前は眞實なお方ぢやわいの。嫌はれてゐる夫の事、見替へられたる女の事を、恨めしいといふ心もなく、我れと我が身を呪ふがための時參り。わしも云ひ號けの娘がござれど、丁度お前と同じ事、女房にする女の顔、今日の今まで逢はぬゆゑ、逢うたというて知らぬ同士。

しも　わたしも知らぬ男の顔。見かへられたる女子の顔も

新兵　御存じないか。

しも　アイ。

新兵　ハテ、似た事もあるものぢや。

　　　ト足駄の齒を直して

　　サア、穿き物が出來ました。穿いて御覽じろ。

しも　これはマア、有り難うござりまする。不躾ながら知らぬお方に

新兵　知らぬ者と思うてなら、なんぞお禮が

しも　お禮と申してお互ひに

新兵　そのお禮には、ちよつと爰で

　　　トしなだれる。

しも　アヽモシ、惡い事を

新兵　イヤ、よい事ぢや。

　　　ト又しなだれるをお霜、新兵衛を突きこかす。よろ〳〵として轉ける。此うち、足に搦みし財布を見附け、探り見て

　　走つて來たゆゑ取のぼせ、心づかずに今まで居たが、足に搦むは、どうやら財布。上は何やら、守りのやうな

ト探り見ながら、お霜の裾を捕へゐる。

しも　アヽモシ、爰を放して、

ト振り切らうとする。新兵衞、無理口說きの立廻りよろしく。此うちバタ〱になり、向うより藤兵衞、鉢卷をして、棒を持ち、新兵衞の跡を追ひかける心にて走り出て來り、新兵衞に突きあたる。

藤兵　アイタヽヽヽヽ。

ト互ひに驚き、藤兵衞、二人を見て

ヤ、幽靈だな。

しも　エヽ。

ト惘りして新兵衞に縋りつく。チヨント木の頭。

新兵　夢ぢやァねえか。

トにつたりとこなしあつて、お霜を引寄せる。藤兵衞、身ごしらへして、兩人を透し見る見得。双方よろしく、ひやうし

幕

洲崎武藏屋の場
中木場の場

二幕目

役名――倉橋官藏。若狹屋萬七。玉屋庄兵衛 梅田村のお倉。女中、お園。同、お松。奥女中、竹川。小女郎兄、茨の藤兵衛。玉屋番頭、左助。新兵衞云ひ號け、お霜。三國屋小女郎。玉屋新兵衞。

本舞臺、三間の間、正面床の間、違ひ棚、左右腰障子、いつもの通り。爰に萬七、前幕の拵へ、お園、お松、茶屋女の拵へにて、酒肴を取散らし、酒盛りの體。すべて洲崎武藏屋の模樣。流行り唄にて幕明く。

皆々 リウコウサン、スムカ／＼。

ト拳を打ち、萬七負ける。

萬七 これは閉口々々。

二人 サア、木場萬さん、一つお上がりなされまし。

萬七 イヤモウ、此やうにたぼ揃ひでは、一つ飲まずばなるまい。

その　ほんにこの間も、仲町の衆がお出でなさると、お前とおかんさんの話しがござりましたぞえ。
まつ　あのやうに浮名が立つては、此まゝでは濟みますまいぞえ。
萬七　サア、おれもフッとした出來心で、飛んだものに引つかゝつたのサ。
二人　イヨ〳〵、色男さま〳〵。
萬七　これは面目ない。
二人　サア〳〵、一つお上がりなされませ。
ト流行り唄になり、向うよりお倉、田舍婆にて、風呂敷包みを背負ひ、菅笠を持ち出て來る。跡より
お霜、振り袖娘、これも菅笠を持ち出て來り
くら　コレ〳〵、娘、あれを見や。向うに見ゆるが江戸の海、なんとよい景色ぢやござらぬか。
しも　そんなら爰が、洲崎の辨天樣とやらでござんすか。
くら　今日こゝの武藏屋とやらへ、其方の云ひ號けの新兵衛樣が、お出でなさるゝとの話し。それゆゑ今日は八幡樣や、三十三間堂を見物がてら、爰まで來ました。おッつけ主に逢はせるほどに、あれへ行て尋ねて見ませうわいの。
しも　そんならあれへ行て待つて居れば、云ひ號けの新兵衛さんに逢はれまするかえ。

くら　オヽ、今にこの母が逢はせまする。あまり其やうに、キナ〳〵思うて、暑い時分ぢやほどに、必ず煩らうてたもんなや。

しも　暑い時分と申しますれば・わたしや扇を忘れて參りました。

くら　ハテ、それは困つたもの。オヽ、幸ひ〳〵、いつぞや玉屋のお內へ行つた時、わしも其方のやうに扇を忘れたぢや。新兵衞樣の仰しやるには、見苦しくともこれなと使へというて、下さつた扇、なんと見や、よい扇ぢやないか。これを其方に

ト杏葉菊の附いたる女扇を出す。お霜取り

しも　この扇の紋ぢらしは杏葉菊。すりや、新兵衞さんの替へ紋でござんすかえ。そんなら、この持主の、お方に早う

くら　いまにござつたなら、この母が早速に、逢はせますとも〳〵。サ、斯うおぢや。

ト お倉、お霜の手を取り、舞臺へ來る。

その　これは〳〵あなた方、よう入らつしやいました。サア〳〵、あれへお上がりなされませ。

ゐら　アヽ、コレ〳〵、わしどもは客ではござらぬ。今日こゝの內へ、玉屋新兵衞樣と、小女郎樣とやらいふ藝者がござるとの事。どうぞお出でなら、ちよつと逢はせて下さりませ。

その　ハイ、小女郎さんは只今、お客樣のお座敷へお出でなされましたが

まつ　新兵衞さんは、まゝお出でなさんせぬ。今にもお見えなされたら、早速お知らせ申しませう。

萬七　見れば、遠方からござつたさうな。奥へ御案内申すがいゝ。

二人　畏りました。お二人さん、斯うお出でなされませ。

しも　そんなら母さん、お邪魔ながらあれへ行て

くら　お出でを待ちませう。どなたも御免なされませ。

ト流行り唄になり、皆々奥へ入る。萬七殘り、跡見送り思ひ入れ。

萬七　あの娘は、田舍者にしては美しいもの。可哀さうに、知らぬが佛とはいひながら、身を投げて死んだ玉屋新兵衞、それを尋ねて來るとは、ハテ怪しからぬ事。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、藤兵衞、しみつたれの拵へにて出て來り

藤兵　萬七さん、これにお出でなされますか。

萬七　イヤア、藤兵衞さん、今日は小女郎に附いて箱廻しか。御苦勞々々々。

藤兵　妹の小女郎も、町藝者の今日が店開きサ。男が間に合はぬから、わしが附いて參つたら、このやうなしみつたれな形ゆゑ、兄弟だと云ふと外聞が悪いと申しまする。高慢な奴サ。

萬七　其やうに述懐を云はずと、一服のまつしやい。

藤兵　ハイ〳〵、モシ、海が近い所爲か、いゝ風が參ります。ドリヤ、一服いたしませうか。

トこの時、奥より下女、摺り物を持ち、出て來り

下女　モシ〳〵、萬七樣、只今勝手へ、この摺り物をお前に上げてくれろと、持つて參りました。

ト出す。萬七見て

萬七　ハヽア、延壽太夫の弟子の浚ひであらう。時に藤兵衛さん、貴樣名代に行つて、一杯飲んで來さつしやい。

藤兵　畏りました。どこで浚ひをするか。ちよつと摺り物を

ト見て

ハヽア、兩國の大のしだな。女中さん、使ひの人に、酒でも飲まして下され。

下女　ハイ〳〵、畏りました。

ト奥へ入る。

藤兵　モシ、萬七さん、當日には金のいる話しだねえ。

萬七　オヽサ、また痛事よ。それについて藤兵衛さん、この中約束した通り、貴樣の妹の小女郎、支度

金五十兩で、いよ〱わしが女房に

藤兵　隨分あげます。支度金五十兩、不躾ながら大金でござります。お前、その當がござりますか。

萬七　オツト、皆まで云ふまい。その支度金の當がある。

藤兵　それはお手柄。して、その出所は

萬七　サア、聞いて下さい。その金の出所といふのは、この間身を投げた玉屋新兵衛の手から、大金になる定家の色紙を、五十兩の質に取つて置いたれば、紛失の色紙を、おれが尋ね出した顔で、里見の屋敷へ上げれば、大枚の金になる。その色紙の盜人は、身を投げた新兵衛に塗りつけて置けば、死人に口なし。その科で親の庄兵衛は牢へ行く、さすれば跡の屋敷出入りはこの萬七。これといふも、この色紙が元手、なんと巧いではないか。

ト懐より箱入りの色紙、袱紗包みの鑑定書を出して見せる。

藤兵　ヤア、そんならそれが大金になる、色紙と折紙でござりまするか。

萬七　オヽサ、その時にはこなたも、その儘では置かぬ。それぢやによつてあの妹を

藤兵　隨分お前に上げませうが、必ず共に帶代の

萬七　五十兩は呑み込んだ。

藤兵　それは有り難うござります。イヤ、それで思ひ出した。この間折角儲けた金を、盗まれぬやうに松山稻荷のお守りへ包んで、隱して置いたのがなくなりました。泥坊の業とも思へず、どうも合點がゆきませぬ。

萬七　泥坊の業でもなく、隱して置いた金を盗まれたとは、そいつはてつきり

藤兵　稻荷樣が盗んだのかも知れませぬ。

萬七　何を云ふのだ。

藤兵　左樣なら萬七さん、前祝ひに一杯。

萬七　イカサマ、よからう。そんなら藤兵衞、ではない舅どの

藤兵　花婿樣。

萬七　サア、來やれ。

ト流行り唄になり、兩人奥へ入る。引ちがへてお倉出て來り、あたりをウロ／＼見廻しながら

くら　ヤレ／＼、流石はお江戸の繁華。この内にも美しい女中は澤山、どれが小女郎どのやら。早う逢ひたいもの……モシ、どなたぞちよつと、お頼み申します／＼。

小女　アイ／＼。モシ、どなたかお出でなされましたぞえ、

ト合ひ方になり、奥より小女郎、好みの藝者姿にて出て來り

只今お呼びなされたは、あなたでござりますかえ。ようお出でなされました。マアく、あれへお出でなされませ。

くら イヤく、必ず構うて下されまするな。わしはお客ではござらぬ。

小女 して、お前さんわえ。

くら ハイ、わしは近在の田舎婆アでござるが、今日こゝの内へ、江戸藝者の小女郎樣とやらが、來てござるさうなが、どうぞそのお方に、ちよつと逢はせて下さりまし。

小女 その小女郎は、わたしでござります。

くら ヤアく、小女郎どのとは、お前の事でござりますか。ドレく

ト前後へ廻り、よくく見て

ほんにマア、姿なら形なら、お優しい女中樣。女子のわしでさへ惚れるもの、殿達の惚れるは尤も。ヤレく、美しい事なア。

小女 モシく、其やうに云うて下さりますと、わたしやお氣の毒に存じます。

くら アノマア、云はしやんす事わいなア。瓦を玉とは云ひませぬ。ほんに田舍の正直一遍。お江戸育

ちは又格別……それ〳〵、女中さん、この品はあまり輕少ながら、新製の麥こがし。又これは、畑へ出來た玉蜀黍、お前へ土產にこの婆が、はる〴〵背負うて來ましたわいの。

ト風呂敷包みより、麥こがしと玉蜀黍を出す。

小女　これは〳〵、有り難う存じます。さりながら、一度もお目にかゝつた事のない婆さんが、其やうに云うて下さんすは、わたしやどうも、合點が參りませぬわいなア。

くら　成る程、合點のゆかぬは御尤も。何を隱しませう、わしは梅田村と申す所の者、お前も御存じであらう、玉屋新兵衞と云ひ號けの、お霜が母でござるわいの。

小女　エヽ、アノ、お前さんが

くら　サア、それについて小女郞さん、わしやこなさんに、賴みがあつて來ました。

小女　して、わたしへのお賴みとわえ。

くら　緣が切つてもらひたい。

小女　そりや誰れさんと、緣を切るのぢやえ。

くら　玉屋の新兵樣樣と

小女　エヽ。

くら　サア、こなさんと、新兵衛どのと、縁が切つてもらひたい。

小女　そりや又なぜでござんすえ。

ト思ひ入れ。合ひ方。おくら、こなしあつて

くら　サア、この婆は以前玉屋のお内へ、雇ひお針のその縁で、わたしが在所へ玉屋の大旦那樣がござつて、どうぞこの娘をくれい、始終は悴新兵衞と添はすと、無理無體の云ひ號け。輕い身分で玉屋の御子息樣と、云ひ約束は娘が仕合せ。お霜が父親は、わしの連合ひの伯父、わしとは生さぬ仲なれど、連合ひと夫婦別れする時、女の子は女に附くが大法と、この婆が引取つて、育てた娘、わしも以前は侍ひの女房ゆゑ、娘にも云ひ聞かせ、嫉妬の心はさておき、恨みつらみも云はねど、ハテ、そこは何を云うても女の心、辛氣をこらしてこの頃は、ぶら〳〵病ひ。それゆゑ今日來ましたは、外の事でもござらぬ。一旦お前と新兵衞の縁を切り、云ひ號けの娘と、三日たりとも添はせて下さりませ。左樣いたせば娘の命は助かります。モシ、小女郎どの、この母が手を合せて拜みます〳〵。ハテ、その上で、病身を云ひ立て、わしの方へ引取つて、娘は一生後家やもめ。その跡では相談づくで、お前と新兵衞樣と女夫になり、玉屋のお家を、丸う納めたいわしが心底。それといふも、義理ある娘が可愛さ。お前もいとしい男と、縁を切るのは否であらうが、爰の道

理を、聞きわけて下さりませ。

ト此うち小女郎、こなしあつて

小女　成る程、事を分けてのお詞ゆゑ、隨分と聞きわけませう。
くら　緣を切つて下さりますか。
小女　アイ。
くら　ヤア。
小女　否でござんす。
くら　ヤ。
小女　ハテ、親類衆は元より、玉屋のお内では、三國屋の小女郎は、丁度三國の妲妃ぢや。人を誑かす
ありや狐藝者ぢやと、人さんにうしろ指さゝれたも、みな新兵衞さんゆゑ。とても異名の附いた
わたしぢやもの、今更どうも、その事ばかりは
くら　ならぬと云はつしやるか。
小女　重ねて云うても下さんすな。
くら　すりや、これ程に譯を云うても

小女　どうもその事ばかりは
くら　ならぬとあれば、この場に於て

ト お倉、床の間にある脇差にて死なうとする。小女郎とめて

小女　マア待つて下さんせ。
くら　そんなら聞きわけて下さんすか。

ト 小女郎思ひ入れあつて

小女　サア、わたしが心たつた一つで、三人四人の命とあれば、いかにもお前のお頼みは
くら　聞き届けて下さるか。
小女　萬事はわたしに

ト お倉の刃物を押へて

お任せなされて下さりませ。

ト 思ひ入れ。唄になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面違ひ棚、三尺の瓦燈口、上手に小座敷、左右四つ目垣・植込み、

門口に吊り燈籠。舞臺よき所に交貼りの屏風。茅門の門口。この外下の方料理屋の半障子、これに明け立てあり、誂への通り。爰に官藏、竹川、奥女中のなり、萬七、お松以前の形、庄兵衞、老けたる拵へにて扣へてゐる。酒肴を取散らし、各ゝよろしく住ひ。酒盛りの體、流行り唄にて道具とまる。

萬七　コレ〳〵、女中、只今申しつけたお肴を、早く賴みます。

まつ　ハイ〳〵、畏りました。

官藏　イヤモウ、終日の馳走忝い。時に、小女郎はいづれへ參つた。

萬七　只今着替へに參つたと見えます。

まつ　其うち一つ召上がりませ。

庄兵　御酒宴なかばへ、斯樣申すも如何なれど、只今お願ひ申し上げましたる通り、何卒紛失の色紙、詮議の日延べを、今少しの間、お願ひ申し上げまする。

官藏　ヤア、又しても〳〵、日延べの願ひは叶はぬぞ。色紙が紛失すれば

竹川　おろそかならぬお家の大事。さすれば其許のお身にも係はる事。

萬七　それになんだ、僅かな物を失なしたやうに、日延べ〳〵と小うるさい。

官藏　重ねて申すな、叶はぬぞ。

萬七　此やうな事はぶん流して、一つお上がりなされませ。

官藏　然らば其方に遣はす。

萬七　有り難う存じまする。

ト流行り唄になる。皆々酒盛りになり、この唄をかりて向うより新兵衞、絹やつし、一本差しにて出て來り

新兵　あの萬七は、今日屋敷衆の振舞ひゆゑ、この武藏屋へ來てゐるとの事。どうぞ逢つてこの間の品を、請け戻したいものだが、何は兎もあれ武藏屋へ行つて

ト門口へ來て、内へ入らうとして、庄兵衞がゐるゆゑ、門口の外に窺ひゐる。

庄兵　只今これなる官藏樣へ、お頼み申せどお取上げはござりませぬ。この上は竹川樣へ一つのお願ひ何卒實詮議の日延べを

竹川　成る程、たつての願ひとあれば、日延べ申しつけても遣はさうが、して、それには何ぞ手がゝりが

庄兵　サ、その手がゝりと申しては

官藏　あるまい〳〵。その色紙は、忰新兵衞が盗み出し、それを賣つて藝者狂ひとの事。

萬七　跡の始末がむづかしいゆゑ、新兵衛は身を投げて死んだではないか。さすれば何の死人に口なし
　行くへの知れぬ寶の詮議、いつまで日延べがなるものか。イケ馬鹿々々しい。
宮藏　親が親なら、悴の新兵衛まで大だわけ。親に似ぬ子は鬼つ子とは、よく云つたものだ。
萬七　モシ〳〵、あの新兵衛めは、この親仁どのゝ子ではござりませぬ。何者の胤やら知れぬ新兵衛。
　大方盗人の胤かも知れませぬ。
宮藏　其やうな素性知れざる者に、お出入りは申しつけられぬ。紛失の色紙詮議いたし、其方が手より
　差上げなば、お出入りは萬七、其方に申しつけるぞ。
萬七　有り難う存じます。よろしくお願ひ申します。
庄兵　年寄つたれどもこの庄兵衛。身を粉に碎き寶の詮議。何卒少しの御猶豫を
兩人　叶はぬ事だ。
庄兵　すりや、どうあつても
萬七　酒盛りの席へ禁句の、猫親仁は出ないものだ。
　ト庄兵衛を穢なさうにして引つ立てる。
庄兵　そりや又あんまり

萬七　エヽ、面倒な。キリ〳〵立ちやァがれ。

ト庄兵衛を引つ立て、門口へ出かける。新兵衛堪へかね、ツカ〳〵と入り、庄兵衛を圍ひ、萬七と見事に立廻つて思ひ入れ。皆々見て

皆々　ヤヽ、其方は玉屋新兵衛

ト萬七見て

萬七　イヤア、身を投げて死んだ新兵衛。どうして爰へ

トぎよつと思ひ入れ。此うち新兵衛、物も云はず、前幕の財布より金を出し、萬七が前に置き

新兵　サア、萬七どの、この金を受取つて、この間の品を返して下さい。

萬七　この間の品とは

新兵　ハテ、物覺えの悪い。今度お屋敷から親仁様へ、お預けなされた寶と知らず、こなたが勸めを幸ひに、よこしま事と思ひながら、手詰めの事ゆゑ詮方なく、わづか五十兩の抵當に、こなたへ預けたあの色紙、どうぞ返して下さい。

萬七　新兵衛、そりや何を云ふのだ。おれは其やうな事は覺えはないぞ。

新兵　あれ程こなたに預けた色紙。アヽ、聞えた。この新兵衛を一ぱいやつて、貴様の方へ質に取つて

おれが身を投げ死んだと聞き、紛失の色紙はこの萬七、尋ね出しましたと、こなたの手からお屋敷に差上げ、金にする所存だな。

萬七　コレサ／＼、そりやア何を云ふのだ。お役人樣方も聞いてござる。滅多な事は云はぬもの。その色紙とやら、短册とやら、おらァ預かつた覺えはないぞ。

新兵　イヤ、覺えないとは云はせぬ。その時色紙の預かり手形、しかも貴樣の印形、手跡。一旦水には濡れたれども、元の如くに、コレ爰に

ト前幕の預かり手形を出す。萬七、官藏、顏見合せ思ひ入れ。

萬官　ヤア。

新兵　なんと動きはとれまいがな。

萬七　エヽ、仕方がない。ソレ、色紙、鑑定の折紙、受取れ。

ト懷より、二品を出して渡す。

新兵　そんなら五十兩、渡しましたぞ。

ト包み金の五十兩を出す。

萬七　金は慥かに受取つた……イヤア、この包み紙は、矢弓稻荷樣のお札紙。アヽ、勿體ない。

ト包み紙をあたりへ捨てゝ、鼻紙にて包み直し、金を懐中する。

庄兵　それ程こなたが持つてゐながら、暫時もわしに難儀をかけ

竹川　その身の出世計らんと、隠し置くとは不届き至極。屋敷へ召連れ歸り、屹度糺命申しつくる筈なれど、寶出づる上は、その罪を御容赦下さる。以後を屹度愼しみ居らうぞ……この上は、官藏様には、お表の御名代。イザ、御内見を

ト二品を出す。官藏見て

官藏　定家の色紙、折紙もろとも、相違ござらぬ。

新庄　すりや二品に、相違ござりませぬか。

竹川　御内見相濟む上は、二品の儀は

官藏　只今まで遲滯に及びし段、お上へ御訴訟申し、明日役所にて、受取るであらう。

竹川　それまでは矢張り新兵衛へお預けなさる。大切に致してよからう。

新兵　畏りました。

庄兵　イヤモウ、それでこの親仁も安堵いたしました。コリヤ、新兵衛、大切な色紙、粗略なきやうに致しませうぞ。左様なら私しは、もうお暇申しませう。

新兵　モシ、親仁樣、必ずお案じなされまするな。

庄兵　左樣なれば、竹川樣、官藏樣

官藏　萬七も身と一緒に

萬七　有り難うござります。

新兵　左樣なれば、奧へござつて

竹川　しばし休息。

新兵　まづ、入らつしやりませ。

ト唄になり、官藏、竹川に萬七附いて奧へ、庄兵衞は新兵衞にこなしあつて、向うへ入る。新兵衞殘り、こなしあつて

ほんにこの間、思ひがけない手詰めゆゑ、金の代りに預けた色紙、取戻さうにも、どうしたものであらうと思ふうち、不思議な事で五十兩。……これでわしも一つの安堵。嬉しや〳〵。それにつけてもあの小女郎、今日爰へ來てゐるとの事。早う逢ひたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。合ひ方にいけころしあつて、奧より小女郎出て來り

小女　そこに居やしやんすは、新兵衞さんぢやないかえ。

新兵　其方は小女郎、よう來てたもつたの。

小女　ほんにこの間は、思ひがけない二人の身の上。お前も、わたしも。不思議に命助かつたも、お稻荷樣のお庇。また此やうにめぐり逢ふとは、めでたい事ではないかいなア。

新兵　めでたいと云へば、其方も知つての通り、いつぞや萬七に預けた色紙は、請け戻したほどに、喜んでたもや。

ト出して見せる。

小女　そんならそれが大切な、色紙でござんすかえ。それでお前も安堵でござんせう。さりながら、その金を、どうして才覺なさんしたえ。

新兵　サア、聞いてくれ。この間番場で、人に追ひかけられた時、いつの間にやら、足に搦んだ金財布中には松山の札紙に包んだ五十兩、これも矢ツ張り矢弓稻荷樣の、御利益であらうわいの。

小女　ほんに此やうな、嬉しい事はござんせぬ。その上、物事丸く納まれば

新兵　おツつけこなたは、天下晴れておれが女房。

小女　そんなら必ず、新兵衛さん

新兵　女房ども。

小女　オヽ嬉し。

ト寄りそふ。この時藤兵衛、奥より出て來り、新兵衛を見て、愕りして

藤兵　イヤア、死んだと思つた玉屋新兵衛、生き返つて來たか。但しは幽靈か。

小女　ヤア、お前は兄さん

新兵　藤兵衛どの、そんなら何かの

藤兵　樣子は知らねど、あの小女郎と、たとへどんな約束したとても、こなたのやうな幽靈男に、おれの妹はやられませぬ。

新兵　すりや、この小女郎は

藤兵　この間の一件から、深川の親方へ、五十兩の立て金して、年期を拔いた妹。その金も出さずに、只夂五分で、大事の米櫃を、貴樣達の弄み物にはさせない。それともこの女が欲しくば、立て金の五十兩を、寄越さつしやるか。

新兵　成る程、兄貴の云はつしやるも、尤もではござるが

藤兵　その金は無いといふのか。

新兵　サア、その五十兩といふ金、いま爰には

藤兵　無いといへば、マア破談といふところだが、それでは色氣がない。斯うするがよい。今さしあたつて金が無くば、當分金の代りに、何ぞ質物を

新兵　サア、質というても、いま爰には

藤兵　ハテ、寶は身のさし合せとやら。貴樣が持つてゐるこの色紙を

ト新兵衞の持つたる色紙の箱を取る。

新兵　アヽ、コレ〳〵、それはお屋敷へ上げねばならぬ大事の品

藤兵　サア、その大事の品だによつて、おれが預かる。今にも五十兩さへ持つて來れば、早速返してやります。

小女　モシ〳〵、新兵衞さん、折角手に入つたあの色紙、又ぞろ外へ渡しては、お前の御身分に係はる事、外に仕樣はないかいな。

新兵　成る程、其方の云やる通り、一旦難儀となつたあの色紙、どうも人手には、と云うて差詰め五十兩の金。

小女　それが無ければ、二人の願ひも叶はず

兩人　こりやマア、どうしたらよからうやら

ト思ひ入れ。此うち藤兵衞、箱の中より色紙を出し、そつと懷へ入れ、屛風の貼交ぜの畫を剝がし摺りかへて、元のやうにして置く。

小女　人さんも知らしやんした、お前とわたしが仲、いさゝかの金ゆゑに、斯うなつたと云はれては

新兵　おれは勿論、其方まで、どうも人中へ顏が出されぬ。

小女　これを思へばこの間、死んだ方が增しかいなう。

藤兵　コレ〳〵、その述懷は跡へ廻して、金が出來ずば、この代物を持つて行きませう。

新兵　イヤ〳〵、どうあつても、その色紙は渡されぬ。

藤兵　そんなら外に代物がござるか。

新兵　サア、外に代物というては無けれども、せめてその品ばかりは此方へ置かねば、後方お尋ねの時に、又ぞろ遲疇あつては、申し譯がない。その代り、爰に鑑定の折紙がござるが、これを金の出來るまで、預かつては下さるまいか。

ト袱紗包みの鑑定書を出す。藤兵衞見て

藤兵　そんならこれが鑑定書か。ちよつと中を改めて

ト袱紗を開き、出して見る。この時奧よりお松出て

まつ　モシ、新兵衛さんえ〳〵。

新兵　モシ〳〵、新兵衛はこれに居りますが、なんでござる。

まつ　奥のお客様が、お前をちよつと呼んでくれと仰しやりました。

小女　大方、色紙の事でござんせうぞえ。

新兵　そんならちよつと、おれは奥へ

　　ト行きにかゝる。この時藤兵衛、件の折紙を、最前の摺り物と摺りかへ、袱紗に包み

藤兵　モシ〳〵、新兵衛さん、お前がいろ〳〵頼まつしやるから、この鑑定書を預かつて置きませうが
大事の品ゆゑ念のため、ちよつとこれへ封印しては下さるまいか。

新兵　ハテ、こなたも念のいつた事を

藤兵　イヤ〳〵、近しき仲に垣とやら

新兵　そんならちよつと封印を

　　トありあふ硯箱をお松持つてくる。新兵衛、封印して渡す。

藤兵　大事の品は、慥かに預かりました。

新兵　後方までに、金の才覺すれば

藤兵　世間晴れての二人は夫婦。嬉しいかい〳〵。

兩人　嬉しうなうてなんとせう。

小女　とはいへ最前の頼みもあれば、夫婦となつては彼方へ義理が

新兵　ヤア

小女　サア、彼方の義理もよいやうに、早う座敷へ

まつ　サア、お出でなされませ。

ト流行り唄になり、新兵衞イソ〳〵して、お松もろとも奥へ入る。小女郎こなしあつて

小女　お屋敷のお客様も、御用が濟んだら、もうお開きであらう。わたしもちよつと

ト行かうとする。

藤兵　妹、おぬしには、ちよつと話しがある、待つてくれ。

小女　わたしに話しとはえ。

藤兵　外でもない、今てめえを新兵衞にやらうと云つたも、金が欲しいゆゑの事。當分は兎もあれ、長う添はせては置かれないぞ。

小女　エヽ、そりやなぜでござんすえ。

藤兵　ハテ、金を取つた日にや、ちよつと足入れをした跡で、おぬしはおれが女房、その時は茂右衛門をきはめるぜえ。
小女　兄さんとした事が、酒の機嫌やら、何をじやら〳〵と
藤兵　おどけではない、生眞面目よ。
小女　ヤア
藤兵　是非ともおぬしは、おれが女房。
小女　現在妹を、女房にするとわえ。
藤兵　ハテ、おぬしはおれと本當の兄妹ではない。赤の他人といふ事は、この間あれほど話して聞かせたではないか。
小女　それぢやというて少さい時から、育ち合つた仲なれば、兄妹も同然、それが夫婦となつては、この世からなる畜生道。
藤兵　なんと吐かす。
小女　アイ、お前は物に辨まへない、ほんの畜生ぢや〳〵。詞を聞くも穢らはしい。重ねて其やうな事云うて下さんすな。

藤兵　そんなら、これほど云つても

小女　犬同然のお前に、挨拶するも否ぢやわいな。

藤兵　わんとも返す詞がない。わんの事やら譯が知れぬ。なまじひな事云ひ出して、おれは面目ない。犬に譬へられては人交はりがならぬ。生恥を晒さうより、幸ひ爰に木鋏、いつそ、この場で

ト植込みにある木鋏を取つて

南無阿彌陀佛。

ト死なうとしても、小女郎知らぬ顏してとめぬゆゑ

イヤ〳〵、此まゝ死んではほんの犬死。とても死ぬなら行がけの駄賃だ。この折紙を引裂いて

ト件の折紙を見せちらし、引裂かうとする。小女郎見て

小女　アヽコレ、それは大事の

藤兵　そんなら引裂くまいが、おれが女房に

小女　サア、それは

藤兵　否と云へば、引裂かうか。

小女　アヽモシ、それは

藤兵　そんなら女房になるか。

小女　サア、それは

藤兵　サア〳〵、どうするのだ。

ト小女郎思ひ入れあつて

小女　モシ、そんならどうなとしようわいなア。

藤兵　エヽ、有り難い。それでちつと落ちついた。これといふも信心のお庇。

トこの時、以前の札守りの紙を見附け

イヤア、爰に矢弓稲荷のお札が、アヽ、勿體ない〳〵。併しこの間、盗賊除けといふゆゑ、お守りへ包んだ、その金が失なつたが、どうも合點がゆかない。もしや稲荷さん、お前が盗みはせぬかえ。

ト云ひながら、小女郎に見えぬやうに、見物によく見せ、件の色紙を守りの紙へ包み

どうぞ、このえて吉が、今度は失なりませぬやうに、南無矢弓稲荷大明神樣、ならびに小女郎と茂右衛門を致しますやう、稲荷さま〳〵……コレ、おぬしもこのお守りを信心しやれ。

小女　其やうな事は知らぬわいなア……生きてゐるゆゑ、この苦しみ。願ひ叶はずば、いつその事に

藤兵　ヤ。

小女　サア、いつその事に新兵衛さんと

藤兵　縁を切つて、今日からおぬしは

　　ト思ひ入れあつて小女郎に囁く。この時新兵衛、奥より出て來ながら

新兵　オイノ〵、ちよつと行て來るぞや〵……小女郎、そこにゐやつたか。其方も知つての通り、先程この藤兵衛どのに、もらつて置いたわしの女房。今日から此やうな勤めはさせぬ。サヽ、此方へおぢや〵。

藤兵　イヽヤ、そんならどうでも

新兵　ハテ、最前約束した事なれば、小女郎はわしが女房。

藤兵　成る程、そりやァさうだが、少つと此方にいきさつあれば、なんだか氣が揉めるわえ。約束を違へると、先刻の通り、この品を

　　ト件の折紙か引裂かうとする。新兵衛見て

新兵　そりや、最前預けた品ではないか。

小女　モシ、兄さん、滅多な事を

藤兵　それでも今の約束が

ト思ひ入れ。この時、上手の障子屋體よりお倉、手を合せて頼む思ひ入れ。小女郎、左右の體を見て

胸苦しき思ひ入れにて

小女　サヽ、尤もぢやく。何事も、わたしに任せて

ト皆々へ受けて思ひ入れ。藤兵衞のみこみ

藤兵　そんなら必ず

新兵　二世と誓ひしおれが女房。

小女　イヽエ、わたしやお前の女房に、なる事は否でござんす。

新兵　ヤヽ、なんと。

ト合ひ方。

小女　どうぞこの約束、變替へして下さんせ。

新兵　そりや又なぜに

小女　わたしや外に男があるゆゑ、お前は嫌になつた。アイ、うるさうなつたわいなア。

新兵　どうしたと

小女　ハテ、嫌にならいでかいなア。お前と心中する程の、仲でもないが、斯ういふ譯ゆゑ、生きて居られぬ、どうぞ死んでくれと、わたしを連れ出しての無理心中。運よく命助かつたも、兄さんのお庇。後で聞けばお前も助かり、今の身の上。あの時死んで見なさんせ、わたしは犬死。其やうな情のない男は、きつい嫌ひ。それぢやによつて、嫌になつたわいな。

ト合ひ方になり、新兵衞は合點のゆかぬ思ひ入れ。藤兵衞喜ぶこなし。

新兵　これサ〳〵、おぬしは今更何を云ふのだ。人も知つた二人の仲を、打つて變つた愛想づかし、どうもおれは合點がゆかない。アヽ、聞えた、外の客へ出すに、おれといふ男があつては、心が置かれるといふのか。ハテ、今も云ふ通り、今日からは勤めを引かせ、其方はわしが女房ではないか。

小女　あれマア、きつい自惚れ。お前のやうな働きのない男と添うては、末が案じられる。それぢやによつて、わたしや愛想が盡きたわいな。

新兵　そりやアおぬしは本氣で云ふのか。

小女　アイ、わたしや本氣。お前のやうに、狂人じみてはゐぬわいなア。

新兵　なんと吐かす。

藤兵　さう云へば成る程、目の色までも違つたやうだ。
新兵　コレ〳〵、藤兵衛さん、こなたまでが、なぜ其やうな事を
藤兵　ハテ、大事の妹を、狂人のやうなこなたには遣られぬ。約束變替へだ。證據に預かつた折紙、其方へ返しますよ。
ト件の袱紗包みを返す。新兵衛取つて
新兵　すりや、今になり折紙を……この新兵衛を突き出して
小女　外の男と末長う、……わたしやお前が否ぢやわいなア。
新兵　うぬ、もう料簡が
ト立ちかゝる。藤兵衛、小女郎をかばひ
藤兵　此やうな狂人に構はずと、妹は奥へ
小女　そんなら兄さん
新兵　とは云ふものゝ
小女　あのマア好かぬ、顔わいなア。
ト唄になり、小女郎、新兵衛へ心を殘し、三人思ひ入れあつて、藤兵衛小女郎、奥へ入る。お倉、障

ツカ〳〵と出て、新兵衛をとめて

子を閉す。新兵衛殘り、こなしあつて、脇差を提げ、奥を目がけ行かうとする。この時、お倉、ツカ

くら　新兵衛樣、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。

新兵　ヤヽ、こなたはお霜どのゝ親御

くら　こりやお前、血相かへて、どこへござる。

新兵　ハテ知れた事、心の變つたあの女、奥へ踏んごみ、眞二つに

くら　成る程、わしもあれにて、始終は殘らず聞きました。お腹の立つは御尤もぢやが、モシ、お前は大切なお身の上、親御樣のお爲といひ、殊には色紙とやらをお渡しなされねば、御身にも係はるとの事。そこにお心が附きませぬか。マア〳〵、お待ちなされませ。

新兵　でも、あの女めを

くら　ハテ、お若い時には、此やうな事はまゝある習ひ、そこを一つ料簡して、先の女へ面あてに、外の女をお持ちなさるが、當世ではござりませぬか。

新兵　でも、さしあたつてその女は

くら　お前のお氣には叶ひますまいが、わしが娘のあのお霜を、女房に持つては下さるまいか。

新兵　成る程、互ひに幼ない時より親々の、云ひ號けあるお霜どの、いかにも女房に持ちませうが、道のり遠き梅田村。

くら　そのお心なら、幸ひ娘も今日こゝへ。

新兵　ナニ、お霜どのがこの所へ

くら　未だ互ひに見ず知らず、ほんの云ひ號けは名ばかりゆゑ、お近付きのために、今日連れて參じました……お霜、ちよつと爰へおぢや。娘、娘。

しも　アイ〳〵、只今それへ。

ト合ひ方になり、お霜出て來り

モシ、母さん、なんぞ用でござんすかえ。

くら　イヤモウ、用どころぢやない。兼ねて話した、其方と云ひ號けの、玉屋の御子息樣が、お出でなされたわいなう……モシ、これがお前と云ひ號けの、お霜でござります。どうぞこれから、不便がつて下さりませ。

新兵　今までは云ひ號けばかりで、顏も合はさず、逢ふは互ひに今日が初めて。

しも　そんならお前さんが、わたしが殿御でござりましたかえ。

ト互ひに恥かしき思ひ入れ。

新兵　お霜どのとは、こなたであつたか。

しも　どうぞ今から

ト兩人顏を見合せ、悄りして

新兵　ヤヽ、こなたはいつぞや向島、牛の御前の暗まぎれ

しも　夜も丑滿に思はずも

新兵　嫉妬と見えて邪慳の女

しも　その淺ましいなり形

新兵　凄い女の只一人

しも　願ひをこめて打つ釘に

新兵　道理でおれと小女郎の、仲も其方が

しも　情ない。どうしてわたしが

新兵　でも恐ろしいその夜の有樣。

しも　今更わたしや恥かしい。その云ひ譯は

ト門口へ出ようとする。お倉とめて

くら　コレ娘、わが身はどこへ行くのぢや。

しも　わたしや新兵衛さんに、どうも顔が合されぬ。

くら　して、その譯は

しも　その事ばかりは

新兵　よもや爰では

くら　エ。

しも　恥かしうござんす。

トお倉を振り切り、ツイと向うへ走り入る。お倉心得ぬ思ひ入れにて

くら　ハテ、合點のゆかぬ娘が素振り

新兵　知らぬ道筋、女の一人。

くら　心許ない娘が身の上。

新兵　跡追ひかけて

くら　片時も早う。さうぢや。

ト時の鐘にてお倉、向うへ走り入る。新兵衛あと見送り

新兵　この間、思ひがけない所で逢うたあのお霜、面目ないと思ふやら、血相かへて行きつたが、これも心がゝり。その上、人も知つた小女郎とおれが仲、今更あのやうな事があつては、どうも世間へ顔出しがならぬ。おのれ小女郎、此まゝに置かうか。

ト思ひ入れ。この時奥より官藏、竹川出て來り

官藏　玉屋新兵衛、それに居つたか。

新兵　お二人樣、御免なされませ。

ト奥へかゝる。

官藏　新兵衛、いづれへ參る。

新兵　ちと私しは用事ござつて

ト心の急いたる思ひ入れ。竹川、その樣子を見て

竹川　何やら、そわ〳〵したこの場の樣子。

新兵　ヤア。

官藏　最早我れ〳〵は歸宅いたす。最前の色紙を渡しやれ。

竹川 イヤナニ新兵衛どの、最前の色紙、明日お役所まで持參の筈なれども、大切の品ゆゑ、ナア申し官藏樣。

官藏 左樣々々、又ぞろ遅滞あつては互ひの身の上。善は急げとやら、只今受取り、歸宅いたさう。

新兵 成る程、御尤も。左樣なら、色紙をお受取り下さりませ。

ト件の箱を出す。官藏取つて、よく〳〵改め見て

官藏 ヤア、こりやコレ、似ても似つかぬ眞赤な似せ物。

新兵 エヽ、なんと仰しやりまする。

ト取上げ見て

ヤア〳〵、いつの間にやら色紙は無くて、思ひがけないこの品は

竹川 最前見たるは誠の品。今更色紙紛失いたさば、お上へ申し譯なき役目の越度。これにはなんぞ、申し開きがござりますか。

新兵 サアそれは

官藏 我れ〳〵に似せ物を、渡さうと致す横道者。この手際では、鑑定の折紙心許ない。して、折紙は

新兵 只今それへ差上げませう。

ト以前の袱紗包みを出し

鑑定の折紙、御覽下さりませう。

ト出す。竹川、うや〳〵しく開き見て

竹川　ヤ、鑑定の折紙と思ひの外、この品は

ト出す。新兵衛見て

新兵　ヤ、この品までも似せ物とや。ハア、

ト思ひ入れ。

官藏　二品ともに遲躊あつては、容易ならざる一大事。

竹川　玉屋庄兵衛は久しきお出入りゆゑ、この度御扶持を添へ、右の二品お預けありしに、紛失と申しては、私しども役目の越度。是非に及ばぬこの上は、お上へ訴へ、嚴しい御詮議。

ト立ちかゝる。

新兵　御尤もではござりますれど、三方四方の難儀とあらば、身を粉に碎き寶の詮議。何卒少しの御猶豫を

竹川　若氣の誤まりとは申しながら、身に降りかゝるこの場の難儀。疑ひ多き寶の在所、そこらあたり

に鵜の目鷹の目。

新兵　ヤ。

官藏　身共はこれより預かり主の、玉屋庄兵衞詮議のうちは、彼れに繩打ち、屹度糺命。

ト立ちかゝる。新兵衞思ひ入れあつて

新兵　親人の難儀とあらば、子としてどうも私しは

竹川　尤もなれど、申し譯は役所にて

官藏　何は兎もあれ、庄兵衞めを

新兵　イヤ、その科人はこの新兵衞。

官藏　何をおのれが

ト新兵衞を突きのけ

然らば、竹川どの

竹川　女に及ばぬお上の御裁許。

新兵　何卒お慈悲を

ト竹川へ寄るを、官藏支へて

宮藏　未練な事を……サヽ、ござりませ。
ト時の鐘になり、思ひ入れあつて兩人向うへ入る。新兵衞うろたへ
新兵　親仁樣のお身の上、あと追ひかけて
ト同じく時の鐘にて、兩人の跡を追うて向うへ入る。この時奥より、藤兵衞、萬七出て來り
萬七　どうだ藤兵衞どん、うまく行つたか。
藤兵　うまいどころではない、庄兵衞親子はあれで寂滅。
萬七　して、二種の代物は
藤兵　氣遣ひなされますな。人に氣取られぬやう、稻荷樣の札に包んで、色紙はこの通り。鑑定の書き物もござります。
ト二品を見せる。
萬七　出來た〳〵。この趣きを官藏樣へ、お知らせ申したいものだが
藤兵　この事詳しく官藏樣へ
萬七　手紙はおれが屆けてやらう。こなたは早く
藤兵　合點だ〳〵。併し、暗くなつたやうだが

萬七　オツト、灯はおれが

ト奥より燭臺を取つて來る。藤兵衞、ありあふ硯箱を取つて、手紙を書いて

藤兵　そんなら、この手紙を官藏樣へ

萬七　よし〳〵。これで何かゞ揃つたが、この上は、どうぞ小女郎を女房に

藤兵　隨分上げませう。その代り帶代の五十兩。

萬七　皆まで云ふまい。先刻に取つた五十兩。ソレ、受取らつし。

ト五十兩を渡す。藤兵衞取つて

藤兵　有り難い〳〵。右から左の即金。モシ、今に妹を連れてくるから、今夜はしつぽり

萬七　おれも有り難い。南無藤兵衞大明神樣。

藤兵　幸ひ爰に屛風あり

ト屛風をよき所へ立て廻し

モシ、人の入りこむ事なれば、灯を消して

ト灯を消し、思ひ入れあつて、探り〳〵奧へ入る。萬七、嬉しきこなしあつて

萬七　今夜は小女郎と新まくら。エヽ、畜生め

ト思ひ入れ。時の鐘、合ひ方になり、奥より藤兵衞、小女郎の手を取り、跡より女中お園、小女郎の帶へ取つき、暗き思ひ入れにて

藤兵　萬七さん、さぞお待ちかねでござりませう。

萬七　小女郎ぼう、お出でか。

小女　モシ、萬七さん、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

萬七　勿體ない。なんのそもじを見捨てゝたまるものか。

小女　そんならこの末

萬七　小女郎ぼう

小女　オヽ嬉し。

ト思ひ入れ。此うち藤兵衞、お園をポイと突きやる。萬七は小女郎と心得、こなし。

藤兵　ゆるりとおしげりなされまし。

ト唄、時の鐘になり、藤兵衞、小女郎に囁く。小女郎心得、奥へ行かうとして、萬七が落したる以前の手紙、足に觸るゆゑ、何心なく取上げ、見ようとすれど暗きゆゑ、いろ／＼こなし。此うち藤兵衞は小女郎の袖を探り、奥へ來いといふ思ひ入れ。小女郎、今行くから先へ行つて待つてゐろと云ふこ

なし。藤兵衛心得、思ひ入れあつて、探り〳〵奥へ入る。小女郎殘り、件の手紙を見ようとして、暗きゆゑ、フト吊り燈籠を見附け、この灯にて、よく〳〵見て

小女 ヤヽ、この手紙の文言では、一品の寶は、兄さんが似せ物を拵へて、誠の品は隱して持つてるとの事。すりや新兵衛さんの難儀。こりや斯うしてはゐられぬ。

ト思ひ入れ。この聲を聞き、屏風を刎ねのけ、萬七とお園出て

萬七 ヤア、その聲は小女郎だな。

小女 ヤア、萬七さん

萬七 そんなら此奴は……エヽ、いま〳〵しい。

トお園を蹴とばす。此うち小女郎は件の手紙を持ち、行かうとするを、萬七探り寄つて支へる。立廻りよろしく、時の鐘にて道具まはる。

本舞臺、三間の間、正面まさき垣、上手栗丸太の木戸、すべて中木場あたり、夜の景色、時の鐘にて道具とまる。

ト下座より按摩、向うより番太郎、割り竹を持ち出て來る。

番太　火の用心さつしやりませう。
按摩　按摩鍼の療治……モシ〳〵、もう何時でござります。
番太　ハイ、もう八ツでござります。
按摩　今夜は療治のあつた所爲か、夜が更けたわい。
番太　按摩さん、この先には惡い犬がゐる。氣を附けて行きなせえ。
按摩　ハイ、有り難うござります……按摩鍼の療治。
番太　火の用心さつしやりませう。
ト按摩は向う、時廻りは下座へ入る。時の鐘にて、向うより藤兵衞、以前の形、ぶら提灯をさげ、脇差を差して出て來り
藤兵　今打つたのは八ツだな……イヤ、巧く着服した色紙と折紙、宮藏樣のお屋敷へ持つて行けば、褒美の金はヅツシリ。それはさうと、あんまり夜が更けたゆゑ、一本きめて來たら、とんだ腰が重い。ドリヤ、夜明けぬうちに
ト舞臺へ來る。この時向うバタ〳〵になり、小女郎、以前の形、件の手紙を持ち、走り出て來り
小女　モシ〳〵、そこへ行かしやんすは、兄さんぢやないかえ。

藤兵　ヤア、おぬしやァ妹、今時分何しに爰へ

小女　ハテ知れた事。この手紙を見れば、お前の手跡。中の文言には、誠の寶はお前が持つてゐるとの事。どうぞわたしに下さんせ。

藤兵　成る程、欲しくば遣らうがその代り、われはどうしても女房にするぞ。

小女　そんなら、どうあつても

藤兵　ハテ、誠の兄弟といふではなし、大方二十年も前の事、おれが小二才の時、八丁縄手で盗んだる呉服箱の中に寝てゐた女の餓鬼。その時おぬしは三つばかり、それから五年が間育てゝ、まづ始まりは小ぢよくにやり、爰のふみ玉、彼處のあげ玉、とゞのしまひにおれが女房。まんざら野暮な話しでもあるまいが。

小女　エヽ、聞けば聞くほど邪慳なお前。その品が無いゆゑに、多くの人の難儀になる。どうぞわたしにその品を

藤兵　遣りは遣るが、女房になるか。

小女　どうしてマア其やうな事を

藤兵　ならぬと云へばこの寶を、いつその事、種なしに

ト誠の品は懐中して、上包みの紙を本物と見せ、手早く提灯の火にてパッと燃す。小女郎見て

小女　ヤヽ、大切な品を失うては、新兵衛さんの身の上に

藤兵　かゝると知つて焼きすてたも、小胸の悪い戀の意趣。

小女　それ聞く上は、是非に及ばぬ。

ト油斷を見濟まし、藤兵衛が差したる脇差をとり、切りつける。立廻りのうち、件の手紙を落す。藤兵衛取つて

藤兵　大事の手紙。

小女　それを

ト木魚の入つたる鳴り物になり、件の手紙を枷に立廻つて、兩人きつと思ひ入れ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、まさき垣、ヽヽヽヽ洲崎辨天道と記したる傍示杭。上手に切り穴、茅のしげり、川の心。中木場の道具、寺の鐘にて道具とまる。

ト時の太鼓のやうな禪のツトメになり、向うより中間一人、高張りを持ち、次に中間二人、青網のか

かりし四つ手駕籠を舁き、紺看板の侍ひ一人附き、跡より左助出て來り

左助　お願ひでござりまする〱。

侍ひ　ヤイ〱、素町人め、願ひとは何事ぢや。

左助　見れは駕籠の中には、私し主人庄屋庄兵衛、老人の儀にござりますれば、何卒お慈悲をお願ひ申し上げます。

侍ひ　ヤア、願ひなら役所にて申せ。途中の訴へ聞き届けぬ。駕籠を急げ。

ト侍ひは左助を振り切り、皆々下座へ入る。向うバタ〱になり、新兵衛、以前の形、二本差しにて出て來る。左助見て

左助　ヤア、あなたは若旦那ではござりませぬか。

新兵　して、親仁樣は

左助　只今乘り物で……私しは跡より追ひつき、叶はぬまでもお慈悲願ひを

ト左助、下座へ入る。新兵衛思ひ入れあつて

新兵　この新兵衛が不所存ゆゑ、義理ある親を牢舍させては、世間のおもて、この身の不孝。こりや、一思案せにやならぬわえ。

ト こなし。この時かすめたる風の音になり、以前の手紙、飛んで來て新兵衞の前へ落ちる。新兵衞合點のゆかぬ思ひ入れにて、手紙を取上げ、星あかりにて透かして見て

ヤヽ、大切な二品は、藤兵衞が持つてゐると、官藏へ内通の手紙。これを證據に二品を

ト 行きにかゝる。この時、以前の番太郎窺ひ寄つて、件の手紙を浚ひ、一散に向うへ走り入る。新兵衞こなしあつて

南無三、大事のあの手紙。跡追ひかけて

ト 同じく向うへ走り入る。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、元の道具。爰に小女郎、藤兵衞を引附け、件の脇差にて刺し通してゐる見得。一つ鉦の念佛にて道具とまる。

藤兵　エヽ、殘念な。女と思ひ油斷して、深手を負うたか。

小女　一旦兄弟とはなつたれど、明かして見れば他人のお前。二世を誓ひし夫のためには替へられぬ。

ト また一太刀切る。

藤兵　小女郎は兄を殺した。人殺し／＼

小女　アヽコレ……もうこの上は、是非に及ばぬ。

ト立廻つて藤兵衛を切り倒し、とゞめを刺す。この時向うより新兵衛走り出てくる。この物音に驚き刃物を捨てゝ行かうとする。新兵衛合點のゆかぬ思ひ入れにて捕へようとする。立廻りに兩人、顔を見合せ

新兵　ヤア、お前は新兵衛さん

小女　小女郎か。よくもおのれは

ト切つてかゝる。小女郎とめて

小女　サア／＼、腹の立つのは尤もなれど、これには段々譯のある事。お前の難儀となつた色紙と折紙あの兄さんが燒き捨てたゆゑ、是非なく手にかけましたわいなア。

新兵　ナニ藤兵衛が一品を……最前の手紙にて、寶の在所は知れたれども、一品は灰となつたか。ハアヽ。

ト思ひ入れ。鷄の聲。寺鐘になる。

小女　ありやもう夜明け。

新兵　生きてゐられぬこの身の上。

小女　わたしとても同じ事。人を殺せし

新兵　コレ……夜明けぬうちに
小女　愛宕離れて
新兵　冥土の旅へ
　ト花道へ行きにかゝる。向うより次郎兵衞、古菅笠をかむり、紙屑籠、竹箸を持ち、紙屑拾ひの拵へにて出て來り、兩人とゆき違ひ、次郎兵衞は舞臺へ來て、落ちてある折紙を、紙屑と心得、籠の中へ入れる。この時また落ちてある稲荷の守りと包み金を取上げ見る。此うち兩人花道へ行きかゝる。次郎兵衞、件の二品を透かし見て
次郎　こりやこれ小判と松山の
小女　守りがもしや
新兵　コレ。
　ト入れ替つて小女郎の手を取る。木の頭。
次郎　アヽ、勿體ない。
　トこなし。この仕組みよろしく、ひやうし幕の外、時の鐘にて、兩人向うへ入る。知らせにつき、シヤギリ。

幕

三幕目

田中駕籠屋の場

役名――出村新兵衞實ハ淨雲。駕籠舁き、杢右衞門實ハ竹垣佐五右衞門。倉橋官藏。駕籠舁き、九八。所化、鯛山。同、鯛入。女乞食、おたつ。同、おてふ。長屋の者、藤六。船頭長吉。三國屋小女郞。玉屋新兵衞。

本舞臺、三間の間、押入れ附きの世話場、のれん口、上の方に二階、障子明け閉て。壁を切る仕掛け門口に「かごや」といふ掛け行燈、生垣、神酒供へを飾りあり、すべて淺草田中駕籠屋の體。てんつゝにて幕明く。

と爰に九八、神酒へ火を打ちかけ、二十六夜へ捧げてゐる。門口にはお蝶、お辰、序幕の女非人にて、物乞うてゐる。鯛入、鯛山、序幕の所化にて、着物を着替へ、帶を締め、衣を育てゐる體。

九八　モシ〳〵、お前方は昨夜も燈籠かえ。

兩人　勿論〳〵。

たつ　モシ、今夜は二十六夜でござりますわな。ちつとばかり

てふ　お手の内を、お願ひ申します〳〵。

九八　エヽ、手がふさがつてるといふに。

鯛山　アヽ、コレ〳〵、手の内は愚僧が遣らう。サア〳〵、幾人だ〳〵。

てふ　ハイ〳〵、二人居ります。

鯛山　ソレ、二人前。

ト錢を遣る。お辰見て

たつ　ヤ、あなたは東福寺のお所化様だね。

鯛山　わりやア寺の近所の非人だな。

たつ　左樣でござりまする。今晩は六夜待でござりやすから、思ひ入れ稼いで、晩には仲間内に足洗ひがあるから、めでたく呼ばれて御馳走があるのサ。

鯛入　アヽ、なにか、仲間を拔けて、素人になる者があるのか。

てふ　左樣でござりまする。なんだか今日、急に素人になるといつて、今夜六夜待をして、お別れに大じやれけ。

九八　成る程、こりやア祝ひさうなものだ。

鯛入　コレ〳〵、九八、この着替を置いて行くから、杢右衛門が起きたら、いつもの伊勢八へやつて、成るたけ借りて下さいと、よく云つて下さい。
九八　エヽ、この包みを、えて物へやるのかえ。
鯛山　わしが黒の袷は、まだ一度も着ぬ代物ぢや。頭巾もあるから、一つに籠めて一兩借りたい。その金は、いつもの土手の茶屋が來やう程に、渡して下さいと、きつと云うて下さい。
九八　アイ〳〵、左樣申しやせう。モシ、お前さん方、あんまりしやれ過ぎて、お寺をかぶらねえやうになされませ。
鯛入　イヤモウ、女郎買ひでかぶれば、出家の身は浮かむといふものだ。ハヽヽヽヽ。
九八　さう根締めが極まつてゐれば、ようござりやす。
兩人　そんなら必ず頼んだぞよ。
九八　畏りました。
たつ　ドレ、わつちらも、もう二三軒貰つて行かうか。

トてんつゝになり、鯛入、鯛山は風呂敷包みを九八へ頼み、衣を着て向うへ、お辰、お蝶は下座へ入る。九八殘つて

九八　イヤハヤ、あの所化達は、しまひは橋本屋ぢやわえ。

ト奥より杢右衞門、目の覺めしこなしにて出て來り

杢右　アヽ、やかましい奴等ぢや。折角ウト〳〵とやらかしたところを、起しやァがつた。

九八　杢右衞門どの、起きさしやつたか。六夜樣の掛け軸も飾り、神酒も供餠も上げて置いたぞえ。

杢右　それは忝い。イヤ〳〵併し、燈明もしめし、供へ物は、マアさうして置いて下され。

九八　それでもお前、いつも信心しなさるに、そりやなぜでござります。

杢右　サ、ちつと心障りに……イヤマア、後でもようござる。イヤモウ、獨り者は互ひでよいが、嬶がないと、近所隣りの厄介者ぢやて。ハヽヽヽ……イヤ、その代り、晩には酒にしようぞや。

九八　そりやよからうわいの……イヤ、忘れた事がある。先刻に家主から、何やらお觸れがあるから、歸つたら直にござれと、人が來たぞや。

杢右　オヽ、さうか。

九八　コレ〳〵、まだ忘れた事がある。この包みは、東福寺のいつものお所化が、値をよう質に入れてくれろと賴んだぞや。

ト件の包みを取つて渡す。

杢右　エヽ、あの坊主どもは、錢もない癖に女郎買ひ、又おれに世話をかけるか。

九八　そんなら渡しましたぞや。

杢右　オウ〳〵……晩にござれや。

九八　合點ぢや〳〵。ドリヤ、行つて來ませうか。

トてんつゝになり、九八向うへ走り入ると、直に駕籠舁き二人、四つ手駕籠を舁ぎ、出て來り、跡より藤六、長吉、前幕の勇みにて、この駕籠を見え隱れに附いて來り、花道にて窺ふ。

駕一　サア〳〵、肩ぢや〳〵。

駕二　オツト合點だ。

ト重たさうに舁ぎ、やう〳〵門口に來り、よき所へ下す。花道の兩人、下手へ隱れる。

駕一　アヽ、暑や〳〵。今年は旱天の所爲か、土用が明けても素的に暑かつた。

駕二　モシ、旦那、ちとお目をお覺ましなされまし。

駕一　お定めの所へ參りました。

ト駕籠の垂れを上げる。中に新兵衞、一本差し、小女郎と相駕籠にて、二人出てくる。

駕一　爰は私しの親方の内でござります。マア、休んでお出でなされませ。

新兵 さうか。そんなら少と風に吹かれやうか。

駕二 モシ、旦那様、駕籠賃をお貰ひ申したうございります。

新兵 ほんに、これを取つて置くがよい。

ト紙入れより一分出してやる。

駕二 これは洒手ぐるみ、有り難うございります……モシ、親方、これを預かつて下さりませ。湯へ行つて参ります。

ト金を渡す。

李右 これはお客様、有り難うございります。お休みなされてお出でなされませ……てまへ達、湯へでも入つて、日待でもするがいゝ。

二人 さうしませう。駕籠は直に裏へやつて置かう。

ト二人は駕籠を舁いて下座へ入る。新兵衞、小女郎は花道へ立戻る。

小女 モシ、新兵衞さん、こりやマアお前、どこへ連れてござんすぞいなア。

新兵 されば、そこぢや。どこと云うて、志す所もないが、此やうに、うだら〳〵、用も無いのに駕籠に乗つてあるくのも、其方が昨夜のあのしだら。それといふもわしが事を、思ふがゆゑの人殺し

小女　誠になんぼ惡者でも、兄といふ字が重いゆゑ、お前が難儀しなさんす、色紙と鑑定の書き物を

新兵　捕へられたら淺ましい、死罪になるもいとはねど、

新兵　あの藤兵衛が持つてゐるといふ手紙、天の知らせか川風に、吹き立てられて新兵衛や、其方の手に入つたばかり、寶の在所は知れたれど、それさへ燒けてしまうたれは、賴みの綱も切れし道理こんな因果な事があらうかいやい。

小女　尤もでござんす。いつぞやお前と身を投げた、あの時助かり歸つたのが、却つて今では身の難儀先刻にお前の居眠つてゐなさんす其うち、並木の茶屋で認めた、コレこの書置、兄を殺せし身の大罪、お前にとてはこれ程も、科の無いこと書き殘し、我れと我が身を訴へて、名乘つて出る心でござんす。

新兵　滅相な。云ひ號けのお霜を嫌うた新兵衛が、其方を先立て、跡へ殘つて世間の人に、なんと顏が合はされう。マア、書置を、爰へ寄越しや〳〵。

ト取らうとする。小女郎ちやつと懷中して

小女　そんなら獨りは死ぬまいが、又お前、わたしと一緒に

新兵　オヽ、今度は身を投げいで、腹切つて死ぬ。……わしが親は侍ひといふ事、若い時に不埒があつて、死ぬところを助かれど、その代り人交はりの、ならぬ身になられたと聞いたばかり。兩親ながら不料簡な。その人の胤ならば、わしも不埒者になるは當り前。親に似ぬ子は鬼子の譬へ。コレ、今度は立派に死んで見せうぞや。

小女　さうでござんす。綺麗に死んで、後の噂に……モシ、お前が云はしやんした實の親御樣も、若い時には心中に、出やしやんしたぢやござんせぬか。

新兵　其方の云やる通り、心中を見つかつて、諸人に顔を晒した親達。その子ぢやもの、この位な事はありさうなものぢや……それにしても、日の暮れぬうち、少つとも早う

小女　して、どこへ行きなさんすえ。

新兵　どこというて、行く先の當途はない。マアく、あの内へ行つて

ト小女郎の手を引き、門口へ來り

ハイく、賴みますく。

杢右　ハイく、どなたでござります。

ト二人を見て

これは只今の旦那樣でござりますな。

新兵　左樣々々、また頼みに來ました。

杢右　これはしたり、たつた今、棒組みも駕籠も返しました。アヽ、私し一人では

新兵　アヽ、そんなら貴樣一人では、駕籠は舁けぬか。

杢右　どう致しまして滅相な

新兵　それは困つたものぢや。アヽ、借りたいものぢやが

ト思ひ入れあつて

コレ／＼、駕籠が舁けずば、今夜二人を、泊めてはくれまいか。

杢右　ハイ、それはどうも致し憎うござります。内は駕籠屋ではござりますが、宿屋ではござりませぬ
どうもお泊め申す事は

新兵　さうではあらうが、連れの女が、いかう草臥れたによつて、内證で泊めてもよいではないか。コレ、てまへも帶でも解いて、ゆるりとしや／＼。おれもひどう草臥れた。

ト小女郎の帶を解かうとして、手前も横に寢る。杢右衛門驚き

杢右　アヽ、モシ／＼、滅相な、駕籠屋へ泊める事はどうも出來ませぬ。サア、お歸りなされまし。

ト無理に二人を外へ出さうとする時、小女郎、件の書置を落す。杢右衛門、取つて出さうとして、宛名を見て

「新兵衛様へ」

トちよつと讀む。小女郎心づき、直に取つて懐中して

小女　こりや、はな紙ぢやわいなア。

ト云ふを、杢右衛門思ひ入れあつて

杢右　お前の落したその紙に、新兵衛様とござりまするが、憚りながらお前様は、玉屋の御子息、新兵衛様ではござりませぬか。

新兵　アイ、成る程わしは、玉屋の新兵衛でござるが

杢右　左様でござりまするか。して、あのお連れの女中様は、あなたの爲には

小女　アイ、わたしや新兵衛さんの、女房ぢやわいな。

杢右　エヽ、お内儀様でござりまするか。そりやこそな、娘ぢや／＼。コレ／＼、娘、ヤレ／＼久しやよう親の内へ來てくれたな。娘ぢや／＼。ヤレマア、よい女振りになつてくれたな／＼。

ト涙をこぼして喜ぶ事。二人は合點のゆかぬ思ひ入れにて

新兵　コレ〳〵、こなさんはマア滅相な。玉屋新兵衛が女房と聞いて、娘ぢや〳〵とは、こりやこの人は、狂人ではないか。

杢右　イエ〳〵、狂人ではござりませぬが、玉屋新兵衛様のお内儀なれば、この女中の名は、お霜といふでござりませうが

新兵　ア丶滅相な。この女は小女郎と

ト云はうとして、思ひ入れあつて

成る程、貴様の云ふ通り、新兵衛が女房は、いかにもお霜。

小女　アモシ、どうしてマアお霜さんとは

新兵　ア丶コレ、今聞く通りぢや。新兵衛が女房と聞いて其まゝ、そんなら娘、ヤレ久しや、親の内へよう來てぢやと云ふからは、これには定めし譯のある事。このお人の云ふ通り、女房の名はお霜。いかにも名はお霜と云ひます。

ト小女郎へのみこませる。

杢右　左樣でござりませう。お霜とござらば義理ある娘。さりながら、幼少で別れた親子、知らぬも尤も。コレ、娘、おりやわれが親の、佐五右衛門ぢやわいの

小女　エヽ、其やうに云はんしても

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

新兵　思ひがけなき女房の、お霜が親と云はるゝからは、何より女の生立ちを、詳しう聞いたその跡で殊によつたら以前の親子。マア、このお霜が素性のあらまし、聞かしてやつて下さりませ。

杢右　成る程、話して聞かせませう。數へて見れば、二十年も前の事。わしも以前は、小祿取つた侍ひの、佐五右衛門と云うた者。叔父御の方に二人の娘、わしが方には一人の忰、その一人の子を養子にくれい。おれが總領の娘と娶合すというて、無理に取られ、その代りにその叔父御の、末の娘のお霜といふを、わしにくれたぢや。育てる内に女房が病身、是非なう別るゝ女房に、お霜を附けてあかぬ別れ。それからは獨り者。その叔父御というたも、アヽ、心のよい人でなく、その時はまだ其方は當歳。我が子の半次郎といふは十の歳。その兄めは叔父へ養子。三つになるお才と、末は娶合す相談も、叔父者人出村曾平次、心よからぬ人なりしが、八丁縄手で……南無阿彌陀佛々々々々々。

ト云ひさして思ひ入れ。新兵衛もこなしあつて

新兵　して、そのお人は、どう致されました。

杢右　思はぬ横死。叔父へ養子のわしが悴、半次郎は直ぐに出家……その半次郎に娶合すといふた、三歳のお才といふは、家來が粗忽にあるまじき、荷物の中に寢させたるを、その品ともに盜まれて、行くへ知れず。わしもその後町人と、今はその身も落ちぶれて、駕籠人足のかすかな世渡り。その別れた女房に、程過ぎて行きあひ、お霜が事を尋ねたら、嬶が云ふには、わしは玉屋といふ商人屋へお針の雇ひ、內の旦那がお霜を御覽じ、お內の御子息新兵衞樣へ、末々は添はせると、有り難い云ひ號け。お前も苦勞にさんすなと、話して別れてから、餘程年も經つたれば、今頃は玉屋新兵衞樣のお內儀樣、ア丶、見に行きたうてもこの商賣、遠慮して居りましたに、不思議な緣で、ようマア來てくれた。モシ、ようお連れなされて下さりました。

小女　そんならアノ、お前が嫌うてゐやしやんす

新兵　ア丶コレ……成る程、其方は新兵衞が云ひ號けの、ナ、ソレ、今では女房のお霜ぢや程に、親仁樣へナ、久し振りぢや、よう顏見せて、ナ、安堵さしやいの。

小女　アイ。そんならアノ、わたしやお前の娘の、お霜さんとやらいふ……ぼんにお霜でござりまする

杢右　さうであらう／＼。してマア、お供をもお連れなされず、新兵衞樣と二人連れで、どれへお出でなされまするな。

新兵　ハイ、成る程、此やうに暑いのに二人は、ソレ〳〵、妙見樣へ參りました。それからアノ、堀の内から大師河原へも廻つて、歸りは二十六夜を拜まうと存じまして

ト出たらめを云ふ。

杢右　これはしたり、其やうにお歩きなされて、飛脚ではあるまいし

ト思ひ入れ。

コレ、お霜、其方の母と、今では離別のわしが、いらぬ世話ぢやが、其方のつくりは、藝者風に見えるぞや。いはゞ新兵衞樣のお内儀と呼ばるゝなれば、もそつと野暮に拵へてたも。誰れが見ても藝者

ト云はうとして

アイヤ、新兵衞樣、味な事をお聞き申しまするやうなが、お前樣は、藝者の小女郎とやらと深い仲ぢやと評判、その女中はモシ、どうなりましたな。

新兵　ハイ、アノ、わしが馴染んだ小女郎といふは

小女　アイ、その小女郎が、どう致しました。

トむつとする。

新兵　アヽ、これはしたり……あの小女郎は、もう切れてしまひました。
杢右　アヽ、左樣か。それはよい事をなされました。イヤモウ、藝者の中でも、妲妃と噂のある女、とても善うはござりますまい。其やうな者が附いてゐると、お前のお爲にも惡うござりまする。なう、お霜、必ず其方もこの上とも、あなたのお側へも、寄せ附けぬやうにしませうぞ。
小女　ハイ、どうかなりませうわいな。
トつんとして
これいなア、新兵衞さん、どこぞ外に行く所はないかいな。
新兵　ハテ、行く所があつたと云うて、昨夜からのしだら。外へ行かうよりは、其方の爲には實の親御わしが爲には舅どの。
杢右　サ、ゆるりとおいでなされませ。久し振りの娘に、親仁が何も馳走は出來ませぬが、今晩は二十六夜、あの二階で、拜まつしやりませぬかいの。
新兵　それは何ともお心遣ひ、左樣ならば辭退いたさず。
小女　モシ、駕籠屋さん……アヽイエ、父さん
杢右　娘……ほんによう來てくれたの。

ト唄になり、暮れ六つの鐘。兩人思ひ入れあつて、二階へ上がる。

娘に逢うて嬉しいまぎれ、門の行燈、ドリヤ、灯しませうか。

ト門口の掛け行燈を灯し、內へ行燈を出す。矢張り右の鳴り物にて、向うより中間一人、留守居提灯をともし、出村新兵衞、羽織袴、大小にて、深編笠、若黨は細卷きの三升入りの隅田川の樽を持ち、一人の中間は白木の臺へ、反物やうの品を戴せて持ち、附いて出て來り、花道にて、行燈のしろしに、思ひ入れ。若黨、門口へ來り

若黨　賴みませう〳〵……駕籠屋杢右衞門樣は、御在宿でござりまするか。

杢右　ハイ、宿に居りまするが、お駕籠の御用なら、今晩は參られますまいわい。

出村　アイヤ、御在宿なれば、ちと內々にて……家來ども、その品を

若黨　ハツ。

ト持參の品をよき所へ差置く。出村新兵衞、思ひ入れ。

出村　家來ども、其方たちは後ほど迎ひに

若黨　ハツ。

ト若黨中間は引返して向うへ入る。

杢右　モシ、旦那様、この品は、どちらへぞ持参いたすのでござりまするかな。
出村　イヤ、些少なれども其許へ
杢右　エ。
出村　親仁様、久々にてお目にかゝりまする。
　　ト編笠を取る。合ひ方。杢右衞門思ひ入れあつて
杢右　ヤヽ、わしを親仁様と仰しやる、アノお侍ひ様は
出村　お見忘れも御尤も。あなたの實子。叔父酉平次どのへ十歳の砌り、養子に遣はされし、幼名は半次郎。親仁様、まづは御健勝の段、喜ばしう存じまする。
　　トこれにて杢右衞門、よく〳〵見て
杢右　オヽ、叔父酉平次へ養子に遣つた半次郎。叔父者人横死の砌り、出家いたして、その名も淨雲。
出村　その出家も仔細ござつて、後に元の侍ひ。
杢右　立歸つたと申すのか。
出村　左様でござりまする。
　　トこれを聞き杢右衞門、ずんと立ち、奥へ行くを、出村とめて

杢右　こりや親仁樣、いづれへお出でなされますする。

出村　不孝者に逢ひたうなうて。

杢右　ヤ。

出村　コリヤヤイ、おれは小祿の侍ひゆゑ、悴の其方には出世させたく、叔父曾平次の養子に遣はし、卽ちお才といふ三歳の娘と、娶合すつもり。其うち叔父御には思はぬ横死。その養父の敵を討つ心もなう、わりや出家して親の菩提。それにこの間の噂には、女に迷うて還俗したと。よもやと思うたに違はず、その姿は、そりや何ぢや。誠に親子の緣切つて、養子に遣つたりや、緣はないわい。

杢右　御尤ものお詞。菩提の爲と出家いたせど、女に迷うて俄に還俗。それがこの身の幸ひに、里見のお家へ召出だされ、半地にお取立て、養父の名跡立てよとあつて、卽ち家名も出村新兵衞。されども兩親なき拙者、それゆゑ實の親仁樣、便り參つて只今より、身共が宅へお招き申して

出村　その侍ひを思ひ切つて、今はこの態。今更武士にはもうならぬ。乘るが嫌ひで舁くのが好き。肩も荷瘤の杢右衞門。立派な悴は氣が詰まる。必ず構うてもらふまい。

杢右　左樣ござらば是非がない、親に從ふ子の習ひ。お望みなれば武士をやめ、今更駕籠舁きいたして

も、孝行つくさにやなりませぬ。

杢右　面白い。流石はおれが實子。さりながら、それでは養子の家が又ぞろ

出村　立てる仕樣もござりませう。その儀は追つて

杢右　仕樣があらば望みの通り、いかにも孝行つくさせてやらう。

出村　有り難うござりまする。左樣ござらば只今より、駕籠舁きの稽古が肝心。この兩腰も

ト大小を取つて脇へ置く。

杢右　ほんに幸ひ、叔父者人の胤のあのお霜、婆めに附けて別れし娘、男を持つて今日爰へ。其方が爲にも義理ある妹。

出村　すりや、二十ヶ年も逢はぬ、義理ある妹が爰の内へ

杢右　來たこそ幸ひ、逢うた上にて兄弟の杯……旦那樣、ちやつとお出でなされませ。

ト呼び立てる。合ひ方になり、二階より新兵衞、小女郎下りて來り

新兵　コレ、親仁樣、お呼びなされまするか。イヤモウわしは、いかう疲れましたれば……なう、女房。

杢女　アイ、必ず御馳走は、御免なされませいな。

杢右　イヤ〳〵、別して馳走もせぬが、コレ娘、われが久しう逢はぬ、半次郎といふたわしが悴、今日おれを尋ねて來たこそ幸ひ、連合ひのあなたにも、近附きませう。コレ、行合ひ兄弟、義理ある兄ぢや。

小女　エヽ、義理あるわたしが兄さんに

新兵　お霜が爲に兄なれば、わしが爲にも小舅の、兄貴へちよつと知る人に

出村　思ひがけなく別れし妹、その妹に連れ添ふお方へ

新兵　ドレ、お近附きになりませうか。

トよき所へ出て、三人顏見合せ、思ひ入れあつて

出村　ヤ、妹といふは

小女　ほんにどうやらお面を

出村　知つてござらう。こなたの爲に破戒なし、それがこの身の仕合せと、本地へ返つて元の武士。

新兵　噂に聞いた淨雲どの。して、只今のお名前は

出村　家名は出村、その名は同じ

新兵　新兵衛樣と仰しやるは

杢右　久しう逢はぬ兄弟が

小女　思ひがけなく

　　　ト皆々思ひ入れあつて

新兵
出村　逢ひましたの。

新兵　さう仰しやれば、たしか牛島東福寺の所化の時、慥か破戒のおてまへは

杢右　ヤ。

小女　それがわたしの

出村　即ち兄の

小女　そのお姿で

　　　トつか〳〵と門口へ出ようとするを、出村シヤンとしめる。杢右衛門こなしあつて

杢右　婆が養育、離別の娘、その妹を存じてゐるか。

出村　イヤ、妹は存ぜねど、似寄りの女に生きうつし。

新兵　そりや何者にこの女、似たと仰しやる。

出村　小女郎と申す藝者の女に。

小女　そんなら藝者の、小女郎とやらに

新兵　この新兵衞が女房のお霜、似たと仰しやる、あなたの御用は

出村　今日殿より俄のお指圖。

新兵　して、何御用にて疎遠の親御へ

出村　尋ね參つたは三國屋の小女郎、それに連れ添ふ男一人、その兩人を詮議の爲。

杢右　なんの詮議でその二人。

出村　人殺しゆゑ

小女　エヽ。

ト思ひ入れ。杢右衞門悔りする。

新兵　藝者小女郎に連れ添ふ男、二人の者が、人を殺めし

出村　疑ひかゝりし小女郎は、惡者なれども兄を殺害。また連れ添ふその男、云ひ號けせし娘を引出し女は入水の樣子と見ゆれど、その川岸に見覺えあるこの扇、落ちてありしがその身の災難。扇の紋は杏葉菊、その紋どころを附ける者こそ、卽ち御詮議。覺えがござるか、新兵衞どの

ト前幕の紋附きの扇を見せる。新兵衞、思ひ入れあつて



新兵 ヤヽ、その扇こそ新兵衛が、物好きしたる十間の、白地に金の杏葉菊。

出村 すりや、この扇御存じか。

新兵 イヽヤ、全く存ぜねど、心がゝりの今のお詞。して、その詮議になりまする、入水の女は、何れの誰れ。

出村 それぞこなたに云ひ號けせし、嫌はれ女房、消えて行く、踏むにあとなき夏の夜の

新兵 ヤヽ、そんならもしや

小女 いとしや實の云ひ號け、お霜さんは

杢右 ヤヽ、なんと。

ト思ひ入れ。

出村 アイヤ、妹お霜、其方をのけてお霜などゝ、粗相千萬。身共は二人が横死の仔細。殿より詮議のその役目、蒙むつたれど親人の、武士をお嫌ひなさるゝ上は、拙者は今日駕籠舁きの……さすれば詮議はこれぎりに、あつて益なき證據の扇、疑ひかゝりしその女、見遁し遣はす。アヽ、命冥加な

ト思ひ入れあつて

新兵衛どの、粗末の手土産、御受納なされ。

ト右の扇を差出す。新兵衛取つて

新兵　お志しのこの扇、元の出所は私しなれど、悪い所にあつたのが、この身の疑ひ、さりながら、昨日逢うたるお霜どの、思へば夢の

ト扇へ思ひ入れあつて腰へ差す。

杢右　エヽ、こゝなお霜が、どう致しました。

新兵　アイヤ、お霜はこれに。現在兄御のお役目なれど

杢右　武士を捨てれば詮議もそれぎり。誠にめでたい兄弟の、その杯を、親が見る前

小女　妹のわたしと兄さんの、その杯を今爰で

出村　お霜が夫の新兵衛どのへ

杢右　親が酌してお持たせの、酒も即ち

ト樽より銚子へ明けながら云ふ。

新兵　義理の浮世にすみ田川。

出村　めでたう冷酒で

ト　杯を差出す。杢右衛門酌する。

肴しませう。

ト懐中より年期證文を出し、刀を拔く。皆々恟りする。出村、白刃の尖へ書き物を貫き、新兵衛が目先へ突き出す。小女郎、驚き寄るを、新兵衛、騒ぐなといふ思ひ入れにてとめる。

新兵　ハイ、致しませう。怖いながらも兄御様、お志しのお肴は賞翫さつしやい。

出村　藝者小女郎が年季の證文。

新兵　ヤ。

小女　すりやアノ、わたしが年拔きの

出村　身共が出せし五十兩、金の代りに渡せし證文。

杢右　このお肴は親仁めが、中で貰うて、波風なしに

ト證文を寸々に引裂く。

出村　お心遣ひを、お察し申して

ト白刃をシャンと鞘へ納める。

新兵　して、二人とも、今宵の内に

杢右　ハテ、久し振りでの親子兄弟、夫婦の衆はあの二階、破れた蚊帳に三布蒲團、蒲團一つが玉の輿

小女　氏も素性もないわたし。

新兵　その仕合せもわしゆゑに、身より出せる錆針の、針の蓆も、今宵一夜は

小女　チツと辛抱

出村　妹聟どの

新兵　小舅樣。

出村　とはいへ小女郎

新兵　コレ

ト小女郎を圍ひ、思ひ入れあつて

お先へ臥ります。

ト唄。めい〳〵思ひ入れあつて、新兵衞、小女郎を連れ、二階へ上がる。出村跡見送り

出村　正しく昨夜の人殺し。身が主人よりお指圖の、その科人は慥かに二人

杢右　よし人殺しであらうとも、われはこの家にゐるうちは、おれが悴ぢや、矢ツ張り駕籠舁き、武士

でなければ、なんのいらざる

出村　然らば今から武士を捨て、お内にあれば駕籠の者、他行の節は矢張り侍ひ。左樣ならでは養父の家が

李右　それも尤も。屋敷の内は出村新兵衞、この家へ來れば駕籠舁きの、李右衞門が忰ぢやもの、親が渡世の駕籠の者……さるにても叔父者人、出村の家は、まこと殿より

出村　召返されし身の面目。さりながら、拙者と娶合す家の娘、お才といへるは三つの歳、腰元小者に誘はれ、その時拙者十歳の、詳しき樣子は存ぜねど、家來が粗忽に包みの品、盜まれし時、お才も共に、見失ひしと後の噂。尤も彼れが左の腕に、心といふ字に似たる痣、種々と療治も加へしかど、生れつきにてその腕、お才を尋ねるその時は、これぞ目じるし、よき證據。

ト よき時分、二階の障子を明け、新兵衞、小女郎窺ふ。

李右　それも叔父が物語り。いよ〳〵お才が腕には

出村　心の文字の形の痣。

ト この時小女郎、我が腕を見て

小女　さては心の形の痣、左の腕とあるからは、そんなら實の父さんは

出村　ヤ。

新兵　こりや一思案

小女　思へば爰は劍の中に

新兵　横死と聞きし出村氏。お霜が義理ある兄といふは、その養子の半次郎。その半次郎は出家の淨雲

ト見上げる。新兵衞、障子をピツシヤリ閉す。

正しく二階の

ト行かうとする。杢右衞門見て

杢右　ハテ、仰山な障子の明け閉て。

出村　何か仔細の……はてなア。

ト思ひ入れ。バタ〳〵にて向うより九八、走り出て來り

九八　コレ〳〵、杢右衞門どの、お家主が、何かこなたに用がある、呼んで來いとわしを遣ひ。逢うてやらんせ〳〵。

杢右　オヽ、九八か。また家主が呼びつけ廻つて。大概な事なれば

九八　サア、わしもさう思つて斷わり云うたが、長屋中が殘らず寄合ひへ。大儀ながら、ちよつと逢うて

來さんせ。

李右 アヽ、世話のやけた……こなたも行きやるか。

九八 一緒に行かうかいの……イヤ、貴様、先刻所化衆が頼んだ品は

李右 ほんに、とんと忘れた。

九八 それの次手に、置いて來やんせ。

李右 ハテ、取込みぢやに、いろ〳〵な事を

ト最前の包みを取つて

サ、連れ立たうかい。

ト門口へ出て

アヽコレ、内を離れて行くものゝ、やがて二人の二階の者も

出村 エヽ、どう致しました。

李右 アイヤ、若い同士ぢや。氣を附けた。

出村 畏りました。

李右 ドリヤ、行てかうか。

出村　思ひがけない二階の二人。お霜といふたは、親を僞はる拵へ事、あの新兵衛に連れ添ふ小女郎。

　　ト唄、捨て鐘になり、九八先に杢右衛門、包みを持ち、向うへ入る。出村殘つて
　　ト思ひ入れ。門口に出て、あたりを窺ひ、小石を取つて向うへ打つ、時の鐘、合ひ方。向うより官藏
　　摑み股立ち、身拵へして、捕り手二人、跡より藤六、長吉附いて出て來り、門口にて

官藏　合役出村新兵衛どの。合圖の礫は、いよ〳〵二人が

出村　官藏どのにはお役目御苦勞。實正それとわからねど、新兵衛この家にあるからは、連れの女は、慥かに小女郎。

官藏　拙者と其許、殿よりお指圖。兩人はこの家へ附け込みしと、目代の彼れらが身共へ訴人。

藤六　先程これへ辻駕籠にて、肩もめりこむその樣子、正しく合輿、合點參らず

長吉　思ふに違はぬ新兵衛小女郎、駕籠で忍んで參つた樣子。

官藏　いよ〳〵二人に極まらば、其許召捕り出さるゝか、まつた身共が踏み込まうか。御返答を承はらう。

出村　その儀は役所で指圖の如く、手柄始めに新兵衛が、二人を召捕り、お渡し申さう。

官藏　然らば身共は家來を召連れ、出口々々を固むると致さう。

藤六　私しどもは、この近邊、張込みいたして新兵衞・小女郎

長吉　逃がさぬ手立を、官藏樣

官藏　油斷いたすな。然らば身共は、暫く會所に

出村　安否を待たれよ、官藏どの

官藏　出村氏

兩人　お別れ申さう。

ト合ひ方、時の鐘になり、官藏と捕り手は向うへ、藤六と長吉は下座に忍ぶ。

出村　親人他行はよき幸ひ。妹と僞はり入り込む小女郎、お霜が敵のあの新兵衞、二人の者が、寢間へ忍んで

ト思ひ入れ。凄き合ひ方、時の鐘。出村、羽織を脫ぎ、身拵へして、捕り繩をたぐつて腰に挾み、用意の十手を隱し持つて、窺ひ〳〵中二階に上がり、立てたる屛風を引退ける。向うの壁、切り拔きあるを、行燈の灯にて見つけ

ヤ、さては二人は、風をくらうて

ト駈け下りて思ひ入れ。この時、バッタリ音するゆゑ、出村、二階へ思ひ入れ。時の鐘、凄き合ひ方。

切り抜きし壁の崩れより、目ばかり出したる、黒頭巾黒装束、怪しき形の者、出刃を持ち、窺ひ出て佛壇へかゝり、正面の位牌へ向ひ、思ひ入れあつて、あたりを窺ふ。出村、思ひ入れあつて

勝手覺えし盜人か。二人が逃げしも、慥かに彼奴が

ト引附ける。曲者、出刃にて突いてかゝる。立廻り、出村の十手を打ち落す。また立廻つて、曲者の出刃を打ち落し、これを取つて立廻り、曲者の脾腹を突く。これにてタヂ〳〵として、門口へ逃げる出村、追ひ行く。曲者は、生垣へ、やう〳〵辿り、入らうとする時、曲者のかむりし頭巾落ちる。この曲者、李右衞門にて、出村の手を取り

李右　幼名出村半次郎、親の敵、よく討つた。

出村　ヤヽ、なんと。

ト合ひ方になり、李右衞門思ひ入れあつて

李右　養父の義理を立てんため、實の親でも容赦なく、おれを討つたは健氣な忰。

出村　すりや私しが、養父の敵討つまいと、心を盡す忰めに、無理に討たるゝお心か。

李右　いかにも。お家を奪ふ企てある叔父者人、甥の意見も聞入れなく、我儘氣儘の惡人ゆゑ、人手にかくるが殘念さ、且は忰を養子に遣はし、其方にも難儀をかくるのが、不便と思うて、實の叔父

御を、この杢右衛門が手にかけた。それより直に武士を捨て、實の忰の其方が出家も、一物あらんと察せしゆゑ、叔父が血筋の二人の娘に、討たれくれんと思へども、姉は皆くれ行くへなう。我が手で育てる叔父の胤、お霜は離縁の女房へ、附けてやつたも末々は、他人となつて討たれる心。

出村　して、新兵衞と小女郎を、知らぬ顔にて引入れられしは

杢右　それも親仁が眼力に、新兵衞小女郎と察せしゆゑ、隱まふ體に見せかけて、お霜が男に嫌はれしも、其方が出家を落させしも、怨み重なるあの小女郎、殺す手立に質入れの、暗はあやなし黒袷我が家へ忍んで窺ふ二階。小女郎の腕に心の痣、聞くと覺えのお霜が姉、行くへ知れざる叔父の胤、お才というたがあの小女郎。連れ添ふ男は新兵衞どの、これもお霜が云ひ號け。是非なう二人は落してやつた。仇も情も一筋の、義理に搦んだこの親仁が、胸の苦しさ、推量せよや、出村新兵衞。

出村　その義理ゆゑに出家となり、また侍ひとさまぐ\に、心を盡すも矢ツ張り義理。養父の死骸のその場所に、落ちてあつたる片しの笄、それゆゑにこそ侍ひを、捨てゝ出家の其うちに、又ぞろ片しの割り笄、程經てお上のお手に入り、さては曾平次討つたるは、正しく彼れと評議の上、養父

を殺せしその者を、内々詮議と聞きしゆゑ、それゆゑ俄に武士となり、また意趣のあるあの小女郎、兄を殺せし科人ゆゑ、彼れら二人を搦めとり、それを功に實父の助命、願はんものと只管に役目を乞ひうけ來りしに、その甲斐もなく親人の、義心の覺悟、我が手をかり、心に思はぬ敵討ち。仇ある小女郎は義理の妹、三方四方一時に、いすかのはしも皆義理ゆゑ。これを思へば世の中に、義理ほど辛きものはあるまい。エヽ、淺ましい身の上ぢやなア。

杢右　それも現在叔父者人、曾平次どのを討つたる天罰。この佐五右衛門が因果の血筋。

出村　この身に報い、役目も等閑。

杢右　イヽヤ、役目を立てる仕樣は、養父が敵二つには、二人を逃がせしその科人。縁の切れたる他人のおれを

出村　他人といへど、現在親を

杢右　討たねば役目が立つまいが。

出村　サ、その役目にて、あなたの助命

杢右　それでは義理が猶立つまい。所詮深手の、この苦痛を

出村　それぢやと申して

杢右 サア

出村 サア

兩人 サア〳〵

トこの時門口に、官藏、藤六、長吉、窺ひ出て聞いてゐる。出村、思ひ入れあつて

出村 然らば二人を見遁せし、その科、まつた養父の敵

杢右 討つて本望、とげいよ悴

出村 せめて苦痛を助けるため。跡より拙者も、直さま追ひ腹。

ト立ちかゝり、杢右衛門に向ふ。

官藏 二人の科人、見遁す出村。

藤長 うぬを捕へて

ト出村にかゝる。ちよつと立廻つて

出村 役目の道も忠孝も、世にある時ぞ今の身は

杢右 かりの浮世を

出村 名殘の旅路。

藤長　なにを

ト又かゝるを、杢右衛門よろぼひながら長吉を引附ける。官藏、出村にかゝるを、出村、その手を取つて

出村　人間わづか五十年、いづれ終りは

ト藤六をポンと投げる。杢右衛門、よろ／＼と尻餅をつく。チョンと木の頭。

夢ぢやなア。

トよろしく、ひやうし

幕

引附けると双盤の音、二十六夜待の大念佛にてツナギ。引返し。

大切　汐入村二十六夜の場

役名——玉屋新兵衛。三國屋小女郎。女乞食、おたつ。同、おてふ。乞食、芥太夫。二階廻し、藤六。船頭、長吉。非人、次郎兵衛實ハ鵜飼九十郎。次郎兵衛女房、おきさ實ハ三浦屋の上總野

本舞臺、上の方、高足緣側附き、板屋根、軒に葭簾、義太夫本の反古にて貼りし障子、尤もこの屋體

用水堀の中に建てたる家造り、澤瀉、河骨、水草しげり、門口に誂への二枚開き、藤豆からみ、花盛りの體。四つ目垣に鷄頭、紫苑、萩、玉蜀黍、正面は小高き所に誂への地藏堂、柳の樹、まさきの生垣、塔婆交り、よき所に高燈籠、引あげ綱は屋體の柱へ結び、その上の方に小さき盆提灯を吊し、うしろ黑幕へ星の影うつる模樣。すべて汐入村、總泉寺地内、非人小屋、小綺麗に飾りつけ、二十六夜待、夜更けの體、寺鐘、在鄕唄めいたる鳴り物にて幕明く。

ト門口よき所に蓆を敷き、お辰、お蝶、女乞食にて、單衣を着かへ、乞食の男三人、雪駄直しの若い者一人、細工道具の籠を置き、擂り鉢、丼やうの物を取散らし、唐拳をしてゐる。よき程に奥よりおきさ、單衣、やつし、四十位なる非人頭の女房にて、紺飛白の前垂れかけ、ちろりを持つて出てくる。

皆々　アヽ、よい〳〵。

　　ト拳をしてゐる。

きさ　サア〳〵、燗がよいから、もう一つ飲んで下さんせ。

てふ　アイ〳〵、これはマアおきささんも、もうお振舞ひなさんすな。酒も大分飲みましたわいなア。

たつ　イヤモウ、お辭儀なしに飲食ひもしました。

皆々　構はつしやるな〳〵。

きさ　なんのマア、別して馳走もしやんせぬが、この間こちの次郎兵衛どのが、ちつと仕合せのよい事があつて、それで仲間の衆とも相談して、二十年も附合うた仲間を脱けて、素人になるそのしるし、今夜の日待を幸ひに、酒一つ上げうと思うて、モシ、何にもないが、辭儀なしに飲んで下さんせ。

たつ　そりやモウ、めでたい事でござんす。聞けばお前も次郎兵衛さんも、以前は素人衆、心中そこなうたゆゑ、わたしらが仲間にござんして、假にも二十年、爰にゐさんしたかえ。

きさ　さうぢやわいなア。若い時といふものは埒もなく、添ふに添はれぬ譯あつて、それからの心中沙汰。それも命を拾うたばかり、お前方の仲間に來ても、念が届いて夫婦暮らし。二十年あとに死んだなら、斯うした目にもあふまいが、これといふのも、緣があるのでござんすわいなア。

たつ　イヤモウ、何になつても、暮らしてゐるが何より仕合せ……ほんにお前は、苦界の勤めさしやんした時、男の子があつたぢやござんせぬか。

きさ　アイ、その悴はわたしらが、不料簡のその時は、丁度三つ。情あるお方が育てゝ下さんして、今ではよい町人になつて、大方二十二になるでござんせうが、久離切つて旦那方の、養子に上げた

事ゆゑに、我が子の爲と思ふから、もう／＼、あの子が居やる町内は、通つた事もござんせぬわいの。

てふ　成る程、さうでござんせう。併し、お前方二人が、素人にならんすりや、そりやモウ、遠慮なしに行かんしてもよからうわいの。

きさ　イエ／＼、知らんす通り、次郎兵衛どのは物堅い生れゆゑ、中々其やうな心は、これ程もござんせぬ……ほんに、いかに日待ぢやというて、話はマア後へ廻して、サア、もう一つ飲んで下さんせ。何を云うても肴がなうて

ト勧めてゐる。双盤になり、下の方より寺の下男、口小言を云ひながら出て來り、門口より

寺男　コレ／＼、次郎兵衛は居ぬか。どうしたものだ。女房のおきさは、居ぬか／＼。

きさ　アイ／＼、次郎兵衛は宵から、買ひ物に參りましたが、何を其やうに、腹立つて仰やりまする。

寺男　何をどころか、コレ、今夜は二十六夜の事ゆゑ、常とは違ふに、なぜあの高燈籠へ灯をともさぬ。あのやうな事をするが役で、てまへ達は寺の地面内に住むのではないか。納所たちが見附けて、きつと云ひ附けろと云はしつた。サア、早く灯をつけるがいゝ／＼。

きさ　ハイ／＼。成る程、これは私しどもが惡うござりました。あの燈籠の紙が破れましたゆゑ、次郎

兵衞が千住へ參つたその次手、紙も買うて戻ると申しましたが、今に歸りませぬゆゑ、大きに不調法をいたしました。亭主が戻りまするまで、淸らかな反古がござりますから、マア〳〵、假に風防ぎに貼つて置きませう。

ト屋體の內より蜜柑籠を取出し、その中の紙屑を尋ねる。

寺男、コレ〳〵、それは拾つて來た紙屑ではないか。

きさ　左樣でござりまするが、隨分この中に綺麗な反古がござりまする。

寺男　綺麗でさへあれば、明日までマア假に貼つて置くがよい。

ト籠の中より、いろ〳〵の反古を尋ね出す。

きさ　ア丶、これは義太夫の稽古本……これは何ぢや。八人藝の貼り出し……これは寄席淨瑠璃の貼り出し……これは何ぢややら、狂歌の反古と見えまするわいな。

ト色紙と鑑定書を尋ね出し、何心なく

ア丶、何ぢや、定家の色紙……こちらの字は讀めぬが、この反古は、淸らかに見える。これなと貼つて置きませう。

寺男　サ丶、早く貼つて置くがよい〳〵。ドレ、下ろしてやらう。

ト柱に結びし綱を解く。高燈籠下りて來る。おきさ、件の鑑定書を、反古と心得、糊を附けて、燈籠の破れし所へ貼りつけ

きさ　サア、これで灯が持ちませう。

ト蠟燭を取出し、寺男手傳ひ、灯を入れ、燈籠を引上げ、綱を元の柱へ結び

寺男　これでよし〳〵。これほど灯るものを、てまへ達は、あんまり投げやりだ。

きさ　ハイ〳〵、お歸りなされましたら、お納所樣へ、よいやうにお詫びなされて下さりませ。

寺男　よいやうに云つて置かう。明日の晩も、忘れずに灯しませうぞ。

きさ　ハイ〳〵、明晩からきつと灯しまする。

寺男　コレ〳〵、ともすといふのは、燈籠の事だぞよ。

きさ　これはしたり、何を仰しやります。ホヽヽヽヽ。

寺男　ドリヤ、六夜樣を待たうか。

ト双盤になり、下の方に入る。お辰、淨瑠璃の貼出しを取つて

たつ　コレ〳〵、爰に寄席の貼出しがある。今夜は日待の事、みんな寄つて、でたらめに語らうではないかいな。

てふ　こりやよからう。爰らへ貼つて置きませう。

ト件の貼出しをよき所へ貼る。

なんぢや。「大塔宮、身替り音頭」「戀飛脚、新口村の段」「桂川連理の柵、帯屋の段。」

たつ　わたしが、身替り音頭を語るぞえ。慥かあの文句は〽踊りの宵は夢のうち、この曙は死出の山、さぞ父戀し母戀し、戀し〳〵と、啼くは冥土の鳥かえ。」

皆々　アヽ、やつとや。

ト地へ取り、太鼓入りにて、皆々踊り出す。この鳴り物をかり、向うより次郎兵衛、四十二三の拵へ頭へ手拭を巻き、どてら、袷裏返へしたるなり。下は大縞の浴衣、黒の帯、上の袷の裾をからげ、藤倉草履にて、天秤棒へ兩掛けにしたる叺を二つ荷ひ、出て來る。跡より前幕の藤六、長吉出てくる。花道にて

藤六　コレ〳〵、次郎兵衛、てまへの小屋まで行くところであつた。

次郎　エヽ、何ぞ御用でもござりましてかえ。モシ、わしが小屋は向うの內。マア〳〵、あれへござりませ。

ト矢張り踊り地にて、三人、門口へ來り

おきさ、いま歸つたぞや。

きさ　オヽ、次郎兵衛どの、戻つてかいな

皆々　次郎兵衛さん、今晩はおめでたうござりやす。

次郎　これはしたり、何もあるまいに、心祝ひの事があつて、幸ひの二十六夜、今夜の日待に、お前方に一杯進ぜうと思うて

皆々　大きに御馳走になりやした。

トこの時おきさ、門口の二人を見て

きさ　モシ、ありやどこのお方ぢやえ。

次郎　いま道で、お連れ立ち申した旦那衆。モシ、何の御用で私しを

藤六　外の事でもないが、茨の藤兵衛を殺した人殺し、先刻田中で見失ひ、その二人はこの邊へ、附け込んだゆゑ、おぬしを頼んで

次郎　エ。その人殺しを、アノわしに

長吉　爰らにうせたらば、尋ねる女は藝者の小女郎。男といふは玉屋新兵衛。

次郎　エヽ。

ト悧りして

藤六　アノ、人殺しは、新兵衛・小女郎。

次郎　二人は爰らへうせたとあるゆゑ

雪駄　それを頼みにござりましたか。ようござります。見附け次第に知らせませう。

藤六　アヽ、そんなら今方、玉姫稻何の畔道で、一本差した若い男と、藝者らしい女と二人、暗がりで行き合つたが、もしやその二人が

長吉　慥かに其奴だ。一本差してうせると聞いては危ないもの。無手ではいけまい。

ト雪駄直しの籠の中の革切りを見附け

この庖丁を借りて行かう。

ト庖丁を取る。

長吉　さうしやれ〳〵。

雪駄　アヽモシ、そりやアわしが商賣道具。

長吉　エヽ、跡で返すワ。サア、行くべい。

藤六　合點だ。

雪駄　アヽモシ

トとめるを、二人は突き倒し、一散に向うへ入る。雪駄直しは捨ぜりふにて向うへ追うて入る。次郎兵衛、おきさも、心遣ひあつて

きさ　ついにこれまで逢はぬといひ、悪い噂を

次郎　聞いてはどうやら

きさ　ちよつとマアわたしが

ト行かうとするを、次郎兵衛とめて

次郎　ハテマア、今行つたとて、どうなるものか。

皆々　わしらはこれから奥へ行つて、手料理に肴を拵へて

きさ　さうしなさんせ。又それでワツサリと

皆々　飲み直すとしやせう。

ト捨ぜりふにて皆々奥へ入る。次郎兵衛、貼出したを見て

次郎　アヽ、こりやアおれが拾つて來た淨瑠璃の貼出し、誰れがマア串談な……イヤ、拾うたといへば、この間も、不思議に拾うて戻つた大枚の金。慥かその時、お守りらしい

きさ　アイ、ありや松山の、矢弓樣のお札。コレ、爰にござんす。

ト件の守りを出す。

次郎　今も噂の玉屋の新兵衞、いよ／＼それか知らねども、新兵衞ならば二十年前に、おいらが不料簡その時悴は三歲の、久離切つて玉屋の養子。

ト此せりふのうち、次郎兵衞、裕を脫ぎ、浴衣の形になる。

きさ　勤めの內に產み落し、里にやつたるあの子なら、お前とわしが、たつた一人の新太郞。藝者狂ひの放埒も、意見もならぬ他人向き。誠にお前も、このわしも、若い時のあの身持ち。浪人しても侍ひの、その身を以て遊女と心中、しそこなうて人さんに、面を晒したその上で、命はあつても非人の仲間へ

次郞　それも拾うたあの金を、よい程出して足を洗ひ、あとは元手に素人に、なる幸ひは來ながらも、もしや實子のあの悴、アヽ、どうぞ見附けられぬやうに、遠い所へ行きをるか。

きさ　但しその身に災難が、來らぬやうに、緣は切つても親の內、そのお札をこの柱へ、貼つて置いて下さんせ。

次郞　ほんによう氣が附いた。この柱へ貼つて

ト件の札守りを、中に色紙のあるとも知らず、柱に貼りつけ、その柱に結びし高燈籠の綱を見て心づき

イヤ、あの燈籠を貼るといつて、紙を買うてくれと云やつたが、とんと忘れたに、灯のついたは

ト見上げて

アヽ、何やら反古で貼つたやうぢやの。

きさ　アイ、先刻にお寺の男衆が來て、いかう小言を云うたゆゑ、紙屑の中を尋ね、淸らかな反古ゆゑに、マア假に貼つて置いたわいなア。

次郎　あれでは風も吹込むまい。

ト双盤になり、下座より非人の芥太夫、いつもの拵へ、三味線を持つて出て來り

芥太　おきさどのは内かな……オヽ、二人の衆、居さつしやれたか。

きさ　これは芥太夫さん、よう來なさんした。

次郎　マア〳〵、此方へ入らつしやれ。

芥太　ハイ〳〵……聞けばこなさんは、今度足を洗つて、素人にならるゝとの事。イヤ、めでたい事ぢや。此やうな喜び事はない。したが、その素人になられぬ内と思うて、今夜急いでわしが來たは

明日は餘所に頼まれて、梅川忠兵衛の淨瑠璃語らにやならぬ。ところが新口村はわしの不得手、とんと忘れてしまうた。夫婦の衆は義太夫の上手、次郎兵衛に彈いてもらひ、おきさどのに節を直してもらはうと、それで二十六夜も構はずに、來ましたわいの。

ト三味線を出す。

きさ　それはマアよう來なんした。わしらも忘れてしまうたが……次郎兵衛どの、お前彈いてあげなさんせ。

次郎　サア、おれもどうやら忘れたやうな。何も日待ちや、一遍合せて見ようか。

きさ　さうしなさんせ。ドレ、其うちわしは、蚊遣りをしかけませうか。

ト樒の花の古くなりしを、鉈にてこなしくべる事。次郎兵衛、三味線を合せる。

芥太　アヽコレ、本が無いわい。イヤ〱、知れぬ所は飛び〱にやらかさう。併し、何ぞ目當が

ト懐より何なりと本を出し

外の本で間に合せて置け。サア、ちよつとやらかしませう。

ト其うちおきさ、そこら中の蚊をあふぎながら

きさ　サア〱皆さん、聞きなさんせ。新口村の淨瑠璃始まり。東西〱……ホヽヽヽヽ。

芥太 〽ト次郎兵衛、三味線を弾き、浄瑠璃にかゝる。
落人の、爲かや今は冬枯れて、すゝき尾花はなけれども、世を忍ぶ身は後や先、人目を包む頬かむり、隱せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、いたはる身さへ雪風に、こゞへる手元ふところに、温ためられつ溫ためつ、石原道を足曳の、大和は爰ぞ故鄕の、新口村にぞ着きにける。
トこの浄瑠璃切れると、向うより新兵衛、一本差し。小女郎前幕の形にて走り出てくる。跡より藤六長吉、追ひかけ來り

藤長 小女郎、見附けた。
トかゝる。新兵衛、小女郎を圍ふ。兩人、新兵衛へかゝる。此うち新兵衛、非力なる仕組みにて、二人に引摺られる立廻り。新兵衛、もうこれまでと一腰を抜き、無暗に切り拂ふ。これにて兩人悄りして、逃げるとて、藤六、帶に挾みし革切り庖丁を取つて打ちつける。誤たず新兵衛の、勝手よき方の足にあたりて、タヂ〳〵となる。此うち二人は逃げて揚幕に入る。新兵衛、立上がらうとして、臑の疵の痛む思ひ入れ。タヂ〳〵となる。小女郎、駈けよつて

小女 モシ、新兵衛さん、足は痛みはせぬかえ。

新兵 僅かな疵とはいふものゝ、アヽコレ、歩き憎うて、アイタヽヽヽ。

小女　さうでござんせう。幸ひ爰に内がござんす。藥でもあるなら、聞いて見ようかいな。
新兵　併し、其方と二人、斯うした形で行たなら、先々へ追手の者が廻つてゐて、悟らるゝは定のもの
小女　そんなら斯うしなさんせ。お前は爰の辻堂へ入つて、待つてゐなさんせ。わたし一人、聞いて來ようわいな。
新兵　そんなら其方、さうしてたも。コレ、必ずともに、悟られぬやう
小女　合點でござんす。
芥太　へマアノ〵こちへと門の口。
ト新兵衞は下の方の辻堂へ入る。小女郎、門口へ來り
小女　モシ、ちつとお賴み申しませう。
芥太　へずつと入れば女房
トおきさ、門口を明け、小女郎を見て
きさ　アイ〵、どなたでござんすえ。
小女　アイ、わたしや……オヽ、それ〵、眞崎のお稻荷樣へ參りました者、暗うて足を怪我いたしました。どうぞお前のお内に、藥がござんすなれば、お貰ひ申したうござんす。

きさ　なんぢや、足を怪我さしやんしたえ。それはマア難儀でござんせう。そして、よる夜中、若い女中の只一人

トふつと心附きし思ひ入れ。

先刻に聞いた噂の二人、それにしては男は見えず。併し、このあたりは嚴しい詮議、若しひよつと、そのお方ではないか。

小女　エヽ。

芥太　〽「こちの親方孫右衛門樣の息子どの、大阪へ養子に行て、傾せんとやらいふものたんと買うて」……とんと、本が無いで知れぬ。おきさどん、この後は何であつたの。

きさ　〽人の金を盜み、その傾せんを手に下げて、走つたとやら、辷つたとやらで、代官所からはきつい詮議、孫右衛門樣は久離切つて、お上のお構ひはなけれど、血を分けた親子なれば、いとしや年寄つてきつい御案じ、こちの人も馴染みゆゑ、もしこのあたりにうろたへて、見つけられぱさしやらぬかと、いかい氣苦勞、庄屋どのから呼びには來る、ヤレ寄合ひぢや、ソレ印判ぢやと、節季師走に爰らあたりは、傾せん事でにえかへる。

芥太　〽あゝうたての傾せんやと、知らねば遠慮なかりけり。

次郎　これから先へ飛んで、孫右衛門の出た所から

ト此うちおきさ、箱より膏薬を出して

きさ　モシ、女中さん、これを附けて、紙でゆはへて置きなさんせ。爰に塵紙がござんす。ドレ、わたしがゆはへて上げませう。

小女　アイ／＼、紙は爰にござんす。

ト疵なきゆゑ、みす紙を出し、無性に引裂いてゐる。次郎兵衛もそれと心づき、表を見ながら、こなし。

芥太　ヘヽ延紙引裂くその手許、不思議さうにうちまもり。

きさ　ほんにマア、このあたりには見馴れぬ女中さん、夜に入つて眞崎へ、何の願ひで詣りなさんしたえ。

芥太　ヘヽ顏つく／＼と眺むれば。

小女　アイヤ、わたしや、心安い人さんが、病氣でござんして、それで病氣の癒るやうに、詣りましてござりまする。この藥も私しが、早うそのお方に、附けさせたうござります。

ト堂の内へ思ひ入れ。

きさ　ハア、そんなら疵はお前ぢやないかえ。

小女　ハイ。

芥太　〽連合ひの肌につけさせて。

ト節を違へて語る。おきさ、こなしあつて

きさ　それでは節が違ふわいな。〽連合ひの肌につけさせて、父御によう似た親仁様の、形見にさせたうござんすと、塵紙袖におし包む、涙にそれと

ト新兵衛、堂の中より覗く。次郎兵衛、小女郎、おきさ、四人一時に顔見合せて思ひ入れ。小女郎、外より戸をシヤンとしめる。

芥太　〽知られけり。

ト思ひ入れ。此うち新兵衛、小女郎に囁き、堂の中に入る。

きさ　さては二人は

ト門口へ行きにかゝるを次郎兵衛

次郎　コレ

ト入れかはつて

たとへ二人であらうとまゝ、今では養父へ義理が……サア、養父への義理といひ、我が子の恩愛
孫右衛門が心の中。サ、心の中を梅川と、あの忠兵衛へ聞かせる大事の場ぢや。なう、おきさ、
ソレ、よう浚つてやりやいの。

きさ　アイ、爰が肝心の所ぢや。よう聞かしやんせや。

ト次郎兵衞、おきさを押へて下へ座る。おきさ、思ひ入れあつて

ト兩方へ掛けて云ひ

へ〱こなたの舅にこの親仁、似たというての孝行かえ。エヽ、嬉しうござるが、腹か立ちますわい
な〱。

芥太　どうやらそれでは女の詞のやうぢや。

きさ　わしら二人が心中を、仕損なうたがよい手本。我が子ばかりは淸らかな、眞人間にせんものと、
養子にやつた玉屋のお内。その大恩もいつしかに、藝者の小女……ではない梅川。この在所も詮
議最中。それも誰れゆゑ、その藝者の嫁御ゆゑへ〱近頃愚痴な事なれど、世の譬へにも云ふ通り、
盜みする子は憎うなうて、繩かける人が恨めしいとはこの事。久離切つた親子なれば、善からう
が惡からうが、構ふ事はなけれども……なんぼう悲しからうと、思やるぞいの〱。

ト愁ひのこなし。

次郎　コレ、おきさ、それではどうか愁ひ場のやうぢや。涙までこぼして

きさ　この涙は

ト蚊やりを煽ぎ

きつい煙りやうなア。

ト涙を隱す

芥太　蚊いぶしは、わしが直しませう。

次郎　この淨瑠璃で思ひ出した玉屋の御子息、その新兵衞樣を釣り出さうため、養父庄兵衞どのは、牢へ入られたげな。

トおきさへ話す思ひ入れ。

實の親は、斯うした暮しをしてゐると、いふ事は知つてはゐまい。親が見附けたその時は、繩かけて出さねば、大恩ある玉屋のお内へ、てまへもおれもどうも濟まぬ。養子にやつた新太郎も、胤は侍ひ、潔う名乘つて出ねば、義理が立たぬぞ。

トこの時、堂の中物音する。小女郎、戸を押へる。おきさ、これを聞いて

きさ　アヽ、今ぢやないノヽ、今の事ではないわいの。
芥太　ハテ、仰山な語りやうぢや。
きさ　サア、この位ゐ身を入れて語らねば、見物衆に受けぬわいな。
芥太　成る程、肝心ぢや。
きさ　〽ヤアコレ、潔う死ぬとても、どうぞならう事なら兩親の、目にかゝらぬ所で死んでくれ。現在血を分けた子に、早う死ねと敎へるも、浮世の義理か是非もなや……なんぼ賤しい腹から出たとても、義理も恩も打忘れ、度い世間を日蔭の身。〽隱れるやうに身を持ちなし、ろくな死もせぬやうに、この親は產みつけぬ。エヽ、憎い奴ぢやと思へども、可愛うござると泣き沈み、分けたる血筋ぞ哀れなる。
皆々　ヤンヤノヽ。

トこの時奧より、お辰、お蝶出て來り

たつ　オヽ、芥太夫さん、お前も奧へ來て、一つ飮みなさんせ。
芥太　先刻から酒盛げか。
てふ　素的に大洒落サ。

二人　サア〳〵ござんせ。

ト皆々奥に入ると、あと合ひ方になり、小女郎ソツと屋體へ入り

小女　そんならお前は新兵衛さんの、親御さんかいなア〳〵

きさ　梅川ならぬ小女郎さん。そんなら新太郎も、アノ表に

ト表へ出ようとするを、次郎兵衛とめて

次郎　コレ〳〵、おきさ、そりや何を云ふ。乞食のこちらが旦那方へ、何の用があつてお目にかゝる事又どの面下げて逢はれもしまい。見附け次第に縛つて出さにや、養父へ義理が立たぬゆゑ、逢へば直樣二人が難儀……と云ふのは今の梅川忠兵衛。爰へござつたお女中は、所に見馴れぬあてやかな旦那方、乞食の内へござつては、片時居るのも穢なうござりませう。目さへ見えねば、むさいやら、綺麗なやら

トおきさが取つて置きし前垂れを、盆提灯へかけ

これで灯を消したも同然。まづ斯うすれば話しも出來る。たとへ目の前に、新兵衛、小女郎が來てゐても、暗闇なれば、捕へる事もならぬて。

きさ　顏は見ずとも、せめては側へ

小女　嬉しうござんす。

ト此うち新兵衞、堂の中より出て

新兵　すりや、親達は

小女　灯を消して、親子の對面。

新兵　忝い。

ト探り〳〵内へ入り

お二人樣、おなつかしう

ト云はうとする。

次郎　ア丶コレ、連れのお方か、蚊がくひませうぞや。緣あらばこそ、この内へ、疵の惱みでよう來さつしやりましたが、足の疵はまだな事、惡う狼狽へたらその首が……その首を繼ぐ妙藥。

ト懷より五十兩の金を出し

思はず拾うたこの金で、素人になつた上、御恩になつた庄兵衞樣、餘所ながらお禮にもと、足洗ひに出すこの金も、足に疵持つ二人のため。夫婦はこのまゝ朽ちるとも、せめて一日半時なりとも、これで命を助けたさに、大事の藥も惜しみませぬ。こゝの道理を聞きわけて、不料簡を出さ

ぬやう、必ず〳〵逆さまな、回向をさせぬやう、頼みますぞや。

　　ト二人へ意見の思ひ入れあつて、新兵衞へ金を渡す。

新兵　すりや大枚のこの金を……誠に段々と、餘所ながらの御意見。

きさ　とは云ふもの丶これがマア、親子一緒にゐながらも

新兵　詞交すもあらはには、云はれぬのみかお顔さへ

次郎　見ぬが卽ち浮世の義理。

小女　それぢやというて、親子は一世

きさ　これが別れにならうやら

新兵　一目なりともお二人の

　　ト手早く掛けたる前垂れを取るはずみに提灯の灯、紙に燃えつき、ヒラ〳〵と燃えあがり、柱へ貼つたる稻荷の札、上包みばかり燃えて飛び散り、件の色紙ばかりは柱に貼りたるまゝ殘り、その火勢、柱へ結びし綱へうつり、結び目燒けて、引上げし高燈籠、よき所へ落ちると、ゴンと本釣鐘聞え、正面うしろの方へ、二十六夜の月魄あがり、此うち早めのやうなる鳴り物、新兵衞キツと見合ひ

ヤヽ、思はず燃えしあの火とともに、二十六夜の月魄あがり、見合すお顔は新兵衞が、二十年來逢

ひもせぬ

きさ　二人が仲の、さては其方が

次郎　三つで別れし新太郎、今は玉屋の新兵衛と

小女　連れ添ふわたしは藝者の小女郎。

きさ　親子夫婦が思はず爰で

次郎　逢ふも別るゝ日蔭の身。

新兵　浮世の名殘と見上げる柱、燃えし守りのその中に、殘るは慥かに定家の色紙。

きさ　死出の旅路の御灯か、あの世を照らす燈籠の

小女　切つて落ちたる火袋に、貼つたる反古は

ト取上げ

こりやコレ慥かに

ト新兵衛へ渡す。

新兵　ドレ……疑ひもなき色紙の鑑定書。

次郎　すりや、この色紙が

ト手早くめくつて新兵衛に渡す。

新兵　ヤヽヽヽ、難儀となつたる誠の色紙。これがどうして

次郎　そんなら拾ひし松山の、お札の中に何者か、隱し置きしを折よくも

きさ　最前柱へ貼つたもわたし。

新兵　また燈籠に鑑定の書き物。

きさ　反古と思うて風除けに、屑の中より取出して

小女　貼らやんしたが幸ひと

次郎　守りも反古もあの金も、拾うて來たはこの次郎兵衛、金で素人に立返り、昔の鵜飼九十郎。

新兵　小女郎が殺せし藤兵衛は、其方と赤の他人の惡者。手に入る品々お上へ差上げ、親人牢舍のお命は

小女　お前のお身には恙はない。たゞ悲しいは妹のお霜。

きさ　ハテ、それも前世の皆約束。玉屋のお內榮ゆれば、幾千代かけて松山の

次郎　矢弓稻荷の皆御利生。

きさ　この上ともに信心して

新兵　守らせ給ふ稲荷の御神。アラ〳〵

皆々　有り難や。

　　トこの時表より藤六、長吉窺ひゐて、入り

二人　新兵衛見つけた。

　　トかゝるを、次郎兵衛、見事に引敷く。下の方より黒装束の捕り手、十手、弓張り提灯を持つて、バラバラと取巻き

捕手　動くな。

次郎　どつこい。

　　ト見得よろしく

新兵　まづ今日はこれぎり。

　　めでたく

打出し

大正十四年七月廿五日印刷
大正十四年七月廿八日發行

『大南北全集第九巻』 非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

發行者 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田利彦

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 上村新輔

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春陽堂

